筑後市内遺跡群Ⅸ

筑後市大字上北島・下北島・熊野・西牟田・蔵数所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書
第 73 集

2006
筑後市教育委員会

筑後市内遺跡群Ⅸ

上北島平塚遺跡（第１次調査）
下北島久清遺跡（第１次調査）
上北島花畑遺跡（第１次調査）
西牟田清徳浦遺跡（第１次調査）
熊野屋敷遺跡（第１次調査）
熊野屋敷遺跡（第２次調査）
蔵数東野屋敷遺跡（第２次調査）
西牟田小次郎丸遺跡（第１次調査）
和泉近道遺跡（第１次調査）
常用日田行遺跡（第３次調査）

2006
筑後市教育委員会

序

この報告書は、各種開発に伴って平成３年度から平成 10 年度に行なった、発掘調査の成果の一部をまとめたものです。平成に入ってから、筑後市内でも開発に伴う発掘調査で、さまざまな遺跡や遺物が発見されています。これらは記録保存の措置をとったわけですから現地の遺跡は破壊されてしまいました。その一方で、発掘調査によって当地域の歴史が少しずつ明らかになってきています。

今回報告の発掘調査を行なっていた当時は、現地での調査を優先させており、記録保存のための調査に追われていました。現地での調査から相当の年数が経過したものもありますが、ここに報告書としてまとめることができました。本書が地域の歴史解明や、文化財愛護に活用されれば、望外の喜びです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、御助力御協力いただいたみなさまに、厚く御礼申し上げます。

平成 18 年３月

筑後市教育委員会
教育長　　城戸一男

例　言

1.　本書は、平成３・５・６年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の成果を収録したものである。

2.　発掘調査および出土遺物の整理等は筑後市教育委員会がおこなった。調査関係者は第Ⅰ章に記したとおりである。なお、出土遺物・実測図・写真等は筑後市教育委員会で収蔵・保管している。

3.　本書に使用した図面のうち、遺構実測図は奥村太郎、野田洋子、大島真一郎（現：黒木町教育委員会）、塚本映子（現:久留米市教育委員会）、小林勇作、永見秀徳が、遺物実測図は、丸山裕見子、仲文恵、平塚アケミ、諫早直人（京都大学大学院博士課程）、永見秀徳が作成した。また、遺構全体配置図のうち、上北島平塚遺跡は朝日航洋㈱に、下北島久清遺跡は㈱アジア航測に、常用日田行遺跡は写測エンジニアリング㈱にそれぞれ委託した。

4.　本書に使用した写真は、遺構写真を野田、大島、塚本、小林、永見が、遺物写真を永見が撮影した。なお、一部の調査では、全体写真等を㈲空中写真企画に委託した。

5.　本書での報告にあたり、遺構番号を次のように決定した。調査時につけた遺構仮番号を生かし、頭に調査次数、遺構種別を加えた。第２次調査のS-10が土坑である場合、2SK10ととなる。

6.　本書に用いた方位はすべてG.N.を、水準はT.P.を基準としている。なお、遺構の主軸等の方位は実測図上で分度器を用いて計測した。北から45°東にあたる場合、N－45°－Eと表記した。ただし、座標値は日本測地系（旧測地系）によっていて、世界測地系（測地2000）には準拠しない。

7.　本書の執筆は付編を諫早が、それ以外を永見がおこなった。また、編集は永見が行なった。

目　次

第Ⅰ章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第Ⅱ章　位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第Ⅲ章　調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
　1．上北島平塚遺跡（第１次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
　2．下北島久清遺跡（第１次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
　3．上北島花畑遺跡（第１次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 117
　4．西牟田清徳浦遺跡（第１次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 121
　5．熊野屋敷遺跡（第１次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 123
　6．熊野屋敷遺跡（第２次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 161
　7．蔵数東野屋敷遺跡（第１次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 175
　8．西牟田小次郎丸遺跡（第１次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 195
　9．和泉近道遺跡（第１次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 199
　10．常用日田行遺跡（第３次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 209
第Ⅳ章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 219
付　編　瑞王寺古墳出土馬具の再検討・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 221

第Ⅰ章　はじめに

本書は、平成３年度から平成10年度までに実施した発掘調査のうち、若菜森坊遺跡第１次調査以外の未報告のものについて成果を収録したものである。これらの調査は、工事によって消滅する部分について記録保存の措置をとったものと、消滅は免れたものの地下に保存されるため、確認調査を実施したものとがある。本報告では、いずれも調査報告として取り扱うが、確認調査では遺構全体配置図が示せないなどの違いが生じているので注意されたい。

また、調査終了から相当の年数が経過したものも含んでおり、度重なる資料の移動により、所在不明となった資料があることをはじめにお断りしておく。本来あってはならないことだが、文化財保護行政の体制が未整備であったころは、たびたび資料の移転を余儀なくされた。その中で若干の資料が所在不明となっている。また、相当の年数が経過したことにより、調査時点での記憶が薄れてきていることも障害となった。もちろん、調査時の記録類をもとに報告書の作成作業を行なったが、詳細な部位に至っては、担当者の記憶に頼る場面も多々ある。このような局面では、調査時点での担当者の記憶が重要な位置を占めるが、そういった点でも調査報告を先延ばしにした弊害があったと言わざるを得ない。

これらの調査の報告は、発掘調査当時、膨大な量の発掘調査を抱えていたため現地での調査を優先し、報告を後回しにしたために、現在報告するものである。そのため、報告にかかる費用は筑後市が全て負担した。これは、現地の調査を優先した時点での内部協議の結果によるものである。なお、現地調査の費用負担は以下のとおりとなっている。

開発原因者（民間事業者）が負担したもの
上北島平塚遺跡（第１次調査）・下北島久清遺跡（第１次調査）・熊野屋敷遺跡（第２次調査）・蔵数東野屋敷遺跡（第１次調査）・西牟田小次郎丸遺跡（第１次調査）・常用日田行遺跡（第３次調査）

筑後市が負担したもの
上北島花畑遺跡（第１次調査）・熊野屋敷遺跡（第１次調査）・西牟田清徳浦遺跡（第１次調査）・和泉近道遺跡（第１次調査）

本書の刊行をもって、若菜森坊遺跡第１次調査を除いた各遺跡は、一応報告が完了することになる。また、瑞王寺古墳出土馬具は近年になって保存処理が完了し、その効果もあって新知見が得られるようになった。そのため、今回の報告に合わせて付編という形で再報告することとなった。本報告は昭和59（1984）年に行なわれていて、当時は応急的な錆落ししか行なえず、詳細な実測図を作成するのが困難な状況であった。今回保存処理が完了したため、当時の担当者である福岡県教育庁の川述昭人氏とも相談した結果、新知見をもとに再度報告を行なうこととなった。

再報告にあたっては、太宰府市教育委員会の協力を得てＸ線写真撮影を行い、その成果も合わせて収録している。なお、この再報告に関しては、京都大学大学院博士課程の諫早直人氏に御協力いただいた。

今回は、調査実施時期が多年度にわたるため、各実施年度ごとの調査体制を以下のように機械的に記した。各調査での調査にいたる経過は、各遺跡の調査成果報告の冒頭に記載されているので、そちらを参照されたい。

平成３年度
上北島平塚遺跡（第１次調査）・下北島久清遺跡（第１次調査）
総括　筑後市教育委員会　教育長　　森田　基之

	教育部長	橋本　益夫
庶務	社会教育課長	延　　文雄
	社会教育係長	松永盛四郎
	社会教育係	小林　勇作（文化財学芸員）
調査担当	社会教育係	永見　秀徳（文化財専門職）

平成４年度
上北島花畑遺跡（第１次調査）

総括　筑後市教育委員会	教育長	森田　基之
	教育部長	橋本　益夫
庶務	社会教育課長	下川　雅晴
	社会教育係長	松永盛四郎
	社会教育係	江崎　紀彦（文化財担当）
	社会教育係	小林　勇作（文化財学芸員）
調査担当	社会教育係	永見　秀徳（文化財専門職）

平成６年度
西牟田清徳浦遺跡（第１次調査）

総括　筑後市教育委員会	教育長	森田　基之
	教育部長	津留　忠義
庶務	社会教育課長	下川　雅晴（平成６年９月30日まで）
		山口　逸郎（平成６年10月１日から）
	社会教育係長	本村　正晴
	社会教育係	小林　勇作（文化財専門職）
		塚本　映子（文化財学芸員・平成６年７月15日から）
調査担当	社会教育係	永見　秀徳（文化財専門職）

平成７年度
熊野屋敷遺跡（第１次調査）・熊野屋敷遺跡（第２次調査）・蔵数東野屋敷遺跡（第１次調査）・西牟田小次郎丸遺跡（第１次調査）

総括　筑後市教育委員会	教育長	森田　基之
	教育部長	津留　忠義
庶務	社会教育課長	山口　逸郎
	社会教育係長	本村　正晴
	社会教育係	小林　勇作（文化財専門職）
		塚本　映子（文化財学芸員）
		大島真一郎（　　々　　・平成７年12月１日から）
調査担当	社会教育係	永見　秀徳（文化財専門職）

平成９年度
和泉近道遺跡（第１次調査）

総括　筑後市教育委員会	教育長	森田　基之
	教育部長	津留　忠義
庶務	社会教育課長	山口　逸郎
	社会教育係長	田中　清通
	社会教育係	田中　　剛（文化財担当）
		小林　勇作（文化財専門職）
		上村　英士（　　々　　）
		柴田　　剛（文化財学芸員）
		立石　真二（　　々　　・平成９年８月１日から）
調査担当	社会教育係	永見　秀徳（文化財専門職）

平成 10 年度
常用日田行遺跡（第３次調査）

総括　筑後市教育委員会	教育長	牟田口和良
	教育部長	下川　雅晴
庶務	社会教育課長	山口　逸郎
	社会教育係長	田中　清通
	社会教育係	田中　　剛（文化財担当）
		小林　勇作（文化財専門職）
		上村　英士（　　々　　）
		柴田　　剛（文化財学芸員）
		立石　真二（　　々　　）
調査担当	社会教育係	永見　秀徳（文化財専門職）

平成 17 年度
報告書作成

総括　筑後市教育委員会	教育長	城戸　一男
	教育部長	菰原　　修
庶務	社会教育課長	田中　僚一
	文化スポーツ係長	角　　恵子
	文化スポーツ係	小林　勇作（文化財専門職）
		上村　英士（　　々　　）
		阿比留士朗（文化財学芸員）
調査担当	文化スポーツ係	永見　秀徳（文化財専門職）

なお、現地での調査から報告書刊行に到るまで、多くの方の御指導御助言を賜ったが、担当者の力量不足のため本報告に生かしきることができなかった。深くお詫びするとともに、以下にお名前を記して

感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

水野正好（前奈良大学）、佐田茂（佐賀大学）、西健一郎（九州大学）成正鏞（韓国忠北大学校）、中條英樹（早稲田大学）、張允禎（韓国東亜大学校）、川述昭人・佐々木隆彦・伊崎俊秋・小田和利・岸本圭（以上、福岡県教育庁）、大塚恵治（八女市教育委員会）、白木守・塚本映子・山浦浩子（以上、久留米市教育委員会）、城戸康利・下川可容子（以上、太宰府市教育委員会）、末吉隆弥（川崎町教育委員会）

第Ⅱ章　位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の南西部にあたる。市域をＪＲ鹿児島線と国道 209 号が縦断し、国道 442 号が横断する。また、市南部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜め池が点在する。低位扇状地である東部や低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中央部に形成されている。

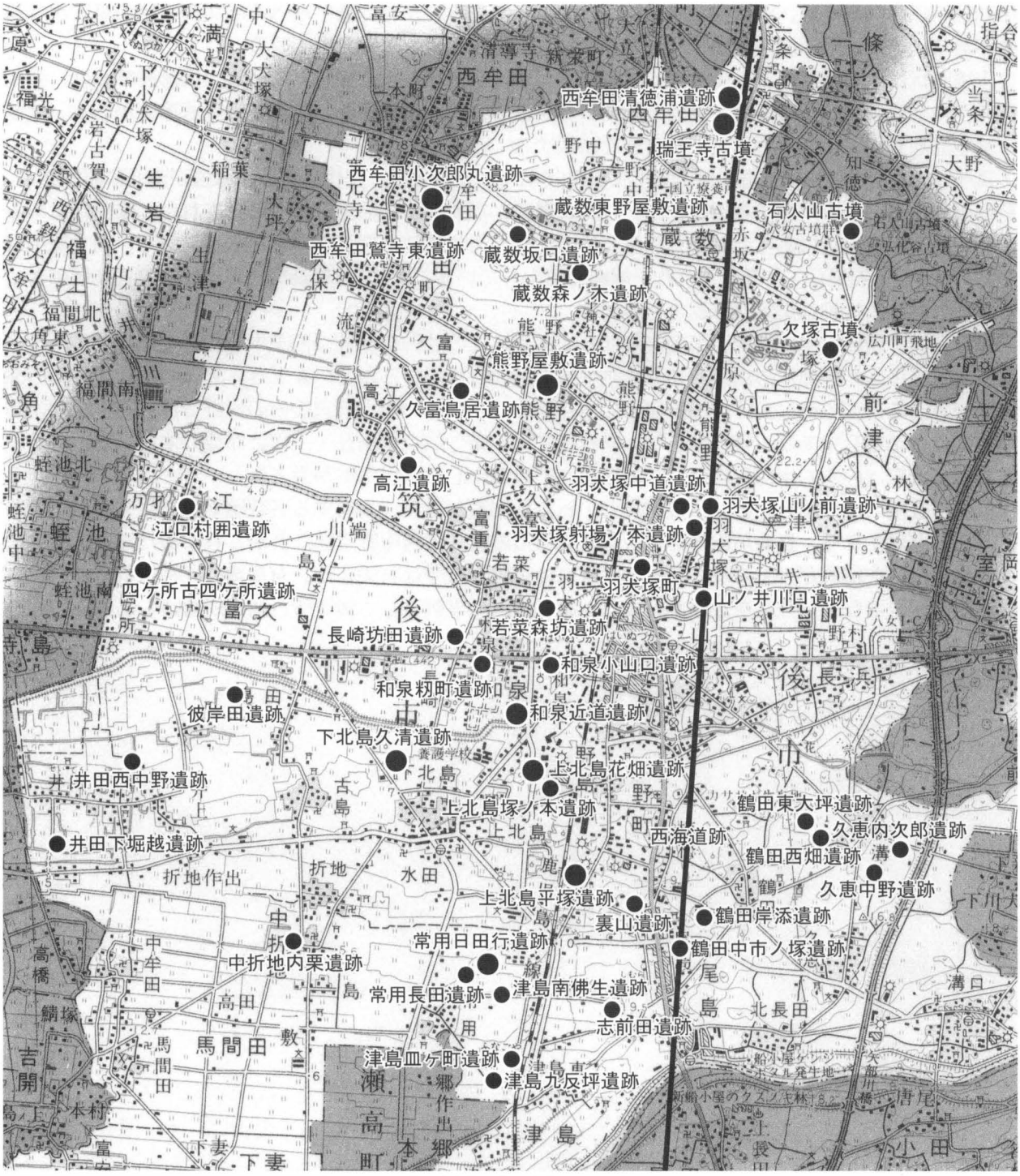


Fig.1　周辺主要遺跡分布図（1/50,000）

まず旧石器時代であるが、蔵数坂口遺跡や鶴田東大坪遺跡等で遺物が出土している。しかしながら、遺構の発見には到っていないため、当時の様相はほとんど不明である。つづく縄文時代であるが、筑後市内では縄文時代の遺跡は市の南部域に集中することが判っている。ただし、例外的に落し穴は全域に分布する。特に鶴田岸添遺跡や久恵内次郎遺跡では、多数の落し穴を検出している。また、津島九反坪遺跡・志前田遺跡・鶴田岸添遺跡・久恵中野遺跡等では、早期のものと思われる石組炉も発見されている。さらに、尾島集落の北側には縄文時代の集落として著名な裏山遺跡がある。

次の弥生時代であるが、中期初頭までの集落は、縄文時代と同様に市域の南半部に偏って分布する。中期も後半に入ると、北部の丘陵上にも展開するが、同時に低平地へも展開して遺跡数は爆発的に増加する。前期から中期初頭の遺跡では、常用長田遺跡や常用日田行遺跡等が著名で、前期の溜井も津島九反坪遺跡で確認されている。また、上北島塚ノ本遺跡では、夜臼式土器が出土して注意をひいている。中期後半以降の集落は、蔵数森ノ木遺跡が特に著名である。また、低平地への展開例では津島皿ヶ町遺跡がある。また、鶴田岸添遺跡では火災で消失した竪穴住居も確認されている。

古墳時代は、市北部の石人山古墳、欠塚古墳、瑞王寺古墳が良く知られている。集落遺跡では、弥生時代から継続している蔵数森ノ木遺跡や久富鳥居遺跡、鶴田西畑遺跡、津島南佛生遺跡等がある。集落の基本的な立地は、弥生時代後半のそれを踏襲する。

筑後市域は、古代には交通の要衝として認知されていたようで、古代官道の西海道が南北に縦断する。発掘調査でも、鶴田中市ノ塚遺跡、山ノ井川口遺跡、羽犬塚山ノ前遺跡等で確認された。延喜式にある葛野駅は筑後市附近にあったと考えられていて、最有力候補地は羽犬塚中学校附近である。羽犬塚中道遺跡では「□郡符葛□」と墨書された土師器も出土している。また、若菜森坊遺跡では竪穴式住居によって構成される大規模な集落が確認されている。

中世には、館跡を中心に調査事例が増加している。この時期には社寺領を中心に荘園が発達し、その支配を基盤にした社会が形成される。これは当地域の特徴のひとつといえよう。具体的には、市域の北半部から隣町の広川町にかけて熊野領の広川荘が成立し、その中心は筑後市の熊野であった。また市の南東部には郡名荘である上妻荘があり、南西部には安楽寺領の水田荘・下妻荘が成立する。水田荘の中心には老松宮（のちの水田天満宮）が置かれ、それを中心に水田六院が栄えた。

これら荘園の境界附近には、屋敷や坊といった小字名が残り、対峙する各荘園が配した屋敷地であるとみることができる。長崎坊田遺跡や、若菜森坊遺跡、井田西中野遺跡などがこれにあたる。

近世には、在郷町がつくられ、特に羽犬塚町は宿町とも呼ばれ栄えた。有馬藩の三宿に数えられ、御茶屋が置かれるなど、発展を遂げた。また、農村集落の事例として四ケ所古四ケ所遺跡もある。

参考文献

『筑後市史』　筑後市史編纂委員会　1998

第Ⅲ章　調査成果

1. 上北島平塚遺跡（第１次調査）

上北島平塚遺跡第１次調査は、大日本印刷株式会社筑後工場のグラウンド造成の事前調査として平成３年度に実施したものである。まず、筑後市教育委員会に対して大日本印刷株式会社（現：DNP 西日本）から、グラウンド造成に先立って埋蔵文化財の試掘依頼が提出された。試掘調査の結果、南側を中心に遺構の存在が確認され、その取り扱いについて筑後市教育委員会と大日本印刷株式会社とで協議を行なった。協議の結果、将来的な土地利用の計画を勘案して、遺構の確認された地域全面に対し、記録保存の措置を講ずることとなった。ただし、本調査が込み合っているため当面現地の発掘調査を先行して、整理作業および報告書刊行は先延ばしすることになった。

調査は、平成３年８月から12月まで実施した。途中、甚大な被害をもたらした台風17号・19号の直撃に遭い、その事後処理のために１ヶ月ほど調査が中断した。台風直撃の際は、強風により現場の

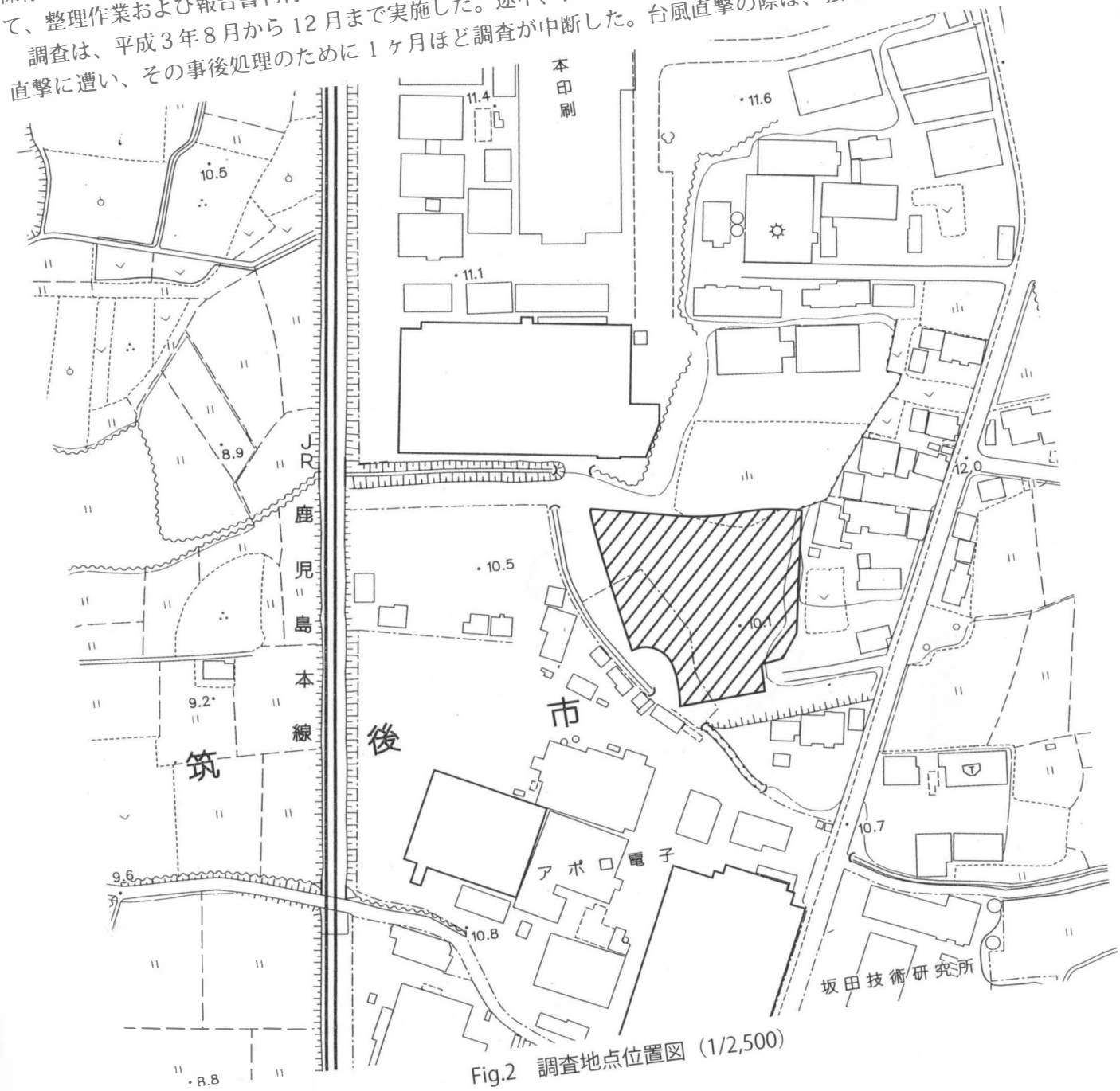


Fig.2　調査地点位置図（1/2,500）

テントなどが飛ばされた。仮設トイレにいたっては調査区を東西に横断して飛ばされ、調査区内に便器が転がってしまっていた。仮設トイレの扉は最後まで見つけることができなかった。

調査対象面積は、約 3,500 ㎡で、調査は永見が担当した。

遺構

遺構は、東側に偏って分布している。遺構面は茶褐色粘質土を基本とするが、西側は砂礫混じりとなり遺構面も徐々に下がっている。ちょうど茶褐色粘質土の遺構面には遺構が多く分布し、砂礫混じりとなる範囲は遺構が疎くなる傾向を示す。番号を振った遺構がちょうど S-100 まであるが、S-1 ～ S-4 は欠番となっている。

遺構を概観すれば、おおまかに弥生時代のものと古墳時代のものに分かれるようである。報告では敢えて時代別には報告せず、遺構種別・遺構番号順での報告を基本とした。ご了解願いたい。

竪穴住居

1SI005（Fig.3）

調査区の北東に位置し、平面形態は略円形を呈するが非常に乱れた印象を受ける。残存状況が極めて劣悪で、そのために平面形態が崩れていると考えられる。1SD011 に切られている。南北径 2.9m 東西径 3.4m を測り、深さは 0.1m である。主柱穴は竪穴内部および外部ともに確認できなかった。また、主軸の方位はＮ－ 15°－Ｗと思われるが、平面形態自体が非常に崩れているため、判然としないものであることをお断りしておく。

出土遺物は弥生土器（甕・壷・蓋・面子）がある。

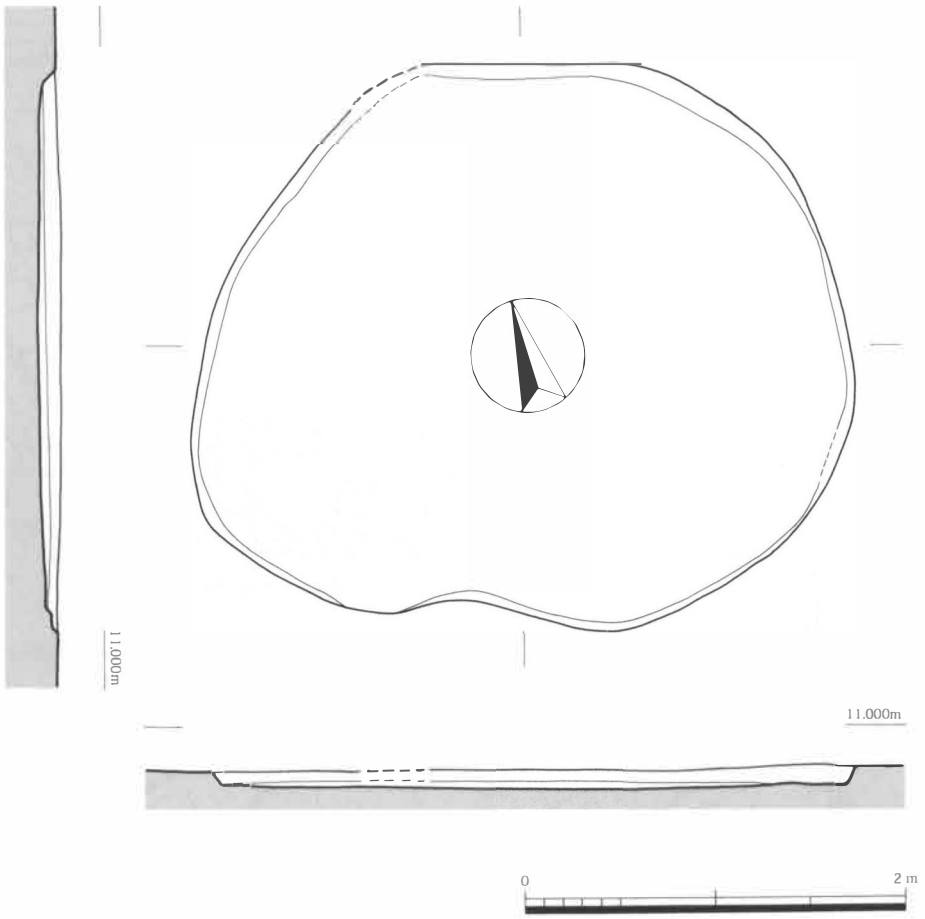


Fig.3　1SI005 実測図（1/40）

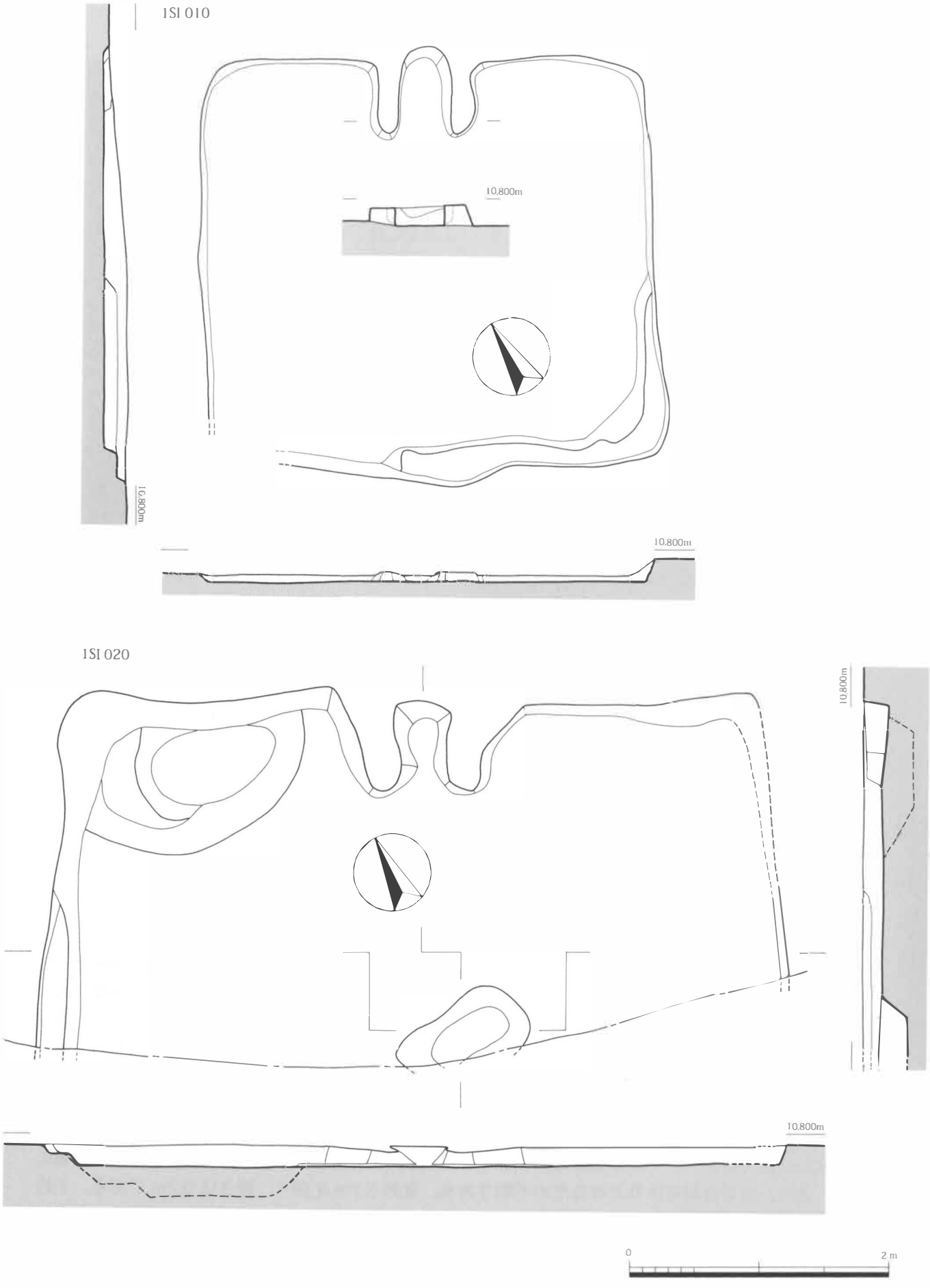


Fig.4　1SI010・1SI020 実測図（1/40）

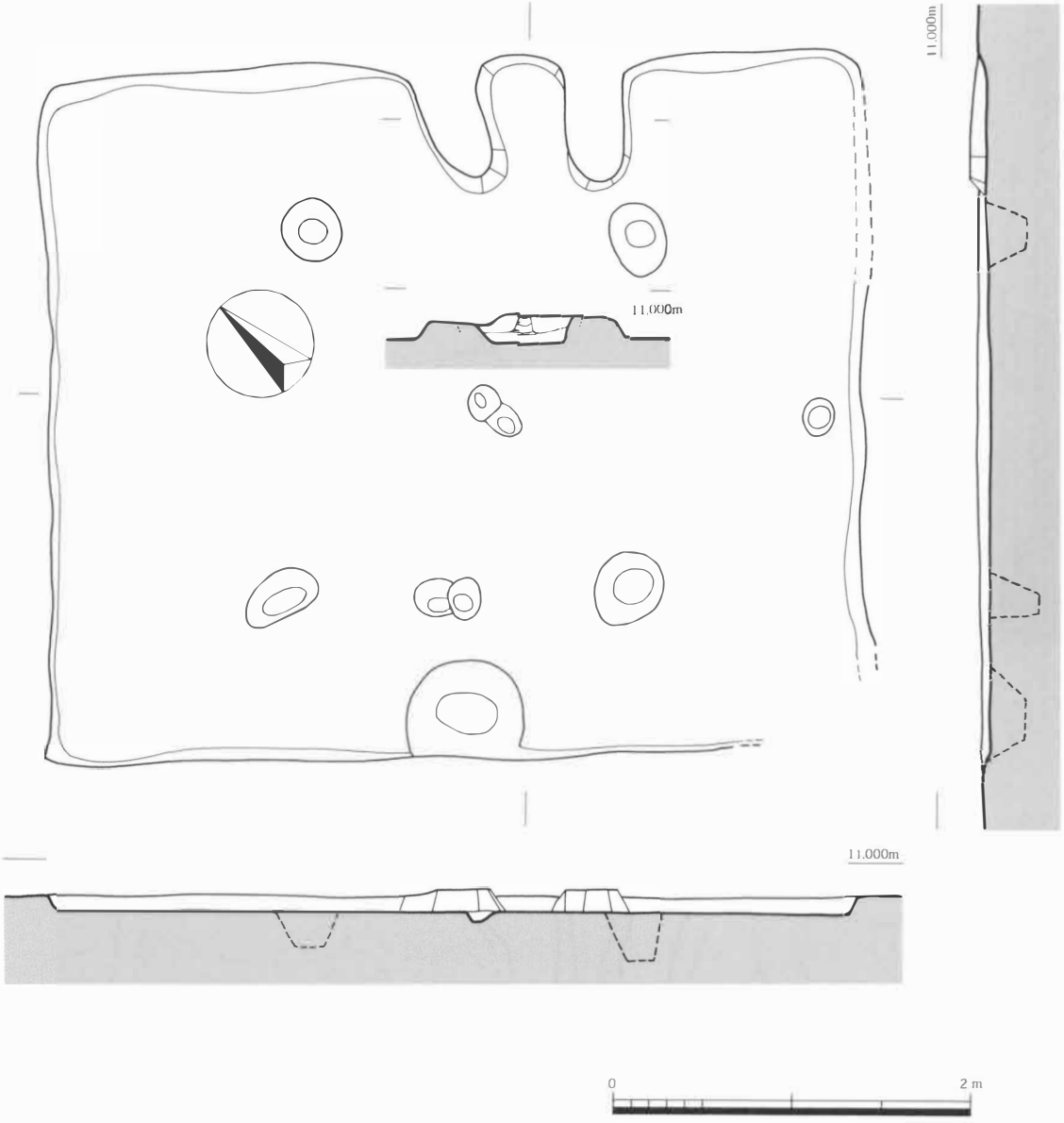


Fig.5　1SI030 実測図（1/40）

1SI010（Fig.4、Pla.3）

調査区の北東に位置し、平面形態は方形を呈する。1SK038 を切っている。南北 3.2m 東西 3.5m を測り、深さは 0.2m である。また、主軸の方位はＮ－ 19°－Ｗである。主柱穴は竪穴内部および外部ともに確認できなかった。北辺には造りつけの竈があり、粘土で形成した袖が竪穴内部に伸びていいる。竈袖の内側は被熱のため赤く変色し、焼き締まっている。竪穴外部への煙道の張出しは認められない。東辺南半から南辺東半にかけては、幅の狭い棚状の段がある。主柱穴は確認できなかった。

出土遺物は須恵器（蓋）土師器（甕・壷・鉢・甑・器台・ミニチュア）がある。

1SI020（Fig.4、Pla.4）

調査区の南東に位置し、平面形態は方形を呈する。1SK046 に切られていて、1SK071 の上層遺構にあたる。また、南半は調査区外となるため不明である。東西 5.7m を測り、深さは 0.2m である。主柱穴は竪穴内部および外部ともに確認できなかった。また、主軸の方位はＮ－ 16°－Ｗである。北辺には造りつけの竈があり、粘土で形成した袖が竪穴内部に伸びていいる。竪穴外部への煙道の張出しは認められない。また、西辺には幅の狭い棚状の段が認められ、竪穴の中央と北西隅には屋内土坑と思しき

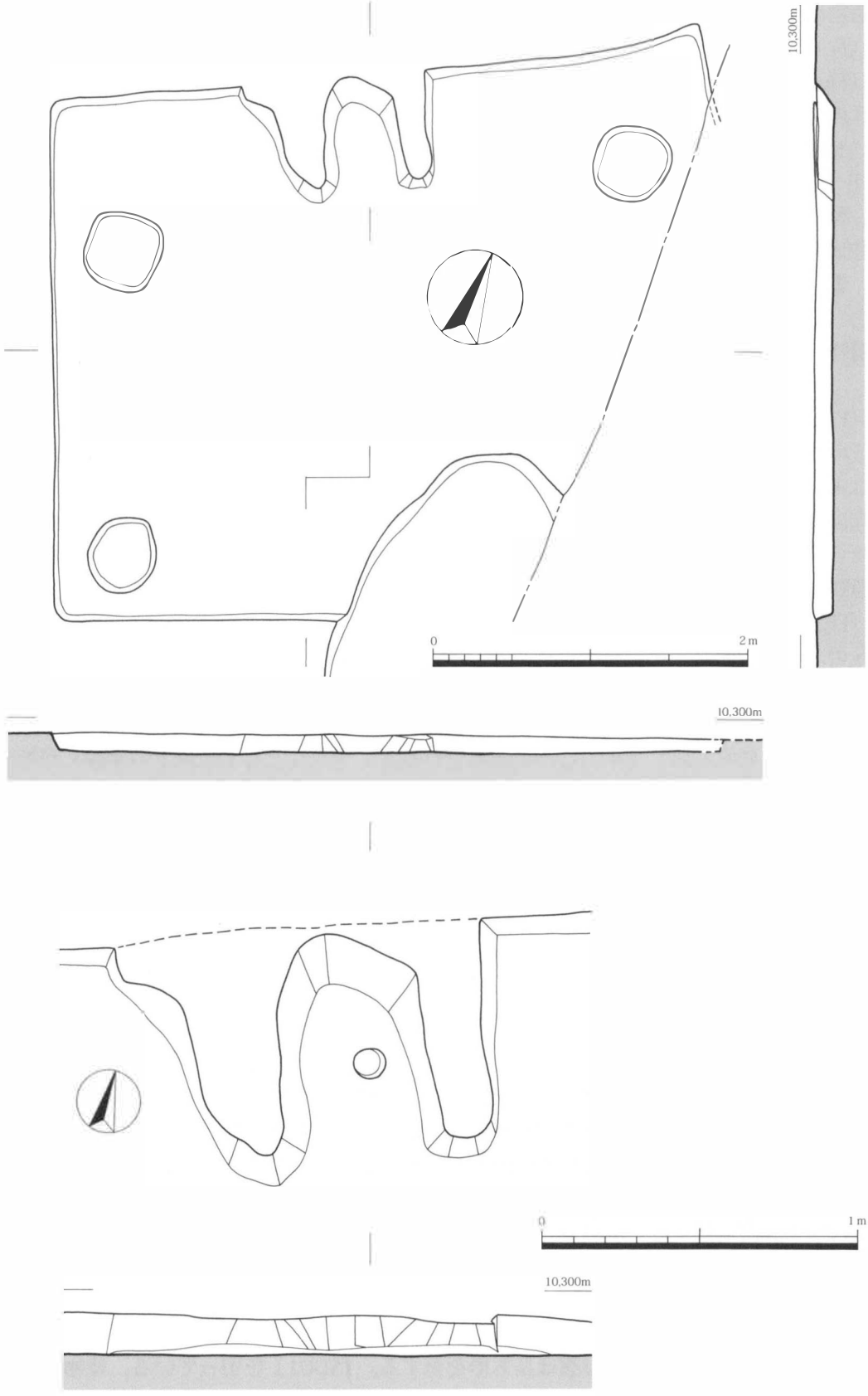


Fig.6　1SI040 実測図（1/40・1/20）

土坑が穿たれている。西側には幅の狭い棚状の段があるが、この段は北端まで達さない。

出土遺物は土師器（甕・壷・鉢・甑・支脚）、黒色土器（鉢）、弥生土器（甕・壷）、石包丁、サヌカイト（片）、黒曜石（片）がある。

1SI030（Fig.5、Pla.5）

調査区の東に位置し、平面形態は方形を呈する。東端の隅は一部調査区外となる。1SX037 に切られている。長軸 4.5m 短軸 3.9m を測り、深さは 0.1m である。また、主軸は短軸に一致し、方位はＮ－48°－Ｅである。北西辺の中央附近に竈が造り付けられていて、粘土で形成した袖が竪穴内部に伸びている。竪穴外部への煙道の張出しは認められない。竈の内部から土師器（支脚）が出土している。

この住居の床面からは主柱穴が 4 個検出された。主柱穴は径が 0.3m ほどで、深さは 0.2 乃至 0.3m である。また、竈の対辺中央には屋内土坑と思しき土坑が認められる。この土坑の深さは 0.2m ほどである。

出土遺物は土師器（甕・鉢・壷・支脚・坏・粘土塊）、黒色土器（鉢）、弥生土器（甕・壷）、サヌカイト（片）がある。

1SI040（Fig.6）

調査区の北東に位置し、平面形態は方形を呈する。1SK006 に切られていて、1SI050 を切っている。南北径 3.4m 東西径 4.2m を測り、深さは 0.1m である。また、主軸の方位はＮ－ 11°－Ｗである。

主柱穴は３個を確認したが、残り 1 個は調査区外にあたるようである。また、屋内土坑と思しき土坑は見当たらない。この住居には、他の住居にみられるような、狭い棚状の段は見当たらない。

出土遺物は土師器（甕・坏・甑・支脚・ミニチュア）、黒曜石（片）、サヌカイト（片）がある。

1SI050（Fig.7、Pla.6）

調査区の北東に位置し、平面形態は円形を呈する。1SI040 に切られていて、1SI070 を切っている。大型の円形住居で、径 6.9m を測り、深さは 0.2m である。床の中央附近には、崩れた楕円形の土坑が認められる。その長軸上の両側には柱穴状の小穴がある。所謂ソングンニ（松菊里）型の住居の系譜を引くものである。柱穴と思しき小穴は多数認められるが、少なくとも 1 回以上の建替えが行なわれているようである。主軸の方位はＮ－ 45°－Ｗである。

出土遺物は弥生土器（甕・壷）、土師器（甕）、黒曜石（片）、サヌカイト（鏃・片）がある。

1SI060（Fig.8、Pla.6）

調査区のほぼ中央に位置し、平面形態は方形を呈する。南北 4.4m 東西 4.5m を測り、深さは 0.1m である。また、主軸の方位はＮ－ 20°－Ｅである。主柱穴は 4 個認められた。屋内土坑と思しき土坑は認められない。南辺に張出すような形状で小穴があるが、性格は不明である。竈の存在は確認できなかった。

出土遺物は土師器（甕）、弥生土器（甕）がある。

1SI070（Fig.8、Pla.7）

調査区の北東に位置し、平面形態は円形を呈する。1SI050 に切られている。径 3.2m を測り、深さは 0.1m である。中型から小型に属する円形住居といえる。柱穴と思しき小穴は、竪穴の内外ともに確認できなかった。中央部によく見られる楕円形の土坑も確認できなかった。そうした意味ではソングンニ（松菊里）型住居の系譜にはあたらない。

出土遺物は土師器（甕・坏）がある。

掘立柱建物

1SB025（Fig.9、Pla.8）

調査区の東よりに位置し、平面形態は長方形を呈する。1SD011 を切っている。建物は２間×２間の規模で、南北 2.8m 東西 2.5m を測る。柱穴の深さは 0.15 乃至 0.4m である。また、主軸の方位はＮ－19°－Ｅである。

出土遺物は土師器（甕・鉢）、弥生土器（片）がある。

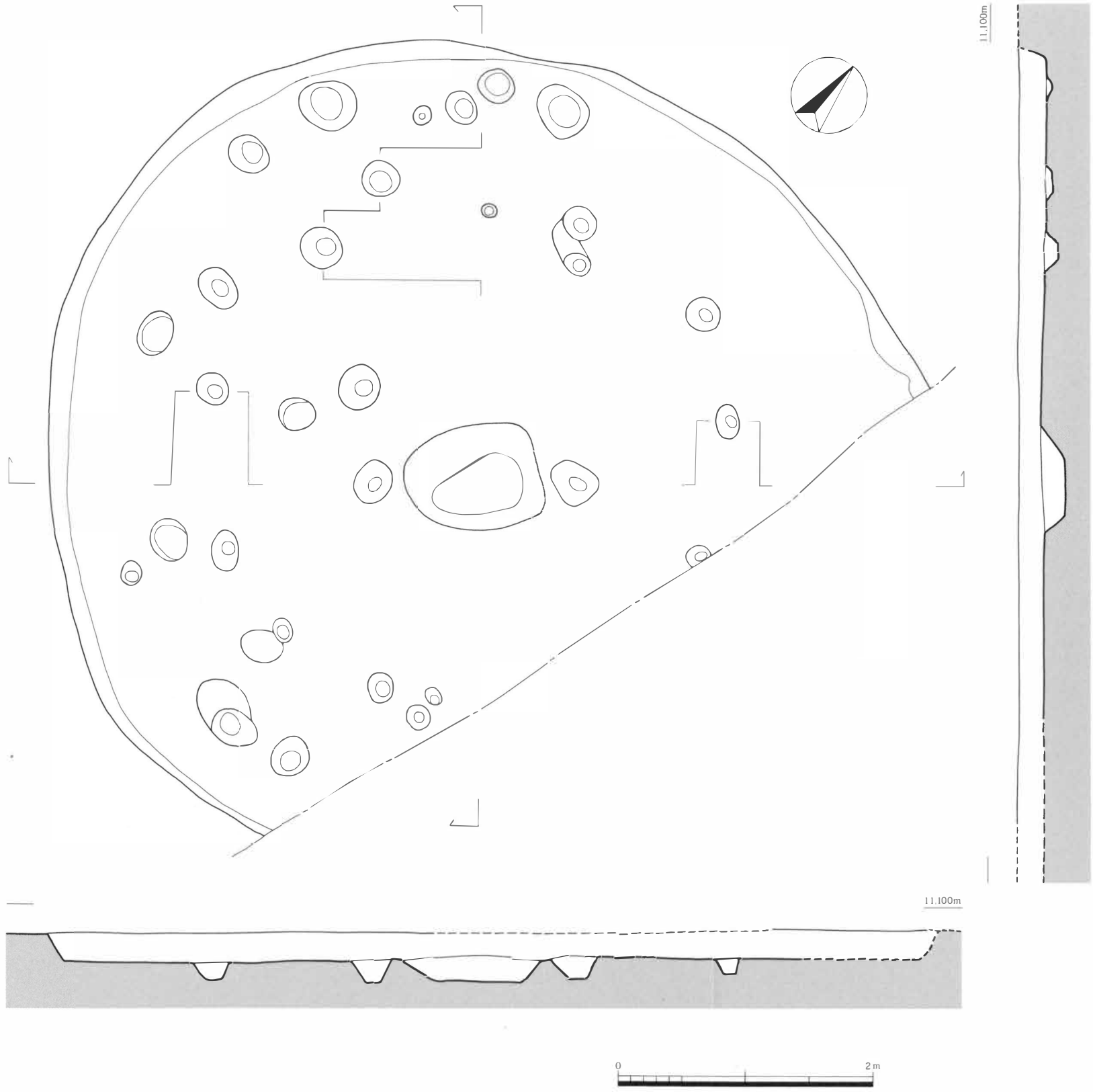
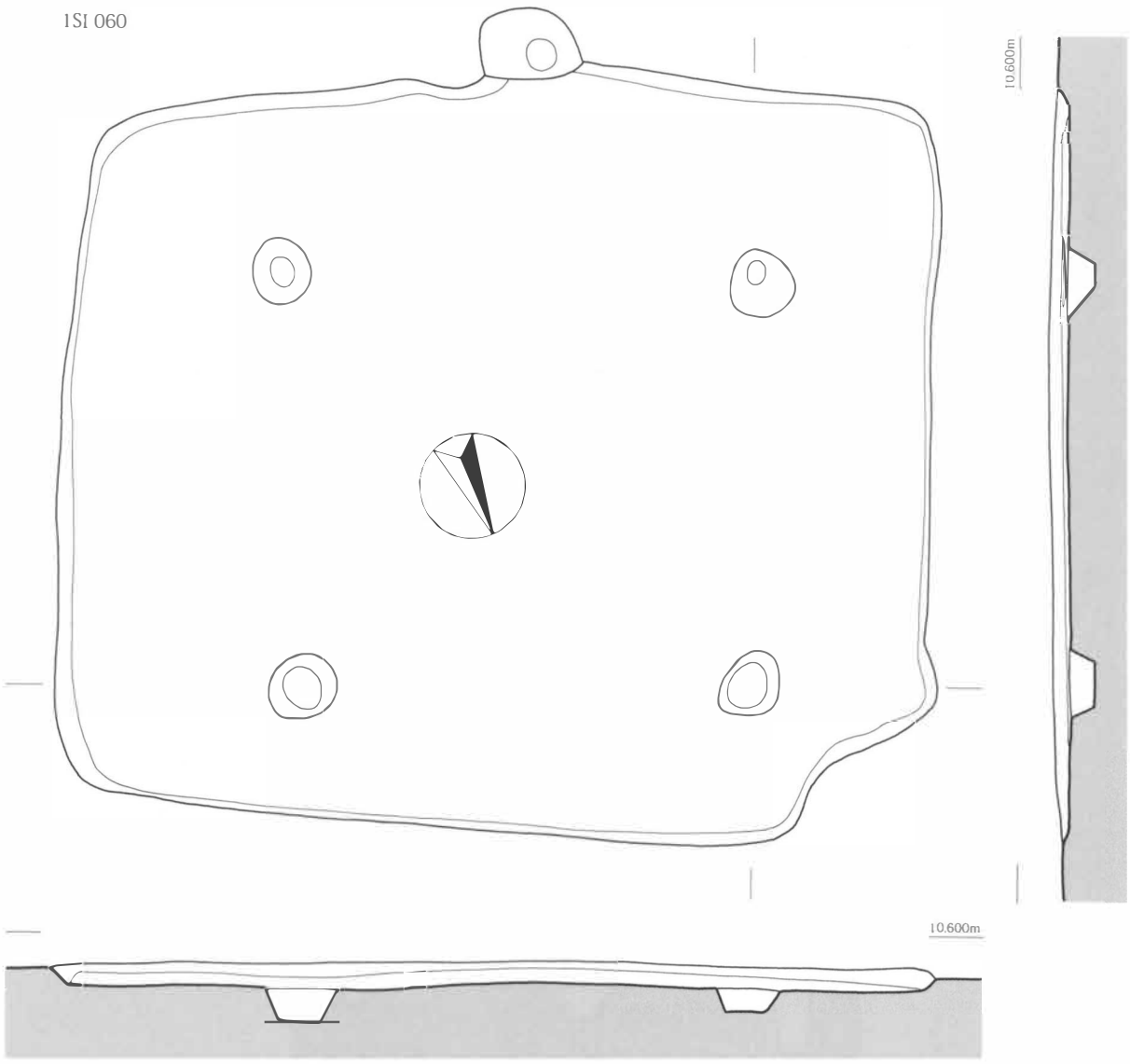


Fig.7　1SI050 実測図（1/40）



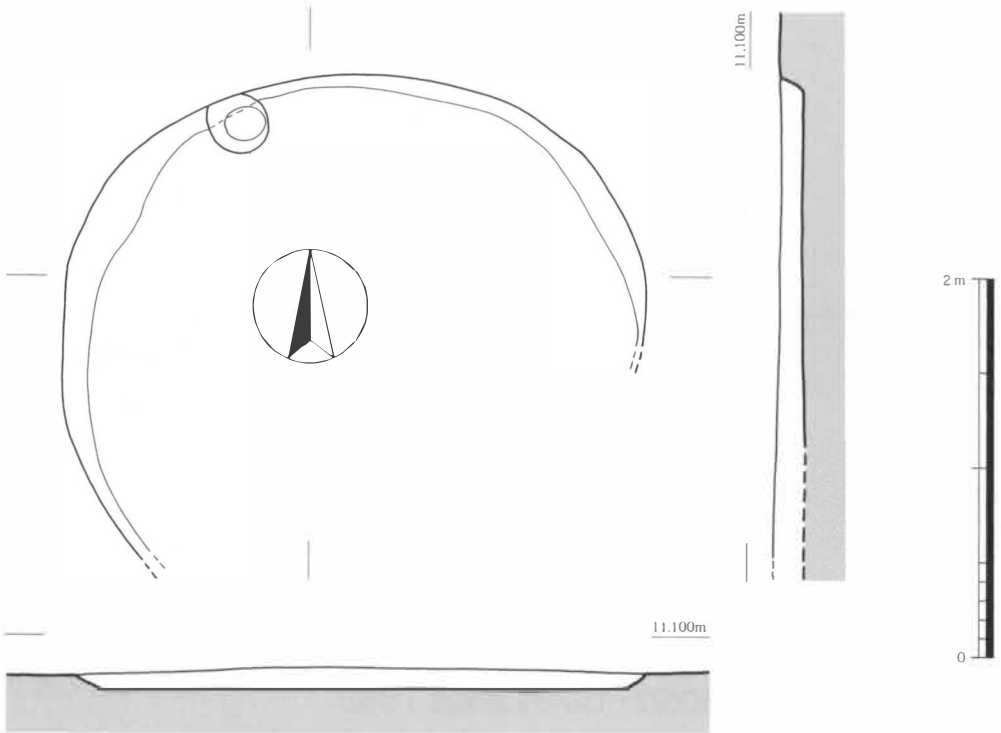


Fig.8　1SI060・1SI070 実測図（1/40）

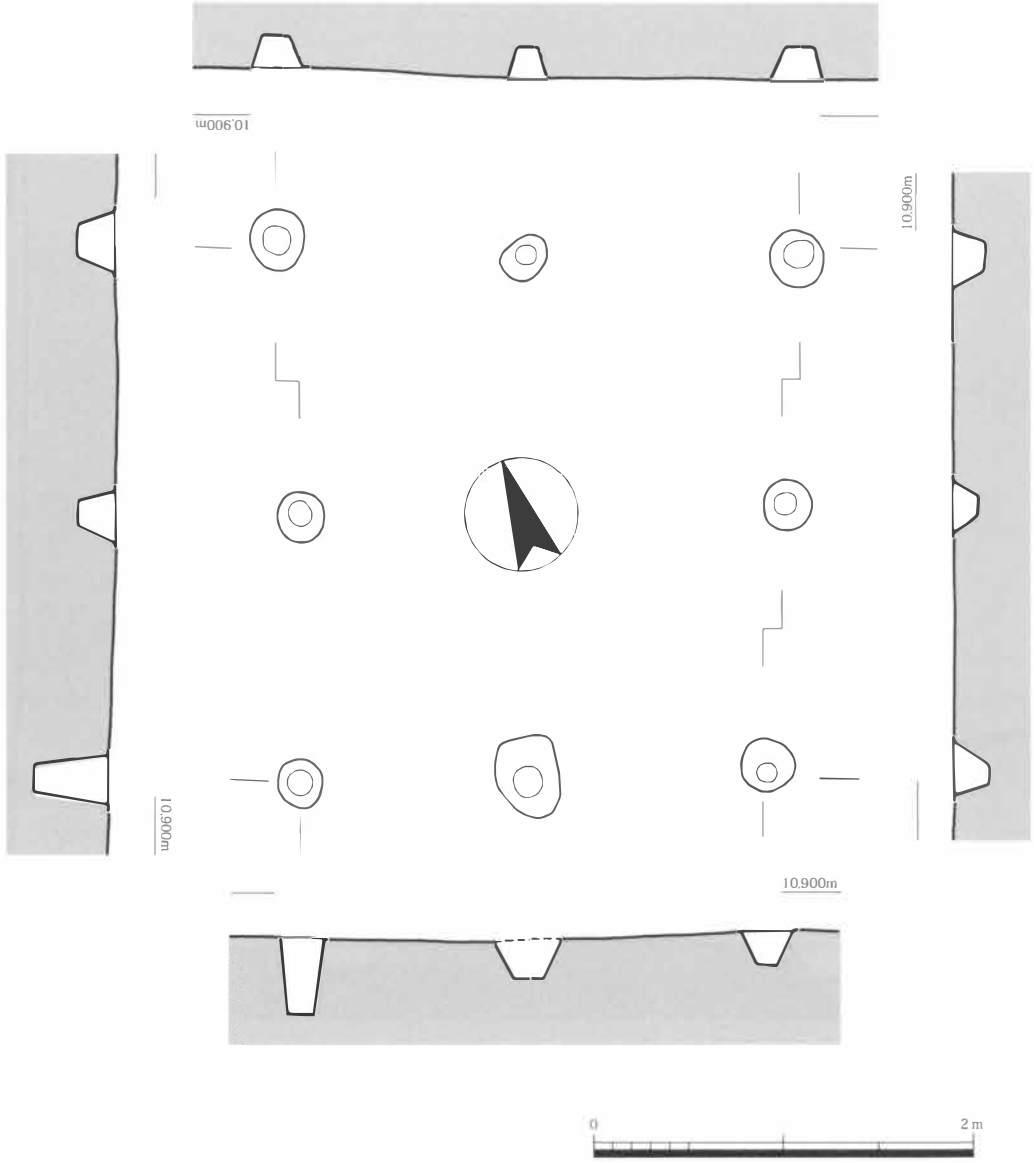


Fig.9　1SB025 実測図（1/40）

溝状遺構

1SD011（Fig.10）

調査区の北東部から南に向かって走る溝である。1SI005 と 1SB025 を切っている。幅 0.3m 深さ 0.1m を測り断面形状は逆台形を呈する。また、主軸の方位は N－01°－E である。

出土遺物は弥生土器（甕・壷・鉢・蓋・面子）土師器（壷・甕）がある。

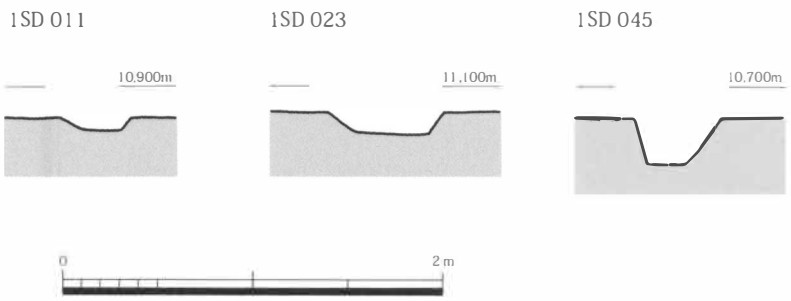


Fig.10　1SD011・1SD023・1SD045 実測図（1/40）

1SD023（Fig.10）

調査区の北東から南西に向かって走る溝である。1SX022w

を切っている。幅 0.6m 深さ 0.1m を測り断面形状は逆台形を呈する。また、主軸の方位はＮ－ 30°－Ｅである。

出土遺物は弥生土器（甕）がある。

1SD045（Fig.10）

調査区の北西から南に向かって走る溝である。幅 0.4m 深さ 0.2m を測り断面形状は逆台形を呈する。また、主軸の方位はＮ－ 15°－Ｅである。

出土遺物は認められなかった。

土坑

1SK006（Fig.11、Pla.8）

調査区の北東部に位置し、平面形態は楕円形を呈する。1SI040 と 1SI050 を切っている。南北 2.1m を測るが、東西幅は不明である。深さは 0.2m である。また、主軸の方位はＮ－ 18°－Ｗである。

出土遺物は弥生土器（甕・壷）、土師器（甕）がある。

1SK008（Fig.57）

調査区の北東部に位置し、平面形態は略長方形を呈する。遺構の切り合いはない。長軸 1.6m 短軸 1.2m を測り、深さは 0.4m である。また、主軸の方位はＮ－ 71°－Ｗである。

出土遺物は弥生土器（壷・甕）がある。

1SK015（Fig.57）

調査区の北東部に位置し、平面形態は台形状を呈する。遺構の切り合いはない。長軸 3.3m 短軸 1.7m を測り、深さは 0.2m である。また、主軸の方位はＮ－ 35°－Ｅである。

出土遺物は弥生土器（壷・甕・大甕・蓋・鉢）、縄文土器（深鉢）、石製紡錘車、サヌカイト（片）がある。

1SK018（Fig.57）

調査区の北東部に位置し、平面形態は略円形を呈する。1SX17 に切られている。長軸 1.7m 短軸 1.4m を測り、深さは 0.2m である。また、主軸の方位はＮ－ 29°－Ｅである。

出土遺物は弥生土器（甕・壷・蓋）がある。

1SK019（Fig.57）

調査区の北東部に位置し、平面形態は楕円形に近い略長方形を呈する。遺構の切り合いはない。長軸 2.0m 短軸 0.9m を測り、深さは 0.1m である。また、主軸の方位はＮ－ 85°－Ｗである。

出土遺物は弥生土器（甕・壷）がある。

1SK022（Fig.57）

調査区の北東部に位置し、平面形態は長方形を呈する。1SD023 に切られている。南北 0.8m を測るが、東西幅は 1SD023 に切られるため不明である。深さは 0.2m である。また、主軸の方位はＮ－ 30°－Ｅである。

出土遺物は弥生土器（甕）がある。

1SK028（Fig.57）

調査区の北東寄りに位置し、平面形態は崩れた長方形を呈する。遺構の切り合いはない。長軸 2.2m 短軸 1.0m を測り、深さは 0.2m である。また、主軸の方位はＮ－ 41°－Ｅである。

出土遺物は弥生土器（甕・片）がある。

1SK029（Fig.57）

調査区の中央東よりに位置していたが、非常に浅い遺構であったため、調査期間中の水没等により消滅した。遺構の切り合いはないが、規模および主軸の方位は不明である。

出土遺物は弥生土器（甕・片）がある。

1SK035（Fig.57）

調査区の中央部北寄りに位置し、平面形態は長方形を呈する。遺構の切り合いはない。長軸 2.0m 短軸 0.8m を測り、深さは 0.3m である。また、主軸の方位はＮ－ 63°－Ｗである。

出土遺物は弥生土器（甕・壷・蓋・不明品）、黒曜石（片）、サヌカイト（片）がある。

1SK038（Fig.57）

調査区の中央やや東寄りに位置し、平面形態は長方形を呈する。1SI010 に切られている。長軸 1.5m 短軸 0.8m を測り、深さは 0.3m である。また、主軸の方位はＮ－ 57°－Ｗである。

出土遺物は弥生土器（甕・壷・蓋）がある。

1SK041（Fig.11）

調査区の東に位置し、平面形態は長方形を呈する。遺構の切り合いはない。長軸側の一端に浅い棚状の段がつく。長軸 1.6m 短軸 0.9m を測り、深さは 0.3m である。また、主軸の方位はＮ－ 28°－Ｗである。

出土遺物は弥生土器（甕・大甕・壷・蓋・面子）がある。

1SK043（Fig.11）

調査区の東に位置し、平面形態は長方形を呈する。遺構の切り合いはない。長軸 1.9m 短軸 1.1m を測り、深さは 0.4m である。また、主軸の方位はＮ－ 21°－Ｗである。

出土遺物は弥生土器（甕・壷・蓋・支脚）がある。

1SK046（Fig.11）

調査区の東に位置し、平面形態は略長方形を呈する。1SI020 を切った状態で検出されたが、実際には 1SI020 に切られているものと考えられる。長軸 1.8m 短軸 1.1m を測り、深さは 0.7m である。また、主軸の方位はＮ－ 35°－Ｗである。

出土遺物は弥生土器（甕・壷）がある。

1SK048（Fig.11）

調査区の東に位置し、平面形態は隅丸長方形を呈する。遺構の切り合いはない。長軸 2.0m 短軸 0.9m を測り、深さは 0.2m である。また、主軸の方位はＮ－ 15°－Ｗである。

出土遺物は弥生土器（甕・鉢）がある。

1SK052（Fig.11）

調査区の南東に位置し、平面形態は長方形を呈する。遺構の切り合いはない。長軸 1.4m 短軸 0.7m を測り、深さは 0.3m である。また、主軸の方位はＮ－ 33°－Ｅである。

出土遺物は弥生土器（甕・壷）がある。

1SK053（Fig.12）

調査区の南東に位置し、平面形態は長方形を呈する。遺構の切り合いはない。長軸 1.4m 短軸 0.8m を測り、深さは 0.3m である。また、主軸の方位はＮ－ 20°－Ｅである。

出土遺物は弥生土器（甕・蓋）がある。

1SK055（Fig.57）

調査区の北西に位置し、平面形態は長方形を呈する。遺構の切り合いはない。長軸 1.9m 短軸 1.1m を測り、深さは 0.2m である。また、主軸の方位はＮ－ 51°－Ｗである。

出土遺物は弥生土器（甕・壷）がある。

1SK057（Fig.12）

調査区の南に位置し、平面形態は長方形を呈する。長軸 3.0m 短軸 1.6m を測り、深さは 0.1m である。また、主軸の方位はＮ－ 30°－Ｅである。

出土遺物は弥生土器（甕・壷）がある。

1SK062（Fig.57）

調査区の北東寄りに位置し、平面形態は崩れた長方形を呈する。遺構の切り合いはない。長軸 1.5m 短軸 0.7m を測り、深さは 0.2m である。また、主軸の方位はＮ－ 49°－Ｅである。

出土遺物は弥生土器（甕・壷・蓋）、磨製石斧、サヌカイト（片）がある。

1SK063（Fig.57）

調査区の北東寄りに位置し、平面形態は崩れた長方形を呈する。小土坑を切っている。長軸 1.4m 短軸 0.6m を測り、深さは 0.2m である。また、主軸の方位はＮ－ 49°－Ｅである。

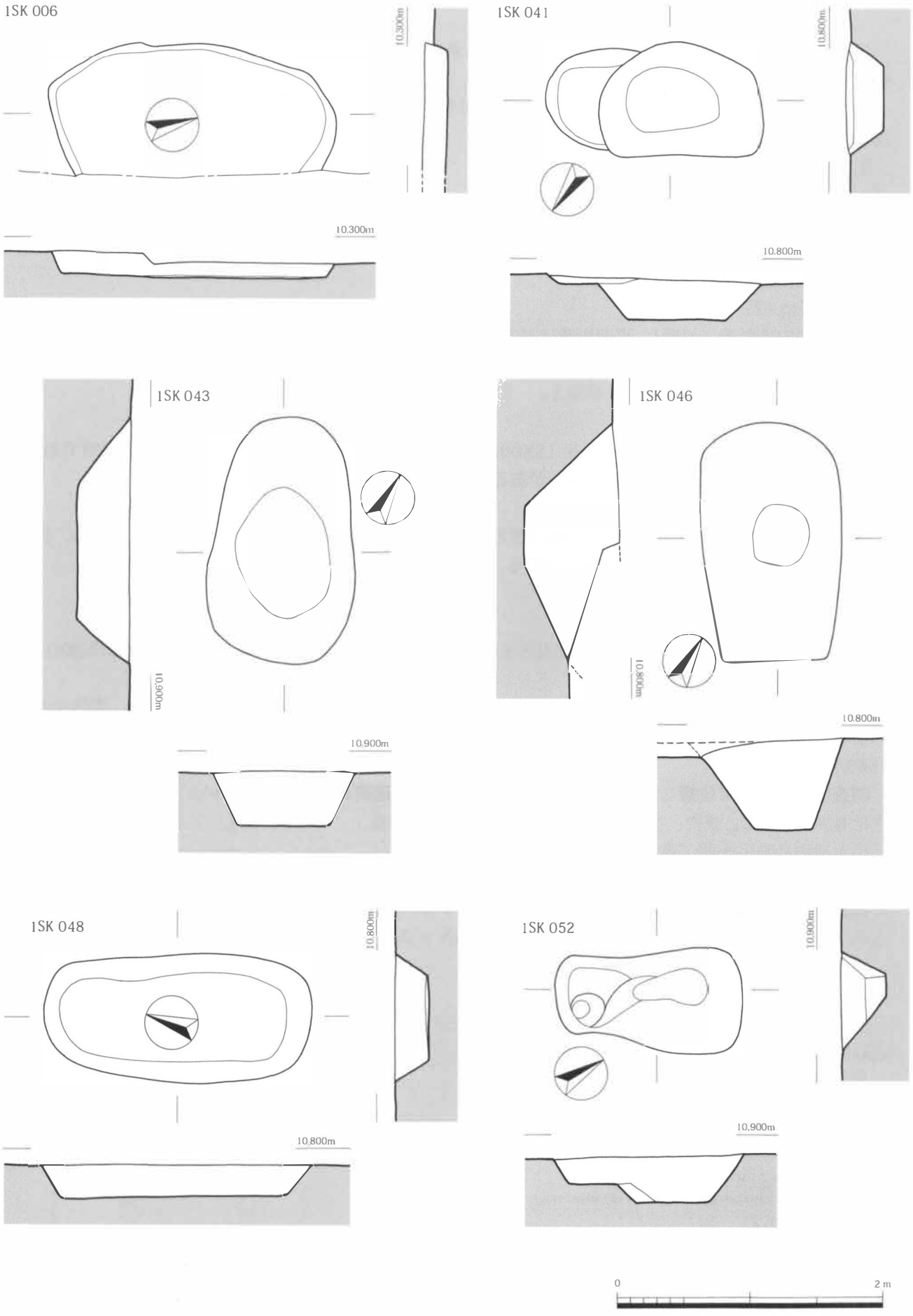


Fig.11　1SK006・1SK041・1SK043・1SK046・1SK048・1SK052 実測図（1/40）

出土遺物は弥生土器（甕・壷・蓋）、磨製石斧、サヌカイト（片）がある。

1SK064（Fig.57）

調査区の中央東寄りに位置し、平面形態は略円形を呈する。遺構の切り合いはない。径 0.2m を測り、深さは 0.2m である。

出土遺物は弥生土器（甕・壷）がある。

1SK065（Fig.12）

調査区の中央南寄りに位置し、平面形態は隅丸方形を呈する。1SX079 に切られている。長軸 1.5m 短軸 1.2m を測り、深さは 0.3m である。また、主軸の方位はＮ－ 40°－Ｅである。

出土遺物は弥生土器（甕）がある。

1SK066（Fig.12）

調査区の中央附近に位置し、平面形態は長方形を呈する。遺構の切り合いはない。長軸 1.9m 短軸 0.9m を測り、深さは 0.2m である。また、主軸の方位はＮ－ 54°－Ｗである。

出土遺物は弥生土器（甕・壷）がある。

1SK067（Fig.57）

調査区の中央附近に位置し、大半を 1SX092（撹乱坑）に切られていて、規模や方位は不明である。

出土遺物は弥生土器（甕・大甕・壷）がある。

1SK068（Fig.57）

調査区の北西寄りに位置し、平面形態は長方形を呈する。一部を後世の撹乱坑に切られている。長軸 2.0m 短軸 1.0m を測り、深さは 0.2m である。また、主軸の方位はＮ－ 59°－Ｗである。

出土遺物は弥生土器（甕・壷）がある。

1SK071（Fig.57）

調査区の南東部に位置し、平面形態は円形を呈する。1SI020 の下層遺構にあたる。長軸 1.0m 短軸 0.6m を測り、深さは 0.3m である。

出土遺物は弥生土器（甕・蓋）、サヌカイト（鏃・片）、黒曜石（片）がある。黒曜石は、腰岳産のものと椎葉川産のものが見受けられる。

1SK074（Fig.57）

調査区の東寄りに位置し、平面形態は不定形を呈する。遺構の切り合いはない。径 1.2m を測り、深さは 0.9m である。また、主軸の方位はＮ－ 41°－Ｗである。

出土遺物は弥生土器（甕・壷）がある。

1SK075（Fig.12）

調査区の南寄りに位置し、平面形態は長方形を呈する。遺構の切り合いはない。長軸 1.8m 短軸 1.2m を測り、深さは 0.4m である。また、主軸の方位はＮ－ 35°－Ｅである。

出土遺物は弥生土器（甕・壷・支脚）がある。

1SK082（Fig.57）

調査区の南西寄りに位置し、平面形態は円形を呈する。遺構の切り合いはない。径 1.1m を測り、深さは 0.1m である。

出土遺物は弥生土器（甕・片）がある。

1SK085（Fig.13）

調査区の南に位置し、平面形態は円形を呈する。遺構の切り合いはない。径 2.4m を測り、深さは 0.1m である。

出土遺物は弥生土器（甕）がある。

1SK087（Fig.57）

調査区の中央南寄りに位置し、平面形態は不定形を呈する。遺構の切り合いはない。径 0.5m を測り、深さは 0.3m である。また、主軸の方位はＮ－ 07°－Ｅである。

出土遺物は弥生土器（甕・大甕）がある。

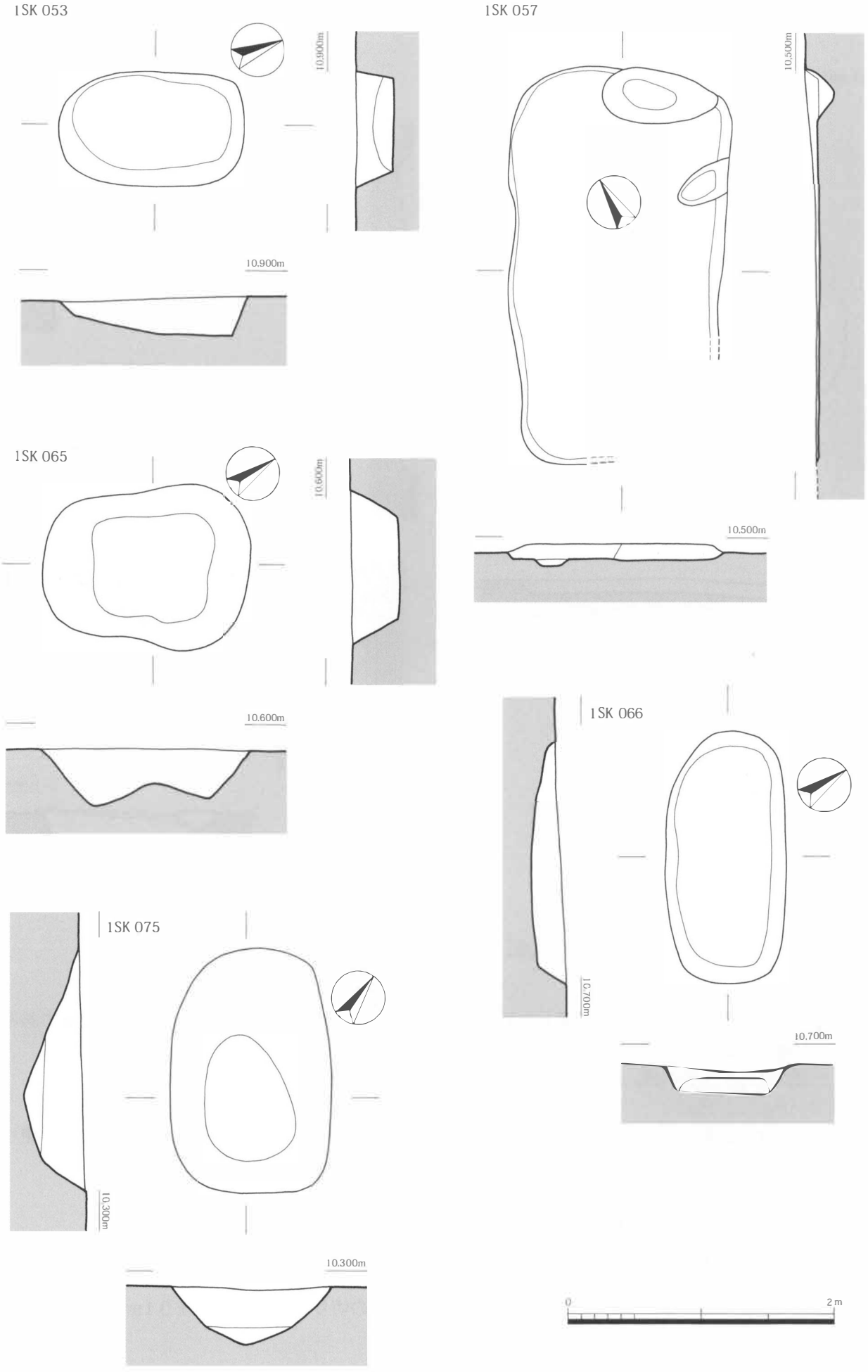


Fig.12　1SK053・1SK057・1SK065・1SK066・1SK075 実測図（1/40）

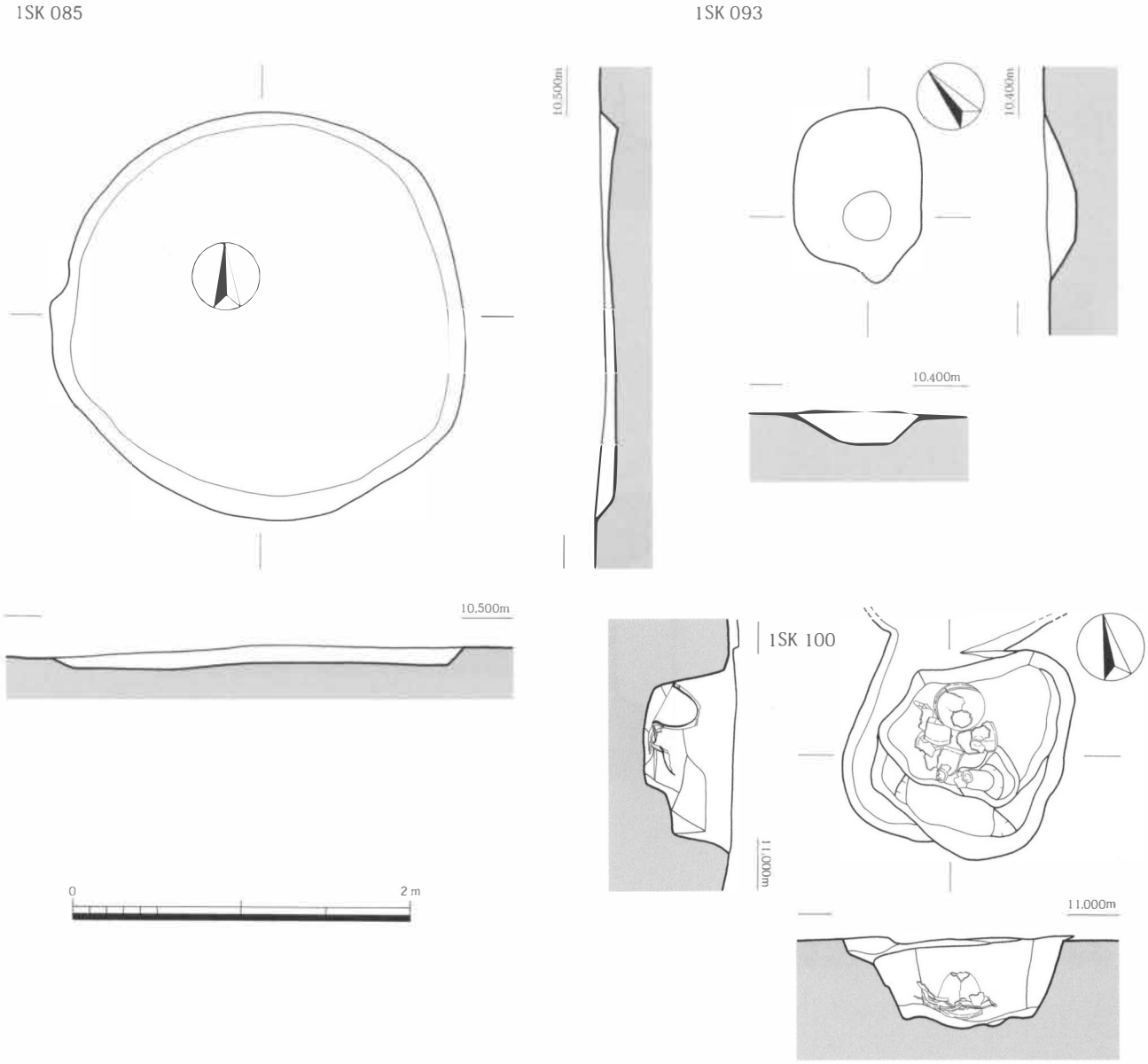


Fig.13　1SK085・1SK093・1SK100 実測図（1/40）

1SK093（Fig.13）

調査区の南に位置し、平面形態は隅丸方形を呈する。長軸 1.0m 短軸 0.7m を測り、深さは 0.2m である。また、主軸の方位はＮ－ 42°－Ｅである。

出土遺物は弥生土器（甕）がある。

1SK100（Fig.13、Pla.9）

調査区の南に位置し、平面形態は長方形を呈する。土坑に切られている。南北 1.2m 東西 1.1m を測り、深さは 0.5m である。また、主軸の方位はＮ－ 33°－Ｅである。

出土遺物は弥生土器（甕・壷・土弾）、サヌカイト（片）がある。

不明遺構

1SX026（Fig.57）

調査区の東北に位置し、平面形態は円形を呈する。遺構の切り合いはない。径 0.1m 深さは 0.1m である。

出土遺物は弥生土器（甕）がある。

1SX042（Fig.57）

調査区の東に位置し、平面形態は略円形を呈する。遺構の切り合いはない。径 0.2m を測り、深さは 0.2m である。

出土遺物は弥生土器（片）、石包丁がある。

1SX069（Fig.57）

調査区の北西寄りに位置し、平面形態は略円形を呈する。遺構の切り合いはない。径 0.4m を測り、深さは 0.1m である。

出土遺物は弥生土器（壷・ミニチュア壷・甕）がある。

1SX079（Fig.57）

調査区の中央附近に位置し、平面形態は略円形を呈する。1SK065 を切っている。径 0.7m を測り、深さは 0.3m である。

出土遺物は弥生土器（甕・壷・鉢）、片岩（片）がある。

出土遺物

出土遺物は、総量でパンコンテナー約 40 箱分が出土した。その主なものは弥生土器と土師器である。以下、出土遺構別に報告する。各遺物の詳細は出土遺物観察表によっているので、そちらを参照されたい。本文では、観察表で表現しきれない部分等を中心に記述した。よって、遺物によっては本文に記載のないものも含まれるので注意されたい。

1SI005 出土遺物（Fig.14、Pla.10）

すべて弥生土器で、1 ～ 8 は甕である。1 と 2 は法量の似通った口縁部の資料である。ともに口縁部と体部に 1 条ずつの凸帯を貼り付けるが、刻目は施されていない。2 の外面には刷毛目が認められる。3 ～ 7 は口縁部の資料である。3 と 4 は口縁部と体部に 1 条ずつの凸帯を貼り付け、両凸帯に刻目を施している。3 は口縁部の凸帯が小さめで、やや上を向いているのに対し、4 は断面が三角形を呈し、刻目も小ぶりである。5 と 7 は如意形の口縁部をもつ資料である。ともに口縁部に刻目を施し、体部に刻

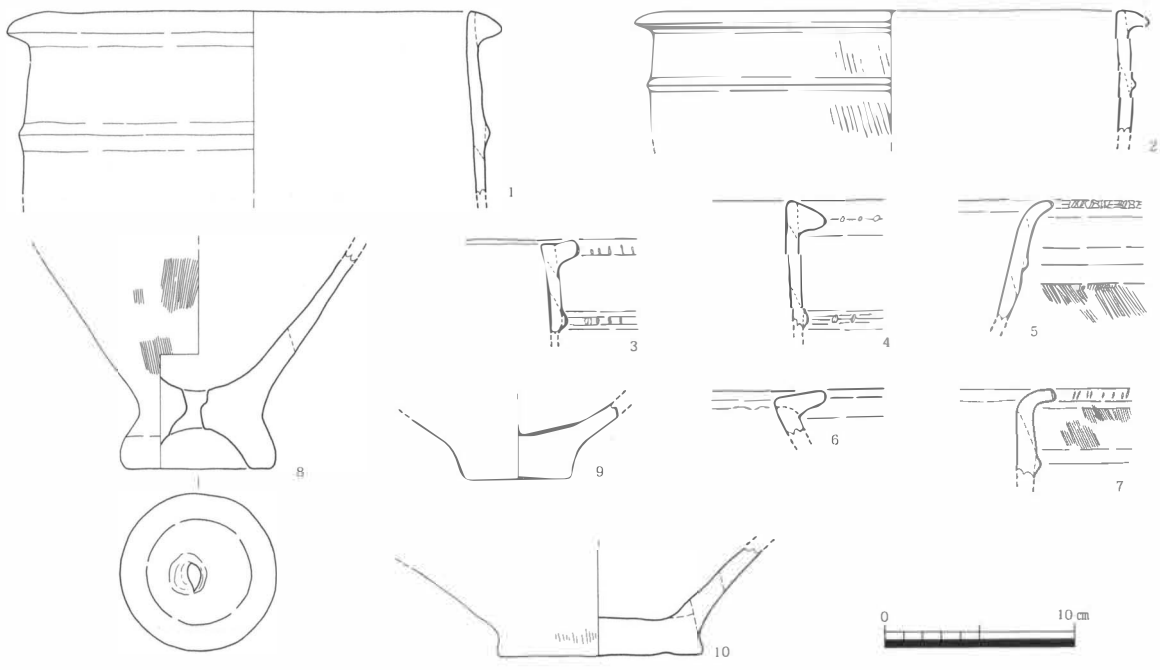


Fig.14　1SI005 出土遺物実測図（1/4）

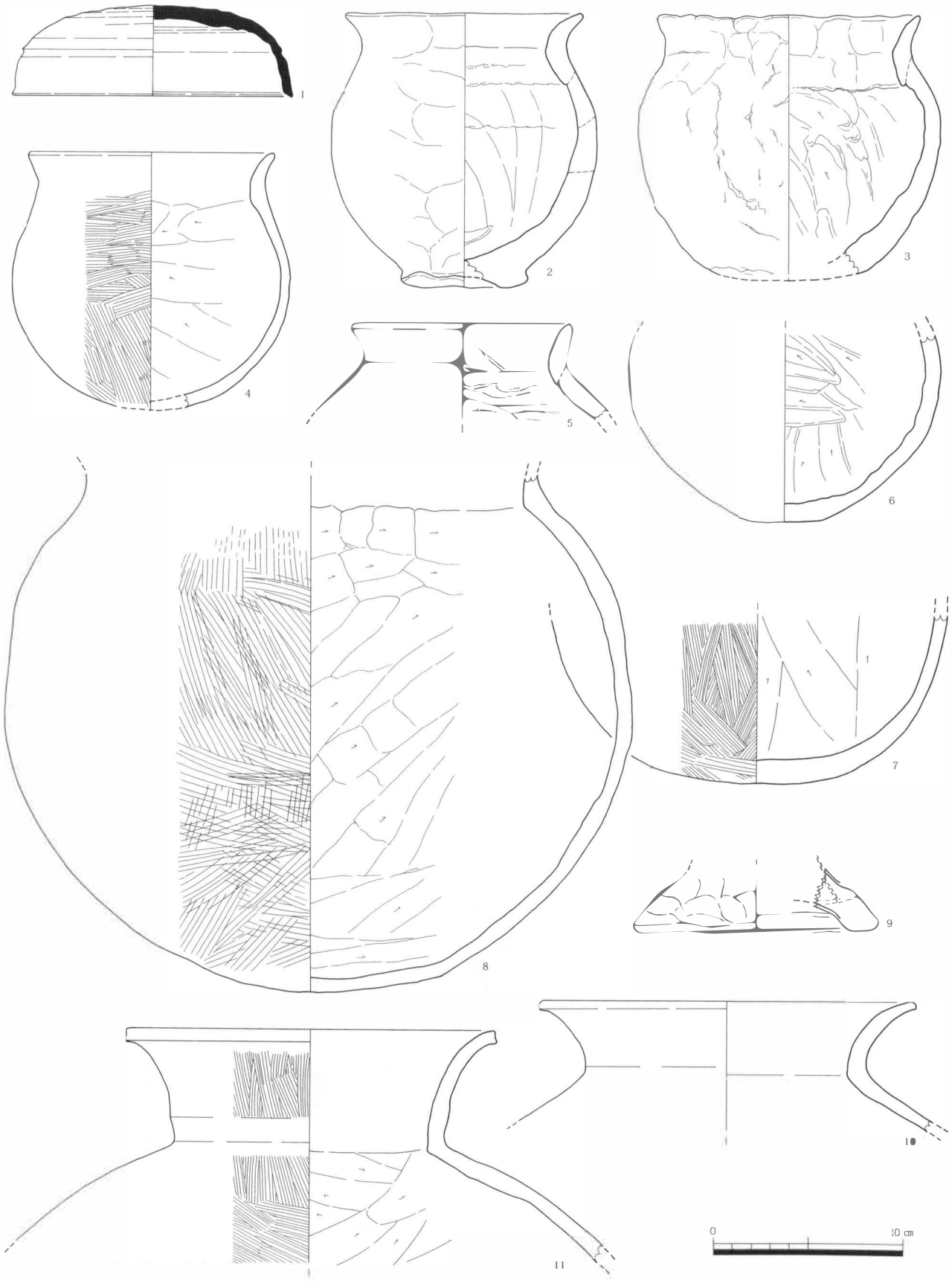


Fig.15　1SI010 出土遺物実測図①（1/3）

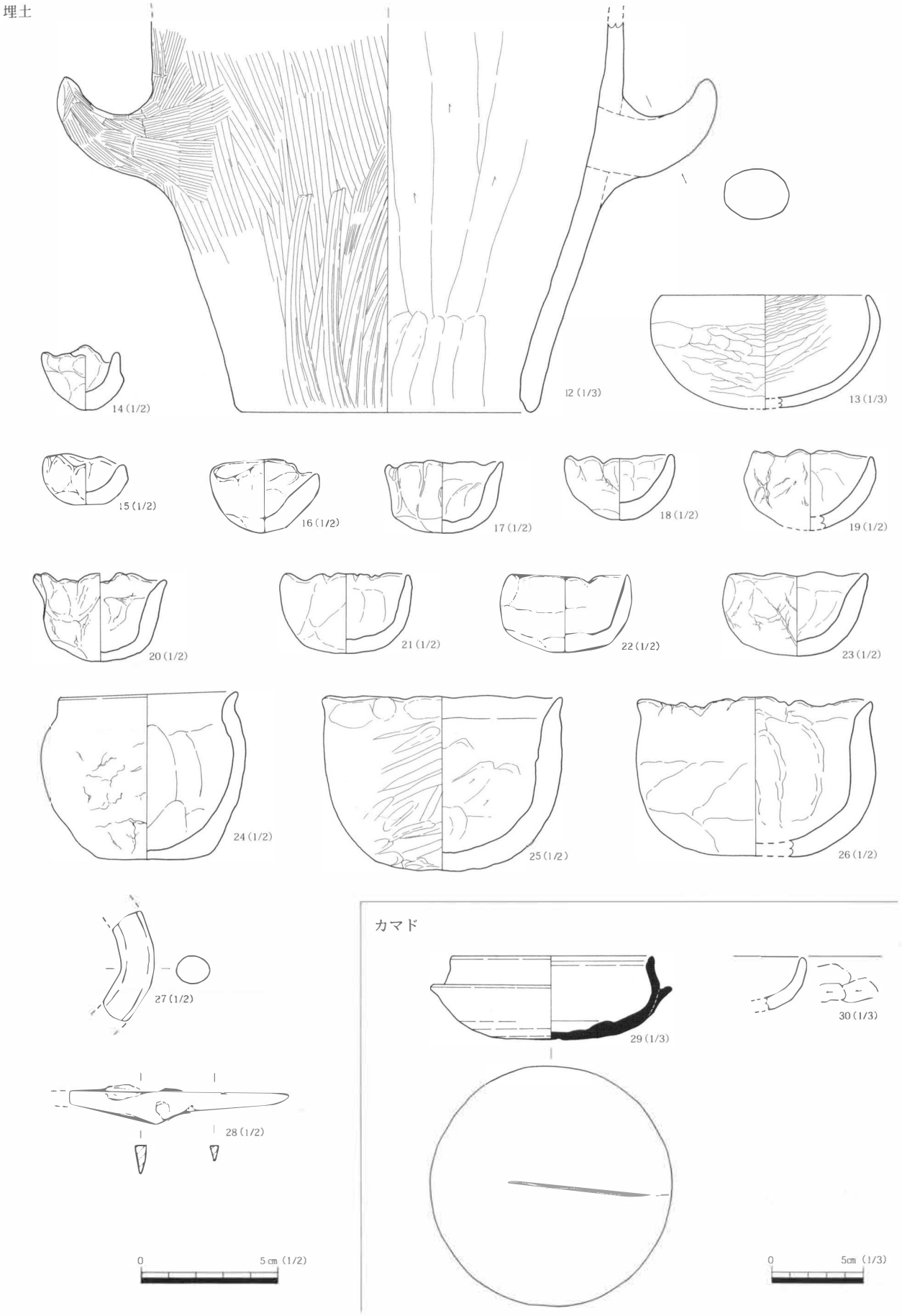


Fig.16　1SI010 出土遺物実測図②（1/3・1/2）

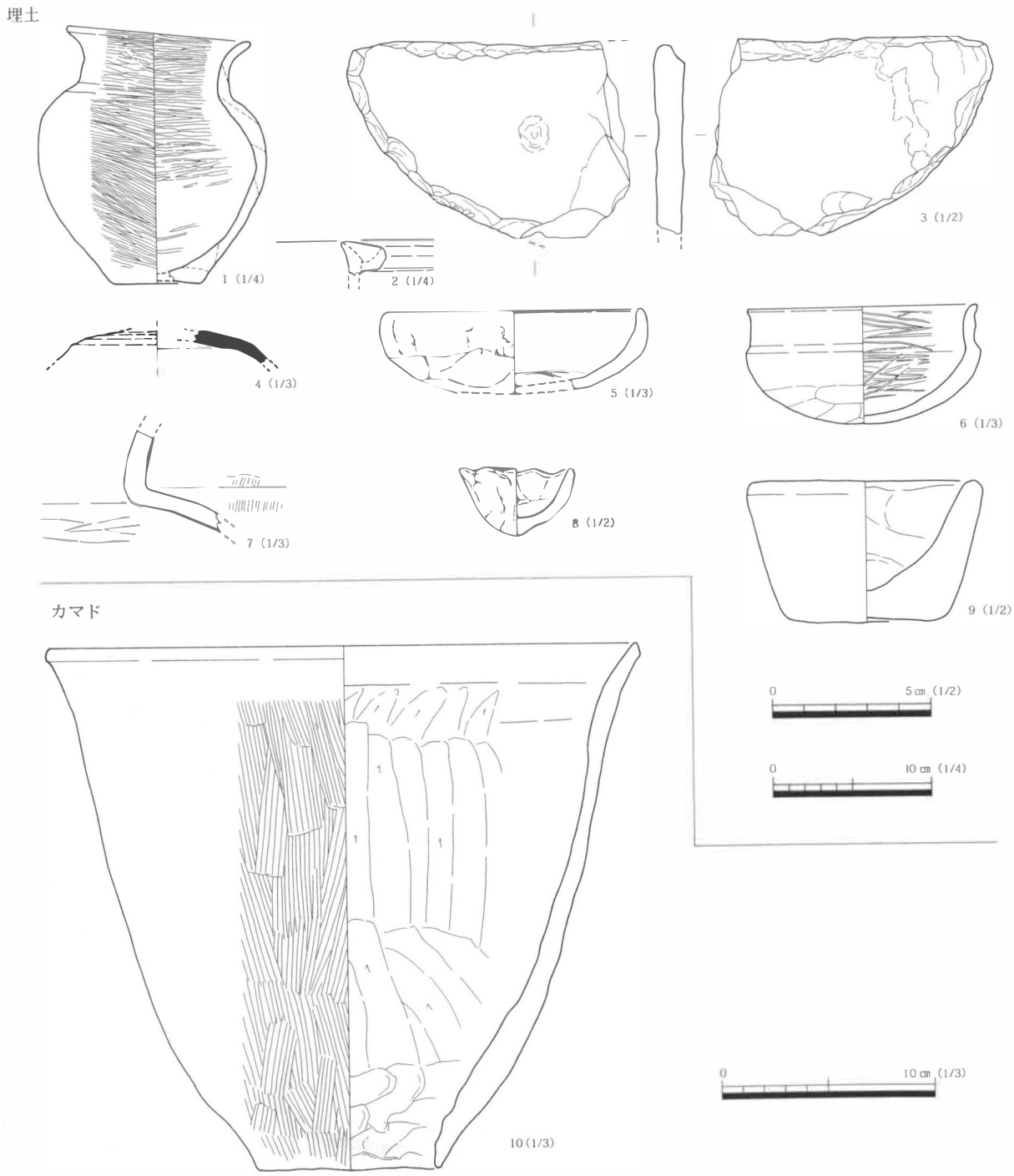


Fig.17　1SI020 出土遺物実測図（1/4・1/3・1/2）

目のない凸帯を貼り付ける。6 は口縁部凸帯の貼り付け方に特徴がある。凸帯が口縁上面を覆うように貼り付けられているのが判る。8 は底部の資料で、底面に焼成後の穿孔が 1 ヶ所認められる。底部自体は中空に近い上げ底状を呈している。9 と 10 は壷の底部である。ともに円盤貼り付け技法の名残を良く残している。

1SI010 出土遺物（Fig.15・16、Pla.10・11）

1 ～ 28 は竪穴埋土からの出土である。1 は須恵器の蓋である。口縁部を 1/3 ほど欠損するが、全体が知れる資料である。口縁端部には明瞭な段がある。2 ～ 27 は土師器である。2 ～ 22 は甕である。2

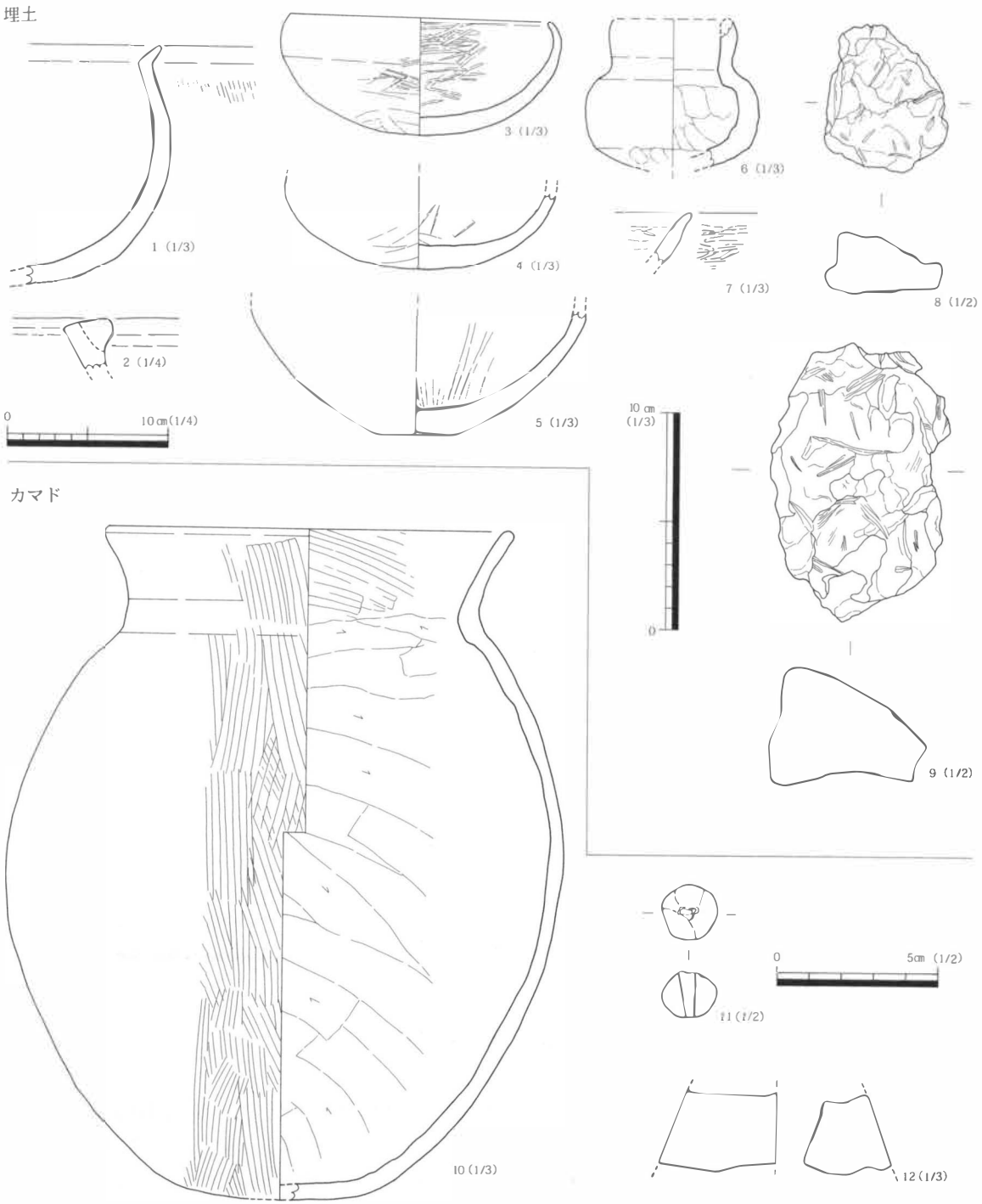


Fig.18　1SI030 出土遺物実測図（1/4・1/3・1/2）

は平底の甕である。粘土の接合痕が明瞭に観察できる。3 も同様であるが、底部を欠損している。4 は器壁の薄い資料で、やはり底部を欠損している。6 と 7 は底部が丸底となる資料である。内面はいずれも箆削りによっている。8 は大ぶりな丸底の甕で、口縁部形状は不明である。9 は不明品の底部であるが、器台か支脚の可能性がある。10 と 11 は壷である。11 は口縁端部に明瞭な面を持つ。12 は甑である。底面に穿孔を施すのではなく、筒型の類型となる。把手は体部に差し込んで固定してある。13 は丸底の坏である。内面は丁寧な箆削りを施し、底面は手持ち箆削りにて成型している。

14 ～ 26 は手づくねの椀である。14 ～ 23 は小型品であるが、24 ～ 26 はやや大ぶりである。27

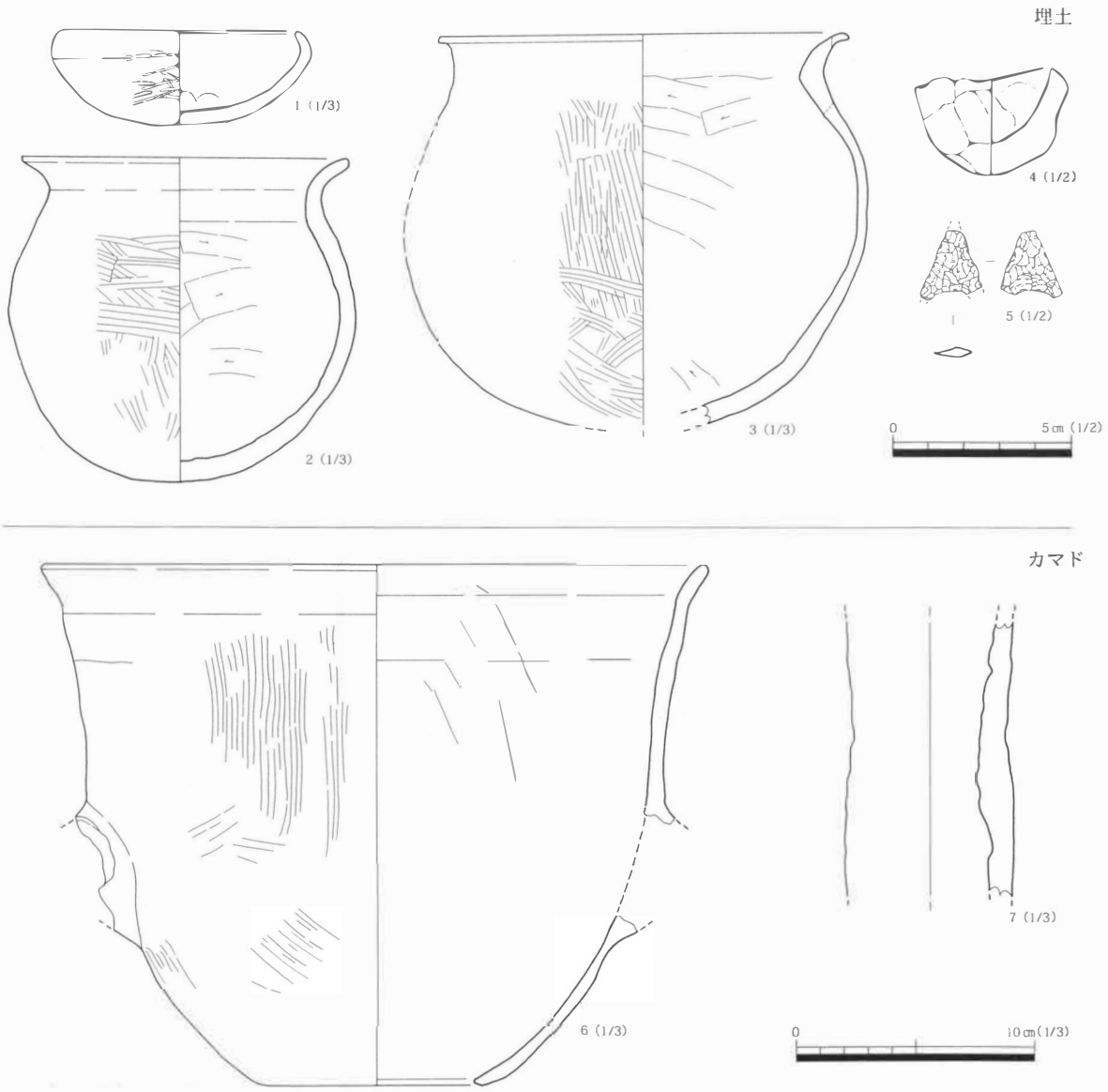


Fig.19　1SI040 出土遺物実測図（1/3・1/2）

は把手であるが、全体の器形は復元できない。28 は鉄製の刀子である。

29 と 30 は竈からの出土である。29 は須恵器の坏で、受けのある形状である。口縁部の立ち上がりも比較的高く、やや古相を呈するか。口縁端部には不明瞭ながら段がある。また、底部外面には直線状の篦記号が 1 条認められる。30 ははじきの坏である。外面は手持ち篦削りによっている。

1SI020 出土遺物（Fig.17、Pla.11・12）

1 ～ 9 は竪穴埋土からの出土である。1 は弥生土器の壷である。内外面ともに篦磨きを施している。2 は片岩製の石包丁未製品である。片面には穿孔を試みた痕跡が見受けられるが未貫通である。4 は須恵器の蓋である。天井部は回転篦削りを施している。5 ～ 10 は土師器である。5 と 6 は坏で、5 は丸底のもの底部に手持ち篦削りによっている。6 は須恵器の坏の模倣品であるが、5 と同じく底部を手持ち篦削りによっている。7 は甕である。8 と 9 は手づくね成型による小型品である。

10 は竈からの出土で、土師器の甑である。底部は筒状をなす類型で全体の器形が知れる資料である。ただし、把手の有無は判然としない。

1SI030 出土遺物（Fig.18、Pla.12）

1 ～ 9 は竪穴埋土からの出土で、2 の弥生土器を除き、すべて土師器である。1 と 2 は甕である。3

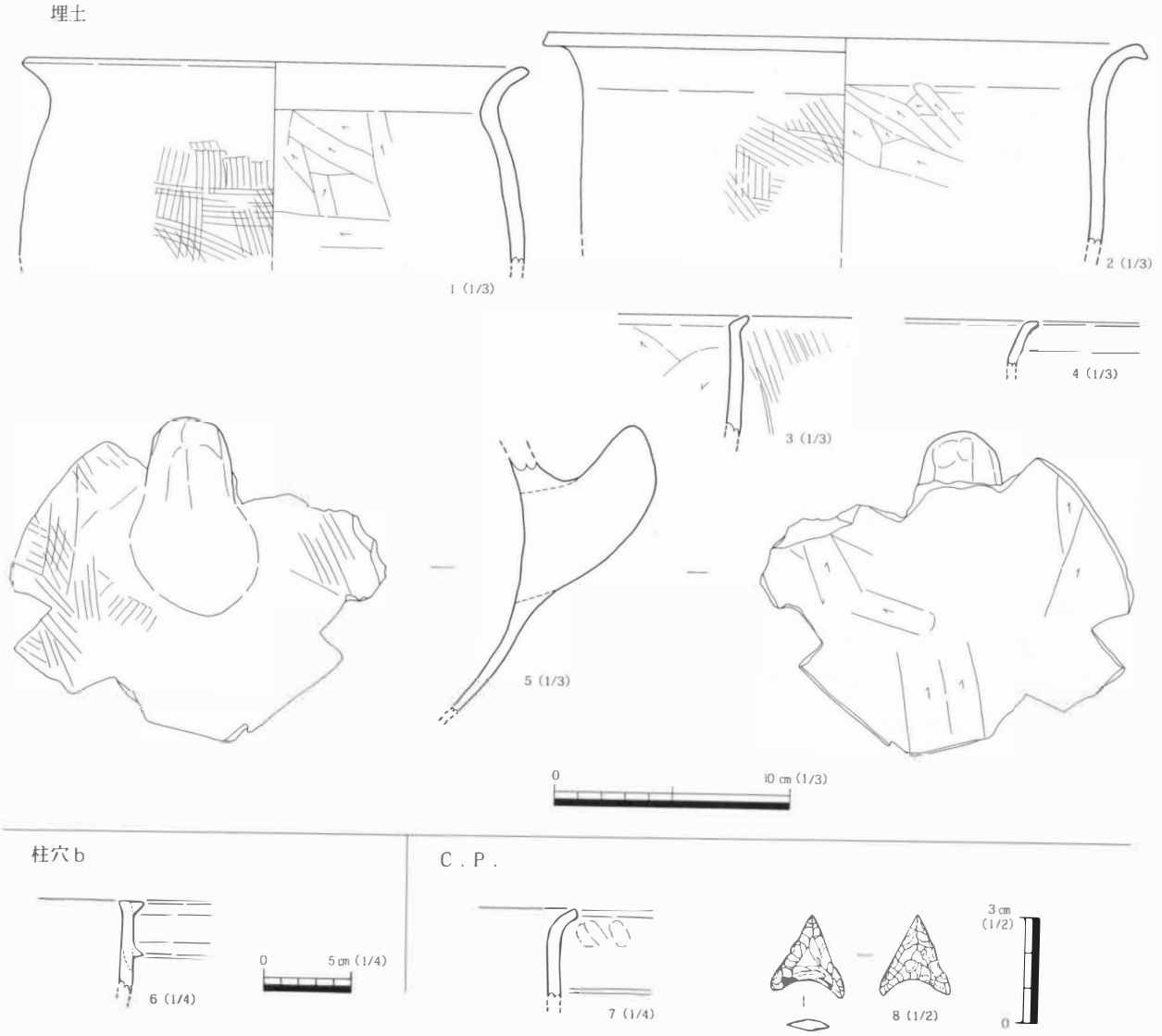


Fig.20　1SI050 出土遺物実測図（1/3・1/4・1/2）

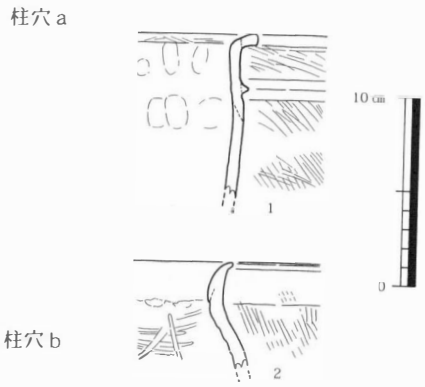


Fig.21　1SI060 出土遺物実測図（1/4）

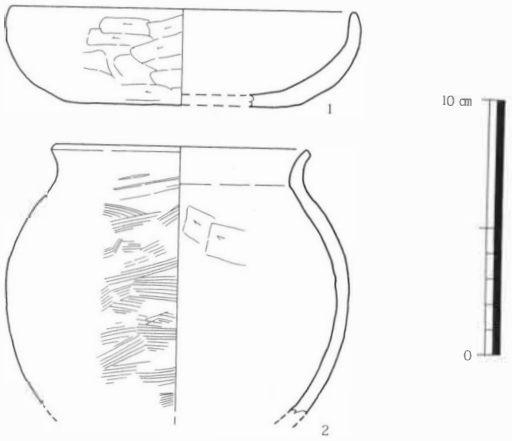


Fig.22　1SI070 出土遺物実測図（1/3）

と 4 は丸底の坏である。5 と 6 は壷である。5 は僅かに平底状を呈する。6 は小型品で器壁の厚いつくりである。7 は高坏か鉢の口縁部である。8 と 9 は粘土塊である。

10 ～ 12 は竈からの出土で、すべて土師器である。10 は甕で完形の資料である。底部は平底気味となる。11 は土玉で、焼成前に穿孔が見られる。12 は中実の支脚である。

1SI040 出土遺物（Fig.19、Pla.12）

1 ～ 5 は竪穴埋土からの出土である。1 ～ 4 は土師器である。1 は丸底の坏である。2 と 3 は甕で、いずれも丸底のものである。4 は手づくね成型による小型品である。5 はサヌカイト製の鏃で、先端と両脚端を欠損する。

6 と 7 は竈からの出土で、ともに土師器である。6 は甑で、丸みを帯びた体部を有する。底部は筒状となり、把手は差し込んで固定してあるようである。7 は支脚と思われる。

1SI050 出土遺物（Fig.20、Pla.12・13）

1 ～ 5 は竪穴埋土からの出土で、すべて土師器である。1 ～ 4 は甕である。2 は体部が直線的に伸びて器形は筒状を呈する。3 は小さく外反する口縁部が特徴的で、器壁も薄い。4 は外反する口縁部の先端をさらに小さく外折するもので、こちらも器壁が薄い。

6 は柱穴 b から出土した弥生土器の甕である。口縁部と体部に 1 条ずつ三角凸帯が貼り付くが、刻目は認められない。7 と 8 はセンターピットからの出土である。7 は弥生土器の甕で、口縁部は如意形を呈する。体部には凸帯の代わりに沈線が 1 条巡る。8 はサヌカイト製の鏃で完形である。

1SI060 出土遺物（Fig.21、Pla.13）

1 は柱穴 a からの出土で、弥生土器の甕である。口縁部は如意形というよりは強く外反させたもので、体部には三角凸帯を貼り付ける。凸帯には刻目は施されていない。

2 は柱穴 b からの出土で、弥生土器の壷である。外反する小さな口縁部が特徴的である。

1SI070 出土遺物（Fig.22、Pla.13）

ともに土師器である。1 は坏で、外面は手持ち篦削りによっている。2 は小型の甕で、球形の体部が特徴的である。

1SB25 出土遺物（Fig.23、Pla.13）

すべて柱穴 a からの出土で、土師器である。1 は丸底の坏である。2 は甕である。

1SD011 出土遺物（Fig.24、Pla.13）

7 を除き、すべて弥生土器である。1 ～ 4 は、甕である。1 と 2 は口縁部と体部に凸帯を貼り付けるもので、1 の体部凸帯にのみ刻目が認められる。1 は口縁部直下に焼成後の穿孔が 1 ヶ所あり、外面からの加工と認められる。3 は如意形の口縁部を持つ類型で、体部には沈線が 1 条巡っている。4 は構造的には 1 や 2 と同様に口縁部と体部に凸帯を貼り付けるものであるが、口縁部の凸帯下部は緩やかに体部と接続し、外面から見ると如意形口縁の類型に良く似た印象を受けるものである。5 は鉢である。6 は蓋の口縁部である。7 は土師器の甕であるが、混入品であろう。8 と 9 は壷である。8 は前期の制約を離れつつある城ノ越期特有の壷の器形をしている。9 は肩部に凸帯が 1 条貼り付けられ、体部外面は篦磨きが施されている。10 は甕の破片を加工した面子である。

1SD023 出土遺物（Fig.24、Pla.13）

ともに弥生土器の甕である。11 は如意形口縁のものである。12 は口縁部と体部に凸帯を貼り付けるが、口縁部の凸帯下部は緩やかに体部と接続し、外面から見ると如意形口縁の類型に良く似た印象を受けるものである。刻目は口縁部凸帯のみに施される。

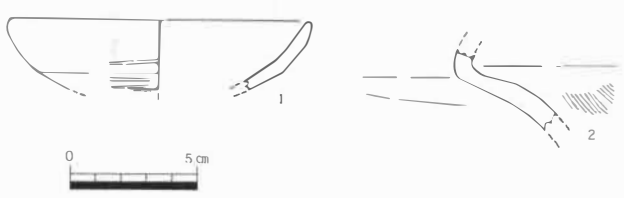


Fig.23　1SB025 出土遺物実測図（1/3）

1SD045 出土遺物（Fig.24、Pla.13・14）

すべて弥生土器である。13 と 14 は甕である。ともに口縁部に凸帯を貼り付けて刻目を施す。15 と 16 は壷である。15 は短頸壷の口

縁部である。16 は体部から底部にかけての資料であるが、底部は円盤貼り付け技法から脱却している。

1SK006 出土遺物（Fig.25、Pla.14）

ともに土師器の甕である。両資料とも、体部が球形を呈するもので、1 は体部に把手が差し込み技法で取り付いている。

1SK008 出土遺物（Fig.26、Pla.14）

1 ～ 14 は弥生土器である。1 ～ 10 は甕である。1 から 6 は口縁部に凸帯を貼り付け、体部には 1 条の沈線を巡らせるものである。口縁部凸帯は 1 と 2 が断面三角形のもので、3 ～ 6 は断面が台形に近いものである。口縁部凸帯の接合方法は、4 と 5 が口縁部上面に被さるように貼り付くのを除き、口縁部の外面に貼り付けられている。7 は口縁部と体部に断面三角形の凸帯を貼り付けるものである。1 ～ 7 のいずれも凸帯に刻目は認められない。8 から 10 は底部の資料である。いずれも底が厚く内部は中実となるものである。10 は底部側面に焼成後に内外面から穿孔を 1 ヶ所施している。

11 ～ 14 は壷である。11 は頸部が特選的に立ち上がる壷で口縁部は小さく外反する。須久式の壷にあたるか。12 と 13 は前期の制約を離れつつある傾向を示す小型壷である。いずれも体部と頸部の境

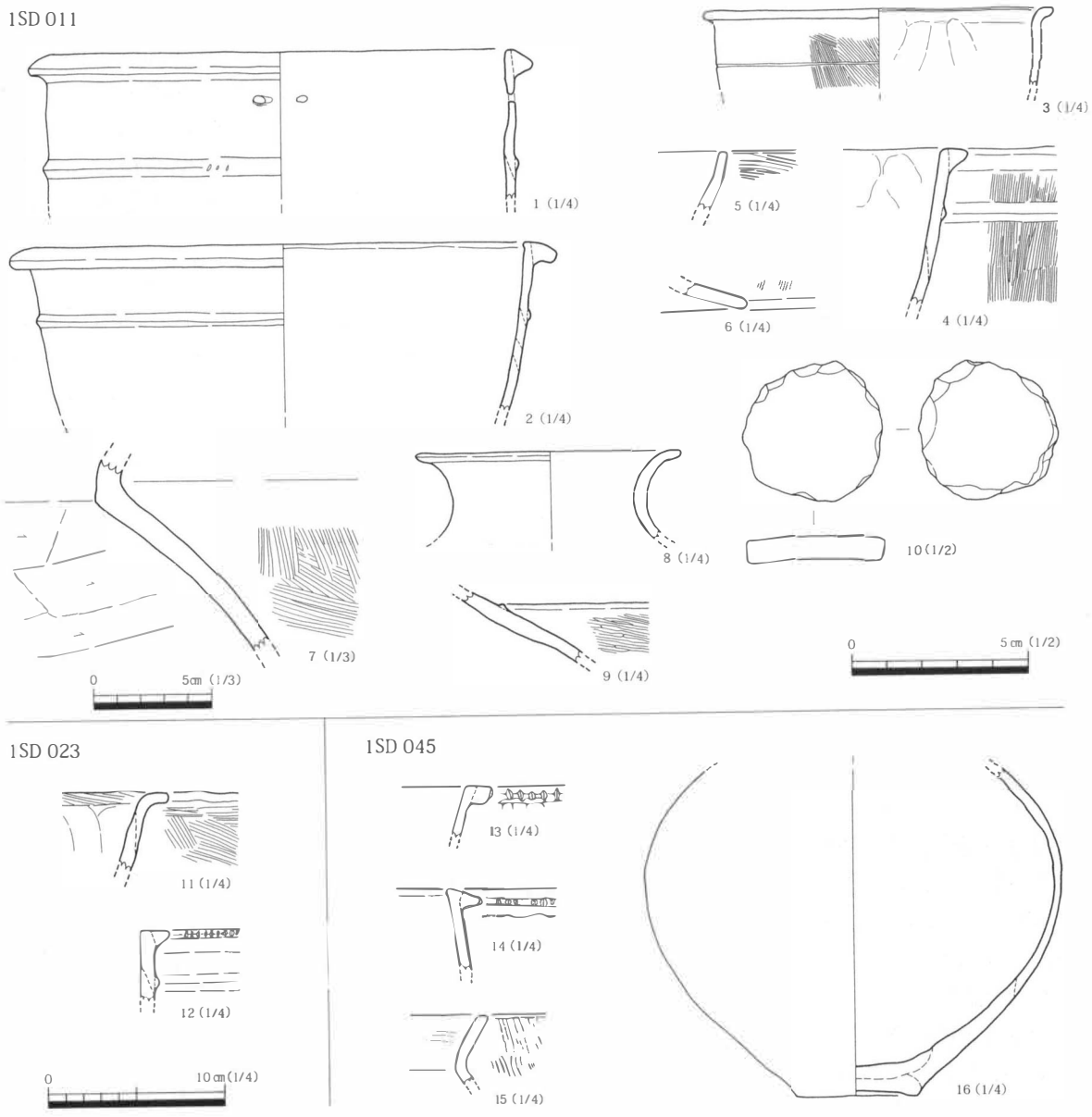


Fig.24　1SD011・1SD023・1SD045 出土遺物実測図（1/4・1/2）

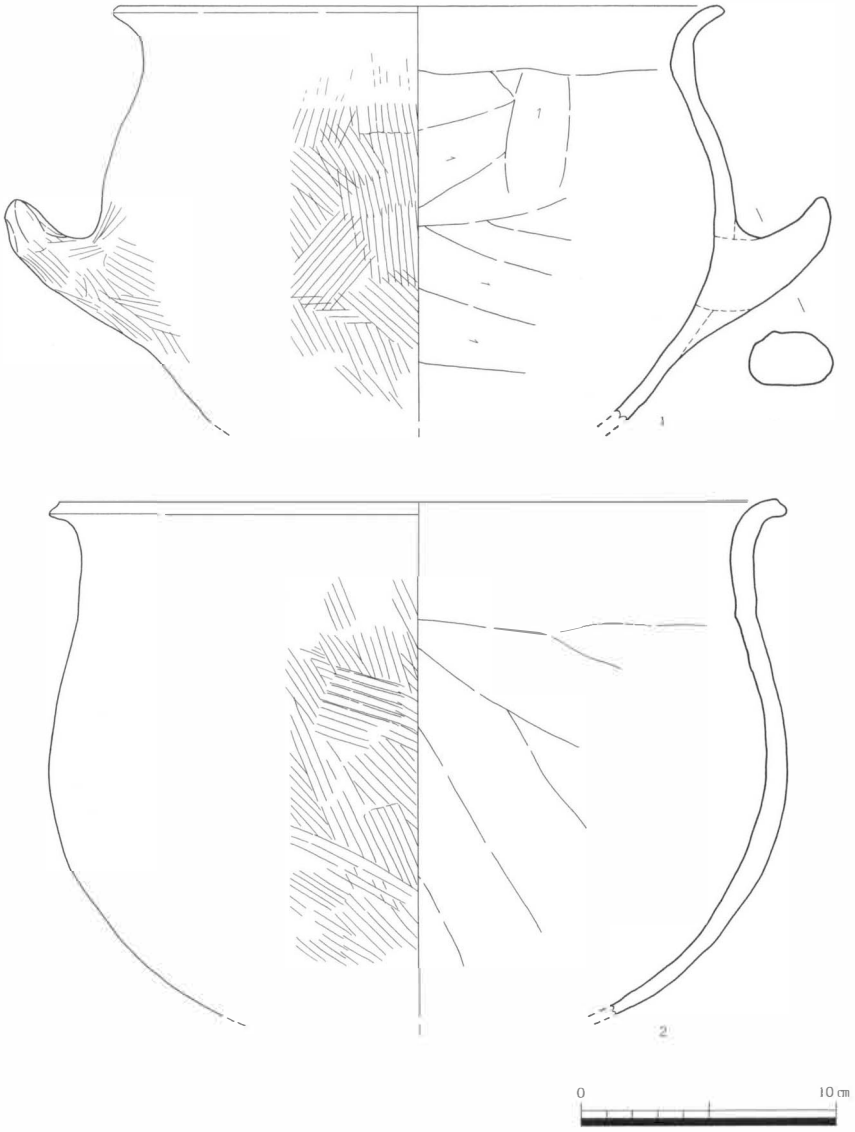


Fig.25　1SK006 出土遺物実測図（1/3）

が判然としない。14 は底部の資料であるが、僅かに円盤貼り付け技法の痕跡をとどめる。15 は黒曜石の薄片石器である。

1SK15 出土遺物（Fig.27・28・29、Pla.14・15・16）

1 ～ 26 は弥生土器で、1 ～ 19 は甕である。1 ～ 6 は如意形の口縁部をもつ類型で 3 と 5 と 6 は体部に三角凸帯を貼り付ける。また、5 は体部凸帯にのみ刻目を施し、6 は口縁端部の全面と体部凸帯の頂部に刻目を施す。7 から 17 は口縁部に凸帯を貼り付ける類型であるが、7 は体部の凸帯がなく、17 は体部凸帯の存在が判然としない。10 と 17 は刻目が全く認められないが、それ以外の資料は、全ての凸帯に刻目を施している。18 と 19 は底部の資料で、いずれも底面に内外両面から穿孔を焼成後に施している。20 から 22 は蓋である。23 から 25 は壷である。23 は頚部のくびれがほとんどなく、だらりとした印象を受ける。24 は器形に比較的前期の壷の印象を良く残していて、内外面に篦磨きを施している。25 は頚部が強く立ち上がっていて、前期の制約を離れつつある器形の典型である。いずれの壷も口縁部の肥厚は行なわれない。

27 は縄文土器の深鉢である。楕円の押型文を外面に施していて、田村式の範疇に入ると思われる。28 と 29 は片岩の紡錘車である。

1SK018 出土遺物（Fig.30、Pla.16）

すべて弥生土器である。1 ～ 6 は甕である。すべて口縁部に凸帯を貼り付けるが、いずれも刻目は施していない。3 は体部に沈線を 1 条巡らせている。6 は体部にも凸帯を貼り付けるが、体部凸帯にも刻目は施していない。7 と 8 は蓋である。7 のつまみの天井部は抉ってあり、つまみは輪状となっている。9 は壷の底部である。

1SK019 出土遺物（Fig.31、Pla.16）

すべて弥生土器である。1 ～ 3 は甕である。1 は口縁部に 1 条と体部に 2 条の凸帯を貼り付けるが、いずれにも刻目は認められない。2 は鉢に近い器形で、口縁部にのみ凸帯を貼り付けるが、刻目は施さない。4 は蓋のつまみ部である。

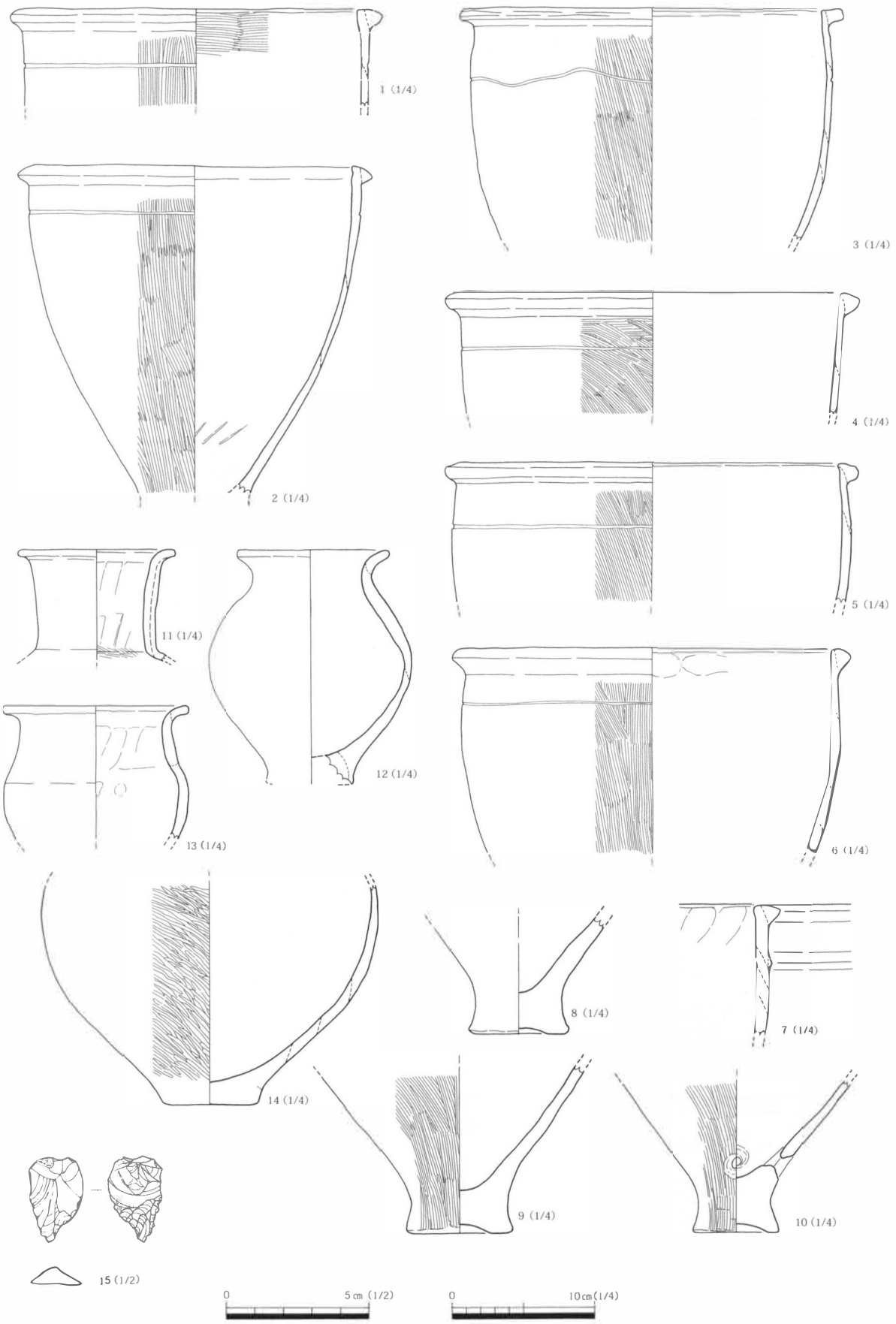


Fig.26　1SK008 出土遺物実測図（1/4・1/2）

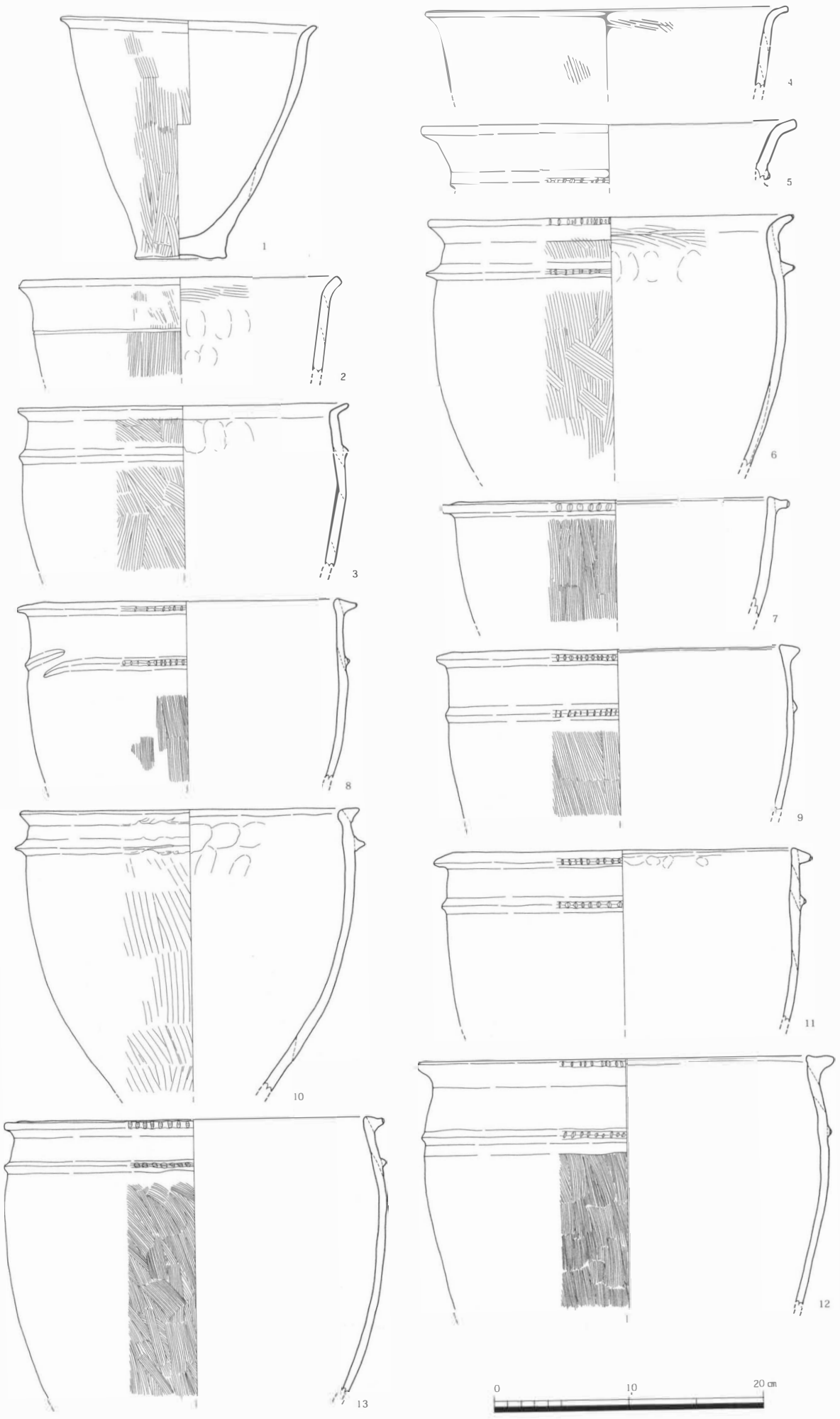


Fig.27　1SK015 出土遺物実測図①（1/4）

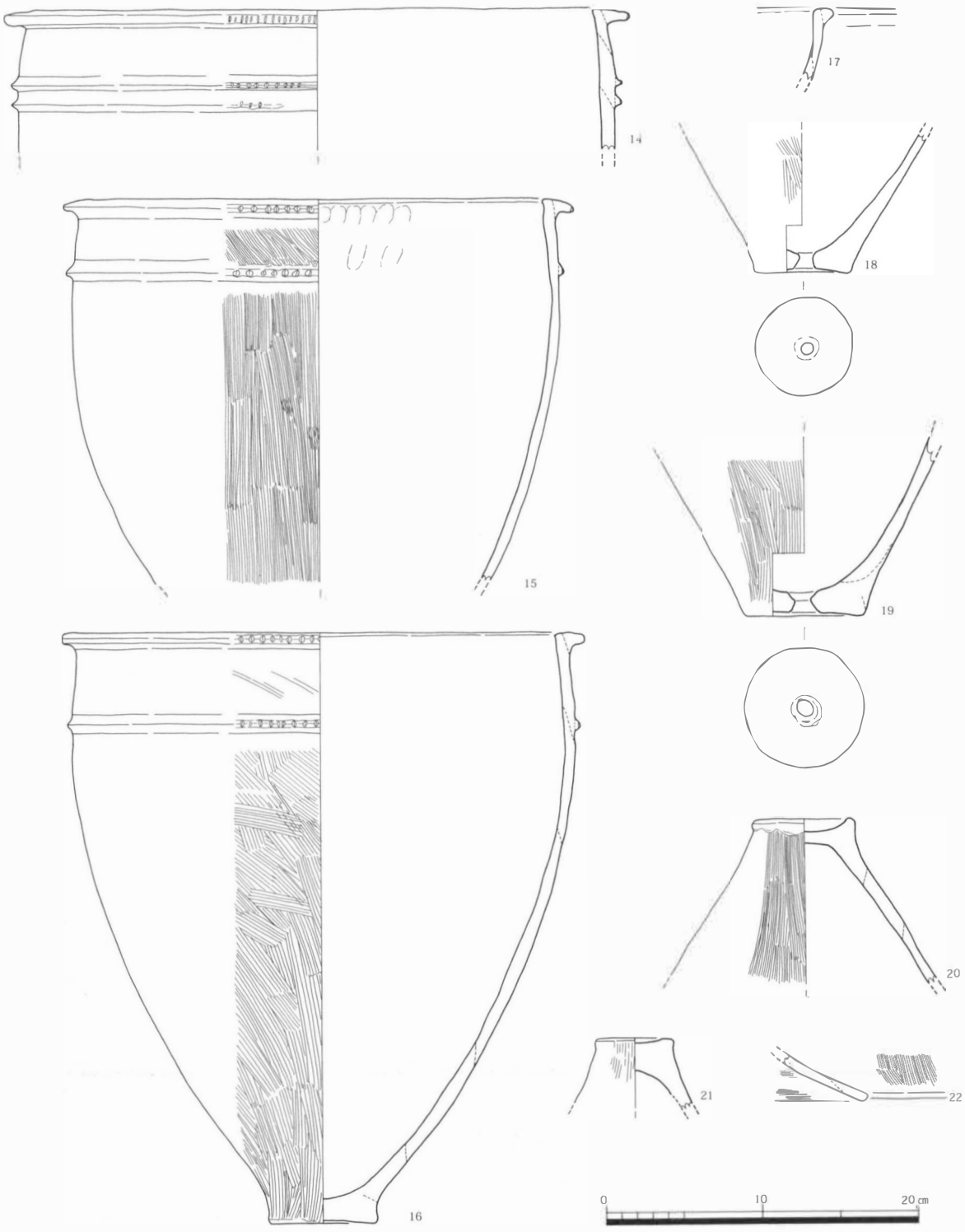


Fig.28　1SK015 出土遺物実測図②（1/4）

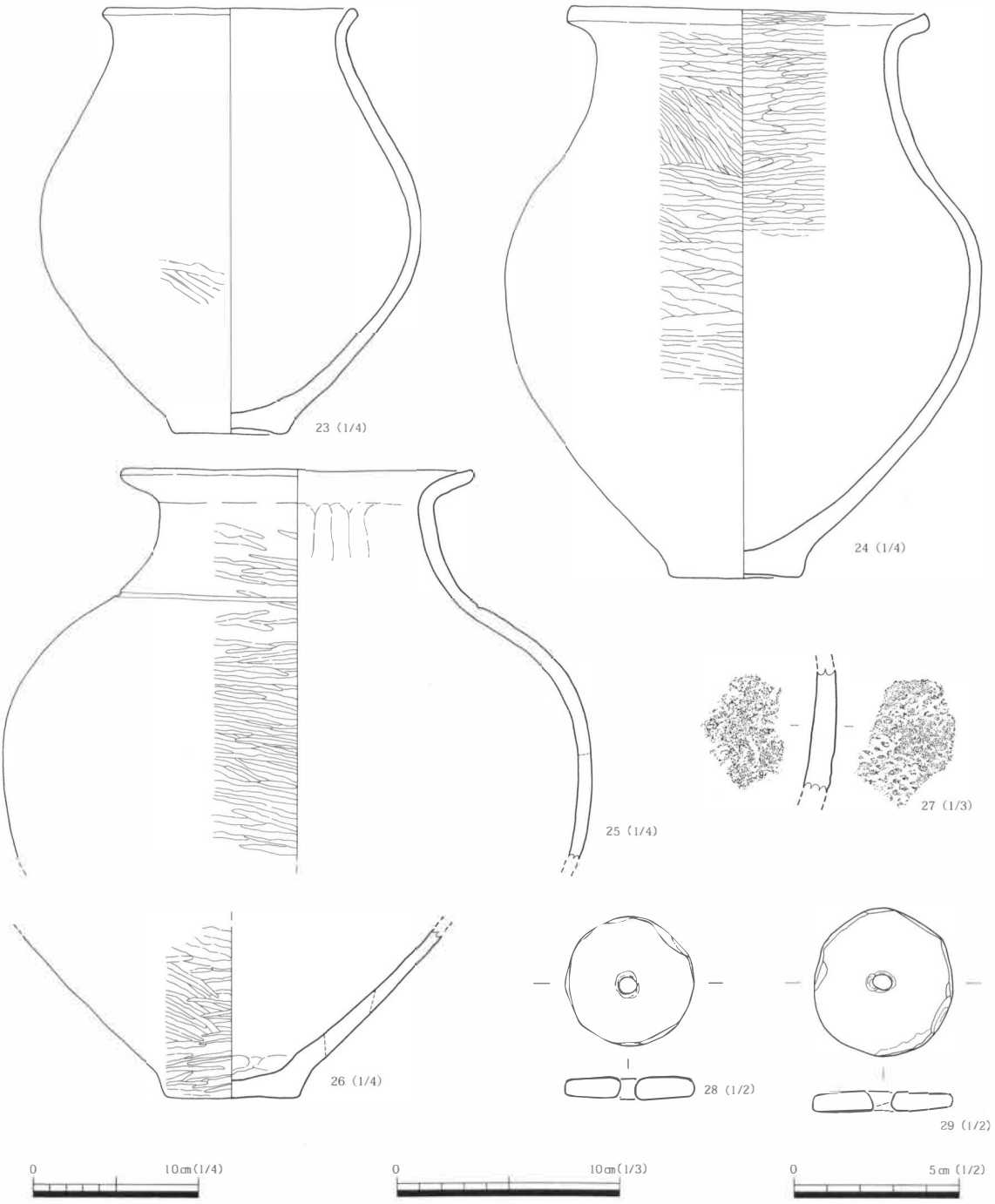


Fig.29　1SK015 出土遺物実測図③（1/4・1/3・1/2）

1SK022 出土遺物（Fig.31、Pla.16・17）

すべて弥生土器の甕である。5 は口縁部に凸帯を貼り付けるが、刻目は施さない。6 は口縁部と体部に凸帯を貼り付け、両方に刻目を施している。7 は厚底の底部であるが、上げ底状となっている。

1SK024 出土遺物（Fig.32、Pla.17）

すべて弥生土器の甕である。1 は口縁部と体部に凸帯を貼り付け、ともに刻目を施している。2 は如意形口縁の類型であるが、体部に凸帯を貼り付けて体部凸帯にのみ刻目を施している。3 は小さく外反する口縁部をもつ。4 は口縁部と体部に凸帯を貼り付けるが、刻目は認められない。5 ～ 7 は底部の資

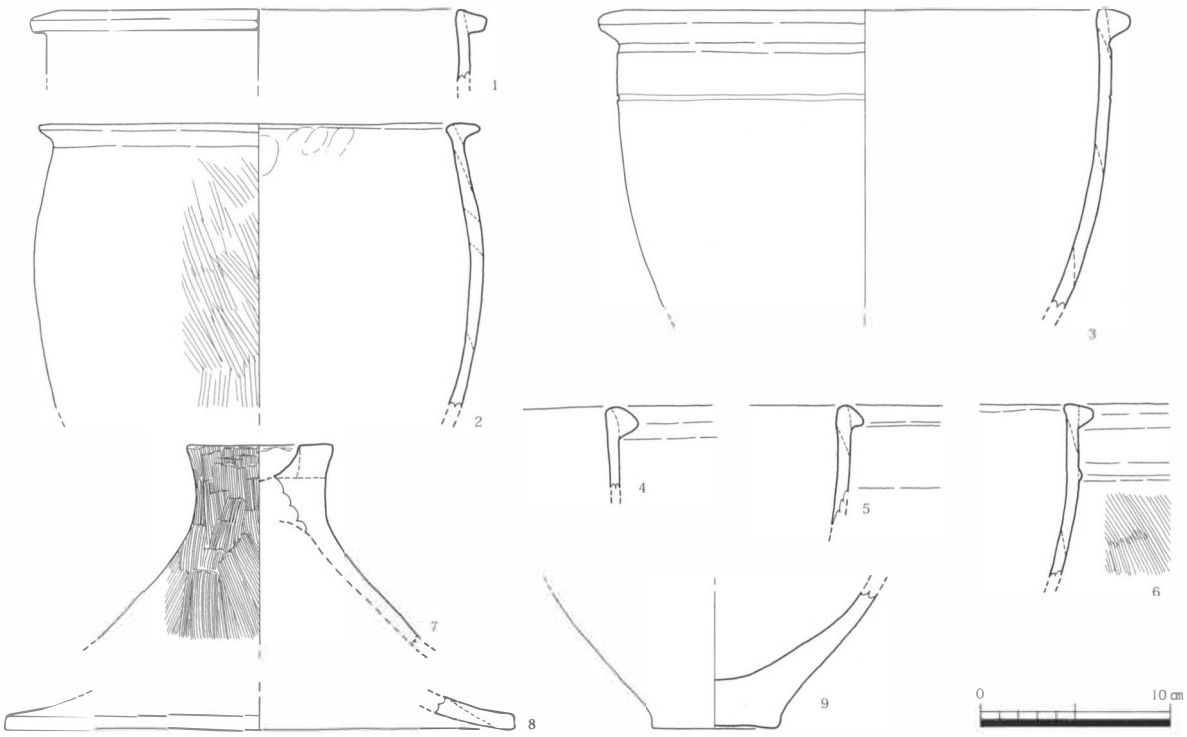


Fig.30　1SK018 出土遺物実測図（1/4）

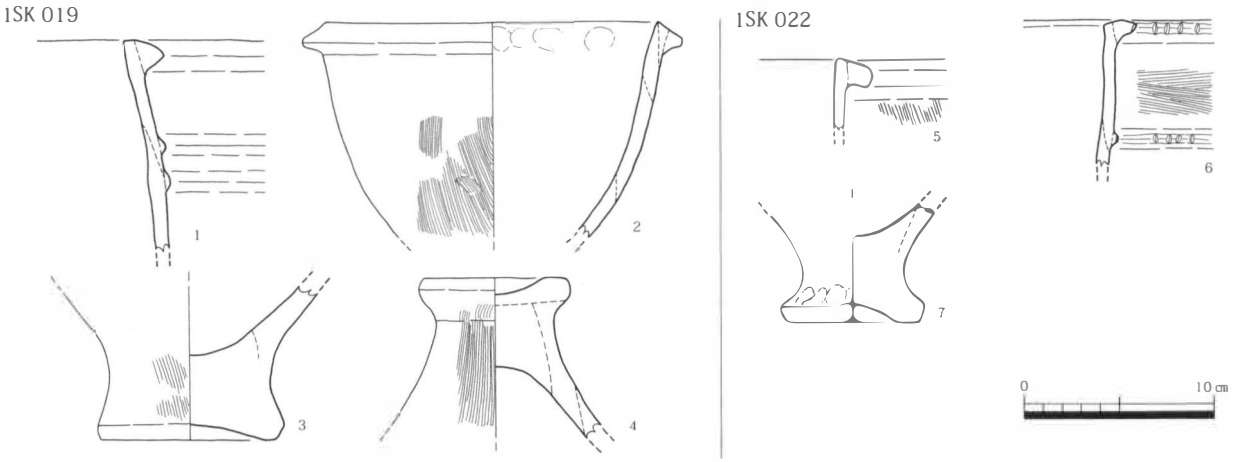


Fig.31　1SK019・1SK022 出土遺物実測図（1/4）

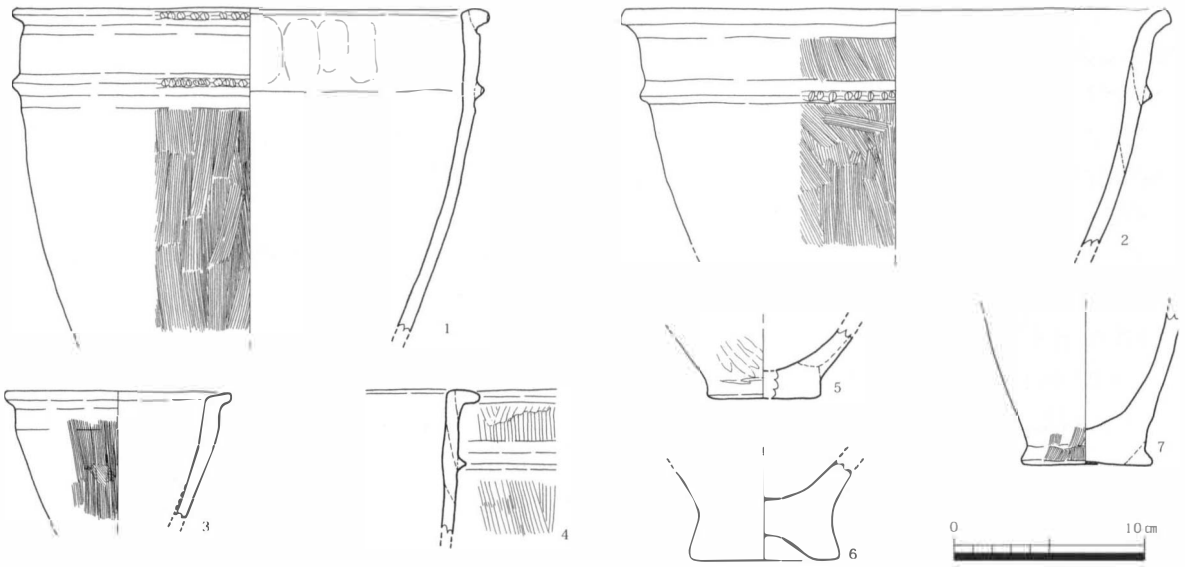


Fig.32　1SK024 出土遺物実測図（1/4）

料であるが、6 はやや厚い底部となる。

1SK028 出土遺物（Fig.33、Pla.17）

ともに弥生土器の甕である。1 は口縁部の資料で、鍬先状口縁を上方に跳ね上げている。黒髪式の影響を受けたものか。2 は底部である。

1SK035 出土遺物（Fig.34、Pla.17）

すべて弥生土器の甕である。1 は小さく外反する口縁部を持ち、体部に凸帯を貼り付ける。刻目は認められない。2 と 3 は口縁部と体部に凸帯を貼り付けるが、こちらも刻目は認められない。4 は体部の細片であるが、下弦状の凸帯が貼り付いている。5 ～ 9 は底部の資料である。いずれも厚底のもので、7 を除いて上げ底状の加工は認められない。

1SK038 出土遺物（Fig.33、Pla.17）

3 は甕の底部である。底部は厚底とはならず、すぼまった印象を受ける。

1SK041 出土遺物（Fig.35、Pla.17・18）

すべて弥生土器である。1 ～ 9 は甕である。1 は体部が算盤珠状になるもので、口縁部は鍬先状に近く、体部最大径となるところに凸帯を貼り付ける。刻目は認められない。2 はずんぐりとした器形の体部である。4 ～ 6 は口縁部の資料であるが、いずれも口縁部に凸帯を貼り付けている。ただし、5 は内面側にも粘土を貼り足して、鍬先状としている。また、6 は体部にも凸帯が貼り付く。いずれも刻目は認められない。7 ～ 9 は底部である。7 と 8 は厚底の底部で、僅かに上げ底状となる。9 は底部が薄いものである。10 と 11 は器台である。12 は蓋である。13 は甕の破片を加工した面子である。

1SK043 出土遺物（Fig.36、Pla.18）

すべて弥生土器である。1 ～ 7 は甕である。1 ～ 4 と 6 は口縁部に凸帯を貼り付ける類型である。いずれも口縁端部の内側をつまみ出し、口縁部の断面形状が鍬先状に近づいている。5 は小さく外反する口縁部を持つ。7 は厚底の底部で、僅かに上げ底状を呈する。8 は壷である。口縁は外反し、口縁端部上面に凸帯状に粘土を貼り付けて肥厚させる。須久式の範疇か。9 ～ 12 は蓋である。10 と 12 は口縁部の資料で、いずれも端部に面を持つ。11 は平べったい印象を受けるつまみであるが、壷の底部かも知れない。13 と 14 は器台である。13 は口縁部を丸く収め、14 は水平な面を形成している。15 は中空の支脚の底部である。

1SK046 出土遺物（Fig.37、Pla.18）

すべて弥生土器の甕である。1 と 2 は口縁部に凸帯を貼り付けるが、上方に跳ね上げている。刻目は認められない。3 は口縁部と体部に凸帯を貼り付けるが、いずれも刻目はない。4 は内傾する口縁部に凸帯を貼り付けているが、刻目は施されない。5 と 6 は底部の資料である。5 は厚底の底部であるが、底面が大きく踏ん張るものである。6 は底部外面に稲と思しき籾の圧痕がある。

1SK048 出土遺物（Fig.38、Pla.19）

すべて弥生土器の甕である。1 と 2 は口縁部に凸帯を貼り付けるが、刻目は施されない。3 は厚底の底部であるが、蓋のつまみかも知れない。

1SK052 出土遺物（Fig.39、Pla.19）

ともに弥生土器の甕である。1 は如意形の口縁部を持ち、体部に凸帯が 1 条貼り付く。2 は口縁部と体部に凸帯が 1 条ずつ貼り付く。両個体ともに刻目は認められない。

1SK053 出土遺物（Fig.39、Pla.19）

ともに弥生土器である。3 は甕の口縁部で、口縁部と体部に凸帯が 1 条ずつ貼り付く。体部凸帯にのみ刻目が施されている。4 は蓋の口縁部で、端部には面が形成されている。

1SK055 出土遺物（Fig.40、Pla.19）

すべて弥生土器である。1 ～ 8 は甕である。1 は口縁部に凸帯が 1 条貼り付くが、刻目は認められない。2 から 5 は口縁部と体部に 1 条ずつ凸帯が貼り付く類型である。2 と 5 は全ての凸帯に刻目が施されている。4 は口縁部の凸帯のみ刻目が施される。6 は如意形の口縁部を持ち、体部に沈線が 1 条巡るものである。7 と 8 は底部の資料で、いずれも上げ底状を呈しているが、7 は厚底である。9 は壷の体部で、

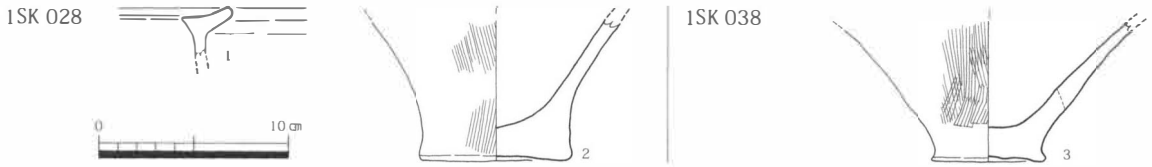


Fig.33　1SK028・1SK038 出土遺物実測図（1/4）

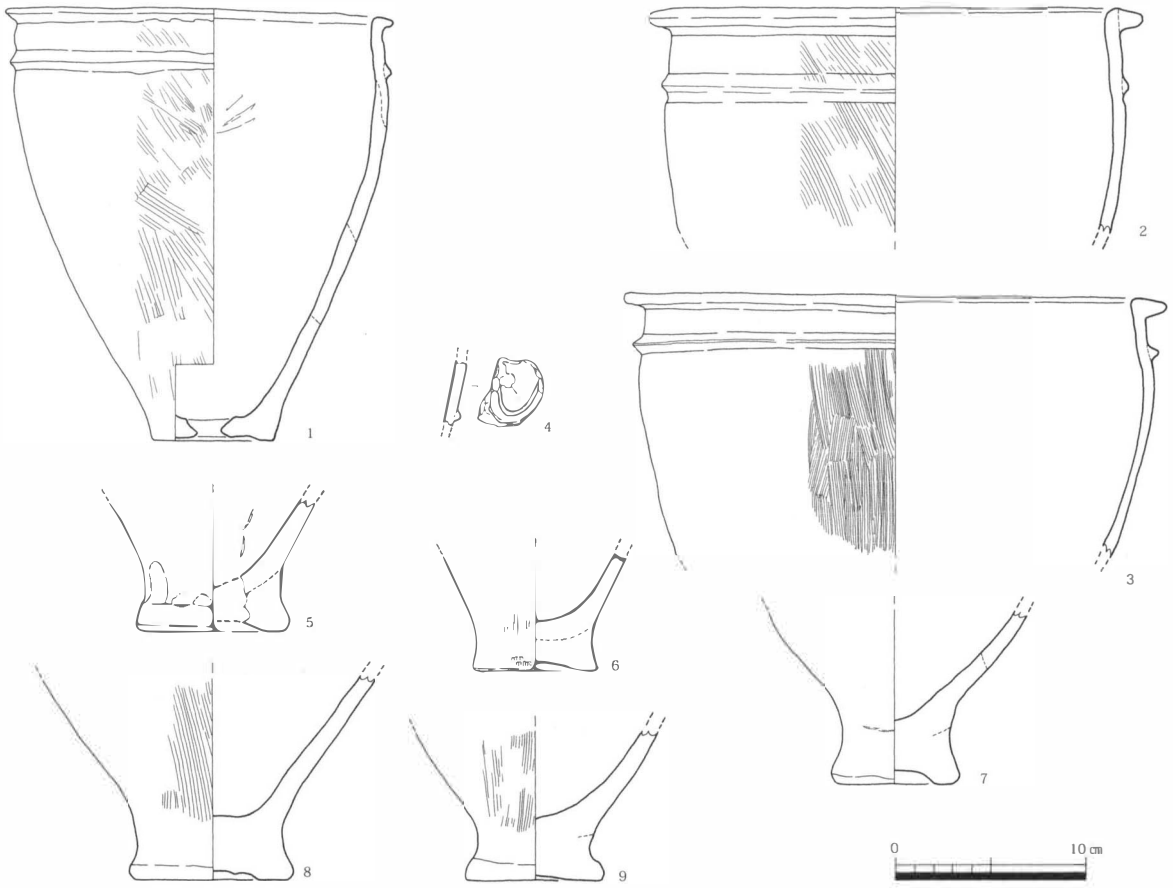


Fig.34　1SK035 出土遺物実測図（1/4）

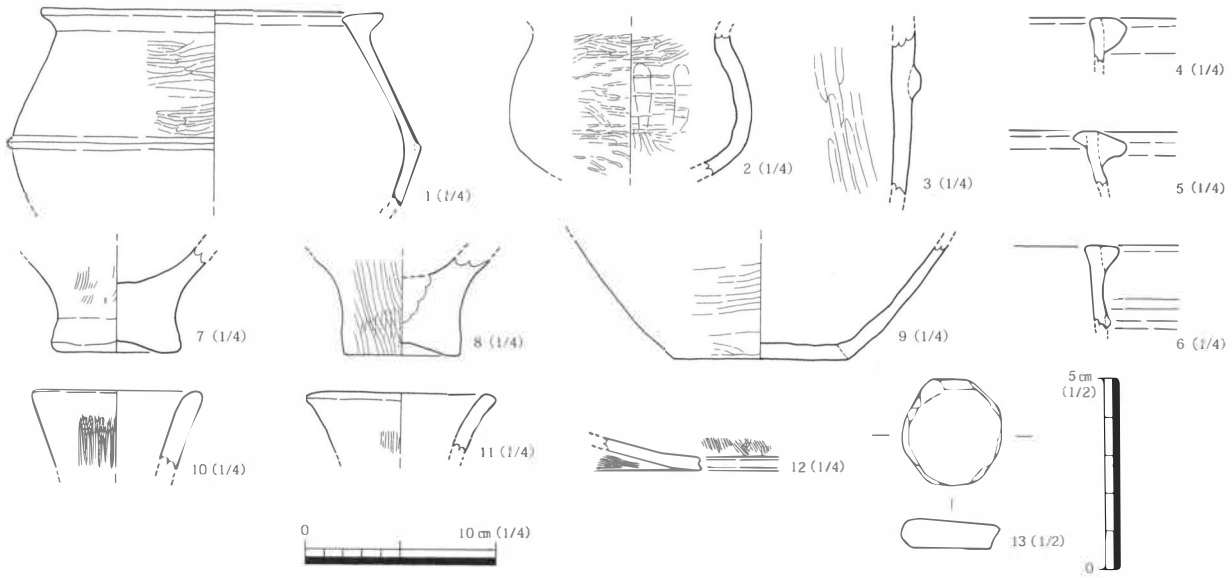


Fig.35　1SK041 出土遺物実測図（1/4・1/2）

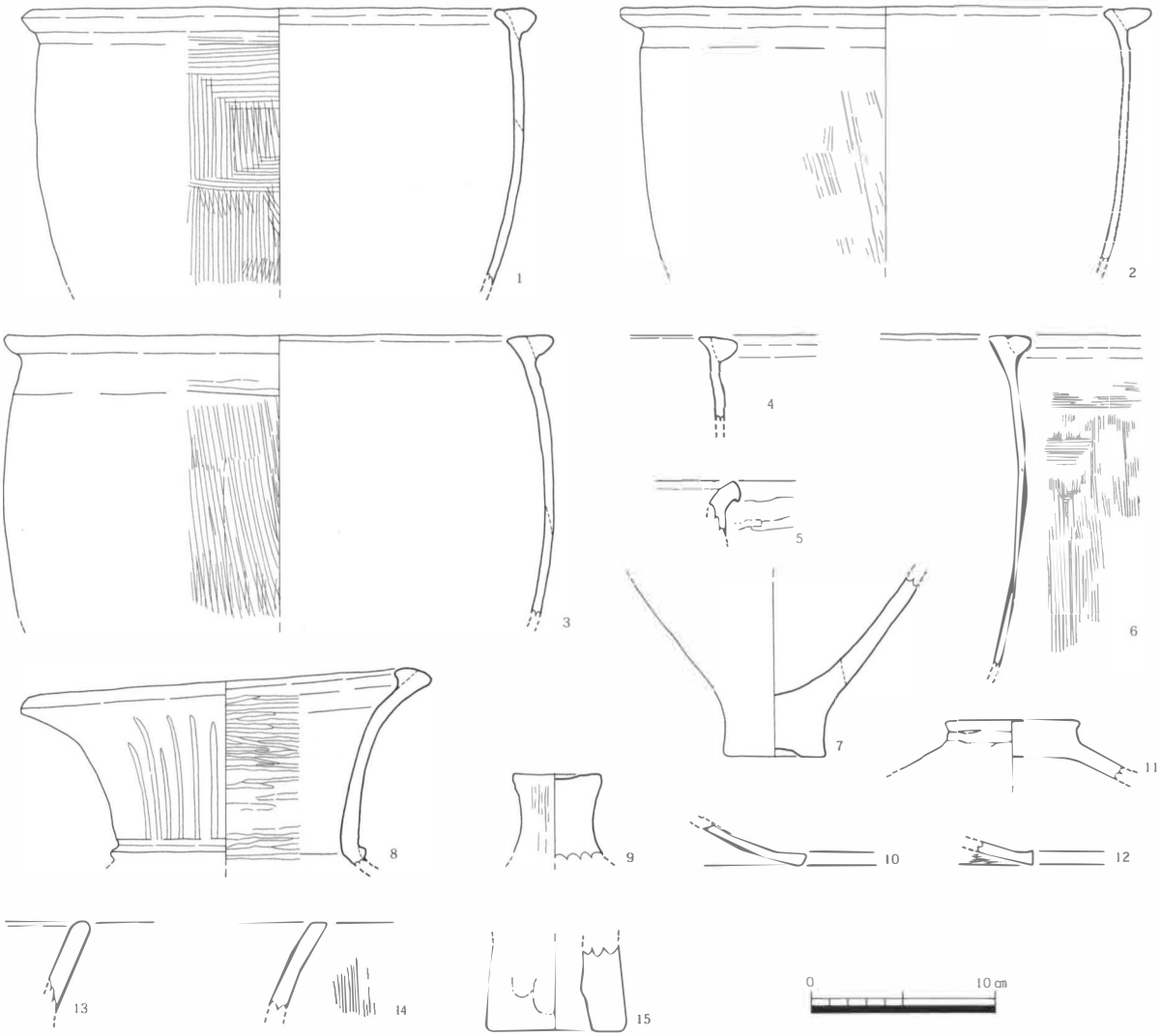


Fig.36　1SK043 出土遺物実測図（1/4）

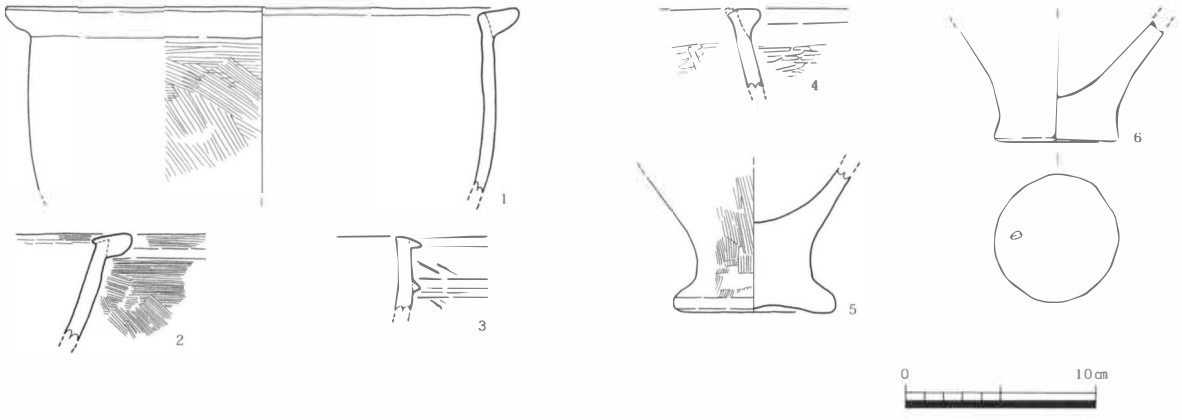


Fig.37　1SK046 出土遺物実測図（1/4）

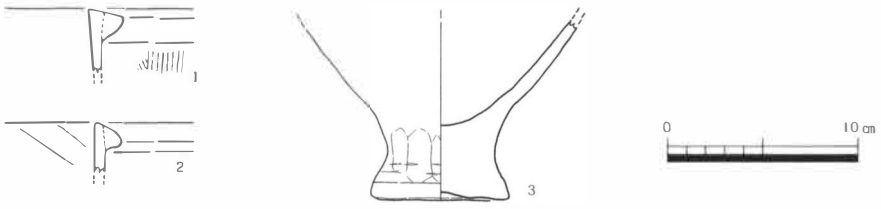


Fig.38　1SK048 出土遺物実測図（1/4）

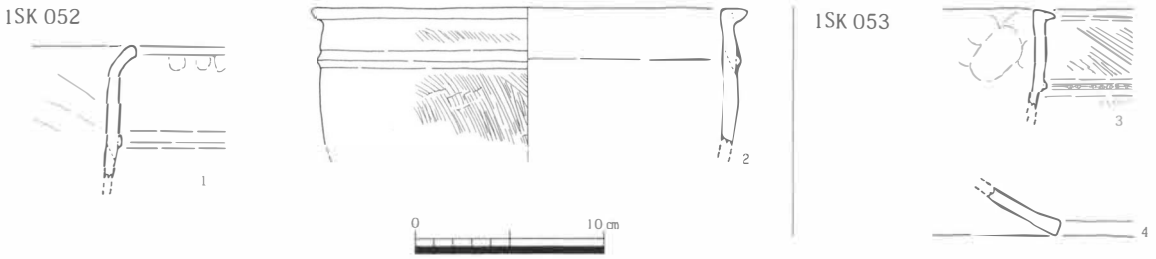


Fig.39　1SK052・1SK053 出土遺物実測図（1/4）

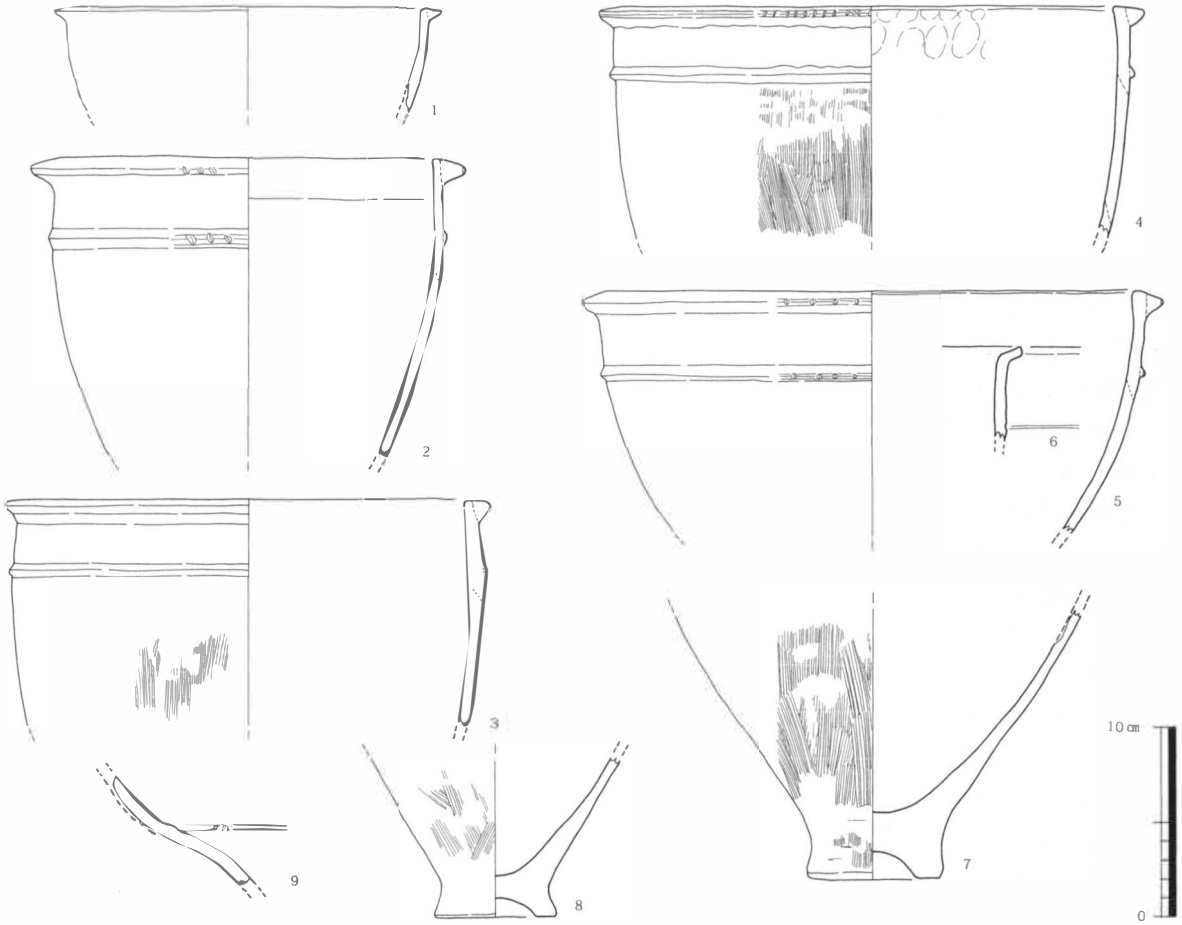


Fig.40　1SK055 出土遺物実測図（1/4）

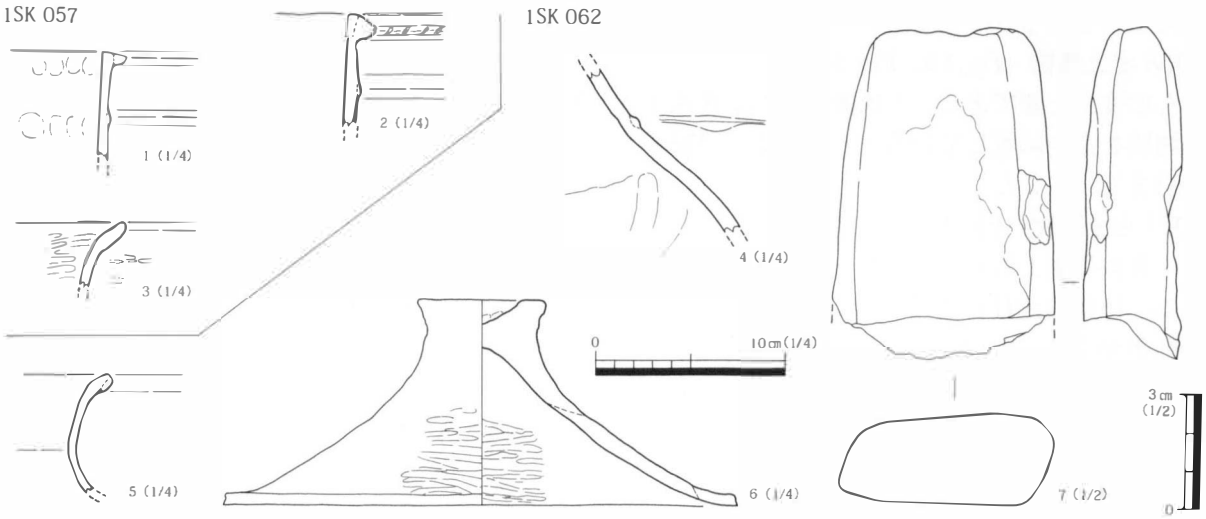


Fig.41　1SK057・1SK062 出土遺物実測図（1/4・1/2）

肩部に凸帯が 1 条巡る。凸帯には不規則な刻目が散在する。

1SK057 出土遺物（Fig.41、Pla.19）

すべて弥生土器である。1 と 2 は甕である。ともに口縁部と体部に 1 条ずつの凸帯を貼り付ける。2 の口縁部凸帯にのみ刻目が認められる。3 は壷の口縁部である。内外面ともに箆磨きを施している。

1SK062 出土遺物（Fig.41、Pla.19）

4 と 5 は弥生土器である。4 は壷の体部で、肩部に凸帯が 1 条貼り付く。5 は蓋で、口縁部には面を形成している。つまみ部は中央を抉っていて、輪状を呈している。

7 は緑泥片岩の石斧である。刃部を欠損し、基部のみである。

1SK063 出土遺物（Fig.42、Pla.19・20）

すべて弥生土器である。1 ～ 4 は甕である。1 ～ 3 は口縁部の資料で、1 と 3 は口縁部と体部に凸帯を 1 条ずつ貼り付ける。2 は口縁部に凸帯を 1 条貼り付けるが、体部は判然としない。いずれの凸帯にも刻目が施されている。4 は底部であるが、厚底ではない。5 は蓋の口縁部で、端部には明瞭な面を形成している。

1SK064 出土遺物（Fig.42）

すべて弥生土器の甕である。6 と 7 は底部の資料である。8 は如意形の口縁部であるが、体部の沈線や口縁部の刻目は認められない。

1SK065 出土遺物（Fig.43、Pla.20）

すべて弥生土器の甕である。1 は口縁部と体部に凸帯を 1 条ずつ貼り付けるが、体部の凸帯の位置が非常に高い。両方の凸帯に刻目が施される。2 は口縁部に 1 条と体部に 2 条の凸帯が貼り付けられている。刻目は口縁部凸帯にのみ施される。3 は小さく外反する口縁部である。4 は底部であるが、外底部に粘土を補足しているのが特徴的である。

1SK066 出土遺物（Fig.43、Pla.20）

5 は弥生土器の壷である。肩部に凸帯が 1 条貼り付くが、刻目は施されない。

1SK067 出土遺物（Fig.44、Pla.20）

すべて弥生土器である。1 ～ 10 は甕である。1 ～ 3 は如意形の口縁をもつものである。いずれも体部に凸帯を 1 条巡らしている。2 は体部凸帯に刻目が施される。3 は口縁部と体部凸帯に刻目が施されるが、体部凸帯の位置が高い。4 は口縁部と体部に 1 条ずつの凸帯が貼り付けられていて、ともに刻目が施される。体部凸帯の位置は高い。5 は鉢に近い器形を持つもので、口縁部に凸帯を 1 条貼り付けるが刻目は認められない。6 は大甕の口縁部と思われ、口縁部の内面に粘土帯を貼り付けて肥厚させている。口縁端部の上下両辺に刻目を施している。7 と 8 は口縁部の資料で、口縁部に凸帯を 1 条貼り付けているが、刻目は認められない。9 と 10 は底部である。9 は僅かに上げ底となり、底部が高台状を呈している。11 と 12 は壷である。11 は外反する口縁部端に明瞭な面を形成し、頸部と体部の境界となる肩部に凸帯を貼り付けている。12 は 11 にくらべて頸部と体部の境界が不明瞭であるが、肩部には同様に凸帯を巡らせている。いずれの壷も、肩部内面の粘土接合に由来する段は完全に失われている。

1SK068 出土遺物（Fig.45、Pla.20）

ともに弥生土器である。1 は壷で頸部に沈線が 3 条巡っている。頸部は弧を描くようになり、前期の壷の制約を完全に脱している。2 は甕で、口縁部に 1 条と体部に 2 条の凸帯を貼り付け、すべての凸帯に刻目を施している。

1SK071 出土遺物（Fig.46、Pla.20・21）

1 ～ 8 は弥生土器である。1 ～ 7 は甕である。1 と 2 は口縁部に断面蒲鉾状の凸帯を貼り付けるものである。体部の沈線も認められない。3 ～ 5 は口縁部に三角凸帯を貼り付けるもので、5 は体部にも 1 条の凸帯が巡る。3 のみ口縁部凸帯に刻目を施している。6 と 7 は底部の資料で、ともに厚底である。6 は平底であるが、7 は上げ底状を呈する。8 は蓋である。

9 はサヌカイト製の鏃で、完形品である。多久産の石材を用いていて、均整のとれた形である。

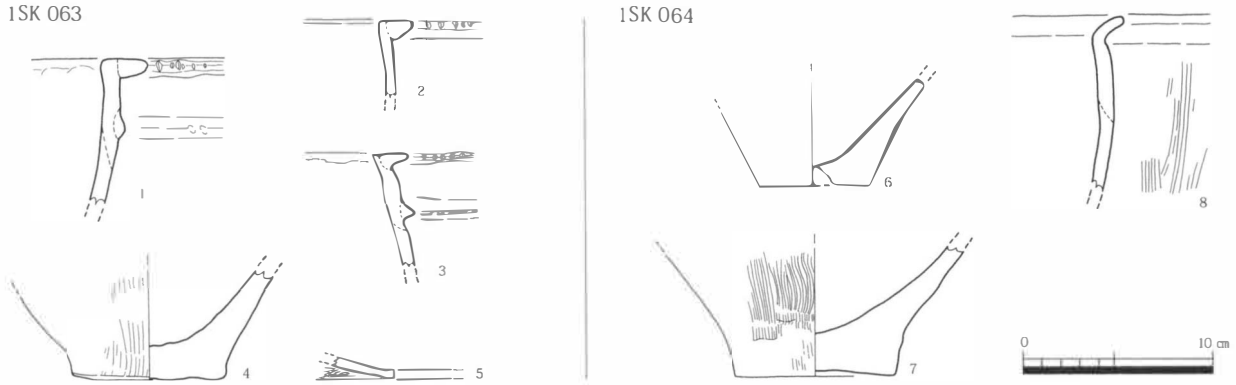


Fig.42　1SK063・1SK064 出土遺物実測図（1/4）

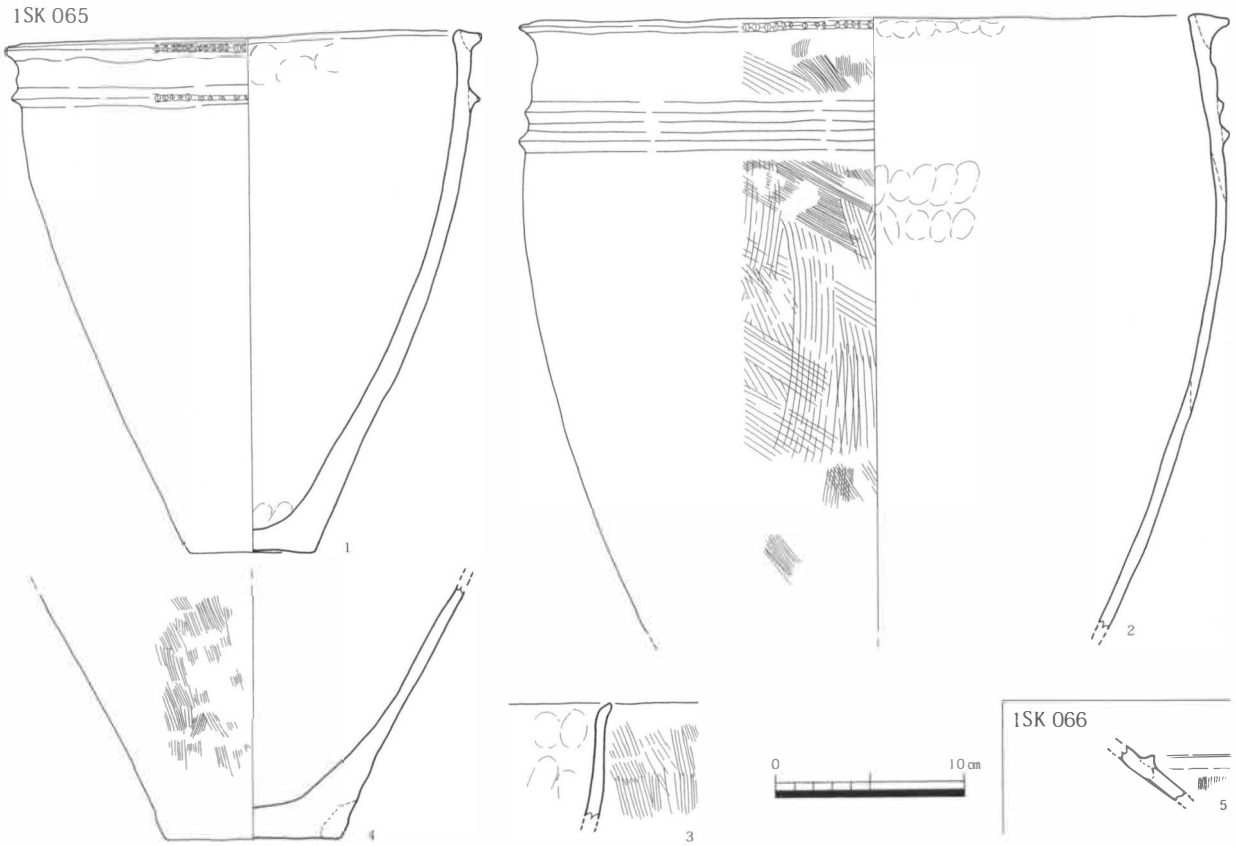


Fig.43　1SK065・1SK066 出土遺物実測図（1/4）

1SK074 出土遺物（Fig.47、Pla.21）

ともに弥生土器である。1 は甕の底部で、厚底気味である。2 は壷の肩部で、凸帯等は認められない。だらりとした印象を受ける。

1SK075 出土遺物（Fig.48、Pla.21）

すべて弥生土器である。1 は大甕で外反する口縁部である。口縁部の内側に凸帯を貼り付けている。口縁端部の上下両辺に刻目を施す。2 から 7 は甕である。2 ～ 4 は口縁部と体部に 1 条ずつの凸帯を巡らす。いずれの凸帯にも刻目が施されている。5 と 6 は口縁部の資料で、口縁部に凸帯が貼り付けられている。凸帯には刻目がある。7 は体部の資料で、体部に凸帯が 1 条巡る。凸帯には刻目がある。8 は壷の体部である。頚部と体部の粘土の接合面付近に凸帯が貼り付けられている。刻目はない。9 は中実

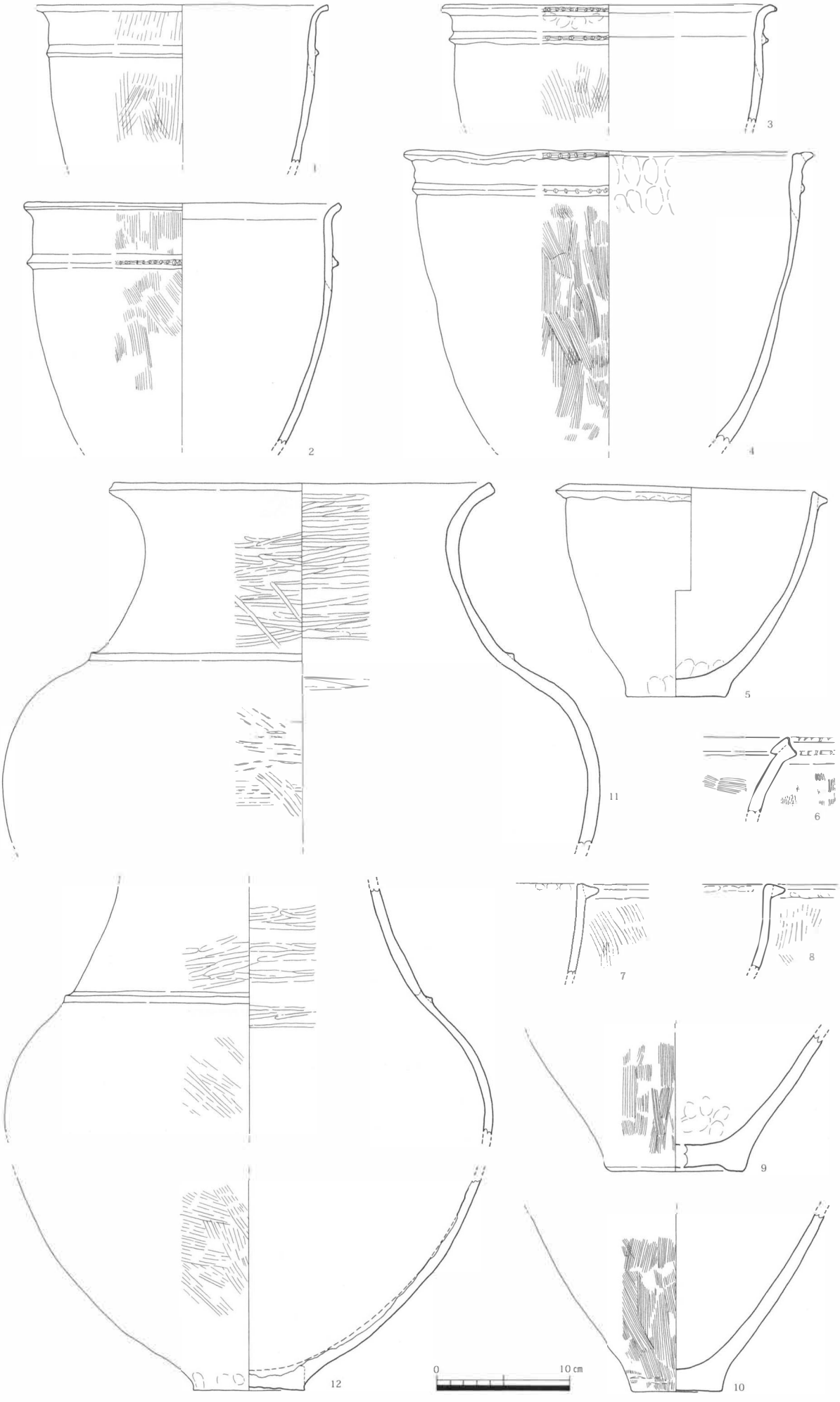


Fig.44　1SK067 出土遺物実測図（1/4）

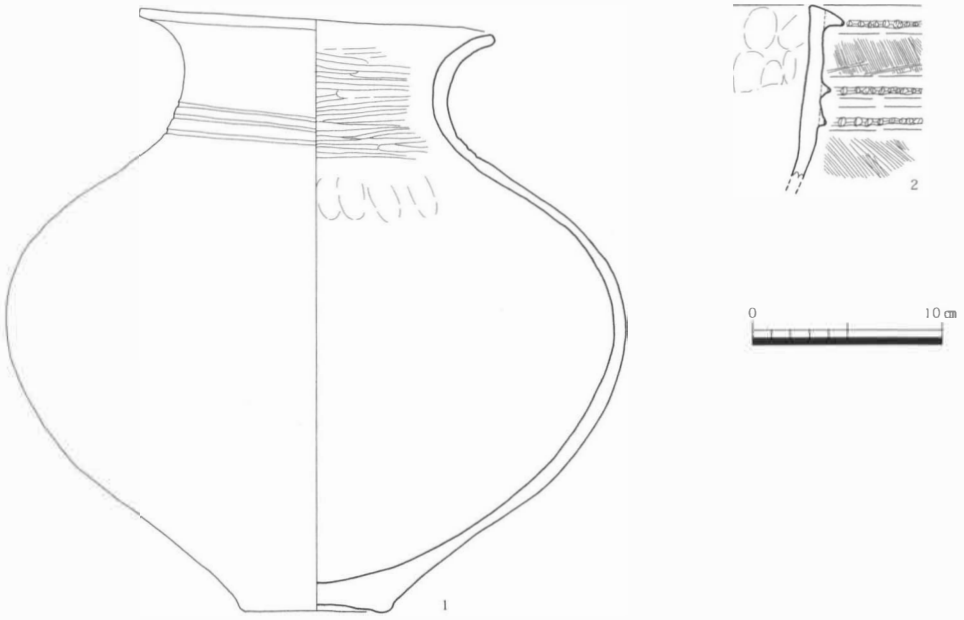


Fig.45　1SK068 出土遺物実測図（1/4）

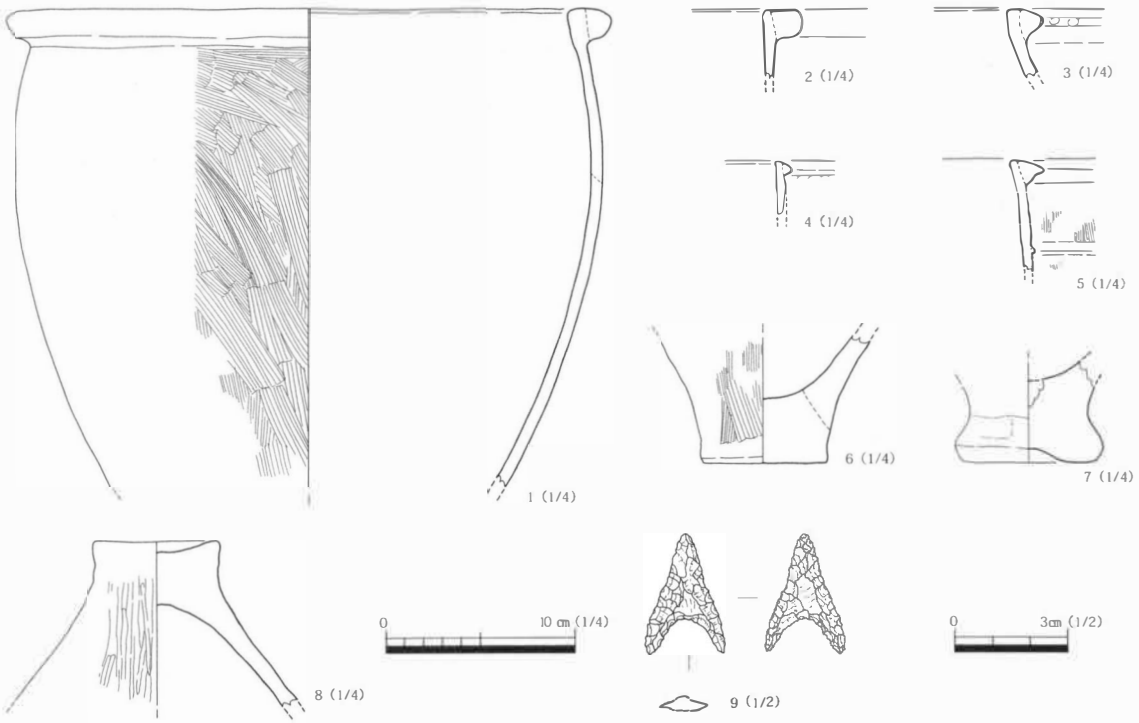


Fig.46　1SK071 出土遺物実測図（1/4・1/2）

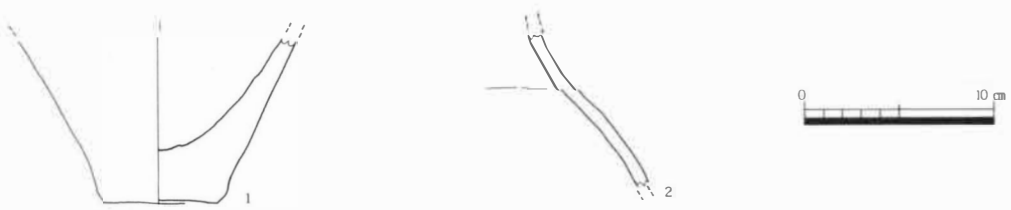


Fig.47　1SK074 出土遺物実測図（1/4）

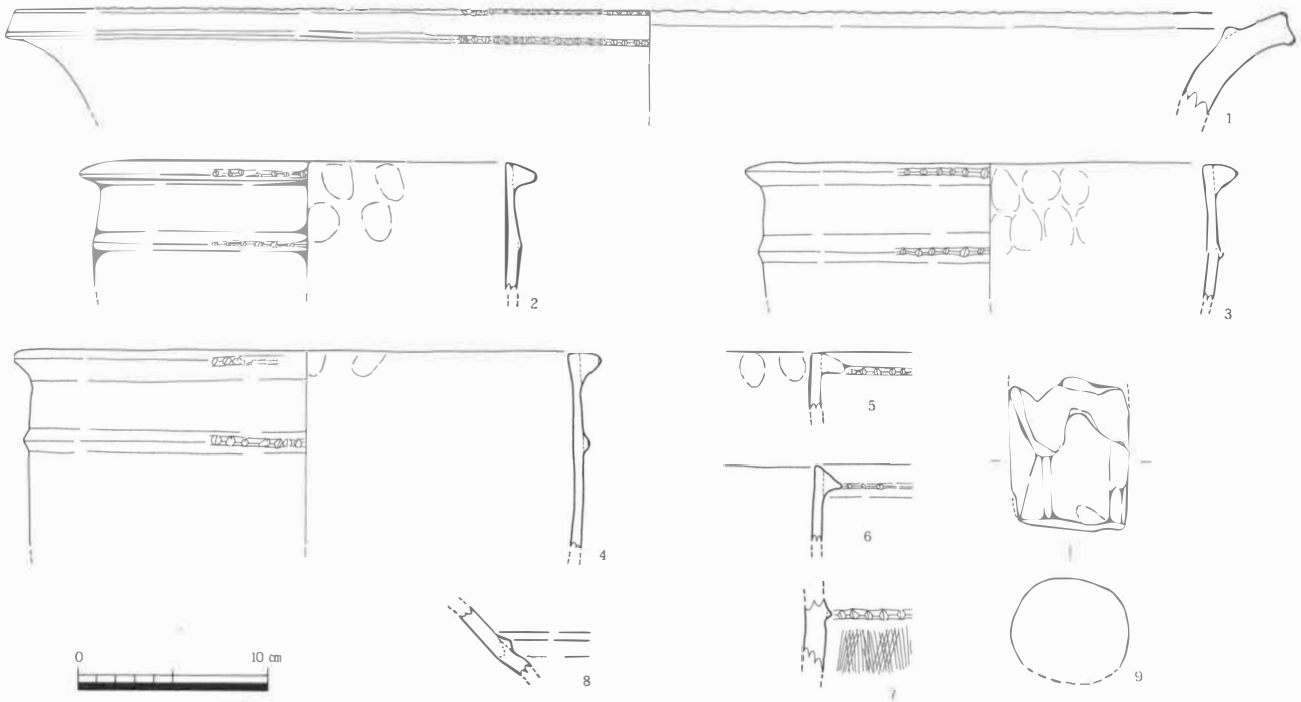


Fig.48　1SK075 出土遺物実測図（1/4）

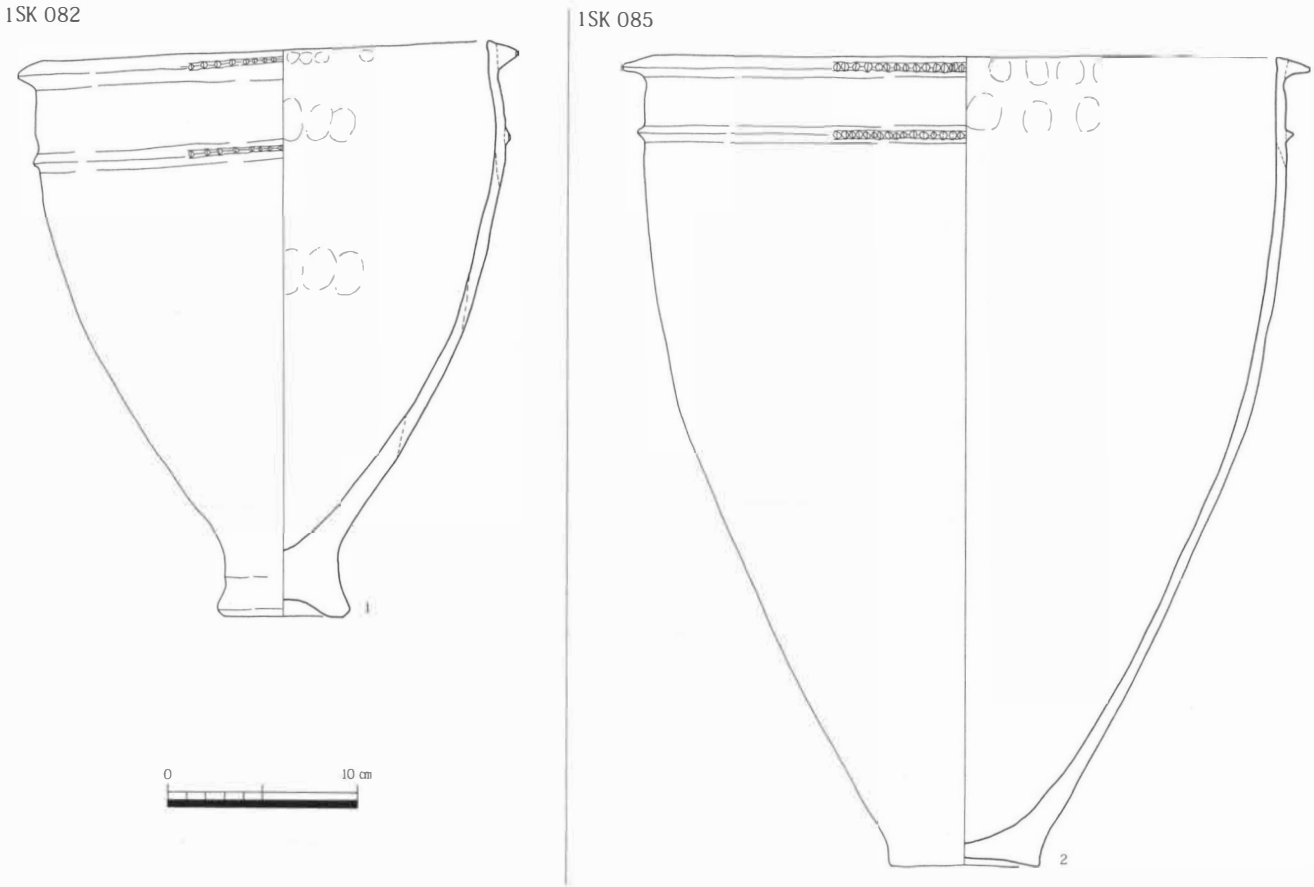


Fig.49　1SK082・1SK085 出土遺物実測図（1/4）

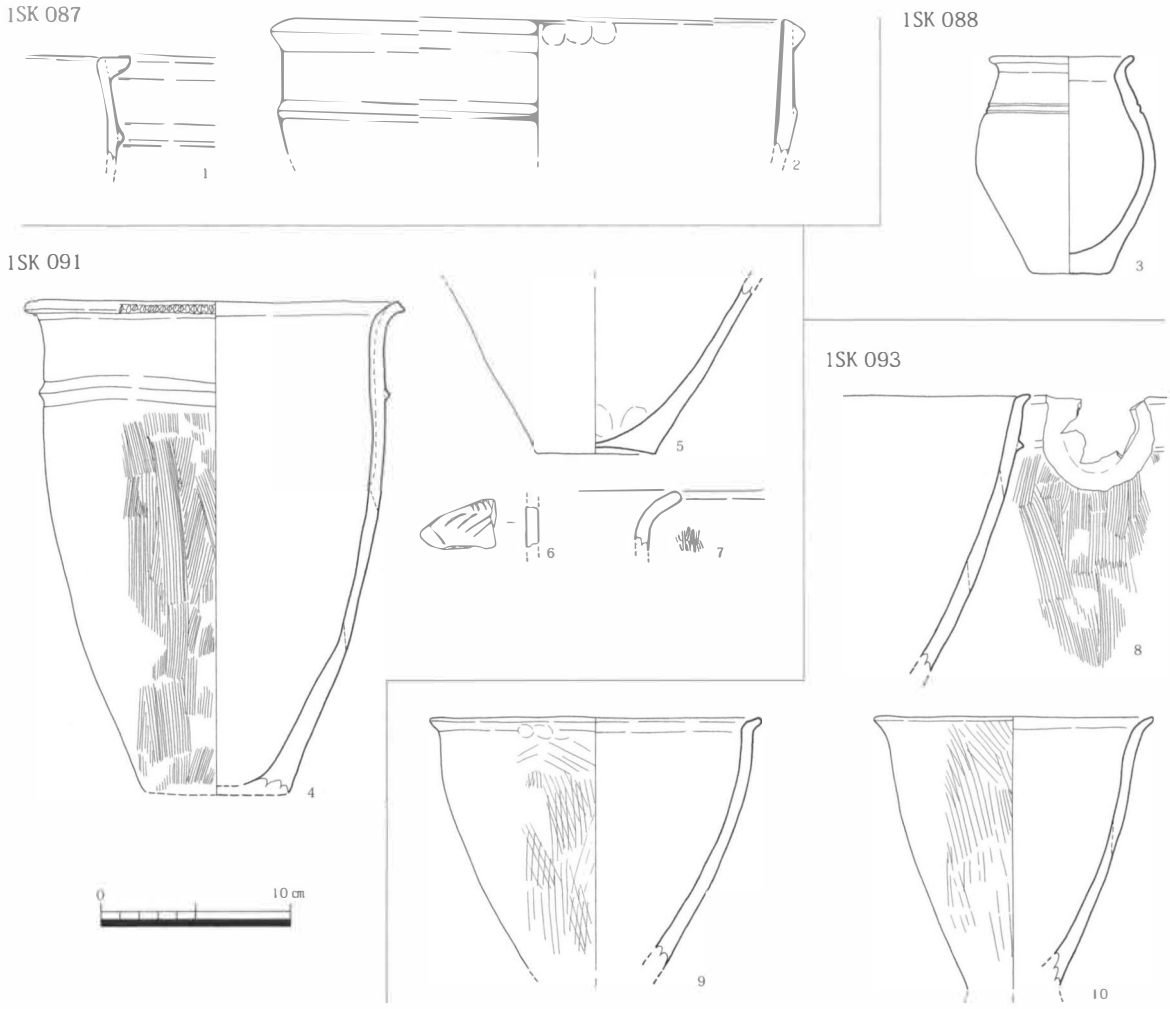


Fig.50　1SK087・1SK088・1SK091・1SK093 出土遺物実測図（1/4）

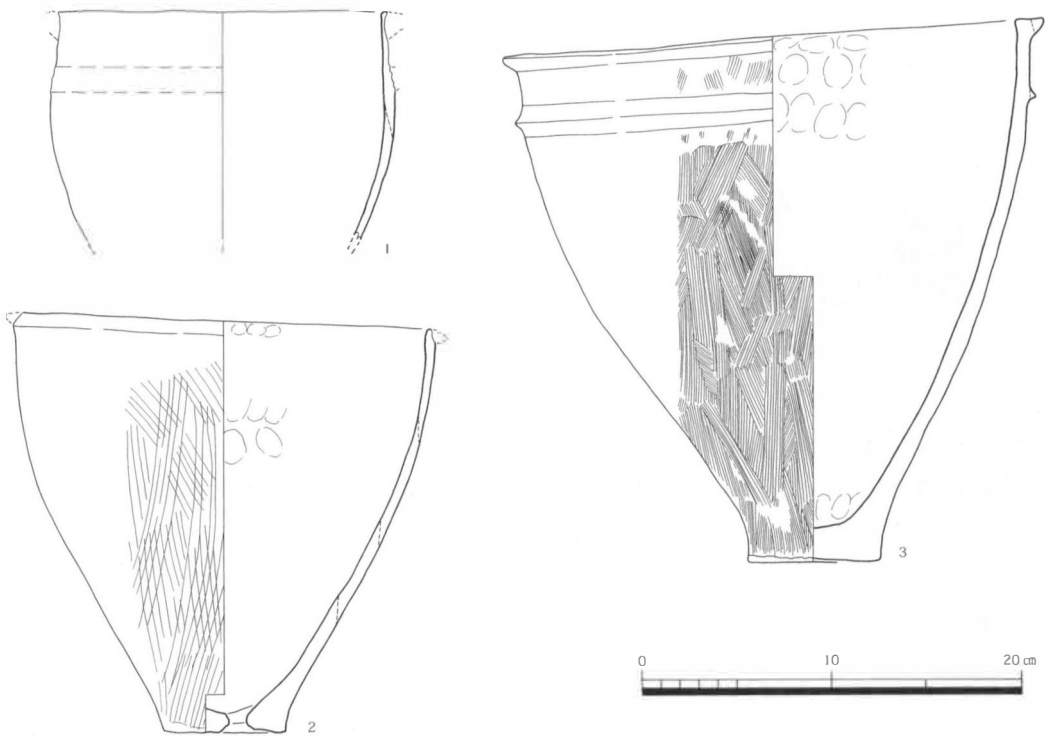


Fig.51　1SK100 出土遺物実測図①（1/4）

Fig.52　1SK100 出土遺物実測図②（1/4）

の支脚である。

1SK082 出土遺物（Fig.49、Pla.21）

1 は弥生土器の甕である。口縁部と体部に凸帯が 1 条ずつ貼りつき、ともに刻目が施されている。底部は厚底で、上げ底状を呈する。

1SK085 出土遺物（Fig.49、Pla.21）

2 は弥生土器の甕である。口縁部と体部に凸帯が 1 条ずつ貼りつき、ともに刻目が施されている。底部は薄い平底である。

1SK087 出土遺物（Fig.50、Pla.21）

ともに弥生土器の甕である。1 は口縁部の資料で、口縁部と体部に 1 条ずつ凸帯が貼り付くが刻目は

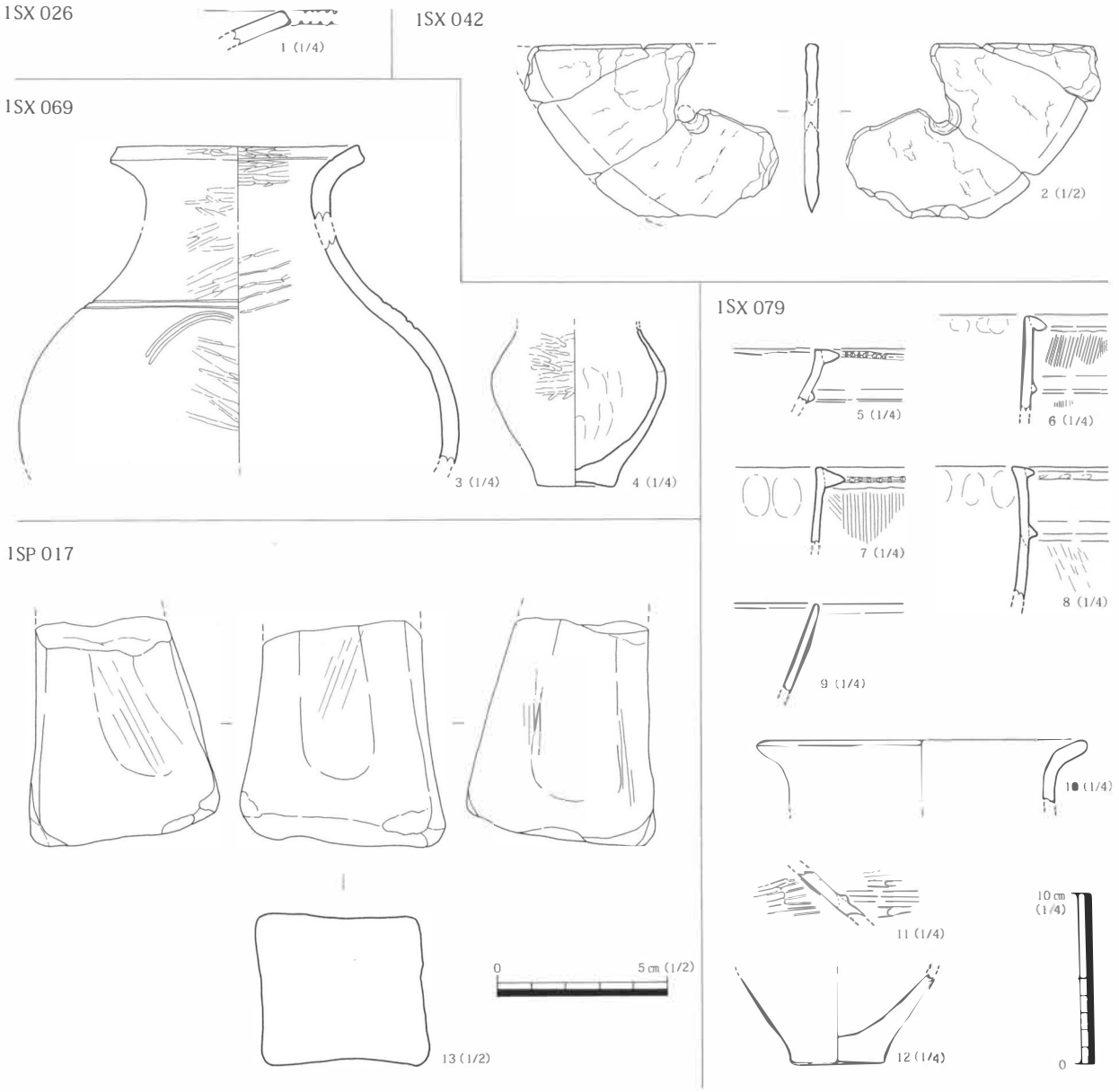


Fig.53　不明遺構及び柱穴出土遺物実測図（1/4・1/2）

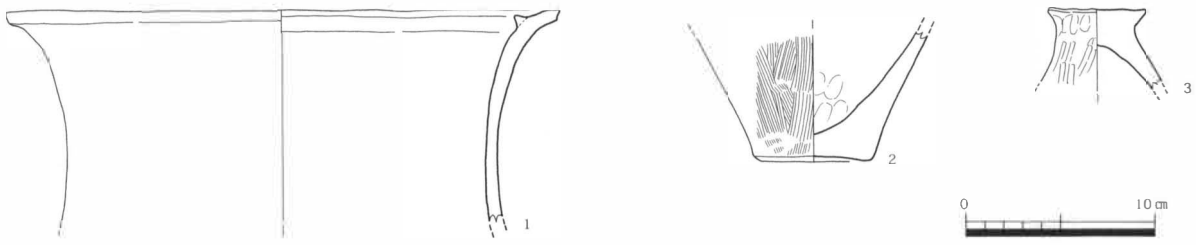


Fig.54　表土出土遺物実測図（1/4）

認められない。2 は 1 と比較して平べったい印象を受ける凸帯が同様に貼り付く。刻目は認められない。

1SK088 出土遺物（Fig.50、Pla.21）

3 は弥生土器の小型壷である。肩部に沈線が 2 条巡るが、頸部と体部の境界は不明瞭である。肩部内面の段も完全に失われ、前期の制約から完全に解放されている。

1SK091 出土遺物（Fig.50、Pla.21）

すべて弥生土器である。4 と 5 は甕である。4 は如意形の口縁部を持ち体部に凸帯を 1 条巡らせるも

Fig	No	遺構 番号	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	口縁部	体外部	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	口縁部凸帯	体部凸帯	備考	R-No
14	1	1SI 005		弥生	壺	26.0			口縁部 1/5	不明	不明	ナデ			淡黄茶色	やや粗	1～3㎜大の砂粒多	不良	凸帯貼付	1条	1条		6
14	2	1SI 005		弥生	甕	27.0			口縁部 1/7	横ナデ	刷毛	ナデ			暗褐色	やや密	1㎜大の砂粒	やや良	凸帯貼付	1条	1条		7
14	3	1SI 005		弥生	甕				口縁部 細片	不明	不明	不明			淡茶色	やや密	1～2㎜大の砂粒やや少	不良	凸帯貼付	1条 刻目有	1条 刻目有		5
14	4	1SI 005		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			暗茶褐色	密	1㎜大の砂粒・金雲母	やや良	凸帯貼付	1条 刻目有	1条 刻目有		8
14	5	1SI 005		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外 暗褐色 内 茶褐色	やや密	細砂粒	やや良	如意形 刻目有				7
14	6	1SI 005		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ		ナデ			淡茶褐色	やや密	1～2㎜大の砂粒	やや良	凸帯貼付	1条			6
14	7	1SI 005		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			淡茶褐色	密	1～2㎜大の砂粒	やや良	如意形 刻目有		1条		4
14	8	1SI 005		弥生	壺		8.2		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	暗茶褐色	やや密	1～3㎜大の砂粒多	やや良				底部に内外面から焼成後穿孔有	10
14	9	1SI 005		弥生	壺		5.4		底部 完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	暗茶褐色	やや粗	1～4㎜大の砂粒多	やや良					2
14	10	1SI 005		弥生	壺		10.6		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	明褐色	密	1～3㎜大の砂粒やや多	やや良					1
15	1	1SI 010		須恵	蓋	14.8		4.6	口縁部 1/3 欠損	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転箆削	外 黒灰色 内 黒灰色	密	1～2㎜大の砂粒少	良	内面に段有			口部外面に明瞭な段有	26
15	2	1SI 010		土師	甕	12.0	6.6	14.4	1/3	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	赤褐色	密	砂粒なし	やや良	外反			黒斑有	16
15	3	1SI 010		土師	甕	13.6	8.3	14.0	1/2	ナデ	ナデ	ナデ			淡赤茶色	密	砂粒少	やや良	外反			図上で接合	25
15	4	1SI 010		土師	甕	13.0		13.8	2/3	横ナデ	刷毛	箆削り	箆削り	刷毛	赤茶色	やや粗	1～3㎜大の砂粒やや多	やや良	外反				17
15	5	1SI 010		土師	甕	11.7			口縁部 完存	横ナデ	刷毛 横ナデ	箆削り			淡茶褐色	粗	砂粒少	やや良	外反				18
15	6	1SI 010		土師	甕		4.0		下半部 完存		ナデ	箆削り	箆削り	ナデ	暗褐色	粗	1～2㎜大の砂粒やや多	やや良					19
15	7	1SI 010		土師	甕				底部 完存		刷毛	箆削り	箆削り	刷毛	暗茶褐色	やや密	1～3㎜大の砂粒少	良					22
15	8	1SI 010		土師	甕				体部 1/3		刷毛	箆削り	箆削り	ナデ	淡赤茶色	密	砂粒なし	良				黒斑有	20
15	9	1SI 010		土師	不明		13.0		底部 1/2		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	淡赤茶色	密	1～2㎜大の砂粒少	やや良					33
15	10	1SI 010		土師	甕	20.0			口縁部 1/3		不明	不明	不明	不明	黄茶色	粗	1～5㎜大の砂粒少	不良	外反				23
15	11	1SI 010		土師	甕	19.6			口縁部 2/3	横ナデ	刷毛	箆削り			淡赤茶色	やや密	1～2㎜大の砂粒少	良	外反				24
16	12	1SI 010		土師	甑		18.6		下半部 1/3		刷毛	箆削り	箆削り	刷毛	赤茶色	やや密	1～2㎜大の砂粒	やや良					25
16	13	1SI 010		土師	坏	11.3		6.3	ほぼ完形	横ナデ	手持ち箆削り	箆磨き	箆磨き	手持ち箆削り	暗茶褐色	精良		良	内湾				15
16	14	1SI 010		土師	ミニ椀	2.8		2.3	完形	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黄茶色	密	微細砂粒少	やや良	内湾			手づくねのミニチュア土器	2
16	15	1SI 010		土師	ミニ椀	3.0		1.9	完形	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	茶褐色	密	微細砂粒少	やや良	内湾			手づくねのミニチュア土器	1
16	16	1SI 010		土師	ミニ椀	3.1		2.7	完形	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	暗褐色	密	砂粒なし	やや良	内湾			手づくねのミニチュア土器	9
16	17	1SI 010		土師	ミニ椀	4.3		2.7	完形	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	淡赤茶色	密	細砂粒小	やや良	外反			手づくねのミニチュア土器	6
16	18	1SI 010		土師	ミニ椀	4.0		2.4	完形	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	暗茶褐色	密	微細砂粒少	良	内湾			手づくねのミニチュア土器	3
16	19	1SI 010		土師	ミニ椀	4.4		2.9	2/3	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	暗茶褐色	密	砂粒なし・赤色粒子	やや良	内湾			手づくねのミニチュア土器	10
16	20	1SI 010		土師	ミニ椀	4.8		3.2	ほぼ完形	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	淡茶褐色	密	細砂粒少	やや良	内湾			手づくねのミニチュア土器	8
16	21	1SI 010		土師	ミニ椀	4.7		2.9	3/4	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	淡灰茶色	密	砂粒なし	やや良	直立			手づくねのミニチュア土器	9
16	22	1SI 010		土師	ミニ椀	4.4		2.9	完形	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	淡灰茶色	密	砂粒なし	やや良	内湾			手づくねのミニチュア土器	4
16	23	1SI 010		土師	ミニ椀	5.1		3.0	完形	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黄茶色	密	砂粒なし	やや良	外反			手づくねのミニチュア土器	1
16	24	1SI 010		土師	椀	6.6	4.3	6.0	ほぼ完形	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黄茶色	密	微細砂粒少	やや良	外反				13
16	25	1SI 010		土師	椀	8.8	4.8	6.4	1/4	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	淡灰茶色	密	砂粒なし	やや良	外反			図上で接合	14
16	26	1SI 010		土師	ミニ椀	8.8		5.8	3/4	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	明黄茶色	密	砂粒なし・赤色粒子	やや良	外反			手づくねのミニチュア土器	12
16	27	1SI 010		土師	不明				不明 片		ナデ	ナデ			明茶色	密	砂粒なし・赤色粒子少	やや良					11
16	29	1SI 010	■	須恵	坏	11.2	8.8	4.5	完形	横ナデ	横ナデ 回転箆削	横ナデ	ナデ	回転箆削	乳灰色	密	2㎜大の砂粒少	やや不良	内面に段有			最大径13.2cm 底面に箆記号有	2
16	30	1SI 010	■	土師	坏				口縁部 細片	横ナデ	手持ち箆削り	ナデ			暗褐色	密	細砂粒・雲母	やや良	内湾				1
17	1	1SI 020		弥生	壺	11.6	5.6	15.8	2/3	箆磨き	箆磨き	箆磨き	箆磨き	箆磨き	暗褐色	やや粗	1～2㎜大の砂粒多・雲母	良					1
17	2	1SI 020		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					暗茶褐色	密	砂粒なし	やや良	凸帯貼付	1条		上面と外面に化粧土	2
17	4	1SI 020		須恵	蓋				天井部 1/4		横ナデ 回転箆削	横ナデ	横ナデ	回転箆削	淡青灰色	密	2㎜大の砂粒少	良					3
17	5	1SI 020		土師	坏	12.0		4.0	口縁部 1/4	横ナデ	横ナデ 手持箆削	横ナデ ナデ	ナデ	手持ち箆削り	暗茶褐色	密	砂粒なし	やや良	内湾				6
17	6	1SI 020		土師	坏	10.8		5.5	口縁部 1/2 欠損	横ナデ	横ナデ 手持箆削	箆磨き	箆磨き	手持ち箆削り	外 明赤茶色 内 黒色	密	赤色粒子多	良					7
17	7	1SI 020		土師	甕				頸部 細片		横ナデ 刷毛	横ナデ 箆削り			明赤茶色	やや密	1～3㎜大の砂粒多	やや不良					8
17	8	1SI 020		土師	ミニ椀	3.6		2.1	完形	指押さえ	指押さえ	指押さえ	指押さえ	指押さえ	黄茶色	密	砂粒なし	やや良	内湾			手づくねのミニチュア土器	4
17	9	1SI 020		土師	ミニ鉢	7.4	5.0	4.4	1/2	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	淡茶褐色	密	細砂粒少	やや良	外方に開く			手づくねのミニチュア土器	5
17	10	1SI 020	■	土師	甑	28.0	8.8	24.7	1/4	横ナデ	刷毛	箆削り	横ナデ	横ナデ	赤茶色	密	砂粒なし	良	外反				1
18	1	1SI 030		土師	甕				上半部 細片	横ナデ	刷毛 不明	不明	ナデ	不明	外 淡橙色 内 明黄色	やや密	1～3㎜大の砂粒・雲母	やや不良	外反				2
18	2	1SI 030		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ		ナデ			黄茶色	粗	1～3mm大の砂粒・雲母・角閃石		凸帯貼付	1条			5
18	3	1SI 030		土師	坏	12.1		3.4	1/3	ナデ 横ナデ	手持ち箆削り	箆磨き	箆磨き	手持ち箆削り	外 淡橙色 内 赤茶褐色	密	雲母多		内湾				7
18	4	1SI 030		土師	坏				底部 完存		手持ち箆削り	ナデ	ナデ	手持ち箆削り	外 明黄色 内 淡灰色	密	雲母・赤色粒子		内湾				8
18	5	1SI 030		土師	椀		3.6		底部 完存		ナデ	箆磨き	箆磨き	ナデ	外 淡黄茶色 内 暗赤褐色	やや密	1～3mm大の砂粒・雲母						4
18	6	1SI 030		土師	椀	5.5	7.2	6.9	1/3	横ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 明橙色 内 明黄色	やや密	雲母・角閃石多	やや良	直立				1
18	7	1SI 030		土師	高坏？ 鉢？				口縁部 細片	横ナデ	箆磨き	箆磨き			暗橙色	密	雲母	良好	僅かに 外反				3
18	11	1SI 030	■	土師	甕	18.9		11.0	口縁部 1/4 欠損	横ナデ 刷毛	刷毛	箆削り	刷毛	箆削り	明橙色	粗	1～4mm大の砂粒・雲母	良好	外反				1
16	12	1SI 030	■	土師	支脚				体部 3/4		不明				淡灰茶色	粗	1～4mm大の砂粒	不良					3
19	1	1SI 040		土師	坏	10.1		4.1	ほぼ完形	横ナデ	箆磨き	ナデ	ナデ	不明	明橙色	やや密	1㎜大の砂粒・雲母	やや良	内湾				2
19	2	1SI 040		土師	甕	13.7		13.7	ほぼ完形	横ナデ	刷毛	箆削り	箆削り	刷毛	外 明橙色 内 明黄茶色	やや密	1～3㎜大の砂粒多・雲母・角閃石	やや良	外反				1
19	3	1SI 040		土師	甕	17.3			底部 欠損	横ナデ	刷毛	箆削り			明橙色	やや密	1～2㎜大の砂粒多・角閃石・雲母	良好	外反				4
19	4	1SI 040		土師	椀	3.9		2.7	完形	ナデ	指押さえ	ナデ	ナデ	指押さえ	明黄赤褐色	やや密	微砂粒多・雲母多	良好	外方に 開く				3
19	5	1SI 040	■	土師	甑	28.0	9.8	22.0	2/3	横ナデ	刷毛	ナデ	横ナデ	ナデ	明黄茶色	やや密	1～2㎜大の長石粒多・角閃石多	やや良	外反			底部に煤付着	1

Tab.1　出土遺物観察表（土器）

Fig.	No	遺構 番号	層位	種別	時期	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	口縁部	体部形	体内面	体成面	外成面	色調	焼成	含有粒子	焼成	口縁部形状	口縁部凸帯	体部凸帯	備考	登録No.
19	7	1SI 040	覆	土師	古墳				体部 1/3		ナデ	不明			明黄褐色	軟	長石多・角閃石多	不良					2
20	1	[illegible]		土師	古墳	21.0			口縁部 1/6	横ナデ	横ナデ	指頭圧			外 明赤茶色 内 明赤茶色	やや軟	1 mm大の砂粒多	良	外反				3
20	2	1SI 050		土師	古墳	25.8			口縁部 1/6	横ナデ	横ナデ	指頭圧			赤褐色	やや軟	1 mm大の砂粒・赤色粒子	やや不良	外反			口縁端部に歯有	4
20	3	[illegible]		土師	古墳				口縁部 破片	横ナデ	横ナデ	指頭圧			外 黒褐色 内 黄褐色	やや軟	1 mm大の砂粒	良	小さく外反				5
20	4	1SI 050		土師	古墳				口縁部 破片	横ナデ					外 黄褐色 内 黒褐色	やや軟	1 mm大の砂粒	良	小さく外反				6
20	5	1SI 050		土師	把手				把手のみ		横ナデ	横ナデ			外 明茶褐色 内 暗茶褐色	軟	2 mm大の砂粒・赤色粒子	やや不良					7
20	6	1SI 060	b	弥生	後期				口縁部 破片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			外 暗黒褐色 内 淡赤茶色	やや軟	2 mm大の砂粒・赤色粒子	良	凸帯貼付	1 条	1 条		8
20	7	1SI 050	cp	弥生	後期				口縁部 破片	横ナデ	ナデ	横ナデ			外 暗茶褐色 内 淡茶褐色	軟	2 mm大の砂粒	良	外反				9
21	1	1SI 060	a	弥生	後期				口縁部 破片	横ナデ	横ナデ	ナデ			外 褐茶色 内 淡黄茶色	軟	2 mm大の砂粒・赤色粒子	良	強く外反		1 条		10
21	2	1SI 060	b	弥生	後期				口縁部 破片	横ナデ	横ナデ	指頭圧			外 暗赤茶色 内 暗褐茶色	やや軟	3～4 mm大の砂粒少・赤色粒子	良	外反				11
22	1	1SI 070		土師	古墳	9.4			1/2	横ナデ	横ナデ	指頭圧			外 明褐色 内 明黄褐色	軟	1～2 mm大の砂粒・赤色粒子	やや良	外反				12
22	2	[illegible]		土師	甕	13.6	8.0	3.8	1/3	横ナデ	手持ち篦削り	ナデ	ナデ	手持ち篦削り	外 明褐色 内 暗赤茶褐色	軟良	1 mm大の砂粒・白色・角閃石	やや良	内湾				13
23	1	1SB 025	a	土師	竪穴	12.0			口縁部 1/6	不明	篦削り	横ナデ			基地 赤茶色 器斜 暗赤色	軟	砂粒なし	やや良	内湾			外面丹塗り	1
23	2	1SB 025	a	土師	竪穴				底部 破片		横ナデ 刷毛	横ナデ 篦削り			淡赤茶色	やや軟	3mm大の砂粒少・赤色粒子	やや良					2
24	1	1SD 011		弥生	後期	28.8			口縁部 1/6	横ナデ	横ナデ	ナデ			黄茶褐色	やや軟	1～3 mm大の砂粒多	やや不良	凸帯貼付	1 条	1 条 刻目有	口縁部下位に焼成後穿孔 1 箇所有	1
24	2	1SD 011		弥生	後期	31.0			口縁部 1/10	横ナデ	ナデ	ナデ			淡茶褐色	やや軟	1～2 mm大の砂粒少	やや不良	凸帯貼付	1 条	1 条		2
24	3	1SD 011		弥生	後期	20.0			口縁部 1/6	横ナデ	刷毛	ナデ			暗褐色	軟	1 mm大の砂粒少	やや良	如意形		沈線 1 条		3
24	4	1SD 011		弥生	後期				口縁部 破片	横ナデ	刷毛	ナデ			淡茶褐色	やや軟	1～2 mm大の砂粒少	やや不良	凸帯貼付	1 条	1 条		4
24	5	1SD 011		弥生	鉢				口縁部 破片	ナデ	刷毛	ナデ			淡灰茶色	軟	1～2 mm大の砂粒少	やや良	僅かに内湾				5
24	6	1SD 011		弥生	底				口縁部 破片	横ナデ	刷毛 ナデ	ナデ			黄褐色	軟	1～2 mm大の砂粒	良	開く				6
24	7	1SD 011		土師	甕				体部 破片		刷毛	篦削り			淡赤茶色	やや軟	1～2 mm大の砂粒少	良	外反？				14
24	8	1SD 011		弥生	甕	15.2			口縁部 1/8	不明	不明	不明			淡茶色	やや軟	1～3 mm大の砂粒少	不良	外反				8
24	9	1SD 011		弥生	甕				体部 破片		篦磨き	ナデ			暗褐色	やや軟	1～2 mm大の砂粒少	良					9
24	11	1SD 023		弥生	甕				口縁部 破片	横ナデ 刷毛	刷毛	ナデ			外 淡黄灰色 内 淡黄茶色	やや軟	1～3 mm大の砂粒多	やや良	如意形				11
24	12	1SD 023		弥生	甕				口縁部 破片	横ナデ	不明	ナデ			淡黄茶色	軟	1 mm大の砂粒・角閃石	やや不良	凸帯貼付	1 条 刻目有	1 条		12
24	13	1SD 023		弥生	甕				口縁部 破片	横ナデ	横ナデ	ナデ			外 茶褐色 内 明黄茶色	軟	1～2 mm大の砂粒多	やや良	凸帯貼付	1 条 刻目有			13
24	14	1SD 023		弥生	甕				口縁部 破片	横ナデ	横ナデ	ナデ			外 暗茶褐色 内 明黄茶色	軟	角閃石・雲母	やや良	凸帯貼付	1 条 刻目有			14
24	15	1SD 045		弥生	甕				口縁部 破片	横ナデ	刷毛	刷毛			茶褐色	軟	1～2 mm大の砂粒多	やや良	外反				15
24	16	1SD 045		弥生	甕		8.8		下半部 1/2		不明	不明	指押さえ	不明	外 淡赤茶色 内 淡赤白色	軟	1～3 mm大の砂粒多・金雲母	不良					16
25	1	1SK 006		土師	甕	24.0			口縁部 1/8	横ナデ	磨毛	磨耗			明赤茶色	やや軟	1 mm大の砂粒少	やや良	外反				17
25	2	1SK 006		土師	甕	23.0			口縁部 1/8	横ナデ	磨毛	磨耗			明赤茶色	やや軟	砂粒少	やや良	外反			把手の有無は不明	18
26	1	1SK 008		弥生	後期	26.0			口縁部 1/3	横ナデ	刷毛	ナデ			暗茶褐色	やや軟	1 mm大の砂粒少	やや良	凸帯貼付	1 条	沈線 1 条	口縁部凸帯下面に開く刻目有	19
26	2	1SK 008		弥生	後期	24.8			4/5	横ナデ	刷毛	ナデ			暗茶色	軟	1～3 mm大の砂粒多	良	凸帯貼付	1 条	沈線 1 条	黒斑有	1
26	3	1SK 008		弥生	後期	27.0			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			暗茶褐色	軟	1～2 mm大の砂粒やや多	良	凸帯貼付	1 条	沈線 1 条	口縁部凸帯は断面台形	2
26	4	1SK 008		弥生	後期	28.0			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			暗褐色	軟	1～2 mm大の砂粒多	良	凸帯貼付	1 条	沈線 1 条		3
26	5	1SK 008		弥生	後期	29.0			口縁部 1/3	横ナデ	刷毛	刷毛 ナデ			赤茶色	やや軟	1～2 mm大の砂粒・角閃石	やや良	凸帯貼付	1 条	沈線 1 条	黒斑有	4
26	6	1SK 008		弥生	後期	28.0			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			暗茶褐色	軟	1 mm大の砂粒	良	凸帯貼付	1 条	沈線 1 条	黒斑有	5
26	7	1SK 008		弥生	後期				口縁部 破片	横ナデ	ナデ	ナデ			淡茶褐色	軟	1～3 mm大の砂粒	良	凸帯貼付	1 条	1 条		7
26	8	1SK 008		弥生	後期		7.0		底部 完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	暗黄茶色	やや軟	1～3 mm大の砂粒やや多	良					8
26	9	1SK 008		弥生	後期		8.6		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	内 明茶褐色 外 明灰褐色	軟	1～5 mm大の砂粒やや多	良					10
26	10	1SK 008		弥生	後期		6.1		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	暗茶褐色	軟	1～2 mm大の砂粒少	やや良				底部側面に内外面から焼成後穿孔 1 箇所有	9
26	11	1SK 008		弥生	後期	11.0			口縁部 1/2	横ナデ	ナデ	ナデ 刷毛			暗黄茶色	やや軟	1～2 mm大の砂粒やや多	やや良	小さく外反				11
26	12	1SK 008		弥生	後期	10.6	6.2	16.5	体部 ほぼ完存	横ナデ	ナデ	ナデ			暗褐色	軟	1～3 mm大の砂粒多	やや良	外反				13
26	13	1SK 008		弥生	後期	13.0			口縁部 1/3	横ナデ	ナデ	ナデ			暗褐色	やや軟	1～5 mm大の砂粒やや多	やや良	小さく外反				12
26	14	1SK 008		弥生	甕		6.6		体部 1/3		篦磨き	篦ナデ	篦ナデ	篦ナデ	暗茶褐色	軟	1～2 mm大の砂粒少	良好					14
27	1	1SK 015		弥生	後期	19.0	6.8	17.7	3/4	横ナデ	刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	暗赤褐色	軟	1～3 mm大の砂粒多	良	如意形				1
27	2	1SK 015		弥生	後期	24.0			口縁部 破片	横ナデ	刷毛	刷毛 ナデ			外 暗茶褐色 内 淡茶色	やや軟	1～2 mm大の砂粒・角閃石多	やや不良	如意形		沈線 1 条		16
27	3	1SK 015		弥生	後期	24.5			口縁部 4/4	横ナデ	刷毛	ナデ			暗茶褐色	やや軟	1～3 mm大の砂粒	不良	如意形		1 条		15
27	4	1SK 015		弥生	後期	27.0			口縁部 1/3	横ナデ	刷毛	刷毛 ナデ			淡褐色	やや軟	1～3 mm大の砂粒多	不良	如意形				19
27	5	1SK 015		弥生	後期	28.0			口縁部 1/10	横ナデ	横ナデ	ナデ			暗褐色	やや軟	1～3 mm大の砂粒	不良	如意形		1 条 刻目有		17
27	6	1SK 015		弥生	後期	27.2			口縁部 完存	横ナデ	刷毛	ナデ			淡赤茶色	やや軟	1～3 mm大の砂粒多	やや良	如意形	刻目有	1 条 刻目有		4
27	7	1SK 015		弥生	後期	26.0			口縁部 1/8	横ナデ	刷毛	ナデ			暗赤色	やや軟	1 mm大の砂粒多	やや良	凸帯貼付	1 条 刻目有			11
27	8	1SK 015		弥生	後期	25.2			口縁部 1/2	横ナデ	横ナデ 刷毛	ナデ			暗褐色	やや軟	1～3 mm大の砂粒・角閃石・雲母	やや不良	凸帯貼付	1 条 刻目有	1 条 刻目有	体部凸帯は閉じない 外面に刻目有	3
27	9	1SK 015		弥生	後期	27.0			口縁部 完存	横ナデ	横ナデ 刷毛	ナデ			暗茶褐色	やや軟	1～2 mm大の砂粒少・雲母	やや良	凸帯貼付	1 条 刻目有	1 条 刻目有		7
27	10	1SK 015		弥生	後期	25.2			口縁部 1/6	横ナデ	刷毛	ナデ			暗茶褐色	軟	1～3 mm大の砂粒多	良	凸帯貼付	1 条	1 条		8
27	11	1SK 015		弥生	後期	28.0			口縁部 1/4	横ナデ	ナデ	ナデ			暗茶褐色	軟	1～3 mm大の砂粒多・角閃石・雲母	不良	凸帯貼付	1 条 刻目有	1 条 刻目有	黒斑有	10
27	12	1SK 015		弥生	後期	31.0			口縁部 1/6	横ナデ	ナデ 刷毛	ナデ			茶褐色	軟	1～3 mm大の砂粒少	やや良	凸帯貼付	1 条 刻目有	1 条 刻目有		22
27	13	1SK 015		弥生	後期	28.0			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			淡茶色	やや軟	1～2 mm大の砂粒	やや不良	凸帯貼付	1 条 刻目有	1 条 刻目有		21
26	14	1SK 015		弥生	後期	40.0			口縁部 1/6	横ナデ	横ナデ ナデ	ナデ			黄灰茶色	軟	1～2 mm大の砂粒・角閃石	良	凸帯貼付	1 条 刻目有	2 条 刻目有		20
28	1	1SK 045		弥生	後期	32.6			底部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			暗茶褐色	軟	1～2 mm大の砂粒少	良	凸帯貼付	1 条 刻目有	1 条 刻目有		6
28	16	1SK 015		弥生	後期	34.0	7.0	37.8	1/4	横ナデ	刷毛	ナデ	ナデ	篦ナデ	茶褐色	やや軟	1～3 mm大の砂粒・雲母	やや良	凸帯貼付	1 条 刻目有	1 条 刻目有		18
28	17	1SK 015		弥生	後期				口縁部 破片	横ナデ	不明	不明			淡茶色	軟	1 mm大の砂粒少	良好	凸帯貼付	1 条			24

Tab.2　出土遺物観察表（土器）

Fig	No	遺構 番号	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部 形状	口縁部 凸帯	体部 凸帯	備考	R.No
28	18	ISK 015		弥生	甕		8.2		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 暗褐色 内 淡乳茶色	密	1～2㎜大の砂粒少	不良				底部に内外面から焼成後穿孔有	16
28	19	ISK 015		弥生	甕		7.8		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	暗茶褐色	やや粗	1～2㎜大の砂粒・角閃石多・雲母多	やや良				底部に内外面から焼成後穿孔有	15
28	20	ISK 015		弥生	蓋				上半部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	暗茶褐色	密	1～2㎜大の砂粒・角閃石	やや良				つまみ部径6.6㎝	23
28	21	ISK 015		弥生	蓋				つまみ部 完存		刷毛	不明	不明	ナデ	茶褐色	やや密	1～2㎜大の砂粒・角閃石	やや良				つまみ部径5.0㎝	24
28	22	ISK 015		弥生	蓋				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	刷毛			暗茶褐色	密	1～2㎜大の砂粒少	良	外方に 開く				25
29	23	ISK 015		弥生	壺	16.4	7.0	25.7	1/4	不明	ナデ 不明	ナデ	ナデ	不明	赤茶色	やや密	1～4㎜大の砂粒多	やや不良	外反			図上で接合	20
29	24	ISK 015		弥生	壺	22.0	8.2	34.4	体部1/3 欠損	横ナデ	箆磨き	箆磨き ナデ	ナデ	[illegible]	顔料 赤茶色 素地 暗茶褐色	やや粗	1～4㎜大の砂粒多	やや良	外反			上位外面と口縁部内面は丹塗り	17
29	25	ISK 015		弥生	蓋	21.4		[illegible]	口縁部 1/6	横ナデ	箆磨き	ナデ			暗褐色	やや密	1～5㎜大の砂粒多	良	外反			ISD23の破片と接合 R-19と同一個体	18
29	26	ISK 015		弥生	壺		8.0	40.0	底部 完存		箆磨き	ナデ	ナデ	ナデ	暗褐色	やや密	1～5㎜大の砂粒多	良				ISD23の破片と接合 R18と同一個体	19
29	27	ISK 015		縄文	深鉢				体部 細片		押型文	ナデ			暗茶色	やや密	細砂粒・角閃石・雲母	やや良				押型は縦4㎜横6ミリの楕円文	29
30	1	ISK 018		弥生	甕	24.0			上半部 1/8	横ナデ	ナデ	ナデ			暗褐色	密	1～2㎜大の砂粒少・角閃石	やや良	凸帯貼付	1条			3
30	2	ISK 018		弥生	甕	23.2			上半部 1/2	横ナデ	刷毛	ナデ			暗赤茶色	密	1～2㎜大の砂粒少	やや良	凸帯貼付	1条			2
30	3	ISK 018		弥生	甕	28.0			上半部 1/2	横ナデ	ナデ	ナデ			暗茶褐色	やや密	1～3㎜大の砂粒多	やや良	凸帯貼付	1条	沈線1条		1
30	4	ISK 018		弥生	甕				口縁部 細片	不明	不明	不明			暗褐色	粗	1～3㎜大の砂粒多	不良	凸帯貼付	1条			6
30	5	ISK 018		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			淡茶灰色	やや粗	1～2㎜大の砂粒	やや良	凸帯貼付	1条			5
30	6	ISK 018		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			暗茶褐色	密	1～2㎜大の砂粒少	良	凸帯貼付	1条	1条		4
30	7	ISK 018		弥生	蓋				つまみ部 完存		刷毛	不明	不明	ナデ	暗褐色	密	1～3㎜大の砂粒多	良				つまみ部径7.7㎝	9
30	8	ISK 018		弥生	蓋	27.0			口縁部 1/6	横ナデ	ナデ	不明			暗褐色	密	1㎜大の砂粒多	良	外方に 開く			端部に面有	8
30	9	ISK 018		弥生	甕		6.8		底部 完存		横ナデ ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	暗茶褐色	やや密	1～2㎜大の砂粒多	良					7
31	1	ISK 019		弥生	甕				口縁部 細片	不明	不明	不明			明黄茶色	やや粗	1～2㎜大の砂粒多	不良	凸帯貼付	1条	2条		2
31	2	ISK 019		弥生	甕	20.0			口縁部 1/6	横ナデ	ナデ 刷毛	ナデ			暗茶褐色	やや密	細砂粒	やや良	凸帯貼付	1条			1
31	3	ISK 019		弥生	甕		5.8		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	暗黄茶色	やや粗	1～5㎜大の砂粒多	やや良					3
31	4	ISK 019		弥生	蓋				つまみ部 1/2		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	黄茶色	やや粗	1～2㎜大の砂粒多	やや良				つまみ部径8.0㎝	4
31	5	ISK 022		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			淡灰茶色	やや密	1～2㎜大の砂粒	やや良	凸帯貼付	1条			2
31	6	ISK 022		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			淡灰茶色	やや粗	1～2㎜大の砂粒	やや良	凸帯貼付	1条 刻目有	1条 刻目有		1
31	7	ISK 022		弥生	甕		7.6		底部 完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	淡黄茶色	密	1～3㎜大の砂粒多	やや良					3
32	1	ISK 024		弥生	甕	25.0			上半部 完存	横ナデ	刷毛	ナデ			淡赤褐色	密	1～2㎜大の砂粒	やや良	凸帯貼付	1条 刻目有	1条 刻目有		1
32	2	ISK 024		弥生	甕	29.0			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			外 暗褐色 内 暗黄茶色	粗	1～5㎜大の砂粒	やや不良	如意形		1条 刻目有		2
32	3	ISK 024		弥生	甕	12.0			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			黒褐色	やや粗	細砂粒	やや良	外反				3
32	4	ISK 024		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			黒褐色	密	1㎜大の砂粒少	良	凸帯貼付	1条	1条		4
32	5	ISK 024		弥生	甕		6.6		底部 1/4		箆磨き	ナデ	ナデ	ナデ	黒色	密	1～2㎜大の砂粒	良					7
32	6	ISK 024		弥生	甕		8.8		底部 完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	明茶褐色	やや密	1～5㎜大の砂粒・角閃石	やや良					5
32	7	ISK 024		弥生	甕		6.9		底部 完存		ナデ 刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	暗茶褐色	やや粗	1～5㎜大の砂粒	やや不良					6
33	1	ISK 028		弥生	甕				口縁部 細片	不明					黄茶色	やや密	細砂粒・雲母	やや不良	鋤先状				1
33	2	ISK 028		弥生	甕		8.0		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	暗茶褐色	やや粗	1～3㎜大の砂粒多	不良					2
33	3	ISK 038		弥生	甕		5.8		底部 1/2		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	明黄茶色	やや粗	1～3㎜大の砂粒多・雲母	良好					1
34	1	ISK 035		弥生	甕	20.5	6.4	22.8	ほぼ完形	横ナデ	刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 黄茶色 内 明黄白色	粗	1～3㎜大の砂粒多	やや良	外反		1条		9
34	2	ISK 035		弥生	鉢	26.1			上半部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			外 明黄茶色 内 黄橙色	粗	1～4㎜大の砂粒多	やや良	凸帯貼付	1条	1条		8
34	3	ISK 035		弥生	甕	28.5			上半部 完存	横ナデ	横ナデ 刷毛	ナデ			明黄赤褐色	粗	1～4㎜大の砂粒多・雲母	やや良	凸帯貼付	1条	1条		7
34	4	ISK 035		弥生	鉢				体部 細片		ナデ	ナデ			外 暗茶褐色 内 明橙色	粗	1～3㎜大の砂粒多・雲母多	やや良				体部外面に下弦状の凸帯あり	6
34	5	ISK 035		弥生	甕		7.2		底部 1/2		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黄茶褐色	粗	1～3㎜大の砂粒多	やや良					3
34	6	ISK 036		弥生	壺		8.2		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 暗茶褐色 内 明茶褐色	粗	1～3mm大の砂粒・石英多	やや不良					1
34	7	ISK 036		弥生	壺		6.1		底部 完存		不明 ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黄茶褐色	粗	1～4mm大の砂粒・石英多	やや不良					2
34	8	ISK 035		弥生	甕		7.6		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 暗黄茶色 内 暗茶色	粗	1～3㎜大の砂粒多	やや不良					5
34	9	ISK 035		弥生	甕		7.1		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	暗黄茶褐色	粗	1～3㎜大の砂粒・角閃石	やや良					4
35	1	ISK 041		弥生	甕	18.2			上半部 完存	横ナデ	箆磨き 不明	ナデ			明黄茶色	粗	1～2㎜大の砂粒多・角閃石多・雲母多	やや良	凸帯貼付	1条	1条		7
35	2	ISK 041		弥生	鉢				体部 1/4		箆磨き	箆磨き			暗茶褐色	やや粗	1～2㎜大の砂粒・金雲母	良好					9
35	3	ISK 041		弥生	甕				体部 細片		ナデ	箆磨き			暗茶褐色	粗	1～3㎜大の砂粒多・雲母多	良好			1条		6
35	4	ISK 041		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					暗茶褐色	粗	1～2㎜大の砂粒	やや良	凸帯貼付	1条			5
35	5	ISK 041		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					明黄茶褐色	粗	1㎜大の砂粒	やや良	凸帯貼付	1条			8
35	6	ISK 041		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			外 淡黄茶褐色 内 淡黄茶色	粗	1～2㎜大の砂粒	良好	凸帯貼付	1条	1条		7
35	7	ISK 041		弥生	甕		8.1		底部 2/3		刷毛	ナデ	不明	ナデ	外 黄茶褐色 内 暗茶褐色	粗	1～3㎜大の砂粒多	やや良					3
35	8	ISK 041		弥生	甕		5.1		底部 1/2		刷毛	ナデ		不明	外 明黄茶色 内 暗褐色	粗		やや良					4
35	9	ISK 041		弥生	鉢		4.8		底部 1/2		箆磨き	不明	ナデ	箆磨き	外 暗赤茶褐色 内 暗橙色	粗	1～2㎜大の砂粒多・角閃石多・雲母多	やや良					2
35	10	ISK 041		弥生	器台	9.0			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			明黄茶色	やや粗	1～2㎜大の砂粒	良好	外方に 開く			端部に面有	11
35	11	ISK 041		弥生	器台	10.0			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	横ナデ			明橙色	やや粗	1㎜大の砂粒	良好	外方に 開く			端部に面有	10
35	12	ISK 041		弥生	蓋				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	刷毛			外 明橙色 内 淡黄茶褐色	粗	1㎜大の砂粒・金雲母	やや良				端部に面有	12
36	1	ISK 043		弥生	甕	28.0			口縁部 2/3	横ナデ	刷毛	ナデ			外 明黄茶色 内 明黄橙色	粗	1～2㎜大の砂粒多・雲母	やや良	凸帯貼付	1条			11
36	2	ISK 043		弥生	甕	29.0			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			明黄橙色	粗	1～2㎜大の砂粒多	やや不良	凸帯貼付	1条			14
36	3	ISK 043		弥生	甕	38.0			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			明橙色	粗	1㎜大の砂粒多・雲母多	やや良	凸帯貼付	1条			13
36	4	ISK 043		弥生	甕				口縁部 細片	不明	不明	不明			暗橙色	粗	2㎜大の砂粒多	不良	凸帯貼付	1条			15
36	5	ISK 043		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	箆磨き	ナデ			明黄茶色	粗	1㎜大の砂粒多	良好	外反				2

Tab.3　出土遺物観察表（土器）

Fig	No	遺構番号	層位	時期	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	口縁部凸帯	体部凸帯	備考	実測No
36	6	ISK 043		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外 明黄茶色 内 淡橙色	粗	1㎜大の砂粒多・雲母多	やや不良	凸帯貼付	1条			14
36	7	ISK 043		弥生	甕		5.4		底部 完存		刷毛	不明	不明	ナデ	明黄茶色	粗	1～2㎜大の砂粒多	やや不良				底部は上げ底状	1
36	8	ISK 043		弥生	壺	22.4			口縁部 完存	横ナデ	横ナデ 暗文	箆磨き			橙赤茶色	密	1～2㎜大の砂粒多	やや良	外方に開く			口縁部内面に凸帯状に貼り付け	6
36	9	ISK 043		弥生	蓋				つまみ部 完存		刷毛				明黄茶色	粗	1～3㎜大の砂粒多	やや不良				つまみ部径 4.7cm	9
36	10	ISK 043		弥生	蓋				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			暗黄茶褐色	粗	1～3㎜大の砂粒多・雲母	やや良	開く			端部に面有	6
36	11	ISK 043		弥生	蓋				つまみ部 1/3		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 暗茶褐色 内 明灰茶色	やや粗	1㎜大の砂粒少・雲母	良好				つまみ部径7.3cm	10
36	12	ISK 043		弥生	蓋				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	刷毛			外 明茶褐色 内 暗茶褐色	粗	1㎜大の砂粒少	良好	開く			端部に面有	5
36	13	ISK 043		弥生	器台				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	横ナデ			明黄茶色	粗	1㎜大の砂粒少	良好	外方に開く				6
36	14	ISK 043		弥生	器台				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			明黄茶色	やや粗	1㎜大の砂粒少	やや良	外方に開く				7
36	15	ISK 043		弥生	支脚				底部 1/4		ナデ	不明	横ナデ	ナデ	明橙色	粗	1～2㎜大の砂粒多	やや良					8
37	1	ISK 046		弥生	甕	27.0			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			外 黄茶色 内 赤褐色	粗	2㎜大の砂粒多・赤色粒子	やや良	凸帯貼付	1条			6
37	2	ISK 046		弥生	甕				口縁部 細片	刷毛	刷毛	ナデ			外 暗褐色 内 茶褐色	密	2㎜大の砂粒多	良	凸帯貼付	1条			5
37	3	ISK 046		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	ナデ			外 淡黄茶色 内 明赤茶色	密	2㎜大の砂粒多	良	凸帯貼付	1条	1条		5
37	4	ISK 046		弥生	甕				口縁部 細片	箆磨き	箆磨き	箆磨き			外 暗茶褐色 内 暗褐色	密	2㎜大の砂粒多	良	凸帯貼付	1条			4
37	5	ISK 046		弥生	甕		8.6		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 淡黄茶色 内 暗黄茶色	やや密	1～3㎜大の砂粒多・石英	良					2
37	6	ISK 046		弥生	甕		8.0		底部 完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 淡茶褐色 内 淡黄茶色	やや密	1～2㎜大の砂粒多・角閃石多	良					1
38	1	ISK 048		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外 淡赤褐色 内 赤褐色	粗	1㎜大の砂粒多	やや不良	凸帯貼付	1条			2
38	2	ISK 048		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					外 黄茶色 内 赤茶色	粗	1～2㎜大の砂粒・赤色粒子・角閃石	やや不良	凸帯貼付	1条			3
38	3	ISK 048		弥生	甕		7.8		底部 完存		不明 箆削り	不明	指押さえ	ナデ	淡黄茶色	粗	2㎜大の砂粒多・赤色粒子	やや不良					1
39	1	ISK 052		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	ナデ			外 黄茶色 内 赤茶色	粗	赤色粒子・角閃石・石英	やや不良	外反		1条		2
39	2	ISK 052		弥生	甕	23.2			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	横ナデ			黄茶色	密	角閃石・赤色粒子	良	凸帯貼付	1条	1条		1
39	3	ISK 053		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外 赤茶色 内 黄茶色	やや粗	1～2㎜大の砂粒・赤色粒子	良	凸帯貼付	1条	1条		1
39	4	ISK 053		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					外 茶褐色 内 暗茶褐色	粗	1㎜大の砂粒多	やや不良	開く			口縁端部に面有	2
40	1	ISK 055		弥生	甕	20.6			口縁部 1/4	横ナデ	不明	ナデ			暗茶色	粗	3㎜大の砂粒多・赤色粒子	不良	凸帯貼付	1条			6
40	2	ISK 055		弥生	甕	21.0			口縁部 1/4	横ナデ	不明	ナデ			外 暗茶色 内 明茶色	粗	2～3㎜大の砂粒多・角閃石	やや不良	凸帯貼付	1条 刻目有	1条 刻目有		5
40	3	ISK 055		弥生	甕	25.8			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			外 淡赤茶色 内 暗赤色	粗	2～3㎜大の砂粒多	やや良	凸帯貼付	1条	1条		8
40	4	ISK 055		弥生	甕	26.8			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			外 淡茶褐色 内 茶褐色	やや密	1～2㎜大の砂粒・赤色粒子・角閃石	良	凸帯貼付	1条 刻目有	1条		9
40	5	ISK 055		弥生	甕	30.8			口縁部 1/8	横ナデ	不明	ナデ			暗茶色	粗	2～3㎜大の砂粒多	やや不良	凸帯貼付	1条 刻目有	1条 刻目有		7
40	6	ISK 055		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	不明	ナデ			明赤茶色	やや密	2㎜大の砂粒	良	外反				2
40	7	ISK 055		弥生	甕		7.0		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 明黄茶色 内 茶褐色	やや粗	2～3㎜大の砂粒多	良				底部は上げ底状	4
40	8	ISK 055		弥生	甕		6.4		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	赤茶色	粗	2㎜大の砂粒多	やや不良				底部は上げ底状	1
40	9	ISK 055		弥生	壺				体部 細片		横ナデ	ナデ			暗赤茶色	やや粗	2㎜大の砂粒・金雲母・角閃石	やや良			1条 刻目有	刻目は連続しない	3
41	1	ISK 057		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			外 淡赤茶色 内 赤茶色	密	1㎜大の砂粒・4mm大の小礫	良	凸帯貼付	1条	1条		2
41	2	ISK 057		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			外 茶褐色 内 淡黄茶色	粗	1～3㎜大の砂粒多	不良	凸帯貼付	1条 刻目有	1条		2
41	3	ISK 057		弥生	甕				口縁部 細片	ナデ	箆磨き	箆磨き			外 茶褐色 内 淡茶褐色	やや密	2～3㎜大の砂粒・角閃石・赤色粒子	良	外反				1
41	4	ISK 062		弥生	甕				体部 細片		不明	不明			外 明黄茶褐色 内 暗茶褐色	粗	1～3㎜大の砂粒多	やや良			1条		2
41	5	ISK 062		弥生	壺				口縁部 細片	不明	不明	不明			明黄茶褐色	粗	1～3㎜大の砂粒・石英	不良	外反			口縁端部は肥厚する	1
41	6	ISK 062		弥生	蓋	27.2		10.8	1/2	横ナデ	箆磨き	箆磨き	ナデ	不明	外 暗赤茶褐色 内 明黄橙色	やや密	1～2㎜大の砂粒・金雲母	良好	外方に開く			つまみ部径6.8cm	3
42	1	ISK 063		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	ナデ			黄茶褐色	粗	1～2㎜大の砂粒・角閃石	やや良	凸帯貼付	1条 刻目有	1条 刻目有		2
42	2	ISK 063		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			外 暗茶褐色 内 黄茶褐色	粗	1～2㎜大の砂粒・雲母	やや良	凸帯貼付	1条 刻目有			4
42	3	ISK 063		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ 不明	ナデ			明茶褐色	粗	1～2㎜大の砂粒多	やや良	凸帯貼付	1条 刻目有	1条 刻目有		3
42	4	ISK 063		弥生	甕		9.1		底部 完存		刷毛	不明	不明	ナデ	外 暗茶褐色 内 黄茶褐色	粗	1～3㎜大の砂粒・角閃石	やや良					1
42	5	ISK 063		弥生	蓋				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	箆磨き			外 暗茶褐色 内 黒褐色	やや粗	1㎜大の砂粒少	良好	開く			端部に面有	3
42	6	ISK 064		弥生	甕		4.0		底部 一部欠損		不明	ナデ	ナデ	不明	外 淡灰橙色 内 暗橙色	粗	1～3㎜大の砂粒多・石英多	不良					2
42	7	ISK 064		弥生	甕		8.4		底部 2/3		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	茶褐色	粗	1～3㎜大の砂粒多・雲母多・角閃石	良好					3
42	8	ISK 064		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外 明赤茶褐色 内 明黄茶色	粗	1～2㎜大の砂粒多・石英多	やや良	外反				1
43	1	ISK 065		弥生	甕	25.2	6.6	26.8	ほぼ完形	横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	赤茶色	密	1～2㎜大の砂粒多・角閃石	良	凸帯貼付	1条 刻目有	1条 刻目有		2
43	2	ISK 065		弥生	甕	27.4			上半部 1/2	横ナデ	刷毛	ナデ			外 黄茶色 内 褐灰色	やや粗	2㎜大の砂粒・赤色粒子・石英	良	凸帯貼付	1条 刻目有	2条		4
43	3	ISK 065		弥生	甕		9.0		下半部		刷毛	ナデ	ナデ	不明	外 淡茶灰色 内 茶褐色	やや粗	1～3㎜大の砂粒多	不良					1
43	4	ISK 065		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外 黄褐色 内 黄茶色	密	1㎜大の砂粒	良	小さく外反				3
43	5	ISK 066		弥生	鉢				体部 細片		横ナデ 刷毛	ナデ			外 茶褐色 内 明黄白色	やや粗	1㎜大の砂粒少・角閃石多・雲母多	良好			1条		1
44	1	ISK 067		弥生	甕	22.0			上半部 1/6	横ナデ	刷毛	ナデ			外 黒褐色 内 茶褐色	密	1～2㎜大の砂粒多・赤色粒子	良	如意形		1条		6
44	2	ISK 067		弥生	甕	23.8			上半部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			外 暗褐色 内 明黄茶色	やや粗	1～3㎜大の砂粒多・赤色粒子	良	如意形		1条 刻目有	口縁部に刻目？	6
44	3	ISK 067		弥生	甕	25.2			上半部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			外 茶褐色 内 黄茶色	やや密	2㎜大の砂粒	やや良	如意形 刻目有		1条 刻目有		7
44	4	ISK 067		弥生	甕	15.4			上半部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			暗茶色	やや密	2㎜大の砂粒多・赤色粒子 4～5㎜大の小礫	良	凸帯貼付	1条 刻目有	1条 刻目有		2
44	5	ISK 067		弥生	甕	20.4	7.4	15.8	ほぼ完形	横ナデ	刷毛 横ナデ	ナデ	指押さえ	ナデ	外 赤茶色 内 淡茶褐色	やや密	2～3㎜大の砂粒多・赤色粒子	良	凸帯貼付	1条			3
44	6	ISK 067		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	刷毛			橙黄茶色	密	2㎜大の砂粒・赤色粒子	良	外反 刻目有			口縁部内側に粘土帯貼付け 端部面の上下に刻目有	9
44	7	ISK 067		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	刷毛			外 暗褐色 内 淡茶褐色	密	1㎜大の砂粒少	良	凸帯貼付	1条			10
44	8	ISK 067		弥生	甕		10.6		底部 1/4		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 明黄茶色 内 黄茶色	やや密	1㎜大の砂粒・赤色粒子	良				底部は僅かに上げ底状	11
44	9	ISK 067		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外 茶褐色 内 明赤茶色	密	1～2㎜大の砂粒少	良	凸帯貼付	1条			12
44	10	ISK 067		弥生	甕		8.8		底部 2/3		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	茶褐色	密	2㎜大の砂粒多・赤色粒子	良					4
44	11	ISK 067		弥生	壺	29.0			上半部 1/3	横ナデ	箆磨き ナデ	箆磨き ナデ			茶褐色	密	2～3㎜大の砂粒多	良	外反		1条	端部に面有 体部に刷毛の痕跡有	1

Tab.4　出土遺物観察表（土器）

Fig	No	遺構番号	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	口縁部凸帯	体部凸帯	備考	図No.
44	12	ISK 067		弥生	甕		[illegible]		下半部 1/3		箆磨き 箆ナデ	箆磨き 箆ナデ	不明	未調整	茶褐色	密	2～3㎜大の砂粒多	良			1条	体部に刷毛の痕跡有	2
45	1	ISK 068		弥生	壺	18.6	8.0	31.2	体部 1/2 欠損	横ナデ	横ナデ 箆ナデ	箆磨き ナデ	ナデ	ナデ	外 淡黄灰色 内 黒褐色	密	1㎜大の砂粒・赤色粒子・角閃石	やや良	外反			口縁端部に面有 頸部に沈線3条有	1
45	2	ISK 068		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			淡黄灰色	やや密	赤色粒子・角閃石	やや良	凸帯貼付	1条 刻目有	2条 刻目有		2
46	1	ISK 071		弥生	甕	[illegible]			1/5	横ナデ	刷毛	ナデ			外 茶褐色 内 明橙色	粗	1～2㎜大の砂粒・雲母	良好	凸帯貼付	1条			1
46	2	ISK 071		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					外 浅橙色 内 明黄茶褐色	粗	1～2㎜大の砂粒多	やや良	凸帯貼付	1条			3
46	3	ISK 071		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					外 暗茶褐色 内 暗黄茶褐色	やや粗	1～2㎜大の砂粒・雲母	やや良	凸帯貼付	1条 刻目有			2
46	4	ISK 071		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					明黄茶色	密	黄砂粒・雲母	やや良	凸帯貼付	1条			4
46	5	ISK 071		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外 暗黄茶褐色 内 明橙色	粗	1～2㎜大の砂粒	やや良	凸帯貼付	1条	1条		5
46	6	ISK 071		弥生	甕		[illegible]		底部 完存		刷毛	不明	不明	ナデ	外 黄茶褐色 内 明橙色	粗	1～2㎜大の砂粒・雲母	良好					6
46	7	ISK 071		弥生	鉢		[illegible]		底部 1/2		横ナデ		ナデ	ナデ	暗茶褐色	粗	1～2㎜大の砂粒少	良好				底部は僅かに上げ底状	7
46	8	ISK 071		弥生	蓋				つまみ部のみ		箆磨き	ナデ	ナデ	横ナデ ナデ	明橙色	粗	1～2㎜大の砂粒・金雲母	良好				つまみ部径6.4cm	8
47	1	ISK 074		弥生	甕		[illegible]		底部 完存		不明	不明	ナデ	ナデ	外 茶褐色 内 橙褐色	粗	1～3㎜大の砂粒多・石英多・雲母多	やや不良					2
47	2	ISK 074		弥生	甕				体部 細片		横ナデ 不明	横ナデ ナデ			外 暗茶褐色 内 淡黄茶色	粗	1～2㎜大の砂粒多・石英多	やや不良					1
48	1	ISK 075		弥生	甕	53.0			口縁部 1/8	横ナデ					外 黄褐色 内 黄茶色	密	赤色粒子多・角閃石多・小礫多	良	外反			端部面の上下に刻目有	4
48	2	ISK 075		弥生	甕				口縁部 1/4	横ナデ	ナデ	ナデ			外 赤茶色 内 黄茶色	密	2㎜大の砂粒・金雲母	良	凸帯貼付	1条 刻目有	1条 刻目有		2
48	3	ISK 075		弥生	甕	26.0			口縁部 1/4	横ナデ	ナデ	ナデ			赤茶色	やや粗	1～2㎜大の砂粒多	良	凸帯貼付	1条 刻目有	1条 刻目有		1
48	4	ISK 075		弥生	甕	31.0			口縁部 1/2	横ナデ	不明	ナデ			赤茶色	やや粗	1～2㎜大の砂粒・赤色粒子	やや良	凸帯貼付	1条 刻目有	1条 刻目有		3
48	5	ISK 075		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	ナデ			黄茶色	密	角閃石・金雲母・赤色粒子	良	凸帯貼付	1条 刻目有			6
48	6	ISK 075		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	ナデ			外 黄茶色 内 茶褐色	密	赤色粒子・角閃石	良	凸帯貼付	1条 刻目有			5
48	7	ISK 075		弥生	甕				体部 細片		刷毛	ナデ			外 赤褐色 内 赤茶色	密	1㎜大の砂粒・赤色粒子	良好			1条 刻目有		7
48	8	ISK 075		弥生	甕				体部 細片		ナデ	ナデ			外 黄茶色 内 赤褐色	密		良			1条		8
48	9	ISK 075		弥生	支脚		[illegible]		底部 3/4		箆削り			箆削り	黄橙色	密	赤色粒子	良					9
49	1	ISK 082		弥生	甕	26.8	7.0	29.8	口縁部 1/4 欠損	横ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	未調整 ナデ	外 黄茶色 内 淡黄茶色	密	1～2㎜大の砂粒多・赤色粒子多・金雲母多	良	凸帯貼付	1条 刻目有	1条 刻目有		1
49	2	ISK 085		弥生	甕	36.4	8.0	42.7	1/2	横ナデ	刷毛 箆ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 黒褐色 内 淡黄灰色	やや密	1～2㎜大の砂粒・赤色粒子・金雲母	良	凸帯貼付	1条 刻目有	1条 刻目有		1
50	1	ISK 087		弥生	甕				口縁部 細片	不明	不明	不明			黄茶色	粗	1～2㎜大の砂粒多	やや良	凸帯貼付	1条	1条		2
50	2	ISK 087		弥生	甕	28.2			口縁部 1/8	不明	不明	不明			外 淡赤褐色 内 赤褐色	やや粗	赤色粒子・角閃石	やや良	凸帯貼付	1条	1条		1
50	3	ISK 088		弥生	壺	7.4	4.0	11.5	2/3	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黄茶色	密		良	外反			頸部に沈線2条有	1
50	4	ISK 091		弥生	甕	19.9			1/2	横ナデ	刷毛	ナデ			外 黄褐色 内 赤褐色	やや密	1～2㎜大の砂粒・赤色粒子	良	如意形 刻目有				4
50	5	ISK 091		弥生	甕		6.0		底部 完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 暗赤褐色 内 黄茶色	やや粗	1～2㎜大の砂粒多	良					3
50	6	ISK 091		弥生	壺				体部 細片		ナデ	ナデ			黄茶色	密		良				体部外面に箆による無軸羽状文有	2
50	7	ISK 091		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	箆磨き	ナデ			外 黒褐色 内 黄茶色	密	赤色粒子	良	外反				1
50	8	ISK 093		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			黄橙色	密	赤色粒子	良	外反			焼成後に口縁部の一部を打ち欠く	3
50	9	ISK 093		弥生	甕	17.4			上半部 1/4	横ナデ	刷毛	箆ナデ			褐灰色	密	石英	良	外反				2
50	10	ISK 093		弥生	甕	14.8			上半部 1/4	横ナデ	刷毛	箆ナデ			外 褐灰色 内 黄橙色	密		良	外反				1
51	1	ISK 100		弥生	甕	17.2			上半部 1/4	不明	不明	ナデ			暗茶褐色	粗	1～3㎜大の砂粒多	不良	凸帯貼付	1条	1条	凸帯はすべて剥落	6
51	2	ISK 100		弥生	甕	22.2			3/4	横ナデ	刷毛	ナデ			淡黄茶色	密	2～3㎜大の砂粒多・赤色粒子多・石英多	やや良	凸帯貼付	1条		内外底面から焼成後穿孔有 凸帯は剥落	2
52	3	ISK 100		弥生	甕	28.5	6.9	27.8	ほぼ完形	横ナデ	刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 淡茶褐色 内 黄茶色	密	1～2㎜大の砂粒・赤色粒子	良	凸帯貼付	1条	1条		10
52	4	ISK 100		弥生	壺				口縁部 細片	不明					外 赤茶色 内 黄茶色	やや粗	1～2㎜大の砂粒	やや不良	外反				12
52	5	ISK 100		弥生	甕	23.0			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			黄茶色	密	1㎜大の砂粒・赤色粒子	良	如意形 刻目有		1条 刻目有		1
52	6	ISK 100		弥生	甕	18.8	7.0	17.9	5/6	横ナデ	刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 赤褐色 内 黄茶色	やや密	3㎜大の砂粒多・赤色粒子多	やや良	外反 刻目有				8
52	7	ISK 100		弥生	壺	24.0			口縁部 3/4	横ナデ 刷毛	刷毛	ナデ			外 淡黄茶色 内 暗黄茶色	密	1～2㎜大の砂粒・赤色粒子	良	外反		1条		5
52	8	ISK 100		弥生	甕	23.3	6.6	23.4	ほぼ完形	横ナデ	刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 暗赤茶色 内 赤茶色	やや粗	2㎜大の砂粒多	良	外反		1条		9
52	9	ISK 100		弥生	甕	32.2			上半部 1/5	横ナデ	刷毛	ナデ			黄茶色	やや密	1～3㎜大の砂粒多・赤色粒子多・角閃石多	良	如意形		1条		3
52	10	ISK 100		弥生	甕	37.8			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	刷毛 ナデ			赤茶色	やや粗	2～3㎜大の砂粒多・赤色粒子多・角閃石多	良	如意形 刻目有		2条 刻目有		11
52	11	ISK 100		弥生	甕		[illegible]		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 暗灰茶色 内 灰茶色	密	1～2㎜大の砂粒・赤色粒子	良				底部内面から焼成後に穿孔するも未貫通	4
52	12	ISK 100		弥生	甕		7.2		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 赤茶色 内 黄茶色	密	赤色粒子	良					7
53	1	ISK 026		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					淡茶褐色	やや密	1㎜大の砂粒・雲母	やや良	外反				1
53	3	ISK 068		弥生	鉢				口縁部 1/8	箆磨き 横ナデ	箆磨き	箆磨き ナデ			暗茶色	密	赤色粒子多	良	外反			口縁端部に面有・頸部に沈線2条有・体部に鋸歯文有	1
53	4	ISX 069		弥生	壺		[illegible]		下半部 1/2		箆磨き ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 暗黄茶褐色 内 明赤茶褐色	粗	1～3㎜大の砂粒多・石英多	良好					2
53	5	ISX 079		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			外 明褐色 内 橙色	密		良	凸帯貼付	1条 刻目有	1条		5
53	6	ISX 079		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			茶褐色	密	角閃石	良	凸帯貼付	1条	1条		3
53	7	ISX 079		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			茶褐色	密	金雲母・赤色粒子	良	凸帯貼付	1条 刻目有			2
53	8	ISX 079		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛 ナデ	ナデ			外 黄橙色 内 茶褐色	密	赤色粒子	良	凸帯貼付	1条	1条		4
53	9	ISX 079		弥生	鉢				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			赤褐色	密	1㎜大の砂粒・赤色粒子	良	僅かに内湾				7
53	10	ISX 079		弥生	甕	19.4			口縁部 1/6	横ナデ					淡黄橙色	密	1～2㎜大の砂粒・赤色粒子	良	外反				1
53	11	ISX 079		弥生	壺				体部 細片		箆磨き	箆磨き			外 黒褐色 内 黄茶色	密		良			1条		8
53	12	ISX 079		弥生	壺				底部 完存		箆ナデ	不明	ナデ	未調整	外 赤褐色 内 黄褐色	密	赤色粒子	良					6
54	1	表土		弥生	壺	29.2			口縁部 1/4	ナデ	ナデ	ナデ			淡黄茶色	やや密	1～2㎜大の砂粒・赤色粒子	良	外反 刻目有				1
54	2	表土		弥生	甕		[illegible]		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 黄茶色 内 赤褐色	密	2～3㎜大の砂粒多	やや良					2
54	3	表土		弥生	蓋				つまみ部 完存		箆磨き	ナデ	ナデ	ナデ	外 淡褐色 内 黄茶色	密	1～2㎜大の砂粒・赤色粒子	良				つまみ部径5.2cm	3

Tab.5　出土遺物観察表（土器）

Fig.	No.	遺構番号	層位	素材	産地	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	残存	備考	Pla.
[illegible]	[illegible]	[illegible]		鉄		[illegible]	[illegible]	[illegible]	0.4	6.[illegible]	先端部と基部欠損	現存わた[illegible]り 3.2cm	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]		[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]製品	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		土師器		粘度塊	1.[illegible]	3.6	1.9	23.9	[illegible]形		[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		土師器		粘度塊	8.7	4.9	3.[illegible]	111.3	完形		[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	3.1	完形	胎土はよ[illegible]精選されている	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]	多久	鏃	[illegible]	[illegible]	[illegible]	0.7	脚部欠損		[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	cp	サヌカイト	多久	鏃	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]		[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		外面[illegible]が見られる。[illegible]体部片を利用か?	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]	[illegible]	[illegible]							[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]		[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]		[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		緑泥片岩	八[illegible]	石斧	8.6	[illegible].7	2.4	225.0	基部のみ		[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		サヌカイト	多久	鏃	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]		[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	2.6	1/3	内[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]		砥石	6.6	6.0	4.[illegible]	[illegible].0	片側欠損		[illegible]
		[illegible]		[illegible]		[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]

Tab.6　出土遺物観察表（土器以外）

のである。上半部は、粘土板を重ねた状態で成型しており、段甕の成型技法に似ている。刻目は口縁端部下辺にのみ施されている。6 と 7 は壷である。6 は体部の細片であるが、外面に無軸羽状文が施文されている。7 は外反する口縁部である。

1SK093 出土遺物（Fig.50、Pla.21）

すべて弥生土器の甕で、如意形または小さく外反する口縁をもつものである。8 は口縁部に円形の打ち欠きが行なわれている。9 は小さく外反する口縁を持ち、10 は典型的な如意形口縁といえる。

1SK100 出土遺物（Fig.51・52、Pla.22）

すべて弥生土器の甕である。1 ～ 3 は口縁部に凸帯を貼り付ける類型である。1 と 3 は体部にも凸帯を貼り付ける。いずれの凸帯にも刻目は認められない。底部は平底で、2 は底面に焼成後の穿孔が認められる。5 ～ 10 は如意形の口縁をもつ類型である。6 を除いて、体部に凸帯巡らせている。その多くは 1 条であるが、10 は 2 条の凸帯を貼り付ける。6 と 10 は口縁部端の下辺に刻目を施し、5 は口縁部端全面に刻目を施している。また、5 と 10 は体部の凸帯にも刻目を施し、10 は 2 条とも刻目が認められる。11 と 12 は底部である。11 は内面から焼成後穿孔を試みているが、未貫通である。

1SX026 出土遺物（Fig.53）

1 は弥生土器の甕である。口縁部端の上下両辺に刻目を施している。

1SX042 出土遺物（Fig.53、Pla.22）

2 は石包丁である。片岩製で、刃部は両刃偏刃となっている。

1SX069 出土遺物（Fig.53）

ともに弥生土器の壷である。3 は上半部の資料で、外反する口縁部を持つ。頸部と体部の境界には沈線が 2 条巡り、その下位に上弦の重弧文がある。4 は小型の壷である。

1SX079 出土遺物（Fig.53）

すべて弥生土器である。5 ～ 8 は甕である。いずれも口縁部に凸帯を貼り付けている。5 と 6 と 8 は体部にも凸帯が巡るが、7 は判然としない。5 ～ 8 の口縁部凸帯には刻目が認められる。9 は鉢である。10 から 12 は壷である。10 は外反する口縁部で、僅かに端部を肥厚させる。11 は頸部と体部の接合部分で、外面に凸帯が貼り付く。12 は底部の資料である。

1SP017 出土遺物（Fig.53）

13 は砥石である。砂岩製で 3 面で使用痕が認められる。

表土出土遺物（Fig.54、Pla.22）

すべて弥生土器である。1 は壷である。口縁部内面に凸帯が 1 条貼り付く。2 は甕の底部である。厚底にはならないものである。3 は蓋のつまみ部分である。

小結

今回の調査では、主に弥生時代中期前半と古墳時代の遺構及び遺物が確認された。特に弥生時代中期前半と思われる遺構と遺物について若干の考察を行い、まとめとしたい。

円形の竪穴住居

まず、弥生時代中期前半の遺構の中で目を引くのが、円形の竪穴住居である。形が非常に崩れている 1SI005 を除いても、2 棟が確認できる。出土遺物を見ると土師器が出土したりしているが、ちょうど円形住居を切る形で古墳時代の竪穴住居が営まれており、調査時に混入したと捕らえるのが自然であろう。

1SI070 は小型の円形住居と思われるが、報告文中でも触れたとおり主柱穴が確認できない。竪穴の形状からすると竪穴住居として良さそうであるが、少々気にかかるところである。この竪穴の規模が非常に小さいことを勘案すれば、竪穴の外に主柱穴があった可能性も考えてよいのではないだろうか。例えば、周堤上に円錐状に柱を配して、そのまま屋根にしたとも考えられる。主柱穴を住居の必須条件とみなす必要はない。むしろ、小型の竪穴住居の場合、竪穴内部に主柱穴を無理に立てると、生活空間が非常に窮屈なものとなってしまう。むしろ主柱穴を排して円錐状に柱を配置することで、生活空間を合理的に手に入れることができる。こうして考えた場合、1SI070 を竪穴住居として取り扱うことが、可能ではないだろうか。

さて、もう一方の竪穴住居 1SI050 であるが、直径が 7m 近い大型の円形住居である。こちらは主柱穴と思しき柱穴が多数検出され、少なくとも 1 回以上の建て替えを行なっているようである。常用長田遺跡の例（註 1）を見てみても大型の円形住居は、群集してつくられるものではなく、中型や小型の住居の中に少数の設置をみるのが通例である。首長的な性格を与える意見と集会所的な性格を与える意見があるようだが、いずれにせよ、通常の住居とは異なる性格を与えられることが多いようである。また、今回の場合、大型の住居のみが中央に楕円形の土坑を持ち、その両端に小穴を伴う点にも注目したい。中央の土坑では被熱痕跡は見られなかったため、作業土坑の可能性が高い。このような住居は韓半島に起源を求めるソングンニ（松菊里）型住居の特徴と一致する。ソングンニ型住居というと、渡来系集落の印象が強いため、ここではソングンニ系住居としておくが、大型住居にのみこうした特長が見られることは興味深い。中型や小型の竪穴住居で、中央土坑等の省略が行なわれるようになっても、突出する大型の竪穴住居では、従前の形式を守って住居が建設されていると考えたい。そうした意味では、この上北島平塚遺跡の集落は、円形住居を主体とする集落の中では新しい様相を示しているといえる。次の段階では円形の住居は消滅し、方形の竪穴住居に移行する点を考えると、円形住居を主体とする集落の最終形態と見ることも可能であろう。

先述した常用長田遺跡の例では、両端に小穴を伴う楕円形の作業土坑は、大型の竪穴住居のみにとどまらず中型以下の竪穴住居にも見られるが、常用長田遺跡の例は前期に属するものであり、今回の事例よりも時期が古くなる。こうしたことから、円形住居が終焉に向かうときに、祖形であるソングンニ型住居に見られた作業土坑は、まず中型以下の竪穴住居で消滅するのではないか。そのときに集落の象徴ともいえる大型の住居には、古い形式が残されたとみて良さそうである。その時期の集落のひとつが本遺跡であろう。

弥生土器の形態変化

今回出土した弥生土器を概観すると、概ね弥生時代中期初頭を中心とした時期が与えられそうである。土器形式で言うと、城ノ越式平行期を中心としたものであるといえる。もちろん、その前後の時期にあたる弥生時代前期後半から中期前半にかけての土器が出土している。当地方の弥生時代前期の土器は、亀ノ甲タイプと呼ばれる、板付式土器に類する一群が出土することで知られている。現在のところ亀ノ

甲タイプの土器は一様式として認定されていないが、近い将来に様式設定が可能であると予測されるため、本書では亀ノ甲式土器の呼称を用いることとしたい。

さて、亀ノ甲式土器は、口縁部と胴部に刻目凸帯を持つものが基本的な形式であるが、本遺跡で出土する土器群を概観すると、胴部の刻目凸帯を省略したものや沈線に変わったものが少なからず存在する。胴部凸帯が省略されるのは、玄界灘沿岸に城ノ越式土器が成立して以降、その影響を受けて器形変化したと捉えるのが適当であろう。これらの土器群は、口縁部凸帯の刻目が消滅する前段階に現れるようで、以西地域の城ノ越式土器への融合過程を考える上で興味深い。その後口縁部凸帯の刻目が消滅し、以西地域に見られる口縁部に刻目のない三角凸帯を貼り付ける甕に収斂されていく。この時点で亀ノ甲式土器から城ノ越式土器への移行が完了する。

さらに、城ノ越式土器に続く土器様式としては須久式土器がつとに知られている。当地域においても城ノ越式土器に続く土器様式は須久式と捉えて大過ないと思われる。現実に当地域でも相当数の出土を見ている。しかしながら、典型的な須久Ⅰ式土器の出土例は少なく、須久Ⅱ式土器がその大半を占める状況がある。当市域においても、蔵数森ノ木遺跡で須久Ⅰ式土器が出土しているが、福岡平野等にみる典型的な須久Ⅰ式土器とは異なるようである。見方を変えれば、さりながら城ノ越式土器から須久Ⅱ式土器へと変化しているかのようである。

以上のような状況を踏まえた上で、特に甕型土器に注目しながら、再度今回の調査で出土した土器群を見てみたい。まず確実に亀ノ甲式土器と言えるものは、32 － 1・43 － 1・48 － 2・48 － 3・48 － 4 等があげられる。52 － 5 や 52 － 10 も如意形の口縁部を有するものの、同じ亀ノ甲式土器の一群と捉えてよい。この段階の土器の特徴は、口縁部と体部に凸帯を貼り付け、その両方に刻目を施すものである。口縁部が如意形のものにあっても口縁部と体部凸帯の双方に刻目が施される。口縁部の凸帯が比較的大きく、亀ノ甲式土器の中でも新相を呈する。仮にＡ類としておく。

次の段階のもとのして、口縁部に凸帯を貼り付けて刻目を施すものの、体部の凸帯が省略され一部は沈線に置き換わるものがある。この類型のものとしては 26 － 2・26 － 3 等があげられる。口縁部の凸帯は断面三角形であるが、26 － 5 や 26 － 6 のように断面蒲鉾状を呈するものも認められる。福岡平野での傾向に従えば、後者の方が新相を呈することになろうか。この段階になると底部の厚みが増して厚底状を呈するようになる。仮にＢ類としておく。

次に須久式土器と思しき土器を提示したい。33 － 1 がそれであるが、口縁部は跳ね上がり黒髪式土器の影響を受けている。これ以外には明瞭なものは見当たらない。

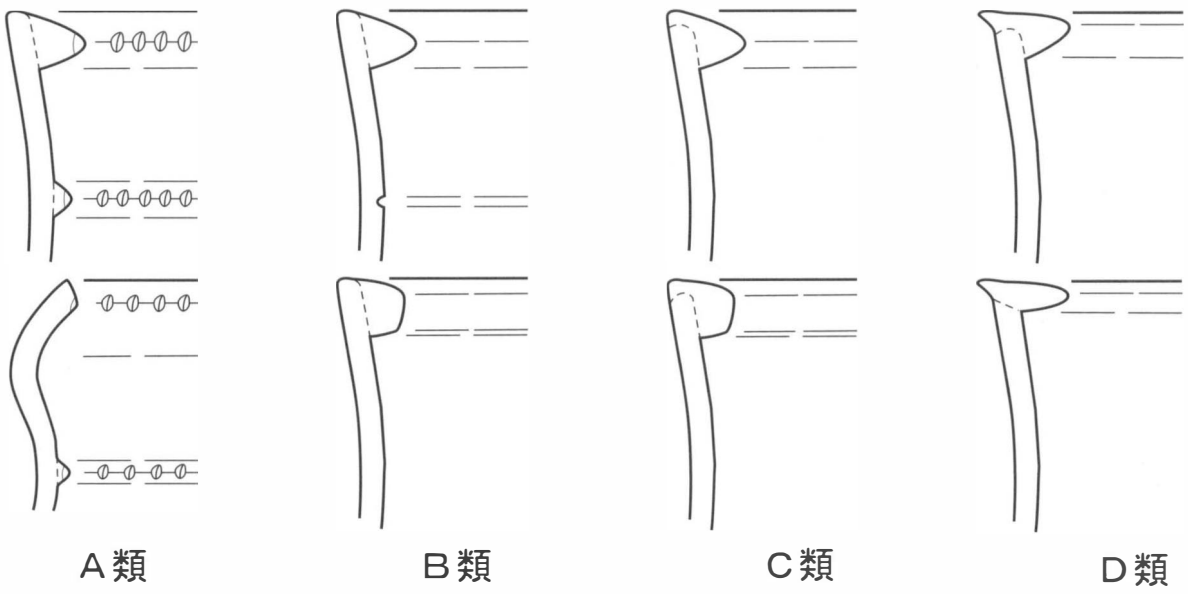


Fig.55　甕型土器の形態変化模式図

以上のように甕の形態変化に注目して出土遺物を概観してきたが、もう一群の目を引く土器がある。26－4・37－2等がそれで、基本的には上記B類に含まれると解釈できる外見をしているが、口縁部凸帯の接合方法に違いが見られる。仮にC類として話を進めることにする。B類では口縁部の外面に凸帯を貼り付けるが、C類では口縁部の上面に覆いかぶさるように粘土を貼り付けて、凸帯を形成している。外見上はB類と同様であるが、構造は以西地域の須久式に近い。ただ、口縁部内面側に粘土を引き出すことはせず、鍬先状の口縁部とはなっていない。ただし底部の構造は明らかでない。

これらの土器の形態を模式化して変化を辿ったのがFig.55である。口縁部凸帯と体部凸帯に刻目を施すもの（A類）から刻目を省略し、体部の凸帯もないもの（B類）へと変化し、さらに口縁部凸帯の接合が上部に覆いかぶさるように変化する（C類）という変遷が考えられる。さらに口縁部内側のつまみ出しが行なわれて須久式土器（D類）が成立していくと考えたい。ただし、その形態は福岡平野等で見られる典型的な以西地域の須久Ⅰ式土器とは若干異なることが予想される。ただ、今回の調査で確認できたのはA類からC類までの変化であり、そこからD類への変化は、今後の検討課題としたい。

まとめ

ここまで、円形の竪穴住居と弥生土器の形態変化に注目して当遺跡を検討してきた。ここで、両者の結果を総合してまとめとしたい。

弥生時代の竪穴住居として確認できたものは、すべて円形住居であった。それらは基本的にソングンニ型住居の系譜を引くと考えられるが、中型から小型に属する住居では、中央の作業土坑は失われていて、大型の住居のみにその構造は遺存している。当遺跡の時期は土器形式を当てはめながら概観すると城ノ越式期を中心にした時期が与えられると思われるが、当地域におけるこの時期は土器様式に前期の制約が色濃く残る段階であるといえる。ただ、C類に代表される一部の土器には前期の制約を離れる前兆があらわれ、前期の制約から解放されつつある時期であるともいえよう。住居もソングンニ型住居の影響から離れ始め、土器も前期の亀ノ甲式土器の影響から離れ始めているとも言える。

そうした意味で、当遺跡は弥生時代前期の集落相から中期以降の集落相へと移る画期に近い段階のものと評価できるのではなかろうか。今後周辺の事例を加えて、更なる検討を加える必要は痛感するところであるが、まずは試論を公にして大方の御批判、叱責を請いたい。

S-番号	遺構番号	備考	地区
5	1SI005		K6
6	1SK006		I2
7			I4
8	1SK008		I8
9			J9
10	1SI010		K7
11	1SD011		H8
12			G6
13			G6
14			G6
15	1SK015		E5
16			G5
17	1SP017		F3
18	1SK018		F3
19	1SK019		E2
20	1SI020		R5
21			D3
22	1SK022		E4
23	1SD023		D4
24	1SK024		D5
25	1SB025		L6
26	1SX026		E5
27			I7
28	1SK028		I8
29	1SK029		L5
30	1SI030		M4
31			K5
32			K5
33			K5
34			K4
35	1SK035		I10
36			L5
37			L4
38	1SK038		K7
39			L3
40	1SI040		H2
41	1SK041		O5
42	1SX042		P5
43	1SK043		P5
44			R4
45	1SD045		R4
46	1SK046		R5
47			R5
48	1SK048		R6
49			R7
50	1SI050		H2

S-番号	遺構番号	備考	地区
51			T6
52	1SK052		U6
53	1SK053		U7
54			W8
55	1SK055		E18
56			W8
57	1SK057		X 10
58			E8
59			F8
60	1SI060		M10
61			F8
62	1SK062		I8
63			I8
64	1SK064		N8
65	1SK065		Q10
66	1SK066		N8
67	1SK067		N12
68	1SK068		I13
69	1SX069		F15
70	1SI070		H3
71	1SK071		S5
72			F11
73			P9
74	1SK074		O8
75	1SK075		V14
76			P7
77			P7
78			O9
79	1SX079		Q10
81			Q13
82	1SK082		P15
83			Q17
84			R16
85	1SK085		X 12
86			R16
87	1SK087		R12
88	1SI088		T11
89			T11
91			T10
92			N11
93	1SK093		U12
94			W13
95			C14
96			T11
100	1SK100		Y 10

Tab.7　遺構番号台帳

Fig.56　調査区略測図（1/300）

Fig.57　遺構全体配置図（1/200）

2. 下北島久清遺跡（第 1 次調査）

下北島久清遺跡第 1 次調査は、株式会社タカラブネ福岡工場新設に先立って行なわれた記録保存のための発掘調査である。当該地は、従来から知られていた久清遺跡の一部にあたるため、当初から遺構の存在が予想されていた。この工場の新設は 3,000 ㎡を超える開発行為であったため、都市計画法に基づく事前会議が開催され、席上、事前に試掘調査が必要な旨を通告した。試掘調査を実施したところ、予想通り開発区域の北側部分に遺構が確認され、開発事業者と筑後市教育委員会が協議した結果、現地での保存が困難なため、遺構の存在する範囲に対して記録保存のための発掘調査を実施することとなった。調査に要する経費は開発事業者である株式会社タカラブネが負担することで合意した。ただし、当時は筑後市が積極的に企業誘致を行なっていたため調査案件が多く、調査報告書刊行の目処が立たないため、整理作業および報告書の刊行作業は後年にまわすこととし、その際の経費は筑後市が負担することとした。

現地での調査は、平成 3 年 11 月から平成 4 年 2 月まで実施したが、非常に寒い時期にもかかわらず

Fig.58　調査区位置図（1/2,500）

作業員各位には愚痴ひとつこぼさずに奮闘していただいた。航空測量のための空中写真撮影当日も、冷たい霧雨が降る中、遺構の清掃を早朝からしていただいて撮影にこぎつけた。深く感謝したい。

なお、報告に入る前にお断りしなければならないことがある。今回の調査では遺構の全体測量を航空測量によったが、調査から報告に到る 14 年間の間に幾度となく調査記録類を移動せざるを得ない状況があった。その結果、あってはならないことだが航空測量の標高値を記した部分を紛失してしまっていた。当市教育委員会が所有する全ての図面類を精査したが、発見することができなかった。したがって、遺構の報告にあたり、今回報告するのは高さの数値を除いた平面図のみとなる。ご了承願いたい。ただし、将来標高値の記録が発見された折には、何らかの方法で公開したいと考えている。

遺構

今回の調査では、掘立柱建物・土坑・周溝状遺構等が確認された。以下、遺構種類別に報告する。

掘立柱建物

合計で 9 棟確認した。柱穴は掘方が長方形で礎板を伴うようなしっかりしたものから、不定形の小穴状のものまで存在した。原則として、現地で建物として認識できたもののみを掘立柱建物として報告し

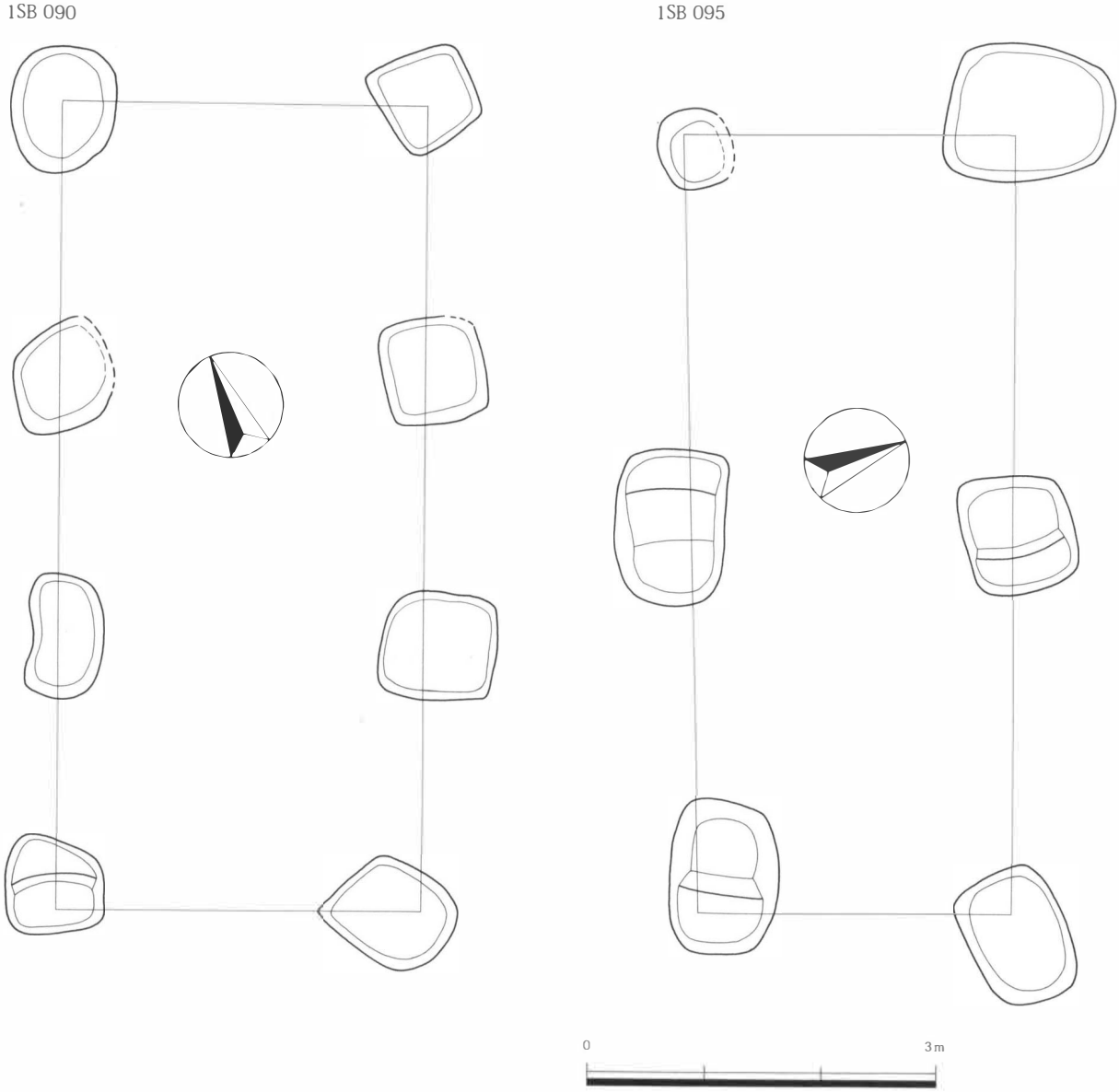


Fig.59　1SB090・1SB095 実測図（1/60）

ている。以下、遺構別に報告する。

1SB090（Fig.59）

調査区の中央附近北側に位置する。規模は南北 3 間、東西 1 間である。主軸の方位は、N－24°－E である。柱穴の平面形は比較的整った長方形が多く、建物の長軸側が短く、長軸に直行する辺が長い。ただし、柱穴の配置は規則性が緩く、向きにばらつきが見受けられる。0.9m × 0.7m 程度の規模のものが中心である。

一般的に当該期の掘立柱建物は 1 間× 1 間か 1 間× 2 間のものが多い中、3 間× 1 間という規模には正直なところ疑問も残る。南側の 1 間分は除外すべきだという意見もあったが、現地での印象は 4 間× 1 間と認識したので、ここではそのまま報告しておく。

出土遺物には弥生土器（甕・壷・鉢・高坏・支脚・器台・蓋）がある。

1SB095（Fig.59）

調査区の東寄りに位置する。規模は南北 1 間、東西 2 間である。主軸の方位は、N－69°－Wである。柱穴の平面形は比較的整った長方形が多く、建物の長軸側が長く、長軸に直行する辺が短い。1.3m × 1.0m の規模のものが中心である。

出土遺物には弥生土器（甕・壷・支脚・蓋・鉢・高坏）がある。

1SB100（Fig.60、Pla.24）

調査区の中央附近北側に位置する。規模は南北 2 間、東西 1 間である。主軸の方位は、N－16°－

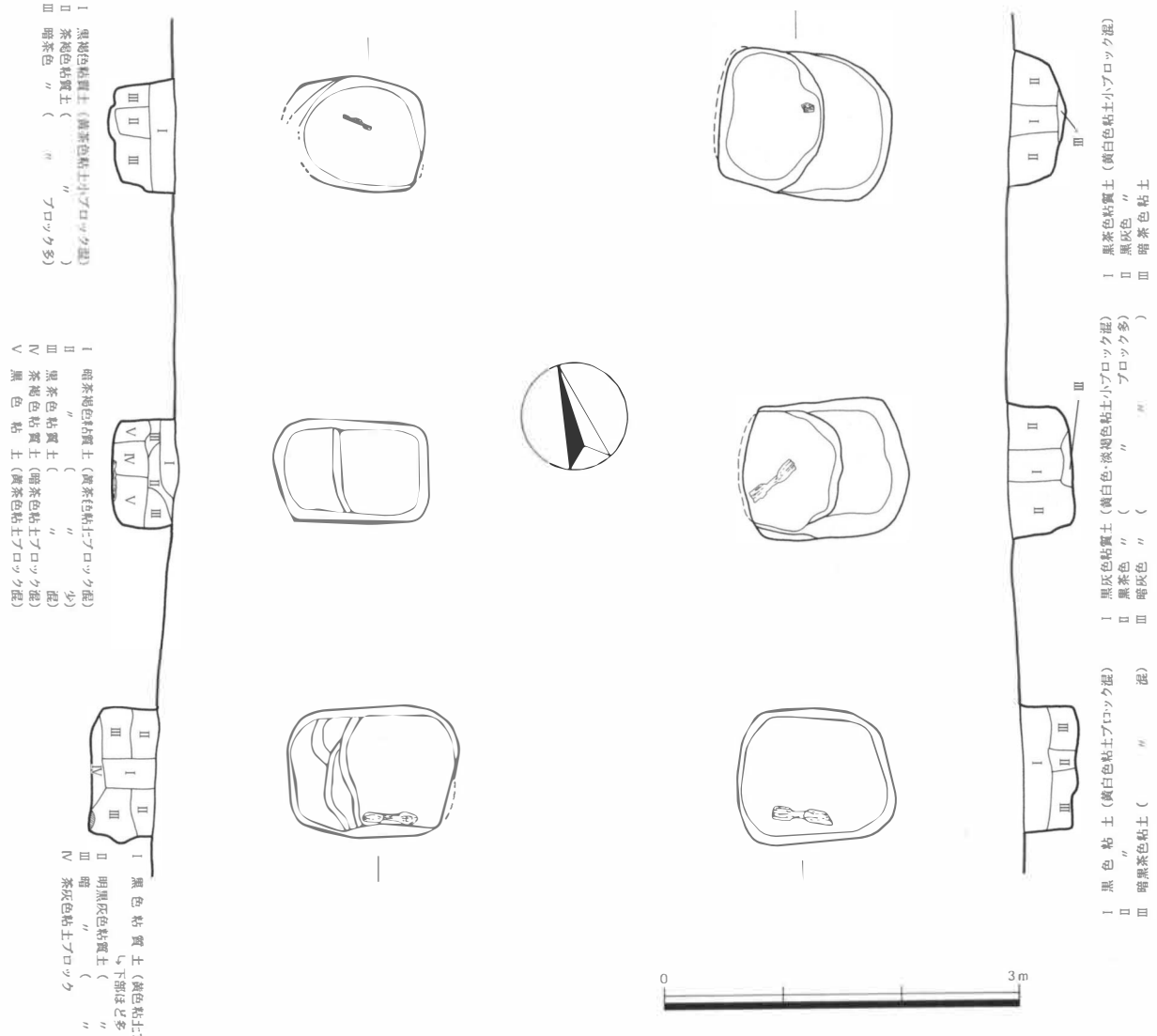


Fig.60　1SB100 実測図（1/60）

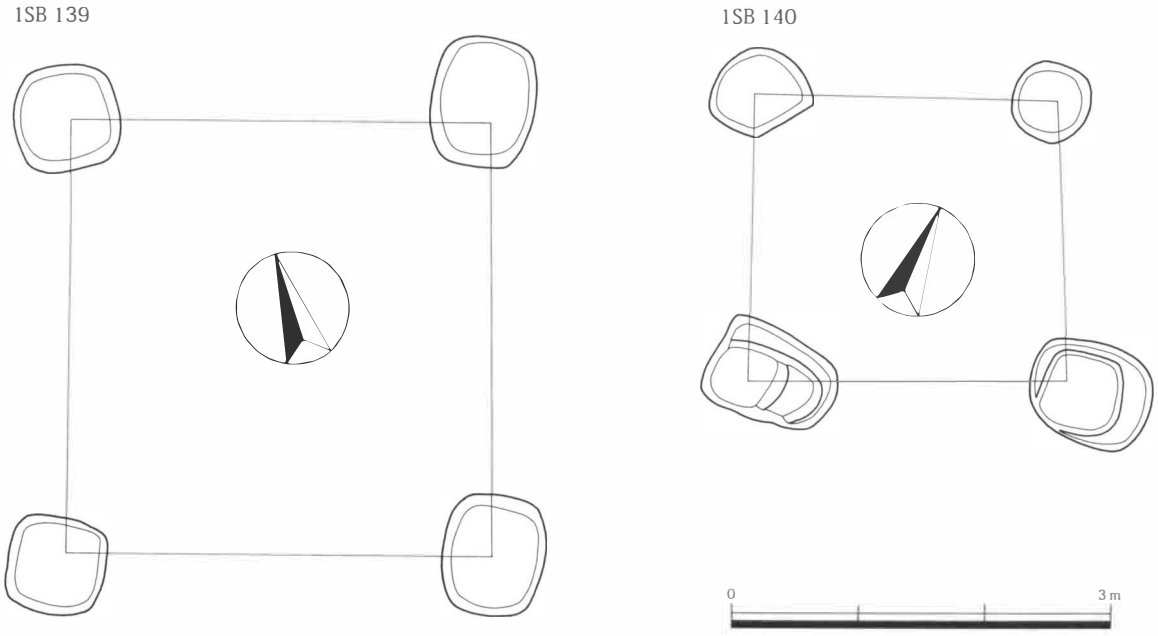


Fig.61　1SB139・1SB140 実測図（1/60）

Eである。柱穴の平面形は整った隅丸長方形で、1.3m × 1.0m の規模のものが中心である。今回の調査の中では、もっとも整った掘立柱建物で、各々の柱穴には杵状の礎板が遺存していた。

出土遺物には弥生土器（甕・壷・鉢・器台・手づくね土器・高坏・不明品）がある。

1SB139（Fig.61）

調査区の中央やや東寄りに位置する。規模は南北 1 間、東西 1 間である。主軸の方位は、N－ 17°－ E である。柱穴の平面形は方形が中心で、0.8m × 0.7m の規模である。

出土遺物には弥生土器（甕・壷・鉢）がある。

1SB140（Fig.61）

調査区の中央やや西よりに位置する。規模は南北 1 間、東西 1 間である。主軸の方位は、N－ 23°－Wである。柱穴の平面形は方形で、0.7m × 0.7m の規模である。

出土遺物には弥生土器（甕・大甕）がある。

1SB149（Fig.62）

調査区の中央やや東よりに位置する。規模は南北 1 間、東西 1 間である。主軸の方位は、N－ 25°－ E である。柱穴の平面形は隅丸方形で、1.1m × 0.9m の規模である。

出土遺物には弥生土器（甕・壷・器台）がある。

1SB172（Fig.62）

調査区の中央やや東よりに位置する。規模は南北 1 間、東西 1 間である。主軸の方位は、N－ 57°－Wである。柱穴の平面形は隅丸方形で、0.5m × 0.6m の規模である。

出土遺物には弥生土器（甕・壷・鉢・器台）がある。

1SB238（Fig.122）

調査区の中央に位置する。規模は南北 1 間、東西 1 間である。主軸の方位は、N－ 67°－Wである。柱穴の平面形は隅丸方形で、0.7m × 0.6m の規模である。

出土遺物には弥生土器（甕・壷・鉢・器台）がある。

1SB314（Fig.62）

調査区の中央やや西寄りに位置する。規模は南北 1 間、東西 1 間である。主軸の方位は、N－ 80°－Wである。柱穴の平面形は隅丸方形で、0.8m × 0.7m の規模である。

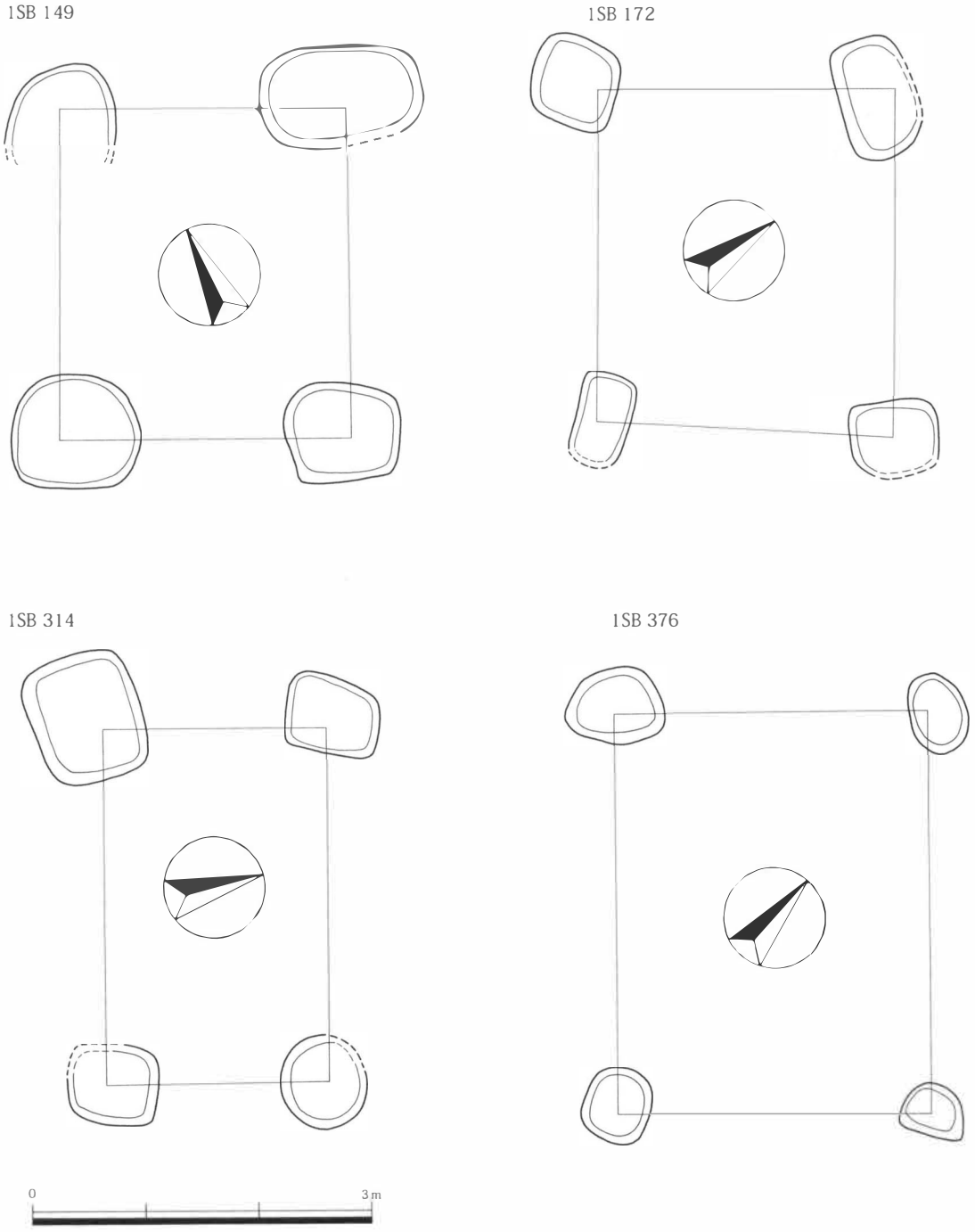


Fig.62　1SB149・1SB172・1SB314・1SB376 実測図（1/60）

出土遺物には弥生土器（甕・壷・高坏・器台）がある。

1SB325（Fig.122）

調査区の中央付近に位置する。規模は南北 1 間、東西 1 間である。主軸の方位は、N－61°－Wである。柱穴の平面形は方形で、0.7m × 0.7m の規模である。

1SB376（Fig.62）

調査区の北西に位置する。規模は南北 1 間、東西 1 間である。主軸の方位は、N－42°－E である。柱穴の平面形は円形で、径 0.6m の規模である。

出土遺物には弥生土器（片）がある。

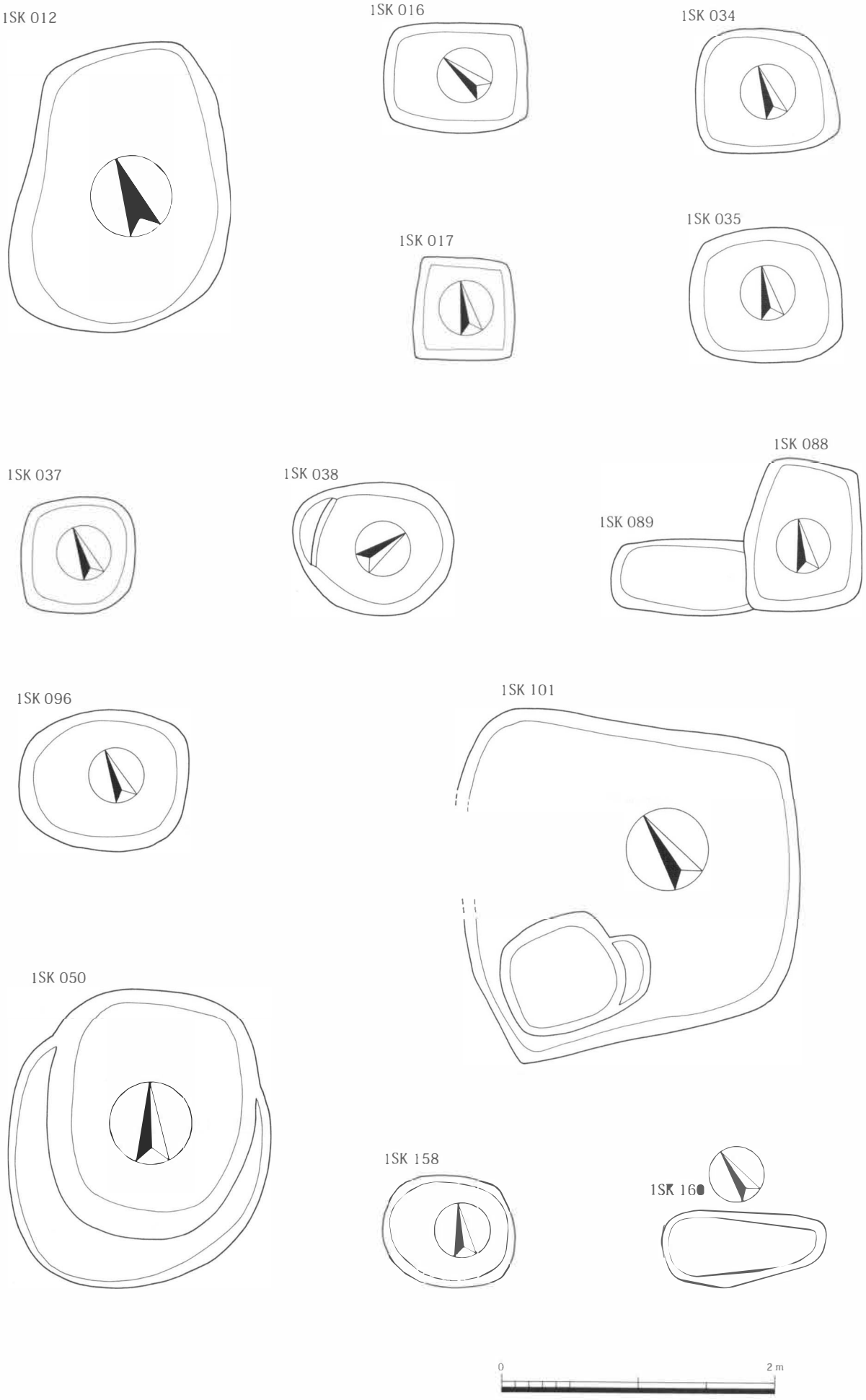


Fig.63　土坑実測図①（1/40）

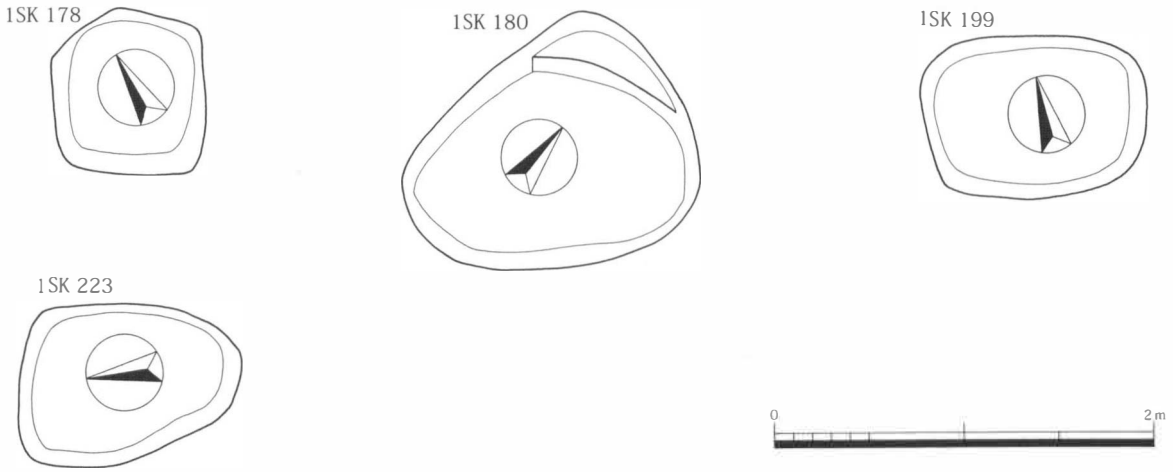


Fig.64　土坑実測図②（1/40）

土坑

1SK012（Fig.63）

調査区の東端に位置する。規模は南北 2.2m × 東西 1.6m である。主軸の方位は、N － 16° － E である。

出土遺物には弥生土器（甕・壷）・須恵器（甕）・土師器（高坏・椀）・黒曜石（鏃・片）がある。

1SK016（Fig.63）

調査区の南東に位置する。規模は南北 1.1m × 東西 0.8m である。主軸の方位は、N － 36° －W である。

出土遺物には弥生土器（甕・壷・鉢）・サヌカイト（片）・黒曜石（片）がある。

1SK017（Fig.63）

調査区の南東に位置する。規模は南北 0.8m × 東西 0.8m である。主軸の方位は、N － 17° － E である。

出土遺物には弥生土器（甕・壷・大甕・蓋・支脚・高坏）・須恵器（片）・土師器（皿・脚台・甕）・黒色土器（A 椀）・黒曜石（片）・石（片）がある。

1SK034（Fig.63）

調査区の東に位置する。規模は南北 1.0m × 東西 1.0m である。主軸の方位は、N － 28° － E である。

出土遺物には弥生土器（甕・高坏・器台・手づくね坏）・黒曜石（片）がある。

1SK035（Fig.63）

調査区の東に位置する。規模は南北 1.0m × 東西 1.0m である。主軸の方位は、N － 20° － E である。

出土遺物には弥生土器（甕・壷）・黒曜石（片）がある。

1SK037（Fig.63）

調査区の南東に位置する。規模は南北 0.9m × 東西 0.9m である。主軸の方位は、N － 28° － E である。

出土遺物には弥生土器（甕・壷・器台・手づくね土器）・黒曜石（片）がある。

1SK038（Fig.63）

調査区の東に位置する。規模は南北 1.0m × 東西 1.2m である。主軸の方位は、N － 60° － E である。

出土遺物には弥生土器（甕・器台）がある。

1SK050（Fig.63）

調査区の中央やや北東寄りに位置する。規模は南北 2.2m × 東西 1.9m である。主軸の方位は、N － 03° － E である。

出土遺物には弥生土器（甕・大甕・壷・器台・蓋・支脚）・黒曜石（片）サヌカイト（片）がある。

1SK071（Fig.122）

調査区の中東やや西よりに位置する。規模は南北 1.0m × 東西 0.7m である。主軸の方位は、N － 55° － E である。

出土遺物には弥生土器（支脚・甕）・サヌカイト（片）がある。

1SK074（Fig.122）
調査区の西寄りに位置する。規模は南北 0.9m ×東西 0.7m である。主軸の方位は、N－06°－E である。
出土遺物には弥生土器（甕・支脚）・縄文土器（深鉢）・黒曜石（片）・サヌカイト（片）がある。
1SK088（Fig.63）
調査区の南東に位置する。規模は南北 1.1m ×東西 0.9m である。主軸の方位は、N－08°－E である。
出土遺物には弥生土器（甕・高坏）がある。
1SK089（Fig.63）
調査区の南東に位置する。規模は南北 0.6m ×東西 1.1m である。主軸の方位は、N－82°－W である。
出土遺物には弥生土器（甕・壷）がある。
1SK096（Fig.63）
調査区の東寄りに位置する。規模は南北 1.0m ×東西 1.2m である。主軸の方位は、N－64°－W である。
出土遺物には弥生土器（甕・支脚・壷）がある。
1SK101（Fig.63）
調査区の東寄りに位置する。規模は南北 2.6m ×東西 2.4m である。主軸の方位は、N－50°－W である。
出土遺物には弥生土器（壷・甕・器台）・縄文土器（甕）・黒曜石（片）がある。
1SK102（Fig.122）
調査区の東寄りに位置する。規模は南北 1.1m ×東西 1.4m である。主軸の方位は、N－66°－E である。
出土遺物には弥生土器（甕・壷）・黒曜石（片）がある。
1SK129（Fig.122）
調査区の東寄りに位置する。規模は南北 0.8m ×東西 0.9m である。主軸の方位は、N－72°－W である。
出土遺物には弥生土器（甕・器台）がある。
1SK158（Fig.63）
調査区の中央やや東寄りに位置する。規模は南北 0.8m ×東西 1.0m である。主軸の方位は、N－80°－W である。
出土遺物には弥生土器（甕・壷・器台・高坏）がある。
1SK178（Fig.64）
調査区の東寄りに位置する。規模は南北 0.9m ×東西 0.8m である。主軸の方位は、N－29°－E である。
出土遺物には弥生土器（甕・鉢）がある。
1SK179（Fig.122）
調査区の東寄りに位置する。規模は南北 0.9m ×東西 0.8m である。主軸の方位は、N－25°－E である。
出土遺物には弥生土器（甕・壷・高坏）がある。
1SK180（Fig.64、Pla.24）
調査区の中央部南西寄りに位置する。規模は南北 1.3m ×東西 1.6m である。主軸の方位は、N－52°－E である。
出土遺物には弥生土器（甕・高坏・壷）がある。
1SK199（Fig.64）
調査区の中央部やや北東寄りに位置する。規模は南北 0.9m ×東西 1.2m である。主軸の方位は、N－75°－W である。

出土遺物には弥生土器（甕・大甕・壷・蓋・鉢・器台・支脚）・サヌカイト（片）・黒曜石（片）がある。

1SK223（Fig.64）

調査区の中央部南寄りに位置する。規模は南北 1.1m ×東西 1.9m である。主軸の方位はＮ－ 03°－Ｅである。

出土遺物には弥生土器（甕・鉢・壷・脚台）がある。

1SK356（Fig.122）

調査区の中央やや西よりに位置する。規模は南北 0.9m ×東西 0.9m である。主軸の方位は、Ｎ－ 80°－Ｅである。

出土遺物には弥生土器（甕・蓋・器台・高坏）がある。

1SK361（Fig.122）

調査区の北西に位置する。規模は南北 0.9m ×東西 1.1m である。主軸の方位は、Ｎ－ 88°－Ｗである。

出土遺物には弥生土器（甕・鉢・壷）がある。

1SK362（Fig.122）

調査区の北西に位置する。規模は南北 1.1m ×東西 1.2m である。主軸の方位は、Ｎ－ 85°－Ｗである。

出土遺物には弥生土器（甕・器台・壷・手づくね蓋）・瓦（片）がある。

1SK386（Fig.122）

調査区の中央部南西寄りに位置する。規模は南北 1.3m ×東西 0.7m である。主軸の方位は、Ｎ－ 05°－Ｗである。

出土遺物には弥生土器（壷・器台・片）・縄文土器（深鉢）がある。

1SK408（Fig.122）

調査区の北東に位置する。規模は南北 1.5m ×東西 1.3m である。主軸の方位は、Ｎ－ 18°－Ｅである。

出土遺物には弥生土器（支脚）がある。

溝状遺構

1SD013（Fig.122）

調査区の南東から西へ向かって走る。幅は不明で、主軸の方位も判然としない。

出土遺物には弥生土器（壷・甕・蓋・支脚・鉢・不明品）がある。

1SD015（Fig.122）

調査区の東端から西へ向かって走る。幅は 0.5m で、主軸の方位は、Ｎ－ 90°－Ｗである。

出土遺物には弥生土器（甕・大甕・壷・蓋）・須恵器（甕）・土師器（甕・鉢・坏・片）・黒色土器（Ａ椀）がある。

1SD040（Fig.122）

調査区の中央から西北西へ向かって走る。幅は 0.6m で、東端では幅員も 2.0m 程に広がり、方向も変化する。西側での主軸の方位は、Ｎ－ 88°－Ｗである。

出土遺物には弥生土器（甕・壷・蓋・高坏・面子）・染付（碗）・縄文土器（深鉢）・サヌカイト（片）・黒曜石（片）・石（片）がある。

1SD080（Fig.122）

調査区の中央北端から西へ向かって走る。幅は 0.5m で、主軸の方位は、Ｎ－ 88°－Ｅである。

出土遺物には弥生土器（甕）・須恵器（鉢）・土師器（鉢）・サヌカイト（片）・黒曜石（片）がある。

1SD087（Fig.122）

調査区の南東から西北西へ向かって走る。幅は東側で 1.0m、西側で 0.3m となる。主軸の方位は、Ｎ－ 80°－Ｗである。

出土遺物には弥生土器（甕）がある。

1SD091（Fig.122）

調査区の南端東寄りから北へ向かって走る。幅は 1.0m で、主軸の方位は、Ｎ－ 01°－Ｅである。

Fig.65　1SX070 実測図（1/60）

出土遺物には弥生土器（甕・壷・蓋）がある。

1SD374（Fig.122）

調査区の西寄りから西北西へ向かって走る。幅は 0.8m で、主軸の方位は、N－82°－Wである。

出土遺物には弥生土器（甕・大甕・器台）・縄文土器（深鉢）・サヌカイト（片）がある。

不明遺構

1SX066（Fig.122）

調査区の南西に位置する。南北の規模は不明で、東西 6.1m である。出土遺物には弥生土器（甕・壷・

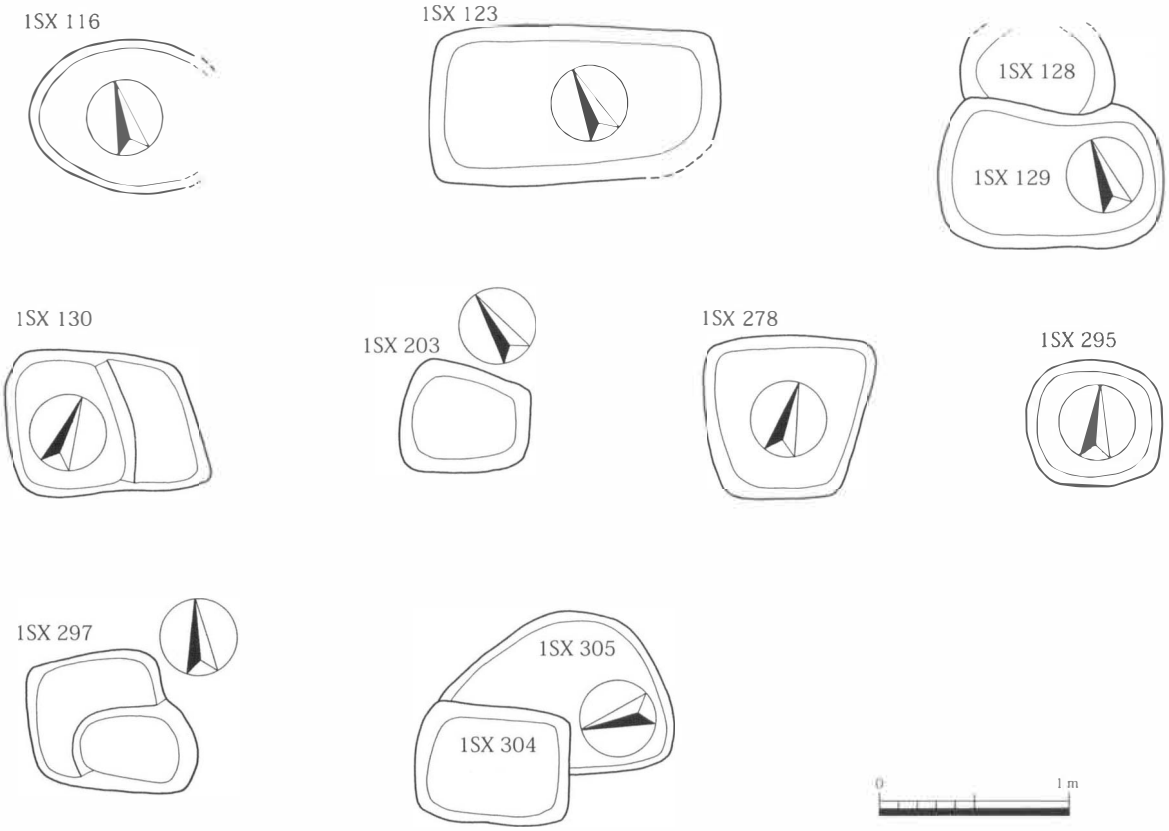


Fig.66　不明遺構実測図（1/40）

高坏・鉢）がある。

1SX070（Fig.65）

調査区の中央付近に位置する。円形の周溝状遺構である。規模は南北 8.5m ×東西 9.7m である。溝の幅は、0.5m 程度である。出土遺物には弥生土器（甕・大甕・壷・鉢・高坏・支脚）・縄文土器（深鉢）がある。

1SX093（Fig.122）

調査区の南東寄りに位置する。規模は南北 0.5m ×東西 0.5m である。出土遺物には弥生土器（大甕・甕・壷）がある。

1SX094（Fig.122）

調査区の東寄りに位置する。規模は南北 0.4m ×東西 0.6m である。出土遺物には弥生土器（甕・壷・蓋）がある。

1SX116（Fig.66）

調査区の東寄りに位置する。規模は南北 0.8m ×東西 0.9m である。出土遺物には弥生土器（甕・壷・高坏）がある。

1SX120（Fig.122）

調査区の中央に位置する。規模は南北 0.5m ×東西 0.5m である。出土遺物には弥生土器（甕）・縄文土器（深鉢）がある。

1SX123（Fig.66）

調査区の東寄りに位置する。規模は南北 0.8m ×東西 1.6m である。出土遺物には弥生土器（甕・壷・蓋・器台）がある。

1SX128（Fig.66）
調査区の東寄りに位置する。規模は南北 0.6m ×東西 0.8m である。出土遺物には弥生土器（甕・器台・壷）がある。
1SX129（Fig.66）
調査区の東寄りに位置する。規模は南北 0.7m ×東西 1.2m である。出土遺物には弥生土器（甕・器台）がある。
1SX130（Fig.66）
調査区の中央部南寄りに位置する。規模は南北 0.7m ×東西 1.0m である。出土遺物には弥生土器（甕）・縄文土器（深鉢）・サヌカイト（片）がある。
1SX134（Fig.122）
調査区の東寄りに位置する。規模は南北 0.8m ×東西 0.7m である。出土遺物には弥生土器（甕・壷・蓋・器台）・須恵器（片）・サヌカイト（片）・黒曜石（片）がある。
1SX150（Fig.122）
調査区の中央部南西寄りに位置する。規模は南北 0.6m ×東西 0.6m である。出土遺物には弥生土器（甕・器台・支脚・椀）・縄文土器（深鉢）がある。
1SX160（Fig.122）
調査区の中央部南西寄りに位置する。規模は南北 0.7m ×東西 0.9m である。出土遺物には弥生土器（甕・片）・縄文土器（深鉢）がある。
1SX161（Fig.122）
調査区の東寄りに位置する。規模は南北 0.3m ×東西 0.3m である。出土遺物には弥生土器（甕・片）がある。
1SX162（Fig.122）
調査区の中央部東寄りに位置する。規模は南北 0.3m ×東西 0.3m である。出土遺物には弥生土器（甕・壷・支脚・器台・不明品）がある。
1SX171（Fig.122）
調査区の東寄りに位置する。規模は南北 0.4m ×東西 0.4m である。出土遺物には縄文土器（深鉢）がある。
1SX175（Fig.122）
調査区の東寄りに位置する。規模は南北 0.5m ×東西 0.5m である。出土遺物には弥生土器（甕・器台・鉢・壷・不明品）がある。
1SX195（Fig.122）
調査区の中央部北東寄りに位置する。規模は南北 0.6m ×東西 0.5m である。出土遺物には弥生土器（甕・壷）がある。
1SX201（Fig.122）
調査区の東寄りに位置する。規模は南北 0.7m ×東西 0.8m である。出土遺物には弥生土器（甕・大甕・壷・高坏・器台・台付鉢・蓋）・サヌカイト（片）がある。
1SX203（Fig.66）
調査区の東寄りに位置する。規模は南北 0.6m ×東西 0.7m である。出土遺物には弥生土器（甕・壷・鉢）がある。
1SX247（Fig.122）
調査区の中央に位置する。規模は南北 0.8m ×東西 0.3m である。出土遺物には弥生土器（甕・器台）・縄文土器（深鉢）がある。
1SX259（Fig.122）
調査区の中央部北よりに位置する。規模は南北 0.7m ×東西 0.8m である。出土遺物には弥生土器（甕・蓋）・縄文土器（深鉢）・サヌカイト（片）・黒曜石（片）がある。

1SX267（Fig.122）
調査区の中央部北よりに位置する。規模は南北 0.7m ×東西 0.7m である。出土遺物には弥生土器（甕・器台）・縄文土器（深鉢）がある。
1SX269（Fig.122）
調査区の中央附近に位置する。規模は南北 0.6m ×東西 0.5m である。出土遺物には弥生土器（片）・縄文土器（深鉢）がある。
1SX272（Fig.122）
調査区の中央附近北寄りに位置する。規模は南北 0.8m ×東西 0.8m である。出土遺物には弥生土器（甕・壷・鉢）・縄文土器（深鉢）がある。
1SX275（Fig.122）
調査区の中央附近に位置する。規模は南北 0.4m ×東西 0.5m である。出土遺物には弥生土器（甕・器台）・縄文土器（深鉢）・黒曜石（片）がある。
1SX278（Fig.66）
調査区の中央附近に位置する。規模は南北 0.9m ×東西 0.9m である。出土遺物には弥生土器（甕）・縄文土器（深鉢）がある。
1SX295（Fig.66）
調査区の中央部南寄りに位置する。規模は南北 0.7m ×東西 0.6m である。出土遺物には弥生土器（甕）・縄文土器（深鉢）がある。
1SX297（Fig.66）
調査区の中央部南寄りに位置する。規模は南北 0.7m ×東西 0.9m である。出土遺物には弥生土器（甕）・縄文土器（深鉢）がある。
1SX299（Fig.122）
調査区の中央部南寄りに位置する。規模は南北 0.3m ×東西 0.5m である。出土遺物には縄文土器（深鉢）がある。
1SX301（Fig.122）
調査区の中央部南寄りに位置する。規模は南北 0.3m ×東西 0.5m である。出土遺物には弥生土器（甕）・縄文土器（深鉢）がある。
1SX304（Fig.66）
調査区の中央部南寄りに位置する。規模は南北 0.8m ×東西 0.6m である。出土遺物には弥生土器（甕）・縄文土器（深鉢）がある。
1SX305（Fig.66）
調査区の中央部南寄りに位置する。規模は南北 1.1m ×東西 0.9m である。出土遺物には弥生土器（甕）・縄文土器（深鉢）がある。
1SX307（Fig.122）
調査区の中央部南寄りに位置する。規模は南北 0.6m ×東西 0.6m である。出土遺物には弥生土器（甕）・縄文土器（深鉢）がある。
1SX311（Fig.122）
調査区の中央附近に位置する。規模は南北 0.5m ×東西 0.7m である。出土遺物には弥生土器（甕）・縄文土器（深鉢）がある。
1SX315（Fig.122）
調査区の中央部南西寄りに位置する。規模は南北 0.6m ×東西 0.6m である。出土遺物には弥生土器（甕・鉢）・縄文土器（深鉢）がある。
1SX316（Fig.122）
調査区の中央附近に位置する。規模は南北 0.5m ×東西 0.8m である。出土遺物には弥生土器（甕・高坏）・縄文土器（深鉢）がある。

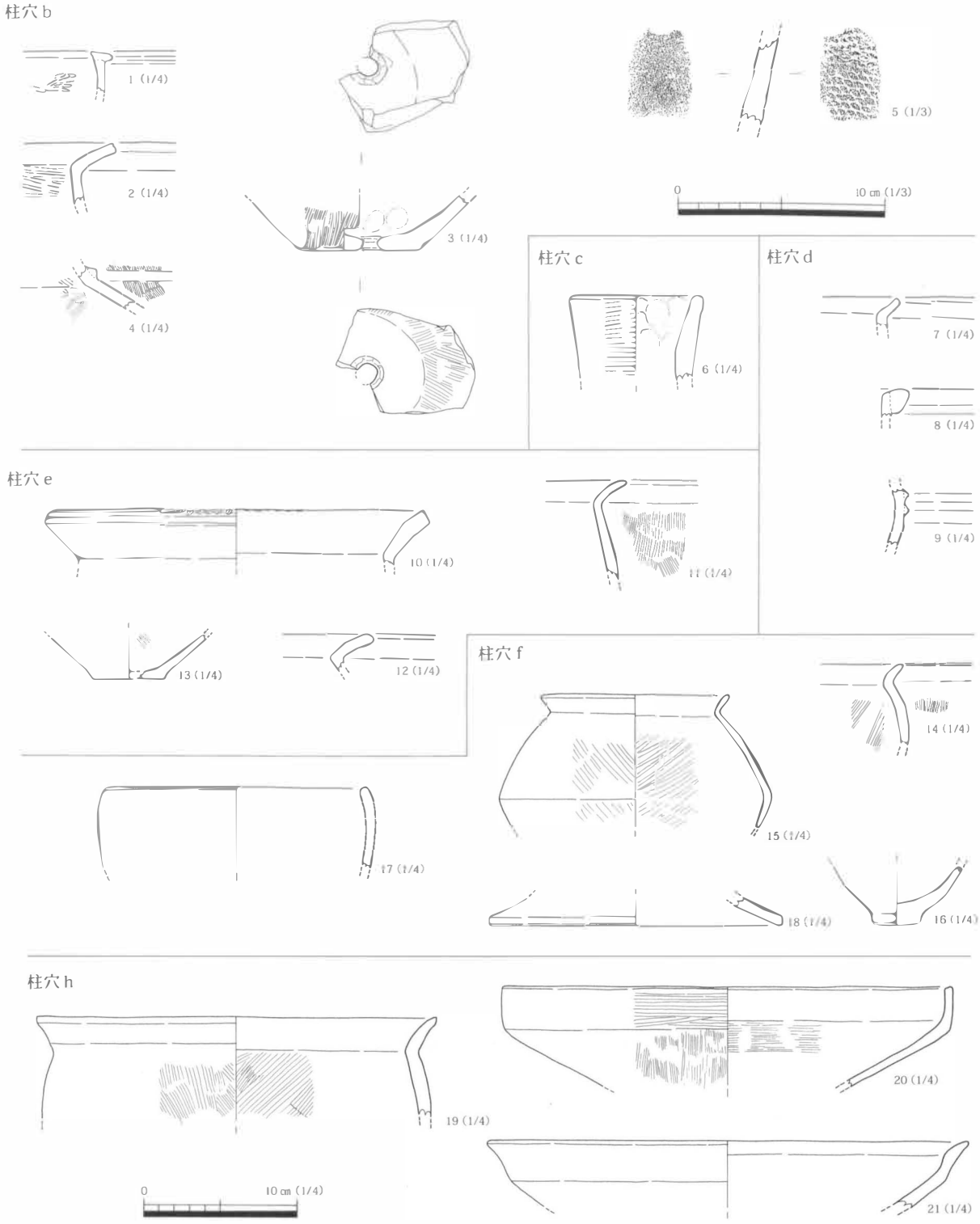


Fig.67　1SB090 出土遺物実測図（1/4・1/3）

1SX317（Fig.122）

調査区の中央部南西寄りに位置する。規模は南北 0.6m ×東西 1.0m である。出土遺物には弥生土器（甕・高坏）・縄文土器（深鉢）がある。

1SX322（Fig.122）

調査区の西寄り南端に位置する。規模は南北 0.5m ×東西 0.5m である。出土遺物には弥生土器（壷・甕）・縄文土器（深鉢）がある。

1SX323（Fig.122）

調査区の西寄り南端に位置する。規模は南北 0.7m ×東西 0.6m である。出土遺物には弥生土器（壷・甕）・縄文土器（深鉢）がある。

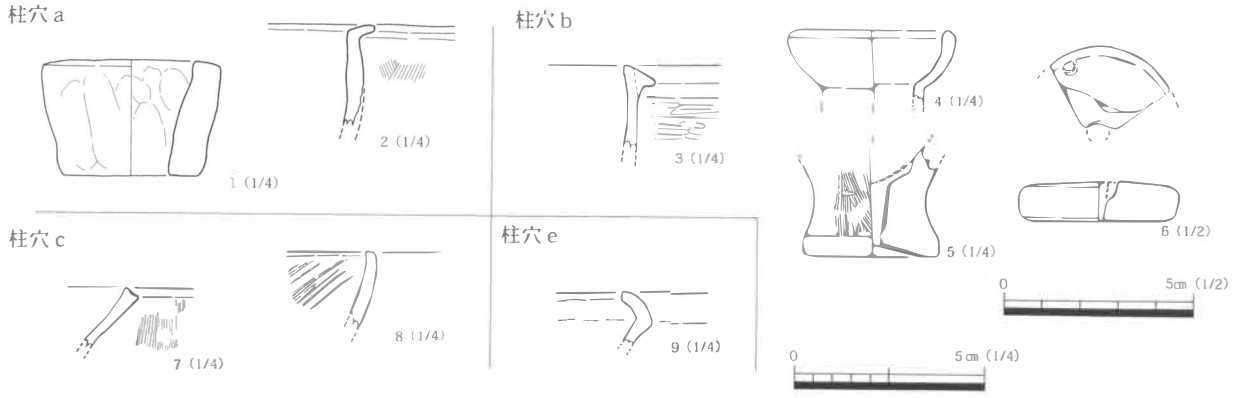


Fig.68　1SB095 出土遺物実測図（1/4・1/2）

1SX324（Fig.122）

調査区の中央部南西寄りに位置する。規模は南北 0.9m ×東西 0.3m である。出土遺物には弥生土器（甕・高坏）・縄文土器（深鉢）がある。

1SX327（Fig.122）

調査区の中央附近に位置する。規模は南北 0.5m ×東西 0.5m である。出土遺物には弥生土器（甕）・縄文土器（深鉢）がある。

1SX329（Fig.122）

調査区の中央部西寄りに位置する。規模は南北 0.3m ×東西 0.3m である。出土遺物には弥生土器（片）・縄文土器（深鉢）がある。

1SX335（Fig.122）

調査区の中央部西寄りに位置する。規模は南北 0.4m ×東西 0.4m である。出土遺物には弥生土器（甕・壷）・縄文土器（深鉢）がある。

1SX379（Fig.122）

調査区の西寄り北端に位置する。規模は南北 0.3m ×東西 0.3m である。出土遺物には弥生土器（片）・縄文土器（深鉢）・黒曜石（鏃）がある。

1SX384（Fig.122）

調査区の西寄り南端に位置する。規模は他の遺構に切られているため不明である。出土遺物には弥生土器（甕）・縄文土器（深鉢）がある。

1SX388（Fig.122）

調査区の南西寄りに位置する。規模は南北 0.6m ×東西 0.6m である。出土遺物には弥生土器（甕）・縄文土器（深鉢）がある。

1SX404（Fig.122）

調査区の中央附近に位置する。規模は南北 0.5m ×東西 0.5m である。出土遺物には弥生土器（甕・壷・鉢）・黒曜石（片）がある。

1SX406（Fig.122）

調査区の中央附近に位置する。規模は南北 0.6m ×東西 0.6m である。出土遺物には弥生土器（甕・壷）・縄文土器（深鉢）がある。

出土遺物

今回の調査では、総量でパンコンテナー約 60 箱分の遺物が出土した。弥生時代の遺物が中心となるが、縄文時代前期を中心とした時期の遺物も出土している。なお、遺物の詳細は遺物観察表によっているので本文では説明を割愛した遺物もあるので注意されたい。以下、遺構別に報告する。

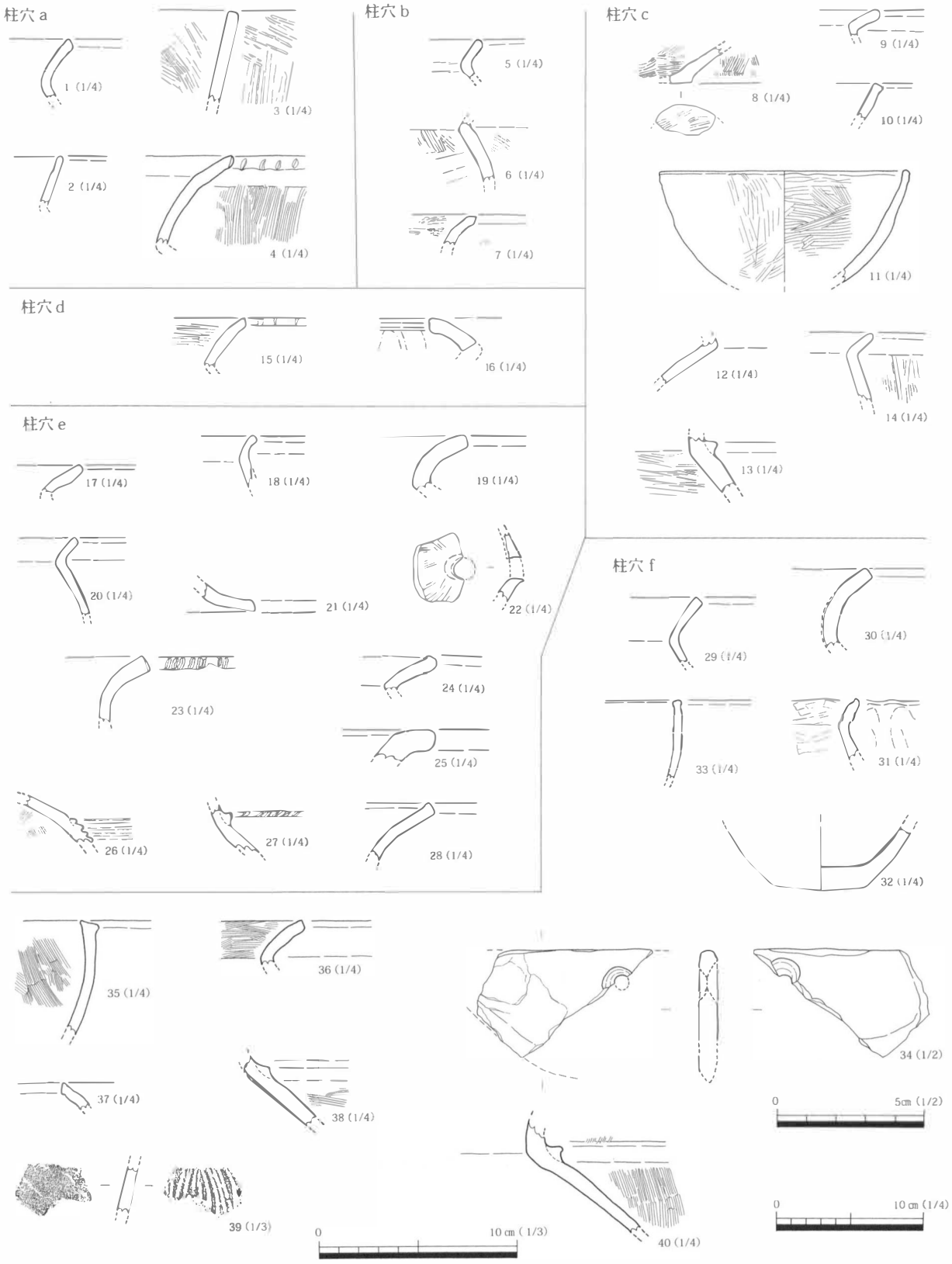


Fig.69　1SB100 出土遺物実測図（1/4・1/3・1/2）

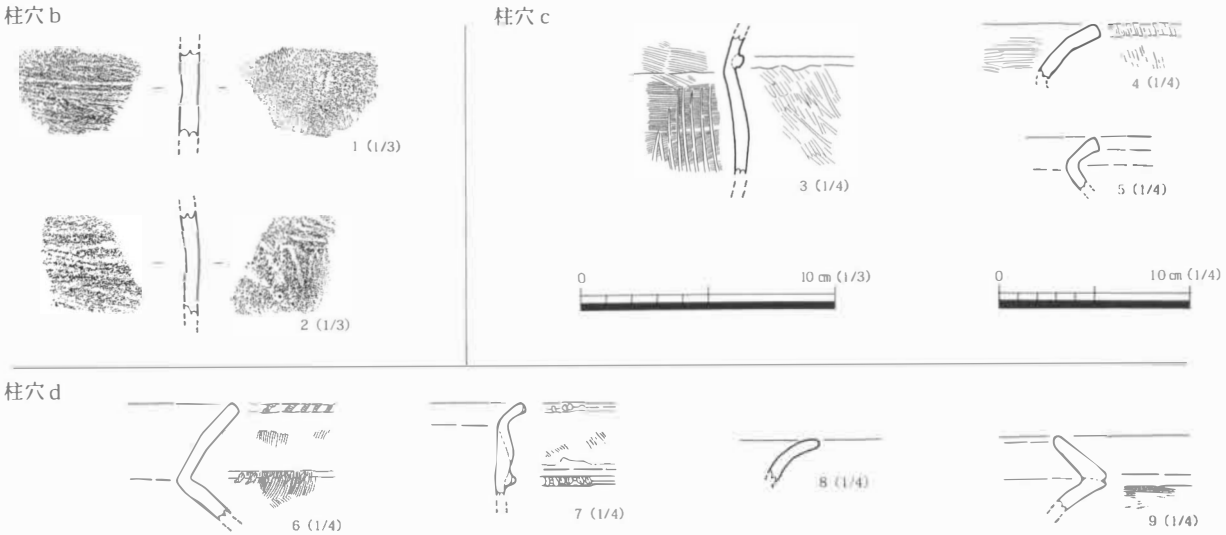


Fig.70　1SB139 出土遺物実測図（1/4・1/3）

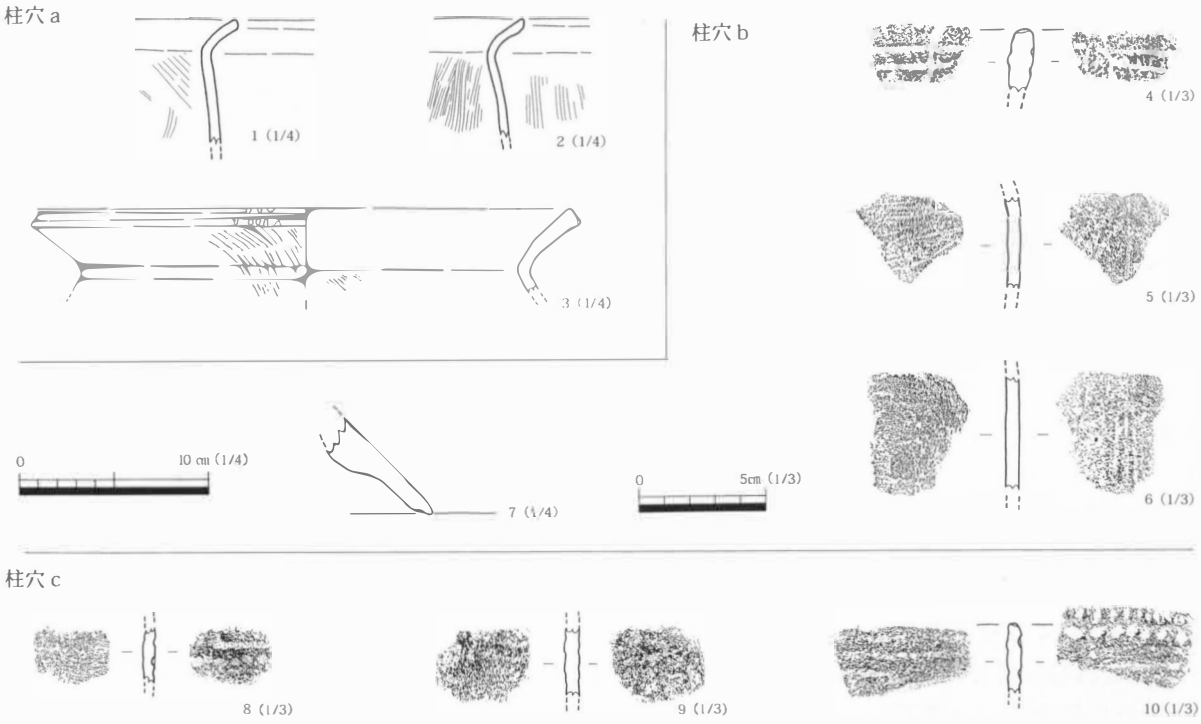


Fig.71　1SB140 出土遺物実測図（1/4・1/3）

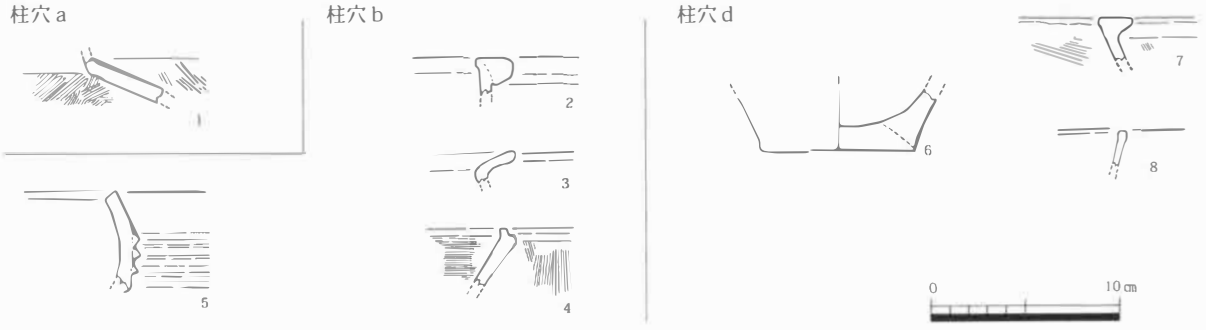


Fig.72　1SB149 出土遺物実測図（1/4）

1SB090 出土遺物（Fig.67、Pla.25）

１～５は柱穴ｂからの出土である。１～４は弥生土器で、１～３は甕である。１は小さな鍬先状の口縁部である。３は底部の資料であるが、底面のほぼ中央に、内外面から焼成後に穿孔を施している。４は壷の体部で、頸部に凸帯を１条巡らせている。５は縄文土器の細片で、深鉢であろう。

６は柱穴ｃから出土した弥生土器の器台である。口縁部の資料で、外面には刷毛目を施している。

７から９は柱穴ｄからの出土で、すべて弥生土器である。７と８は甕の口縁部である。９は球形の壷の体部で、外面に凸帯が２条貼り付けられている。

10～13は柱穴ｅから出土した弥生土器である。10～12は外反する甕の口縁部である。13は壷の底部である。

14～18は柱穴ｆからの出土で、すべて弥生土器である。14～16は壷である。14は短頸壷である。15は体部が算盤珠状となる短頸壷である。16は底部の資料であるが、底部に円盤貼り付け技法の影響をみることができる。17は鉢の口縁部である。18は蓋である。

19～21は柱穴ｈからの出土で、すべて弥生土器である。19は外反する甕の口縁部である。20は鉢であるが、高坏かもしれない。21は高坏の口縁部である。

1SB095 出土遺物（Fig.68、Pla.25・26）

１と２は柱穴ａから出土した弥生土器である。１は支脚で、厚い器壁が特徴的である。２は甕の口縁部である。

３～６は柱穴ｂからの出土で、すべて弥生土器である。３は甕の口縁部である。４は口縁部がラッパ状にひらいた壷の口縁部である。５は厚底の甕底部である。６は土製の紡錘車である。

７と８は柱穴ｃからの出土で、いずれも弥生土器である。７は器台の口縁部である。８は鉢の口縁部の資料である。

９は柱穴ｅから出土した弥生土器である。袋状口縁壷の口縁部で、やや二重口縁に近い印象を受ける。

1SB100 出土遺物（Fig.69、Pla.26・27）

１～４は柱穴ａから出土した弥生土器である。いずれも半裁時に出土している。１と２は甕である。いずれも外反する口縁部をもつものである。３は鉢である。４は壷の口縁部で、口縁端部の面には刻目が施される。

５～７は柱穴ｂから出土した弥生土器である。いずれも裏込からの出土である。５と６は甕である。いずれも外反する口縁部をもつものである。７は壷の口縁部である。

８～13は柱穴ｃから出土した弥生土器である。８～11は半裁時に出土した。８と９は甕である。10と11は鉢である。11は椀に近い器形を呈している。12～14は裏込からの出土である。12と13は壷である。14は甕である。

15と16は柱穴ｄから出土した弥生土器である。いずれも半裁時に出土した。15は甕の口縁部である。16は袋状口縁壷の口縁部である。

17～28は柱穴ｅから出土した弥生土器である。17～22は半裁時に出土した。17～20は甕である。21は高坏の脚底部である。底部の面は設置しない。22は不明品であるが、焼成前の穿孔が１ヶ所認められる。23～28は裏込から出土した。23～25は甕である。23は外反する口縁部の端部面に刻目を施す。25は器壁が厚いのが印象的である。26と27は壷である。26は体部の細片で、肩部に３条の三角凸帯あるいは２条のM字凸帯を巡らせている。28は器台の口縁部である。

29～40は柱穴ｆからの出土である。29～34は半裁時に出土し、29～32は弥生土器である。29～31は甕である。いずれも外反する口縁部を持つものである。32は鉢の底部である。33は土師器の椀である。34は石包丁である。35～39は裏込からの出土で、35～38は弥生土器である。35は甕としたが鉢かも知れない。36は外反する口縁部を持つ甕である。37と38は壷である。37は袋状口縁壷の口縁部である。38は頸部の資料で、凸帯を１条巡らせている。39は縄文土器の細片であるが、深鉢であろう。

40は柱痕内から出土した弥生土器の壷である。頸部に凸帯を１条巡らせる。

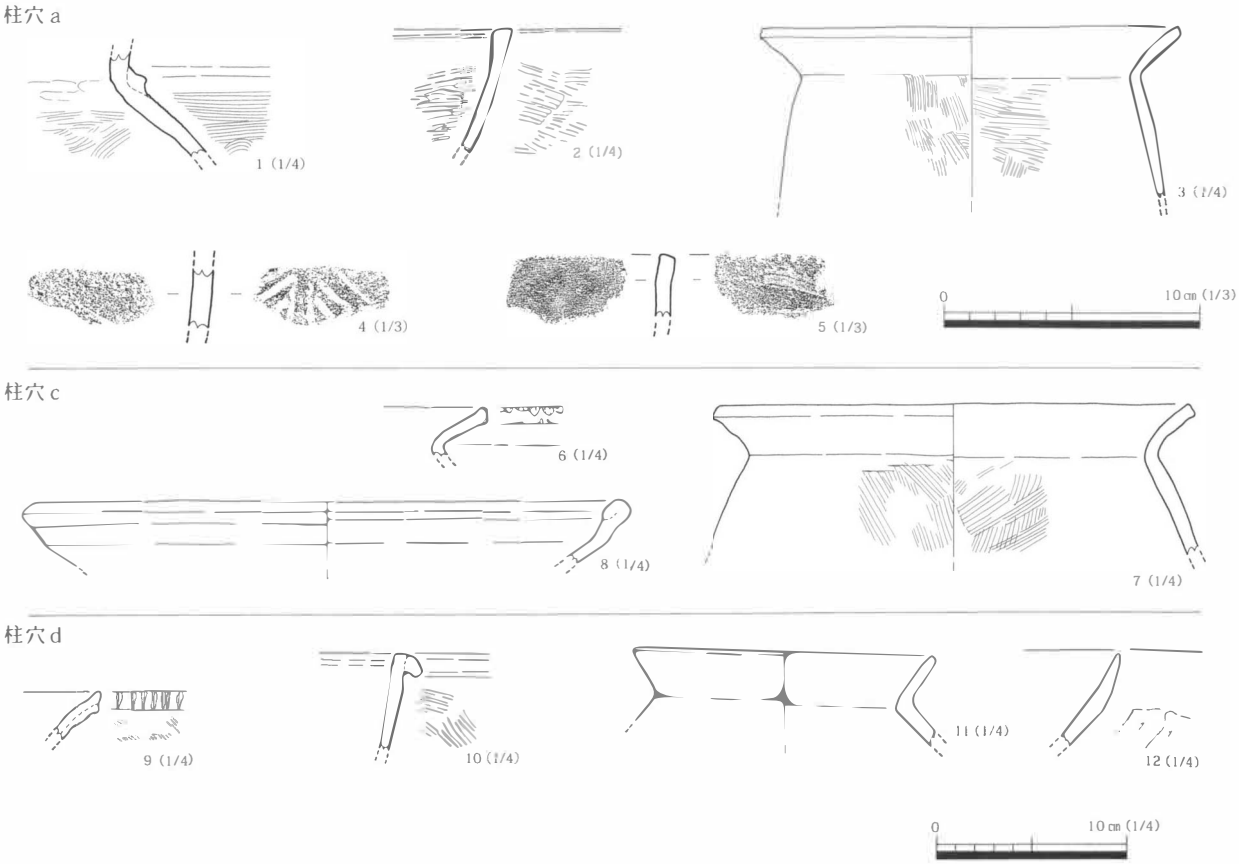


Fig.73　1SB172 出土遺物実測図（1/4・1/3）

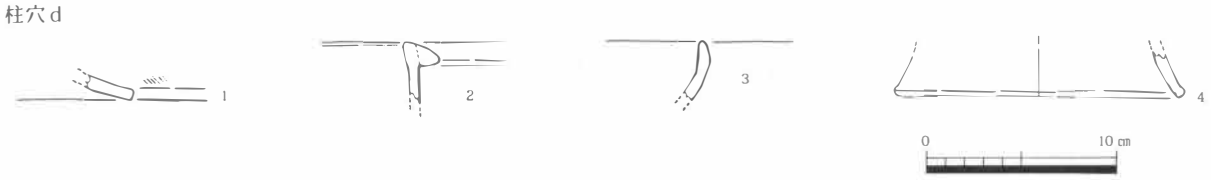


Fig.74　1SB238 出土遺物実測図（1/4）

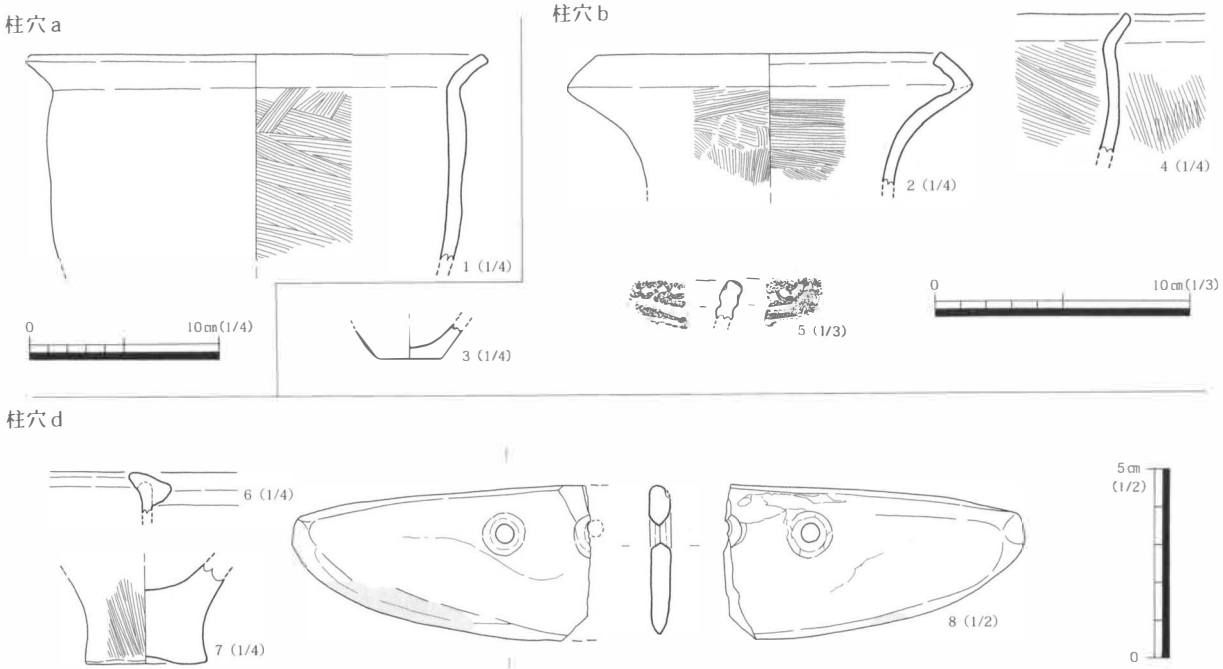


Fig.75　1SB314 出土遺物実測図（1/4・1/3・1/2）

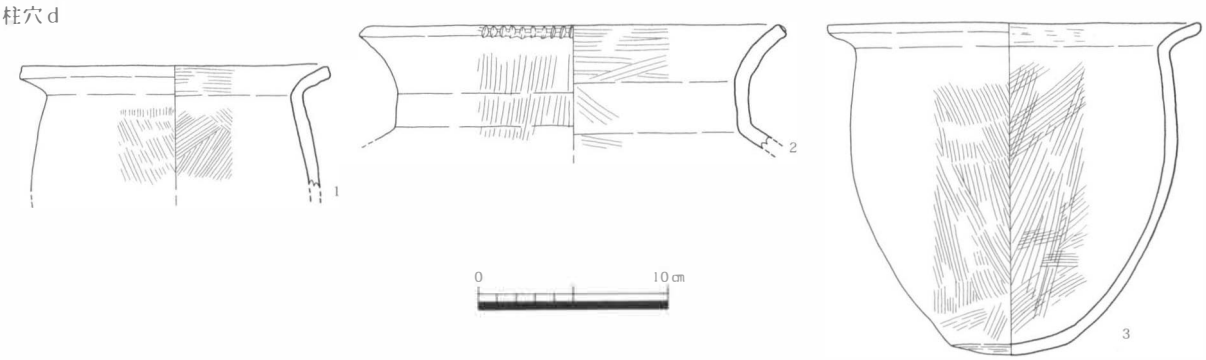


Fig.76　1SB325 出土遺物実測図（1/4）

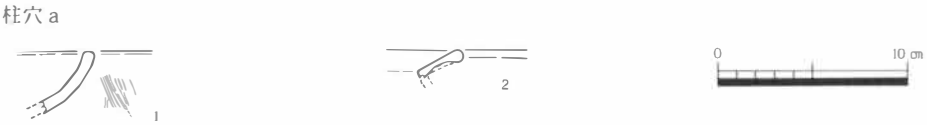


Fig.77　1SB376 出土遺物実測図（1/4）

1SB139 出土遺物（Fig.70、Pla.27）

1 と 2 は柱穴 b から出土した縄文土器である。いずれも深鉢であろう。2 は外面に凹線文が認められる。ともに曽畑式の範疇であろう。

3 ～ 5 は柱穴 c から出土した弥生土器である。3 は甕の体部の資料と思われる。内外面ともに刷毛目が施されている。4 は壷の口縁部である。口縁端部の面には刻目を施している。5 は外反する甕の口縁部である。

6 ～ 9 は柱穴 d から出土した弥生土器である。6 ～ 8 は甕である。6 は口縁端部の面に刻目を施している。7 は如意形口縁を持つ甕で、体部に刻目凸帯が 1 条貼り付けられる。9 は二重口縁壷の口縁部である。口縁部と擬口縁の接点は外面に沈線状の凹みが認められる。

1SB140 出土遺物（Fig.71、Pla.27・28）

1 ～ 3 は柱穴 a から出土した弥生土器である。すべて甕であるが、1 と 2 は如意形の口縁部を有するものである。3 は外反する口縁部を持つ。

4 ～ 7 は柱穴 b からの出土で、4 ～ 6 は縄文土器である。4 は口縁部の資料で、内外面に凹線文が認められ、口唇部には刻目を施す。6 は外面に凹線文を施している。いずれも深鉢の細片で曽畑式の範疇か。7 は弥生土器の器台の底部と思われる。

8 ～ 10 は柱穴 c から出土した縄文土器である。8 と 10 は外面に凹線文を施している。すべて深鉢の細片と思われ、曽畑式の範疇か。

1SB149 出土遺物（Fig.72、Pla.28）

1 は柱穴 a から出土した弥生土器である。壷の頸部で、口縁部は鋭く立ち上がるようである。

2 ～ 5 は柱穴 b から出土した弥生土器である。2 と 3 は甕である。2 は口縁部に蒲鉾状断面をもつ凸帯を貼り付けるものである。3 は外反する口縁部である。4 は器台の口縁部である。5 は無頸壷である。外面に 4 条の三角凸帯あるいは 2 条のM字凸帯を巡らせている。

6 ～ 8 は柱穴 d から出土した弥生土器である。6 と 7 は甕である。8 は鉢の口縁部である。

1SB172 出土遺物（Fig.73、Pla.28）

1 ～ 5 は柱穴a からの出土で、1 ～ 3 は弥生土器である。1 は壷で、頸部に凸帯が 1 条巡る。2 は鉢の口縁部である。3 は甕である。4 と 5 は縄文土器である。4 は外面に凹線文を施している。5 は口縁部の資料で、口唇部に刻目を施している。いずれも深鉢で曽畑式の範疇か。

6 ～ 8 は柱穴 c からの出土で、すべて弥生土器である。6 と 7 は甕である。6 は外反する口縁部の端

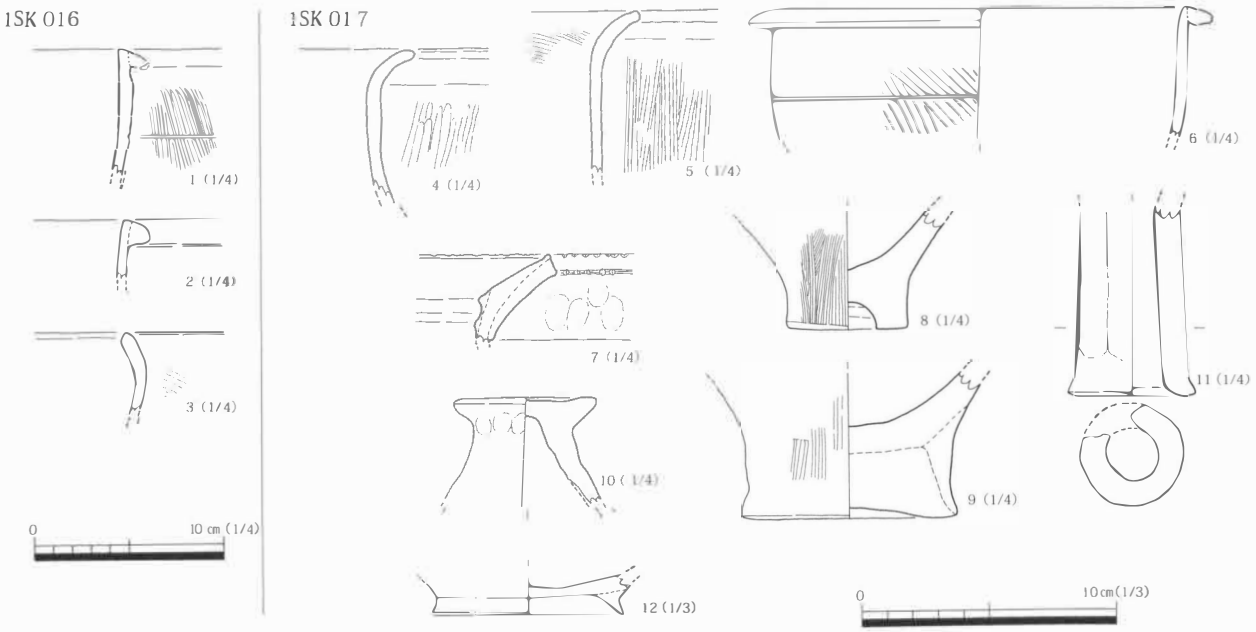


Fig.78　1SK016・1SK017 出土遺物実測図（1/4・1/3）

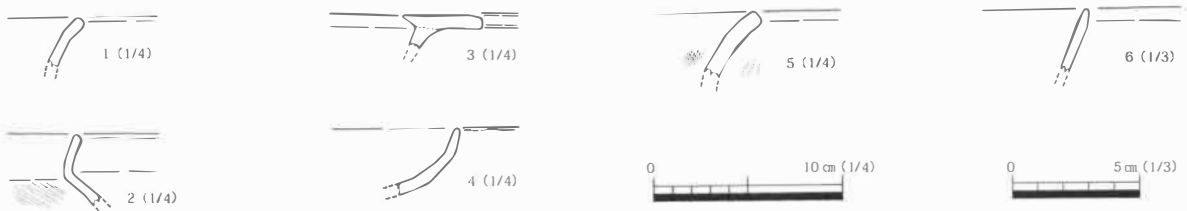


Fig.79　1SK034 出土遺物実測図（1/4・1/3）

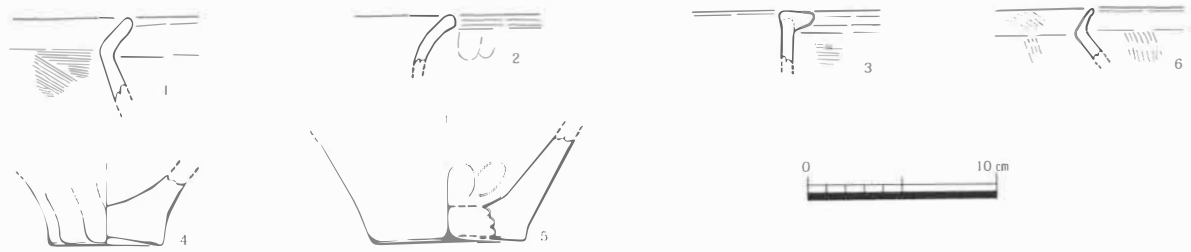


Fig.80　1SK035 出土遺物実測図（1/4）

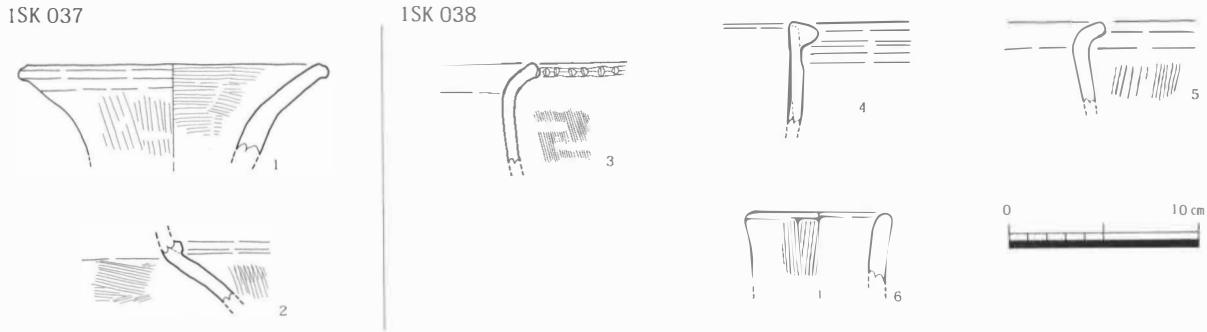


Fig.81　1SK037・1SK038 出土遺物実測図（1/4）

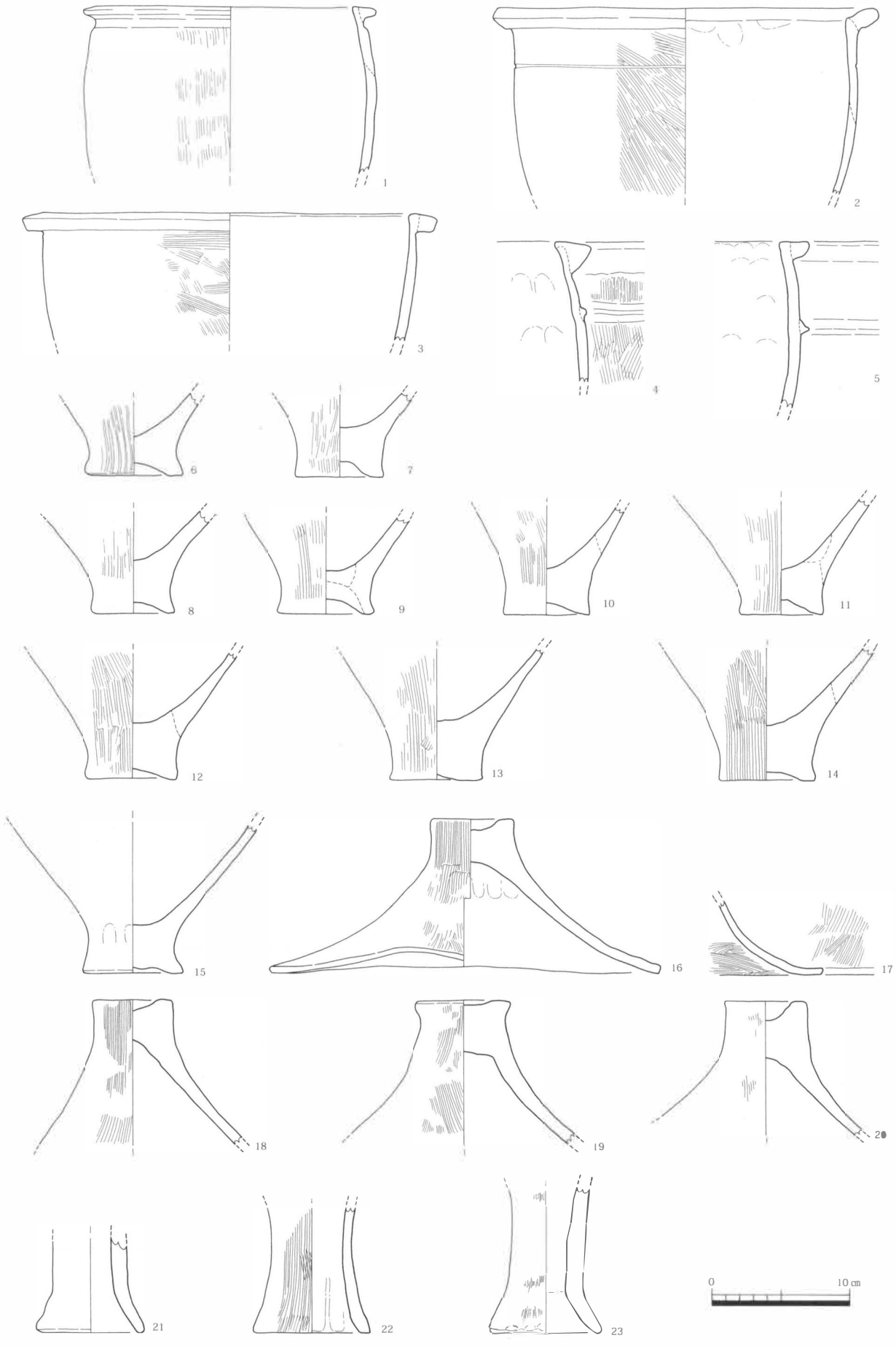


Fig.82　1SK050 出土遺物実測図①（1/4）

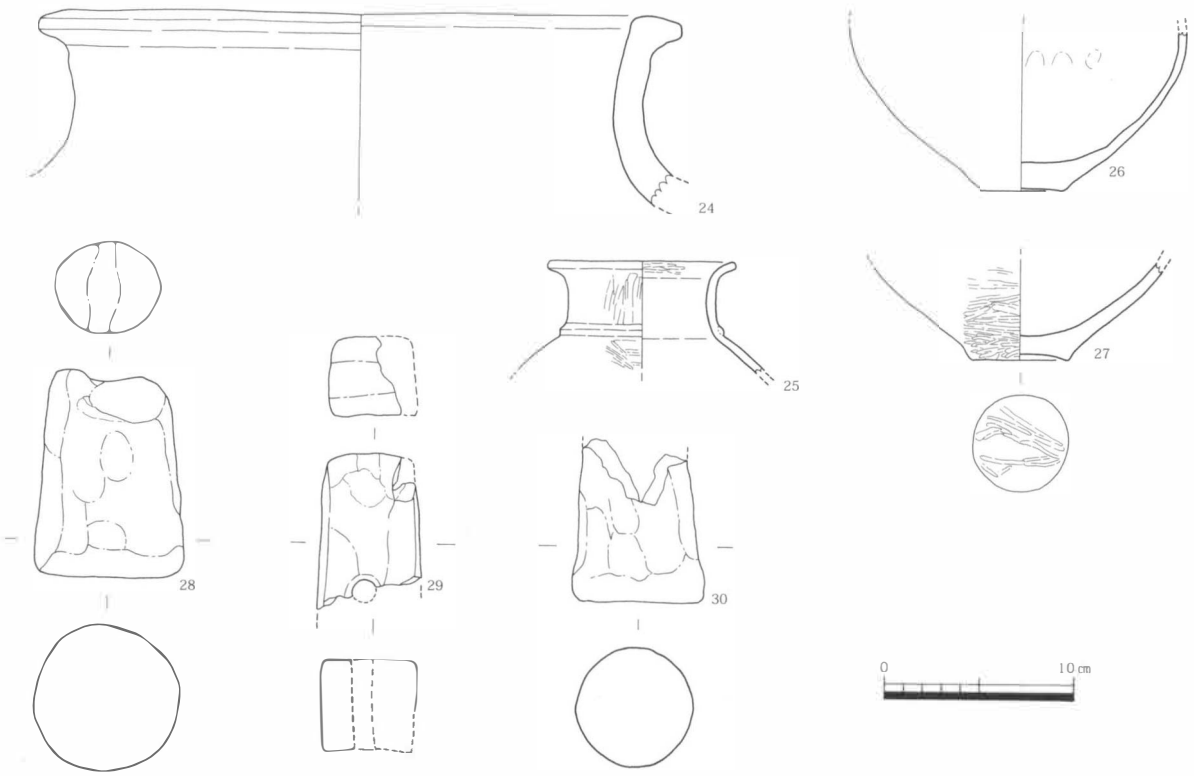


Fig.83　1SK050 出土遺物実測図②（1/4）

部面の上下両辺に刻目を施している。8 は鉢である。口縁部は内側に折り返して肥厚させている。

9 ～ 12 は柱穴 d からの出土で、すべて弥生土器である。9 ～ 11 は甕である。9 は口縁部端部の面全体に刻目を施している。10 は口縁部に凸帯を貼り付けるが、貼り付けの際の横ナデで凸帯下位が凹んでいるのが印象的である。12 は鉢である。

1SB238 出土遺物（Fig.74、Pla.28）

すべて柱穴 d から出土した弥生土器である。1 は蓋である。2 は甕の口縁部で口縁部は三角凸帯を貼り付ける。3 は内湾する鉢の口縁部である。4 は器台の底部である。

1SB314 出土遺物（Fig.75、Pla.29）

1 は柱穴 a から出土した甕である。外反する口縁部を持ち、外面の調整は不明ながら、内面に刷毛目が認められる。

2 ～ 5 は柱穴 b からの出土である。2 ～ 4 は弥生土器である。2 と 3 は壷である。2 は二重口縁壷の口縁部である。擬口縁端部の面に刷毛目が施されている。3 は小型の壷の底部である。4 は甕である。5 は縄文土器の口縁部細片で、内外面に凹線文が施されている。また口唇部には刻目が施されている。深鉢と思われ、曽畑式の範疇か。

6 ～ 8 は柱穴 d からの出土である。6 と 7 は弥生土器の甕である。6 は口縁部に貼り付く三角凸帯が口縁部上面に被さるように接合される。7 は厚手の底部である。8 は輝緑凝灰岩製の石包丁である。刃部の一部に穀擦痕が認められる。

1SB325 出土遺物（Fig.76、Pla.29）

すべて弥生土器で、柱穴 d から出土した。3 点とも甕としたが、2 は壷とした方が良いかも知れない。2 は口縁端部の面に刻目を施している。3 は不安定なレンズ状底部を特徴とする。

1SB376 出土遺物（Fig.77、Pla.29）

ともに弥生土器で、柱穴 a から出土した。1 は鉢の口縁部である。2 は外反する甕の口縁部である。

1SK016 出土遺物（Fig.78、Pla.29）

すべて弥生土器である。1 と 2 は甕である。いずれも口縁部には凸帯を貼り付けるが、刻目は認めら

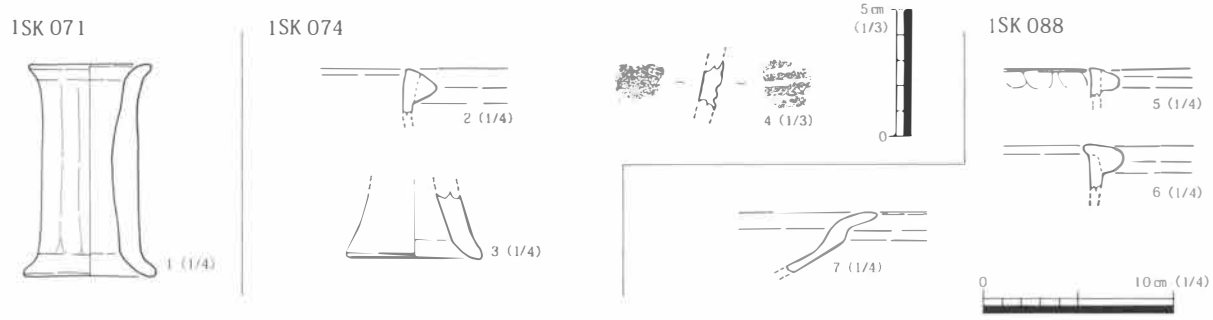


Fig.84　1SK071・1SK074・1SK088 出土遺物実測図（1/4・1/3）

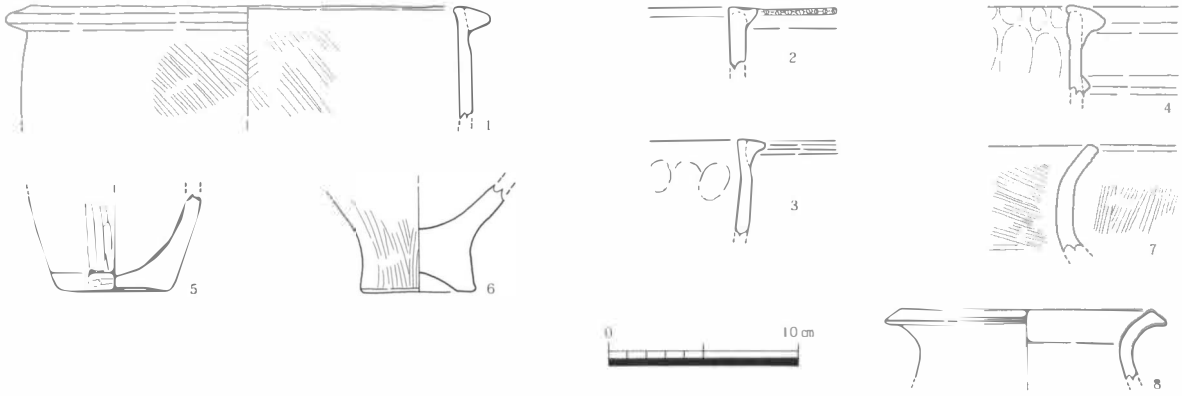


Fig.85　1SK089 出土遺物実測図（1/4）

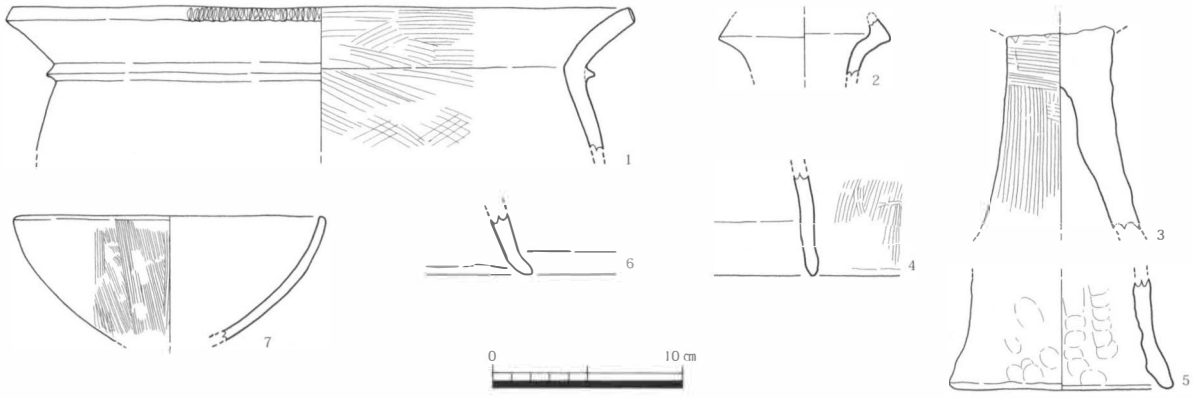


Fig.86　1SK096 出土遺物実測図（1/4）

れない。3 は鉢である。

1SK017 出土遺物（Fig.78、Pla.29）

4 ～ 11 は弥生土器である。4 は壷である。外反する口縁部を持つ。5 ～ 9 は甕である。5 は如意形口縁を持つものである。6 は口縁部に扁平な凸帯を貼り付け、体部に沈線が 1 条巡るものである。7 は大甕で、口縁部の内面に粘土帯を貼り付けて肥厚させている。8 は上げ底状の底部である。9 は中実の底部である。10 は、蓋のつまみ部分である。11 は支脚である。12 は黒色土器 A 類の椀底部である。所謂、内黒の土器である。

1SK034 出土遺物（Fig.79、Pla.29）

1 ～ 5 は弥生土器である。1 と 2 は甕である。いずれも外反する口縁部を持つ。3 は高坏である。鍬先状の口縁部を持っている。4 は鉢である。5 は器台の口縁部である。6 は土師器の坏である。

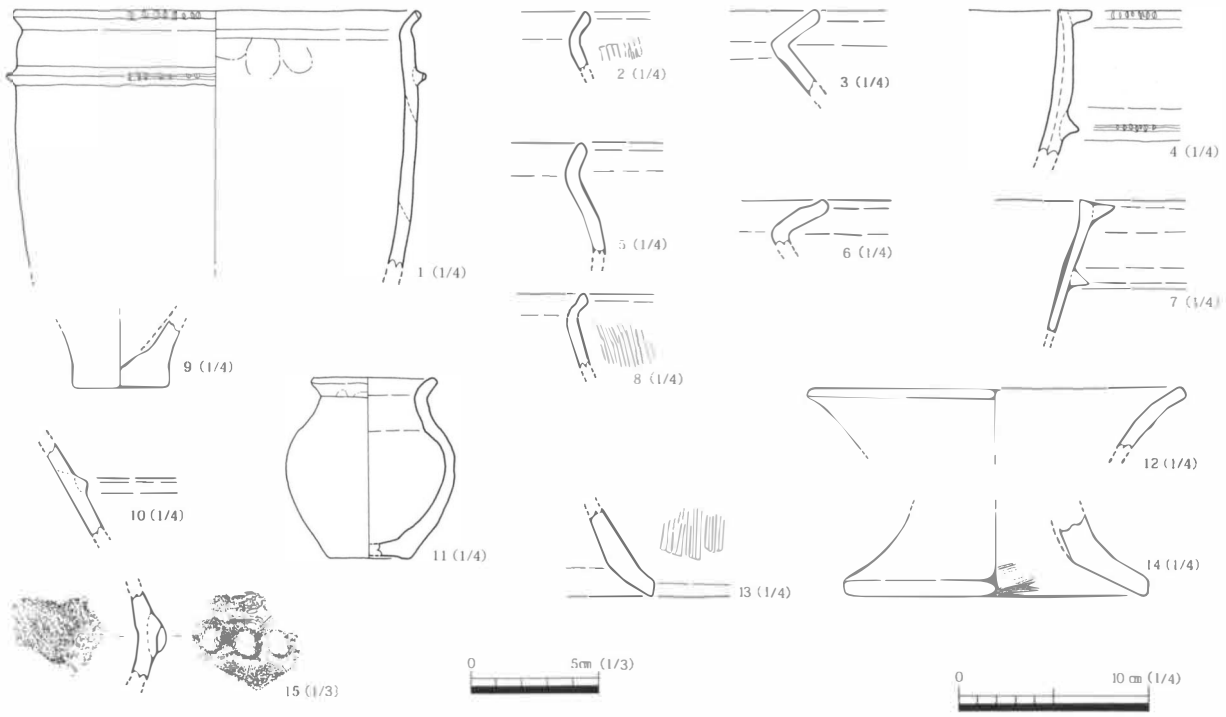


Fig.87　1SK101 出土遺物実測図（1/4・1/3）

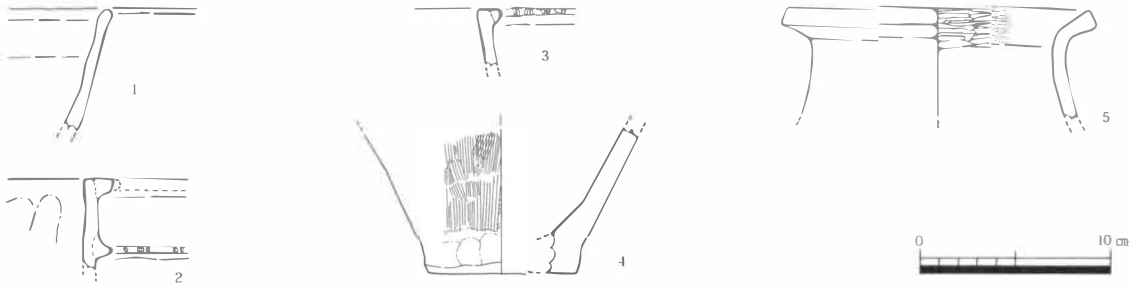


Fig.88　1SK102 出土遺物実測図（1/4）

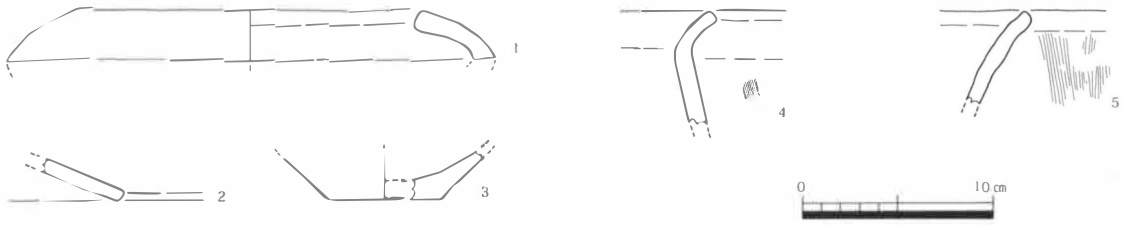


Fig.89　1SK123 出土遺物実測図（1/4）

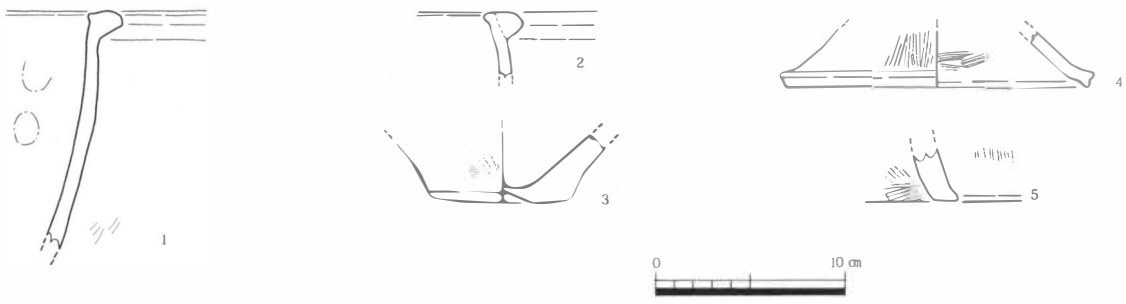


Fig.90　1SK129 出土遺物実測図（1/4）

1SK035 出土遺物（Fig.80、Pla.30）

すべて弥生土器である。1 ～ 5 は甕である。1 と 2 は外反する口縁部の資料である。3 は口縁部の凸帯が口唇部の上に覆い被さるように貼り付けられている。4 と 5 は底部の資料で、4 は底部が厚底となるものである。

1SK037 出土遺物（Fig.81、Pla.30）

ともに弥生土器である。1 は器台の口縁部である。2 は壷の頸部である。頸部に凸帯が 1 条巡る。

1SK038 出土遺物（Fig.81、Pla.30）

すべて弥生土器である。3 ～ 5 は甕である。3 は如意形口縁の端部下辺に刻目を施す。4 は口縁部に三角凸帯を貼り付けるものであるが、凸帯が口唇部の上に覆い被さるように貼り付けられている。5 は如意形口縁の甕であるが、口縁部に刻目は認められない。6 は支脚の口縁部である。

1SK050 出土遺物（Fig.82・83、Pla.30・31）

すべて弥生土器である。1 ～ 15 は甕である。1 ～ 5 は口縁部の資料である。いずれも口縁部に凸帯を貼り付ける。凸帯の断面は三角形のものから蒲鉾状を呈するものまで混在している。2 は体部に沈線が 1 条巡っている。4 と 5 は体部に三角凸帯が 1 条貼り付けられている。6 ～ 15 は底部の資料である。すべて厚底となるもので、6 ～ 11 は上げ底状となっていて、12 も僅かに上げ底状である。16 ～ 20 は蓋である。19 は天井部を平坦に仕上げているが、16・18・20 は天井部の中心を抉り、輪状としている。21 ～ 23 は器台の底部である。24 ～ 27 は壷である。24 は大型の壷である。口縁部は断面が三角形を呈していて、甕の口縁部に似る。25 は小型の壷で、直立する頸部に外反する口縁部を持つ。頸部と体部の接点には 1 条の三角凸帯を貼り付けている。26 と 27 は底部で、27 は外面に篦磨きを施している。28 ～ 30 は支脚で、すべて中実構造である。

1SK071 出土遺物（Fig.84、Pla.31）

1 は弥生土器の支脚である。外面は篦削りの後にナデを施している。

1SK074 出土遺物（Fig.84、Pla.31）

2 と 3 は弥生土器である。2 は甕の口縁部で、三角凸帯を貼り付けている。3 は支脚の底部か。4 は縄文土器の体部細片である。外面に凹線文が認められ、曽畑式の範疇か。

1SK088 出土遺物（Fig.84、Pla.31・32）

すべて弥生土器である。5 と 6 は甕である。5 は口縁部外面に三角凸帯を貼り付けるものである。6 は口唇部の上面に覆い被さるように凸帯が貼り付けられている。7 は高坏の口縁部である。

1SK089 出土遺物（Fig.85、Pla.32）

すべて弥生土器である。1 ～ 5 は甕である。1 ～ 4 は口縁部の資料で、口縁部には凸帯を貼り付ける。2 と 4 は口唇部の上面に凸帯が覆い被さり、4 は体部にも凸帯が張り付く。また、2 の口縁部凸帯には刻目が施されている。5 は小型の甕の底部である。6 は厚手の底部で、僅かに上げ底状となる。7 と 8 は壷である。いずれも口縁部の資料である。

1SK096 出土遺物（Fig.86、Pla.32）

すべて弥生土器である。1 は甕である。口縁端部の面全体に刻目を施している。2 は袋状口縁の壷である。3 は高坏の脚部である。外面には刷毛目が認められる。4 と 5 は器台の底部である。6 は支脚の底部である。7 は鉢で、外面には刷毛目が施されている。

1SK101 出土遺物（Fig.87、Pla.32・33）

1 ～ 14 は弥生土器である。1 ～ 9 は甕である。1 は如意形口縁の端部面全体に刻目を施し、体部の凸帯にも刻目を施している。3 は鋭く外反する口縁部である。4 は口縁部に扁平な凸帯を貼り付け、体部の凸帯とともに刻目を施している。また、段甕の成形と同様に粘土板を 2 枚重ねて上半部を肥厚させている。7 は 4 と同様に凸帯を貼り付けるが、刻目は施さない。9 は一見厚底の底部であるが、内側が深く抉られ、底部は厚くない。10 と 11 は壷である。10 は体部の細片で、頸部との境界に三角凸帯が 1 条貼り付けられている。11 は小型の壷である。12 ～ 14 は器台である。12 は口縁部の資料で、端部に明瞭な面を持つ。13 と 14 は底部の資料で、底部の面は設置しない。15 は縄文土器の深鉢で、体部

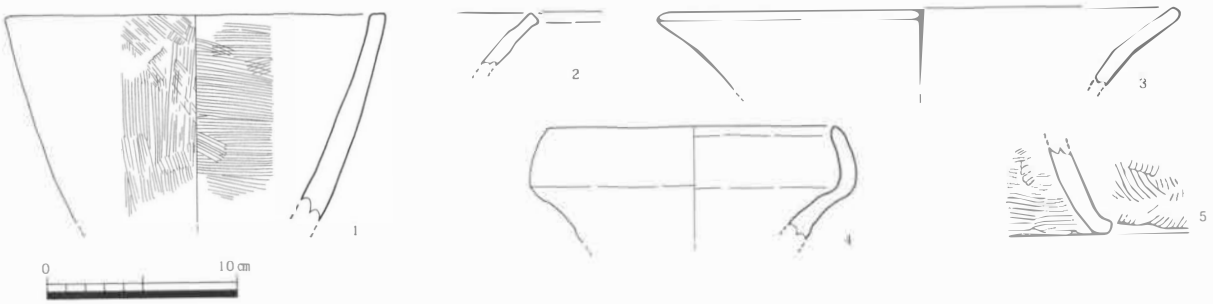


Fig.91　1SK158 出土遺物実測図（1/4）

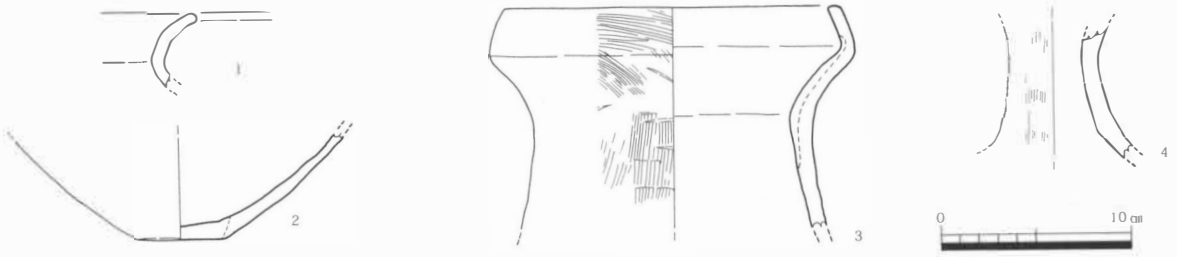


Fig.92　1SK179 出土遺物実測図（1/4）

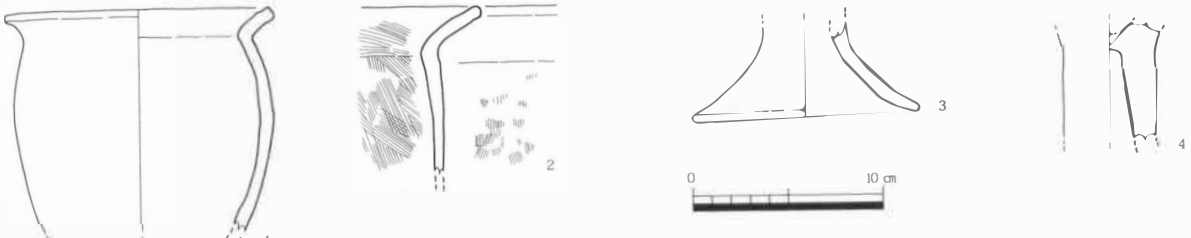


Fig.93　1SK180 出土遺物実測図（1/4）

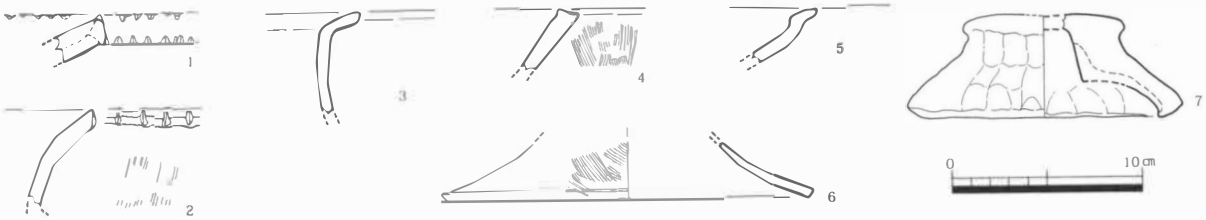


Fig.94　1SK199 出土遺物実測図（1/4）

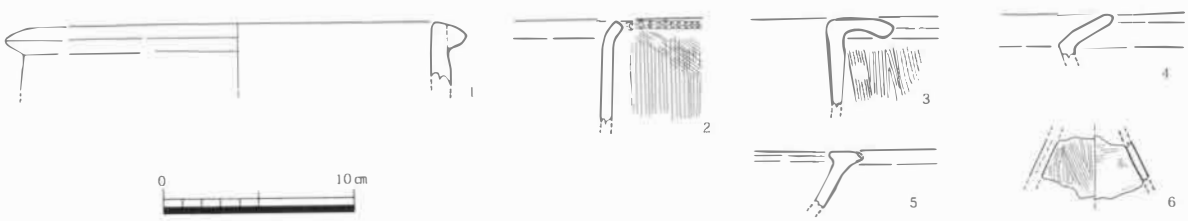


Fig.95　1SK223 出土遺物実測図（1/4）

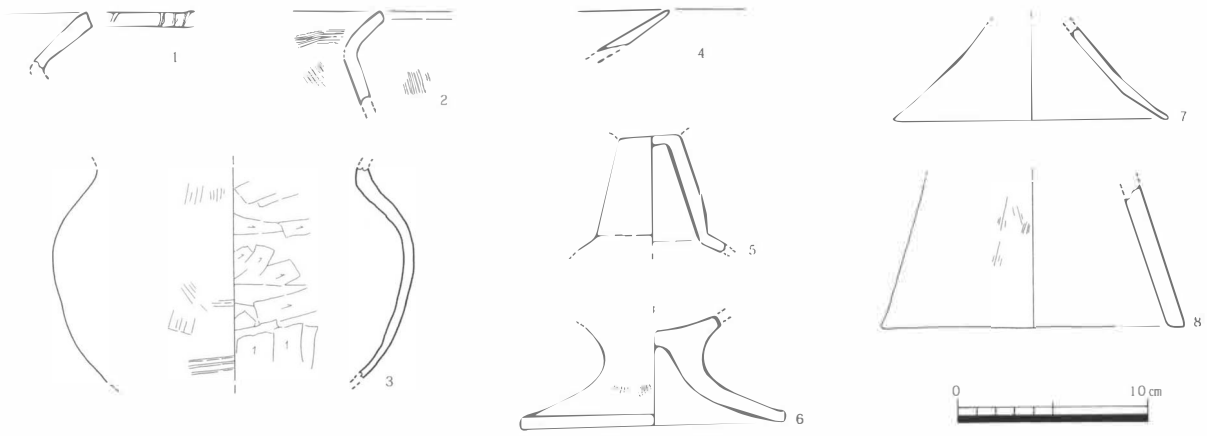


Fig.96　1SK356 出土遺物実測図（1/4）

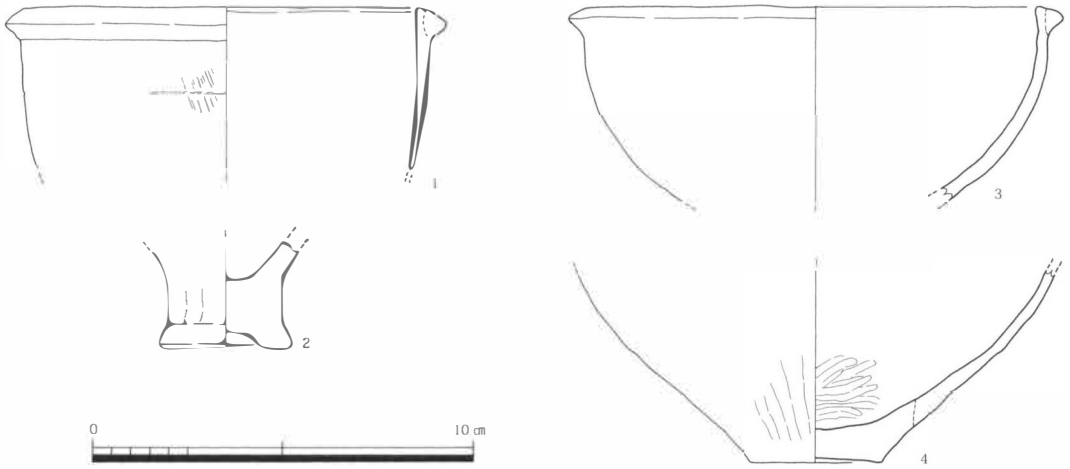


Fig.97　1SK361 出土遺物実測図（1/4）

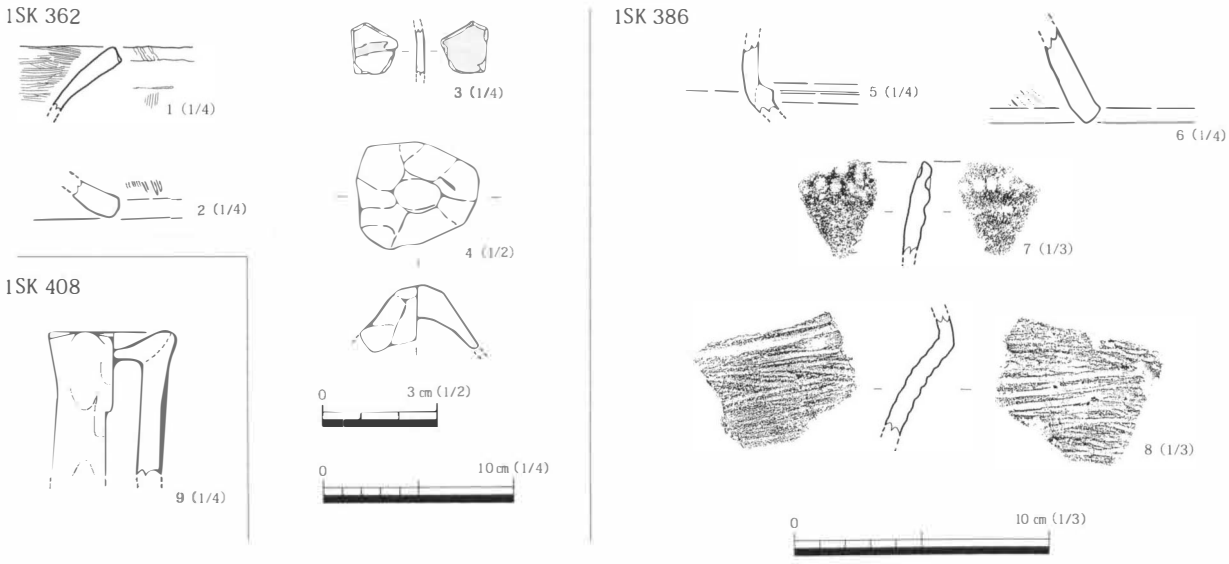


Fig.98　1SK362・1SK386・1SK408 出土遺物実測図（1/4・1/3・1/2）

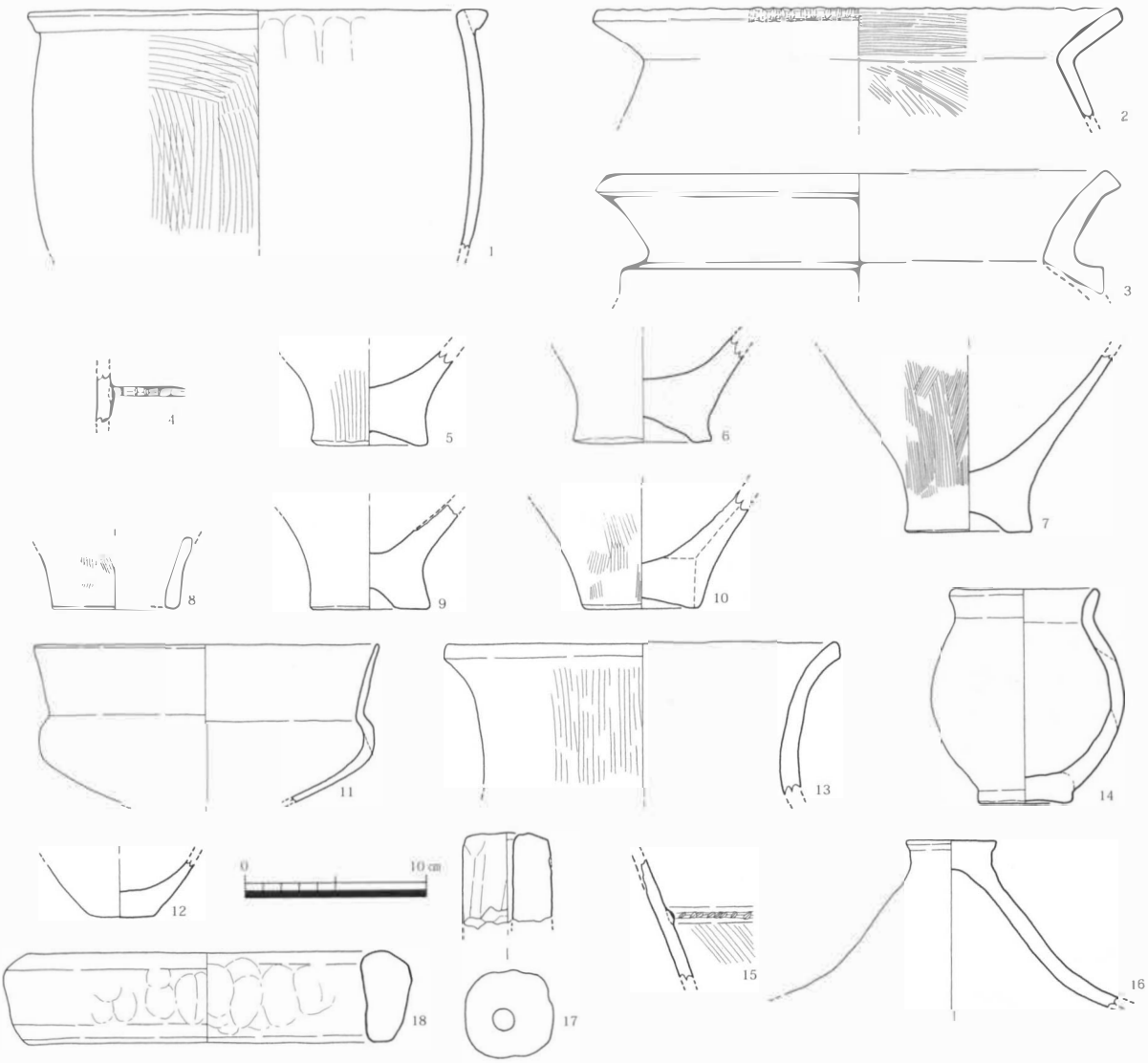


Fig.99　1SD013 出土遺物実測図（1/4）

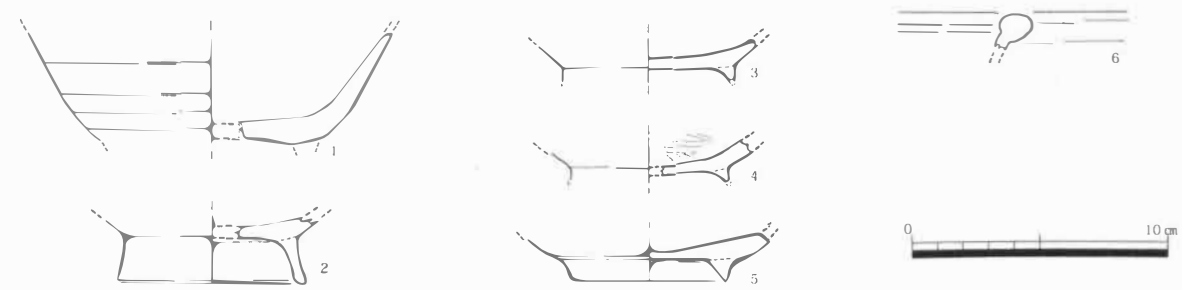


Fig.100　1SD015 出土遺物実測図（1/3）

の細片である。外面に隆起帯を貼り付け、刻目を施している。轟 B 式の範疇か。

1SK102 出土遺物（Fig.88、Pla.33）

すべて弥生土器である。1 ～ 4 は甕である。2 は口縁部と体部に凸帯を貼り付けるものである。体部凸帯には刻目が施されるが、口縁部凸帯の刻目の有無は不明である。3 は口縁部凸帯に刻みを施している。4 は底部であるが、厚底とならない。5 は壷の口縁部であるが、端部を肥厚させて明瞭な面を形成している。口縁部内面には箆磨きを施している。

1SK123 出土遺物（Fig.89、Pla.33）

すべて弥生土器である。1 は袋状口縁壷の擬口縁部である。2 は蓋である。3 と 4 は甕である。3 は底部であるが、壷の底部かも知れない。4 は如意形の甕口縁部である。口縁端部には明瞭な面を形成する。5 は器台の口縁部である。

1SK129 出土遺物（Fig.90、Pla.33）

すべて弥生土器である。1 ～ 3 は甕である。1 と 2 は口縁部に断面蒲鉾状の凸帯を貼り付ける。4 と 5 は器台の底部である。4 は底部の面が接地しないが、5 の底部の面は接地する。

1SK158 出土遺物（Fig.91、Pla.33）

すべて弥生土器である。1 は鉢である。口縁端部は上面を平坦にしている。2 は甕の口縁部である。3 は高坏の口縁部であろう。4 は袋状口縁壷の口縁部である。5 は器台の底部である。

1SK179 出土遺物（Fig.92、Pla.33・34）

すべて弥生土器である。1 は甕である。外反する口縁部を持つ。2 と 3 は壷である。3 は袋状口縁壷の口縁部である。4 は高坏の脚部である。

1SK180 出土遺物（Fig.93、Pla.34）

すべて弥生土器である。1 と 2 は甕である。ともに外反する口縁部を持つ。3 と 4 は高坏である。3 は脚底部で、底端部の面は接地しない。4 は脚の上半部である。

1SK199 出土遺物（Fig.94、Pla.34）

すべて弥生土器である。1 は大甕である。口縁部の資料で、口縁端部の面の上下両辺に刻目を施している。2 と 3 は壷である。2 は口縁端部の面全体に刻目を施す。3 は小さく外反する口縁部を有する。4 は器台の口縁部である。5 は高坏の口縁部である。6 は蓋の下半部である。7 は支脚である。一見中実に見えるが、底面は大きく抉ってあり、中空となる。

1SK223 出土遺物（Fig.95、Pla.34）

すべて弥生土器である。1 ～ 4 は甕である。1 は口縁部に三角凸帯を貼り付けるものである。2 は如意形口縁の端部面の下辺に刻目を施している。3 は口縁部が逆 L 字状を呈するものである。4 は外反する口縁部を持つものである。5 は鉢で、鍬先状の口縁部が特徴的である。6 は器台で、透かしがある。

1SK356 出土遺物（Fig.96、Pla.34）

すべて弥生土器である。1 ～ 3 は甕である。1 は口縁端部の面全体に刻目を施す。2 は外反する口縁部である。3 は球形の体部である。4 ～ 7 は高坏である。5 は脚部と脚底部の境目で大きく折れて開いている。6 は緩やかに開く脚底部である。7 は直線的に開く脚部である。8 は器台の底部である。

1SK361 出土遺物（Fig.97、Pla.34・35）

すべて弥生土器である。1 と 2 は甕である。1 は口縁部に断面三角形の凸帯を貼り付け、体部に沈線を 1 条巡らせている。2 は厚底の底部であるが、蓋のつまみ部かも知れない。3 は鉢であるが、甕と同様に口縁部に断面三角形の凸帯を貼り付ける。4 は壷体部の下半部であるが、内外面ともに荒い箆磨きを施している。

1SK362 出土遺物（Fig.98、Pla.35）

すべて弥生土器である。1 と 2 は器台である。3 は壷の体部と思われる。外面には丹塗りを施し、内面には彩文と思しき丹痕がある。4 は手づくねの蓋小型品である。

1SK386 出土遺物（Fig.98、Pla.35）

5 と 6 は弥生土器である。5 は壷の頸部で、体部との境界に三角凸帯が巡る。6 は器台の底部であるが、

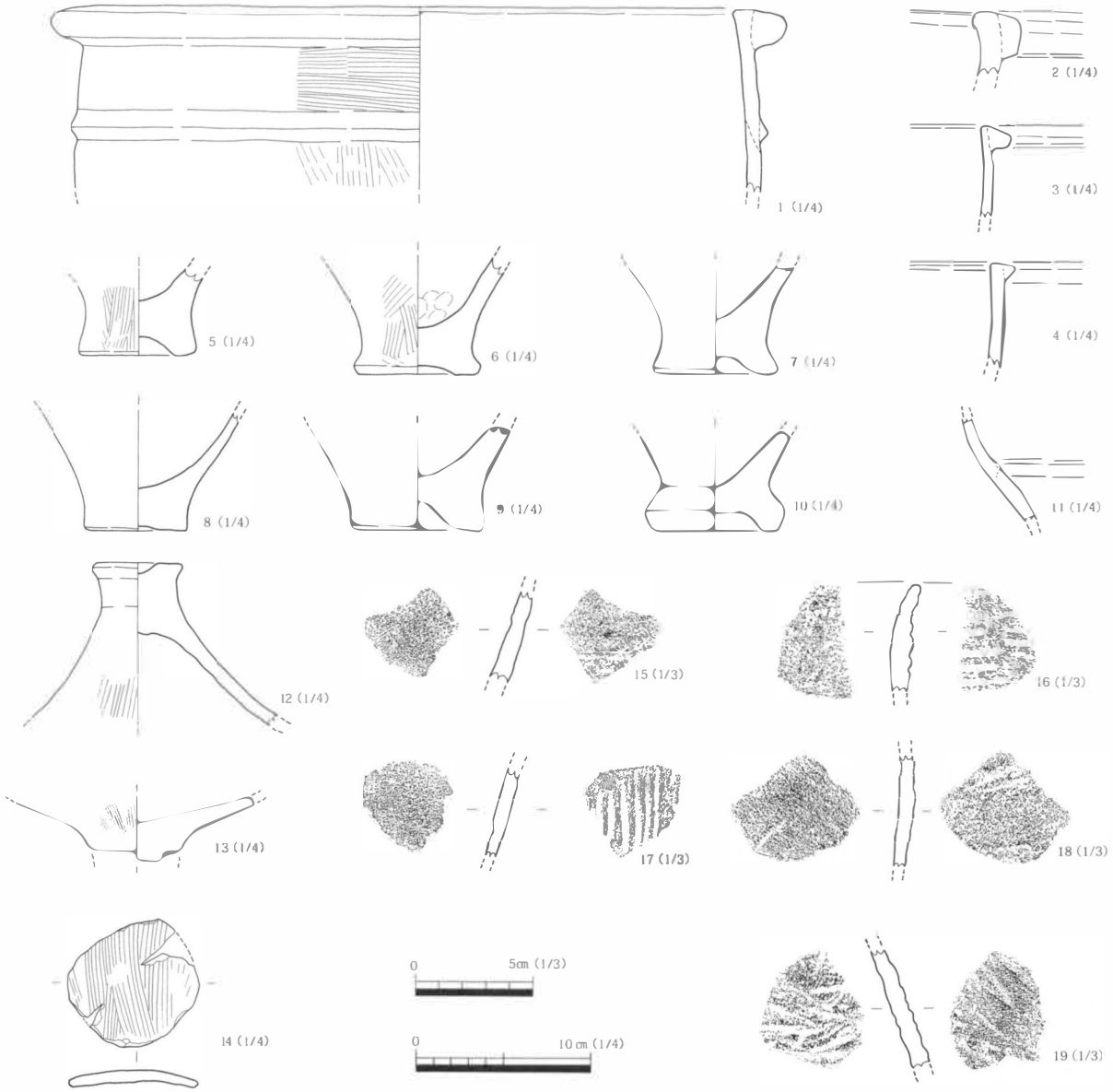


Fig.101　1SD040 出土遺物実測図（1/4・1/3）

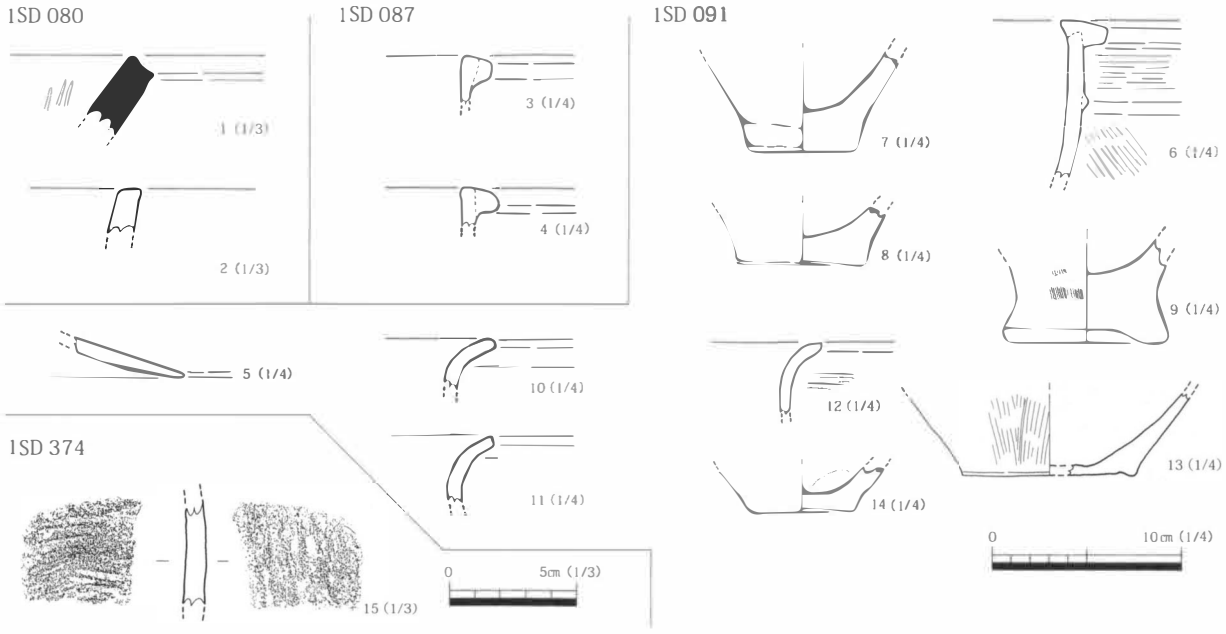


Fig.102　1SD080・1SD087・1SD091・1SD374 出土遺物実測図（1/4・1/3）

底部の面は接地しない。7 と 8 は縄文土器の深鉢である。7 は口縁部の細片で、口縁部の内外面に刺突文を施し、体部外面には凹線文がある。曽畑式の範疇か。8 は体部に屈曲部があり、内外面に条痕が認められる。轟 B 式か。

1SD013 出土遺物（Fig.99、Pla.35・36）

すべて弥生土器である。1 ～ 10 は甕である。1 は口縁部に断面三角形の凸帯を貼り付けるものである。2 と 3 は外反する口縁部の端部に面を形成するものであるが、3 は頸部に三角凸帯が 1 条巡る。4 は体部の細片で、非常に薄い凸帯を貼り付けて刻目を施している。5 ～ 10 は底部の資料である。いずれも厚底となるもので、5 ～ 7 と 9 は上げ底状となっている。11 と 12 は鉢である。11 は口縁部が長く立ち上がるものである。12 は小型の鉢の底部である。13 ～ 15 は壷である。13 は緩やかに開く口縁部の端部に面を形成する。頸部の外面には刷毛目が認められる。14 は短い頸部をもつ小型の壷である。底部は円盤貼り付け技法の印象を残している。15 は体部の細片で、頸部との境に凸帯を 1 条巡らせる。凸帯には刻目が施されている。16 は蓋である。天井部は平坦に成形されている。17 は中実の支脚であるが、中心からややずれた位置に縦に焼成前穿孔を行っている。18 は不明品であるが、幅広の支脚かも知れない。内外面ともに指頭圧痕が残っている。

1SD015 出土遺物（Fig.100、Pla.36）

1 と 6 は土師器である。1 は椀で、高台が剥落している。6 は甕の口縁部である。2 ～ 5 は黒色土器 A 類の椀である。2 と 4 は内底部に箆磨きが認められる。

1SD040 出土遺物（Fig.101、Pla.36・37）

1 ～ 14 は弥生土器である。1 ～ 10 は甕である。1 ～ 4 は口縁部の資料で、いずれも口縁部に凸帯を貼り付ける。1 と 2 は断面蒲鉾状の凸帯であるが、3 と 4 は断面三角形の凸帯である。5 ～ 10 は底部である。すべて厚手のもので、5・7・9・10 は上げ底状となる。10 は底部が踏ん張った外観を呈する。11 は壷である。頸部と体部の境に三角凸帯を 1 条巡らせる。12 は蓋である。天井部は中央部を抉っていて、つまみ部は輪状に近い。13 は高坏の坏底部である。14 は甕の破片を加工した面子である。

15 ～ 20 は縄文土器で、すべて深鉢と思われる。15 と 17 ～ 19 は体部の細片である。17 は外面に凹線文が認められる。16 は口縁部の資料で、外面に凹線文が認められる。すべて曽畑式の範疇か。

1SD080 出土遺物（Fig.102、Pla.37）

1 は須恵器の練り鉢である。口縁端部に明瞭な面を形成している。2 は土師器の鉢である。口縁部の上面を水平に仕上げている。

1SD087 出土遺物（Fig.102、Pla.37）

3 と 4 は、ともに弥生土器の甕である。ともに口縁部外面に断面蒲鉾状の凸帯を貼り付けるが、刻目は施されない。

1SD091 出土遺物（Fig.102、Pla.37）

すべて弥生土器である。5 は蓋の口縁部である。6 ～ 9 は甕である。6 は口縁部と体部に 1 条ずつ凸帯を貼り付けるが、口縁部の凸帯は断面が蒲鉾状で、口唇部に多い被せるように貼り付けられている。いずれの凸帯にも刻目は施されない。7 ～ 9 は底部であるが、7 と 9 は厚底である。さらに 9 は底部を上げ底状としている。10 ～ 14 は壷である。10 ～ 12 は口縁部の資料で、外反している。13 と 14 は底部である。

1SD374 出土遺物（Fig.102、Pla.37）

15 は縄文土器の深鉢の細片である。内面には条痕が認められる。

1SX066 出土遺物（Fig.103、Pla.37）

すべて弥生土器である。1 は甕の口縁部である。2 は鉢で、口縁端部の上面は水平に成形されている。3 は高坏の脚部である。

1SX070 出土遺物（Fig.104、Pla.38）

1 ～ 8 は弥生土器である。1 ～ 3 は壷である。1 は袋状口縁壷の擬口縁である。2 は口縁部の資料で外反するものである。3 は底部である。4 は鉢である。口縁部は内湾する。5 は壷の口縁部である。

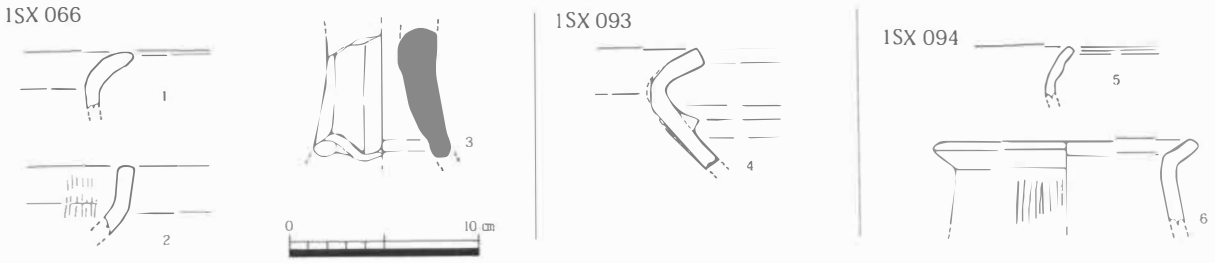


Fig.103　1SX066・1SX093・1SX094 出土遺物実測図（1/4）

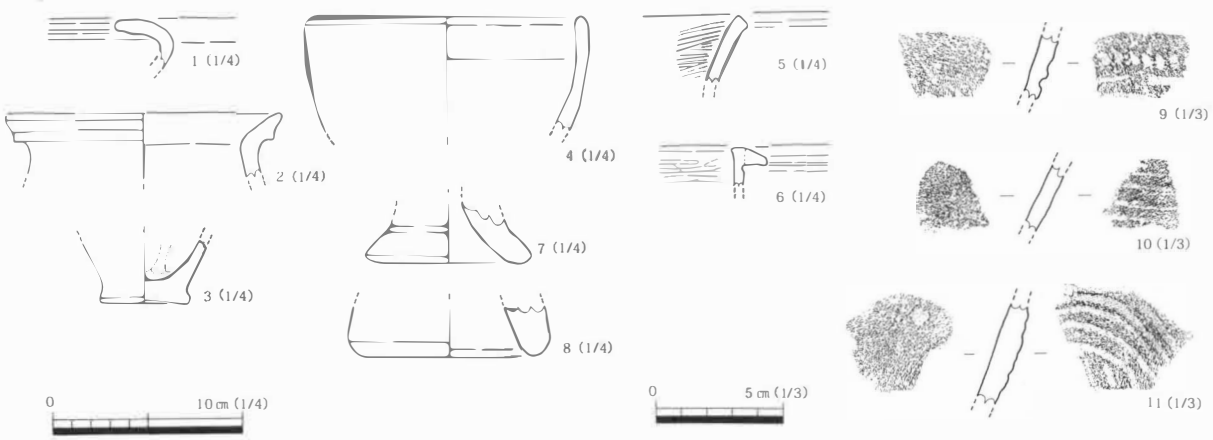


Fig.104　1SX070 出土遺物実測図（1/4・1/3）

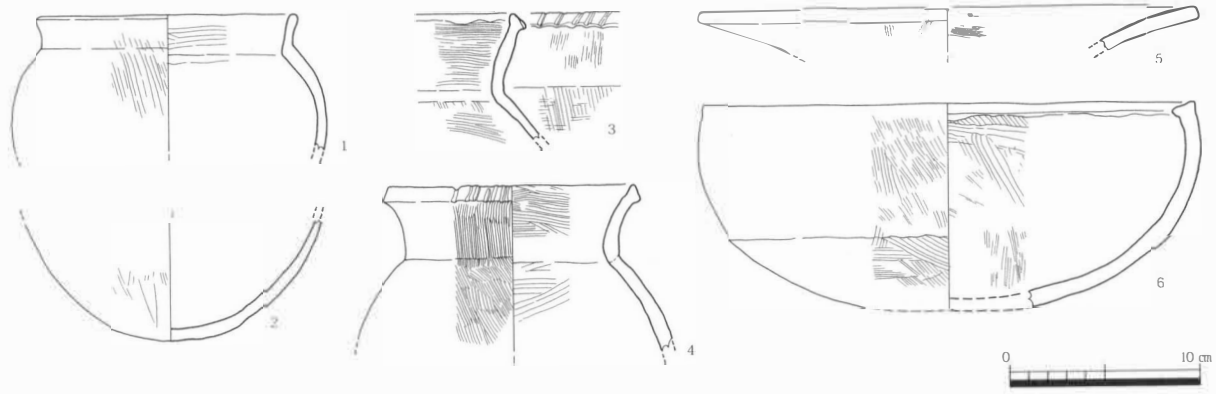


Fig.105　1SX116 出土遺物実測図（1/4）

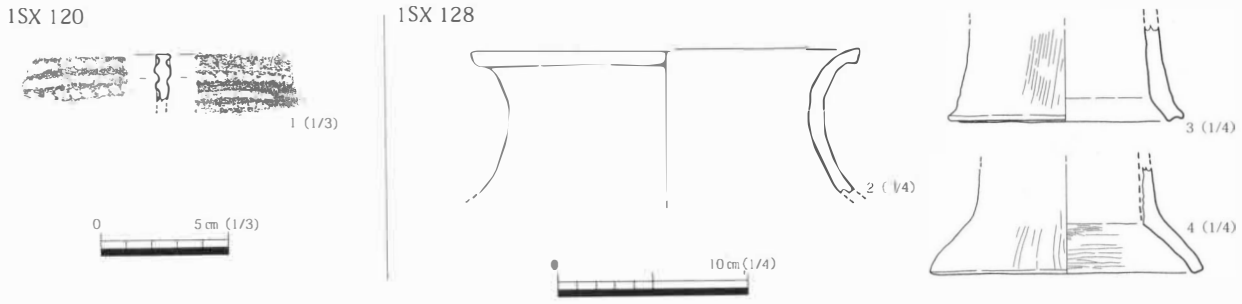


Fig.106　1SX120・1SX128 出土遺物実測図（1/4・1/3）

6 は甕の口縁部である。6 は口縁部に扁平な凸帯を貼り付ける。7 と 8 は支脚の底部である。

9 ～ 11 は縄文土器深鉢である。いずれも外面に凹線文が認められ、曽畑式の範疇と思われる。

1SX093 出土遺物（Fig.103、Pla.37）

4 は弥生土器の甕である。口縁部の細片で、頸部には三角凸帯が 1 条巡っている。

1SX094 出土遺物（Fig.103、Pla.37）

ともに弥生土器の甕である。5 は如意形の口縁部となるか。6 は外反する口縁部である。

1SX116 出土遺物（Fig.105、Pla.38）

すべて弥生土器である。1 ～ 4 は壷である。1 と 2 は同一固体と思われる。3 と 4 は外反する口縁部の端部面全体に刻目を施している。5 は高坏の口縁部である。6 は鉢であるが、口縁部の上面は平坦に仕上げていて、上面は内傾している。

1SX120 出土遺物（Fig.106、Pla.38）

1 は縄文土器の深鉢である。口縁部の資料で、内外面ともに刺突文と凹線文が認められる。曽畑式の範疇と考えられる。

1SX128 出土遺物（Fig.106、Pla.38）

すべて弥生土器である。2 は壷の口縁部である。口縁部は外反し、端部には明瞭な面を持つ。3 と 4 は器台の底部である。底部の面はいずれも接地しない。

1SX130 出土遺物（Fig.107、Pla.38）

ともに縄文土器の深鉢である。1 は口縁部であるが、内外面ともに刺突文が認められる。2 は外面に波文が施されている。ともに曽畑式の範疇か。

1SX134 出土遺物（Fig.108、Pla.38・39）

1 ～ 5 は弥生土器である。1 は甕の口縁部である。2 は蓋の口縁部である。3 は甕の底部である。4 は器台の口縁部と思われるが、甕の口縁部かも知れない。口縁部の端部面全体に刻目を施す。5 は短頸の壷である。6 ～ 15 は縄文土器の深鉢である。6 は口縁部の資料で、口径が復元できるものである。口縁部外面に隆起帯が 3 条貼り付けられている。7 と 8 も口縁部の資料である。8 は口縁部外面に小さな隆起帯があり、刺突文が認められる。9 ～ 15 は体部の細片である。9 と 12 は外面に凹線文が施されている。6 は轟 B 式、7 ～ 15 は曽畑式の範疇か。

1SX150 出土遺物（Fig.109、Pla.39）

1 ～ 7 は弥生土器である。1 は甕の口縁部である。2 は鉢である。3 ～ 6 は器台で、3 は口縁部、4 ～ 6 は底部である。底部の面はすべて接地しない。7 は器壁が非常に厚い底部であるが、器台または支脚であろう。8 ～ 13 は縄文土器の深鉢である。8 と 9 は口縁部の資料で、8 は内外面に凹線文と外面に刺突文が認められる。9 は内外面に凹線文を施し、口唇部に刻目を施している。10 ～ 13 は体部の細片である。11 ～ 13 は外面に凹線文が認められる。縄文土器は曽畑式の範疇か。

1SX160 出土遺物（Fig.110、Pla.40）

1 は縄文土器の深鉢である。外面に凹線文を施している。曽畑式の範疇か。

1SX161 出土遺物（Fig.110、Pla.40）

2 は弥生土器の甕である。外反する口縁部を持ち、内外面ともに刷毛目が認められる。

1SX162 出土遺物（Fig.110、Pla.40）

すべて弥生土器である。3は器台の口縁部である。4 は器種不明であるが、外面に格子文が認められる。5 は二重口縁壷の口縁部で、器壁が非常に厚い。

1SX171 出土遺物（Fig.110、Pla.40）

すべて弥生土器である。6 と 7 は甕である。外反する口縁の端部に明瞭な面を形成する。7 は口縁端部の面全体に刻目を施している。8 は高坏の口縁部である。

1SX175 出土遺物（Fig.111、Pla.40）

1 ～ 4 と 6 は弥生土器である。1 ～ 4 は甕である。1 ～ 3 は外反する口縁部である。4 は体部の小片であるが、外面に文様のようなものが認められる。6 は壷の口縁部である。5 は土師器の坏と思われる。

Fig.107　1SX130 出土遺物実測図（1/3）

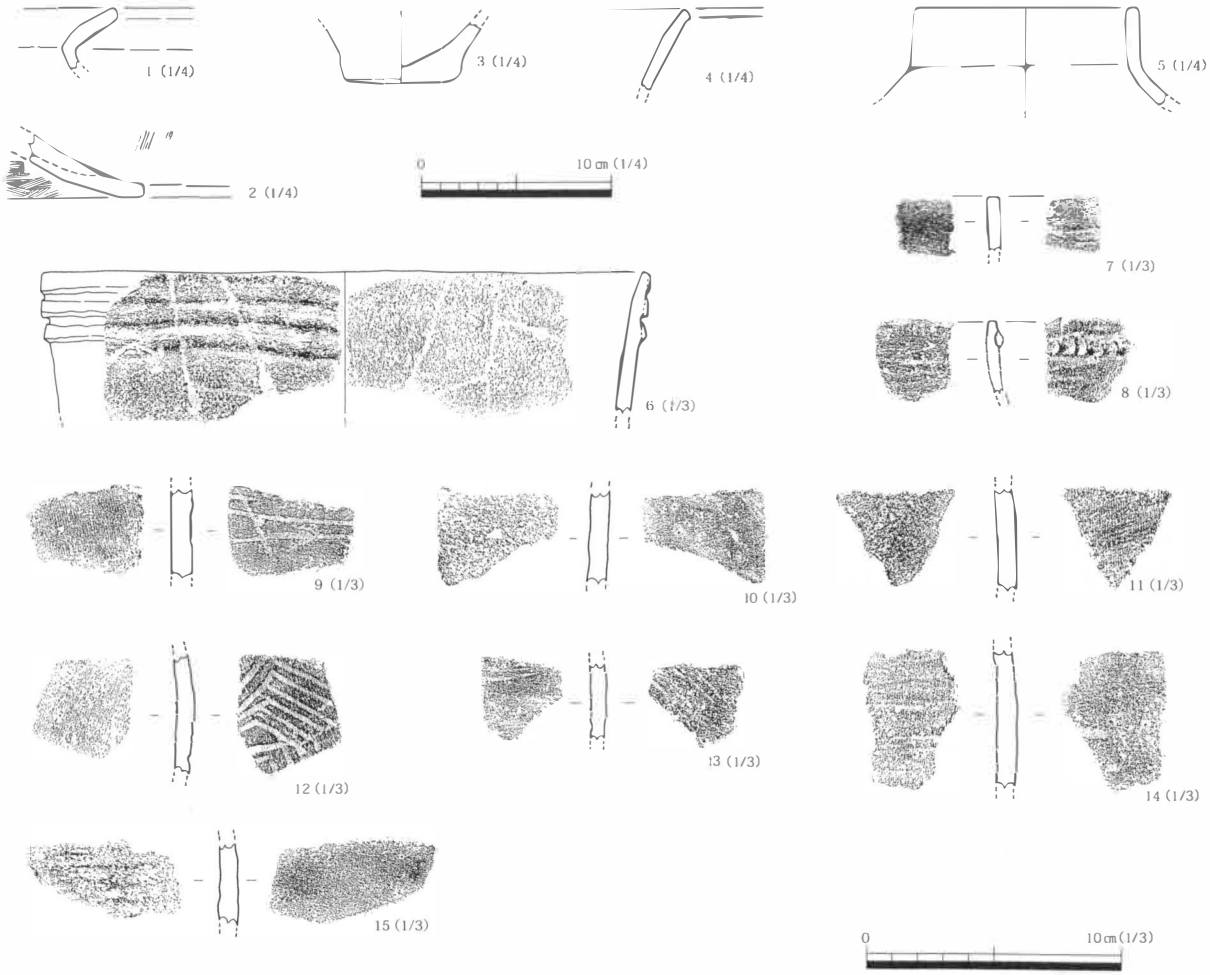


Fig.108　1SX134 出土遺物実測図（1/4・1/3）

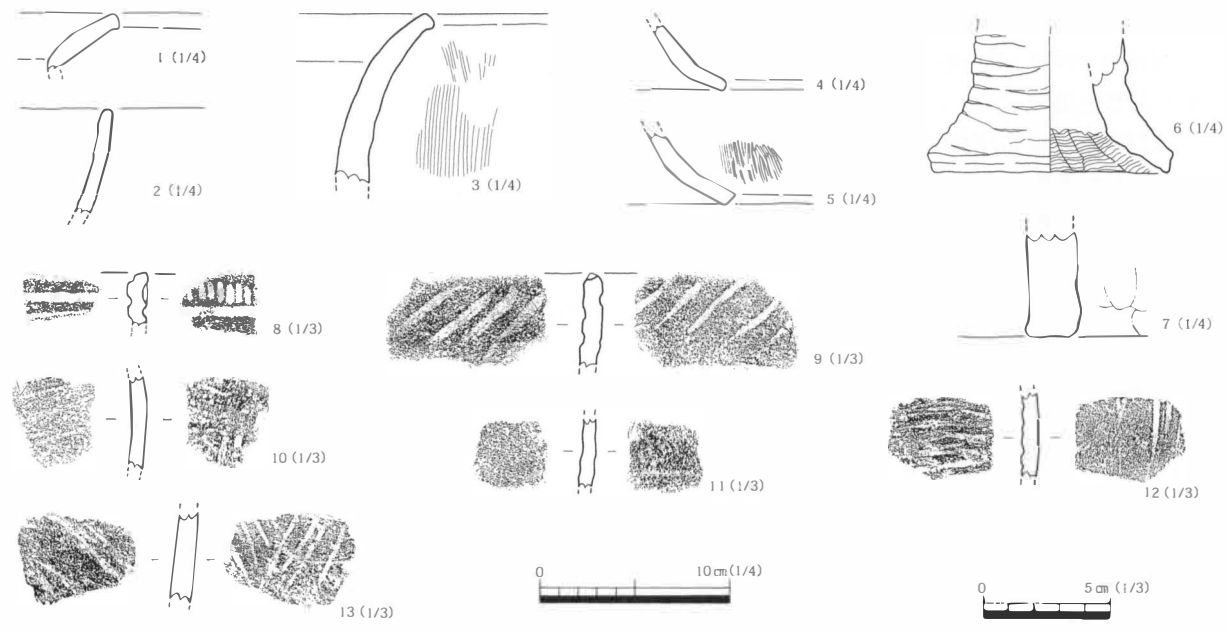


Fig.109　1SX150 出土遺物実測図（1/4・1/3）

1SX195 出土遺物（Fig.111、Pla.40）
7 は縄文土器の深鉢である。内面に凹線文、口唇部に刺突文を施す。曽畑式か。
1SX201 出土遺物（Fig.112、Pla.40）
すべて弥生土器である。1 は壷である。外反する口縁部の端部に明瞭な面を形成する。2 は甕である。3 は大甕の口縁部で、口縁端部の面全体に刻目を施す。4 は台付の鉢である。5 は高坏の口縁部であろう。6 は蓋の口縁部である。端部は丸く納めている。
1SX203 出土遺物（Fig.113、Pla.40）
すべて弥生土器である。1 と 2 は甕としたが、2 は壷かも知れない。3 と 4 は壷である。3 は二重口縁壷で、擬口縁は直立している。4 は外反する口縁部である。
1SX247 出土遺物（Fig.114、Pla.40・41）
1 と 2 は弥生土器である。1 は甕である。口縁部は断面三角形の凸帯が貼り付くが、口縁部上面に覆い被さるようになっている。2 は器台の底部である。底部の面は接地するようになっている。3 は縄文土器の深鉢である。外面に凹線文を施す。曽畑式の範疇か。
1SX259 出土遺物（Fig.114、Pla.41）
4 ～ 6 は弥生土器である。4 と 5 は甕である。いずれも外反する口縁部を有する。6 は蓋の口縁部である。7 と 8 は縄文土器の深鉢である。7 は口縁部の資料で、内外面に凹線文を施す。8 は体部の細片で、外面に凹線文を施す。いずれも曽畑式か。
1SX267 出土遺物（Fig.115、Pla.41）
1 と 2 は縄文土器の深鉢である。ともに体部の細片で、1 は外面に、2 は内外面に凹線文が認められる。いずれも曽畑式の範疇か。
1SX269 出土遺物（Fig.115、Pla.41）
3 は縄文土器の深鉢である。外面に凹線文が認められる。曽畑式か。
1SX272 出土遺物（Fig.115、Pla.41）
4 と 5 は縄文土器の深鉢である。ともに体部の細片で、4 は内面に、5 は外面に凹線文が施されている。いずれも曽畑式の範疇か。
1SX275 出土遺物（Fig.115、Pla.41）
6 は縄文土器の深鉢である。体部の細片で、外面には凹線文が施されている。曽畑式か。
1SX278 出土遺物（Fig.115、Pla.41）
7 と 8 は縄文土器の深鉢である。7 は外面に凹線文が認められる。ともに曽畑式の範疇か。
1SX295 出土遺物（Fig.115、Pla.41）
9 は縄文土器の深鉢である。口縁部の細片で、内外面に凹線文が施され、口唇部には刻目が認められる。曽畑式の範疇で理解される。
1SX297 出土遺物（Fig.115、Pla.41）
10 は縄文土器の深鉢である。曽畑式の範疇か。
1SX299 出土遺物（Fig.115、Pla.41）
11 と 12 は縄文土器の深鉢である。曽畑式か。
1SX301 出土遺物（Fig.115、Pla.41）
13 は縄文土器の深鉢である。口縁部の細片で内外面に刺突文が認められる。曽畑式の範疇か。
1SX304 出土遺物（Fig.115、Pla.41）
14 は縄文土器の深鉢である。外面に凹線文が認められる。曽畑式か。
1SX305 出土遺物（Fig.115、Pla.41）
15 は縄文土器の深鉢である。外面に凹線文が認められる。曽畑式か。
1SX307 出土遺物（Fig.116、Pla.41）
1 は弥生土器の甕である。外反する口縁部を持ち、体部外面には刷毛目が認められる。2 は縄文土器の深鉢である。体部の細片で、内外面に凹線文がある。曽畑式か。

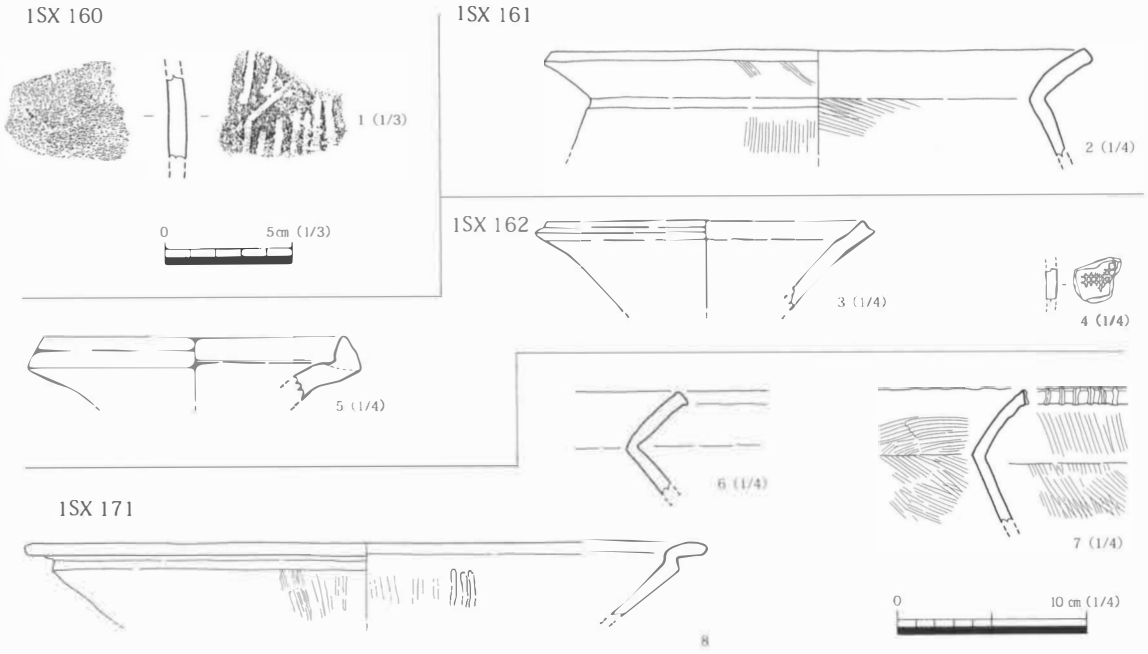


Fig.110　1SX160・1SX161・1SX162・1SX171 出土遺物実測図（1/3・1/4）

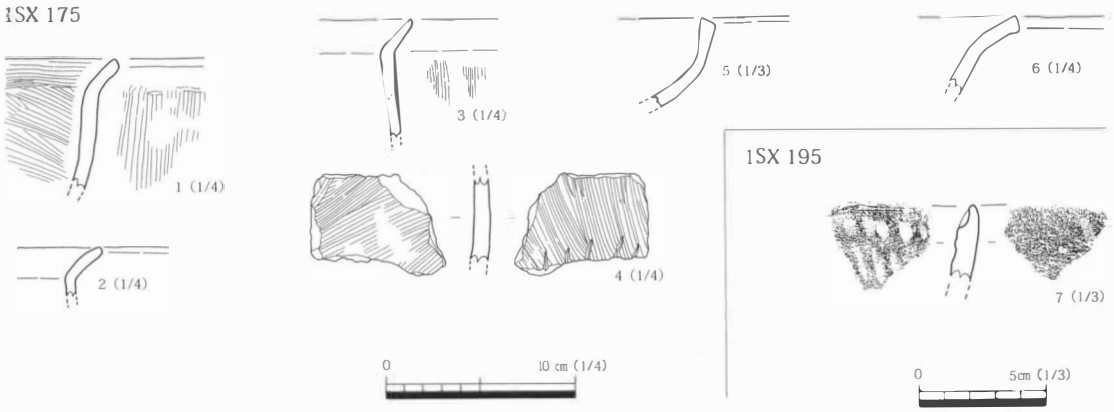


Fig.111　1SX175・1SX195 出土遺物実測図（1/4・1/3）

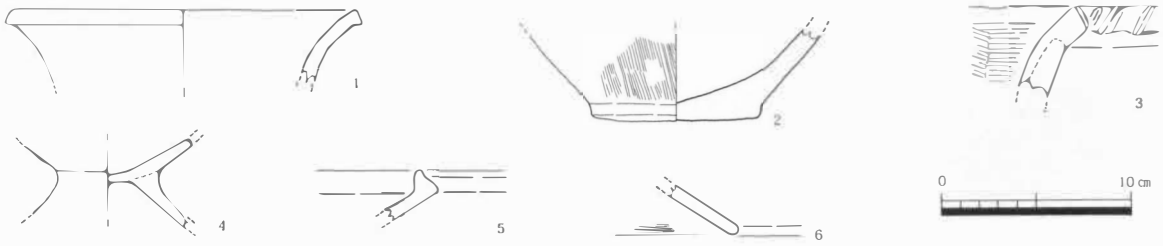


Fig.112　1SX201 出土遺物実測図（1/4）

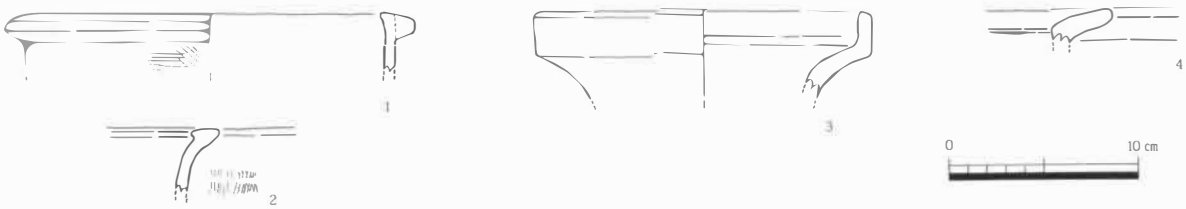


Fig.113　1SX203 出土遺物実測図（1/4）

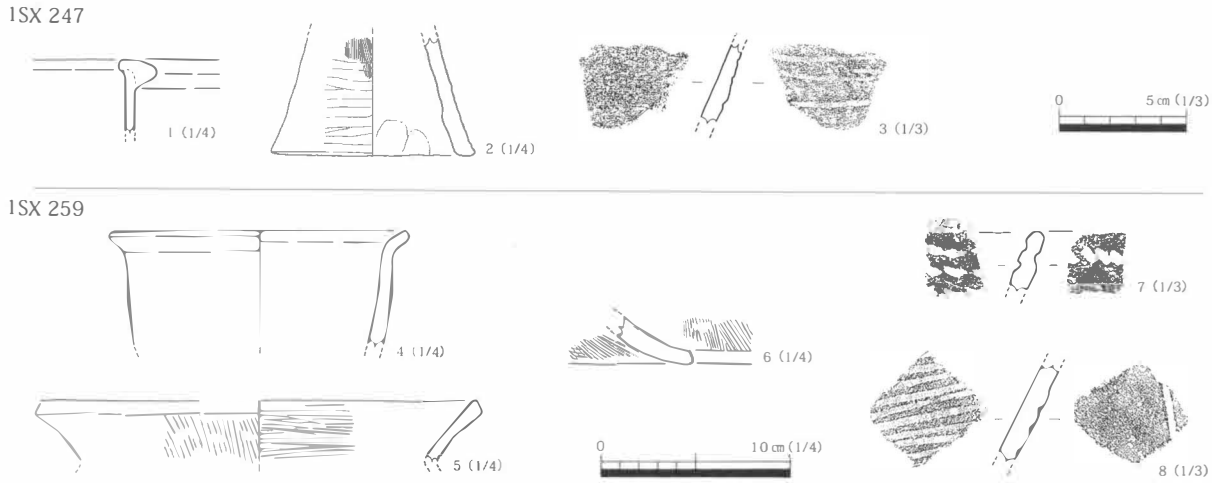


Fig.114　1SX247・1SX259 出土遺物実測図（1/4・1/3）

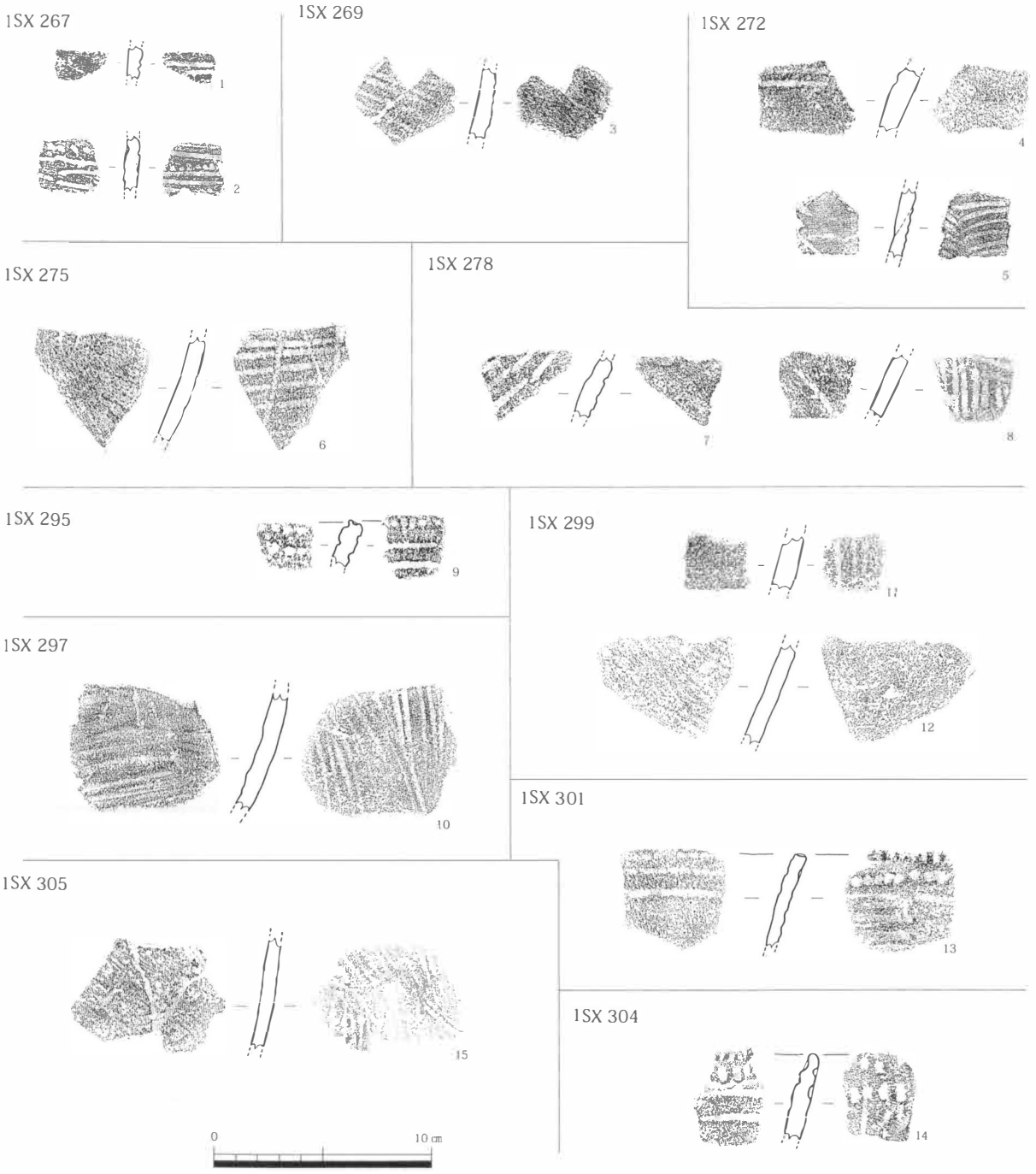


Fig.115　1SX267・1SX269・1SX272・1SX275・1SX278・1SX295・1SX297
・1SX299・1SX301・1SX304・1SX305 出土遺物実測図（1/3）

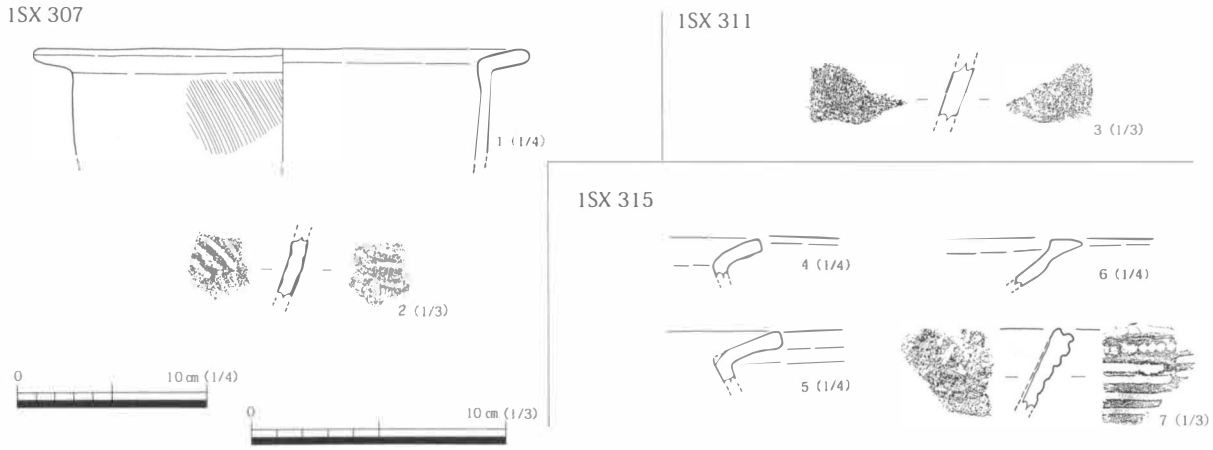


Fig.116　1SX307・1SX311・1SX315 出土遺物実測図（1/4・1/3）

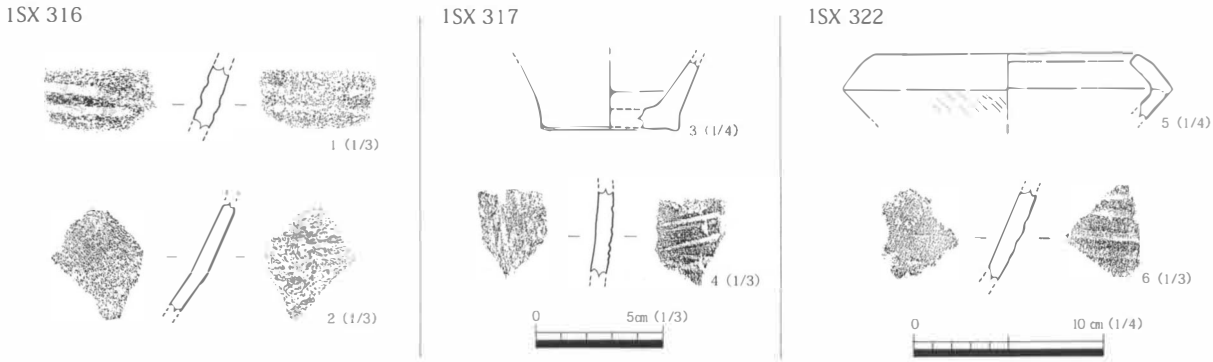


Fig.117　1SX316・1SX317・1SX322 出土遺物実測図（1/3・1/4）

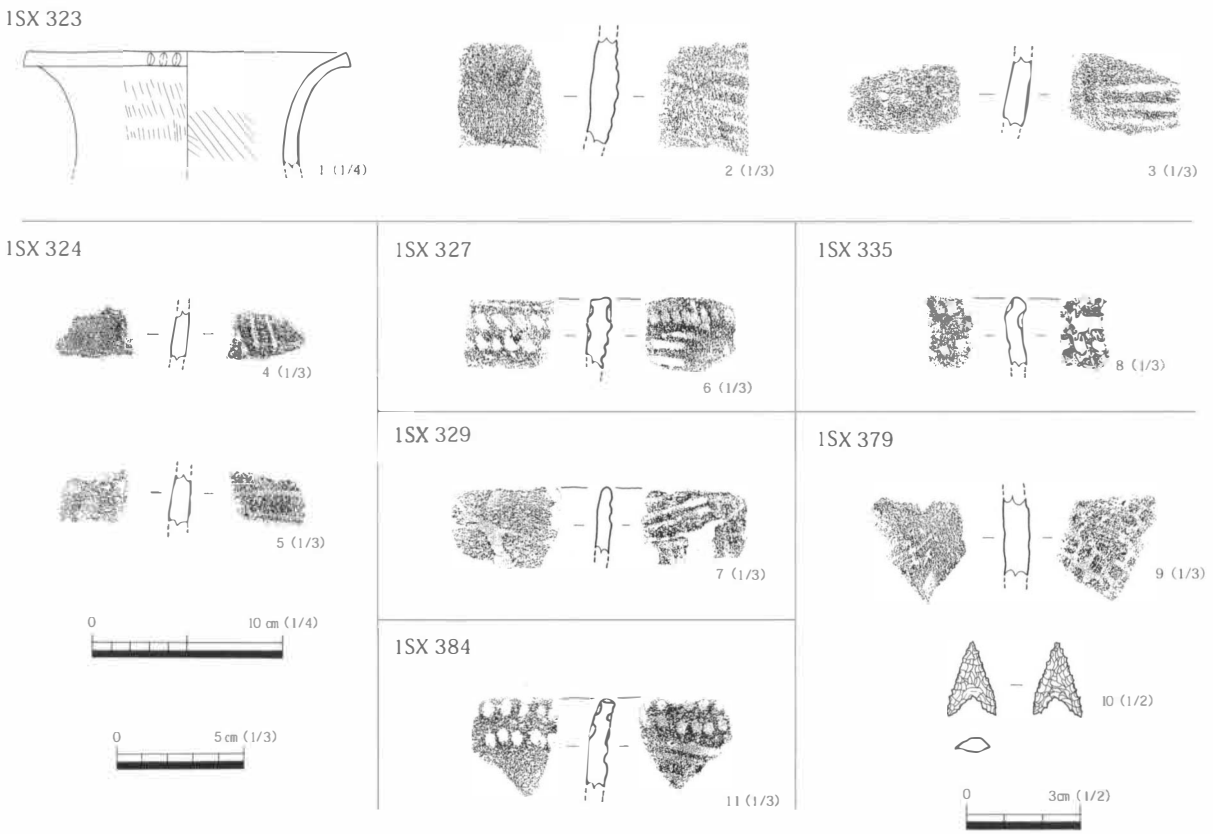


Fig.118　1SX323・1SX324・1SX327・1SX329・1SX335
・1SX379・1SX384 出土遺物実測図（1/4・1/3・1/2）

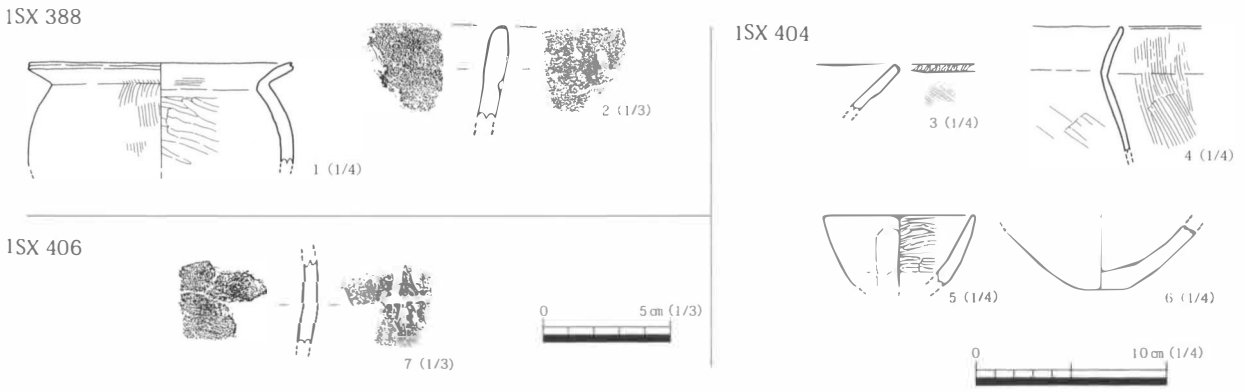


Fig.119　1SX388・1SX404・1SX406 出土遺物実測図（1/4・1/3）

1SX311 出土遺物（Fig.116、Pla.42）

3 は縄文土器の深鉢である。体部の細片で、内面はナデ調整を施しているが、外面の調整は磨耗が著しく判然としない。曽畑式の範疇か。

1SX317 出土遺物（Fig.117、Pla.42）

3 は弥生土器の甕底部である。4 は縄文土器の深鉢である。体部の細片で、外面には凹線文が認められる。曽畑式か。

1SX322 出土遺物（Fig.117、Pla.42）

5 は弥生土器の壷である。二重口縁となっていて、擬口縁端部には明瞭な面を形成する。6 は縄文土器の深鉢である。体部の細片で、外面には凹線文を施す。曽畑式か。

1SX323 出土遺物（Fig.118、Pla.42）

1 は弥生土器の壷である。直立する頚部から口縁部が外反する。端部には明瞭な面を形成し、面全体に刻目を施している。2 と 3 は縄文土器の深鉢である。ともに体部の細片で、外面に凹線文を施している。曽畑式の範疇か。

1SX324 出土遺物（Fig.118、Pla.42）

4 と 5 は縄文土器の深鉢である。ともに体部の細片で、5 は外面に凹線文を施している。ともに曽畑式の範疇であろう。

1SX327 出土遺物（Fig.118、Pla.42）

6 は縄文土器の深鉢である。口縁部の細片で、内外面に刺突文と外面に凹線文を施している。曽畑式の範疇か。

1SX329 出土遺物（Fig.118、Pla.42）

7 は縄文土器の深鉢である。口縁部の細片で、外面に凹線文を施している。曽畑式か。

1SX335 出土遺物（Fig.118、Pla.42）

8 は縄文土器の深鉢である。口縁部の細片で、内外面に凹線文を施している。曽畑式か。

1SX379 出土遺物（Fig.118、Pla.42）

9 は縄文土器の深鉢である。外面に楕円の押型文が認められる。田村式か。10 は黒曜石の鏃である。完形品である。

1SX384 出土遺物（Fig.118、Pla.42）

11 は縄文土器の深鉢である。口縁部の細片で、内外面と口唇部に刺突文が施されている。また外面には凹線文も認められる。曽畑式か。

1SX388 出土遺物（Fig.119、Pla.42）

1 は弥生土器の壷としたが甕かも知れない。口縁部は外反する。2 は縄文土器の深鉢である。口縁部の細片で、口唇部と外面に刺突文が認められる。曽畑式か。

1SX404 出土遺物（Fig.119、Pla.42）

すべて弥生土器である。3 と 4 は甕である。3 は外反する口縁の端部に刻目を施す。5 は鉢である。6 は壷の底部と思われる。

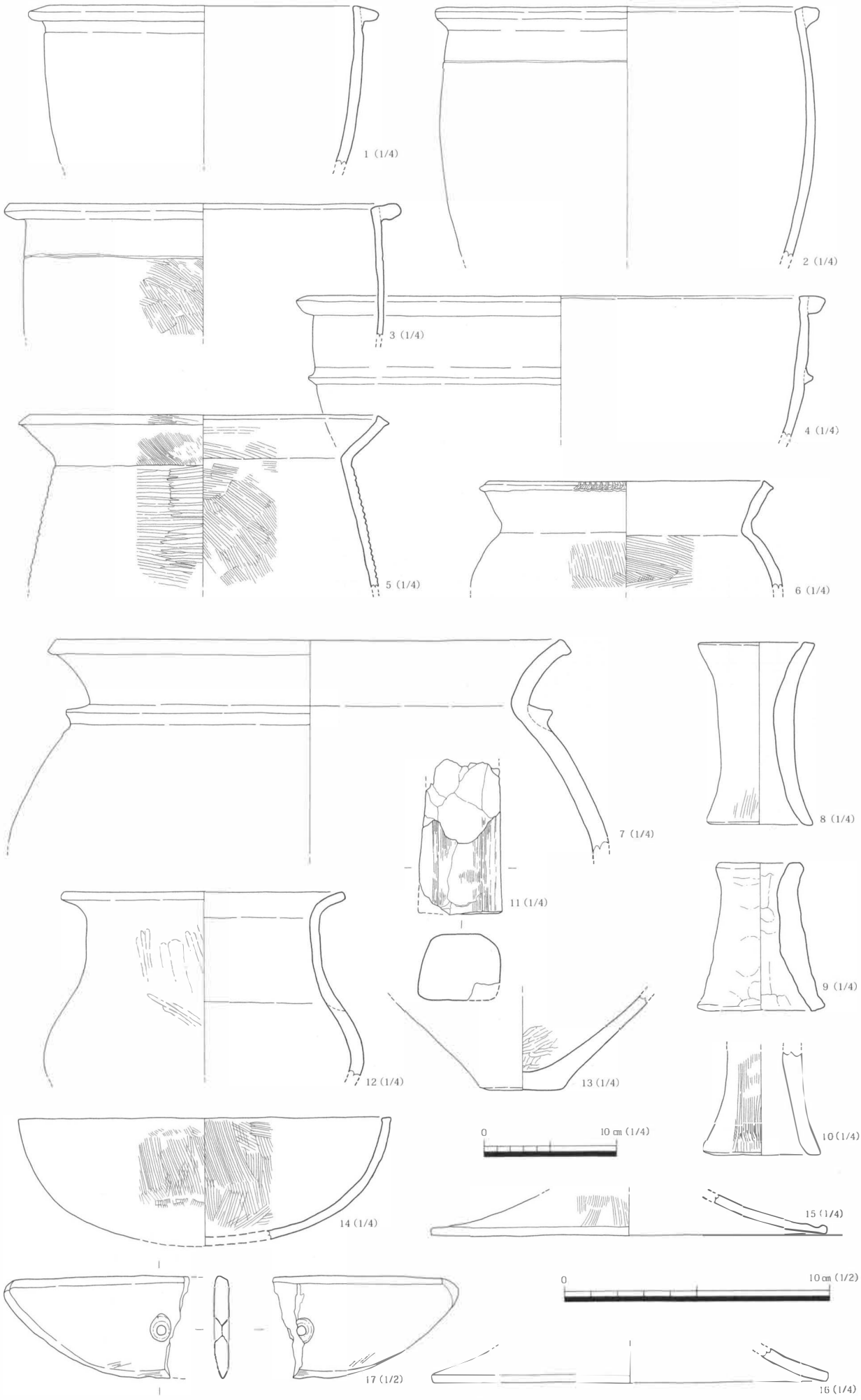


Fig.120　表土出土遺物実測図（1/4・1/2）

Fig	No	遺構 番号	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	口縁部凸帯	体部凸帯	備考	R No
67	1	ISB 090	[illegible]	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ 篦磨き	ナデ	横ナデ 篦磨き			外 淡黄茶色 内 黒色	密	赤色粒子	良					[illegible]
67	2	ISB 090	[illegible]	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	刷毛			外 暗黒褐色 内 暗茶褐色	密		良					[illegible]
67	3	ISB 090	b	弥生	甕		[illegible]		底部 1/3		刷毛	指頭圧痕 ナデ	指頭圧痕 ナデ	ナデ	淡黄灰色	密		良				底部に内外面から焼成後穿孔有	[illegible]
67	4	ISB 090	b	弥生	壺				体部 細片		刷毛	刷毛			赤褐色	密	赤色粒子・角閃石	[illegible]					[illegible]
67	5	ISB 090	b	縄文	深鉢				体部 細片		ナデ	ナデ			外 暗灰褐色 内 暗黄茶色	粗	赤色粒子・角閃石	やや良					[illegible]
67	6	ISB 090	c	弥生	器台	8.8			口縁部 細片	ナデ	刷毛	指頭圧痕 ナデ			外 明黄茶色 内 赤茶色	密	角閃石・赤色粒子	やや良	外反				[illegible]
67	7	ISB 090	[illegible]	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					暗黄灰色	密		良	外反 端部に面				[illegible]
67	8	ISB 090	d	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					外 赤茶色 内 淡赤茶色	密		良	凸帯貼付	1条			[illegible]
67	9	ISB 090	d	弥生	壺				体部 細片		ナデ	ナデ			外 暗黄茶色 内 黄茶色	密	赤色粒子・角閃石粒子	やや良					[illegible]
67	10	ISB 090	e	弥生	甕	24.2			口縁部 細片	横ナデ					暗茶褐色	密		良	外反 刻目有			刻目は端部面の上端のみ	[illegible]
67	11	ISB 090	[illegible]	弥生	甕				口縁部 1/8	横ナデ	刷毛	ナデ			外 黒褐色 内 淡黄灰色	密	赤色粒子	やや良	外反				[illegible]
67	12	ISB 090	[illegible]	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ		篦ナデ			黄灰色	密		良	外反			屈曲部内面に明瞭な稜線有	[illegible]
67	13	ISB 090	e	弥生	壺?				底部 1/8		不明	刷毛	ナデ	刷毛	外 黒褐色 内 黄褐色	やや密		やや不良					[illegible]
67	14	ISB 090	f	弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	刷毛 ナデ	刷毛 ナデ			外 黄茶色 内 暗黄茶色	密	赤色粒子	良	外反				[illegible]
67	15	ISB 090	f	弥生	壺	12.4			上半部 1/8	横ナデ	刷毛 ナデ	刷毛 ナデ			黄茶色	密		良	外反 端部に面			体部は算盤玉状か？	[illegible]
67	16	ISB 090	f	弥生	壺		[illegible]		底部 完存		篦削り ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒褐色	密		[illegible]				底部は円盤状貼付	[illegible]
67	17	ISB 090	f	弥生	鉢	17.4			口縁部 1/8	横ナデ	ナデ	ナデ			外 暗赤茶色 内 淡黄茶色	やや粗	2mm大の砂粒多	良	内湾				[illegible]
67	18	ISB 090	f	弥生	甕	19.2			口縁部 1/8	ナデ	不明	ナデ			外 明黄茶色 内 暗黄茶色	やや密	赤色粒子・角閃石	やや良	外反				[illegible]
67	19	ISB 090	h	弥生	甕	26.0			口縁部 [illegible]	横ナデ	刷毛	刷毛			外 淡赤茶色 内 淡黄茶色	密	赤色粒子	良	外反 端部に面				[illegible]
67	20	ISB 090	h	弥生	高坏	29.4			口縁部 1/8	横ナデ	刷毛	刷毛 ナデ			外 淡黄茶色 内 黄茶色	密	角閃石	良	内湾			口縁部下に屈曲有	[illegible]
67	21	ISB 090	h	弥生	高坏	31.4			口縁部 1/8	ナデ	不明	不明			淡黄茶色	やや密	赤色粒子	やや良	外反			口縁部下に僅かに段有	[illegible]
68	1	ISB 095	a	弥生	支脚	9.3	7.3	6.0	1/4	ナデ	篦削り ナデ	指頭圧痕	指頭圧痕	ナデ	外 赤茶色 内 暗黄灰色	やや密		良	外方に 開く				[illegible]
68	2	ISB 095	[illegible]	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			淡赤茶色	密	金雲母	良	外反				[illegible]
68	3	ISB 095	b	弥生	甕				口縁部 細片	篦ナデ	篦磨き	篦ナデ			暗茶褐色	密	2～3mm大の砂粒	良	凸帯貼付	1条			[illegible]
68	4	ISB 095	b	弥生	壺	8.8			口縁部 1/8	ナデ					黄灰色	密	角閃石	[illegible]					[illegible]
68	5	ISB 095	b	弥生	甕		[illegible]		底部 1/2		刷毛 ナデ	ナデ	不明	ナデ	暗灰褐色	密	角閃石	良					[illegible]
68	7	ISB 095	[illegible]	弥生	器台				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	横ナデ			淡黄橙色	やや密	1mm大の砂粒・角閃石・雲母	やや良	外方に 開く				[illegible]
68	8	ISB 095	[illegible]	弥生	鉢				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	刷毛			茶褐色	密	1mm大の砂粒・雲母	やや良	内湾				[illegible]
68	9	ISB 095	[illegible]	弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ					暗茶褐色	密	1mm大の砂粒・雲母	やや良	袋状			口縁端部は僅かに肥厚 頸口縁部に不明瞭な面有	[illegible]
69	1	ISB 100	[illegible] 半裁	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					外 暗茶褐色 内 淡黄白色	やや密	1～2mm大の砂粒多	やや良	外反 端部に面				[illegible]
69	2	ISB 100	[illegible] 半裁	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	不明	篦ナデ			明橙色	やや粗	1mm大の砂粒	やや良	外反				[illegible]
69	3	ISB 100	[illegible] 半裁	弥生	鉢?				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	刷毛			外 淡灰茶色 内 明橙色	密	1～2mm大の砂粒・雲母	やや良	外方に 開く				[illegible]
69	4	ISB 100	[illegible] 半裁	弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	刷毛			外 淡黄茶色 内 淡白茶色	やや密	1mm大の砂粒・金雲母多	やや良	外反				[illegible]
69	5	ISB 100	a 半裁	弥生	壺				体部 1/8		篦ナデ	篦ナデ			淡橙色	やや粗	1～2mm大の砂粒・角閃石	やや良	外反				[illegible]
69	6	ISB 100	b 掘込	弥生	甕				口体部 細片		横ナデ 刷毛	篦ナデ			茶褐色	やや密	2mm大の砂粒・角閃石	やや良	外反				[illegible]
69	7	ISB 100	b 掘込	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	篦磨き	篦磨き			外 淡橙色 内 暗橙色	密	1mm大の砂粒少	やや良	外反				[illegible]
69	8	ISB 100	[illegible] 半裁	弥生	甕				底部 細片		刷毛	刷毛	刷毛	刷毛	外 淡赤茶色 内 暗黒褐色	やや密	1～2mm大の砂粒・雲母	やや不良					[illegible]
69	9	ISB 100	c 半裁	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					外 暗茶褐色 内 明黄茶色	やや密	1mm大の砂粒・金雲母多	やや良	外反				[illegible]
69	10	ISB 100	[illegible] 半裁	弥生	鉢				口縁部 細片	横ナデ ナデ					外 明灰茶色 内 明黄茶色	やや密	1mm大の砂粒・角閃石	やや良	外方に 開く				[illegible]
69	11	ISB 100	c 半裁	弥生	鉢				1/5	横ナデ	刷毛	刷毛			明赤茶褐色	密	1～2mm大の砂粒・雲母・角閃石	やや良	僅かに 内湾				[illegible]
69	12	ISB 100	[illegible] 掘込	弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ 刷毛					外 暗橙色 内 茶赤色	粗	1～2mm大の砂粒・角閃石	やや不良	[illegible]口縁			[illegible]口縁は剥離している	[illegible]
69	13	ISB 100	[illegible] 掘込	弥生	甕				体部 細片		横ナデ	刷毛			外 淡茶色 内 淡橙色	やや密	1mm大の砂粒・石英	良好	外反				[illegible]
69	14	ISB 100	[illegible] 掘込	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	篦ナデ			外 明黄茶色 内 灰茶色	密	1mm大の砂粒	良好	外反				[illegible]
69	15	ISB 100	d 半裁	弥生	甕				口縁部 細片	刷毛 篦磨き					暗茶褐色	やや粗	1mm大の砂粒多	やや良	外反				[illegible]
69	16	ISB 100	d 半裁	弥生	壺				頸口縁 細片	横ナデ 指頭圧痕					外 黒褐色 内 明茶褐色	密	0.5mm大の砂粒	良好	[illegible]口縁				[illegible]
69	17	ISB 100	e 半裁	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					外 暗橙色 内 明灰黄色	密	0.5mm大の砂粒・角閃石	良好	外反				[illegible]
69	18	ISB 100	e 半裁	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	dナデ	ナデ			暗茶色	やや粗	0.5mm大の砂粒・角閃石	やや良	外反				[illegible]
69	19	ISB 100	e 半裁	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					明黄茶色	密	1～2mm大の砂粒・角閃石	良好	外反				[illegible]
69	20	ISB 100	e 半裁	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	不明	不明			明黄茶色	やや粗	1～2mm大の砂粒多	やや不良	外反				[illegible]
69	21	ISB 100	e 半裁	弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ					外 淡橙色 内 明黄茶色	やや粗	1mm大の砂粒・角閃石多	やや良	外反				[illegible]
69	22	ISB 100	e 半裁	弥生	不明品				体部 細片		刷毛	刷毛?			外 淡橙色 内 明橙色	やや粗	1mm大の砂粒多	やや良				焼成前穿孔1ヶ所有	[illegible]
69	23	ISB 100	[illegible] 掘込	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					暗橙色	やや粗	1～3mm大の砂粒・雲母多	やや良	外反 端部に面			端部面の全面に刻目有	[illegible]
69	24	ISB 100	[illegible] 掘込	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					暗灰茶色	やや密	1mm大の砂粒多	やや良	外反				[illegible]
69	25	ISB 100	e 掘込	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					暗黄茶褐色	粗	1mm大の砂粒・長石多	やや良	外反				[illegible]
69	26	ISB 100	e 掘込	弥生	壺				体部 細片		ナデ 横ナデ	刷毛			明橙色	やや密	1～3mm大の砂粒・雲母	良好				体部に凸帯4条有	[illegible]
69	27	ISB 100	e 掘込	弥生	甕				体部 細片		横ナデ 不明	不明			外 黄茶色 内 淡橙色	やや粗	1～2mm大の砂粒多	やや不良				胴部に刻目凸帯1条有	[illegible]
69	28	ISB 100	e 掘込	弥生	器台				口縁部 細片	横ナデ 不明					暗橙色	粗	1mm大の砂粒多	やや不良	外反 端部に面				[illegible]
69	29	ISB 100	f 半裁	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			明黄灰色	やや粗	1～2mm大の砂粒・赤色粒子多	やや良	外反				[illegible]
69	30	ISB 100	f 半裁	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ 刷毛					暗橙色	粗	1～2mm大の砂粒・雲母	やや良	外反				[illegible]

Tab.8　出土遺物観察票（土器）①

Fig.	No.	遺構 番号	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	口縁部	体外部	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	口縁部凸帯	体部凸帯	備考	[illegible]
69	31	ISB 100	f 下級	弥生	甕				口縁部 細片	ナデ	ナデ 指頭圧痕	横ナデ			暗茶褐色	やや密	1mm大の砂粒	やや良	外反				1
69	32	ISB 100	f 下級	弥生	鉢		8.2		底部 完存		横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	明灰黄色	密	1mm大の砂粒・雲母多	良好					3
69	33	ISB 100	f 下級	土師	椀				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			橙色	精良	0.5mm大の砂粒	良好	内湾				4
69	35	ISB 100	f 掘込	弥生	鉢				口縁部 細片	横ナデ	不明	刷毛			淡黄白色	やや密	1～2mm大の砂粒多・赤色粒子少	やや不良	内湾				3
69	36	ISB 100	f 掘込	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ 刷毛	刷毛	横ナデ			暗茶褐色	やや密	1mm大の砂粒・雲母多	やや良	外反				1
69	37	ISB 100	f 掘込	弥生	壺				複口縁 細片	横ナデ					明黄茶色	やや密	0.5mm大の砂粒・角閃石多	良好	二重口縁				2
69	38	ISB 100	f 掘込	弥生	壺				体部 細片		横ナデ 刷毛	ナデ			外 淡黄茶色 内 淡橙色	やや粗	1～3mm大の砂粒多	やや良				胴部に凸帯1条有	4
69	39	ISB 100	f 掘込	縄文	深鉢				体部 細片		凹線文?	ナデ			茶褐色	やや密	1mm大の砂粒・角閃石・金雲母	やや良					5
69	40	ISB 100	f 柱痕	弥生	壺				体部 細片		刷毛	ナデ			外 暗茶褐色 内 淡橙色	やや粗	1～2mm大の砂粒少	良好				頸部に凸帯1条有	1
70	1	ISB 139	b	縄文	深鉢				体部 細片		ナデ	横ナデ			暗黒褐色	やや密	0.5mm大の砂粒・角閃石多	やや良					1
70	2	ISB 139	b	縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	横ナデ			外 暗橙色 内 暗茶褐色	やや密	1mm大の砂粒・角閃石	やや良					2
70	3	ISB 139	c	弥生	甕				体部 細片		刷毛	刷毛			外 灰茶色 内 明黄茶色	やや粗	1mm大の砂粒・雲母	やや良				胴部に凸帯1条有	3
70	4	ISB 139	c	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ 刷毛					明橙色	やや粗	1mm大の砂粒・雲母	やや良	外反				2
70	5	ISB 139	c	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					淡灰茶色	やや密	0.5mm大の砂粒	やや良	外反				1
70	6	ISB 139	d	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ 刷毛	刷毛	横ナデ			明橙色	やや密	1mm大の砂粒多	良好	外反			口縁端部の面全体に刻目有 胴部に刻目有	3
70	7	ISB 139	d	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			明橙色	密	0.5mm大の砂粒	良好	如意形 刻目有	1条 刻目有			2
70	8	ISB 139	d	弥生	甕				口縁部 細片	不明					淡灰茶色	粗	1～2mm大の砂粒多	やや不良	外反				1
70	9	ISB 139	d	弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ 刷毛					淡黄白色	やや粗	1mm大の砂粒・長石多	やや不良	二重口縁				4
71	1	ISB 140	a	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	不明	刷毛			外 暗茶褐色 内 茶褐色	やや粗	0.5mm大の砂粒多	やや良	如意形				3
71	2	ISB 140	a	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	刷毛			明黄茶色	やや密	0.5mm大の砂粒	やや良	如意形				1
71	3	ISB 140	a	弥生	甕				口縁部 1/4	横ナデ 刷毛	刷毛	刷毛			外 淡茶褐色 内 黒褐色	やや粗	1mm大の砂粒	やや良	外反 端部に面			口縁端部の上下両端に刻目有	3
71	4	ISB 140	b	縄文	深鉢				口縁部 細片	刻目	凹線文	凹線文			明黄茶色	やや粗	1mm大の砂粒・角閃石多	やや良	ほぼ 直立				3
71	5	ISB 140	b	縄文	深鉢				体部 細片		不明	横ナデ			暗茶褐色	やや粗	1mm大の砂粒・角閃石	やや良					2
71	6	ISB 140	b	縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	不明			外 暗橙色 内 灰褐色	やや粗	1mm大の砂粒・角閃石・石英	やや良					1
71	7	ISB 140	b	弥生	器台				底部 細片		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	淡黄灰色	やや密	0.5mm大の砂粒少	やや良				底部の面は設置する	4
71	8	ISB 140	c	縄文	深鉢				体部 細片		凹線文 刺突文	不明			茶褐色	粗	0.5mm大の砂粒・角閃石	やや良					2
71	9	ISB 140	c	縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	不明			明黄茶色	粗	1mm大の砂粒・角閃石	やや良					1
71	10	ISB 140	c	縄文	深鉢				口縁部 細片	刺突文	刺突文 凹線文	凹線文			暗茶褐色	やや密	1mm大の砂粒・角閃石多	良好	ほぼ 直立				2
72	1	ISB 149	a	弥生	壺				体部 細片		刷毛	刷毛			外 暗茶褐色 内 黄茶色	やや密	0.5mm大の砂粒	やや良					1
72	2	ISB 149	b	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					明黄灰色	やや密	0.5mm大の砂粒・雲母	やや良	凸帯貼付	1条			2
72	3	ISB 149	b	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ 丹塗り					素地 淡灰茶色 顔料 暗赤色	密	0.5mm大の砂粒	良好	外反				1
72	4	ISB 149	b	弥生	器台				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	刷毛			外 明灰茶色 内 明黄茶色	やや密	0.5mm大の砂粒少	やや良	外方に 開く			口縁端部に明瞭な面有	2
72	5	ISB 149	b	弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			外 橙色 内 明黄橙色	やや密	1mm大の砂粒	良好	内湾 端部に面		4条		6
72	6	ISB 149	d	弥生	甕		3.4		底部 完存		ナデ	不明	不明	ナデ	外 淡茶褐色 内 淡茶色	粗	1～2mm大の砂粒・角閃石・金雲母多	やや不良					5
72	7	ISB 149	d	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	刷毛			淡橙色	やや粗	1mm大の砂粒多	やや不良	凸帯貼付	1条			1
72	8	ISB 149	d	弥生	鉢				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			淡灰茶色	やや密	1.5mm大の砂粒・雲母	良好	僅かに 内湾				2
73	1	ISB 172	a	弥生	壺				体部 細片		刷毛	刷毛			赤茶色	やや粗	1～2mm大の砂粒・長石多	良好				胴部に凸帯1条有	2
73	2	ISB 172	a	弥生	鉢				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	箆磨き			外 淡黄茶色 内 明茶色	やや密	1mm大の砂粒	やや良	内湾				1
73	3	ISB 172	a	弥生	甕	22.0			上半部 1/4	横ナデ	刷毛	刷毛			外 黒色 内 暗茶褐色	やや粗	1～2mm大の砂粒・雲母多	やや良	外反 端部に面				3
73	4	ISB 172	a	縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	ナデ?			暗黄茶色	やや密	1～3mm大の砂粒・長石・角閃石	やや良					5
73	5	ISB 172	a	縄文	深鉢				口縁部 細片	刻目	箆ナデ	指頭圧痕			暗黄茶褐色	密	1～3mm大の砂粒・石英多	良好	僅かに 外反				4
73	6	ISB 172	c	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					外 茶褐色 内 黒茶褐色	やや密	1mm大の砂粒・雲母	やや良	外反 端部に面			端部面の上下端に刻目有	3
73	7	ISB 172	c	弥生	甕	25.4			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	刷毛			外 茶褐色 内 淡赤茶色	やや密	1mm大の砂粒・雲母	やや良	外反 端部に面				1
73	8	ISB 172	c	弥生	鉢	30.8			口縁部 1/5	不明	不明	不明			明橙色	やや密	1～2mm大の砂粒・赤色粒子	やや良	内側に 折返し				2
73	9	ISB 172	d	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ 刷毛					淡黄白色	やや密	1mm大の砂粒	やや良	外反 端部に面				1
73	10	ISB 172	d	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			明黄茶色	やや粗	1～2mm大の砂粒	良好	凸帯貼付	1条			3
73	11	ISB 172	d	弥生	甕	15.6			口縁部 1/8	横ナデ	横ナデ	ナデ			外 赤茶色 内 明黄茶色	密	1～2mm大の砂粒・長石多	やや良	外反				2
73	12	ISB 172	d	弥生	鉢				口縁部 細片	横ナデ	箆削り	ナデ			黄茶褐色	密	1mm大の砂粒	良好	内湾				4
74	1	ISB 238	d	弥生	蓋				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外 暗黄茶色 内 淡黄茶色	やや密	2mm大の砂粒多	良	外反 端部に面				1
74	2	ISB 238	d	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			淡赤茶色	密		良	凸帯貼付	1条			2
74	3	ISB 238	d	弥生	鉢				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			外 暗茶褐色 内 明赤褐色	やや密	角閃石	やや良	内湾				4
74	4	ISB 238	d	弥生	器台		15.4		底部 1/8		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 暗灰黄色 内 赤茶色	密	赤色粒子	良				底部の面は接地しない	5
75	1	ISB 314	a	弥生	甕	24.2			上半部 1/8	横ナデ	ナデ 不明	刷毛			淡赤茶色	密	赤色粒子	良	外反 端部に面				1
75	2	ISB 314	b	弥生	甕	21.4			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	刷毛			明赤褐色	密	角閃石	良	二重口縁			復口縁径は19.0cm	1
75	3	ISB 314	b	弥生	甕		3.0		底部 1/2		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 淡灰白色 内 明赤褐色	密		良					2
75	4	ISB 314	b	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	刷毛			明赤褐色	密	角閃石・石英	良	如意形 端部に面				3
75	5	ISB 314	b	縄文	深鉢				口縁部 細片	刻目 刺突文	凹線文	凹線文			外 暗茶褐色 内 淡黄茶色	密	角閃石	良	外反				4
75	6	ISB 314	d	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					淡黄灰色	密		良	凸帯貼付	1条			2
75	7	ISB 314	d	弥生	甕		6.5		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 淡黄灰色 内 暗灰白色	やや密	赤色粒子	良					1

Tab.9　出土遺物観察票（土器）②

Fig	No	遺構 番号	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	口縁部	体外部	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	口縁部凸帯	体部凸帯	備考	R.No.
76	1	1SB 325	a	弥生	壺	16.4			口縁部 1/6	横ナデ	刷毛 ナデ	刷毛			淡黄茶色	密		良	外反 端部に面				1
76	2	1SB 325	b	弥生	壺	22.6			口縁部 1/2	横ナデ	刷毛 ナデ	刷毛 ナデ			明茶褐色	密	赤色粒子	良	外反 端部に面			口縁端部の面全体に刻目有	1
76	3	1SB 325	d	弥生	壺	19.6	8.2	17.5	1/2	横ナデ	刷毛	刷毛	刷毛	刷毛	明黄茶色	やや密		やや良	外反 端部に面				1
77	1	1SB 376	a	弥生	鉢				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			明黄色	やや密	1～2mm大の砂粒・角閃石	やや良	内湾				1
77	2	1SB 376	a	弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ					外 淡橙色 内 黄茶色	やや密	1mm大の砂粒	やや不良	外反				2
78	1	1SK 016		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			[illegible]褐色	密	2mm大の砂粒・赤色粒子	良	凸帯貼付	1条	沈線1条		[illegible]
78	[illegible]	1SK 017		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外 黒褐色 内 黄灰色	密		良	外反				[illegible]
78	[illegible]	[illegible]		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			[illegible]黄茶色	やや粗	赤色粒子	良	凸帯貼付	1条			[illegible]
78	5	1SK 017		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	刷毛 ナデ			外 黄灰色 内 灰色	密	角閃石	良	外反				[illegible]
78	3	1SK 016		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外 赤茶色 内 淡赤褐色	やや密	角閃石・赤色粒子	良	内湾				[illegible]
78	[illegible]	1SK 017		弥生	壺	[illegible]			口縁部 1/8	横ナデ	刷毛	ナデ			外 黄茶色 内 赤茶色	やや粗		良	凸帯貼付	1条	沈線1条		[illegible]
78	[illegible]	1SK 017		弥生	大甕				口縁部 細片	横ナデ					外 黄褐色 内 黄灰色	密		良	外反			[illegible]	[illegible]
78	[illegible]	1SK 017		弥生	壺		[illegible]		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 赤褐色 内 黒褐色	やや密	1～2mm大の砂粒多	良				底部は上げ底状	[illegible]
78	9	1SK 017		弥生	大甕		[illegible]		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	淡黄茶色	密	赤色粒子・角閃石	良					[illegible]
78	10	1SK 017		弥生	蓋				つまみ部 完存		ナデ 横ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 暗赤褐色 内 暗赤褐色	密	角閃石・赤色粒子	良				つまみ部径7.5cm	[illegible]
78	11	1SK 017		弥生	支脚		[illegible]		下半部 3/4		刷毛?	ナデ	横ナデ	横ナデ	外 黄灰褐色 内 茶褐色	密	角閃石	良					[illegible]
78	12	1SK 017		黒色	碗		[illegible]		底部 完存				横ナデ	横ナデ	外 淡黄橙色 内 黒色	密	赤色粒子	良					[illegible]
79	1	1SK 034		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			外 黒褐色 内 赤褐色	密	赤色粒子	良	外反				[illegible]
79	2	1SK 034		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	刷毛			明赤褐色	密	赤色粒子	良	外反				[illegible]
79	3	1SK 034		弥生	高坏				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	ナデ			暗赤褐色	密	1mm大の砂粒	良	嘴先状				[illegible]
79	4	1SK 034		弥生	鉢				口縁部 細片	ナデ	ナデ	ナデ			外 赤茶色 内 淡灰黄色	密		良	内湾				[illegible]
79	[illegible]	1SK 034		弥生	器台				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	指押さえ			淡黄茶色	密	赤色粒子	良	外反				[illegible]
79	6	1SK 034		土師	坏				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			明赤褐色	密	赤色粒子	良	僅かに 内湾				[illegible]
80	1	1SK 035		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	刷毛			外 淡黄橙色 内 黒褐色	やや粗	1mm大の砂粒多	良	外反				[illegible]
80	2	1SK 035		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	横ナデ			外 淡黄褐色 内 淡黄灰色	密		良	外反				[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			橙黄灰色	密		良	凸帯貼付	1条			[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		弥生	壺		[illegible]		底部 1/2		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 灰白色 内 淡黄褐色	密		良					[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		弥生	壺		[illegible]		底部 1/4		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 淡赤褐色 内 黄茶色	密	角閃石多	良					[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	刷毛 ナデ	刷毛 ナデ			外 明赤褐色 内 赤褐色	密		良					[illegible]
81	[illegible]	1SK 037		弥生	器台	16.4			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛 ナデ	刷毛			淡黄茶色	密	赤色粒子	良	外反				[illegible]
81	2	1SK 037		弥生	壺				体部 細片		刷毛	刷毛			橙茶褐色	密	赤色粒子	良		1条			[illegible]
81	[illegible]	[illegible]		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外 黄茶褐色 内 黒褐色	密	角閃石	良	如意形 刻目				[illegible]
81	[illegible]	[illegible]		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			外 暗茶褐色 内 茶褐色	密	角閃石	良	凸帯貼付	1条			[illegible]
81	[illegible]	[illegible]		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			淡黄茶色	密	赤色粒子	良	如意形				[illegible]
81	[illegible]	[illegible]		弥生	支脚	7.8			口縁部 1/8	横ナデ	刷毛	横ナデ			外 淡黄灰色 内 淡黄橙色	密		良	僅かに 外反				[illegible]
82	1	[illegible]		弥生	壺	21.2			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			茶褐色	やや粗	1～3mm大の砂粒多・石英多・角閃石多	やや良	凸帯貼付	1条			[illegible]
82	2	[illegible]		弥生	壺	28.0			口縁部 1/5	横ナデ	刷毛	ナデ			外 暗茶褐色 内 淡茶褐色	密	1～2mm大の砂粒・雲母	良好	外反		沈線1条		[illegible]
82	3	1SK 050		弥生	壺				口縁部 1/5	横ナデ	刷毛	ナデ			外 明橙色 内 淡橙色	やや粗	1～2mm大の砂粒・雲母	やや良	凸帯貼付	1条			[illegible]
82	4	1SK 050		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外 明橙色 内 赤褐色	粗	1mm大の砂粒少・雲母少	良好	凸帯貼付	1条	1条		[illegible]
82	[illegible]	[illegible]		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			暗茶褐色	粗	1～3mm大の砂粒多・長石多	やや良	凸帯貼付	1条	1条		[illegible]
82	[illegible]	[illegible]		弥生	壺		[illegible]		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 明茶褐色 内 暗灰茶褐色	粗	1～2mm大の砂粒多・長石粒多	やや良					[illegible]
82	[illegible]	[illegible]		弥生	壺		[illegible]		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 淡灰茶褐色 内 茶褐色	粗	1～2mm大の砂粒・雲母	やや良					[illegible]
82	[illegible]	[illegible]		弥生	壺		[illegible]		底部 完存		刷毛	ナデ	指押さえ	ナデ	外 淡赤茶褐色 内 暗茶褐色	粗	1～2mm大の砂粒	やや良					[illegible]
82	[illegible]	[illegible]		弥生	壺		[illegible]		底部 2/3		刷毛	不明	指押さえ	横ナデ	外 明黄赤褐色 内 暗茶褐色	粗	1～2mm大の砂粒多・石英	やや良					[illegible]
82	10	[illegible]		弥生	壺		[illegible]		底部 完存		刷毛	不明	不明	不明	外 明黄茶色 内 暗灰茶色	粗	1～2mm大の砂粒多	やや良					[illegible]
82	11	[illegible]		弥生	壺		[illegible]		底部 完存		刷毛	ナデ	指押さえ	ナデ	外 明黄茶色 内 明赤茶褐色	粗	1～3mm大の砂粒多	やや良					[illegible]
82	12	[illegible]		弥生	壺		[illegible]		底部 完存		刷毛	ナデ	指押さえ	ナデ	外 明黄茶色 内 茶褐色	粗	1～2mm大の砂粒多・角閃石多	やや良					[illegible]
82	13	[illegible]		弥生	壺		[illegible]		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 明黄茶褐色 内 暗灰茶褐色	粗	1～2mm大の砂粒多	やや良					[illegible]
82	14	[illegible]		弥生	壺		[illegible]		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 明黄茶褐色 内 赤茶褐色	粗	1～2mm大の砂粒多	やや良					[illegible]
82	15	[illegible]		弥生	壺		[illegible]		底部 完存		横ナデ	ナデ	ナデ	横ナデ	外 黄茶褐色 内 黒褐色	粗	1～2mm大の砂粒多・長石粒多	やや良					[illegible]
82	17	1SK 050		弥生	蓋				口縁部 細片	不明 横ナデ	刷毛	刷毛 ナデ			外 暗橙色 内 黄茶褐色	粗	1～2mm大の砂粒・石英	やや不良	外反				[illegible]
82	[illegible]	[illegible]		弥生	蓋				上半部 1/2		刷毛	ナデ	ナデ	不明	外 明黄茶色 内 暗茶褐色	粗	1～2mm大の砂粒・角閃石	やや良					[illegible]
82	[illegible]	[illegible]		弥生	蓋				上半部 完存		刷毛	ナデ	板状圧痕	ナデ	外 淡黄茶色 内 灰茶色	粗	1～2mm大の砂粒・角閃石・雲母	やや良				つまみ部径6.8cm	[illegible]
82	[illegible]	[illegible]		弥生	蓋				上半部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 明茶褐色 内 淡茶褐色	[illegible]	[illegible]	[illegible]				つまみ部径5.8cm	[illegible]
82	[illegible]	[illegible]		弥生	壺		[illegible]		底部 完存		箆磨き	ナデ	ナデ	箆磨き	外 淡橙色 内 明灰茶色	やや粗	1mm大の砂粒・石英・角閃石・雲母	良好					[illegible]
82	[illegible]	[illegible]		弥生	器台		[illegible]		下半部 1/2		ナデ	ナデ	ナデ	横ナデ	外 淡橙色 内 暗橙色	粗	1～2mm大の砂粒	やや良					[illegible]
82	[illegible]	[illegible]		弥生	器台		[illegible]		下半部 1/2		刷毛	ナデ	ナデ	横ナデ	外 明黄白色 内 明橙色	粗	1～2mm大の砂粒	やや良					[illegible]
82	[illegible]	[illegible]		弥生	器台		[illegible]		下半部 完存		刷毛	ナデ	横ナデ	指頭圧痕	外 明黄茶色 内 明灰茶色	粗	1～2mm大の砂粒	やや良					[illegible]
82	[illegible]	[illegible]		弥生	壺	34.0			口縁部 1/4	横ナデ	不明	不明			外 明黄茶色 内 淡橙色	粗	1～3mm大の砂粒多・石英多・赤色粒子小	やや不良	外反				[illegible]

Tab.10　出土遺物観察票（土器）③

Fig	No	遺構番号	層位	時期	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	口縁部凸帯	体部凸帯	備考	R.No.
83	25	1SK 050		弥生	甕	10.0			口縁部 1/4	横ナデ	横磨き	ナデ 不明			外：暗灰茶褐色 内：灰茶褐色	やや粗	1～3㎜大の砂粒・雲母	やや良	外反				17
83	26	1SK 050		弥生	甕		4.4		下半部 完存		不明	指頭圧痕	ナデ	ナデ	外：黄茶褐色 内：赤茶褐色	粗	1～2㎜大の砂粒・雲母	やや不良					16
83	27	1SK 050		弥生	蓋	28.1		11.2	1/3	横ナデ	刷毛	ナデ	指頭圧痕	ナデ 横ナデ	外：暗茶褐色 内：黒褐色	粗	1～2㎜大の砂粒・石英	やや良	外反			つまみ部径6.0cm	21
83	28	1SK 050		弥生	支脚	5.6	10.9	7.1	ほぼ完形	ナデ 指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕			ナデ 指頭圧痕	明黄茶色	密	1㎜大の砂粒・角閃石	良好					28
83	29	1SK 050		弥生	支脚	4.3			上半部 1/3	ナデ 指頭圧痕					淡橙色	密	1㎜大の砂粒少	やや良					30
83	30	1SK 050		弥生	支脚		8.0		下半部		ナデ 指頭圧痕			ナデ 指頭圧痕	淡黄茶色	密	1㎜大の砂粒少	良好					29
84	1	1SK 071		弥生	支脚				1/2	横ナデ	箆削り ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外：暗黄灰色 内：暗赤褐色	やや粗	角閃石	やや不良	外反				1
84	2	1SK 074		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ					外：黄褐色 内：赤茶色	やや密		良	凸帯貼付	1条			1
84	3	1SK 074		弥生	支脚				底部 1/4		不明	ナデ	不明	不明	外：赤茶色 内：黄茶色	やや粗		良					2
84	4	1SK 074		縄文	深鉢				体部 細片		押圧文	ナデ			外：灰黄褐色 内：灰褐色	やや粗		良					3
84	5	1SK 088		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	指頭圧痕 ナデ			外：淡赤茶色 内：淡黄茶色	やや粗	赤色粒子	やや良	凸帯貼付	1条			1
84	6	1SK 088		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			淡黄褐色	やや密		良	凸帯貼付	1条			2
84	7	1SK 088		弥生	高坏				口縁部 細片	ナデ	ナデ	ナデ			外：暗茶褐色 内：淡黄橙色	やや粗	赤色粒子・角閃石	やや不良	外反			口縁部下に段有	3
85	1	1SK 089		弥生	甕	25.4			口縁部 1/8	横ナデ	刷毛	ナデ			外：暗茶褐色 内：黄褐色	密	赤色粒子	良	凸帯貼付	1条			7
85	2	1SK 089		弥生	甕				口縁部 細片	ナデ	ナデ	ナデ			淡黄灰色	密	角閃石	良	凸帯貼付	1条 刻目有			5
85	3	1SK 089		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	指頭圧痕 ナデ			外：暗茶褐色 内：黄橙色	密	角閃石	良	凸帯貼付	1条			6
85	4	1SK 089		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	指頭圧痕 ナデ			淡黄茶色	やや密	赤色粒子・角閃石・石英	やや良	凸帯貼付	1条	1条		8
85	5	1SK 089		弥生	甕		3.8		底部 1/2		磨ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外：暗灰褐色 内：灰白色	密		良					4
85	6	1SK 089		弥生	甕		3.6		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外：淡黄茶色 内：暗黄茶色	やや密	角閃石・赤色粒子	良					3
85	7	1SK 089		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	刷毛			外：淡赤褐色 内：淡赤茶色	やや密		やや良	外反 端部に面				1
85	8	1SK 089		弥生	甕	14.8			口縁部 1/8	横ナデ	ナデ	ナデ			外：黄茶色 内：淡黄茶色	密	赤色粒子	良	外反 端部に面				2
86	1	1SK 096		弥生	甕	33.0			口縁部 1/8	横ナデ 刷毛	横ナデ	刷毛			外：黄茶色 内：暗黄茶色	やや密	赤色粒子	やや良	外反 刻目有		胴部に 1条	口縁端部の面全体に刻目	1
86	2	1SK 096		弥生	甕	8.0			口縁部 1/4	丹塗り	丹塗り	ナデ			外：赤茶色 内：黄灰色	やや密	角閃石	やや良	素口縁				6
86	3	1SK 096		弥生	高坏				脚部 完存		刷毛	ナデ			外：暗黄灰色 内：暗赤茶色								5
86	4	1SK 066		弥生	器台				底部 細片		刷毛 ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黄灰色	密		良					3
86	5	1SK 066		弥生	器台		11.8		底部 1/4		指頭圧痕 ナデ	指頭圧痕	ナデ	ナデ	赤茶色	密	角閃石	良					4
86	6	1SK 066		弥生	支脚				底部 細片		ナデ	指頭圧痕 ナデ	ナデ	ナデ	外：暗黄灰色 内：淡黄灰色	密		良					1
86	7	1SK 096		弥生	鉢	16.4			口縁部 1/4	横ナデ	不明	ナデ			赤茶色	やや密	赤色粒子・角閃石	良	内湾				2
87	1	1SK 101		弥生	甕				口縁部 1/4	横ナデ	ナデ	指頭圧痕 ナデ			外：暗橙色 内：黒褐色	粗	1mm大の砂粒・角閃石	やや良	如意形 刻目有		1条 刻目有	口縁部の刻目は端部の面全体に施文される	3
87	2	1SK 101		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	摩ナデ			外：暗茶褐色 内：明黄茶色	やや粗	1mm大の砂粒	やや良	外反				2
87	3	1SK 101		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	不明	ナデ			淡橙色	やや粗	1mm大の砂粒多	不良	外反				4
87	4	1SK 101		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	摩ナデ			外：暗茶褐色 内：黄茶褐色	粗	1mm大の砂粒・金雲母	良好	凸帯貼付	1条 刻目有	1条 刻目有		1
87	5	1SK 101		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	不明	不明			外：淡橙色 内：黒褐色	粗	1～2mm大の砂粒多	不良	外反				3
87	6	1SK 101		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					外：淡茶褐色 内：赤黄白色	粗	1mm大の砂粒・角閃石	やや良	外反				3
87	7	1SK 101		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			黄茶色	やや粗	1mm大の砂粒・雲母	良好	凸帯貼付	1条	1条		8
87	8	1SK 101		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外：暗茶褐色 内：黄茶褐色	やや粗	1mm大の砂粒・雲母	やや良	外反				1
87	9	1SK 101		弥生	甕		5.1		底部 1/3		ナデ		ナデ	ナデ	明黄茶色	やや粗	1mm大の砂粒	やや不良				底部に刻痕1ヶ所有	6
87	10	1SK 101		弥生	甕				体部 細片		横ナデ	ナデ			暗茶褐色	粗	1mm大の砂粒・雲母多	やや良				胴部に凸帯1条有	10
87	11	1SK 101		弥生	鉢	6.6	4.2	9.5	2/3	横ナデ	不明	ナデ	不明	不明	明黄茶色	やや粗	1～2mm大の砂粒多	やや良	外反				12
87	12	1SK 101		弥生	器台	19.4			口縁部 1/7	横ナデ	横ナデ	横ナデ			黄茶色	粗	1～2mm大の砂粒・石英	良好	外反 端部に面				13
87	13	1SK 101		弥生	器台				底部 細片		刷毛	ナデ	横ナデ	横ナデ	外：淡黄白色 内：淡橙色	やや密	1～2mm大の砂粒	やや良				底部の面は接地しない	15
87	14	1SK 101		弥生	器台		10.0		底部 1/4		ナデ	不明	刷毛	横ナデ	外：暗黄茶色 内：暗茶褐色	粗	1mm大の砂粒・雲母	やや良				底部の面は接地しない	14
87	15	1SK 101		縄文	深鉢				体部 細片		横ナデ	ナデ			外：黒褐色 内：明黄白色	やや粗	1mm大の砂粒・石英	良好			1条		11
88	1	1SK 102		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	ナデ			外：暗茶褐色 内：黒褐色	やや密	1mm大の砂粒・雲母	良好	小さく外反				4
88	2	1SK 102		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	指頭圧痕 ナデ			黄茶色	やや粗	1～2mm大の砂粒・雲母	やや良	凸帯貼付	1条	1条 刻目有		1
88	3	1SK 102		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	不明	ナデ			暗茶褐色	やや粗	1～3mm大の砂粒・角閃石	やや良	凸帯貼付	1条 刻目有			2
88	4	1SK 102		弥生	甕		7.6		底部 1/4		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ 指頭圧痕	暗茶褐色	やや粗	1～2mm大の砂粒・角閃石	やや良					3
88	5	1SK 102		弥生	甕	16.6			口縁部 1/3	横ナデ	箆磨き 横ナデ	横ナデ			外：暗黒褐色 内：暗茶褐色	やや密	1mm大の砂粒・雲母	良好	外反 端部に面				2
89	1	1SK 123		弥生	壺		21.4		複口縁 1/4	横ナデ					淡黄茶色	やや密	0.5mm大の砂粒	良好	複口縁			複口縁内径18.0cm	3
89	2	1SX 123		弥生	蓋				口縁部 細片	横ナデ	不明	ナデ			外：暗茶褐色 内：黒褐色	やや密	1mm大の砂粒多	やや良	外方に開く				5
89	3	1SK 123		弥生	甕		4.2		底部 1/4		不明	ナデ	ナデ	不明	外：黒褐色 内：淡橙色	やや密	0.5mm大の砂粒・雲母・角閃石	やや良					6
89	4	1SK 123		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	刷毛			外：淡灰茶色 内：淡茶褐色	やや粗	1mm大の砂粒少	良好	外反 端部に面				1
89	5	1SK 123		弥生	器台				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			淡黄白色	密	0.5mm大の砂粒・赤色粒子	やや良	緩やかに外反				4
90	1	1SK 129		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	不明	ナデ			外：暗茶褐色 内：明黄茶褐色	やや粗	1～3mm大の砂粒	やや良	凸帯貼付	1条			1
90	2	1SK 129		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			淡黄白色	やや密	1mm大の砂粒少	やや良	凸帯貼付	1条			2
90	3	1SK 129		弥生	甕		8.0		底部 1/2		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	淡黄灰茶色	やや密	1mm大の砂粒・雲母・石英多	良好					3
90	4	1SK 129		弥生	器台		10.0		底部 1/8		刷毛	刷毛	横ナデ	横ナデ	明黄茶色	やや密	1mm大の砂粒・長石多	良好				底部の面は接地しない	4
90	5	1SK 129		弥生	器台				底部 細片		刷毛	刷毛	横ナデ	横ナデ	茶灰色	やや粗	1mm大の砂粒・長石多	やや良				底部の面は接地する	5
91	1	1SK 158		弥生	鉢	20.0			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	刷毛			暗茶褐色	密	1～2mm大の砂粒・角閃石・雲母多	良好	外方に開く				2

Tab.11　出土遺物観察票（土器）④

Fig	No	遺構番号	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	口縁部	体外部	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	口縁部凸帯	体部凸帯	備考	実測No
91	3	1SK 158		弥生	器台				口縁部細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			外 暗茶褐色 内 赤茶褐色	やや粗	1～2mm大の砂粒・雲母	良好	[illegible]				5
91	3	1SK 158		弥生	高坏	27.6			口縁部 1/5	横ナデ	不明	横ナデ			橙色	密	1～4mm大の砂粒少	やや良	[illegible]				5
91	4	1SK 158		弥生	壺	17.2			口縁部 1/4	横ナデ	横ナデ ナデ	ナデ			外 赤橙色 内 暗灰褐色	密	0.5mm大の砂粒・雲母	やや良	袋状口縁			復元口縁径15.2cm	1
91	5	1SK 158		弥生	器台				底部細片		刷毛	刷毛	横ナデ	横ナデ	外 暗赤茶色 内 暗茶褐色	やや粗	1mm大の砂粒・雲母	良好					4
92	1	1SK 179		弥生	壺				口縁部細片	横ナデ	刷毛	横ナデ			淡黄茶色	やや粗	1mm大の砂粒	やや良	外反				1
92	2	1SK 179		弥生	壺		4.6		底部 1/2		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 茶褐色 内 赤茶色	やや密	1～2mm大の砂粒・長石・石英	やや良					2
92	3	1SK 179		弥生	壺	19.2			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			外 淡灰茶褐色 内 暗 灰茶色	密	1mm大の砂粒・長石	良好	袋状口縁			[illegible]	4
92	4	1SK 179		弥生	高坏				脚部 完存		刷毛	不明			外 暗茶褐色 内 暗赤茶褐色	やや密	1～2mm大の砂粒・長石	やや良					3
93	1	1SK 180		弥生	壺	13.7			上半部 完存	横ナデ	横ナデ	横ナデ			外 暗橙色 内 暗黄茶褐色	やや密	1～2mm大の砂粒・長石多	良好	外反 端部に面				4
93	2	1SK 180		弥生	壺				口縁部細片	横ナデ	刷毛	刷毛			外 黒褐色 内 明黄茶色	密	1mm大の砂粒	やや良	外反				1
93	3	1SK 180		弥生	高坏		11.6		底部 1/2		不明	横ナデ	不明	不明	明橙色	やや密	1～2mm大の砂粒	やや不良					2
93	4	1SK 180		弥生	高坏				脚部 1/2		不明	ナデ			橙色	やや密	1～2mm大の砂粒・長石	やや不良					3
94	1	1SK 199		弥生	壺				口縁部細片	横ナデ					暗橙色	やや粗	1mm大の砂粒	良好	外反 端部に面				2
94	2	1SK 199		弥生	壺				口縁部細片	横ナデ 刷毛					暗茶褐色	やや粗	1～2mm大の砂粒・雲母	やや良	外反 端部に面				3
94	3	1SK 199		弥生	壺				口縁部細片	横ナデ	ナデ	ナデ			外 明灰色 内 暗灰色	やや密	1mm大の砂粒・雲母	やや良	外反				1
94	4	1SK 199		弥生	器台				口縁部細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外 明黄灰色 内 灰茶色	やや密	1mm大の砂粒	良好	外方に開く				8
94	5	1SK 199		弥生	鉢				口縁部細片	横ナデ	不明	不明			明黄茶褐色	やや粗	1～2mm大の砂粒	やや良	外反			口縁部直下に不明瞭な段有	4
94	6	1SK 199		弥生	甕	19.0			口縁部 1/3	横撫で	刷毛	横ナデ			明茶褐色	やや密	1mm大の砂粒・雲母	やや良	外反				5
94	7	1SK 199		弥生	支脚	8.3	12.2	5.5	1/4	指頭圧痕	指頭圧痕			指頭圧痕	灰茶色	やや密	1～2mm大の砂粒・角閃石	やや良				底部上げ底の中実	7
95	1	1SD 013		弥生	壺	25.4			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			外 赤褐色 内 淡黄茶色	やや密	1～2mm大の砂粒・赤色粒子	良	凸帯貼付	1条			9
95	1	1SK 223		弥生	壺	24.2			口縁部 1/6	横ナデ	ナデ	ナデ			橙赤茶色	密		良	凸帯貼付	1条			3
95	2	1SD 013		弥生	壺	29.2			口縁部 1/8	横ナデ	横ナデ	刷毛			外 黄褐色 内 黄灰色	粗	1mm大の砂粒・角閃石	やや不良	外反				7
95	2	1SK 223		弥生	壺				口縁部細片	ナデ	刷毛	ナデ			外 黄褐色 内 暗茶褐色	粗		不良	如意形 刻目有			口縁部の刻目は端部面の下端に施される	2
95	3	1SD 013		弥生	壺	29.0			口縁部 1/8	横ナデ	横ナデ	横ナデ			外 淡橙色 内 橙色	やや密	角閃石・赤色粒子	良	外反		1条		8
95	3	1SK 223		弥生	壺				口縁部細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外 暗茶褐色 内 淡赤褐色	やや粗	角閃石	やや良	逆L字状				4
95	4	1SD 013		弥生	壺				体部細片		ナデ	ナデ			黄茶色	密	角閃石	良			1条 刻目有		16
95	4	1SK 223		弥生	壺				口縁部細片	ナデ					暗灰黄色	密		良	外反				1
95	5	1SD 013		弥生	壺		6.4		底部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 褐色 内 褐灰色	やや密	1mm大の砂粒	良				底部は僅かに上げ底状	13
95	5	1SK 223		弥生	鉢				口縁部細片	ナデ	不明	ナデ			淡黄茶色	やや粗	赤色粒子	やや良	端先状				5
95	6	1SD 013		弥生	壺		7.6		底部 完存		不明	不明	不明	ナデ	外 暗橙色 内 暗茶褐色	やや粗		やや不良					4
95	6	1SK 223		弥生	器台				脚部細片		刷毛	刷毛			淡黄灰色	やや密		やや良					6
95	7	1SD 013		弥生	壺		[illegible]		底部 完存		刷毛	ナデ	不明	不明	外 黄灰色 内 灰褐色	やや密	1～2mm大の砂粒多・金雲母多・赤色粒子多	やや良					3
95	8	1SD 013		弥生	壺		[illegible]		底部 1/4		刷毛 ナデ	剥離			黄茶色	密		良					14
95	9	1SD 013		弥生	壺		[illegible]		底部 完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 淡橙色 内 灰褐色	やや粗	2mm大の砂粒・赤色粒子	やや良				底部は上げ底状	12
95	10	1SD 013		弥生	壺		[illegible]		底部 2/3		刷毛	ナデ	指押さえ	ナデ	外 淡黄橙色 内 褐灰色	やや密	2mm大の砂粒多	良					3
95	11	1SD 013		弥生	鉢	19.2			1/8	横ナデ	ナデ	ナデ			外 灰褐色 内 橙色	やや密	1～2mm大の砂粒	やや不良	外方に開く				6
95	12	1SD 013		弥生	鉢		[illegible]		底部 完存		不明	不明	不明	不明	外 淡黄茶色 内 灰黄色	粗		やや良					17
95	13	1SD 013		弥生	壺	21.8			口縁部 1/8	横ナデ	刷毛	ナデ			外 灰褐色 内 黒褐色	やや粗	角閃石	やや不良	外反				5
95	14	1SD 013		弥生	壺	8.9	5.2	11.9	2/3	横ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 淡褐灰色 内 黄橙色	やや密	2mm大の砂粒多・赤色粒子	やや良	外反				1
95	15	1SD 013		弥生	壺				体部細片		刷毛	ナデ			外 淡黄褐色 内 灰黄色	やや粗	2mm大の砂粒・赤色粒子・角閃石	やや良					11
95	16	1SD 013		弥生	蓋				上半部 完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 黄茶色 内 暗赤褐色	密	2mm大の砂粒・赤色粒子	良				つまみ部径5.0cm	10
95	17	1SD 013		弥生	支脚				上半部 完存		ナデ	ナデ			黄灰色	密		良					15
95	18	1SD 013		弥生	不明	19.7	20.5	5.0	1/8	指押さえ	指押さえ	指押さえ	ナデ	ナデ	黄灰色	密	5mm大の[illegible]	良	内傾				18
96	1	1SD 015		土師	椀				下半部 1/4		横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	黄灰色	密	赤色粒子	良					2
96	1	1SK 356		弥生	壺				口縁部細片	横ナデ					外 暗茶褐色 内 明黄灰色	やや粗	1～5mm大の砂粒・赤色粒子	やや良	外反 端部に面				1
96	2	1SD 015		黒色	椀		7.4		底部 1/2		横ナデ	箆磨き	箆磨き	ナデ	外 灰色 内 黒色	密	赤色粒子	良					3
96	2	1SK 356		弥生	壺				口縁部細片	横ナデ 刷毛	刷毛	刷毛			外 暗茶褐色 内 明黄茶褐色	密	1mm大の砂粒・角閃石	やや良	外反 端部に面				2
96	3	1SD 015		黒色	椀		[illegible]		底部 1/2		ナデ	ナデ	ナデ	横ナデ	外 黄灰色 内 黒色	密	赤色粒子	良					4
96	3	1SK 356		弥生	壺				1/8		横ナデ 刷毛	箆削り			外 明黄茶色 内 明橙色	やや密	1～3mm大の砂粒多	良好	外反				8
96	4	1SD 015		黒色	皿		[illegible]		底部 1/4		横ナデ	箆磨き	箆磨き	ナデ	外 灰黄色 内 黒色	密	赤色粒子	良					5
96	4	1SK 356		弥生	高坏				口縁部細片	不明	不明	不明			明橙色	密	0.5mm大の砂粒	やや良	外方に開く				3
96	5	1SD 015		黒色	皿		[illegible]		底部 3/4		横ナデ	箆磨き	箆磨き	横ナデ	外 黄灰色 内 黒色	密	赤色粒子	良					1
96	5	1SK 356		弥生	高坏				脚部 完存		横ナデ	横ナデ			淡黄白色	精良		やや不良					2
96	6	1SD 015		土師	不明				口縁部細片	不明	不明	不明			橙色	やや密	角閃石・赤色粒子	良	玉縁状				6
96	6	1SK 356		弥生	高坏		[illegible]		底部 完存		刷毛	横ナデ	横ナデ	刷毛	外 茶褐色 内 明黄茶褐色	やや粗	1～2mm大の砂粒多	やや良				底部の面は接地しない	8
96	7	1SK 356		弥生	高坏		[illegible]		底部 1/3		不明	不明	不明	不明	明橙色	精良		やや良				底部の面は接地しない	1
96	8	1SK 356		弥生	器台		[illegible]		底部 1/8		刷毛	ナデ	ナデ	横ナデ	黄茶褐色	やや密	1mm大の砂粒多	良好				底部の面は接地する	4
97	1	1SK [illegible]		弥生	壺	21.2			上半部 1/4	横ナデ	不明	ナデ			外 暗茶褐色 内 明黄茶色	やや粗	1～2mm大の砂粒多	やや良	凸帯貼付	1条	沈線1条		2
97	2	1SK [illegible]		[illegible]	[illegible]		6.4		底部 完存		不明	横ナデ	ナデ	ナデ	外 淡赤褐色 内 茶褐色	やや粗	1～2mm大の砂粒多	やや良	外反 端部に面			底部は中実の上げ底状	4

Tab.12　出土遺物観察票（土器）⑤

Fig.	No	遺構 番号	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	口縁部	体外部	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	口縁部凸帯	体部凸帯	備考	[illegible]
97	3	ISK 361		弥生	鉢	23.1			上半部 1/2	横ナデ	不明	不明			淡赤黄色	粗	1～3mm 大の砂粒多	やや不良	凸帯貼付	1 条			[illegible]
97	4	ISK 361		弥生	壺		[illegible]		底部 1/2		箆磨き	箆磨き	不明	不明	黄茶色	やや粗	1～3mm 大の砂粒多	やや不良					[illegible]
98	1	ISK 362		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	刷毛			暗茶色	密	1mm 大の砂粒	良好	外反 端部に面				[illegible]
98	2	ISK 362		弥生	器台				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	横ナデ			外 暗茶色 内 黄茶色	やや密	1～2mm 大の砂粒	良好					[illegible]
98	3	ISK 362		弥生	ミニ器				天井部 完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 淡黄赤色 内 明黄茶色	やや密	1mm 大の砂粒・角閃石	やや良				天井部径 1.0cm	[illegible]
98	4	ISK 362		弥生	壺?				体部 細片		ナデ 丹塗り	ナデ 丹塗り			素地 淡灰茶色 顔料 暗赤色	やや密	1mm 大の砂粒少	良好					[illegible]
98	5	ISK [illegible]		弥生	甕				口縁部 細片		横ナデ	横ナデ			明黄茶色	粗	1～2mm大の砂粒	やや良				頸部に凸帯1条有	[illegible]
98	6	ISK 386		弥生	器台				底部 細片		不明	刷毛	横ナデ	横ナデ	茶褐色	やや密	1～2mm 大の砂粒	やや良				底部の面は接地しない	[illegible]
98	7	ISK 386		縄文	深鉢				口縁部 細片	刺突文	凹線文	ナデ			外 暗橙色 内 黄茶色	密	1～2mm 大の砂粒・角閃石多	やや良	外方に 開く				[illegible]
98	8	ISK 386		縄文	深鉢				体部 細片		条痕	条痕			黄茶色	密	1mm 大の砂粒	やや良					[illegible]
98	9	ISK 408		弥生	支脚				上半部 1/2	横ナデ	ナデ 指頭圧痕	ナデ			外 明黄茶色 内 明橙色	やや密	1～2mm大の砂粒多	やや良	外反			上部は開口しない	[illegible]
101	1	ISD 040		弥生	甕	42.0			口縁部 1/8	横ナデ	刷毛	ナデ			外 暗赤褐色 内 淡黄灰色	やや粗	2～3mm 大の砂粒多・赤色粒子	良	凸帯貼付	1 条	1 条		[illegible]
101	2	ISD 040		弥生	大甕				口縁部 細片	横ナデ 箆削り	ナデ	横ナデ			橙黄灰色	密	赤色粒子	良	凸帯貼付	1 条			13
101	3	ISD 040		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			赤茶色	密	角閃石	良	凸帯貼付	1 条			14
101	4	ISD 040		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	不明	ナデ			外 淡黄灰色 内 淡黄橙色	やや粗	角閃石	やや不良	凸帯貼付	1 条			[illegible]
101	5	ISD 040		弥生	甕		[illegible]		底部 3/4		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 明赤褐色 内 暗茶褐色	やや粗		[illegible]					[illegible]
101	6	ISD 040		弥生	甕		7.0		底部 2/3		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 淡黄茶色 内 淡黄橙色	やや密	角閃石・赤色粒子	[illegible]					[illegible]
101	7	ISD 040		弥生	甕		[illegible]		底部 1/2		不明	不明	不明	不明	外 赤茶色 内 黄橙色	粗		やや良					[illegible]
101	8	ISD 040		弥生	甕				底部 完存		ナデ	不明	不明	ナデ	外 淡黄褐色 内 淡茶褐色	やや粗	2mm大の砂粒多	[illegible]					[illegible]
101	9	ISD 040		弥生	甕				底部 完存		不明	不明	不明	ナデ	外 明赤褐色 内 茶褐色	粗		やや良				底部は上げ底状	[illegible]
101	10	ISD 040		弥生	甕		[illegible]		底部 1/2		横ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 淡黄茶色 内 淡赤茶色	粗	赤色粒子	やや良				底部は上げ底状	[illegible]
101	11	ISD 040		弥生	壺				体部 細片		ナデ	ナデ			外 淡黄灰色 内 灰黄色	密		やや良			1 条		[illegible]
101	12	ISD 040		弥生	蓋				つまみ部 完存		刷毛	ナデ	ナデ	不明	外 黄茶色 内 茶褐色	粗		やや不良				つまみ部径5.2cm	[illegible]
101	13	ISD 040		弥生	高坏				坏部 細片		刷毛	ナデ			外 淡黄褐色 内 淡黄橙色	やや密	角閃石・赤色粒子	良					[illegible]
101	15	ISD 040		縄文	深鉢				体部 細片		ナデ	ナデ			外 明赤褐色 内 暗茶褐色	粗	角閃石	やや不良					[illegible]
101	16	ISD 040		縄文	深鉢				口縁部 細片	横ナデ	凹線文	ナデ 刺突文			淡黄茶色	粗	角閃石	やや不良	外反				[illegible]
101	17	ISD 040		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	ナデ			外 黒色 内 淡褐色	粗		やや不良					[illegible]
101	18	ISD 040		縄文	深鉢				体部 細片		ナデ	ナデ			外 暗黄茶色 内 暗茶褐色	粗	角閃石	やや不良					[illegible]
101	19	ISD 040		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	ナデ			外 黒褐色 内 暗茶褐色	粗	角閃石	不良					[illegible]
102	1	ISD 080		須恵	こね鉢				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			灰黄色	密		良	外方に 開く			端部に明瞭な面有	[illegible]
102	2	ISD 080		土師	鉢				口縁部 細片	ナデ	ナデ	ナデ			暗灰色	密		良	外反			端部に明瞭な面有	[illegible]
102	4	ISD 087		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					外 暗褐色 内 淡黄灰色	やや密		やや不良	凸帯貼付	1 条			[illegible]
102	5	ISD 087		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					橙黄灰色	密	赤色粒子	良	凸帯貼付	1 条			[illegible]
102	5	ISD 091		弥生	蓋				口縁部 細片	ナデ	ナデ	ナデ			淡黄茶色	やや密	角閃石	やや不良	外反				10
102	6	ISD 091		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外 黄茶色 内 暗黄灰色	密	赤色粒子	やや良	凸帯貼付 端部に面	1 条	1 条		[illegible]
102	7	ISD 091		弥生	甕		[illegible]		底部 2/3		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	淡黄灰色	密	3mm大の砂粒	やや不良				底部は中実	[illegible]
102	8	ISD 091		弥生	甕		[illegible]		底部 完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	暗茶褐色	やや密	角閃石	やや不良					[illegible]
102	9	ISD 091		弥生	甕		[illegible]		底部 完存		刷毛 ナデ	不明	不明	ナデ	外 暗赤茶色 内 黄灰色	やや密	角閃石	良				底部は上げ底状	[illegible]
102	10	ISD 091		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					外 赤褐色 内 灰褐色	やや粗		やや良	外反				[illegible]
102	11	ISD 091		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					外 淡赤茶色 内 明赤茶色	やや密	1～3mm 大の砂粒多	やや不良	外反 端部に面				[illegible]
102	12	ISD 091		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	横ナデ			淡黄灰色	やや粗	角閃石・1～2mm 大の砂粒多	やや良	外反				[illegible]
102	13	ISD 091		弥生	甕		[illegible]		底部 1/3		刷毛 ナデ	不明	不明	ナデ	外 黄褐色 内 暗黄褐色	やや密	角閃石・赤色粒子	やや良					[illegible]
102	14	ISD 091		弥生	甕		[illegible]		底部 2/3		ナデ	ナデ	指頭圧痕 ナデ	ナデ	黒褐色	やや密	1～3mm 大の砂粒	[illegible]					[illegible]
102	15	ISD 374		縄文	深鉢				体部 細片		不明	条痕?			暗茶褐色	やや粗	1～2mm 大の砂粒・角閃石・石英多	やや良					[illegible]
103	1	ISX 066		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					外 黄灰色 内 暗黄茶色	やや密	角閃石・赤色粒子	良	外反				[illegible]
103	2	ISX 066		弥生	鉢				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	刷毛			外 暗茶褐色 内 淡黄橙色	密	赤色粒子	良	内傾				[illegible]
103	3	ISX 066		弥生	高坏				脚部 完存		箆削り	横ナデ			外 淡黄茶色 内 赤茶色	密		[illegible]					[illegible]
103	4	ISX 093		弥生	甕棺				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			外 暗赤茶色 内 灰褐色	密		やや良	外反 端部に面		胴部に 1 条		[illegible]
103	5	ISX 094		弥生	甕				口縁部 細片	不明	不明	不明			明赤褐色	やや粗		やや不良	外反				[illegible]
103	6	ISX 094		弥生	甕	14.1			口縁部 1/8	横ナデ	刷毛	ナデ			暗灰褐色	密	角閃石	良	外反				[illegible]
104	1	ISX 070		弥生	壺				口縁部 細片	ナデ	ナデ	ナデ			外 暗黄茶色 内 暗茶褐色	密		良	袋状				[illegible]
104	2	ISX 070		弥生	壺	14.6			口縁部 1/8	不明	不明	不明			淡黄茶色	粗	赤色粒子	やや良	外反				[illegible]
104	3	ISX 070		弥生	甕	4.8			底部 完存		ナデ	指頭圧痕	指頭圧痕	ナデ	淡黄茶色	密	赤色粒子	やや不良					[illegible]
104	4	ISX 070		弥生	鉢	15.0			口縁部 1/8	ナデ	刷毛	ナデ			外 淡黄茶色 内 灰白色	密		やや良	内湾				[illegible]
104	5	ISX 070		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	刷毛			外 暗茶褐色 内 赤褐色	密	角閃石	良	外反				[illegible]
104	6	ISX 070		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	箆磨き			外 淡黄灰色 内 灰黄色	密		良	凸帯貼付	1 条			[illegible]
104	7	ISX 070		弥生	支脚	8.9			底部 1/4		ナデ	ナデ	指頭圧痕 ナデ	指頭圧痕 ナデ	外 黄茶色 内 明赤褐色	密		[illegible]					[illegible]
104	8	ISX 070		弥生	支脚				底部 細片		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	淡黄茶色	[illegible]		[illegible]					[illegible]
104	9	ISX 070		縄文	深鉢				体部 細片		刺突文 凹線文	ナデ?			外 黄茶色 内 赤茶色	粗	赤色粒子・角閃石	やや不良					[illegible]

Tab.13　出土遺物観察票（土器）⑥

Fig	No	遺構番号	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	口縁部凸帯	体部凸帯	備考	R.No
104	10	ISX 070		縄文	深鉢				体部細片		凹線文	ナデ？			外 暗茶褐色 内 赤褐色	粗	赤色粒子	やや不良					6
104	11	ISX 070		縄文	深鉢				体部細片		凹線文	ナデ？			黄灰色	粗	角閃石	やや不良					14
105	1	ISX 116		弥生	壺	13.7			上半部1/3	横ナデ	刷毛	箆ナデ			淡黄茶色	やや密	0.5mm 大の砂粒少	やや良	外反			R 6 と同一個体か？	5
105	2	ISX 116		弥生	壺				下半部1/8		刷毛	箆ナデ	箆ナデ	不明	淡黄茶色	やや密	0.5mm 大の砂粒少	やや良				R 5 と同一個体か？	6
105	3	ISX 116		弥生	甕				口縁部細片	横ナデ	刷毛	刷毛			淡橙色	やや密	1mm 大の砂粒	やや良	外反 端部に面			口縁部の刻目は端部の面全体に施文される	2
105	4	ISX 116		弥生	甕	12.8			口縁部1/5	横ナデ	刷毛	刷毛			明茶褐色	やや粗	1mm 大の砂粒	やや良	外反 端部に面			口縁部の刻目は端部の面全体に施文される	1
105	5	ISX 116		弥生	高坏	26.0			口縁部1/2	横ナデ	刷毛	刷毛			外 茶褐色 内 淡橙色	やや密	0.5mm 大の砂粒少	やや良	外反 端部に面				4
105	6	ISX 116		弥生	鉢	26.0			1/4	横ナデ	刷毛	刷毛			外 茶褐色 内 黄茶色	やや粗	1mm 大の砂粒	良好	内湾 端部に面				3
106	1	ISX 120		縄文	深鉢				口縁部細片	ナデ	凹線文	凹線文			外 橙色 内 黄茶色	やや密	1mm大の砂粒・石英・角閃石	やや良	直立				1
106	2	ISX 128		弥生	器台		13.0		底部1/5		ナデ 刷毛	刷毛	刷毛	横ナデ	外 暗橙色 内 明橙色	密	0.5mm 大の砂粒・雲母	やや良					2
106	3	ISX 128		弥生	器台		12.4		底部1/4		刷毛	ナデ	横ナデ	横ナデ	淡黄白色	密	0.5mm 大の砂粒少	やや不良					1
106	4	ISX 128		弥生	壺	20.4			口縁部1/4	横ナデ	箆ナデ	横ナデ			外 淡黄茶色 内 淡茶色	やや粗	1～3mm 大の砂粒多	やや良	外反 端部に面				3
107	1	ISX 130		縄文	深鉢				口縁部細片	刺突文	刺突文	刺突文			黄茶色	密	角閃石・雲母	良	外反				2
107	2	ISX 130		縄文	深鉢				体部細片		波線文				明茶褐色	やや密	1mm 大の砂粒・角閃石・石英多	やや不良					1
108	1	ISX 134		弥生	甕				口縁部細片	横ナデ					明黄灰茶色	やや密	1mm 大の砂粒	やや良	外反				2
108	2	ISX 134		弥生	蓋				口縁部細片	横ナデ	刷毛	刷毛			暗茶褐色	密	0.5mm 大の砂粒・雲母	良好	緩やかに外反				3
108	3	ISX 134		弥生	甕		6.0		底部完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	明黄茶色	やや密	1mm 大の砂粒	やや良					1
108	4	ISX 134		弥生	器台				口縁部細片	横ナデ	不明	不明			黄茶色	やや密	0.5mm大の砂粒・角閃石・石英	やや不良					4
108	5	ISX 134		弥生	壺	11.9			口縁部1/8	横ナデ	不明	不明			明黄茶色	やや密	1mm 大の砂粒・角閃石・長石	やや不良	直立				5
108	6	ISX 134		縄文	深鉢	24.0			口縁部1/10	不明	不明	不明			外 暗茶褐色 内 黄茶褐色	やや粗	1mm 大の砂粒・角閃石・石英	やや良					15
108	7	ISX 134		縄文	深鉢				口縁部細片	横ナデ	不明	横ナデ			暗灰茶色	やや密	1mm 大の砂粒	やや良	ほぼ直立				13
108	8	ISX 134		縄文	深鉢				口縁部細片	横ナデ	刺突文？	条痕？			暗灰褐色	やや密	0.5mm 大の砂粒多	やや良	内傾				14
108	9	ISX 134		縄文	深鉢				体部細片		凹線文	凹線文			暗茶褐色	密	1mm 大の砂粒・角閃石多	やや良					6
108	10	ISX 134		縄文	深鉢				体部細片		ナデ	不明			外 黒褐色 内 暗橙色	密	0.5mm 大の砂粒・角閃石・石英多	やや良					9
108	11	ISX 134		縄文	深鉢				体部細片		ナデ	横ナデ			暗橙色	密	0.5mm 大の砂粒・角閃石・石英多	やや良					8
108	12	ISX 134		縄文	深鉢				体部細片		凹線文	ナデ			外 暗茶褐色 内 暗黄茶色	密	0.5mm 大の砂粒・角閃石多	やや良					12
108	13	ISX 134		縄文	深鉢				体部細片		不明	ナデ			外 暗黄茶褐色 内 暗灰茶褐色	やや密	1mm 大の砂粒・石英	やや良					11
108	14	ISX 134		縄文	深鉢				体部細片		ナデ	横ナデ			外 暗茶褐色 内 橙色	密	1mm 大の砂粒・角閃石	やや良					10
108	15	ISX 134		縄文	深鉢				体部細片		ナデ	ナデ			外 黒褐色 内 暗橙色	密	0.5mm 大の砂粒・角閃石・石英	やや良					7
109	1	ISX 150		弥生	甕				口縁部細片	横ナデ					外 暗灰色 内 明茶色	やや密	0.5mm 大の砂粒・金雲母	良好	外反 端部に面				1
109	2	ISX 150		弥生	鉢				口縁部細片	横ナデ	ナデ	横ナデ			明黄茶色	やや密	0.5mm大の砂粒・雲母	やや良	内湾				8
109	3	ISX 150		弥生	器台				口縁部細片	横ナデ	刷毛	ナデ			暗橙色	やや密	1mm 大の砂粒	やや不良	外反 端部に面				5
109	4	ISX 150		弥生	器台				底部細片		横ナデ	ナデ	ナデ	横ナデ	外 淡黄赤色 内 淡黄白色	やや密	1mm 大の砂粒・金雲母	やや良	外反				3
109	5	ISX 150		弥生	器台				底部細片		刷毛	ナデ	横ナデ	横ナデ	明黄白色	やや密	0.5mm 大の砂粒	やや良				底部の面は接地しない	4
109	6	ISX 150		弥生	器台		12.2		底部1/5		ナデ	ナデ	刷毛	ナデ	外 茶褐色 内 灰茶褐色	やや粗	1～5mm 大の砂粒・石英	やや良				底部の面は接地しない	6
109	7	ISX 150		弥生	器台				底部細片		ナデ 指頭圧痕	ナデ	ナデ	ナデ	外 赤茶褐色 内 明灰褐色	密	1～3mm 大の砂粒	やや良				底部の面は接地する	7
109	8	ISX 150		縄文	深鉢				口縁部細片	ナデ	刺突文 凹線文	凹線文			外 明赤黄色 内 淡黄白色	密	1mm 大の砂粒・長石・角閃石多	やや良	直立？				9
109	9	ISX 150		縄文	深鉢				口縁部細片	刻目	凹線文	凹線文			黄茶色	密	1mm 大の砂粒・角閃石多	やや良	直立？				10
109	10	ISX 150		縄文	深鉢				体部細片		不明	不明			茶褐色	密	1mm 大の砂粒・角閃石多	やや良					14
109	11	ISX 150		縄文	深鉢				体部細片		凹線文	不明			外 暗橙色 内 暗茶褐色	密	1mm 大の砂粒・長石・角閃石多	やや良					11
109	12	ISX 150		縄文	深鉢				体部細片		凹線文	条痕			外 暗茶褐色 内 明黄茶色	密	1mm 大の砂粒・角閃石多	やや良					12
109	13	ISX 150		縄文	深鉢				体部細片		凹線文	条痕			外 黄茶色 内 暗黄茶色	密	1mm 大の砂粒・長石・角閃石多	やや良					13
110	1	ISX 160		縄文	深鉢				体部細片		凹線文	ナデ			灰黄褐色	やや密	1～2mm大の砂粒・石英・角閃石	やや良					7
110	2	ISX 161		弥生	甕	28.0			口縁部1/4	横ナデ 刷毛	刷毛	刷毛			明灰茶色	やや密	1mm 大の砂粒・雲母	良好	外反				1
110	3	ISX 162		弥生	器台	16.9			口縁部1/8	横ナデ	ナデ	横ナデ			明黄茶色	やや密	1mm 大の砂粒	やや良	外方に開く			端部に明瞭な面有	1
110	4	ISX 162		弥生？	不明				体部細片		格子目	ナデ			外 明橙色 内 明黄白色	やや粗	1mm 大の砂粒・雲母	やや良					3
110	5	ISX 168		弥生	壺	17.6			口縁部1/5	横ナデ	横ナデ	刷毛			暗橙色	やや粗	1～2mm大の砂粒	やや良	二重口縁			複口縁径 16.0cm	2
110	6	ISX 171		弥生	甕				口縁部細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			外 暗茶褐色 内 暗橙色	やや密	1mm 大の砂粒多	やや良	外反 端部に面				2
110	7	ISX 171		弥生	甕				口縁部細片	横ナデ 刷毛	刷毛	刷毛			外 黒褐色 内 暗黄茶色	やや密	1mm 大の砂粒・雲母	良好	外反 端部に面			端部の面全体に刻目を施す	1
110	8	ISX 171		弥生	高坏	36.0			口縁部1/5	横ナデ	箆磨き	箆磨き			外 茶褐色 内 暗茶褐色	やや密	1～2mm 大の砂粒多	やや良	外反			口縁部直下に明瞭な段有	3
111	1	ISX 175		弥生	甕				口縁部細片	横ナデ 刷毛	刷毛	刷毛			赤茶色	やや密	1mm 大の砂粒・雲母・角閃石	やや良	外反				2
111	2	ISX 175		弥生	甕				口縁部細片	横ナデ					明黄色	やや密	1mm大の砂粒・雲母	良好	外反				1
111	3	ISX 175		弥生	甕				口縁部細片	横ナデ	刷毛	不明			外 暗橙色 内 明橙色	やや粗	1mm 大の砂粒・雲母	やや良	外反				3
111	4	ISX 175		弥生	甕				体部細片		刷毛	刷毛			外 赤茶色 内 暗黄茶色	やや粗	1mm 大の砂粒・長石・雲母	良好					4
111	5	ISX 175		土師	坏				口縁部細片	横ナデ	不明	ナデ			明橙色	密	0.5mm大の砂粒少	やや良	内湾				6
111	6	ISX 175		弥生	壺				口縁部細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			淡黄赤色	密	1mm 大の砂粒・赤色粒子	やや良	外反				3
111	7	ISX 195		縄文	深鉢				口縁部細片	刺突文	ナデ	凹線文			明黄色	密	1mm 大の砂粒	やや良	外方に開く				1
112	1	ISX 201		弥生	壺	18.8			口縁部1/6	横ナデ					外 暗赤茶色 内 赤茶色	密		良	外反 端部に面				2
112	2	ISX 201		弥生	甕		9.0		底部1/3		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	淡黄茶灰色	やや密	角閃石	やや良					1

Tab.14　出土遺物観察票（土器）⑦

Fig	No	遺構番号	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	口縁部凸帯	体部凸帯	備考	[illegible]
112	3	ISX 201		弥生	大壺				口縁部 細片	ナデ 刷毛					外 淡黄茶色 内 黒褐色	密		良	外反 端部に面			端部の面全体に刻目を施す	
112	4	ISX 201		弥生	台付鉢				体底部 [illegible]		不明	ナデ	ナデ		暗茶褐色	やや粗		良					
112	5	ISX 201		弥生	高坏				口縁部 細片	不明	不明	ナデ			外 赤茶色 内 明黄茶色	粗	角閃石	やや良	内屈				
112	6	ISX 201		弥生	蓋				口縁部 細片	ナデ	ナデ	刷毛			外 赤茶色 内 暗茶褐色	やや密		良	外方に 開く				
113	1	ISX 203		弥生	壺	21.6			口縁部 1/8	横ナデ	刷毛 ナデ	横ナデ			外 暗黄灰色 内 赤茶色	密		良	凸帯貼付	1条			
113	2	ISX 203		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ	刷毛 ナデ	横ナデ			淡黄茶色	やや密		やや不良	内側を 肥厚				
113	3	ISX 203		弥生	壺	17.8			口縁部 1/8	横ナデ	ナデ	不明			暗赤褐色	やや粗	1mm大の砂粒	良	二重口縁				
113	4	ISX 203		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ					黄茶色	やや密		やや良	外反				
114	1	ISX 247		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	ナデ			外 淡赤茶色 内 淡黄茶色	やや密	赤色粒子	良	凸帯貼付	1条			
114	2	ISX 247		弥生	器台		[illegible]		底部 1/4		刷毛	指頭圧痕 ナデ	指頭圧痕	ナデ	外 黒褐色 内 暗茶褐色	[illegible]		良				底部の面は接地する	
114	3	ISX 247		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	ナデ			外 赤褐色 内 暗灰褐色	粗	角閃石	やや良					
114	4	ISX 259		弥生	甕	15.8			口縁部 1/6	横ナデ	ナデ	ナデ			暗黄褐色	密	赤色粒子	良	如意形 端部に面				
114	5	ISX 259		弥生	甕	23.6			口縁部 1/8	横ナデ	刷毛 ナデ	刷毛			外 暗茶褐色 内 暗黄茶色	密	赤色粒子	良	外反				
114	6	ISX 259		弥生	蓋				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	刷毛			淡黄茶色	やや密		やや良	外反 端部に面				
114	7	ISX 259		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	凹線文			外 暗黄茶色 内 暗黄灰色	[illegible]		良					
114	8	ISX 259		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	ナデ			暗茶褐色	密	角閃石	[illegible]					
115	1	ISX 267		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	ナデ			外 黄茶色 内 暗茶褐色	密	角閃石	良					
115	2	ISX 267		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	凹線文			外 暗黄灰色 内 暗茶褐色	やや密	角閃石	良					
115	3	ISX 269		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	ナデ			暗茶褐色	やや粗	角閃石	やや不良					
115	4	[illegible]		縄文	深鉢				体部 細片		ナデ	ナデ			暗黄灰色	粗	角閃石	やや不良					
115	5	ISX 272		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	ナデ			外 暗茶褐色 内 暗赤茶色	密		良					
115	6	ISX 275		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	ナデ			外 暗茶褐色 内 赤茶色	[illegible]		やや不良					
115	7	[illegible]		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	ナデ			外 黄茶色 内 赤茶色	やや密	角閃石	[illegible]					
115	8	ISX 278		縄文	深鉢				体部 細片		ナデ	ナデ			外 茶褐色 内 暗赤茶色	粗		やや良					
115	9	ISX 295		縄文	深鉢				口縁部 細片	刺突文	凹線文	凹線文			橙黄茶色	やや密	角閃石	良	外方に 開く				
115	10	ISX 297		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	条痕			明黄茶色	やや密	角閃石	やや良					
115	11	ISX 299		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	ナデ			暗黄灰色	やや密		やや良					
115	12	ISX 299		縄文	深鉢				体部 細片		ナデ	ナデ			暗黄茶色	やや粗	角閃石	やや良					
115	13	ISX 301		縄文	深鉢				口縁部 細片	刻目	刺突文 凹線文	凹線文 不明			茶褐色	粗	角閃石	やや良	緩やかに 外反				
115	14	ISX 305		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	ナデ			外 暗黄褐色 内 暗黄茶色	密		良					
115	15	ISX 304		縄文	深鉢				口縁部 細片	ナデ 刺突文	刺突文	凹線文			淡黄茶色	やや密	赤色粒子	良	外方に 開く				
116	1	ISX 307		弥生	甕	26.2			口縁部 1/6	横ナデ	刷毛 ナデ	ナデ			赤褐色	密	赤色粒子	良	外反				
116	2	ISX 307		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	凹線文			淡黄茶色	やや密	角閃石	[illegible]					
116	3	ISX 311		縄文	深鉢				体部 細片		不明	ナデ			外 暗茶褐色 内 淡黄褐色	やや密	角閃石	やや良					
116	4	ISX 315		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					外 明赤茶色 内 淡黄茶色	やや密		良	外反				
116	5	ISX 315		弥生	壺				口縁部 細片	横ナデ					暗赤褐色	密		やや良	外反				
116	6	ISX 315		弥生	鉢				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			外 淡黄茶色 内 暗茶褐色	やや密	赤色粒子	良	[illegible]先状				
116	7	ISX 315		縄文	深鉢				口縁部 細片	凹線文 刺突文	凹線文	不明			外 暗茶褐色 内 黄茶色	密		[illegible]	外方に 開く				
117	1	ISX 316		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	凹線文			外 淡黄茶色 内 暗灰黄色	やや粗	角閃石・赤色粒子	やや不良					
117	2	ISX 316		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	不明			外 暗赤茶色 内 赤茶色	やや粗	角閃石	やや良					
117	3	ISX 317		弥生	甕		[illegible]		底部 1/4		縦ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 淡赤褐色 内 淡黄灰色	密	赤色粒子	良					
117	4	ISX 317		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	ナデ			外 暗茶褐色 内 淡黄灰色	密		良					
117	5	[illegible]		弥生	壺	17.4			口縁部 1/8	横ナデ	刷毛 横ナデ	不明			外 明赤茶色 内 暗黄茶色	密		良	二重口縁			[illegible]口縁径は 13.8cm	
117	6	ISX 322		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	ナデ			外 暗赤褐色 内 暗茶褐色	密	角閃石	良					
118	1	ISX 323		弥生	壺				頸部 1/4	横ナデ	刷毛 横ナデ	刷毛 ナデ			赤茶色	密	角閃石・金雲母	やや良	外反 端部に面			口縁端部の面全体に刻目有	
118	2	ISX 323		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文?	ナデ			外 暗黄茶色 内 淡黄茶色	やや密	角閃石・赤色粒子	良					
118	3	ISX 323		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	不明			淡黄茶色	やや密	角閃石・赤色粒子	やや良					
118	4	ISX 324		縄文	深鉢				体部 細片		ナデ	ナデ			外 暗赤褐色 内 暗茶褐色	やや密	角閃石	[illegible]					
118	5	ISX 324		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	ナデ			外 暗茶褐色 内 黄茶色	やや粗	角閃石	やや良					
118	6	[illegible]		縄文	深鉢				口縁部 細片	ナデ 刺突文	凹線文	刺突文			明黄茶色	やや密	1〜2mm大の砂粒・角閃石・石英	やや良	ほぼ 直立				
118	7	ISX 329		縄文	深鉢				口縁部 細片	ナデ	凹線文	ナデ			暗灰黒褐色	密	1〜3mm大の砂粒・角閃石・石英多	やや良	ほぼ 直立				
118	8	ISX 335		縄文	深鉢				口縁部 細片	凹線文	凹線文	凹線文			黄茶色	やや密	1〜2mm大の砂粒・角閃石多	やや良	小さく 外反				
118	9	ISX 379		縄文	深鉢				体部 細片		楕円文	ナデ			外 赤茶色 内 暗灰茶色	やや密	1〜2mm大の砂粒多	やや良					
118	11	ISX 384		縄文	深鉢				口縁部 細片	刺突文	凹線文	ナデ			外 暗橙色 内 暗黄茶色	密	1〜2mm大の砂粒・角閃石	やや良	僅かに 外反				
119	1	ISX 388		弥生	甕	13.8			口縁部 1/8	横ナデ	刷毛	横ナデ			外 暗茶褐色 内 暗橙色	やや粗	1〜2mm大の砂粒多	やや良	外反 端部に面			口縁端部の面に沈線状の凹み有	
119	2	[illegible]		縄文	深鉢				口縁部 細片	刺突文	刺突文	ナデ			黄茶色	やや密	1mm大の砂粒	やや良					
119	3	ISX 404		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ 刷毛					暗橙色	やや粗	0.5mm大の砂粒	やや良	外反 端部に面			口縁端部の面全体に刻目有	
119	4	ISX 404		弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	横ナデ			暗橙色	やや密	1mm大の砂粒・長石	やや良	外反				
119	5	ISX 404		弥生	鉢	8.0			上半部 1/4	横ナデ	ナデ	刷毛			外 暗黄茶色 内 明橙色	やや密	1mm大の砂粒	やや良	僅かに 内湾				

Tab.15　出土遺物観察票（土器）⑧

Fig	No	遺構 番号	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	口縁部	体外部	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	口縁部凸帯	体部凸帯	備考	[illegible]
[illegible]	[illegible]	1SX 404		弥生	壺？		[illegible]		底部 完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外 明茶色 内 黄茶色	やや密	1mm大の砂粒	良好					[illegible]
119	7	1SX 406		縄文	深鉢				体部 細片		凹線文	ナデ			黄茶色	やや密	1～2mm大の砂粒・角閃石・石英	やや良					[illegible]
120	1	表土		弥生	甕	23.2			口縁部 1/4	横ナデ	ナデ	ナデ			外 明茶色 内 明黄茶色	やや粗	1～2mm大の砂粒多	やや良	凸帯貼付	1条	沈線1条		11
120	2	表土		弥生	甕	29.0			口縁部 1/8	横ナデ	ナデ	ナデ			外 黒褐色 内 明黄茶色	やや粗	1～2mm大の砂粒	やや良	凸帯貼付	1条	沈線1条	外面は煤付着	10
120	3	表土		弥生	甕	29.2			上半部 完存	横ナデ	刷毛	ナデ			外 黒色 内 [illegible]	やや粗	1mm大の砂粒	やや良	凸帯貼付	1条	沈線1条	外面は全面に煤付着	6
120	4	表土		弥生	甕	40.0			口縁部 1/4	横ナデ	横ナデ	ナデ			外 明茶褐色 内 明灰茶褐色	粗	1～2mm大の砂粒多	やや良	凸帯貼付	1条	1条		8
120	5	表土		弥生	甕	28.4			上半部 1/4	刷毛	刷毛	刷毛			明黄白色	やや密	1～2mm大の砂粒・角閃石・雲母	やや良	外反 端部に面				14
120	6	表土		弥生	甕	20.8			口縁部 1/3	横ナデ	刷毛	刷毛			淡黄白色	やや密	1mm大の砂粒・角閃石	やや良	外反 端部に面			口縁端部の面全体に刻目有	8
120	7	表土		弥生	甕	38.0			口縁部 1/4	横ナデ	不明	篦ナデ			明褐色	やや密	1～4mm大の砂粒・角閃石多	やや良	外反 端部に面			頸部に凸帯1条有	17
120	8	表土		弥生	器台	8.8	7.6	13.8	上半部 1/3欠損	横ナデ	刷毛	不明	横ナデ	横ナデ	明黄茶色	粗	1mm大の砂粒多	やや良	外反			底部の面は接地する	1
120	9	表土		弥生	器台	6.0	7.1	11.1	1/2	横ナデ	ナデ 指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕	ナデ	ナデ	外 黄茶色 内 暗茶色	やや粗	1～2mm大の砂粒・角閃石	やや良	外反			底部の面は接地しない	2
120	10	表土		弥生	器台		[illegible]		下半部 1/2		刷毛	ナデ	横ナデ	横ナデ	外 黄茶色 内 暗茶色	粗	1～2mm大の砂粒多	やや良				底部の面は接地する	3
120	11	表土		弥生	支脚		[illegible]		下半部 2/3		ナデ			ナデ	暗黄茶色	やや密	1mm大の砂粒	やや良				中実	4
120	12	表土		弥生	壺	21.0			上半部 [illegible]	横ナデ	篦磨き 不明	横ナデ ナデ			外 暗黒褐色 内 明灰黄色	やや密	1～2mm大の砂粒・雲母多	良好	外反 端部に面				5
120	13	表土		弥生	壺		6.4		底部 完存		不明	ナデ	[illegible]	ナデ	外 淡褐色 内 明灰色	[illegible]	1～2mm大の砂粒・石英	やや良					2
120	14	表土		弥生	鉢	28.0			1/3	横ナデ	刷毛 篦ナデ	刷毛			明黄茶色	やや密	1mm大の砂粒	やや良	内傾 端部に面				15
120	15	表土		弥生	蓋	29.8			口縁部 1/8	横ナデ	刷毛	ナデ			外 明茶褐色 内 暗赤茶褐色	やや粗	1mm大の砂粒	やや良	外反 端部に面			内面は煤付着	13
120	16	表土		弥生	蓋	29.6			口縁部 1/8	横ナデ	横ナデ	ナデ			暗茶褐色	やや粗	1～2mm大の砂粒・雲母多	やや良	外反 端部に面				15
		1SB 108	b 掘込	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ					淡赤茶色	密	1mm大の砂粒少	やや良	外反				2
		[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]				口縁部 細片	横ナデ					赤褐色	密		良	細先状				3

Tab.16　出土遺物観察票（土器）⑨

Fig.	No	遺構	番号	層位	素材	産地	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	残存	備考	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	弥生土器		紡錘車	4.2	4.2	1.0	6.3	1/4	孔径0.4cm	[illegible]
69	34	1SB	100	f 半截	片岩		石包丁	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	輝緑凝灰岩	[illegible]	石包丁	7.8	4.1	0.7	30.0	1/2	孔径0.5cm　刃部に使用痕有	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]		面子	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		黒曜石	腰岳	鏃	1.9	1.3	0.4	0.5	完形		[illegible]
120	17	表	土		[illegible]	[illegible]	石包丁	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]

Tab.17　出土遺物観察票（土器以外）

1SK406 出土遺物（Fig.119、Pla.43）

７は縄文土器の深鉢である。外面に凹線文が施されている。曽畑式か。

表土出土遺物（Fig.120、Pla.43）

１～16 は弥生土器である。１～７は甕である。１～４は口縁部に凸帯を貼り付けるものである。いずれも凸帯の断面は蒲鉾状を呈する。２と３は体部に沈線が１条巡る。４は体部にも凸帯が１条貼り付く。５～７は外反する口縁部をもつものである。いずれも口縁端部に明瞭な面を形成する。６は口縁端部の面全体に刻目を施す。７は大型の甕で、頸部に三角凸帯が１条巡る。８～10 は器台である。８と 10 は底部の面が接地するが、9 は接地しないものである。いずれも器壁が厚く、支脚に近いものである。11 は中実の支脚である。下半部のみが残存している。12 と 13 は壷である。12 は外反する口縁部をもつもので、器形は前期のものに近い。13 は底部で、内面には箆磨きが認められる。14 は丸底の鉢である。15 と 16 は蓋の口縁部で、15 は端部には明瞭な面を形成する。16 も端部に面を持つが、15 に比べて丸みを帯びている。17 は輝緑凝灰岩製の石包丁である。

小結

今回の調査では、標高値が失われているので遺構に関する考察はできない。標高値が見つかった後に考察する機会を得たい。したがって、ここでは遺物についてのみ若干の考察を試み、まとめとしたい。

今回出土の縄文土器と周辺の遺跡

まず、今回の調査で検出した遺構の主体とは異なるが、縄文時代の遺物から取り上げたい。明確な縄文時代の遺構や、まとまった量の遺物を出土した遺構は確認できなかったが、全体では相当量の遺物を確認している。中心となるのは曽畑式であるが、一部に轟Ｂ式や田村式と思しきものも含まれている。

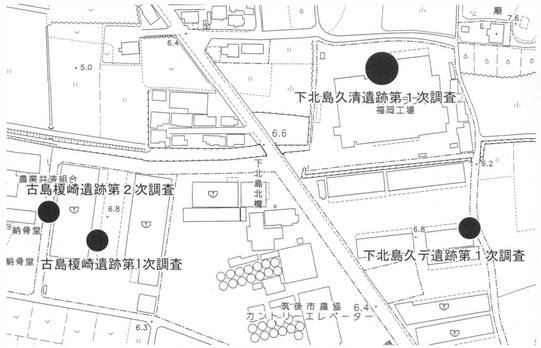


Fig.121　周辺遺跡位置関係図（1/2,500）

田村式は早期後半に比定されるが、曽畑式と轟Ｂ式は前期の土器とされていて、今回の調査地点およびその周辺に前期の生活痕跡を求めることができるのではないだろうか。当遺跡周辺での調査事例を概観してみると、南西に位置する古島榎崎遺跡の第１次調査と第２次調査で曽畑式土器の出土を見ていて興味深いが、なぜか南東に位置する下北島久デ遺跡では縄文時代の遺物の出土は認められない。

当遺跡の南面を西流する水路は現在真西に向かって流れているが、全体的な地形を概観すれば本来は西南西方向に流下すると思われ、その前提に立つと古島榎崎遺跡は当遺跡と同一の微高地上に位置すると理解される。つまり、当遺跡から古島榎崎遺跡にかけての微高地上に縄文時代前期を中心とした生活の拠点があったことが推察される。下北島久デ遺跡は低湿地に展開する弥生時代の遺跡で、集落とは異なる性格が与えられると考えられるので、縄文時代の当該地は湿潤で定住の地としては不向きであったことは容易に想像できる。したがって、縄文時代前期の集落が南面する湿地帯を望む微高地上に展開した可能性が高い。

弥生土器

今回出土した弥生土器を見てみると、上北島平塚遺跡の報告で設定したＣ類の土器にあたるものが相当数出土していることに気がつく。むしろ典型的なＣ類は当遺跡での出土量の方が多い。81-2・82-4・85-2・85-4・102-6がそうであるが、82-4は胴部にも刻目のない凸帯が貼り付き、85-2は口縁部凸帯に刻目が認められる。こうした点を見てみると、Ｃ類のものは亀ノ甲式の後半期には出現し、城ノ越式から須久Ⅰ式にかけて継続する可能性も否定できない。

しかしながら、製作技法の属性の点からみれば、上北島平塚遺跡の報告の中で取り上げた変遷をたどると考えた方が整理しやすい。総合的にみれば、亀ノ甲式の後半期から徐々に出現はするものの、様相としては城ノ越式よりも新しいものを持っていると言えよう。この点については、更なる資料の増加を待って検討を加える必要性を痛感するものである。大方の御批判と叱責を乞うところである。

Fig.122　調査区略測図（1/200）

S番号	遺構番号	備考	地区
1			AC5
2		欠番	
3		欠番	
4	ISB100f		AP8
5			AC6
6			AC5
7			AC5
8			AC5
9			AC5
10			AC4
11			AC5
12	ISK012		AD5
13	ISD013		AB3
14			AC3
15	ISD015		AC5
16	ISK016		AE3
17	ISK017		AE3
18			AE5
19			AE5
20	ISD020		AH6
21		欠番	
22			AE5
23			AE6
24			AD6
25			AD6
26		欠番	
27		欠番	
28			AF8
29			AF8
30	ISB030		BH3
31			AF7
32			AF7
33			AF6
34	ISK034		AF6
35	ISK035		AF5
36			AG3
37	ISK037		AG3
38	ISK038		AG7
39			AF7
40	ISD040		AV5
41			AG7
42			AG7
43			AG9
44			AH6
45			AH9
46			AH8
47			AI8
48			AI8
49			AI7
50	ISK050		AK9
51			AI8
52			AI8
53			AI7
54			AJ8
55			AJ8
56			AI9
57			AJ8
58		欠番	
59			AI9
60			AK9
61			AG8
62			AG8
63			BH4
64			BI4
65			BI4
66	ISX066		BG3
67			BG3
68			BF5
69			BG6
70	ISX070		AS7
71	ISK071		AY5
72			AZ3
73			BA4
74	ISK074		BA5
75			BB5
76			BB5
77			BB5
78			BC5
79			BD5
80	ISD080		AT10
81			BD4
82			BE4
83			BE4
84		欠番	
85			AT9
86			AG4
87	ISD087		AG3
88	ISK088		AH3
89	ISK089		AH3
90	ISB090		AS7
91	ISD091		AI2
92			AJ3
93	ISX093		AJ4
94	ISX094		AI5
95	ISB095a		AI5
96	ISK096		AH5
97			AI5
98			AI5
99	ISB095b		AI6
100			
101	ISK101		AC5
102	ISK102		AH6
103			AH6
104			AH6
105			AH9
106			AG6
107			AJ9
108			AJ8
109			AJ8
110			AT7
111			AK8
112			AJ8
113			AJ7
114			AJ7
115			AI7
116	ISX116		AJ7
117			AJ7
118			AJ6
119			AJ7
120	ISX120		AS7
121			AI7
122			AI6
123	ISX123		AI7
124			AI7
125			AJ6
126	ISB095c		AJ6
127			AJ6
128	ISX128		AJ5
129	ISK129		AJ5
130	ISX130		AU4
131	ISB095f		AJ5
132			AL5
133	ISB095e		AK5
134	ISX134		AK6
135			AK6
136	ISB095d		AK6
137			AK6
138			AK6
139	ISB139b		AL6
140	ISB140a		AU5
141			AL6
142			AL6
143			AL6
144			AL5
145			AL5
146	ISB139a		AL5
147			AM4
148			AM4
149	ISB149a		AM5
150	ISX150		AV4
151			AM5
152			AN5
153	ISB149d		AN5
154			AN5
155	ISB139d		AM5
156			AM5
157	ISB149b		AM5
158	ISK158		AN5
159			AN6
160	ISX160		AW3
161	ISX161		AN6
162	ISX162		AO6
163			AN6
164			AN6
165			AN6
166	ISB149c		AN6
167			AM6
168			AM6
169	ISB139c		AM6
170			AX4
171	ISX171		AM6
172	ISB172a		AN6
173			AM7
174			AM7
175	ISX175		AM7
176			AL7
177			AL7
178			AM7
179	ISK179		AM8
180	ISK180		AX4
181			AM8
182			AL8
183			AL8
184			AM8
185			AK8
186			AK8
187			AL8
188			AL9
189			AM9
190		欠番	
191			AK8
192			AN9
193			AN9
194			AM8
195	ISX195		AN8
196	ISB172c		AN8
197			AO8
198			AN8
199	ISK199		AO8
200		欠番	
201	ISX201		AN7
202			AO7
203	ISX203		AO7
204	ISB172d		AN7
205			AO7
206			AO7
207			AP7
208			AP6
209			AP6
210		欠番	
211			AP6
212			AO6
213			AO6
214			AP6
215			AP6
216			AO5
217			AP5
218			AP5
219			AP5
220		欠番	
221			AO4
222			AO4
223	ISK223		AO3
224			AP3
225			AP3
226			AP4
227			AP4
228			AP4
229			AQ3
230		欠番	
231			AQ4
232			AQ4
233			AQ5
234			AQ5
235			AQ5
236			AQ6
237			AQ5
238	ISB238a		AQ5
239			AR5
240		欠番	
241			AQ5
242			AQ5
243	ISB238b		AQ6
244	ISB238c		AR6
245			AR5
246	ISB246d		AR5
247	ISX247		AR5
248			AR5
249			AR5
250		欠番	
251		欠番	
252			AR8
253			AP8
254			AP9
255			AO9
256			AO9
257			AO10
258			AQ10
259	ISX259		AS9
260		欠番	
261			AS8
262			AT7
263			AU8
264			AU9
265	ISB090h		AS9
266			AT8
267	ISX267		AS9
268			AU8
269	ISX269		AS7
270		欠番	
271			AU9
272	ISX272		AU8
273			AU8
274			AU8
275	ISX275		AS6
276			AS6
277			AS5
278	ISX278		AT6
279			AT7
280		欠番	
281			AS5
282			AS5
283			AS5
284			AS5
285			AT3
286			AT3
287			AT4
288			AT4
289			AU4
290		欠番	
291			AU4
292			AU3
293			AU3
294			AU3
295	ISX295		AV3
296			AV4
297	ISX297		AV4
298			AV4
299	ISX299		AU4
300		欠番	
301	ISX301		AU4
302			AU4
303			AU5
304	ISX304		AU5
305	ISX305		AU4
306			AT5
307	ISX307		AT4
308			AT4
309	ISB140b		AU5
310		欠番	
311	ISX311		AU5
312			AU6
313			AU6
314	ISB314a		AU6
315	ISX315		AV5
316	ISX316		AV5
317			AW4
318			AW4
319			AV4
320		欠番	
321			AV3
322	ISX322		AW4
323	ISX323		AW3
324	ISX324		AW4
325			AW4
326			AU7
327	ISX327		AU6
328			AW6
329	ISX329		AW6
330		欠番	
331			AX6
332	ISB314d		AV6
333			AV7
334			AW6
335	ISX335		AW7
336			AW7
337			AW7
338	ISB314c		AV7
339			AV7
340		欠番	
341			AV8
342			AV8
343			AV8
344			AW8
345			AV9
346			AW9
347			AW9
348			AW9
349			AX9
350		欠番	
351			AX9
352			AX8
353			AX8
354			AX8
355			AX5
356	ISK356		AX5
357			BF5
358			BF6
359	ISK359		BI7
360		欠番	
361	ISK361		BH7
362	ISK362		BH7
363			BC8
364			BC7
365			BF6
366			BF6
367			BE7
368			BE7
369			BE7
370		欠番	
371			BE8
372			BD7
373		欠番	
374	ISD374		BD6
375			BC6
376	ISB376a		BA7
377			BA7
378			BA8
379	ISX379		AZ8
380		欠番	
381			BA8
382			AZ7
383			AX7
384	ISX384		AX4
385			AX4
386	ISK386		AX4
387			AX4
388	ISX388		AX4
389			AX4
390		欠番	
391			AX4
392			BB3
393		欠番	
394			AQ6
395			AQ7
396			AQ7
397			AR7
398			AQ8
399			AQ8
400		欠番	
401			AQ7
402			AQ7
403			AQ7
404	ISX404		AS7
405			AR7
406	ISX406		AR8
407			AP8
408	ISK408		AJ8

Tab.18　遺構番号台帳

下北島久清遺跡

アジア航測株式会社測製

筑後市教育委員会

Fig.123　遺構全体配置図（1/200）

3. 上北島花畑遺跡（第 1 次調査）

上北島花畑遺跡第 1 次調査は、市道上北島線の自歩道設置工事の際に、偶然遺構が発見され、緊急に記録保存のための発掘調査を実施したものである。そのため、調査にかかったときには、すでに遺構の一部が破壊された状況であった。当時は、若菜森坊遺跡の発掘調査を行なっていた最中であったため、その合間を縫っての調査となった。緊急な調査にもかかわらず、工事を担当した筑後市都市対策課の全面的な協力が得られたことは、当時としては非常に大きな収穫であった。調査は、平成 4 年 11 月 20 日から 12 月 10 日まででおこない、永見が担当した。

遺構

今回の調査では、竪穴式住居・溝状遺構・その他が検出された。先にも述べたとおり、工事中に偶然発見された遺跡であるため、大半の遺構が一部破壊された状況であった。特に調査区の西側の３分の１

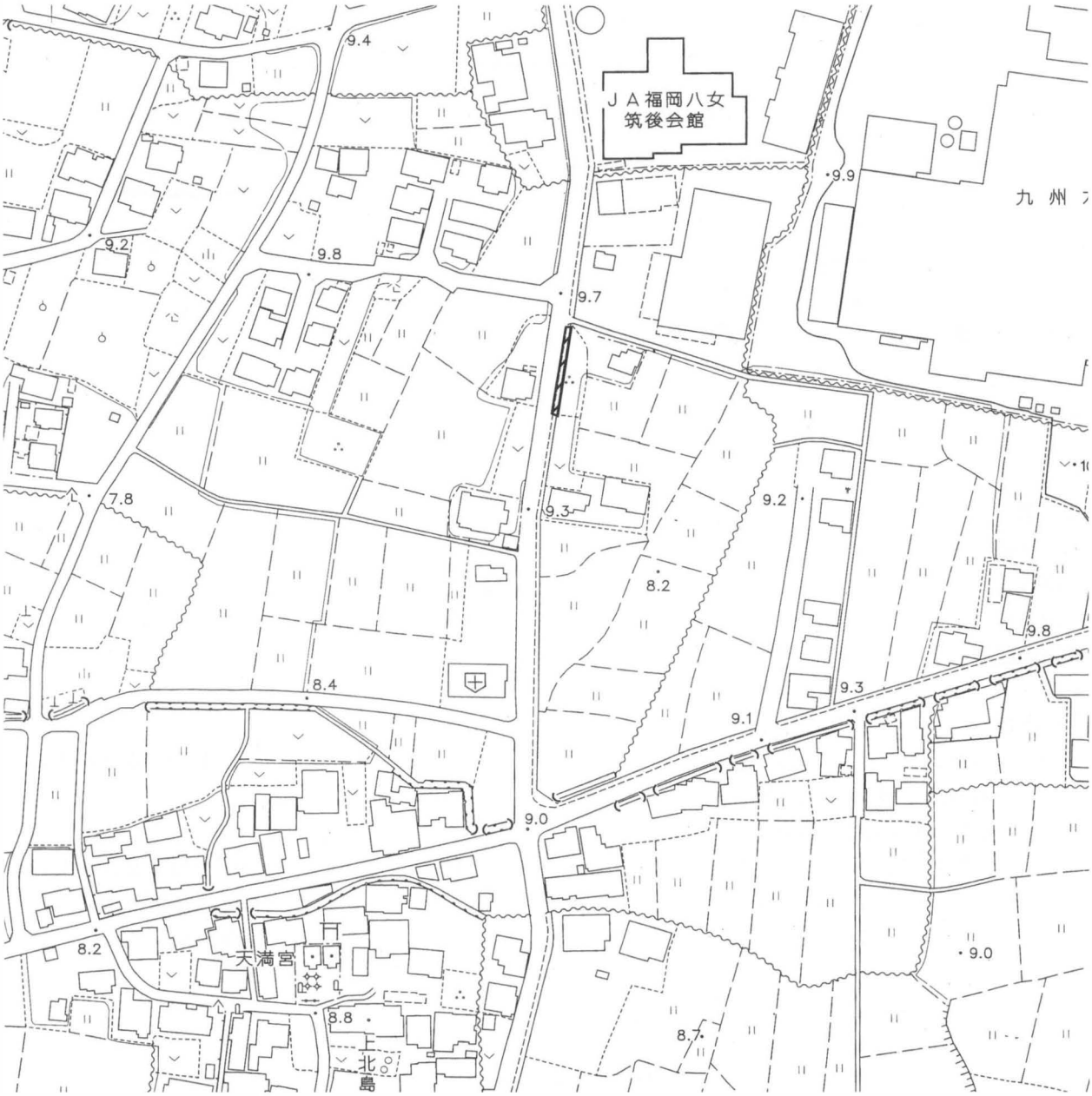


Fig.124　調査区位置図（1/2,500）

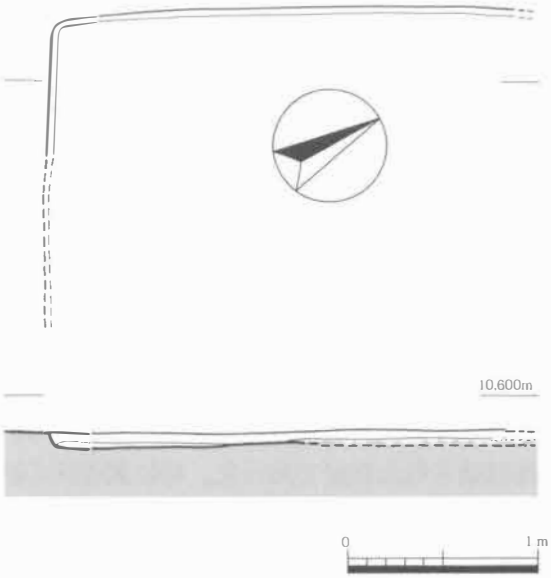


Fig.125　1SI01 実測図（1/40）

Fig.126　1SD05 実測図（1/40）

は既に掘削がほぼ完了していたため、遺構の詳細が判らないものが多い。以下、遺構種類別に報告したい。

竪穴式住居

　竪穴式住居は、 1 棟を検出した。

1SI01（Fig.125、Pla45）

工事の際の撹乱により、検出部分の大半が失われている。ただし、西側壁の観察により、一定の復元は可能である。しかしながら、元来南北に細長い調査区の設定を余儀なくされたため、全体の規模は不明である。調査時には深さ 0.1m ほどしか残存していなかった。

　出土遺物は、確認できなかったが、撹乱出土の遺物は、1SI01 の出土遺物であった可能性が高いと思われる。

溝状遺構

　溝状遺構は 1 条確認した。幸いに工事による破壊が小さかった。

1SD05（Fig.126、Pla46）

　調査区の南に位置する。幅 0.2m で深さは 0.1m である。主軸の方位はＮ－ 57°－Ｅである。出土遺物は認められない。

出土遺物

　全体でパンコンテナー 1 箱の遺物が出土したが、図化し得たものは、撹乱出土のものと表土出土のもののみであった。以下、順に報告する。

撹乱出土遺物（Fig.127、Pla47）

　すべて土師器である。1 と 2 は甕である。1 は口縁部の資料で、外反する口縁部を有する。小型のもので、口縁部と体外面は横ナデを施し、体内面は箆ナデである。2 は底部の資料で、体部外面には刷毛目が認められる。3 は蓋で、口縁部の資料である。口縁端部には比較的明瞭な面を形成していて、焼成は良好である。

表土出土遺物（Fig.127、Pla47）

　すべて土師器である。4 は高坏の脚部である。脚部は内外面ともに横ナデが施されている。色調は外面が暗茶黒色で内面が明橙色である。5 は坏である。口縁部の細片で、口縁部は外反するものである。すべて横ナデが施されている。

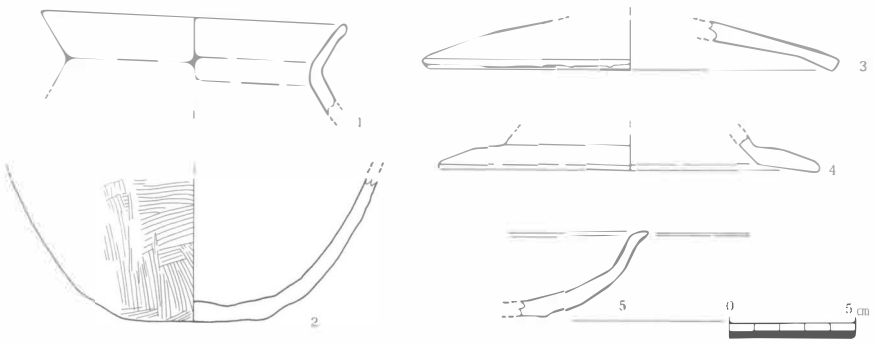


Fig.127　撹乱・表土出土遺物実測図（1/3）

Fig.	No.	遺構 番号	層位	種別	器種	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	残存	口縁部	体外部	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	備考	実No.
127	1	撹乱		上師	壺	120			口縁部 1/6	横ナデ	横ナデ	箆ナデ			外 黒茶色 内 明黄茶色	やや蜜	1～2mm 大の砂粒・角閃石・石英多	やや良	外反		1
127	2	撹乱		上師	壺		5.1		底部 1/2		縦ナデ	箆ナデ	箆ナデ	ナデ	外 明黄色 内 黄橙色	やや蜜	1～3mm 大の砂粒・角閃石・金雲母	やや良			4
127	3	撹乱		上師	壺	160			口縁部 1/8	ナデ	箆磨ナデ	ナデ 箆ナデ			橙色	精良	角閃石少	良好	磯部に面		3
127	4	撹乱		上師	高坏		[illegible]		脚部 1/7		横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	外 暗茶橙色 内 明橙色	やや蜜	1～2mm 大の砂粒・石英多	やや良			2
127	5	表土		上師	坏				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			暗赤茶色	蜜	1mm 大の砂粒・角閃石・雲母少	良好	外反		1

Tab.19　出土遺物観察表

小結

今回の調査では、非常に細長い調査区の設定を余儀なくされた上に、撹乱によって主要遺構の一部が既に破壊されていたという悪条件の中での調査となった。しかしながら、調査によって得られた情報と周辺での調査成果を組み合わせて考えると、いくつかの興味深いことが浮かび上がってくる。

まず、今回の調査では、竪穴住居を 1 棟確認しているが、後に行なわれた第 2 次調査では竪穴住居は確認されていない。第 2 次調査の調査地点は北東に 50m ほどの位置で、これほど近接しているにもかかわらず両者の違いは興味深い。むしろ、東側に展開する狐塚遺跡との関連が注目され、今回調査した箇所は、狐塚遺跡を中心とした集落の一部である可能性が高い。

今回検出した竪穴住居である 1SI01 は残念ながら出土遺物が認められなかった。しかし、前述したように、撹乱出土の遺物に本来 1SI01 に包含されていた遺物が含まれていると仮定すると、若干興味深い事象が浮かび上がる。良く知られているように、狐塚遺跡の調査では弥生時代終末期から古墳時代にかけての竪穴住居が切り合い関係をもって確認されている。今回の撹乱からの出土遺物をみると、弥生時代終末期のものではなく古墳時代の所産と考えられることから、古墳時代に入って、狐塚遺跡の集落が拡張して、今回の調査地点まで竪穴住居が営まれるようになったとも解釈できる。

いずれにしても、資料不足の感は否めず、推論私論の域を出ない。大方の叱責を請うところである。

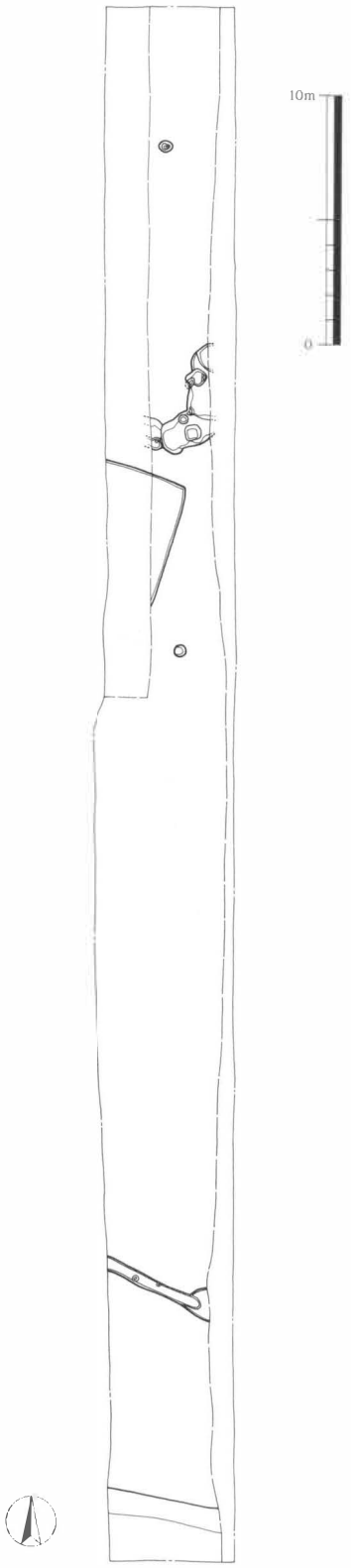


Fig.128　遺構全体配置図（1/300）

4. 西牟田清徳浦遺跡（第１次調査）

西牟田清徳浦遺跡第１次調査は、市道天堤欠塚線の拡幅に先立って実施した、記録保存のための発掘調査である。工事に先立って、筑後市役所土木課から教育委員会社会教育課に対して、埋蔵文化財の有無について照会がなされた。試掘調査の結果、遺構の存在することが明らかとなり、記録保存のための本調査が必要な旨を回答した。

協議の結果、遺構の確認された部分については工事前に本発掘調査を実施することで合意したため、平成６年９月に発掘調査を実施した。調査期間は約１週間であった。調査は永見が担当し、大島真一郎（現：黒木町教育委員会）の協力を得た。

遺構

今回の調査は道路の拡幅部分が調査対象であったため、非常に細長い調査区設定を余儀なくされた。試掘調査では、溝状遺構を確認していたが、本調査では、周辺に遺構が点在することが予想された。しかしながら、いざ遺構面を検出してみると溝状遺構以外には小穴が認められたが、顕著な遺構は検出されなかった。以下、その溝状遺構を中心に報告したい。

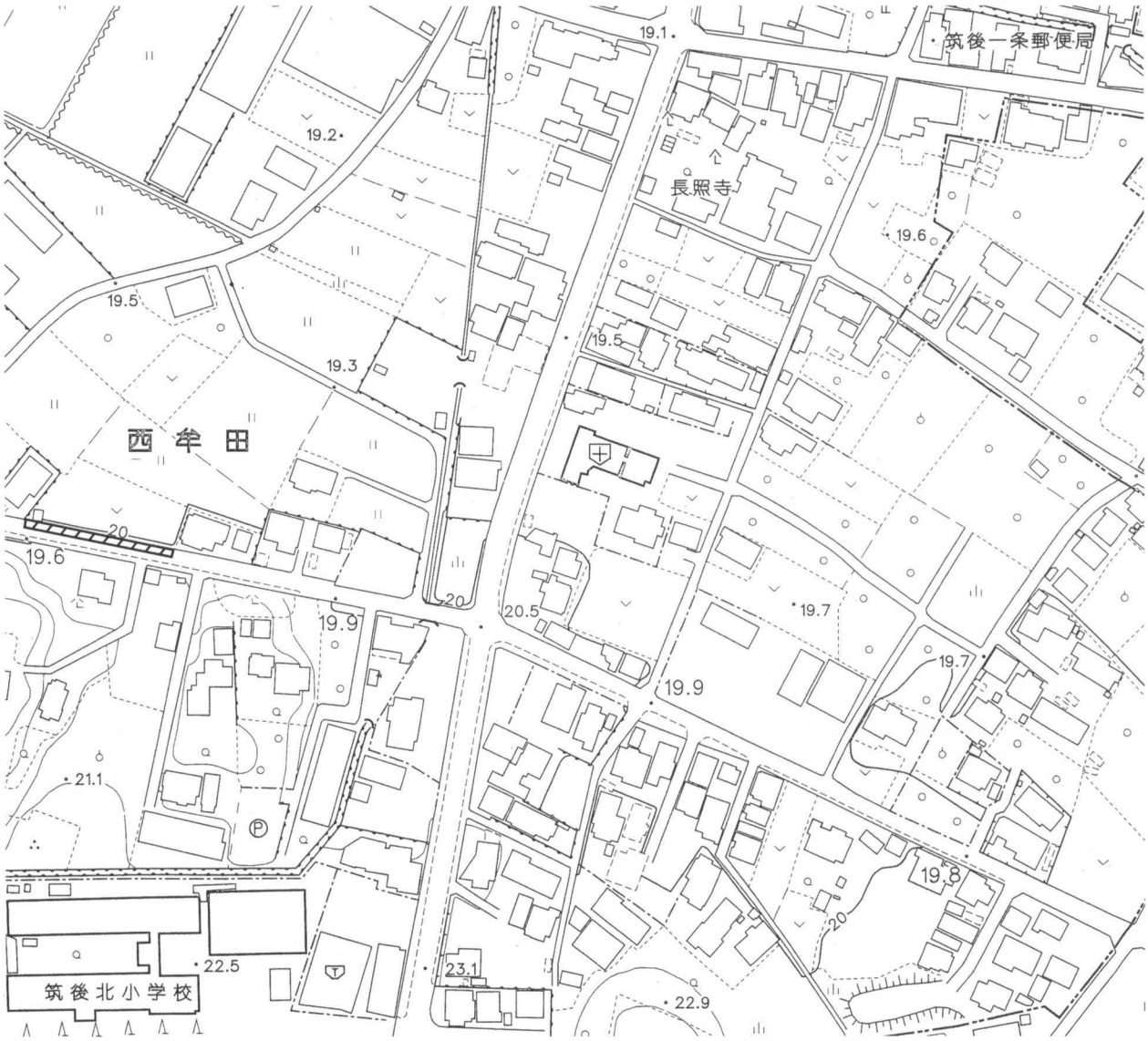


Fig.129　調査区位置図（1/2,500）

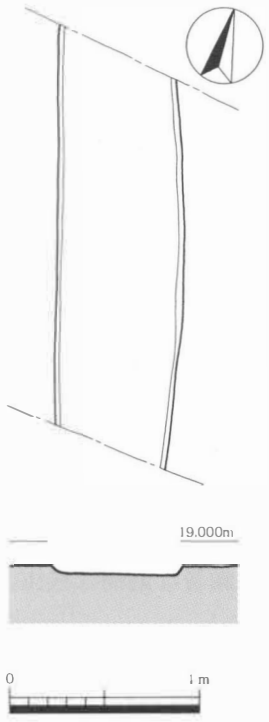


Fig.130　1SD01
実測図（1/40）

溝状遺構

1SD01（Fig.130、Pla.48）

調査区の東寄りにある。調査区を横断するように検出され、幅0.7m深さ0.1mで、断面形状は逆台形である。主軸の方位はN－06°－Wであった。

出土遺物は確認できなかった。

出土遺物

今回の調査では、遺物が全く出土しなかった。廃土置き場の精査も試みたが、遺物は皆無であった。

小結

今回の調査では、遺物が全く出土しなかったため、遺構の時期について論及することが不可能である。しかしながら、周辺の遺跡との関連の中で、若干の私見を述べ、まとめとしたい。

まず、1SD01がほぼ南北の方位にのることに気がつく。また、西側の小穴の列も、ほぼ東西の方位に一致する。全体として、遺構の配置が方位に制約されている可能性があるといえる。

今回調査した地点から100m東側には古代の官道である西海道が南北に走っている。この地点での方位がN－06°－Eであるので、12°ほどずれている。したがって、直接的な関連はないと考えられる。

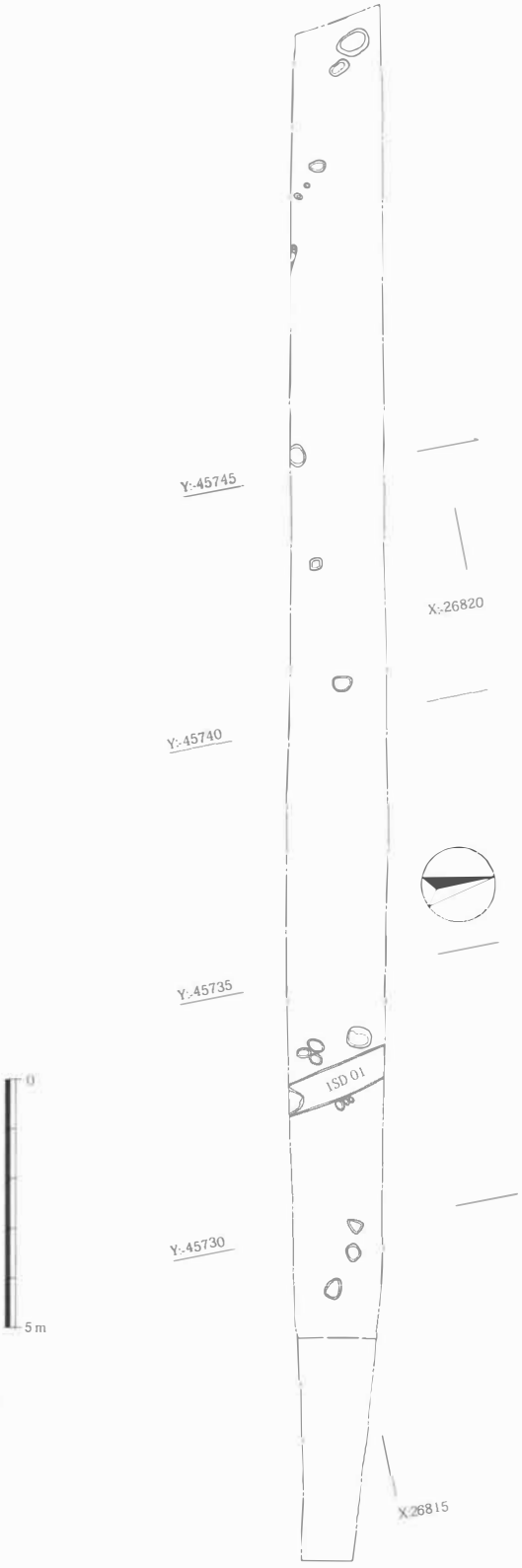


Fig.131　遺構全体配置図
（1/300）

5. 熊野屋敷遺跡（第 1 次調査）

熊野屋敷遺跡第 1 次調査は、市道蔵数水田線道路改良事業に先立つ記録保存の措置として実施された。工事に先立って、工事を担当する筑後市役所土木課（現：道路課）から筑後市教育委員会社会教育課に対して埋蔵文化財の有無について照会があった。試掘調査の結果、拡幅部分全域に遺構の存在を確認した。道路は恒久的構造物であるため、工事の前に本発掘調査が必要な旨を土木課に伝え、協議の結果、工事前に本発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとなった。

現地での調査は平成 7 年 5 月から 9 月まで実施した。調査は永見が担当し、大島真一郎（現：黒木町教育委員会）、野田洋子の協力を得た。

遺構

道路拡幅に伴う発掘調査のため、非常に細長い調査区の設定を余儀なくされた。しかも、北端の部分

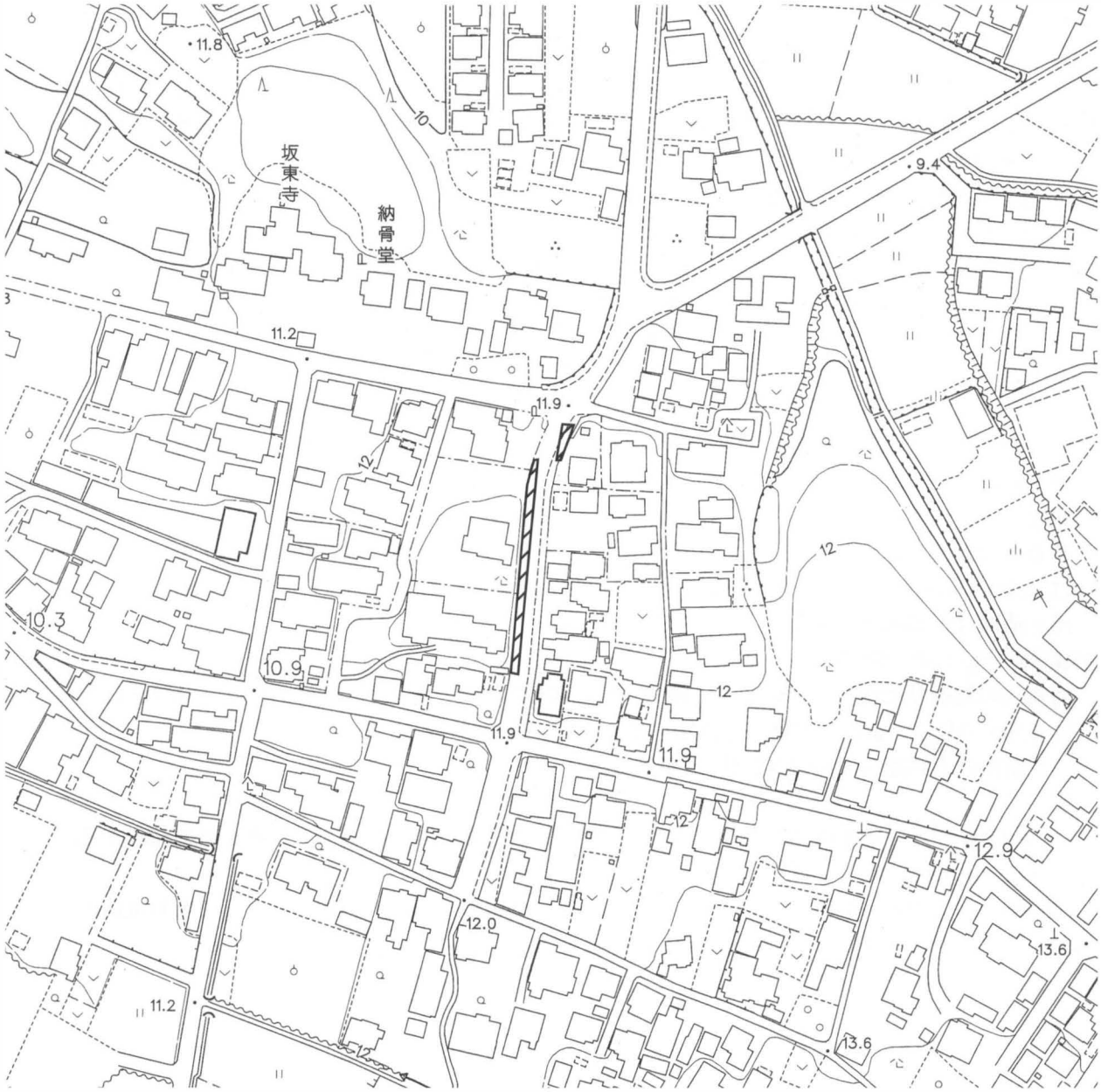


Fig.132　調査区位置図（1/2,500）

は、現道を挟んだ北東側に小さな三角形の調査区が独立するという、非常に窮屈な状態で調査を進めざるを得なかった。そうした状況のなかで、遺構の性格が不明なまま報告をせざるを得ないことは、非常に残念なことである。しかしながら、今回の調査では、掘建柱建物 6 棟をはじめ、土坑、溝状遺構等を確認した。以下、遺構種類別に報告する。

掘建柱建物

合計 6 棟を確認した。現地で確認できたもののみを掘建柱建物として報告している。以下、遺構毎に報告する。

1SB010（Fig.133、Pla.50）

調査区の北寄りに位置していて、1 間× 1 間の規模である。柱穴の規模は 0.4m × 0.3m ほどで、北側の柱穴の深さは 0.5m である。それに対して南側の柱穴は深さが 0.3m ほどしかない。柱穴のうち 2 つには段がついていて、柱が落とし込んであった穴と理解できる。

また、主軸の方位は、N － 96° －Wである。

出土遺物は土師器（皿・片）・陶器（片）がある。

1SB015（Fig.134、Pla.50）

調査区の北寄りに位置していて、1 間× 1 間の規模である。柱穴の規模は 0.4m × 0.4m ほどで、深さは 0.5m である。ただし、北西の柱穴は 0.2m × 0.2m で、深さも 0.3m ほどしかない。柱穴のうち南東の 1 つは段がついていて、柱が落とし込んであった穴と理解できる。また、主軸の方位は、N － 16° － E である。

出土遺物は青磁（片）がある。

1SB020（Fig.135、Pla.50）

調査区の北寄りに位置していて、1 間× 1 間の規模である。柱穴の規模は 0.3m × 0.3m ほどで、深さは 0.2m から 0.3m である。また、主軸の方位は、N － 01° －Wである。

出土遺物は土師器（片）・白磁（碗）がある。

1SB025（Fig.136、Pla.50）

調査区の北寄りに位置していて、1 間× 1 間の規模である。柱穴の規模は 0.3m × 0.3m ほどで、深さは 0.2m のものから 0.5m のものまである。また、主軸の方位は、N － 44° －Wである。

出土遺物は土師器（皿）・片岩（片）がある。

1SB030（Fig.137、Pla.50）

調査区の北寄りに位置していて、1 間× 1 間の規模である。柱穴の規模は 0.4m × 0.4m ほどで、深さは 0.3m である。また、主軸の方位は、N － 12° － E である。

出土遺物は土師器（皿・片）・片岩（片）がある。

1SB035（Fig.138、Pla.50）

調査区の北寄りに位置していて、1 間× 1 間の規模である。柱穴の規模は 0.4m × 0.4m ほどで、深さは 0.3m である。また、主軸の方位は、N － 08° － E である。

出土遺物は土師器（皿）・瓦器（片）がある。

土坑

今回の調査では 4 基を確認したが、うち 1 基は井戸かも知れない。以下、遺構ごとに報告する。

1SK057（Fig.139）

調査区の中央附近に位置していて、南北 1.5m で、全体の 1/3 程が調査区外となるため東西方向の規模は不明である。深さは、0.1 mを測る。底面は平坦である。

出土遺物は、土師器（皿）がある。

1SK062（Fig.139）

調査区の中央附近に位置していて、南北 1.2 m東西 0.6 m深さ 0.2 mを測る。平面形態は細長い楕円形を呈している。底面は平坦である。

出土遺物は、土師器（皿・片）・青磁（碗）がある。

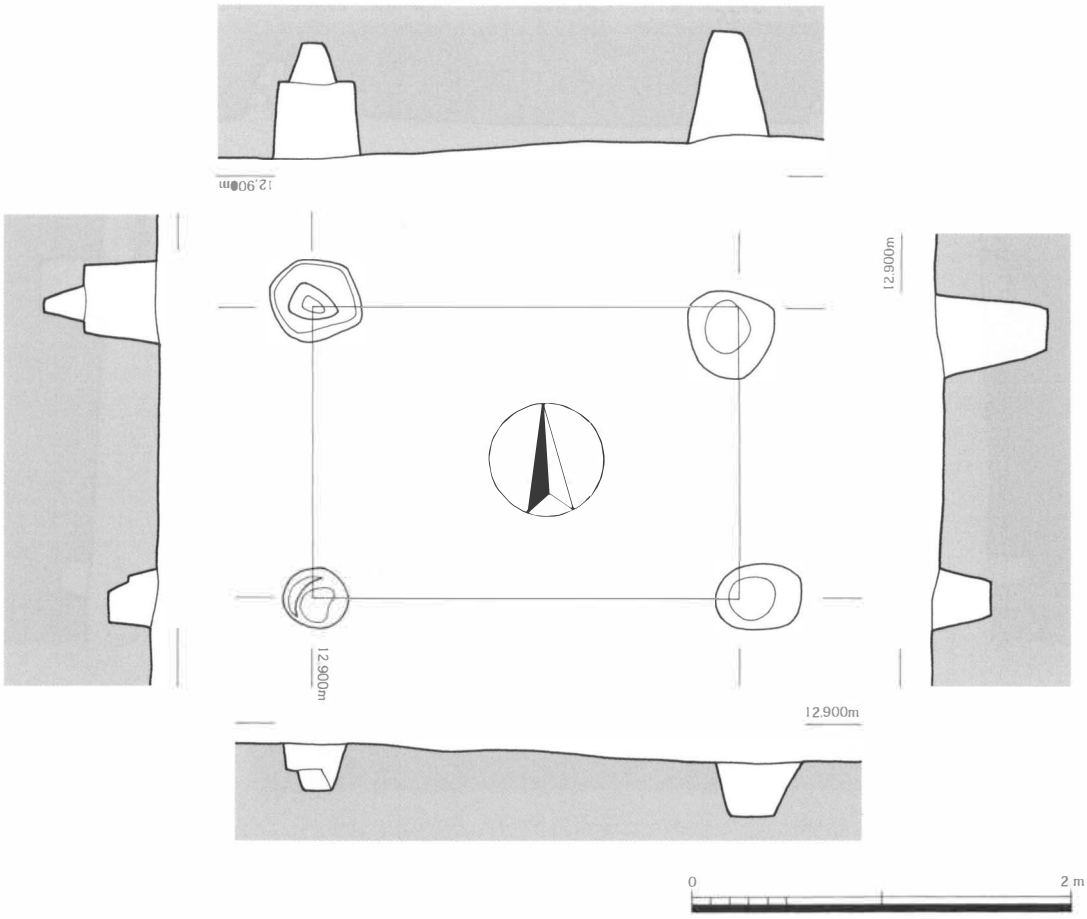


Fig.133　1SB010 実測図（1/40）

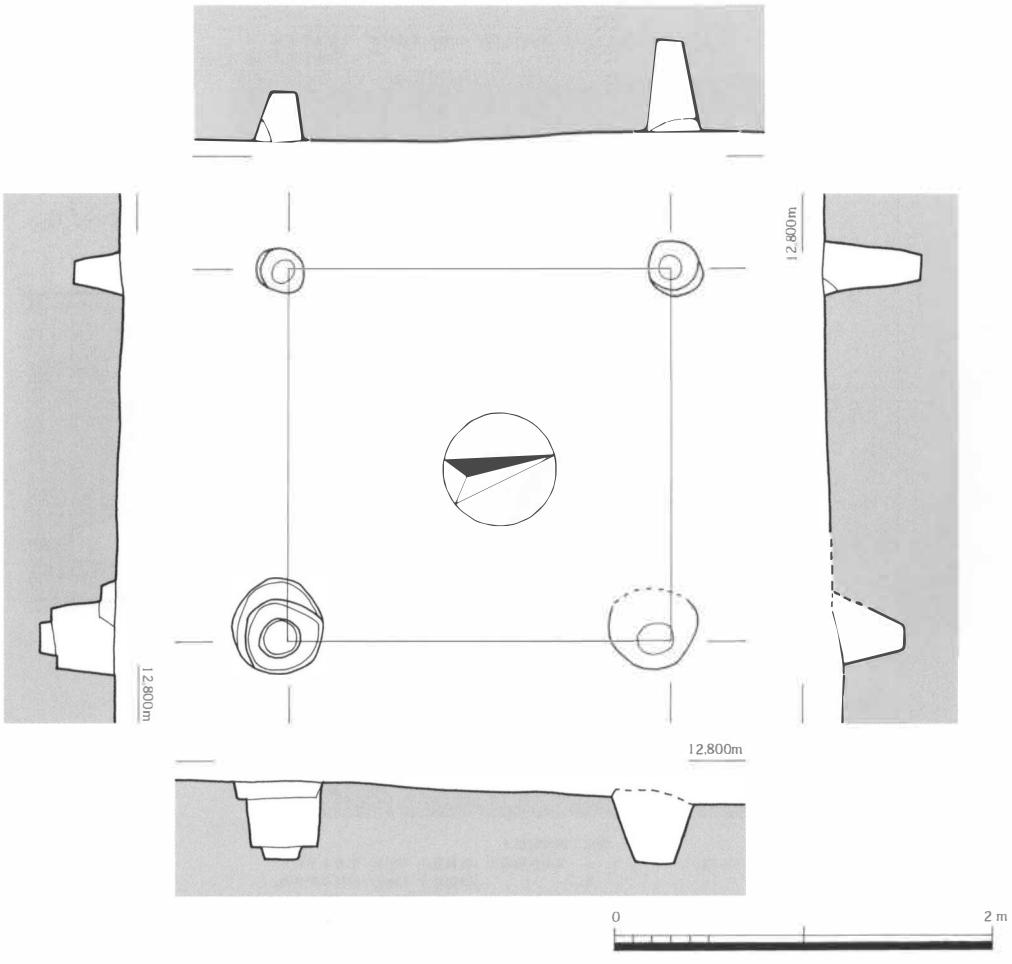


Fig.134　1SB015 実測図（1/40）

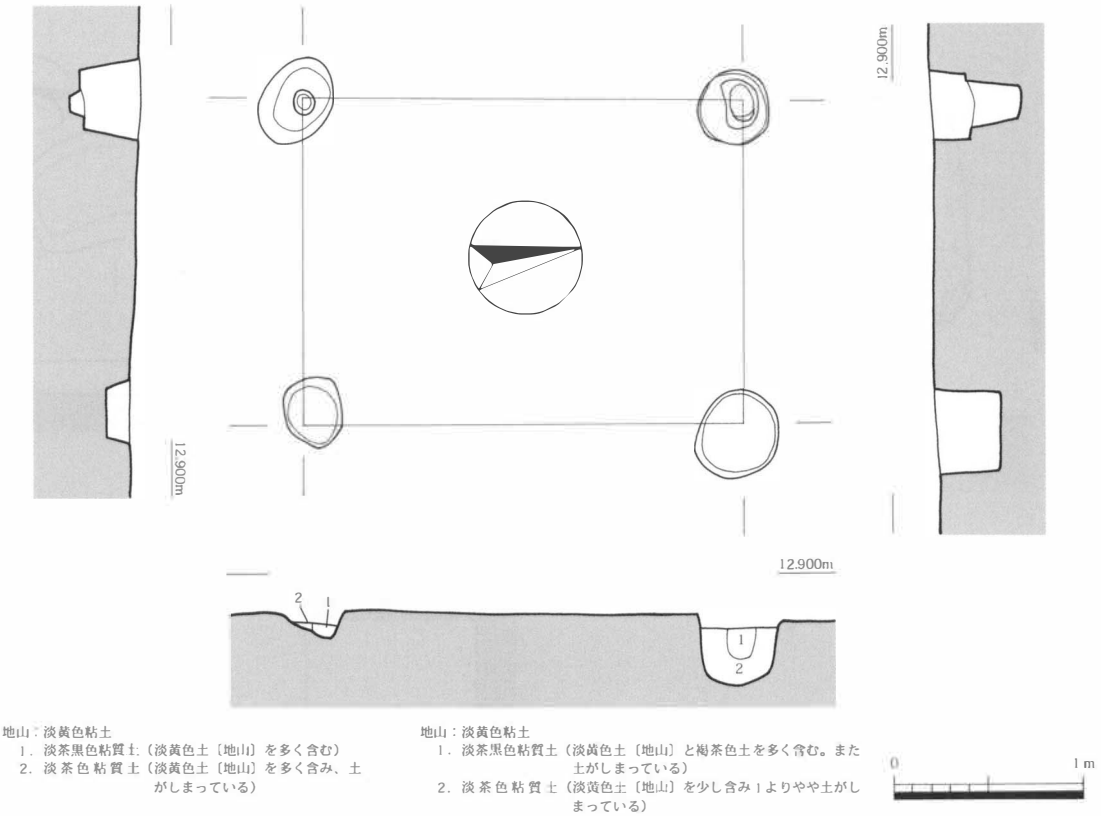
Ⅰ　淡黒茶色砂質土（均一に少なからぬ淡黄茶色微粒子を含み、適度なしまりがある）
Ⅱ　淡黒茶色砂質土（少量の淡黄茶色小ブロックを含み、かなりしまりがある）
　　淡茶色　〃
Ⓐ　淡黄茶色粘質土〔地山〕

Ⅰ　明黒茶色砂質土（少量の淡黄茶色微粒子を含み、ややしまりがある）
Ⅱ　淡茶色粘質土（多量の地山小ブロック、粒子を含み、しまりはⅠに同じ）
Ⓐ　淡黄茶色粘質土〔地山〕

Fig.135　1SB020 実測図（1/40）

地山：淡黄色粘土
1．淡茶色粘質土（淡黄色土〔地山〕を多く含む）
2．　〃　（淡黄色土〔地山〕の粒子を含み、1より土がしまっている）
3．淡黒灰色粘土

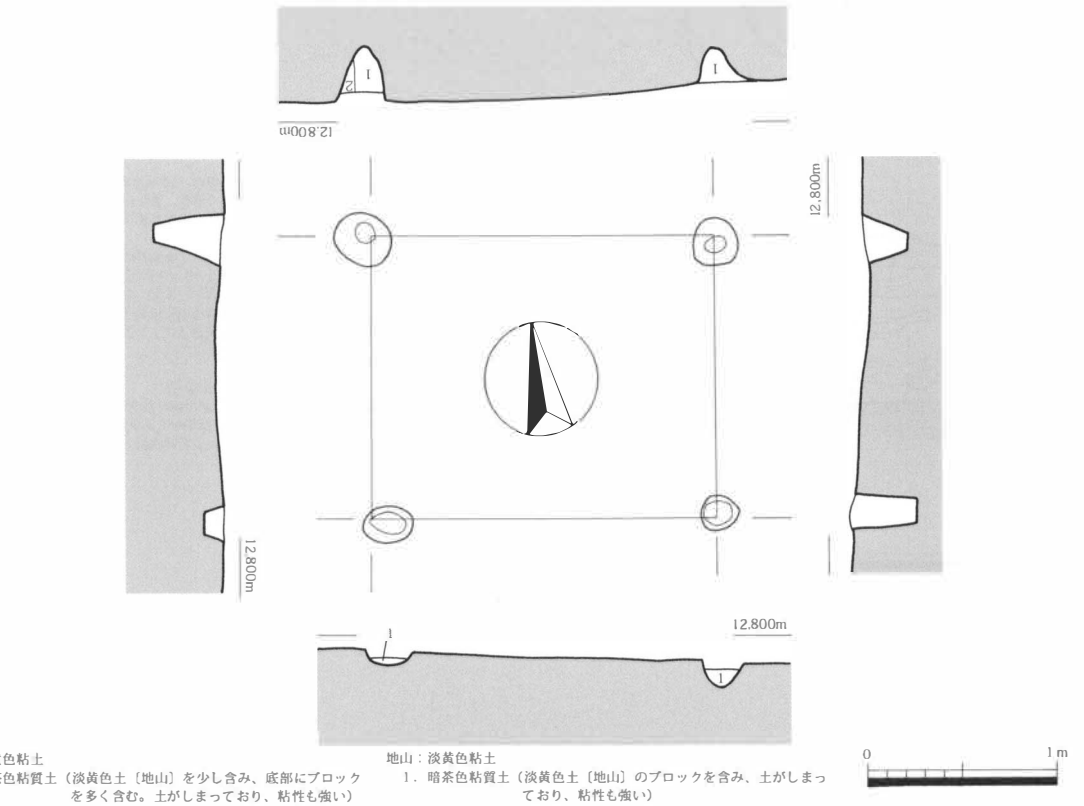
Fig.136　1SB025 実測図（1/40）



地山：淡黄色粘土
1．淡茶黒色粘質土（淡黄色土〔地山〕を多く含む）
2．淡茶色粘質土（淡黄色土〔地山〕を多く含み、土がしまっている）

地山：淡黄色粘土
1．淡茶黒色粘質土（淡黄色土〔地山〕と褐茶色土を多く含む。また土がしまっている）
2．淡茶色粘質土（淡黄色土〔地山〕を少し含み１よりやや土がしまっている）

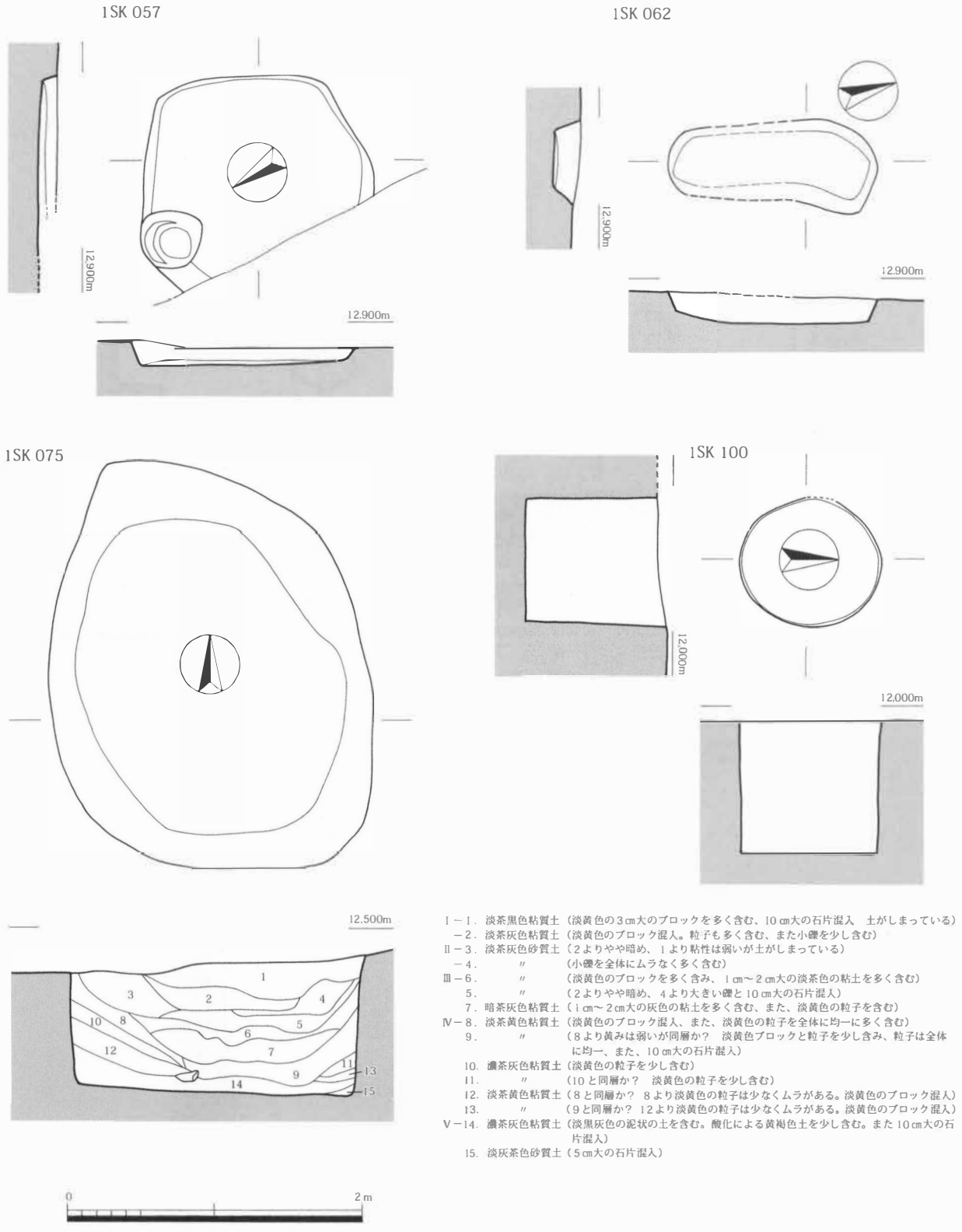
Fig.137　1SB030 実測図（1/40）



地山：淡黄色粘土
1．暗茶色粘質土（淡黄色土〔地山〕を少し含み、底部にブロックを多く含む。土がしまっており、粘性も強い）

地山：淡黄色粘土
1．暗茶色粘質土（淡黄色土〔地山〕のブロックを含み、土がしまっており、粘性も強い）

Fig.138　1SB035 実測図（1/40）



Ⅰ－1．淡茶黒色粘質土（淡黄色の３㎝大のブロックを多く含む、10㎝大の石片混入　土がしまっている）
　－2．淡茶灰色粘質土（淡黄色のブロック混入。粒子も多く含む、また小礫を少し含む）
Ⅱ－3．淡茶灰色砂質土（２よりやや暗め、１より粘性は弱いが土がしまっている）
　－4．〃（小礫を全体にムラなく多く含む）
Ⅲ－6．〃（淡黄色のブロックを多く含み、１㎝～２㎝大の淡茶色の粘土を多く含む）
　5．〃（２よりやや暗め、４より大きい礫と10㎝大の石片混入）
　7．暗茶灰色粘質土（１㎝～２㎝大の灰色の粘土を多く含む、また、淡黄色の粒子を含む）
Ⅳ－8．淡茶黄色粘質土（淡黄色のブロック混入、また、淡黄色の粒子を全体に均一に多く含む）
　9．〃（８より黄みは弱いが同層か？　淡黄色ブロックと粒子を少し含み、粒子は全体に均一、また、10㎝大の石片混入）
　10．濃茶灰色粘質土（淡黄色の粒子を少し含む）
　11．〃（10と同層か？　淡黄色の粒子を少し含む）
　12．淡茶黄色粘質土（８と同層か？　８より淡黄色の粒子は少なくムラがある。淡黄色のブロック混入）
　13．〃（９と同層か？　12より淡黄色の粒子は少なくムラがある。淡黄色のブロック混入）
Ⅴ－14．濃茶灰色粘質土（淡黒灰色の泥状の土を含む。酸化による黄褐色土を少し含む。また10㎝大の石片混入）
　15．淡灰茶色砂質土（５㎝大の石片混入）

Fig.139　土坑実測図（1/40）

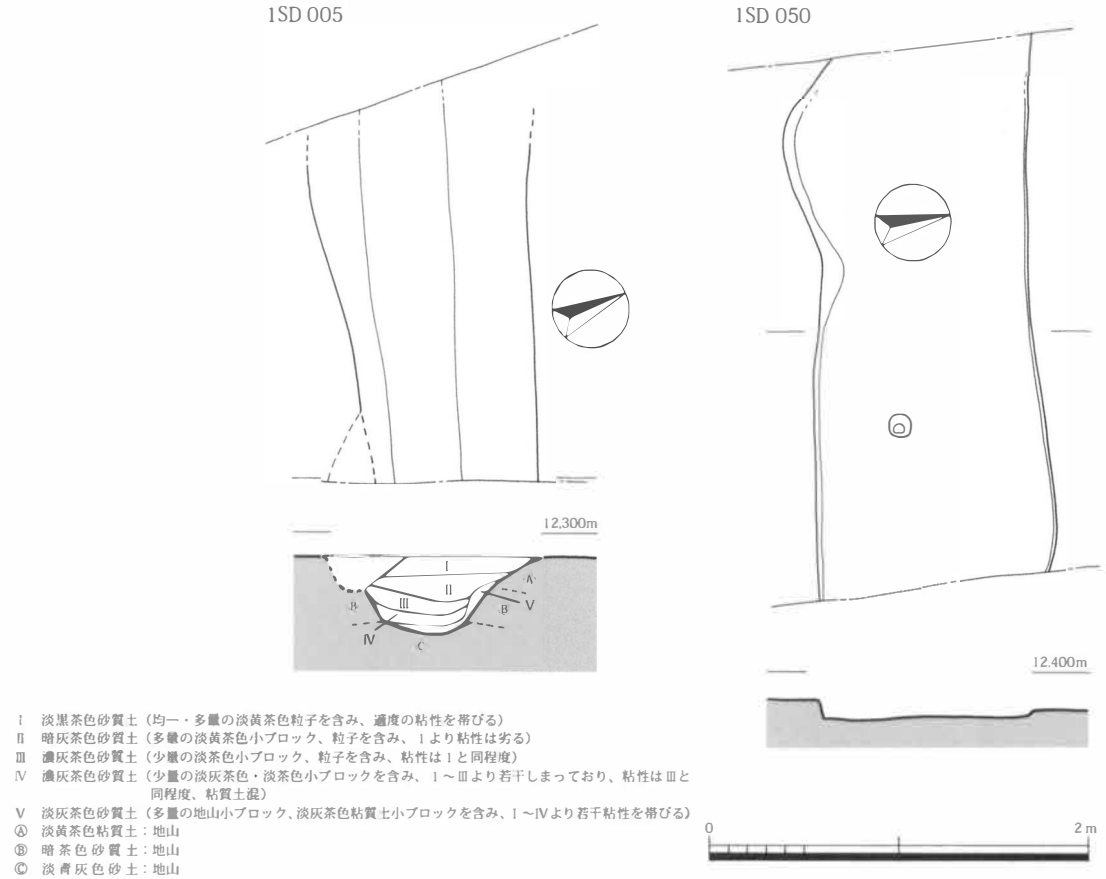


Fig.140　1SD005・1SD050 実測図（1/40）

1SK075（Fig.139）

調査区の南端に位置していて、南北 2.7 m東西 2.2 m深さ 0.9 mを測る。平面形態は、隅丸方形が崩れて楕円形に近くなったような形態をしている。底面はほぼ平坦である。

出土遺物には、土師器（皿・甕・土鍋）・瓦器（火舎）・青磁（碗）・瓦（平）がある。

1SK100（Fig.139）

調査区の北寄りに位置していて、南北 0.9 m東西 0.9 m深さ 0.9 mであった。平面形態は円形である。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がっていて、井戸の可能性もある。

出土遺物には、土師器 (皿）・石製品（石臼）がある。

1SK188（Fig.184）

調査区の南寄りに位置していて、南北 1.0m であったが西半は調査区外となる。また深さも完掘に到っていないため不明である。

出土遺物には、須恵器（鉢）・土師器（皿・坏・片）がある。

溝状遺構

ここでは５遺構を報告する。いずれも調査区を横断するように東西方向に走る溝である。以下、遺構毎に報告したい。

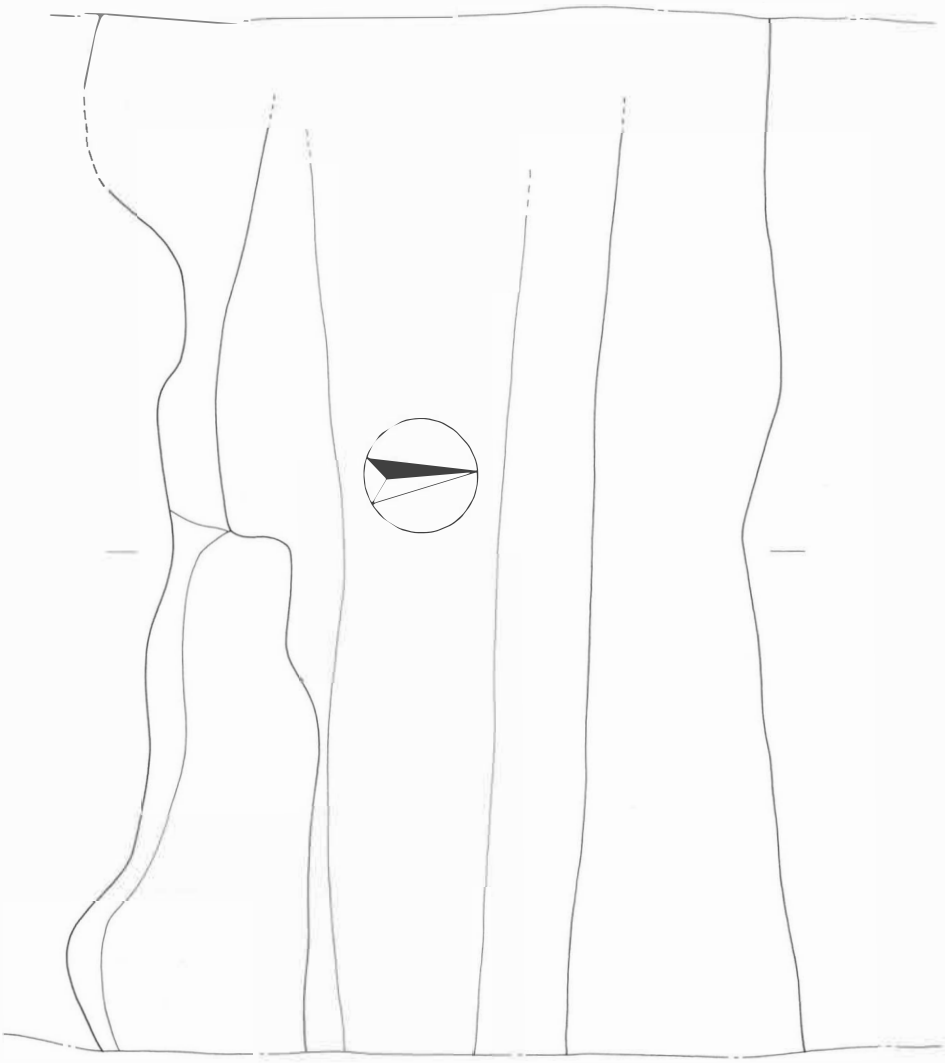
1SD005（Fig.140）

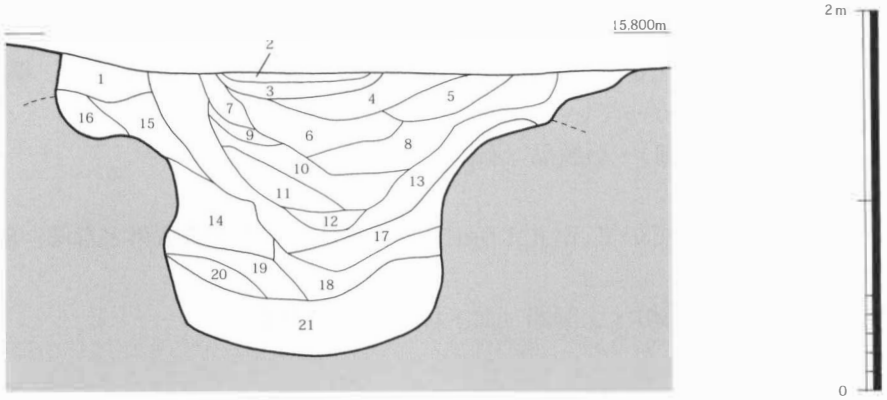
Ａ調査区の南端に位置していて、幅 1.0 m深さ 0.4 mであった。断面形態は逆台形である。

出土遺物には、土師器 (皿・羽釜）・瓦器（椀・火舎）・陶器（甕）・石製品（石臼）がある。

1SD050（Fig.140、Pla.51・52）

調査区の東よりに位置していて、幅 1.1 m深さ 0.1 mであった。底面は平坦で、断面形態は逆台形である。



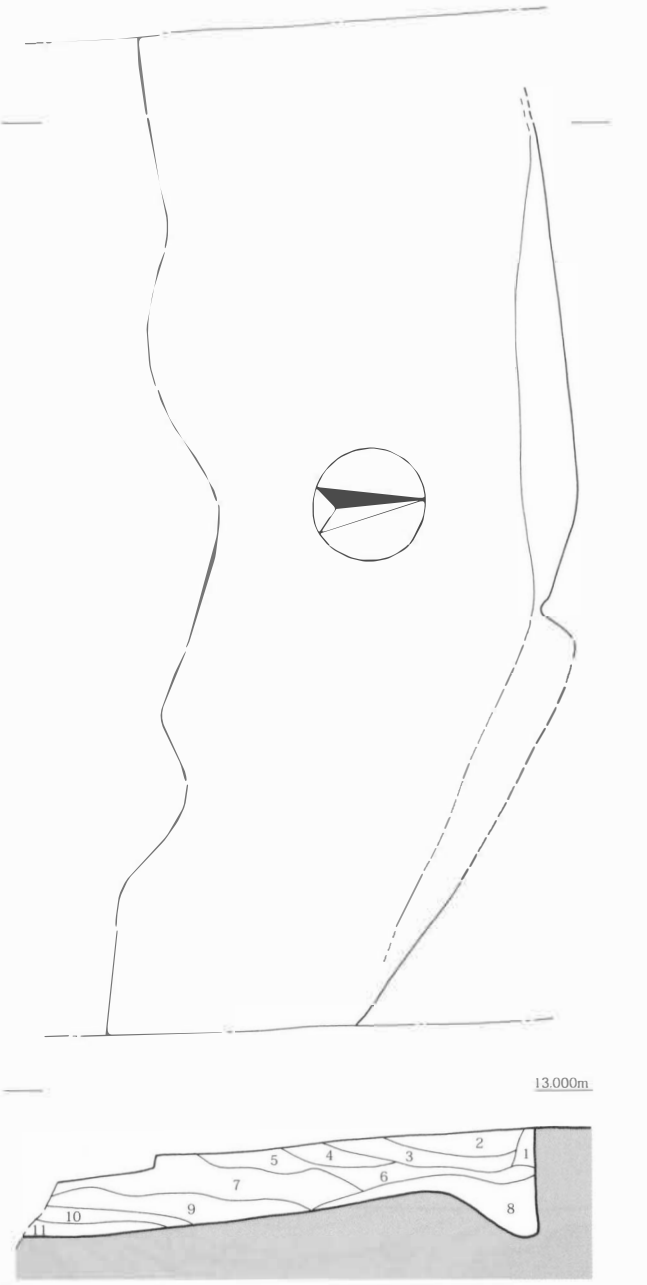


Ⅰ－1．淡黄茶色砂質土（少量の小礫を含み、地山よりやや明るい）
Ⅱ－2．淡黒茶色砂質土（少量の淡黄茶色粒子、小礫を含み、かなりしまっている〔粘質土混〕）
　－3．淡黒茶色砂質土（2の組成に似るが、淡黄茶色小ブロックを少々含み、しまりも2に同じ〔粘質土混 3＞2〕）
Ⅲ－4．淡黒茶色砂質土（少量の豆砂利、淡黄茶色小ブロック、炭片を含み、やや明るめ、適度のしまりがある）
　－5．淡黒茶色砂質土（少量の小礫を含み、適度のしまりがある）
　－6．淡黒茶色砂質土（少量の明黒茶色小ブロック、淡黄茶色粒子を含み、5よりやや暗め、しまりは5に同じ）
　－7．淡黒茶色砂質土（小礫を多く含み、6よりややしまりは弱い）
　－8．淡黒茶色砂質土（7に組成は似るが、しまりは7より大）
　－9．淡黒茶色砂質土（少なからぬ淡黄茶色粒子を含み、7よりしまっている）
　－10．淡黒茶色砂質土（中央に大・小地山塊、多量の明黒茶色小ブロック、少量の淡黄茶色小ブロック、粒子を含む）
　－11．淡黒茶色砂質土（全体的に淡黄茶色小ブロック、粒子、明黒茶色小ブロックを含む）
　－12．淡黒茶色砂質土（11より明黒茶色小ブロックの割合が多く、やや明るい）
　－13．淡黒茶色砂質土（少量ながら全体的に淡黄茶色粒子を含む）
Ⅳ－14．淡黒茶色砂質土（多量の淡黄茶色小ブロック、粒子（地山粒子、小ブロック）、明黒茶色小ブロックを含み、小礫は殆んど含まず）
　－15．暗黒茶色砂質土（少量の小豆砂利を含み、中央部より多少明るい、しまりもやや弱くなる）
　－16．淡黒茶色砂質土（15より小礫、炭辺に地山粒子を含み、やや砂味がかる）
Ⅴ－17．淡黒茶色砂質土（底部に淡黄茶色粒子、左辺から地山粒子を含み、やや明るく、しまりも弱い）
　－18．暗灰茶色砂質土（17に組成は似るが、地山粒子は含まず、暗め）
　－19．淡黒茶色砂質土（地山粒子、小ブロック、淡黒茶色小ブロック粒子を含み、しまりは弱い）〔※17・19は同一埋土流れ込みか〕
　－20．暗灰茶色砂質土（18に組成同じ）〔※18・20は同一流れ込みか〕
Ⅵ－21．淡灰茶色砂質土（相当量の小礫・豆砂利、及び地山粒子を含み、しまりはやや弱い）
　Ⓐ　淡灰黄色砂土：〔地山〕（多量の豆砂利・小礫、大礫を含み、相当しまっている）
　Ⓑ　暗黄茶色砂土：〔地山〕（若干の同色粘質土を含む）

Fig.141　1SD065 実測図（1/40）

Ⅰ－1．淡茶黄色粘質土（土がしまっている、小さな礫を多く含む）
　－2．〃　（1より黄色土の粒子が多い、小さな礫を多く含む）
Ⅱ－3．淡茶灰色粘質土（淡黄色土〔地山①〕を少し含み、小さな礫を含む。また 10cm 大の石片を含む）
　－4．〃　（3より土がしまっており、小さな礫を含む）
　－5．〃　（小さな礫を含み、3、4より土質が細かい）
Ⅲ－6．淡茶灰色砂質土（小さな礫を含む）
　－7．暗茶灰色砂質土（淡黄色土〔地山①〕と淡黒色土のブロックを少し含み、小さな礫を含む）
Ⅳ－8．〃　（小さな礫を含む）
　－9．淡茶灰色砂質土（淡黄色土〔地山①〕と淡黒色土のブロックを少し含み、小さな礫を含む。また 15cm 大の石片を含む）
　－10．〃　（淡黄色土〔地山①〕を少し含み、小さな礫を含む）
Ⅴ－11．〃　（淡黄色土〔地山①〕のブロックを少し含み、小さな礫を含む）
　－12．〃　（明黄色土〔地山②〕のブロックを含み、礫を含む）

Fig.142　1SD070 実測図（1/40）



1．淡黒茶色砂質土（多量の淡黄茶色小ブロック・粒子を含み、ほど良くしまっている）
2．淡黒茶色砂質土（少量の淡黄茶色大ブロック、多量の同色小ブロック、粒子を含み、かなりしまっている）
3．淡黒茶色砂質土（多量の淡黄茶色粒子、少量の同色粒子を含み、Ⅰ・Ⅱよりややしまりは弱い）
4．淡黒茶色砂質土（3に似るが、やや砂質味を増し、暗め）
5．淡茶色砂質土（局部的に若干の砂土、均一に少量の小砂利を含み、適度にしまっている）
6．淡黒茶色砂質土（多量の淡黄茶色大・小ブロックを含み、適度なしまりがある）
7．明乳黄色砂土（上層に淡茶色土を含み、かなりのしまりがある）
8．明黒茶色砂質土（均一に少量の淡黄茶色微粒子を含み、適度にしまっており、もろさはない）
9．淡黄茶色砂質土（少量の淡黄茶色大ブロックを含み、適度なしまりがある）
10．淡黄茶色砂質土（9に似るが均一に淡黄茶色小ブロック、荒目砂を含み、やや暗め、程良くしまっている）
11．淡黄茶色砂質土（10にほぼ同じ、淡黄茶色小ブロック減、程良くしまっている）

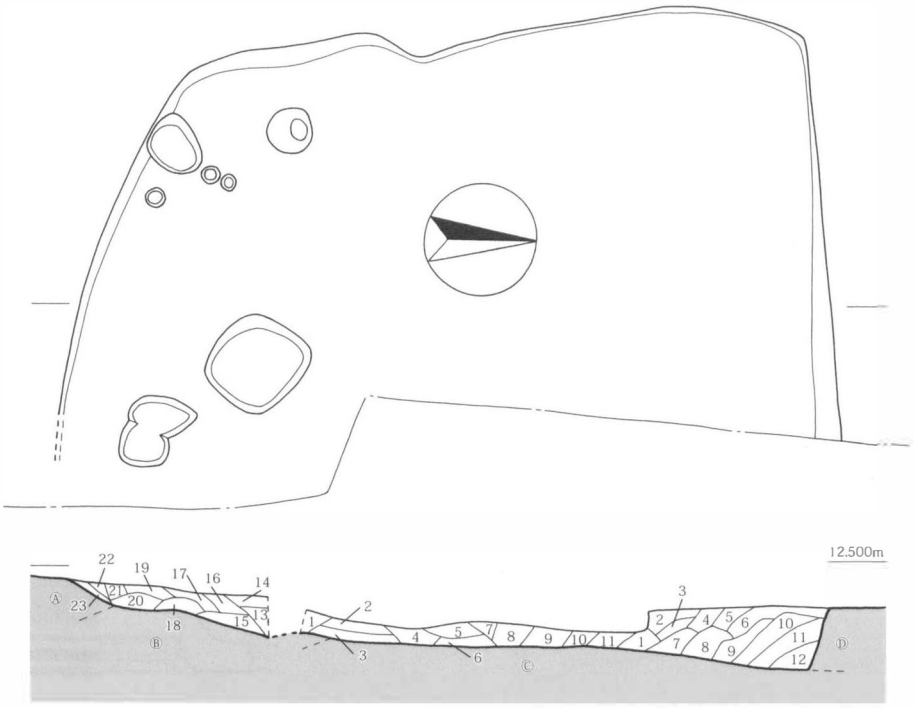
Fig.143　1SD080 実測図（1/40）

出土遺物には、土師器（皿）・青磁（碗）・染付け（碗・片）・陶器（水注・片）・瓦（丸瓦・片）がある。

1SD065（Fig.141、Pla.51）

調査区の南寄りに位置していて、幅 3.7 m深さ 1.5 mであった。断面形態は上半部は逆台形であるが、下半部は壁が垂直に立ち上がる。土層図を見る限り、数度の掘り返しが行われたようである。

出土遺物には、土師器（皿・甕・鉢・不明品）・瓦器（火舎）・染付（八角鉢・皿・碗）・白磁（八角鉢・碗）・陶器（甕・鉢・椀）・瓦（軒丸・軒平・丸・平・鬼瓦）がある。



1SX055
1．淡灰茶色砂質土（多量の淡黄茶色小ブロック・粒子を含み、若干の粘性を帯びる）
2．暗灰茶色砂質土（多量の淡灰茶色粒子を含み、適度の粘性を帯びる〔2＞1〕）
3．暗灰茶色砂質土（2に似るが、若干の暗灰茶色ブロックを含み、2よりやや暗め）
4．暗灰茶色砂質土（少量の豆砂利、微量の淡黄茶色小ブロックを含み、2・3よりやや粘性は劣る）
5．淡灰茶色砂質土（相当量の淡黄茶色中ブロック群を含み、粘性は弱いがよくしまっている）
6．暗灰茶色砂質土（少量の濃黒茶色小ブロックを含み、適度の粘性を有す）
7．淡灰茶色砂質土（少量の淡黄茶色小ブロック、多量の明濃黒茶色小ブロックを含み、粘性は6と同程度）
8．淡灰茶色砂質土（多量の淡灰青色土を左辺に含み、少々水っぽく、粘性は劣る）
9．淡灰茶色砂質土（多量の淡黄茶色小ブロック、少量の明赤橙色粒子を含み、粘性は弱いがかなりしまっている）
10．淡灰茶色砂質土（少量の濃黒茶色小ブロック、淡黄茶色小ブロックを含み、適度の粘性を帯び、しまっている）
11．淡灰茶色砂質土（10に似るが、淡黄茶色粒子を少々含み、やや明るい）

地山：Ⓐ 淡黄茶色粘質土
Ⓑ 淡黄茶色砂質土
Ⓒ 淡青灰色砂土
Ⓓ 淡灰茶色粘質土

1SX 060
1．淡灰茶色砂質土（多量の淡黄茶色粒子、少量の同色小ブロックを含み、かなりの粘性を帯びる）
2．淡灰茶色砂質土（1に似るが淡黒茶色砂質土を若干含み、かなりの粘性を帯びる）
3．淡灰茶色砂質土（1・2に似るが淡黄茶色小ブロックを含み、砂質味は減じる、粘性を帯び、しまっている）
4．暗灰茶色砂質土（均一、少量の淡黄茶色粒子、一部、同色小ブロックを含み、砂質味を増す）
5．淡灰茶色砂質土（下層に多量の淡黄茶色小ブロック群を含み、全体的にかなりしまっている）
6．暗灰茶色砂質土（均一、少量の暗茶色小ブロックを含み、しまってはいるが、粘性は小）
7．暗灰茶色砂質土（均一、多量の淡黄茶色粒子、暗黒茶色粒子を含み、砂質味を増し、粘性は大）
8．暗灰茶色砂質土（7に似るが淡黄茶色粒子が減じ、多少粘性を増す）
9．淡灰茶色砂質土（1～8より若干明るさを増し、下層に淡黄茶色小ブロックを含む、若干の粘性を有し、
10．暗灰茶色砂質土（多量の淡黄茶色粒子、下層に同色小ブロック群を含み、程よい粘性を帯び、下層はよく）
11．暗灰茶色砂質土（10に似るが全体的に砂質味を増す）
12．淡黄茶色粘質土（ごく僅かに淡灰茶色小ブロックを含み、粘性を帯びるが、しまり具合は弱い）
13．暗灰茶色砂質土（ごく少量の淡黄茶色粒子、淡灰色粒子を含み、砂質味が強い）
14．暗灰茶色砂質土（13に似るが、若干の淡黄茶色小ブロックを含み、更に砂質度を増す）
15．暗灰茶色砂質土（14に同じ、多少暗め）
16．暗灰茶色砂質土（均一・少量の淡黄茶色小ブロックを含み、粘性は13と同程度だが、かなりしまっている）
17．淡灰茶色砂質土（多量の淡黄茶色粒子、若干の同色小ブロックを含み、かなり砂質味が強い割には、しまり）
19．淡灰茶色砂質土（微量の淡黄茶色・淡橙茶色・淡茶色粒子を含み、かなり稠密、かつしまっている）
20．淡灰茶色砂質土（18に似るが、少量の炭片を含み、更にしまりが強い）
18．淡灰茶色砂質土（15に似るが、少量の炭片を含み、粘性も同程度）
21．淡灰茶色砂質土（20に似るが、淡緑灰色粒子を若干含み、しまりは20と同程度）
22．淡灰茶色砂質土（21に似るが、若干淡黄茶色粒子を多く含み、淡緑灰色粒子は含まず、しまり具合は
23．淡灰黄色砂質土（地山小ブロック・粒子を多く含み、かなりしまっている）

Fig.144　1SX055・1SX060 実測図（1/40）

1SD070（Fig.142、Pla.51・53）

調査区の南寄りに位置していて、幅 4.0 m深さ 1.2 mであった。断面形態はレンズ状で土層の堆積状況もまたレンズ状堆積となっている。

出土遺物には、土師器（皿・盤・羽釜・不明品）・瓦器（片）・染付（椀・鉢・片）・青磁（碗）・陶器（椀・片）・瓦（平・丸）・石製品（石塔）がある。

1SD080（Fig.143、Pla.51・54）

調査区の南寄りに位置していて、南側を撹乱によって破壊されているため、幅は不明で深さは 0.4 mであった。土層の堆積状況はレンズ状堆積となっている。

出土遺物には、土師器（皿・土鍋）・瓦（丸）がある。

不明遺構

ここでは掘込地業の痕跡ではないかと思われる遺構と、性格のわからない小穴等を報告する。以下、遺構別に報告する。

1SX055・1SX060（Fig.144）

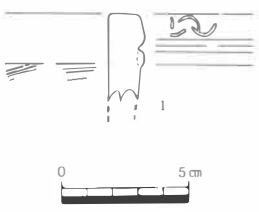


Fig.145　1SB015 出土遺物実測図（1/3）

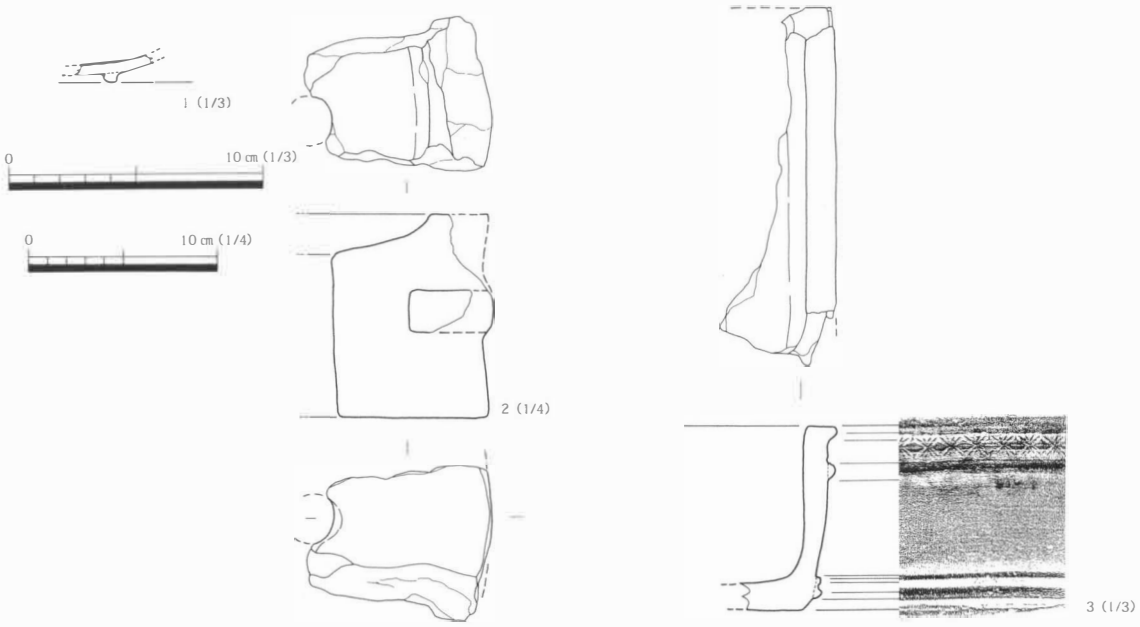


Fig.146　1SD005 出土遺物実測図（1/3・1/4）

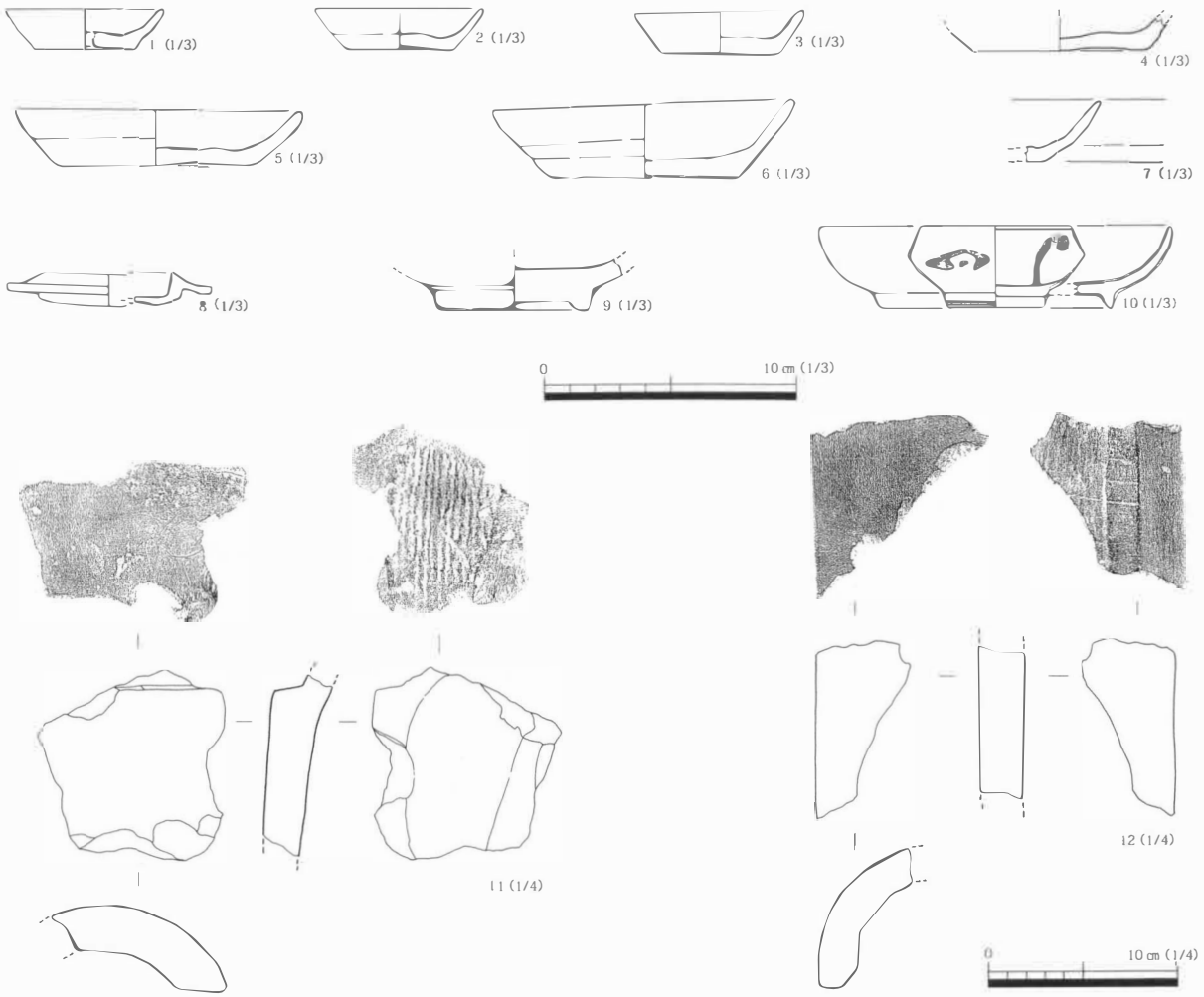


Fig.147　1SD050 出土遺物実測図（1/3・1/4）

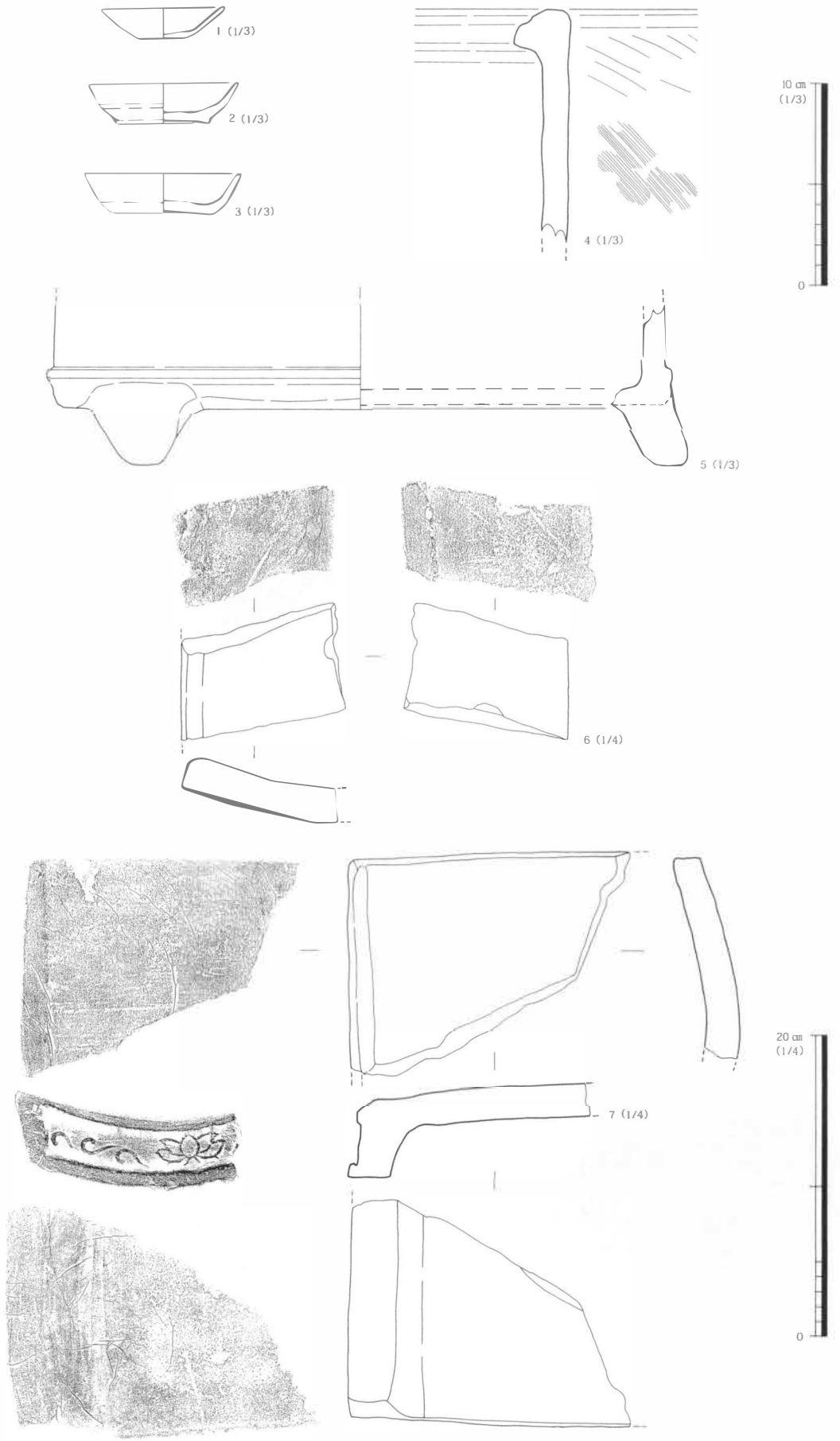


Fig.148　1SD065 半裁時出土遺物実測図（1/3・1/4）

Fig.149　1SD065 半裁時及び I 層出土遺物実測図（1/3・1/4）

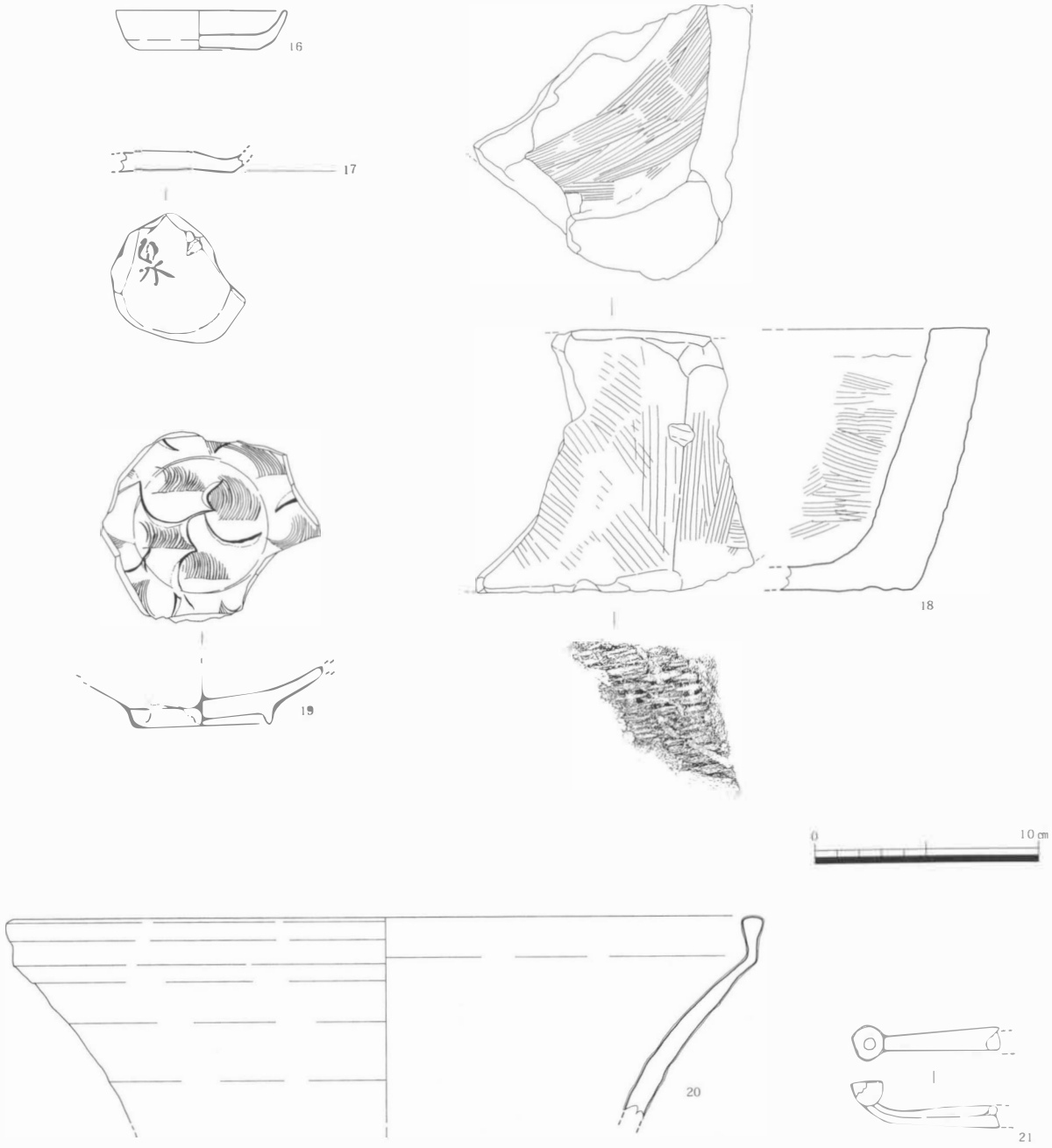


Fig.150　1SD065 III層出土遺物実測図①（1/3）

調査区の東よりに位置していて、本来ひとつの遺構である可能性が高い。底面は平坦となっている。南北 3.9 m深さ 0.3 mであるが、東西方向は半分以上が調査区外であったため規模は不明である。

出土遺物には、土師器 (皿) ・瓦 (平瓦) がある。

1SX018（Fig.184）

調査区の北寄りに位置していて、南北 0.4 m東西 0.3 m深さ 0.2 mを測る。柱穴になる可能性も高いといえる。

出土遺物には、土師器 (椀・片）がある。

1SX109（Fig.184）

調査区の中央附近に位置していて、極めて不定形であるため規模は不明である。

出土遺物には、白磁 (片）・青磁（壷）・瓦（片・赤瓦片）・石製品（石臼・不明品）がある。

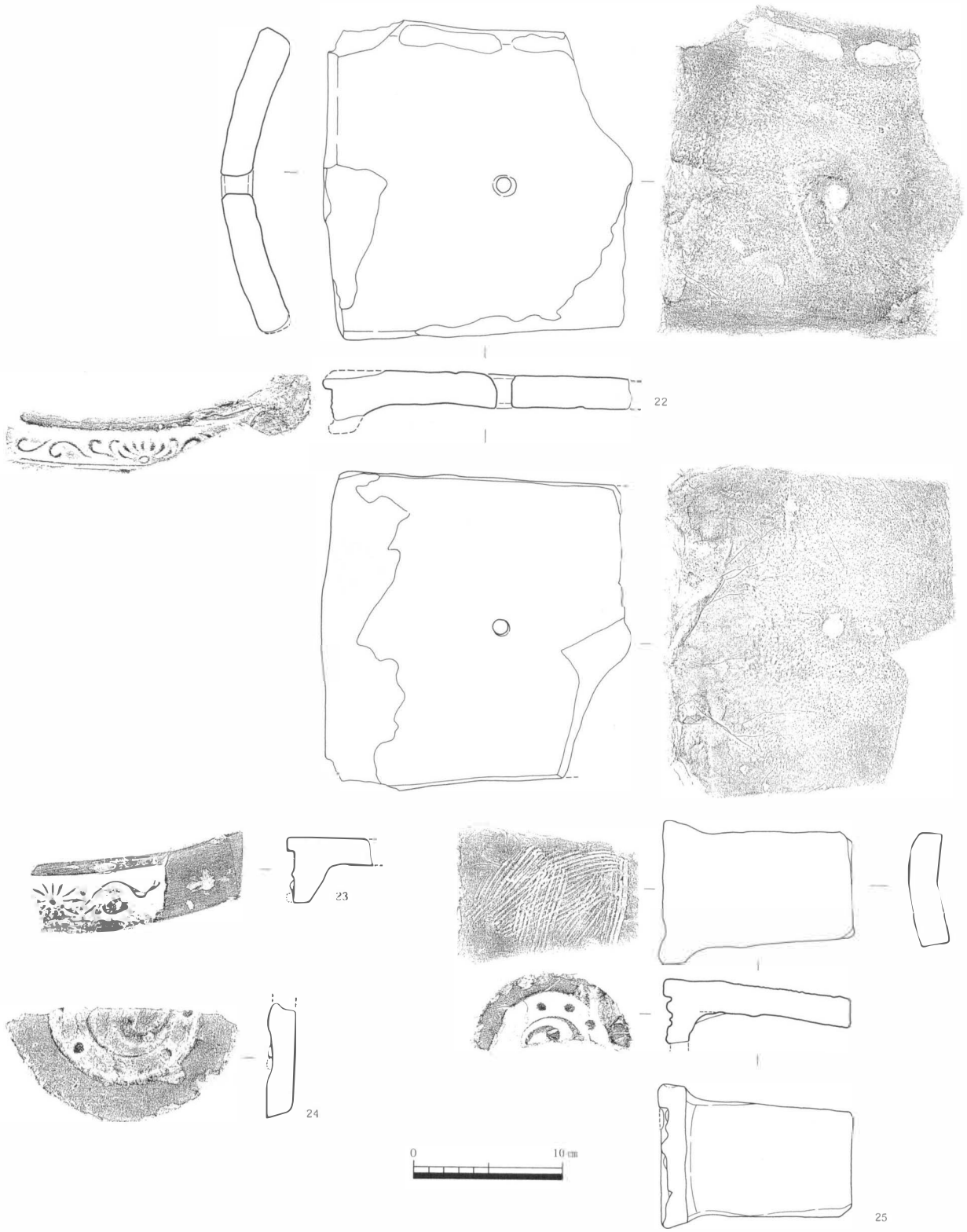


Fig.151　1SD065 III層出土遺物実測図②（1/4）

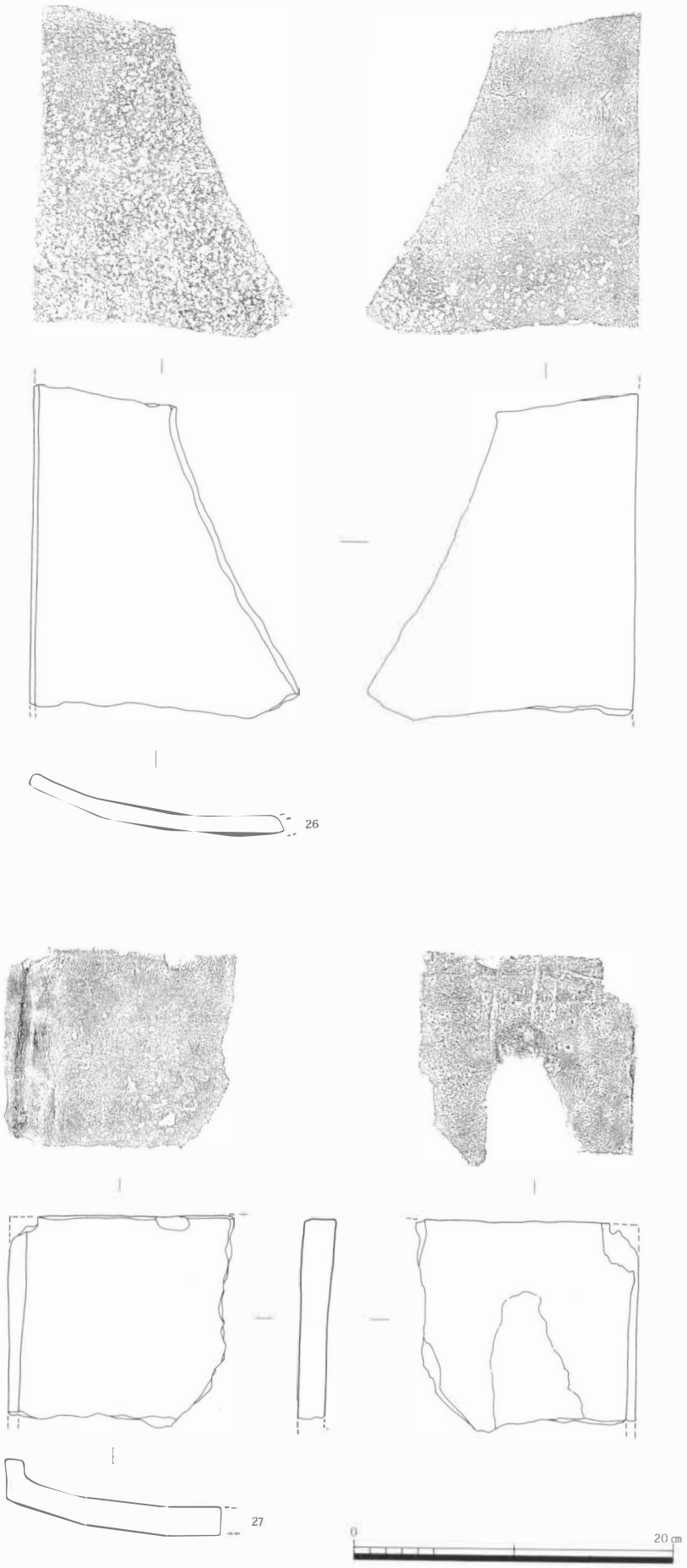


Fig.152　1SD065 III層出土遺物実測図③（1/4）

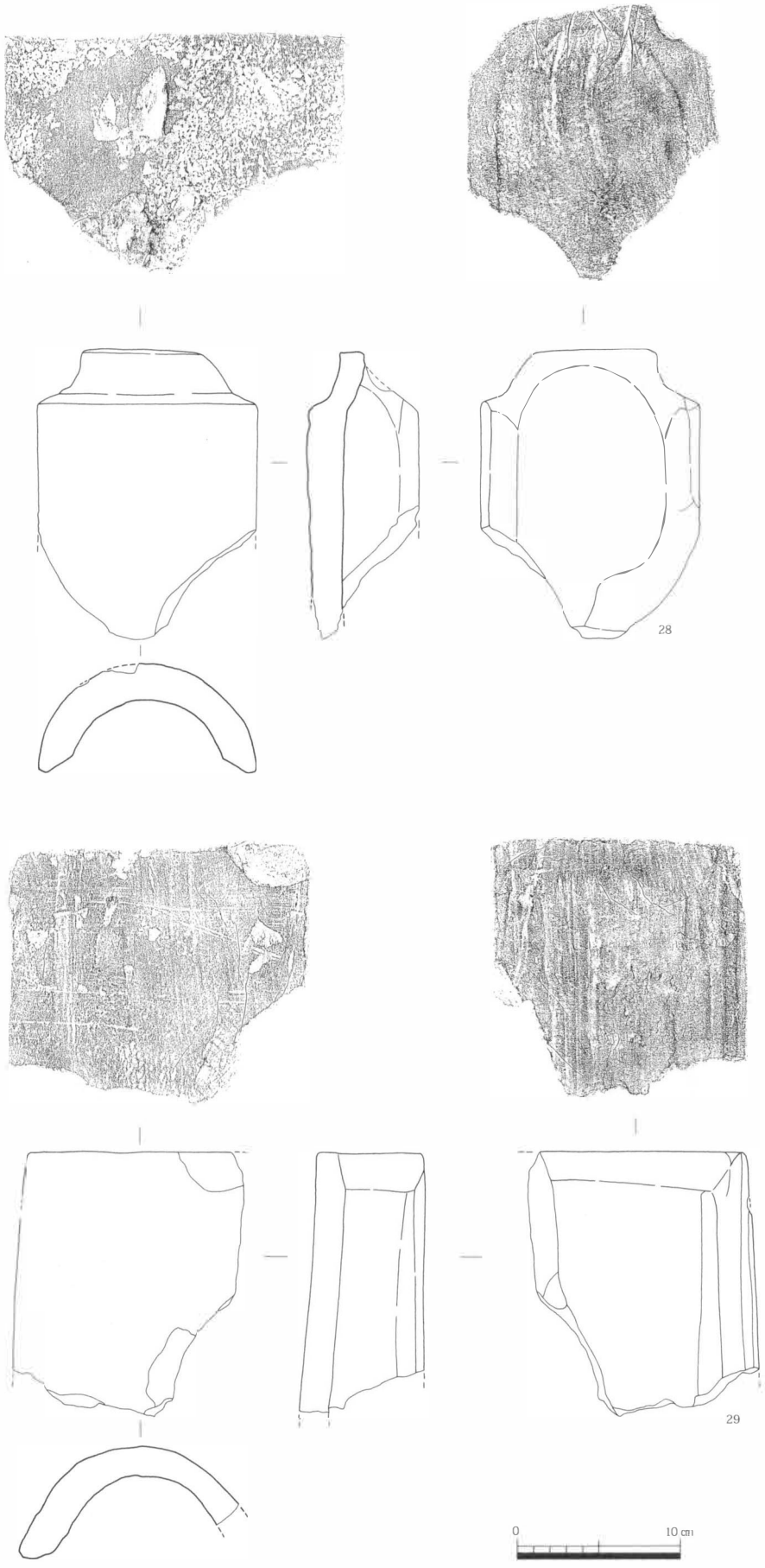


Fig.153　1SD065 III層出土遺物実測図④（1/4）

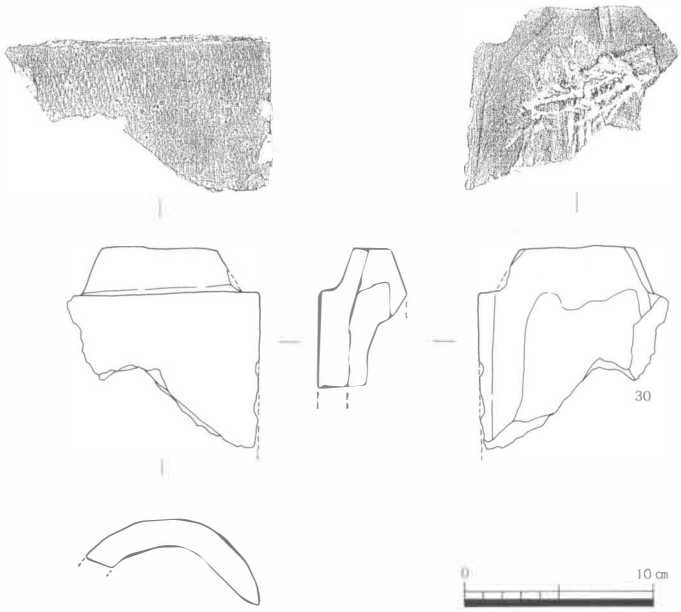


Fig.154　1SD065 Ⅲ層出土遺物実測図⑤（1/4）

1SX126（Fig.184）

調査区の中央附近に位置していて、南北 0.6 m 東西 0.5 m 深さ 0.4 m である。柱穴になりそうであるが、建物として認識できない。

出土遺物には、土師器 (皿・片）がある。

1SX174（Fig.184）

調査区の中央附近に位置していて、極めて不定形であるため規模は不明である。

出土遺物には、土師器 (坏・皿・鉢・片）・青磁（片）がある。

1SX176（Fig.184）

調査区の中央附近に位置していて、極めて不定形であるため規模は不明である。

出土遺物には、土師器 (坏・皿）・白磁（片）・青磁（片）・陶器（甕）・石製品（石鍋）がある。

出土遺物

今回の調査では、総計でパンコンテナー約 50 箱の遺物が出土した。土師器・須恵器等に加えて、瓦の出土量が多かったのが注目される。なお、本文中では特徴的な部分や遺物観察表では表現できない内容を中心に記載している。したがって、本文中では触れない遺物もある。したがって、遺物個々についての詳細は遺物観察表を参照されたい。以下、出土遺構毎に報告する。

1SB015 出土遺物（Fig.145、Pla.56）

1 は土師器の火舎である。口縁部外面に半裁竹管文が押印されている。

1SD005 出土遺物（Fig.146、Pla.56）

1 と 2 は半裁時に出土をみた。1 は瓦器の椀である。外面は篦ナデを施し、底部に小さな高台が貼り付く。2 は石臼で、茶臼であろう。細片であるため、口径等は復元できない。3 はⅤ層からの出土で、瓦器の火舎である。平面形態が方形を呈するものである。口縁部外面に押印が認められる。

1SD050 出土遺物（Fig.147、Pla.56）

1 ～ 7 は土師器で、すべて皿である。1 ～ 3 は小皿といえるものである。4 ～ 7 は坏かも知れない。8 は白磁の蓋である。底面は露胎となっている。9 は青磁碗の底部である。竜泉窯系青磁か。10 は染付の皿である。内外面に施文されている。11 と 12 は丸瓦である。11 は玉縁部分が一部残存している。

1SD065 出土遺物（Fig.148 ～ 160、Pla.56 ～ 59）

1 ～ 13 は半裁時出土である。1 ～ 4 は土師器で、1 ～ 3 は糸切底の皿である。いずれも小皿と呼べ

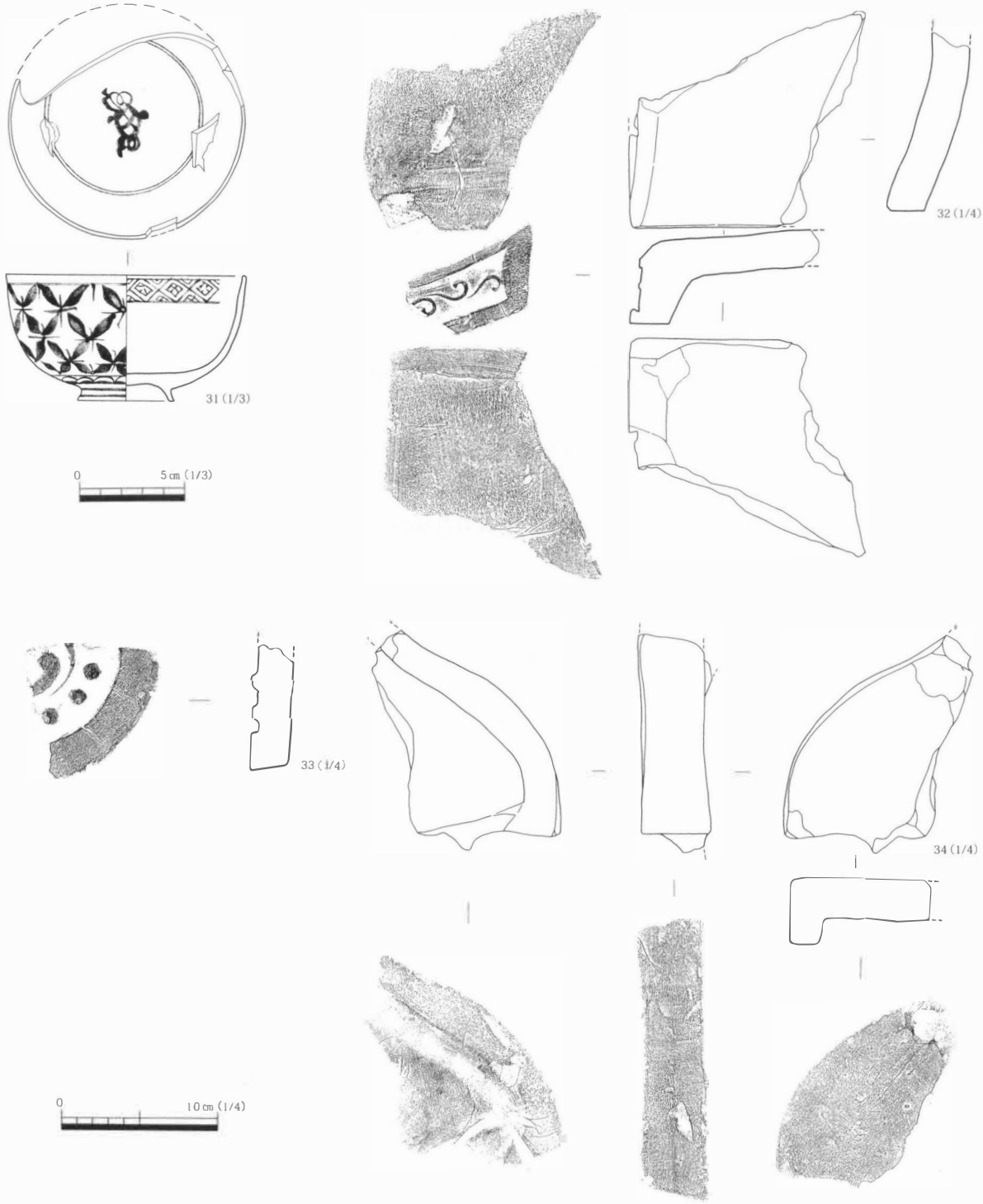


Fig.155　1SD065 Ⅳ層出土遺物実測図①（1/3・1/4）

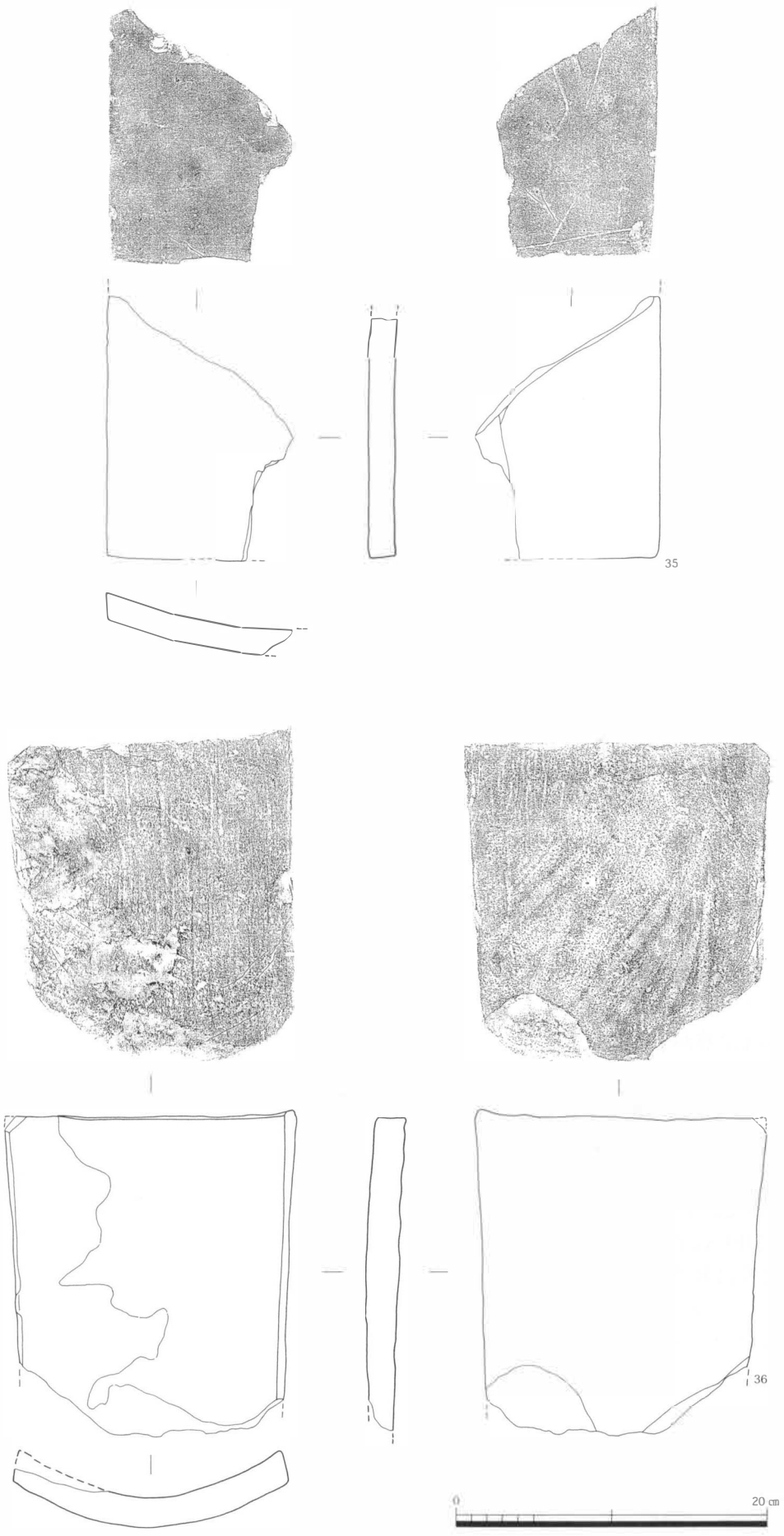


Fig.156　1SD065 Ⅳ層出土遺物実測図②（1/4）

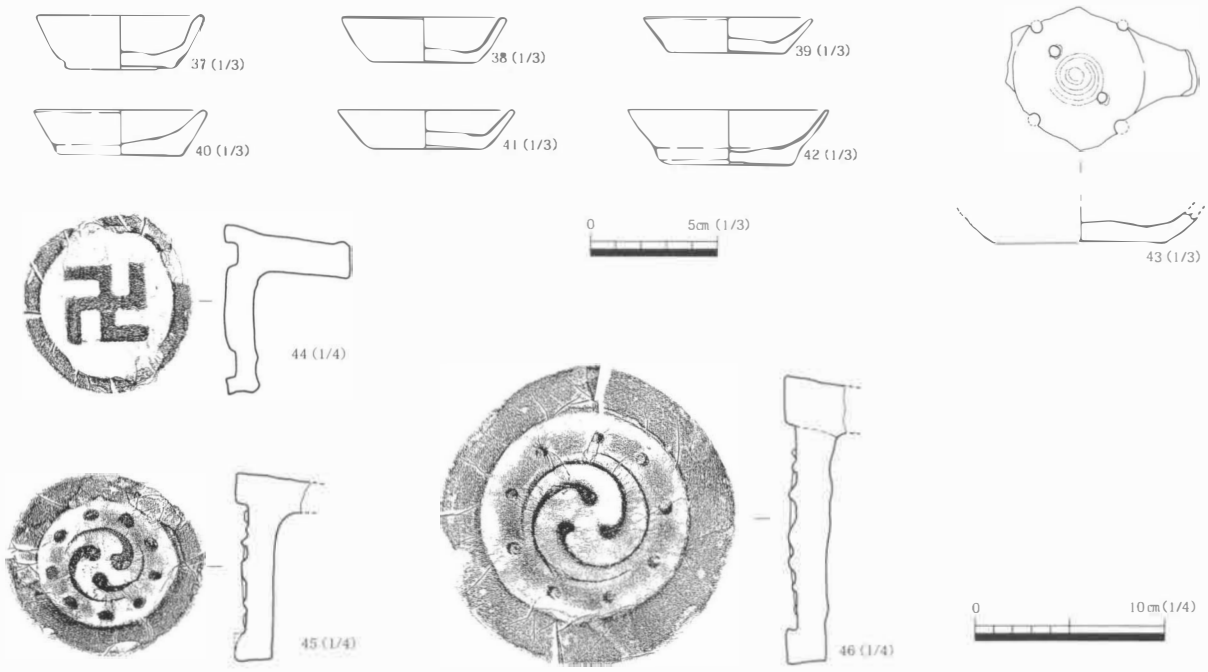


Fig.157　1SD065 Ⅴ層出土遺物実測図（1/3・1/4）

るものであるが、1 は非常に器壁が薄いのが特徴的である。4 は甕の口縁部細片である。口縁部の内面は凸帯状に肥厚する。5 は瓦器の火舎である。底部の資料で、外側にやや踏ん張る形状の足が貼り付く。6 ～ 13 は瓦である。6 は平瓦である。全面を篦削りしている。7 は軒平瓦で、瓦当面が 1/3 ほど残存している。この瓦も全面を篦削りしている。8 ～ 10 軒丸瓦でいずれも瓦当面の文様は鋭敏さに欠ける。8 は瓦当面のみの資料である。丸瓦の部分は完全に失われている。9 は瓦当面が 2/3 ほど残存している資料である。10 は瓦当面の大半が残存したものであるが、丸瓦と接続する部分の瓦当面は完全に失われている。11 は丸瓦である。凸面側に叩きが認められる。12 は鬼瓦と思われる。前面と側面に円文が配置される。

14 と 15 は Ⅰ 層からの出土である。いずれも磁器の染付で、14 は八角鉢である。内外面ともに美しく施文されている。15 は皿である。高台は削り出し高台か。

16 ～ 30 は Ⅲ 層からの出土である。16 と 17 は土師器の皿である。16 は小皿と呼べるもので、17 は外底面に「泉」とみられる墨書が認められる。18 は陶器であるが、器種は不明である。内面には刷毛目が施され、外底面に藁とみられる圧痕がある。19 は白磁の碗である。内面に櫛目文が施されている。20 は白磁の鉢である。口縁部は屈曲して垂直に立ち上がる。21 は煙管の吸い口である。22 ～ 30 は瓦である。22 と 23 は軒平瓦である。22 は瓦当面の高さが低い点が印象的である。また、平瓦部の中央に焼成前穿孔が 1 ヶ所認められる。24 と 25 は軒丸瓦である。24 は瓦当面の下半部のみの資料である。25 は小型の軒丸瓦で、道具瓦かも知れない。瓦当面の下部 2/3 を失っている。26 と 27 は平瓦である。26 は赤瓦と呼ばれるもので、水田焼か。27 は側面が上方に屈曲して立ち上がる珍しいものである。道具瓦の可能性もある。28 ～ 30 は丸瓦である。28 は玉縁部が完存している。29 は凹面側に布目が残っている。30 はやや小ぶりのもので、28 と同様に玉縁部が完存している。また、29 と同様に凹面側に布目が残っている。

31 ～ 36 は Ⅳ 層からの出土である。31 は磁器の染付碗である。外面の全体と、内面の口縁部及び内底見込みに施文されている。32 ～ 36 は瓦である。32 は軒平瓦である。瓦当面の上部端を面取りしている。33 は軒丸瓦である。瓦当面の 1/4 ほどが残存している。34 は鬼瓦である。35 と 36 は平瓦である。36 は凹面側に板目とみられる圧痕がある。

37 ～ 46 は Ⅴ 層からの出土である。37 ～ 43 は土師器である。37 ～ 42 は糸切底の皿で、いずれも

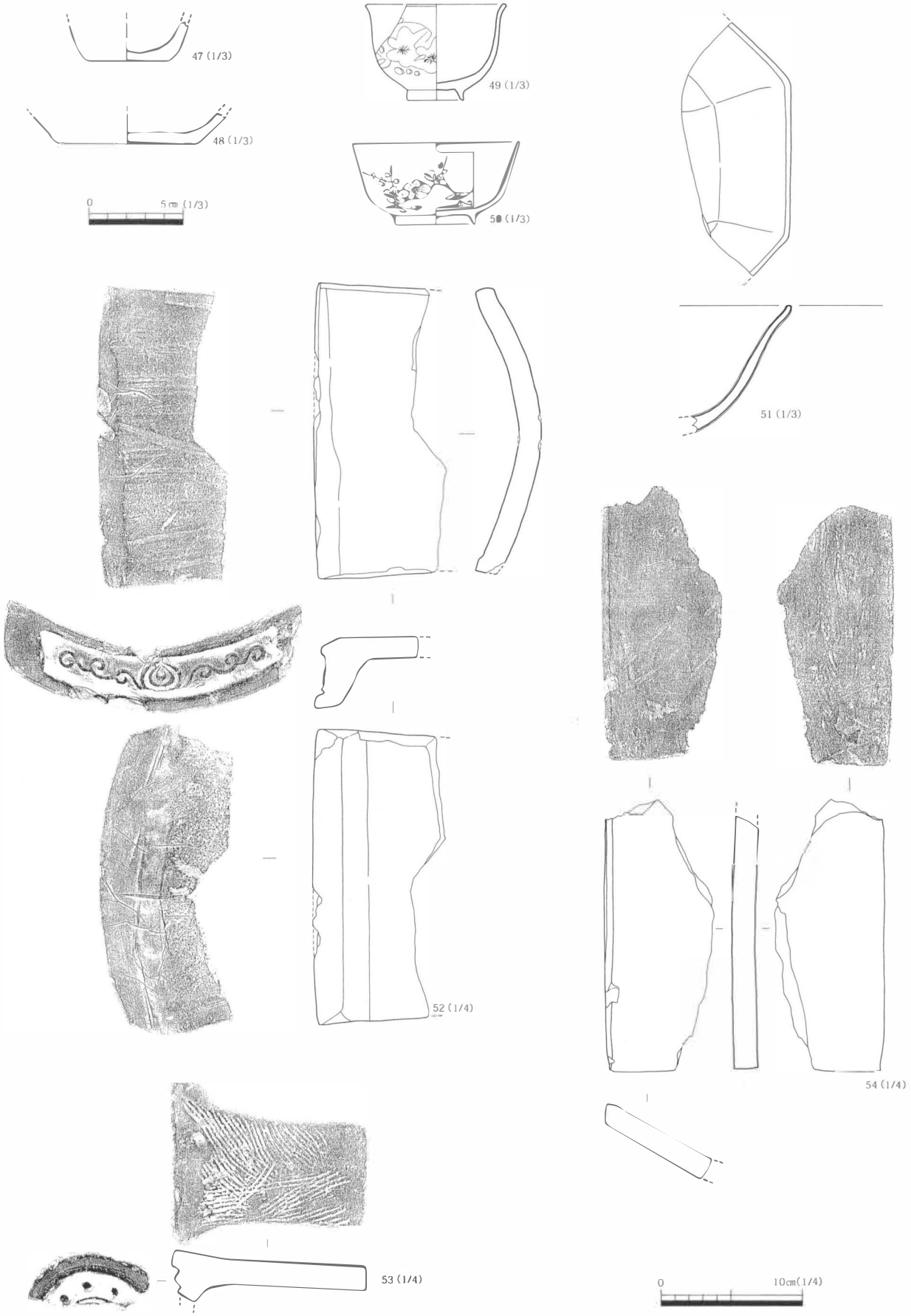


Fig.158　1SD065 VI層出土遺物実測図①（1/3・1/4）

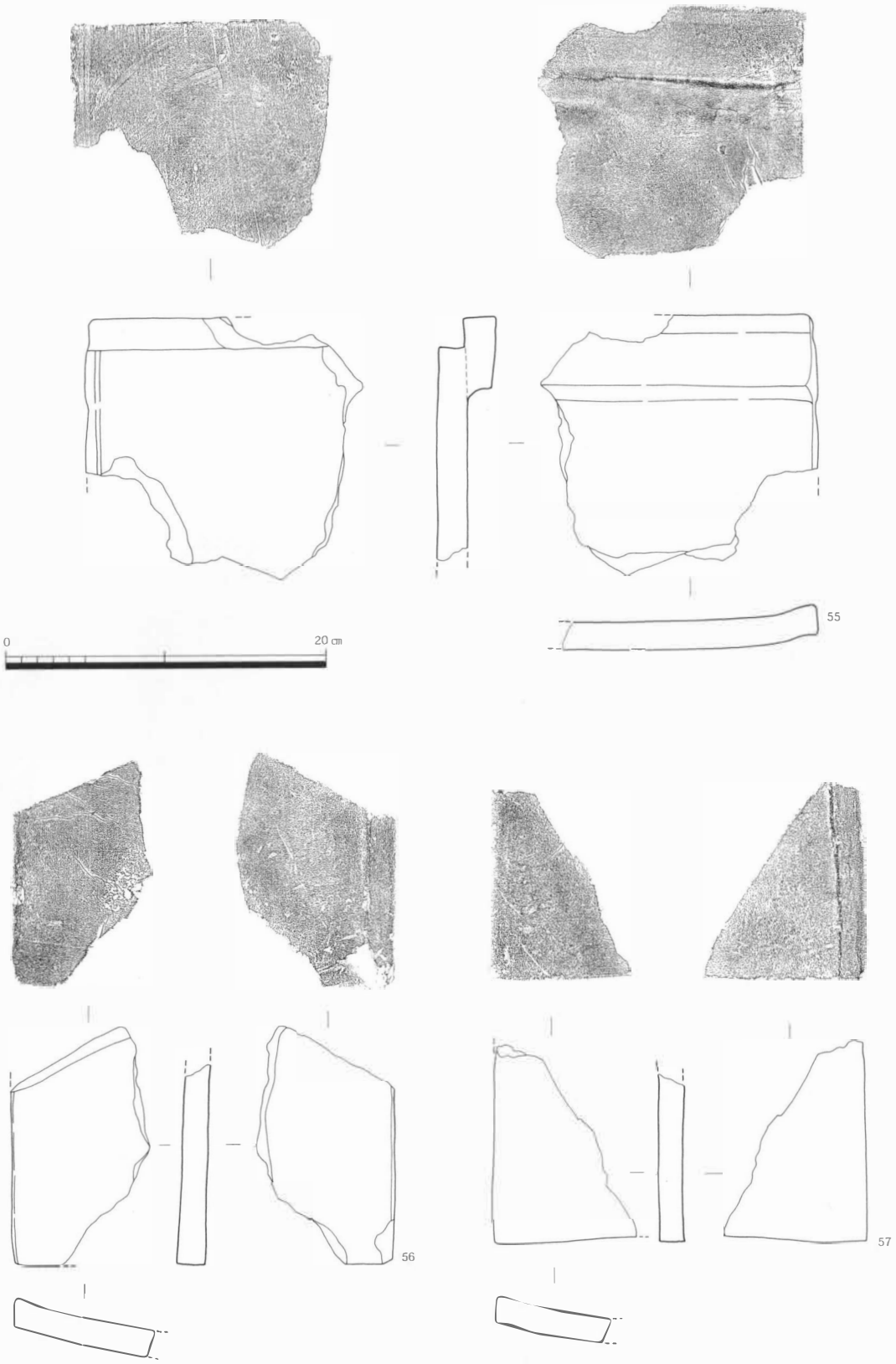


Fig.159　1SD065 VI層出土遺物実測図②（1/4）

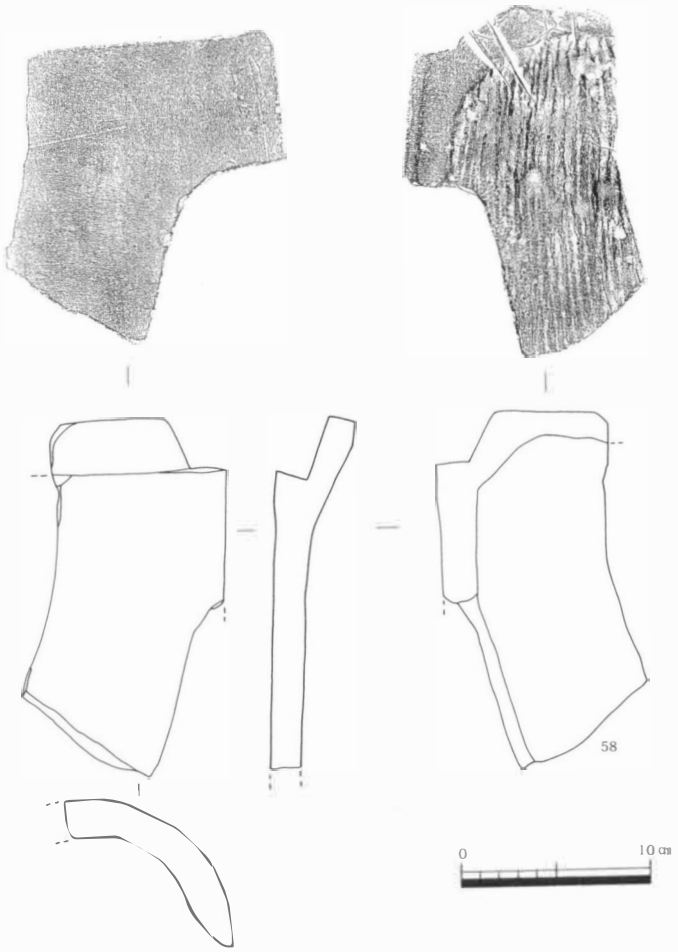


Fig.160　1SD065 VI層出土遺物実測図③（1/4）

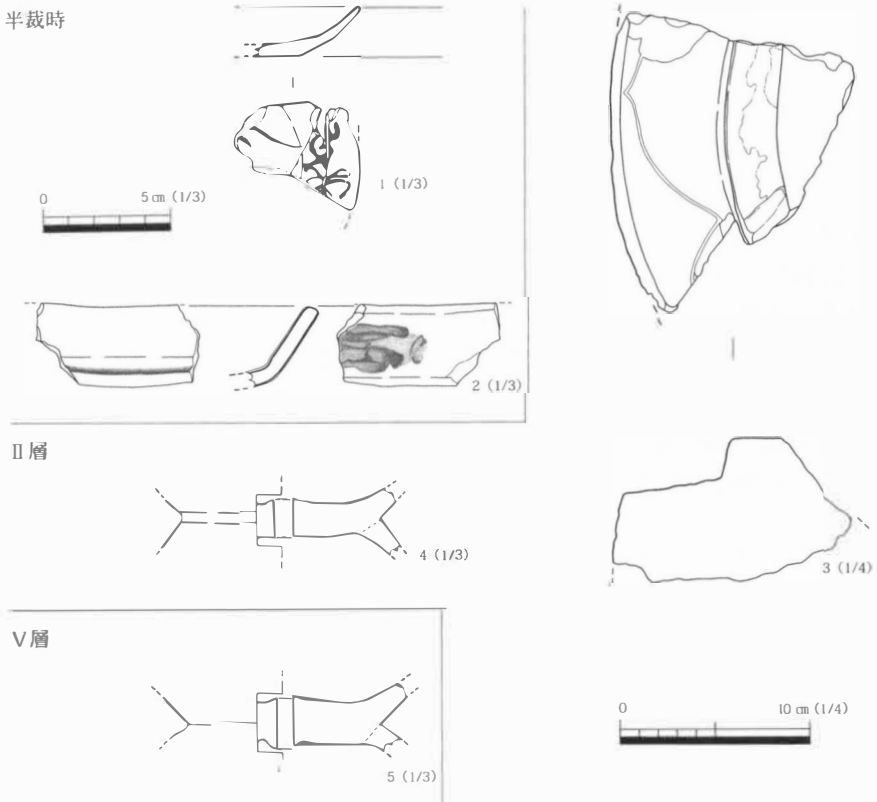


Fig.161　1SD070 出土遺物実測図（1/3・1/4）

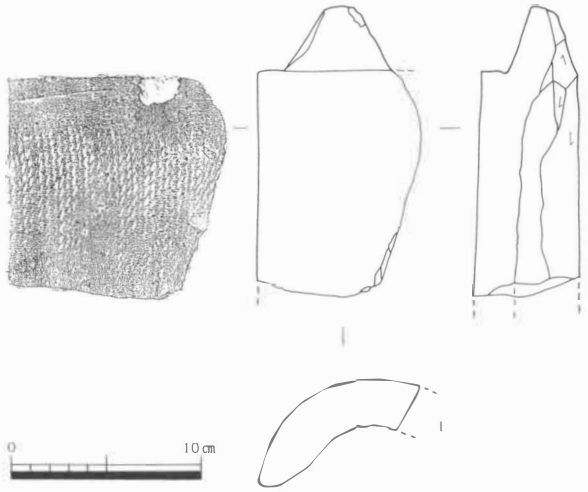


Fig162　1SD080 出土遺物実測図（1/4）

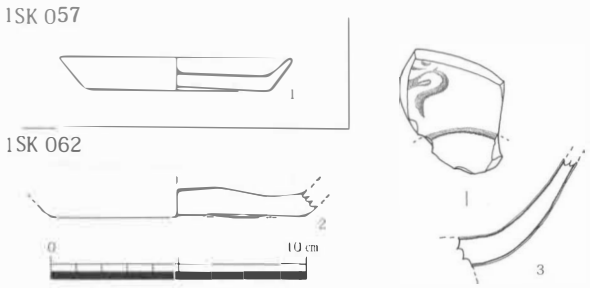


Fig163　1SK057・1SK062 出土遺物実測図（1/3）

小皿と呼べるものである。43 は皿であると思われるが、底部に 6 ヶ所の焼成前穿孔が認められ、用途は不明である。44 ～ 46 は瓦である。いずれも軒丸瓦で、44 は丸瓦部分が非常に小さい。道具瓦の可能性もある。45 と 46 は瓦当面のみの資料である。

47 ～ 58 はⅥ層からの出土である。47 と 48 は土師器である。47 は皿としたが、もっと深さのある容器となる可能性が高い。48 は皿としたが、坏かもしれない。いずれも糸切底である。49 と 50 は染付の碗である。51 は白磁の八角鉢である。52 ～ 58 は瓦である。52 は軒平瓦で、Ⅳ層出土の 32 と同様に、瓦当面の上部端を面取りしている。53 は軒丸瓦としたが、道具瓦かも知れない。瓦当面は上部の 1/3 ほどが残存している。54 ～ 57 は平瓦である。55 は短辺側に玉縁状の粘土の貼り付けが行なわれる。道具瓦かも知れない。58 は丸瓦で、玉縁部分が完存している。

1SD070 出土遺物（Fig.161、Pla.59）

1 と 2 は半裁時の出土である。1 は土師器の坏である。外面に墨書が認められるが判読できない。2 は染付の皿である。

3 と 4 はⅡ層からの出土である。3 は土師器の不明品で、底部の中央に焼成前穿孔が 1 ヶ所認められる。燭台であろうか。4 は石塔の一部であろうが、どの部分にあたるかは不明である。

5 はⅤ層からの出土である。土師器の不明品で、3 と同様のものである。底部の中央に焼成前穿孔が 1 ヶ所認められる。

1SD080 出土遺物（Fig.162、Pla.59）

1 は丸瓦である。玉縁部分が完存する。凸面には叩きの痕跡が残り、内面側は荒い調整である。

1SK057 出土遺物（Fig.163、Pla.59）

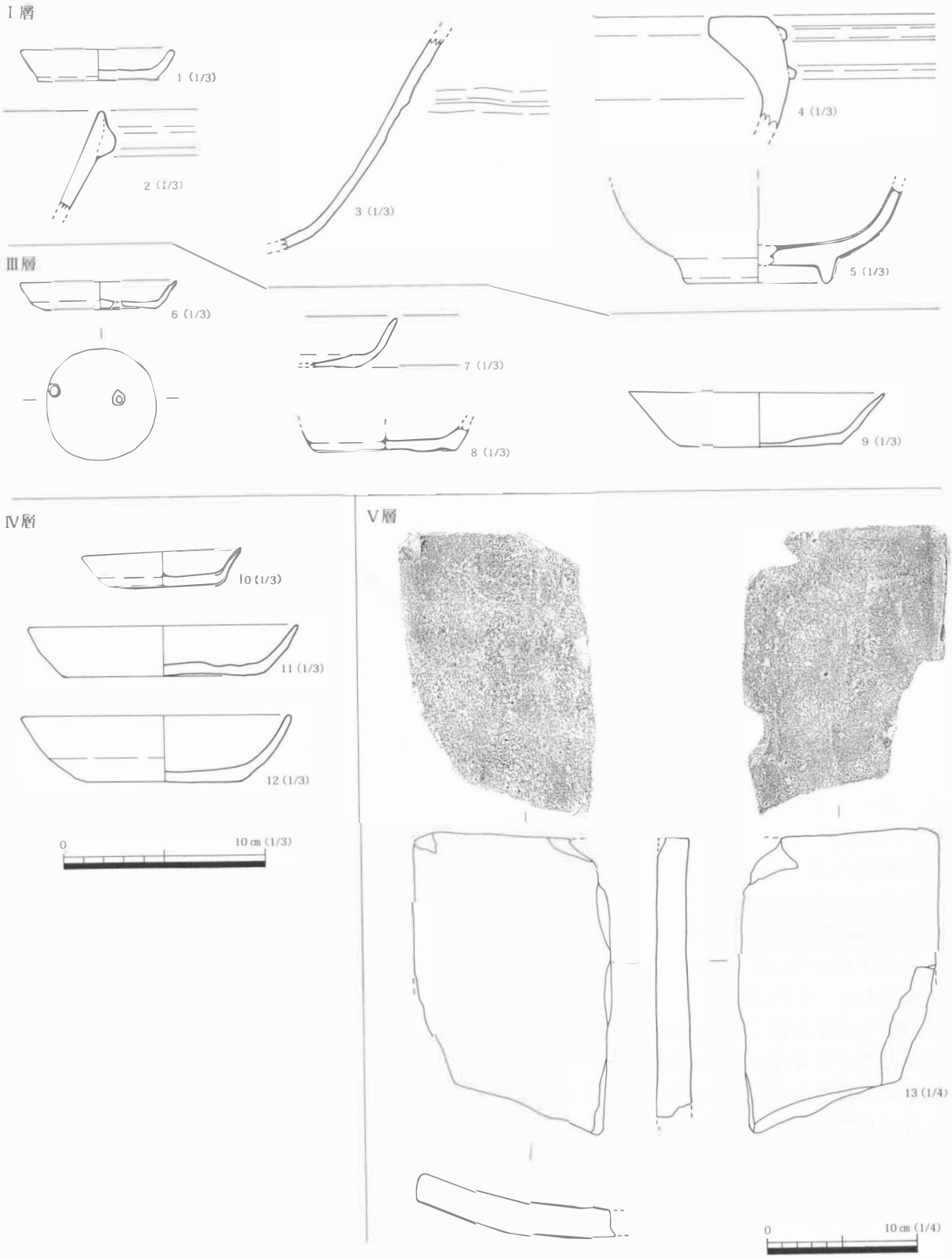


Fig.164　1SK075 出土遺物実測図（1/3・1/4）

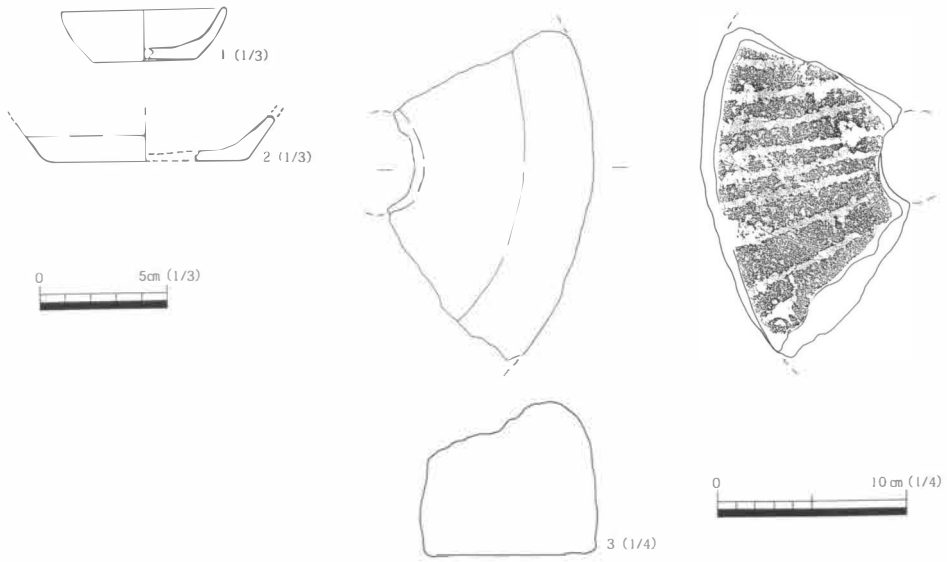


Fig.165　1SK100 出土遺物実測図（1/3・1/4）

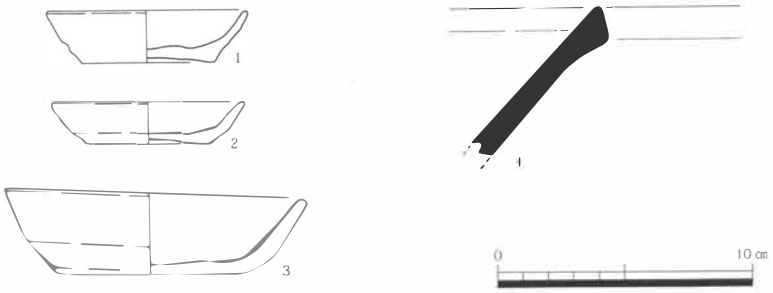


Fig.166　1SK188 出土遺物実測図（1/3）

1 は土師器の皿である。小皿と呼べるもので、体部の立ち上がりは極めて小さい。底部は糸切痕が残る。

1SK062 出土遺物（Fig.163、Pla.59）

2 は土師器の皿としたが、坏かも知れない。低部には糸切痕が残る。3 は青磁の碗である。内面にのみ施文されている。

1SK075 出土遺物（Fig.164、Pla.60）

1 ～ 5 は I 層からの出土である。1 ～ 3 は土師器である。1 は皿で、小皿と呼べるものである。2 と 3 は土鍋である。2 は口縁部で、玉縁状となっている。3 は体部から底部にかけての資料で、体部に小さな凸帯が 1 条貼り付く。4 は瓦器の火舎である。口縁部は肥厚して上面を平坦に仕上げる。口縁部の外面には凸帯が 2 条巡り、その間に押印による文様が施される。5 は青磁の碗である。内外面ともに施釉されるが、畳付から高台見込みにかけては露胎である。

6 ～ 9 は Ⅲ 層からの出土で、すべて土師器である。6 は皿で、小皿と呼べるものであるが、底部に焼成前穿孔が 2 ヶ所認められる。用途は不明である。7 ～ 9 は坏である。7 は回転篦切りの後に篦削りを施している。8 と 9 は糸切り痕が残る。

10 ～ 12 は Ⅳ 層からの出土で、すべて土師器である。10 は皿で、小皿と呼べるものである。底部には糸切り痕が残る。11 と 12 は坏である。

13 は Ⅴ 層出土の瓦である。平瓦で、1/4 程度残存していて、隅部が 1 ヶ所残る。凹凸面ともに調整は不明であるが、側面は面取りを行っている。

1SK100 出土遺物（Fig.165、Pla.60）

1 と 2 は土師器の皿である。1 は小皿と呼べるもので、2 は坏かも知れない。3 は石臼であるが、口

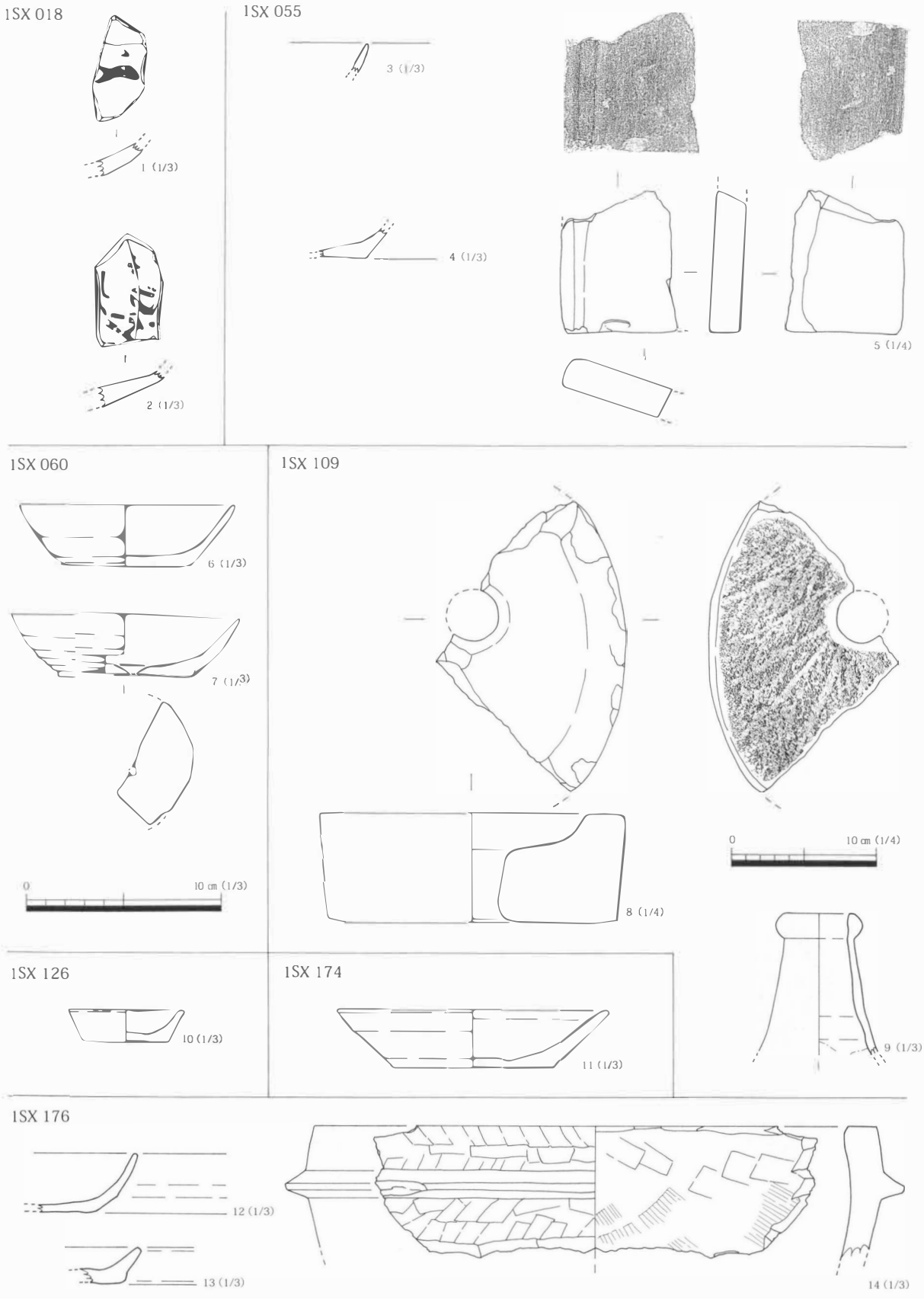


Fig.167　不明遺構出土遺物実測図（1/3・1/4）

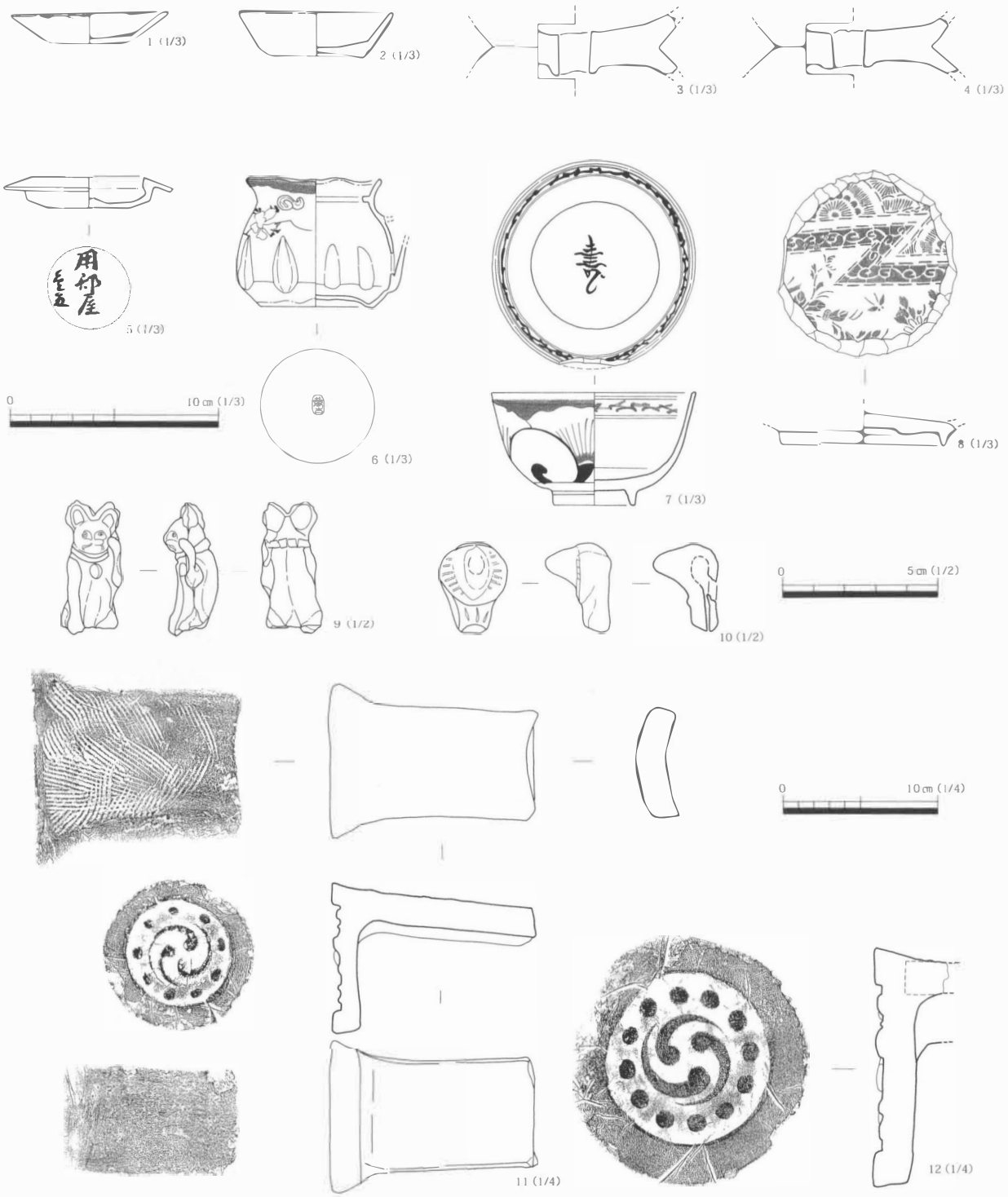


Fig.168　撹乱出土遺物実測図①（1/4・1/3・1/2）

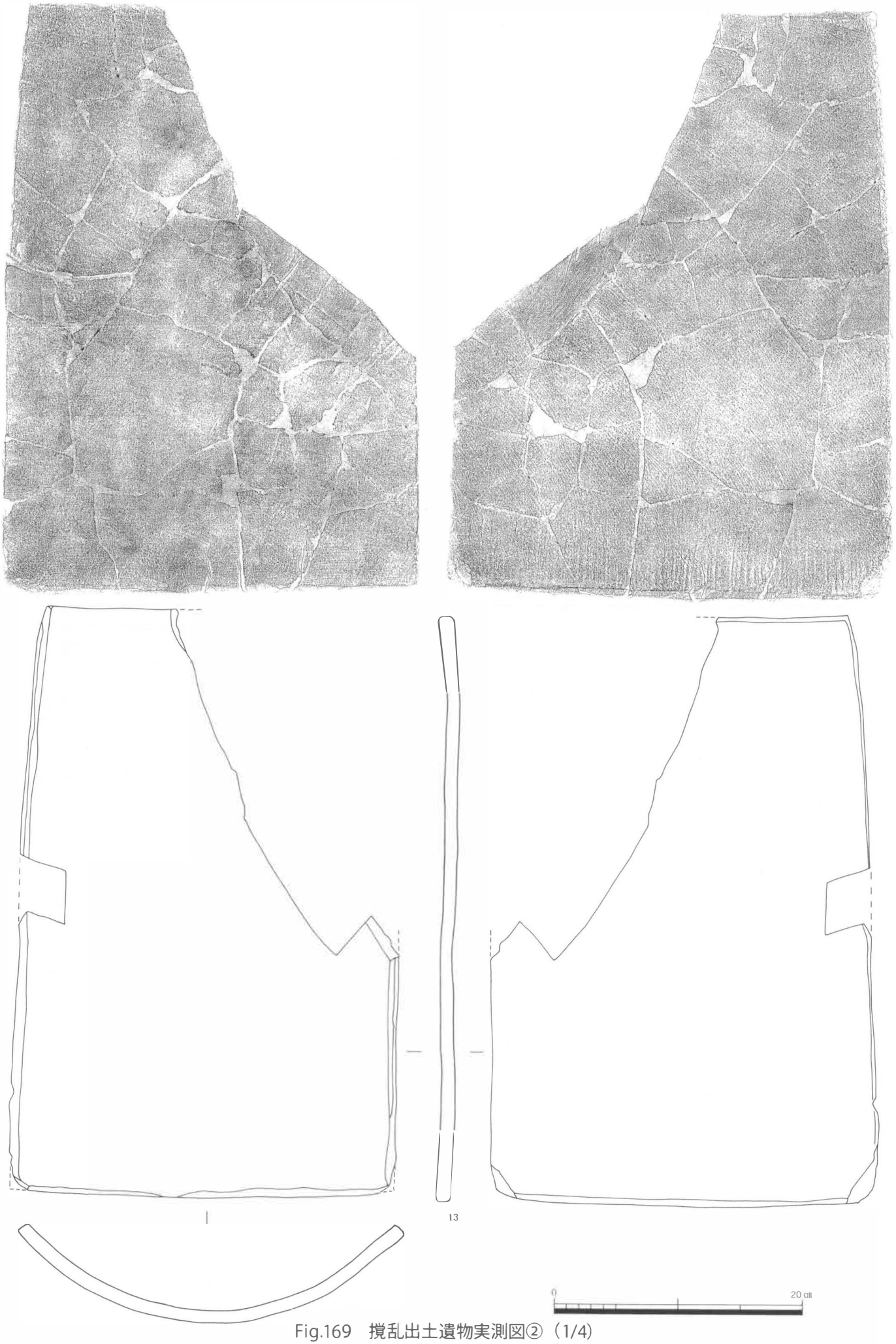


Fig.169　撹乱出土遺物実測図②（1/4）

Fig	No	遺構番号	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	口縁部	体外部	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	備考	RNo.
146	1	ISD 005		土師	椀				口縁部細片		ナデ	不明	不明	横ナデ	外 明灰白色 内 灰色	密	微砂粒	やや良			1
146	3	ISD 005	V	瓦器	火舎				口縁部細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	明灰色	密	白色砂粒・雲母	やや良	直立	平面形は方形 口縁部下外面にスタンプ文有	[illegible]
145	1	ISB 015	d	土師	火舎				口縁部細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			暗茶褐色	密	雲母	良好	内湾	口縁部外面に半裁竹管文有	1
167	2	ISX 018		土師	椀?				体部細片		横ナデ	横ナデ			淡黄灰色	密	白色砂粒・雲母	不良		R-2と同一個体	1
167	1	ISX 018		土師	椀?				体部細片		横ナデ	ナデ			橙黄灰色	密	白色砂粒・雲母	不良		R-1と同一個体	2
147	5	ISD 050		土師	坏	11.4	7.8	2.3	ほぼ完形	横ナデ	横ナデ	不明	横ナデ ナデ	回転糸切	明黄白色	やや密	角閃石・雲母	やや不良	僅かに内湾		1
147	6	ISD 050		土師	坏	11.9	7.4	2.9	口縁部1/2欠損	不明	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明黄赤茶色	密	角閃石・雲母・白色砂粒	やや不良	外方に開く		2
147	4	ISD 050		土師	坏		6.9		底部完存		横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明黄白色	密	雲母・角閃石	やや不良			3
147	3	ISD 050		土師	皿	6.7	4.8	1.7	ほぼ完形	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切	淡黄白色	密	角閃石・雲母・赤色粒子	やや不良	外方に開く		4
147	2	ISD 050		土師	皿	6.7	4.3	1.6	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ ナデ	回転糸切	明黄白色	密	微砂粒	やや良	外方に開く		5
147	7	ISD 050		土師	坏			24	口縁部細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	不明	明黄白色	密	角閃石多	やや良	内湾		6
147	1	ISD 050		土師	皿	6.2	4.0	1.6	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	不明	回転糸切	淡黄赤白色	密	角閃石・雲母・赤色粒子	やや不良	外方に開く		7
147	9	ISD 050		青磁	碗		6.0		底部1/2		施釉	施釉	施釉	露胎	素地 黄茶色 釉薬 暗緑色	精良	黒色粒子微量	良好			8
147	8	ISD 050		白磁	蓋	8.2	5.6	1.3	1/3		回転箆削	施釉	施釉	回転箆削	素地 淡灰色 釉薬 明黄白色	精良	黒色粒子微量	良好	外反	天井部径5.0cm	9
147	10	ISD 050		染付	皿	14.0	9.6	3.3	1/8	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	素地 明白色 釉薬 明青白色	精良	黒色粒子	良好	内湾		10
167	4	ISX 055		土師	皿				口縁部細片	不明	不明	不明			明橙色	密	雲母	やや良	僅かに内湾		2
167	3	ISX 055	I	土師	皿				底部細片		横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明橙色	密	角閃石・雲母	やや良			1
163	1	ISX 057		土師	皿	9.1	7.2	1.3	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切	明茶色	密	1mm大の白色砂粒・雲母多	良好	小さく外反		1
167	6	ISX 060		土師	坏	11.2	6.8	5.2	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切	淡橙色	密	微砂粒・角閃石多・黒色不純物多	やや良	僅かに内湾		1
167	7	ISX 060		土師	坏	11.8	7.0	3.2	1/3	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切	暗黄茶褐色	密	角閃石・赤色粒子・黒色不純物多	やや良	内湾		2
163	2	ISX 062		土師	坏?		10.0		底部1/4				ナデ	回転糸切 板状圧痕	暗灰茶色	密	雲母	やや不良			1
163	3	ISX 062		青磁	碗				体部細片		施釉	施釉	施釉		素地 黄灰色 釉薬 暗緑色	密	黒色粒子	良好		内面に文様有	2
148	2	ISD 065		土師	皿	7.4	4.6	2.0	1/2	横ナデ	ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	黄茶色	密	微砂粒	良好	僅かに外反		1
148	3	ISD 065		土師	皿	7.8	5.0	2.1	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切	明橙色	やや密	微砂粒・角閃石	やや良	外方に開く		2
148	1	ISD 065		土師	皿	6.1	2.4	1.5	1/2	横ナデ	ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切	淡黄白色	精良		やや良	外反		3
148	5	ISD 065		瓦器	火舎		31.0		底部1/8		ナデ	横ナデ	横ナデ	不明	黄茶色	やや密	角閃石・雲母	やや良		底部の脚は貼付け	4
148	4	ISD 065		土師	甕?				口縁部細片	ナデ	横ナデ 刷毛	ナデ			灰黄色	やや粗	1mm大の砂粒多	良好	内側肥厚		11
149	15	ISD 065	I	染付	皿	14.0	7.2	3.0	1/2	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	素地 灰白色 釉薬 緑灰色	密	黒色粒子・白色砂粒	良好	外方に開く	内底見込の釉を輪状に掻き取る 畳付は砂目跡が残る	1
149	14	ISD 065	I	染付	八角鉢	14.4	6.6	7.5	1/2	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	素地 白色 釉薬 青白色	精良		良好	外反		2
150	16	ISD 065	III	土師	皿	7.7	5.4	1.8	ほぼ完形	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切	明橙色	やや密	微砂粒多	やや良	内湾		1
150	17	ISD 065	III	土師	皿				底部細片		不明	横ナデ	ナデ	回転糸切	明黄茶色	やや密	0.5mm大の砂粒	やや良		外底面に「泉」字の墨書有	2
150	20	ISD 065	III	磁器	鉢	34.2			口縁部1/8	施釉	施釉	施釉			素地 灰色 釉薬 緑茶色	やや密	黒色粒子微量	良好	内折		3
150	19	ISD 065	III	白磁	碗		6.2		底部1/4		施釉	施釉	施釉	露胎	素地 灰白色 釉薬 灰茶色	粗	微砂粒多	良好		VI期またはVII期	4
150	18	ISD 065	III	土師?	不明				細片	ナデ	刷毛	刷毛	ナデ	篦圧痕	明赤褐色	やや粗	角閃石	やや良	外方に開く		[illegible]
155	31	ISD 065	IV	染付	碗	11.4	4.5	6.1	1/2	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	素地 黄茶色 釉薬 青灰色	精良		良好	直立気味		1
157	40	ISD 065	V	土師	皿	7.8	5.0	1.8	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切	明黄色	やや密	微砂粒	やや良	僅かに内湾		1
157	39	ISD 065	V	土師	皿	6.7	4.6	1.4	1/3	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切	明黄茶色	密	微砂粒・角閃石	やや良	外方に開く		2
157	38	ISD 065	V	土師	皿	6.5	2.2	1.8	ほぼ完形	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明黄茶色	密	1mm大の砂粒・角閃石微量	良好	内湾	口縁部に一部煤付着	3
157	37	ISD 065	V	土師	皿	6.6	4.4	2.2	1/3	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切	黄茶色	やや粗	0.5mm大の砂粒・角閃石多	やや良	内湾		4
157	42	ISD 065	V	土師	皿	7.9	5.1	2.2	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明橙色	密	0.5mm大の砂粒少	やや良	内湾		5
157	41	ISD 065	V	土師	皿	6.9	4.5	1.6	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切	明黄灰茶色	密	微砂粒	やや良	外反		6
157	43	ISD 065	V	土師	皿?		6.8		底部完存		横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	黄茶色	やや密	0.5mm大の砂粒	良好		底部に焼成前?穿孔6ヶ所 内底見込に渦巻き文?	7
158	47	ISD 065	VI	土師	坏?		4.5		底部完存		横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡黄白色	密	白色砂粒	やや良			1
158	48	ISD 065	VI	土師	坏		7.4		底部完存		ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明橙色	密	雲母・赤色粒子	良好			2
158	49	ISD 065	VI	染付	碗	7.6	2.9	5.1	2/3	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	釉薬外 暗赤茶色 釉薬内 明黄色	精良		良好	外反	畳付のみ露胎 素地は暗灰茶色	3
158	50	ISD 065	VI	染付	碗	8.9	4.3	4.4	完形	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	素地 白色 釉薬 青白色	精良		良好	外方に開く		4
158	51	ISD 065	VI	白磁	八角鉢				細片	施釉	施釉	施釉			素地 灰白色 釉薬 緑白色	精良	白色砂粒	良好	小さく内湾		5
161	2	ISD 070		染付	皿				口縁部細片	施釉	施釉	施釉			素地 灰白色 釉薬 透明	精良	白色粒子	良好		波佐見焼か?	1
161	1	ISD 070		土師	坏				口縁部細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	明黄色	精良		良好	内湾	外面に墨書有	2
161	4	ISD 070	II	土師	不明				不明		横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	明黄色	やや密	角閃石・黒色粒子	不良		底部中央に焼成前穿孔1ヶ所有	1
161	5	ISD 070	V	土師	不明				不明		横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	明黄白色	やや密	1mm大の砂粒・角閃石	やや良		底部中央に焼成前穿孔1ヶ所有	1
164	3	ISK 075	I	土師	土鍋				体部細片		横ナデ ナデ	ナデ 横ナデ			外 暗茶褐色 内 黄茶色	密	1mm大の砂粒	やや良		外面全体に煤付着	1
164	2	ISK 075	I	土師	土鍋				口縁部細片	横ナデ	ナデ	ナデ			外 明橙色 内 明黄茶色	やや密	1mm大の白色砂粒	やや良	玉縁状	体部外面に煤付着	2
164	1	ISK 075	I	土師	皿	7.7	6.0	1.6	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切	明橙色	密	1mm大の砂粒	良好	内湾		3
164	5	ISK 075	I	青磁	碗		7.2		底部1/4		施釉	施釉	施釉	釉掻取	素地 明黄色 釉薬 明緑色	やや密	黒色粒子	良好		龍泉	4
164	4	ISK 075	I	瓦器	火舎				口縁部細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			暗灰色	やや密	1mm大の砂粒・白色粒子	やや良	内湾	口縁部外面直下に凸帯2条とスタンプ文有	5
164	7	ISK 075	III	土師	坏				口縁部細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転箆切 箆削り	明黄橙色	やや密	角閃石・赤色粒子多	やや良	外反		1
164	9	ISK 075	III	土師	坏	12.8	8.1	2.7	ほぼ完形	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明橙色	密	角閃石・雲母・赤色粒子	やや良	外反		2
164	8	ISK 075	III	土師	皿?		7.0		底部1/2		横ナデ	横ナデ	ナデ	回転箆切	明黄白色	密	微砂粒少	やや不良			3
164	6	ISK 075	III	土師	皿	7.8	5.5	1.4	体部1/4欠損	横ナデ	横ナデ 箆削り	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明黄茶色	やや粗	微砂粒・角閃石	やや良	外反	底部に焼成後?穿孔2ヶ所有	4
164	10	ISK 075	IV	土師	皿	8.0	5.5	1.8	ほぼ完形	横ナデ	横ナデ 箆削り	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明黄茶色	密	角閃石・雲母	良好	外反		1
164	11	ISK 075	IV	土師	坏	13.5	10.0	2.6	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明黄茶色	密	微砂粒	やや良	外方に開く		2

Tab.20　出土遺物観察表（土器）①

Fig	No	遺構 番号	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	口縁部	体外部	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	備考	R.No
164	12	ISK 075	IV	土師	坏	13.6	7.7	3.3	口縁部2/3欠損	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切	[illegible]橙色	やや密	1mm大の砂粒・角閃石多	やや良	内湾		3
165	2	ISK 100		土師	坏		7.6		底部1/4		横ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切	黄白色	精良	角閃石[illegible]	やや良			1
165	1	ISK 100		土師	皿	6.5	4.0	2.1	1/2	不明	不明	不明	不明	回転糸切	外 淡橙色 内 淡黄橙色	やや粗	角閃石・赤色粒子	やや不良	内湾		2
167	9	ISX 109		白磁	水注	3.6			口縁部1/2	施釉	施釉	露胎			素地 灰白色 釉薬 緑灰色	精良	黒色粒子	良好	玉縁状		2
167	10	ISX 126		土師	皿	6.0	4.[illegible]	1.7	ほぼ完形	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明橙色	密	赤色粒子[illegible]	良好	外反		1
167	11	ISX 174		土師	坏	14.0	8.4	3.1	1/3	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切	明黄茶色	やや粗	0.5mm大の砂粒少	やや良	外方に[illegible]		[illegible]
167	13	ISX 176		土師	皿				口縁部破片	横ナデ	横ナデ	横[illegible]	ナデ	回転糸切	明黄茶色	やや[illegible]	[illegible]	やや良	外方に開く		1
167	12	ISX 176		土師	坏				口縁部破片	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	[illegible]糸切	淡黄茶色	やや密	黒色粒子	やや良	内湾		[illegible]
168	1	ISK 188		土師	皿	7.6	5.2	2.0	口縁部1/2欠損	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	[illegible]糸切	暗茶色	密	雲母少	良好	内湾		1
166	2	ISK 188		土師	皿	7.6	5.0	1.7	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明黄茶色	密	[illegible]	良好	外方に開く		[illegible]
168	3	ISK 188		土師	坏	12.0	7.5	3.3	3/4	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡黄色	やや密	[illegible]・角閃石多	不良	外反		3
166	4	ISK 188		須恵	鉢				口縁部破片	横ナデ	横ナデ	ナデ			暗灰色	密	白色砂粒	やや良	玉縁状	口縁部に自然釉	4
168	2	撹 乱		土師	皿	7.4	4.5	2.2	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	暗橙色	密	白色砂粒・角閃石少	やや良	内湾		1
168	1	撹 乱		土師	皿	7.6	4.0	1.5	完形	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡黄白色	密	黒色粒子・赤色粒子	やや良	外反		2
168	4	撹 乱		土師	不明				底部完存		横ナデ	横ナデ	横ナデ ナデ	横ナデ ナデ	淡黄茶色	やや[illegible]	1mm大の砂粒・雲母多	やや良		底部中央に焼成前穿孔1ヶ所有	3
168	3	撹 乱		土師	不明				底部完存		横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ ナデ	淡黄茶色	やや[illegible]	雲母・角閃石	やや良		底部中央に焼成前穿孔1ヶ所有	4
168	5	撹 乱		陶器	[illegible]	8.2	3.9	1.6	1/2	施釉	露胎	施釉	[illegible]	露胎	素地 [illegible]灰色 釉薬 黄茶色	やや密	白色砂粒	良好	外反	貫入有 底部に「[illegible]用部[illegible]」の[illegible]有	[illegible]
168	6	撹 乱		陶器	酒器?	6.5	5.4	6.2	口縁部欠損	施釉	施釉	露胎	露胎	露胎	素地 明茶色 釉薬 白色	精良		良好	外反	底面に「[illegible]」の刻印有 小[illegible]の方[illegible]焼か?	[illegible]
168	7	撹 乱		染付	碗	9.9	4.0	5.5	ほぼ完形	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	素地 白色 釉薬 青白色	精良		良好	僅かに外反	[illegible]付のみ[illegible]	[illegible]
168	8	撹 乱		染付	皿		8.0		底部完存				施釉	施釉	素地 灰白色 釉薬 青白色	精良	茶色粒子	良好		[illegible]付のみ[illegible]	10

Tab.21　出土遺物観察表（土器）②

Fig	No	遺構 番号	層位	素材	産地	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	残存	備考	R.No.
146	2	ISD 005		凝灰岩		茶臼	[illegible]	[illegible]	10.8	1018	上臼部破片		[illegible]
147	11	ISD 050		瓦		丸瓦	10.1	10.0	[illegible]	240	破片	側辺長18cm残存 胎土 密（1mm大の白色砂粒含） 色調 暗灰色 焼成 やや良	11
147	12	ISD 050	I	瓦		丸瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	130	破片	側辺長8.7cm残存 胎土 密（白色砂粒・雲母含） 色調 暗灰色 焼成 やや良	[illegible]
[illegible]	[illegible]	ISD 065		瓦		平瓦	7.0	[illegible]	[illegible]	[illegible]	破片	側辺長6.5cm残存 胎土 やや粗（角閃石含） 色調 灰黄色 焼成 やや良	[illegible]
[illegible]	[illegible]	ISD 065		瓦		軒平瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	瓦当面1/2	瓦当面長13.9cm 側辺長18.5cm残存 胎土 密 色調 橙黄褐色 焼成 やや良	[illegible]
[illegible]	[illegible]	ISD 065		瓦		軒丸瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	510	瓦当面完存	瓦当面のみ残存 胎土 密 色調 黒褐色 焼成 良	[illegible]
[illegible]	[illegible]	ISD 065		瓦		軒丸瓦	[illegible]	[illegible]	2.3	235	瓦当面3/4	胎土 やや密 色調 [illegible]褐色 焼成 良	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		瓦		軒丸瓦	[illegible]	10.7	2.0	[illegible]	瓦当面3/4	瓦当面のみ残存 胎土 やや粗 色調 黄灰色 焼成 良	[illegible]
149	11	[illegible]		瓦		丸瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	破片	側辺長14.1cm残存 胎土 密 色調 黄灰色 焼成 良	[illegible]
149	12	[illegible]		瓦		鬼瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	385	破片	胎土 密 色調 灰白色 焼成 やや良	[illegible]
149	13	ISD 065		瓦		鬼瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	破片	胎土 密 色調 黄灰色 焼成 良	[illegible]
150	21	ISD 065	III	銅		煙管	[illegible]	1.0	1.0	[illegible]	吸い口ほぼ完存		[illegible]
151	22	ISD 065	III	瓦		軒平瓦	20.7	20.4	[illegible]	1360	2/3	角部ほぼ2ヶ所残存 瓦当面長20.4cm 右側辺長11.3cm 左側辺長18.3cm残存 胎土 やや粗 色調 黄灰褐色 焼成 不良	[illegible]
151	23	ISD 065	III	瓦		軒平瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	335	瓦当面1/3	瓦当面長13.0cm 側辺長4.9cm残存 胎土 密 色調 黒褐色 焼成 やや良	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	III	瓦		軒丸瓦	[illegible]	10.6	[illegible]	261	瓦当面2/3	瓦当面のみ残存 胎土 密 色調 黒褐色 焼成 良	[illegible]
151	[illegible]	ISD 065	III	瓦		軒丸瓦	12.6	[illegible]	2.0	342	瓦当面4/5欠損	角部4ヶ所残存 瓦縁面完存 右側辺長12.6cm 左側辺長12.8cm残存 胎土 密 色調 黄灰色 焼成 良	[illegible]
152	26	ISD 065	III	瓦		平瓦	20.1	[illegible]	[illegible]	[illegible]	破片	側辺長20.1cm残存 胎土 やや粗 色調 明茶褐色 焼成 やや良	[illegible]
[illegible]	[illegible]	ISD 065	III	瓦		平瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	破片	角部1ヶ所残存 側辺長11.0cm 前辺長12.2cm残存 胎土 やや[illegible] 色調 明黄灰色 焼成 良	[illegible]
153	28	ISD 065	III	瓦		丸瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	680	[illegible]	角部2ヶ所残存 瓦縁面完存 右側辺長7.5cm 左側辺長7.7cm残存 胎土 やや密（赤色粒子含） 色調 黄褐色 焼成 不良	10
153	29	[illegible]	III	瓦		丸瓦	[illegible]	[illegible]	2.0	710	1/3	角部1ヶ所残存 前面長16.4cm 右側辺長13.3cmm残存 胎土 やや密 色調 淡黄褐色 焼成 良	[illegible]
154	30	ISD 065	III	瓦		丸瓦	10.6	10.1	[illegible]	200	1/3	角部2ヶ所残存 瓦縁面完存 右側辺長6.8cm 左側辺長0.9cm残存 胎土 密 色調 淡黄灰色 焼成 良	11
155	32	ISD 065	IV	瓦		軒平瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	1/6	角部1ヶ所残存 瓦当面は1/4残存 瓦当面長8.2m 右側辺長9.9cm残存 胎土 やや密（角閃石含） 色調 灰黄色 焼成 やや良	[illegible]
155	33	ISD 065	IV	瓦		軒丸瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	瓦当面1/4	胎土 [illegible] 色調 黒褐色 焼成 やや不良	[illegible]
155	34	ISD 065	IV	瓦		鬼瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	破片	胎土 密 色調 灰褐色 焼成 やや不良	[illegible]
158	35	ISD 065	IV	瓦		平瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	角部1ヶ所残存 前面長12.0cm 左側辺長16.9cmm残存 胎土 密 色調 黒褐色 焼成 やや不良	[illegible]
[illegible]	[illegible]	ISD 065	IV	瓦		平瓦	20.6	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	角部2ヶ所残存 前面長18.8cm（完存） 右側辺長15.2cmm 左側辺長18.5cmm残存 胎土 やや粗（角閃石・2～5mm大の砂粒含） 色調 黄灰色 焼成 やや良	[illegible]
157	44	ISD 065	V	瓦		軒丸瓦	5.6	5.0	1.8	190	完形	胎土 密（[illegible]砂粒含） 色調 暗灰色 焼成 良好	[illegible]
157	45	ISD 065	V	瓦		軒丸瓦	6.0	4.0	1.8	210	瓦当面完存	瓦当面のみ残存 胎土 やや密（細砂粒[illegible]） 色調 明灰色 焼成 やや良	[illegible]
157	46	ISD 065	V	瓦		軒丸瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	580	瓦当面完存	瓦当面のみ残存 胎土 やや粗 色調 明灰色 焼成 やや良	10
158	52	ISD 065	VI	瓦		軒平瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	角部2ヶ所残存 瓦当面長21.0cm 右側辺長8.4m 左側辺長7.7cm残存 胎土 密 色調 黒褐色 焼成 良	[illegible]
[illegible]	[illegible]	ISD 065	VI	瓦		軒丸瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	320	瓦当面2/3欠損	胎土 やや密（[illegible]色粒子含） 色調 暗灰色 焼成 やや良	[illegible]
158	54	ISD 065	VI	瓦		平瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	380	[illegible]	角部1ヶ所残存 左側辺長17.9cm 前辺長4.7cm残存 胎土 密（細砂粒・黒色粒子含） 色調 暗灰色 焼成 やや良	[illegible]
159	55	ISD 065	VI	瓦		平瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	角部1ヶ所残存 右側辺長7.7cm 後辺長14.9cm残存 胎土 密 色調 黒褐色 焼成 良	[illegible]
159	56	ISD 065	VI	[illegible]		平瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	1/6	角部1ヶ所残存 右側辺長10.9cm 前辺長2.9cm残存 胎土 密（赤色粒子・角閃石・雲母含） 色調 明黄灰色 焼成 やや良	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	VI	瓦		平瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	180	[illegible]	角部1ヶ所残存 右側辺長12.6cm 前辺長9.0cm残存 胎土 やや密（白色砂粒・角閃石多） 色調 明灰色 焼成 やや良	[illegible]
160	58	ISD 065	VI	瓦		丸瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	角部1ヶ所残存 玉縁部ほぼ完存 右側辺長7.0cm残存 胎土 やや密（[illegible]砂粒・黒色粒子多） 色調 明灰色 焼成 やや良	[illegible]
161	3	ISD 070	II	凝灰岩		石臼?	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	不明	一部に沈線[illegible]の線刻有 凸部[illegible]部に不明な付着物有	[illegible]
[illegible]	[illegible]	ISD 080		瓦		丸瓦	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	角部1ヶ所残存 左側辺長11.1cm 前辺長7.0cm残存 胎土 やや密（1mm大の砂粒・角閃石含） 色調 黄灰色 焼成 やや良	[illegible]

Tab.22　出土遺物観察表（土器以外）①

Fig	No	遺構 番号	層位	素材	産地	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	残存	備考	図No
146	2	1SD 065		瀬戸[illegible]		茶臼	9.6	8.1	10.8	1,015	上石部 [illegible]		2
147	11	1SD 065		瓦		丸瓦	10.5	10.0	2.5	240	[illegible]	部辺長1.8cm残存 胎土 雲（1mm大の白色砂粒含） 色調 明灰色 焼成 やや良	11
147	12	1SD 065	1	瓦		丸瓦	9.2	8.7	2.3	130	[illegible]	部辺長8.7cm残存 胎土 雲（白色砂粒・雲母含） 色調 明灰色 焼成 やや良	1
148	5	1SD 065		瓦		平瓦	7.0	10.5	2.2	234	[illegible]	部辺長6.5cm残存 胎土 やや粗（角閃石含） 色調 灰黄色 焼成 やや良	5
148	7	1SD 065		瓦		軒平瓦	18.3	14.3	2.2	363	瓦当面 1/2	瓦当面[illegible] 胎土 雲 色調 [illegible] 焼成 やや良	6
148	8	1SD 065		瓦		軒丸瓦	10.7	10.0	1.8	310	瓦当面 [illegible]	瓦当面のみ残存 胎土 雲 色調 [illegible] 焼成 良	10
148	8	1SD 065		瓦		軒丸瓦	7.5	10.0	2.3	335	瓦当面 3/4	胎土 やや雲 色調 [illegible] 焼成 良	9
148	10	1SD 065		瓦		軒丸瓦	9.5	10.7	3.0	216	瓦当面 3/4	瓦当面のみ残存 胎土 やや粗 色調 [illegible] 焼成 良	8
149	11	1SD 065		瓦		丸瓦	10.7	9.5	1.9	310	[illegible]	部辺長14.1cm残存 胎土 雲 色調 黄灰色 焼成 良	7

Tab.23　出土遺物観察表（土器以外）②

径等は復元できない。

1SK188 出土遺物（Fig.166、Pla.60）

１～３は土師器である。１と２は皿で、小皿と呼べるものである。３は坏である。いずれも底面に糸切り痕が残る。４は須恵器の鉢である。口縁部は玉縁状を呈する。

1SX018 出土遺物（Fig.167、Pla.60・61）

ともに土師器の椀である。いずれも内面に墨書が認められ、同一固体である可能性がある。

1SX055 出土遺物（Fig.167、Pla.61）

３と４は土師器である。ともに皿である。５は、瓦で平瓦である。凹凸面ともにナデ調整を施され、側面は箆削りによっている。

1SX060 出土遺物（Fig.167、Pla.61）

ともに土師器の坏である。いずれも底部には糸切り痕が残る。７は底部に焼成後の穿孔が１ヶ所認められる。

1SX109 出土遺物（Fig.167、Pla.61）

８は茶臼である。全体の 1/4 ほどが残存している。９は白磁の水注である。口縁部は小さな玉縁状を呈している。

1SX126 出土遺物（Fig.167、Pla.61）

10 は土師器の皿で、小皿と呼べるものである。灯明用に使用されたようで、口縁部に油煙が付着している。

1SX174 出土遺物（Fig.167、Pla.61）

11 は土師器の坏である。比較的開いた体部を有する。底部には糸切り痕が認められる。

1SX176 出土遺物（Fig.167、Pla.61）

12 と 13 は土師器である。12 は坏で、体部の下部は面取りされている。13 は皿で、小皿と呼べるものである。14 は滑石製の石鍋である。外面は鑿痕が顕著である。

撹乱出土遺物（Fig.168・169、Pla.61・62）

１～４は土師器である。１と２は皿である。ともに小皿と呼べるものである。１は灯明用に使用されたようで、口縁部に油煙が付着している。２は比較的深さがあり、小型の坏ともいえる器形である。３と４は不明品である。底部に焼成前の穿孔が１ヶ所施されていて、燭台とも考えられる。５と６は陶器である。５は蓋で、底面に「用部屋」とみられる墨書がある。さらに左側に２文字の墨書があるが、判読できない。６は酒器と思われ、底面に「萬古」の印刻がある。万古焼きとみられる。注ぎ口は欠損している。７と８は染付である。７は碗で、内底見込みには「寿」の字が描かれている。８は皿の底部である。９は土製の招き猫である。小型品で、愛嬌のある表情をしている。10 は土製の鳩笛であるが、非常に小型のものである。11 ～ 13 は瓦である。11 と 12 は軒丸瓦である。11 は小型品で、道具瓦かも知れない。完形品である。12 は瓦当面のみの残存である。13 は赤瓦である。ほぼ全体の器形が判る資料である。

小結

今回の調査では、調査区が極めて細長い設定となったため、遺跡の性格等について論及することが不可能である。遺構についても、大半が調査区外にも展開するため、ここで論考することは困難である。したがって、一部の遺構と遺物について考察を加え、一応のまとめとしたい。

まず、1SK100であるが、報告文中では土坑としたが、その形状から井戸である可能性を捨てきれない。ただし、掘方は透水層まで達しておらず、底面は粘質土で形成されていた。また、調査中に湧水等は認められず、雨天時に雨水が溜まる程度であった。このような状況から、本報告では土坑として取り扱った次第である。しかし、掘り上がった形状を観察すると、まさしく井戸である。そこで、ここでは井戸としての可能性を検証したい。あらためて形状を観察してみると、遺構上面と底面の大きさと形状が殆ど同じであることに気がつく。深さも0.9ｍほどあり、他の遺構と比べると格段に深いものである。平面形態が略円形であることを考えれば、1SK100は概ね筒状の遺構であるといえる。底面が粘質土であるとは、井戸であることを積極的に肯定はしないが、粘質土の上層に礫混じりの層があり、ここが透水層で湧水層であった可能性もある。しかし、調査段階では湧水は認められず、雨天時の留水時にもこの層位から排水されることもなかった。これらの点を総合すると、井戸として掘削はされたものの、実際には機能しなかった可能性が高いと言わざるを得ない。

次に、1SX55と1SX60であるが、この２遺構は１遺構として捉えるほうが良いと思われるが、その際にどのような性格を与えるのかが問題となる。土層図を見ると判るとおり、非常に細かく分層が可能であった。また、埋土は比較的締まっていたのを記憶している。このような埋土の状況を見ると、掘り込み地業の痕跡ではないかと思わずにはいられなかった。ただ、掘り込み地業にしては埋土の締まり具合が甘いとかんじたのも事実である。翻って当調査区の位置に注目してみたい。当調査区のある一帯は、中世に坂東寺が栄えた場所であり、本坊があったと推定される位置にある。本坊にいかなる建造物があったかは全く不明であるが、それらの建物のための地業であったのではないかと、現地調査の際には想像を巡らせたりもした。残念ながら今回の調査では、それを明らかにするには到らなかった。

また、今回の調査では、若菜鞘ノ本遺跡で注目された赤瓦（註１）が数点出土し、その内の１点は、その全形が伺えるほどの大きさに復元されている。若菜鞘ノ本遺跡での報告の際に指摘された特徴そのものの瓦である。土管の製造工程の中で生まれたと考えるのが妥当であろうが、その製作技法は驚くほど古代の桶巻き瓦に酷似している。また、瓦の法量も中世以降の一枚作りのものよりも、古代の桶巻き技法による瓦に近い。古代と近世という時間軸の上では遠くはなれた時期に、同様の技法を用いた法量まで近い瓦が存在することに、驚きを禁じえない。

ただ、古代の瓦は平瓦に加えて丸瓦が用いられるが、この赤瓦は、古い写真等を見る限り、平瓦のみしか存在しないようである。それらの写真によると、この瓦は平瓦と丸瓦の兼用品であったようで、凹面を上にした瓦を並べ、その上に凸面を上にした瓦を丸瓦の代わりに葺いていったようである。

いずれにしても、一見古代瓦と見まがう赤瓦の、ほぼ全形が知れる資料が出土したことは、我々にとって大きな収穫であった。

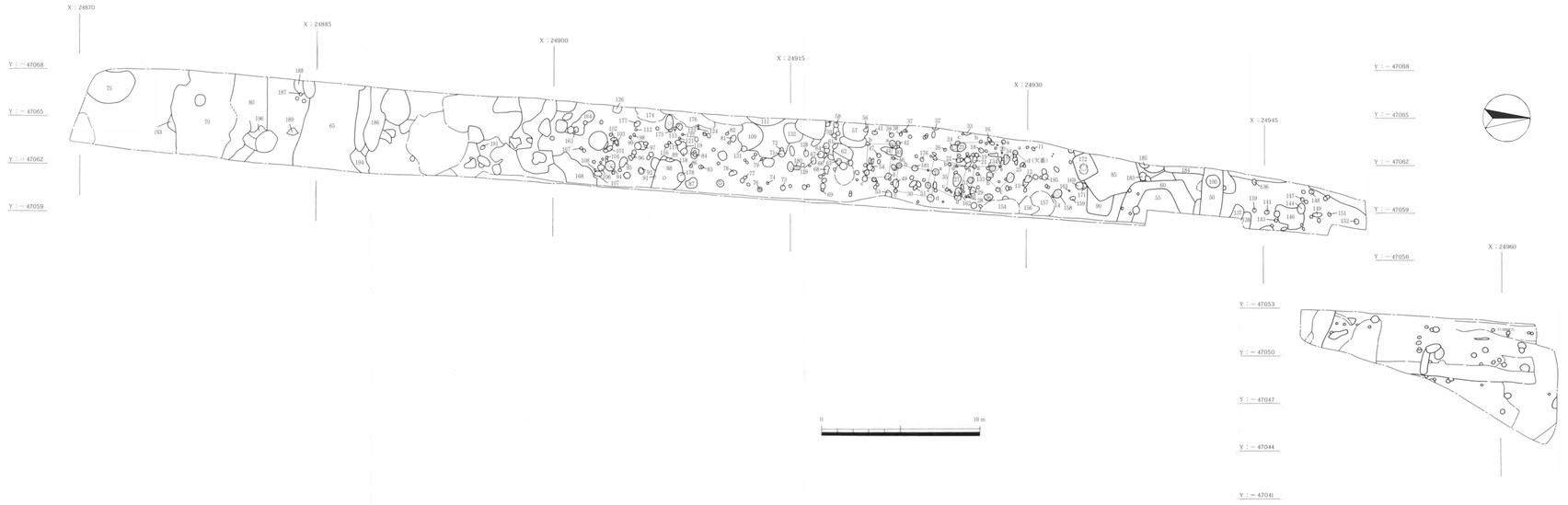


Fig.170　調査区略測図（1/200）

Fig.171　遺構全体配置図（1/150）

6. 熊野屋敷遺跡（第２次調査）

熊野屋敷遺跡第２次調査は、宅地分譲に伴う事前発掘調査として実施されたものである。平成７年度に株式会社ミサワホーム福岡南から筑後市教育委員会に対して、埋蔵文化財の有無について照会がなされた。試掘調査の結果、事業予定範囲の全域に埋蔵文化財の所在が明らかとなり、破壊を免れ得ない部分については、事前に発掘調査の必要があることを回答した。協議の結果、事業予定地全域について、埋蔵文化財の保全は困難であり、全面的に発掘調査を実施し記録保存の措置を講ずることとなった。調

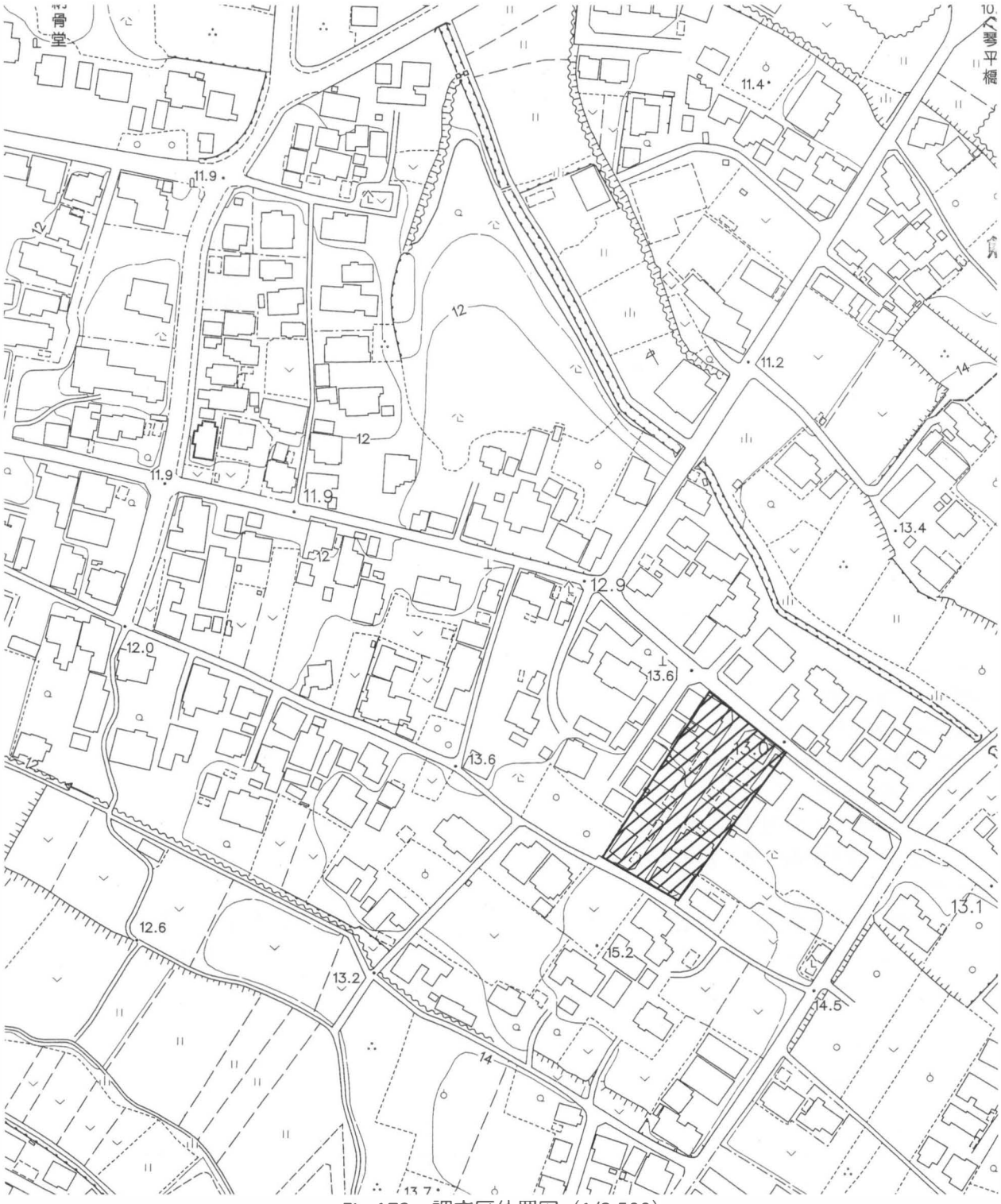


Fig.172　調査区位置図（1/2,500）

査に要する費用については、現地調査に要する費用について株式会社ミサワホーム福岡南が負担するが、報告書作成が後年度になるため、その費用は筑後市が負担することとした。

その際に現地が葡萄畑であったため、葡萄の伐採および撤収は事業者側で行なうこととしたが、伐採した樹木等を焼却する際に、現地に焼却坑を掘って焼却が行なわれた。筑後市教育委員会の担当者がこれを発見し、厳重に注意をしたが、すでに数箇所の焼却坑が穿たれていて、相当の遺構が破壊を受けていた。したがって、非常に残存状況は劣悪であった。

現地の調査は平成７年９月から11月で実施した。調査は永見が担当し、大島真一郎（現：黒木町教育委員会）、野田洋子の協力を得た。

遺構

遺構は全面に分布していたが、前述したように相当の破壊を受けていた。また、葡萄畑として利用されていた際に施肥のための溝掘りが行なわれ、遺構の理解は困難を極めた。しかしながら、土坑・溝状遺構・井戸などを検出できた。以下、遺構種類別に報告したい。

土坑

土坑は、６基を報告する。

2SK010（FIg.173、Pla.64）

調査区の北寄りに位置する。南北2.8m 東西1.8m 深さ0.5m を測る。平面形態は概ね長方形を呈するが、北東側の隅は長軸方向に張り出している。また、その対角線上にあたる南東側の隅は、底面の方が広くなっていて、上面が庇状に張り出しているかのようである。底面は概ね平坦である。

出土遺物には土師器（皿・土鍋・鉢）・陶器（皿）・青磁（碗）がある。

2SK015（FIg.184）

調査区の北東に位置する。南北2.2m 東西1.8m 深さ0.5m を測る。底面はほぼ平坦である。

出土遺物には土師器（皿・鉢）がある。

2SK040（FIg.174）

調査区の西寄りに位置する。南北1.2m 東西1.4m 深さ0.3m を測る。平面形態は楕円形に近い。

出土遺物には土師器（皿）・銭貨がある。

2SK071（FIg.184）

調査区の中央附近に位置する。東西1.5m 深さ0.5m を測る。底面はほぼ平坦である。

出土遺物には土師器（皿・土鍋・鉢）・陶器（皿）・青磁（碗）がある。

2SK088（FIg.184）

調査区の東寄りに位置する。南北1.1m 東西1.1m 深さ0.3m を測る。

出土遺物には青磁（碗）がある。

2SK127（FIg.184）

調査区の東寄りに位置する。南北1.4m 東西1.5m 深さ0.4m を測る。

出土遺物には土師器（皿）がある。

溝状遺構

溝状遺構は３条を報告する。他に、東西方向に葡萄畑を耕作していた際の施肥用の溝状遺構が多数認められるが、昭和の所産であるため今回の報告からは除外した。以下、遺構別に報告する。

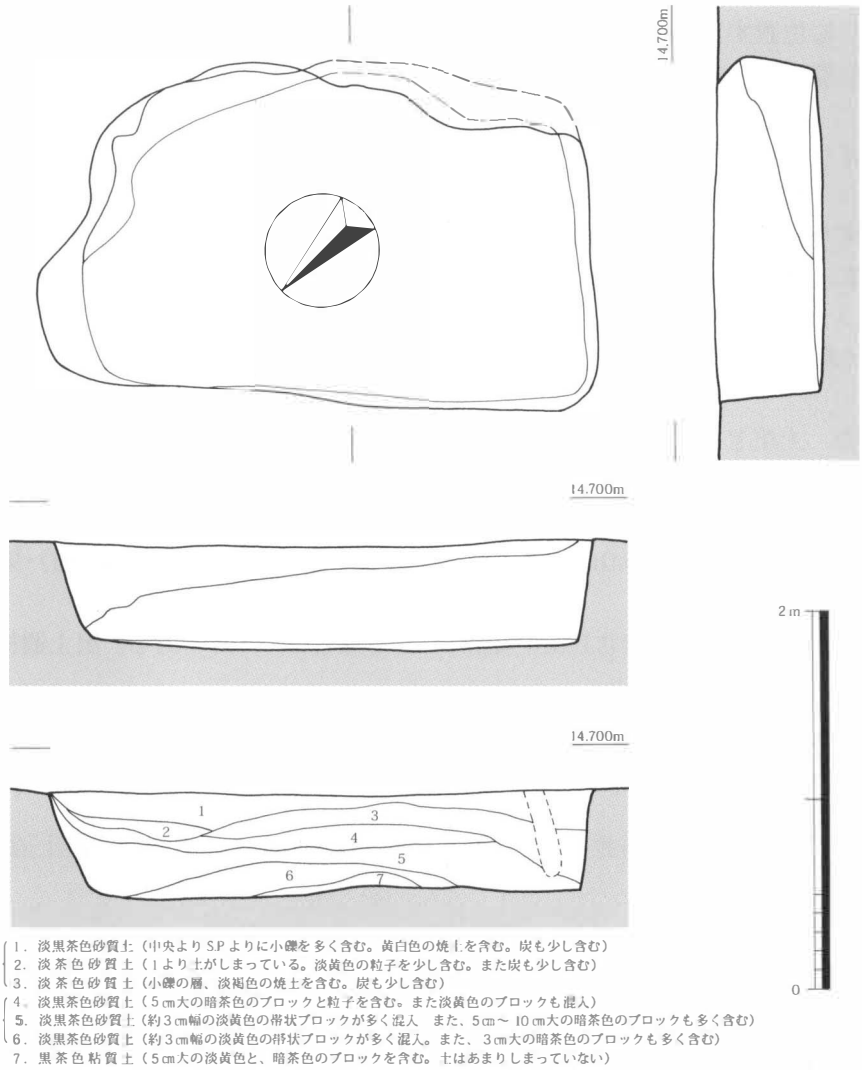
2SD045（Fig.187）

調査区の西寄りに位置する。2SD142 の下層遺構にあたる。幅0.3m 深さ0.3m を測る。方位はＮ－70°－Ｅである。

出土遺物は土師器（皿）がある。

2SD050（Fig.187）

調査区の西寄りに位置する。2SD142 の下層遺構にあたる。幅0.4m 深さ0.3m を測る。方位はＮ－46°－Ｅである。出土遺物は認められなかった。



Ⅰ－ 1．淡黒茶色砂質土（中央よりSPよりに小礫を多く含む。黄白色の焼土を含む。炭も少し含む）
Ⅰ－ 2．淡茶色砂質土（1より土がしまっている。淡黄色の粒子を少し含む。また炭も少し含む）
Ⅰ－ 3．淡茶色砂質土（小礫の層、淡褐色の焼土を含む。炭も少し含む）
Ⅱ－ 4．淡黒茶色砂質土（5㎝大の暗茶色のブロックと粒子を含む。また淡黄色のブロックも混入）
Ⅱ－ 5．淡黒茶色砂質土（約3㎝幅の淡黄色の帯状ブロックが多く混入　また、5㎝～10㎝大の暗茶色のブロックも多く含む）
Ⅱ－ 6．淡黒茶色砂質土（約3㎝幅の淡黄色の帯状ブロックが多く混入。また、3㎝大の暗茶色のブロックも多く含む）
Ⅲ－ 7．黒茶色粘質土（5㎝大の淡黄色と、暗茶色のブロックを含む。土はあまりしまっていない）

Fig.173　2SK010 実測図（1/40）

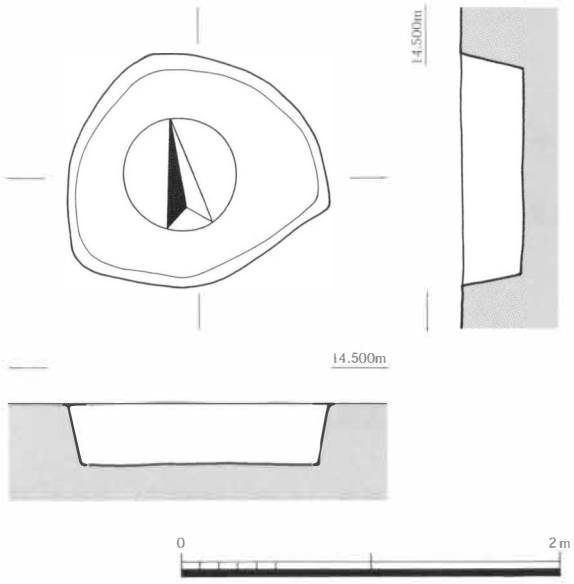


Fig.174　2SK040 実測図（1/40）

2SD142（Fig.187）

調査区の西寄りに位置する。幅 0.4m 深さ 0.2m を測る。方位はＮ－ 46°－Ｅである。

出土遺物は土師器（皿）がある。

井戸

調査区の北東寄りで１基を確認した。崩落の危険があったため、完掘はしていない。

2SE055（Fig.175、Pla.65）

調査区の北東寄りに位置し、掘方が２段になっている。上部は南北 2.9m 東西 3.1m、下部は南北 1.5m 東西 1.7m を測る。遺構面から 1.3m 掘削した時点で、井戸と判断し、危険防止のため以下の掘削を断念した。

出土遺物は、土師器（皿・羽釜・火舎）がある。

不明遺構

不定形の遺構等、土坑として認識しづらいものや撹乱坑を中心に不明遺構として取り上げる。以下、遺構ごとに報告したい。

2SX020（Fig.187、Pla.65）

調査区の南東に位置する。南北 6.0m 東西 6.2m である。出土遺物は、土師器（皿）・染付（碗）がある。

2SX032（Fig.187）

調査区の中央附近に位置する。南北 0.9m 東西 1.2m で深さは 0.5m である。出土遺物は、梵鐘がある。

2SX034（Fig.187）

調査区の東寄りに位置する。南北 0.6m 東西 0.5m で深さは 0.4m である。出土遺物は、土師器（坏）がある。

2SX063（Fig.187）

調査区の中央附近に位置する。南北 0.8m 東西 1.0m で深さは 0.7m である。出土遺物は、土師器（皿・土鍋）がある。

2SX064（Fig.187）

調査区の中央附近に位置する。南北 3.2m 東西 3.6m である。出土遺物は、土師器（坏・手づくね品）がある。

2SX076（Fig.187）

調査区の東寄りに位置する。南北 2.1m 東西 1.0m で深さは 0.4m である。出土遺物は、土師器（皿・土鍋）・青磁（碗）がある。

2SX084（Fig.187）

調査区の中央附近に位置する撹乱坑とみられる。南北 2.2m 東西 3.5m である。出土遺物は、土師器（皿・坏）がある。

2SX094

調査時の記録が散逸していまい、位置や規模が不明となっている。出土遺物は、銭貨がある。

2SX096

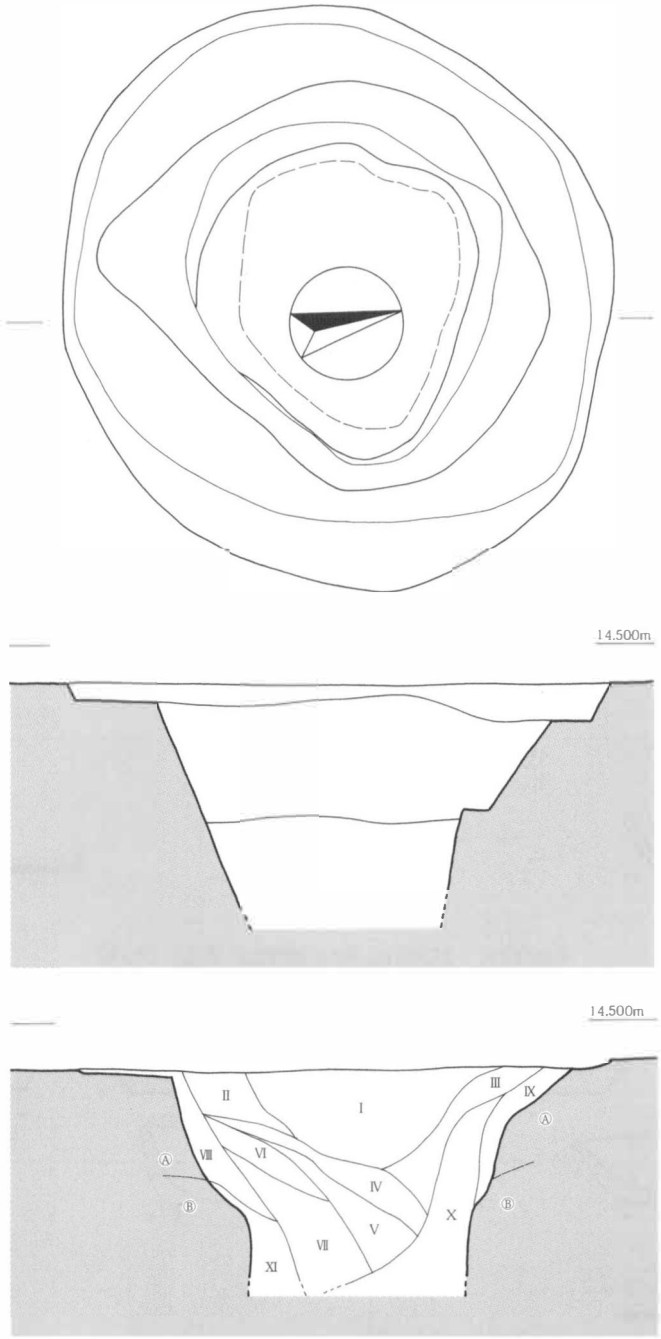
調査時の記録が散逸していまい、位置や規模が不明となっている。出土遺物は、土師器（皿・土鍋）・須恵器（こね鉢）がある。

出土遺物

全体でパンコンテナー 10 箱の遺物が出土した。遺物個々の詳細については遺物観察表によっているので、そちらを参照されたい。以下、出土遺構別に報告する。

2SK010 出土遺物（Fig.176、Pla.66）

１～８は半裁時出土で、すべて土師器である。１と２は皿で、ともに外底面には糸切痕が残る。３～５は坏で、いずれも外底面に糸切痕が認められる。３は体部が比較的ひらくものである。４は体部の中程で屈曲するもので、上半部は外反する。５は体部に丸みがある。６と７は土鍋である。いずれも口縁



Ⅰ　淡黒茶色砂質土（相当量の小礫・淡黄茶色・灰白色粒子。少量の明橙色粒子を含み、かなりしまっている）
Ⅱ　淡黒茶色砂質土（多量の淡黄茶色・淡白色粒子、少量の明橙色粒子を含み、Ⅰよりやや明るく、程良くしまっている）
Ⅲ　淡黒茶色砂質土（多量の淡黄茶色・淡茶色粒子・少量の明橙色・灰白色粒子を含み、Ⅰより若干しまりは劣る）
Ⅳ　淡黒茶色砂質土（Ⅲの組成に似るが粒子数各々減、しまりはⅢに同じ）
Ⅴ　淡黒茶色砂質土（少なからぬ淡黄茶色小ブロック、少量の明橙色小ブロック、多量の淡黄茶色・淡茶色粒子を含み、しまりはⅣに同じ）
Ⅵ　淡黒茶色砂質土（多量の淡茶色粒子、少量の小礫、淡灰色粒子を含み、しまりはⅤに同じ）
Ⅶ　淡黒茶色砂質土（少量の淡茶色小ブロック、多量の淡茶色粒子を含み、しまりはⅥに同じ）
Ⅷ　淡黒茶色砂質土（少量の淡茶色小ブロック、多量の淡茶色粒子を含み、しまりはかなり弱い）
Ⅸ　淡黒茶色砂質土（Ⅷに似るが、小ブロック含まず、しまりはⅧに同じ）
Ⅹ　淡黒茶色砂質土（少なからぬ淡茶色・明橙色粒子を含み、しまりはⅤ、Ⅶに同じ）
Ⅺ　淡黒茶色砂質土（多量の地山小ブロック、粒子を含み、若干の粘性を帯びる）
Ⓐ　淡黄茶色粘質土：〔地山〕　Ⓐ・Ⓑ境に小礫多し
Ⓑ　淡黄茶色砂質土：〔地山〕

Fig.175　2SE055 実測図（1/40）

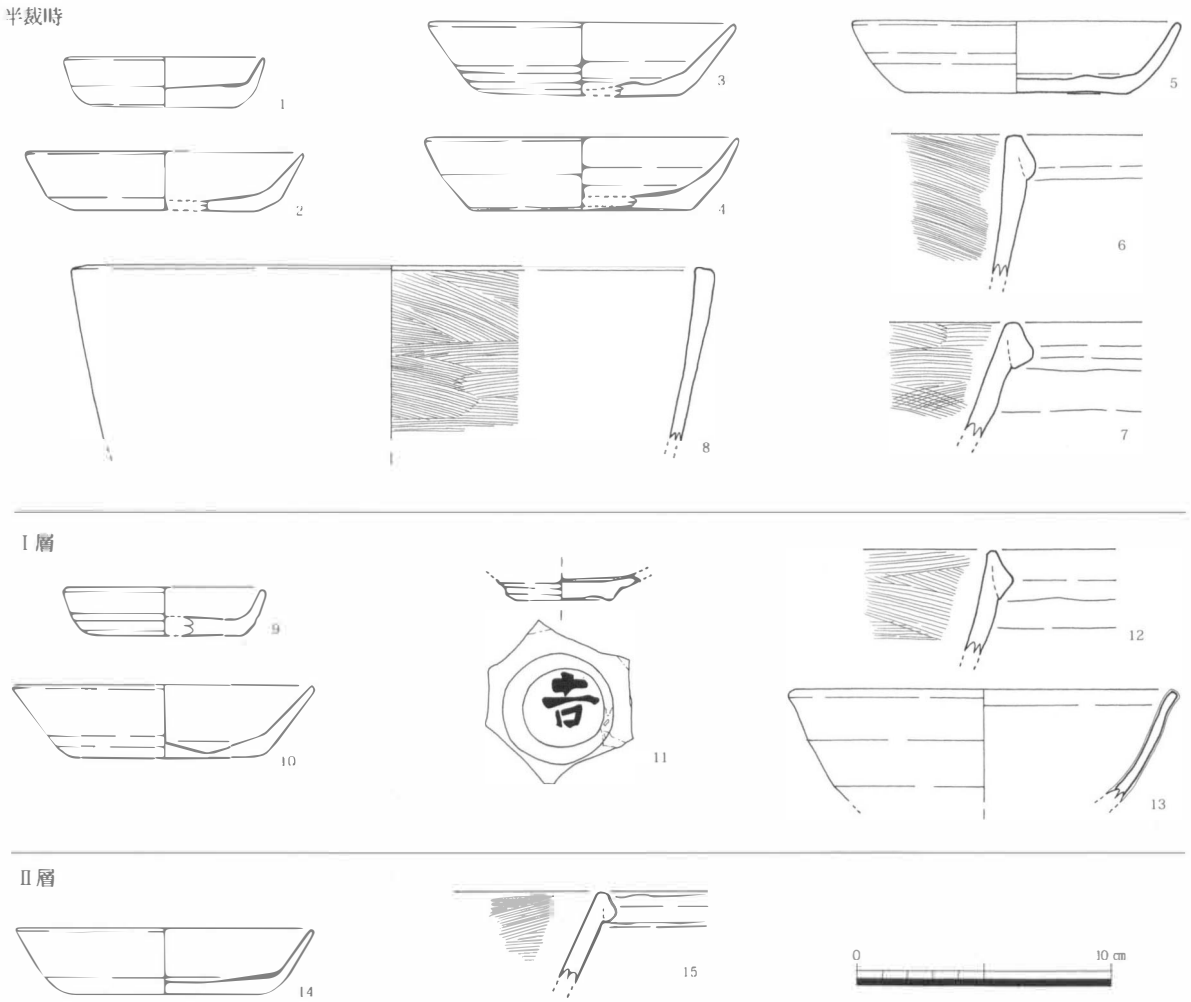


Fig.176　2SK010 出土遺物実測図（1/3）

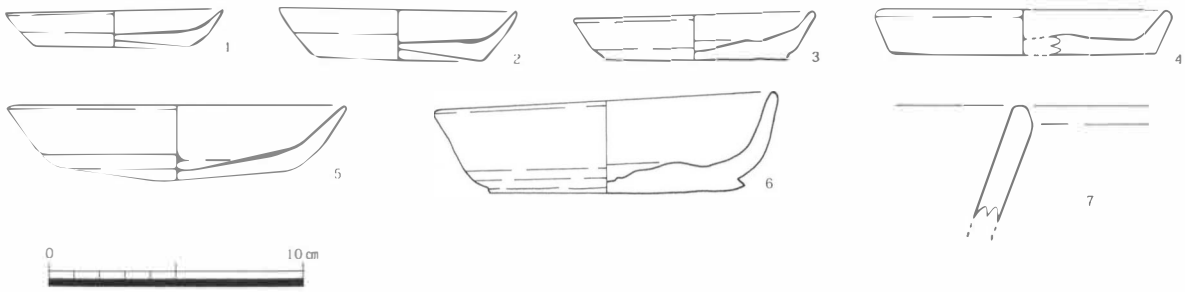


Fig.177　2SK015 出土遺物実測図（1/3）

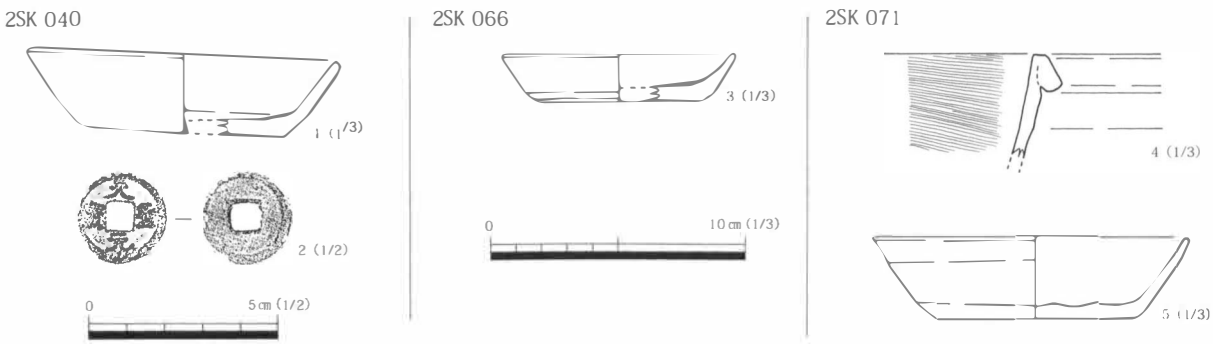


Fig.178　2SK040・2SK066・2SK071 出土遺物実測図（1/3・1/2）

部が玉縁状を呈する。

９～ 13 はⅠ層からの出土である。９と 10、12 は土師器である。９は皿で小皿と呼べるもので外底面に糸切痕が残る。10 は坏である。底部の一部が非常に薄くなっている。また外底面には糸切痕が残る。11 は陶器の皿である。外底面は露胎で、高台見込みに「吉」の墨書がある。12 は土鍋である。口縁部は玉縁状を呈する。13 は青磁の碗である。体部は全面施釉される。

14 と 15 はⅡ層から出土した土師器である。14 は坏である。体部の立ち上がりは短めである。外底面には糸切痕が残る。15 は土鍋である。口縁部は玉縁状を呈する。外面には煤が付着している。

2SK015 出土遺物（Fig.177、Pla.66）

すべて土師器である。１～４は皿である。いずれも外底面に糸切痕が残る。１～３は小皿と呼べるものであるが、４はやや口径が大きい。５と６は坏である。いずれも外底面に糸切痕が残る。５は底部が

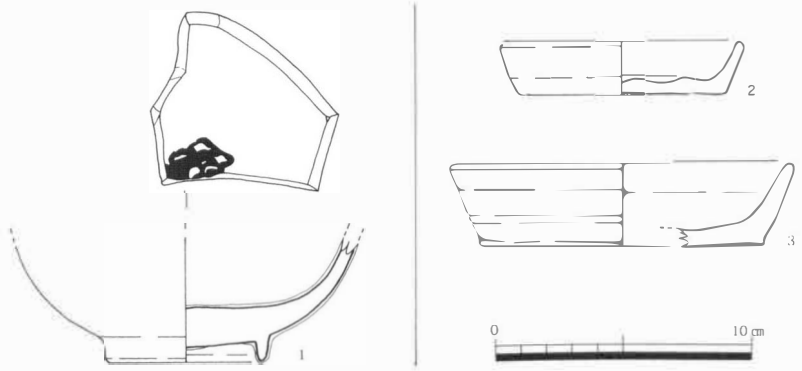


Fig.179　2SK088・2SK027 出土遺物実測図（1/3）

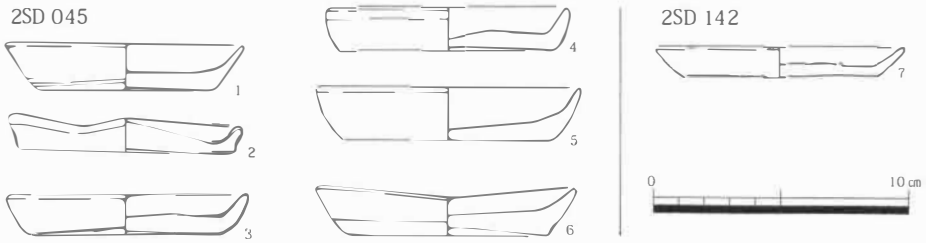


Fig.180　2SD045・2SD142 出土遺物実測図（1/3）

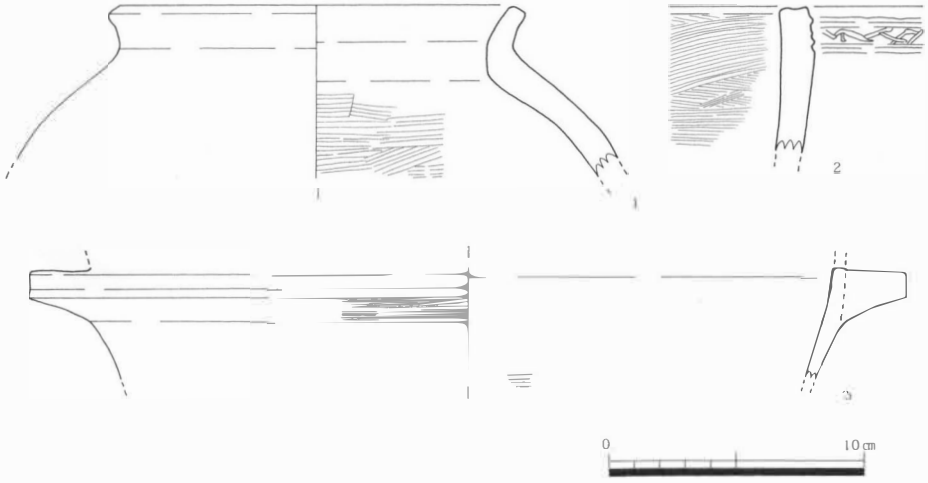


Fig.181　2SE055 出土遺物実測図（1/3）

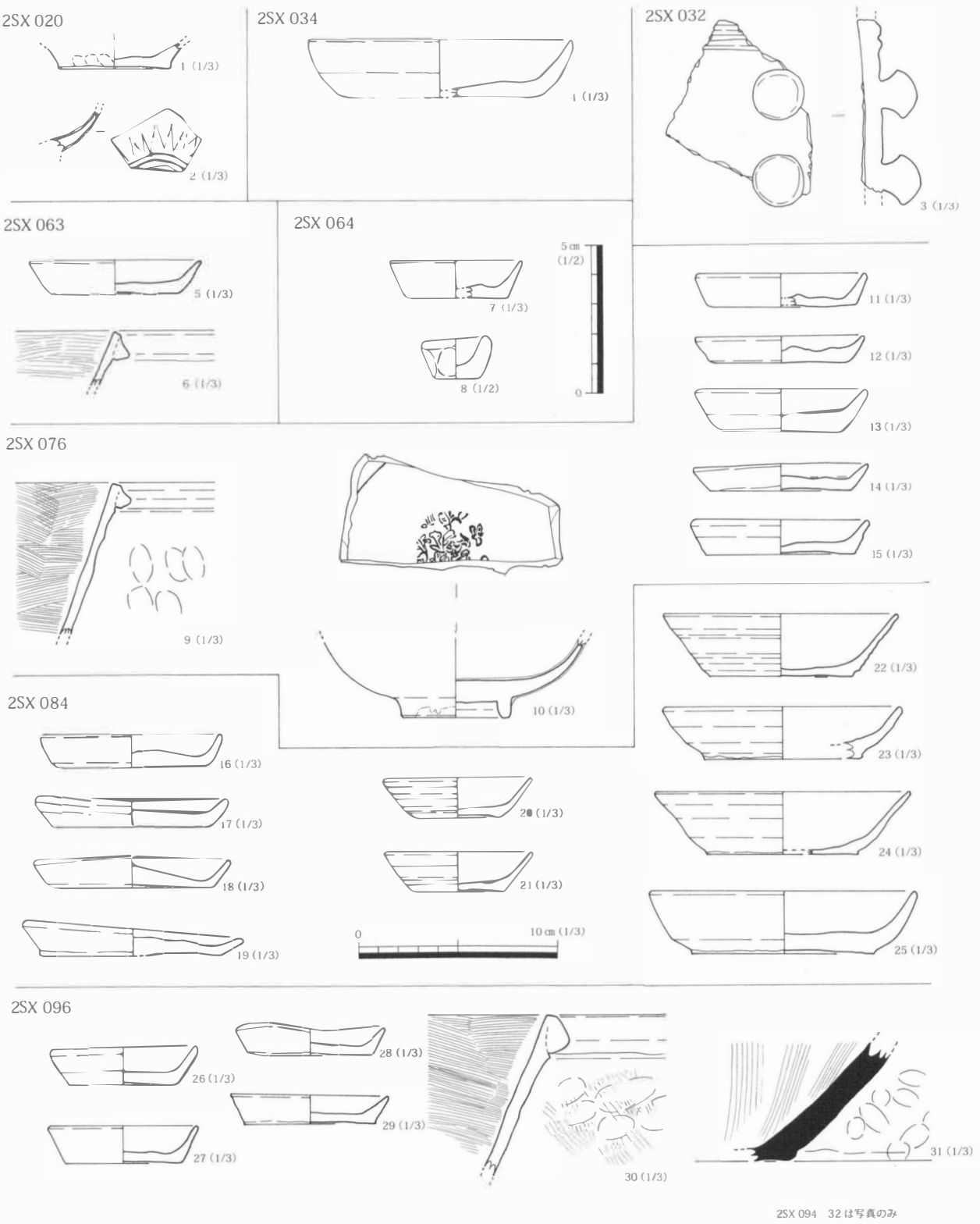


Fig.182　不明遺構出土遺物実測図（1/3・1/2）

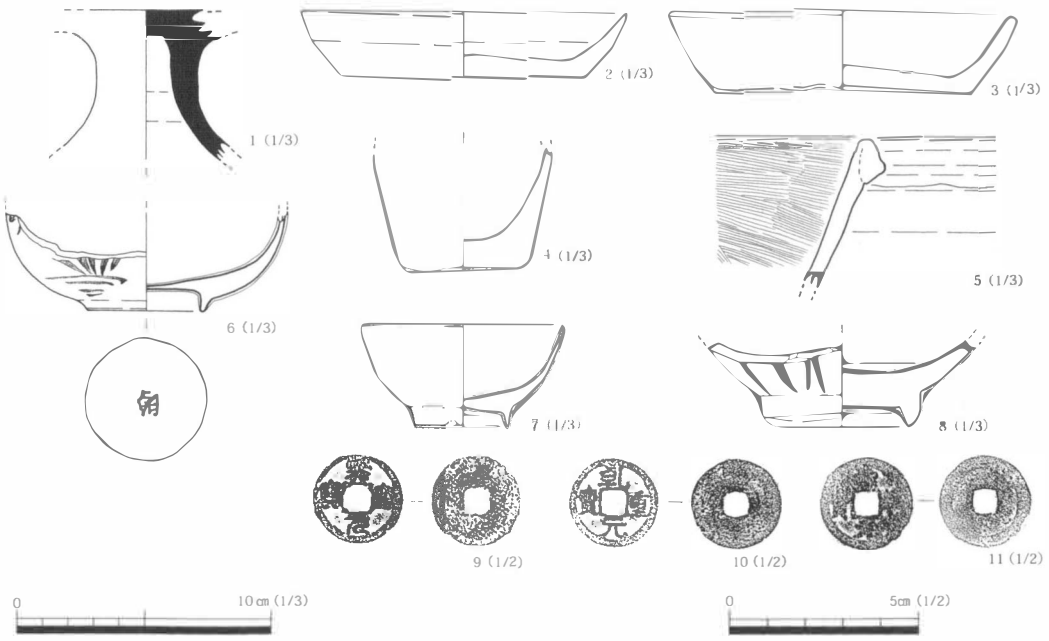


Fig.183　表土出土遺物（1/3・1/2）

レンズ状に押し出されている。6 は分厚い底部が印象的である。7 は鉢の口縁部である。

2SK040 出土遺物（Fig.178、Pla.67）

1 は土師器の坏である。外底面に糸切痕が残る。2 は銭貨幣である。

2SK066 出土遺物（Fig.178、Pla.67）

3 は土師器の皿であるが、坏かも知れない。外底面に糸切痕が残る。

2SK071 出土遺物（Fig.178、Pla.67）

いずれも土師器である。4 は土鍋である。口縁部は玉縁状を呈する。5 は坏である。外底面に糸切痕が残る。

2SK088 出土遺物（Fig.179、Pla.67）

1 は青磁の碗である。全面に分厚く施釉されているが、高台見込みは釉薬を輪状に書き取っている。内底見込に文様が施されている。

2SK127 出土遺物（Fig.179、Pla.67）

いずれも土師器である。2 は皿である。直立気味の体部が特徴的である。外底面に糸切痕が残る。3 は坏としたが、皿かも知れない。器壁が厚く、外底面に糸切痕が残る。

2SD045 出土遺物（Fig.180、Pla.67）

すべて土師器の皿である。いずれも小皿と呼べるもので、体部は短めである。2 は特に底部が分厚い。3 ～ 5 は体部が内湾しているものである。6 は体部の下端が強い横ナデによって凹んでいる。

2SD142 出土遺物（Fig.180、Pla.67）

7 は土師器の皿である。外底面には糸切痕が残る。

2SE055 出土遺物（Fig.181、Pla.67）

すべて土師器である。1 は甕である。全体的に器壁が厚く、口縁部は小さく外反する。体部内面に刷毛目が認められる。2 は火舎である。口縁部外面に篦描きの文様が巡り、内面には刷毛目が認められる。3 は羽釜である。羽部は先端側が薄く仕上げられている。内面に一部刷毛目が認められる。

2SX020 出土遺物（Fig.182、Pla.67）

1 は土師器の皿である。体部下端に指頭圧痕が認められ、外底面に糸切痕が残る。2 は染付の碗である。外面にのみ文様が認められる。

2SX032 出土遺物（Fig.182、Pla.67）

３は梵鐘の破片である。乳が２個残存している。天地の判別は定かではない。

2SX034 出土遺物（Fig.182、Pla.68）

４は土師器の坏である。体部は内湾し、外底面に糸切痕が認められる。

2SX063 出土遺物（Fig.182、Pla.68）

ともに土師器である。５は皿で、小皿と呼べるものである。外底面に糸切痕が残る。６は土鍋である。口縁部は玉縁状を呈し、内面には刷毛目が施される。外面に煤が付着している。

2SX064 出土遺物（Fig.182、Pla.68）

ともに土師器である。７は皿で小皿と呼べるものである。外底面に糸切痕が残る。８は手づくねの坏と思われる。極小品である。

2SX076 出土遺物（Fig.182、Pla.68）

９は土師器の土鍋である。口縁部は玉縁状を呈し、内面には刷毛目が施される。また外面には指頭圧痕が認められる。10は青磁の碗である。内外面ともに施釉されるが、高台と高台見込みは露胎である。11 ～ 15は土師器の皿である。いずれも小皿と呼べるもので、外底面に糸切痕が残る。12 ～ 14は底部が分厚いのが印象的である。

2SX084 出土遺物（Fig.182、Pla.68・69）

すべて土師器である。16 ～ 19は皿である。いずれも小皿と呼べるもので、底部が分厚いのが特徴的である。外底面に糸切痕が残る。20 ～ 25は坏である。20と21は小型のもので、器壁も薄い。皿とすべきかも知れない。22と24は全体的に器壁が薄く、横ナデの痕跡が顕著である。23は体部の中程で内側に折れるものである。25は非常に器壁が分厚いものである。体部は内湾する。

2SX094 出土遺物（Fig.182、Pla.69）

32は銭貨である。遺存状態が劣悪である。

2SX096 出土遺物（Fig.182、Pla.69）

26～30は土師器である。26～29は皿である。いずれも小皿と呼べるもので、外底面に糸切痕が残る。30は土鍋である。口縁部は玉縁状を呈し、内面は刷毛目が顕著である。外面は指頭圧痕の上に刷毛目が施されている。外面の一部に煤が付着している。31は須恵器のこね鉢である。底部は薄い。

表土出土遺物（Fig.183、Pla.69）

１は須恵器の高坏である。２～５は土師器である。２と３は坏である。いずれも体部は内湾し、外底面に糸切痕が残る。4は不明品である。外底面には糸切痕が残る。なにかの容器であろう。5は土鍋である。口縁部は玉縁状を呈し、内面には刷毛目が施される。６は染付の碗である。全面に施釉されるが、畳付のみ露胎である。７は白磁の碗である。全面に施釉されるが、畳付のみ露胎である。８は青磁の碗である。体部外面に鎬連弁が施文され、内底見込に沈線が１条巡る。９～ 11は銭貨である。

小結

今回の調査は、冒頭に述べたとおり、調査前に葡萄畑耕作時や伐採時に相当の撹乱が行なわれたため、調査区の中に、判別不能な遺構が多く存在する。そのため、遺跡全体の考察が不可能であることをはじめにお断りしておく。

調査に取り掛かる前の情報として、当地の西隣に坂東焼の窯跡があることが知られていた。当然、今回の調査にあたっては、坂東寺焼関連の遺構や坂東寺焼そのものの出土を期待していた。しかしながら、今回検出した遺構に坂東寺焼窯元関連の遺構は見当たらない。また、出土した遺物も坂東寺焼が操業していた、江戸期のものはあまり見受けられない。むしろ、坂東寺が栄えていた中世あるいは中世末あたりの遺物が多いように見受けられる。このことを前提として、若干の考察を加えて、今回の調査のまとめとしたい。

今回の出土品の様相を概観すると、近世における坂東寺焼の窯元に見られるような、土師器あるいは陶器の生産地としての様相はみられない。むしろ、製品の消費地としての傾向がみられ、坂東寺あるい

Fig	No	遺構 番号	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	口縁部	体外部	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	備考	R.No
176	1	2SK 010		土師	皿	8.0	5.6	2.0	1/3	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切	淡赤褐色	密	角閃石	良	僅かに外反		4
176	2	2SK 010		土師	皿	11.0	7.4	2.3	4/5	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡黄茶色	密		やや良	外方に開く		6
176	3	2SK 010		土師	皿	12.2	7.8	2.0	1/3	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	赤褐色	密		良	外方に開く		5
176	4	2SK 010		土師	坏	12.4	8.8	2.0	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡黄茶色	密		やや良	内湾		8
176	5	2SK 010		土師	坏	13.0	8.8	[illegible]	口縁部 1/4	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡黄茶色	密		やや良	外方に開く		7
176	6	2SK 010		土師	土鍋				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	刷毛			外 黒褐色 内 茶褐色	密		良	玉縁状		3
176	7	2SK 010		土師	土鍋				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	刷毛			茶褐色	密	金雲母	良	玉縁状		2
176	8	2SK 010		土師	鉢? 甕?	[illegible]			口縁部 1/6	横ナデ	ナデ	刷毛			外 茶褐色 内 淡赤褐色	密	金雲母	やや良	外方に開く	口縁部の上面に明瞭な面有	1
176	9	2SK 010	I層	土師	皿	8.0	6.0	1.9	1/4	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明赤褐色	密	赤色粒子	良	僅かに内湾		2
176	10	2SK 010	I層	土師	坏	12.0	7.4	2.0	ほぼ完形	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	外 淡黄茶色 内 暗黄茶色	密		良	外方に開く		1
176	11	2SK 010	I層	陶器	皿				底部 完存		施釉	施釉	施釉	横ナデ 削出	素地 淡黄褐色 釉薬 灰白色	密		良		高台見込に「吉」の墨書有	4
176	12	2SK 010	I層	土師	土鍋				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	刷毛			外 黒褐色 内 茶褐色	密		良	玉縁状		3
176	13	2SK 010	I層	青磁	[illegible]				口縁部 1/4	施釉	施釉	施釉			素地 灰白色 釉薬 暗灰緑色	密		良	外反		5
176	14	2SK 010	II層	土師	坏	11.8	7.7	2.6	1/4	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	暗黄褐色	密		やや良	僅かに外反		1
176	15	2SK 010	II層	土師	土鍋				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	刷毛			外 黒褐色 内 淡黄茶色	密		やや良	玉縁状	外面に煤付着	2
177	1	2SK 015		土師	皿	8.6	6.2	1.6	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	赤褐色	密	角閃石	良	僅かに外反	歪みが大きい	3
177	2	2SK 015		土師	皿	9.4	6.7	2.0	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡赤褐色	密	赤色粒子・金雲母	やや不良	僅かに内湾		4
177	3	2SK 015		土師	皿	9.7	7.2	1.8	口縁部 1/3欠損	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡黄茶色	密	赤色粒子	やや良	僅かに外反		5
177	4	2SK 015		土師	皿	11.6	10.6	1.8	1/4	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切	淡黄茶色	密		やや良	外反		2
177	5	2SK 015		土師	坏	13.4	9.5	3.0	2/3	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ ナデ	回転糸切	淡黄茶色	密		やや良	僅かに外反		6
177	6	2SK 015		土師	坏	13.6	10.1	3.7	口縁部 一部欠損	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	黄灰色	密		やや良	外反		7
177	7	2SK 015		土師	[illegible]				口縁部 細片	横ナデ					暗灰褐色	密		良	僅かに内湾		1
178	1	2SK 040		土師	坏	12.4	8.0	[illegible]	口縁部 1/4	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切	明赤褐色	やや密		やや良	外方に開く		1
178	3	2SK [illegible]66		土師	皿	9.2	6.5	1.9	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡黄茶色	密		良	僅かに外反		1
178	4	2SK 071		土師	土鍋				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	刷毛			外 茶褐色 内 暗黄茶色	密	金雲母	良	玉縁状	外面に煤付着	1
178	5	2SK 071		土師	坏	12.5	7.8	3.3	3/4	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡黄茶色	密		やや良	内湾		2
179	1	2SK 088		青磁	碗		6.0		底部 1/4		施釉	施釉	施釉	削出	素地 灰白色 釉薬 淡白緑色	精良		良		内定見込に文様有	1
179	2	2SK 127		土師	皿	9.6	8.2	[illegible]	口縁部 1/4	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ ナデ	回転糸切	外 暗黄褐色 内 赤褐色	やや密		やや良	内湾		1
179	3	2SK 127		土師	坏	13.6	11.3	3.3	1/3	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明黄橙色	やや粗		やや不良	外反		2
180	1	2SD 045		土師	皿	9.4	7.0	1.9	2/3	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡黄橙色	密		やや良	内湾		2
180	2	2SD 045		土師	皿	9.4	8.5	1.3	2/3	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡黄橙色	密		やや良	外反		1
180	3	2SD 045		土師	皿	8.5	7.5	1.6	ほぼ完形	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡黄灰色	やや密		やや良	内湾		3
18[illegible]	4	2SD 045		土師	皿	9.6	7.9	1.7	3/4	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ ナデ	回転糸切	淡黄灰色	やや密		やや良	内湾		6
180	5	2SD 045		土師	皿	10.5	9.2	2.1	1/4	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ ナデ	回転糸切	明黄茶色	やや密		やや良	内湾		4
180	6	2SD 045		土師	皿	10.3	7.9	2.0	2/3	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ ナデ	回転糸切	淡黄灰色	密		やや良	外方に開く		5
180	7	2SD 142		土師	皿	9.6	7.3	1.2	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡灰黄色	やや密		やや不良	内湾		1
181	1	2SE 055		土師	甕	16.4			口縁部 1/6	横ナデ	ナデ	刷毛			外 黄茶色 内 淡灰黄色	密	赤色粒子	良	外反		1
181	2	2SE 055		土師	火舎				口縁部 細片	ナデ	ナデ	刷毛			暗黄褐色	密		良	内湾	口縁部外面直下に篦描き模様有	3
181	3	2SK [illegible]55		土師	羽釜	28.6			鍔部 [illegible]		ナデ 刷毛	ナデ 刷毛			外 灰褐色 内 暗黄橙色	やや密		良		鍔部の幅は 2.4cm	2
182	1	2SX 020		土師	皿		[illegible]		底部 1/2		指頭圧痕	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡黄茶色	密		良			1
182	2	2SX 020		染付	碗				体部 細片		施釉	施釉	施釉	施釉	灰白色	密		良			2
182	4	2SX 034		土師	坏	13.4	9.2	2.9	ほぼ完形	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	外 灰黄色 内 淡灰黄色	密		やや良	内湾		1
182	5	2SK 063		土師	皿	8.7	6.6	1.7	口縁部 1/3欠損	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡黄橙色	やや粗		やや不良	僅かに外反		1
182	6	2SK 063		土師	土鍋				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	刷毛			外 暗黄灰色 内 淡黄灰色	やや密		やや良	玉縁状	外面に煤付着	2
182	7	2SX 064		土師	皿	8.8	5.2	1.9	1/3	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明赤茶色	密		良	外方に開く		1
182	8	2SX 064		土師	ミニチュア	2.4	1.6	1.4	完形	横ナデ	指頭圧痕	ナデ	ナデ	未調整	淡黄茶色	やや密		良	内湾		2
182	9	2SX 076		土師	土鍋				口縁部 細片	横ナデ	[illegible] 指頭圧痕	刷毛			鈍黄橙色	やや粗	金雲母	やや良	玉縁状		8
182	10	2SX 076		青磁	碗		[illegible]		底部 1/2		施釉	施釉	施釉	削出	素地 灰白色 釉薬 淡緑灰色	精良		良		内定見込に文様有	7
182	11	2SX 076		土師	皿	8.8	7.6	1.7	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	赤褐色	密		良	外方に開く		1
182	12	2SX 076		土師	皿	8.8	6.7	1.4	4/5	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ ナデ	回転糸切	明赤褐色	やや密	石英	やや良	内湾	歪みが大きい	4
182	13	2SX 076		土師	皿	8.8	6.1	2.2	2/3	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	外 淡黄褐色 内 明赤褐色	密		良	内湾		5
182	14	2SX 076		土師	皿	8.9	7.2	1.3	ほぼ完形	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	外 暗黄茶色 内 赤褐色	やや密	石英・角閃石	やや良	僅かに外反	歪みが大きい	2
182	15	2SX 076		土師	皿	9.1	7.6	1.8	ほぼ完形	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明黄橙色	やや密		良	僅かに外反		3
182	16	2SX 084		土師	皿	9.2	7.4	1.7	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	暗赤褐色	密		良	内湾		2
182	17	2SX 084		土師	皿	9.8	8.0	1.4	3/4	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	外 淡黄茶色 内 明灰茶色	やや密	1mm大の砂粒	やや良	僅かに内湾		1[illegible]
182	18	2SX 084		土師	皿	10.0	8.4	1.7	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ ナデ	回転糸切	外 赤褐色 内 淡黄茶色	やや密		やや良	僅かに内湾		9
182	19	2SX 084		土師	皿	11.3	9.1	1.4	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡灰茶色	密		やや不良	外反		8
182	20	2SX 084		土師	坏	7.6	4.2	2.0	2/3	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明黄橙色	密		良	外方に開く		3
182	21	2SX 084		土師	坏	7.6	4.7	2.0	3/4	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡黄橙色	密		やや良	外方に開く		4
182	22	2SX 084		土師	坏	12.0	7.2	3.2	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明黄橙色	やや密		やや良	外方に開く		5
182	23	2SX 084		土師	坏	12.2	8.0	2.7	1/4	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	淡黄茶色	やや密		やや良	内湾		6
182	24	2SX 084		土師	坏	13.0	7.6	3.2	1/3	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明赤褐色	やや密	赤色粒子	良	外方に開く		1

Tab.24　出土遺物観察表（土器）①

Fig	No	遺構番号	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	口縁部	体外部	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	備考	[illegible]
182	25	2SX 084		土師	坏	13.7	9.3	[illegible]	[illegible]	横ナデ	横ナデ	横ナ[illegible]	横ナデ ナデ	回転糸切	灰白色	やや密		不良	内湾		[illegible]
182	26	2SX 096		土師	皿	7.5	5.6	1.9	ほぼ完形	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	赤褐色	密	赤色粒子	やや良	外方に開く		[illegible]
182	27	2SX 0096		土師	皿	[illegible]	[illegible]	1.9	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明黄橙色	密		良	外反		[illegible]
182	28	2SX 096		土師	皿	7.6	6.4	1.4	3/4	横ナ[illegible]	横ナデ	横ナデ	横ナデ ナデ	回転糸切	暗黄茶褐色	密	赤色粒子	やや良	外反		[illegible]
182	29	2SX 096		土師	[illegible]	8.0	6.7	1.5	3/4	横ナ[illegible]	横ナデ	横ナデ	横ナ[illegible]	回転糸切	明[illegible]茶色	[illegible]		良	外反		[illegible]
182	30	2SX 096		土師	[illegible]				口縁部 部片	横ナ[illegible]	[illegible] 刷毛	刷毛			淡黄褐色	やや[illegible]	金雲母	やや良	玉縁状		[illegible]
182	31	2SX 096		須恵	擂鉢		6.0		底部 [illegible]		指頭[illegible]	[illegible]			外 暗灰色 内 暗黄灰色	密		[illegible]			[illegible]
[illegible]	1	表土		須恵	高坏				脚部 1/2		ナデ	ナデ			暗黄灰色	精良		[illegible]			[illegible]
[illegible]	[illegible]	表土		土師	坏	12.8	9.4	2.6	1/3	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	暗黄灰色	やや密		やや良	内湾		[illegible]
[illegible]	[illegible]	表土		土師	坏	13.7	10.2	3.2	3/4	横ナ[illegible]	横ナデ	横ナデ	横ナデ	[illegible]転糸切	[illegible]灰黄色	やや密		やや不良	僅かに内湾		[illegible]
183	4	表土		土師	[illegible]		[illegible]		底部 完存		横ナデ	横ナデ	横[illegible]	回転糸切	淡黄褐色	密		[illegible]			[illegible]
[illegible]	[illegible]	表土		土師	[illegible]				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	刷毛			外 暗黄橙色 内 暗赤褐色	やや密	金雲母	やや不良	玉縁状		[illegible]
[illegible]	[illegible]	表土		染付	碗		[illegible]		底部 1/2		施釉	施釉	施釉	施釉	素地 [illegible]灰白色 釉薬 灰白色	精良		良		高台見込に「[illegible]」の銘有 [illegible]付のみ施釉	[illegible]
[illegible]	[illegible]	表土		白磁	碗	8.0	3.8	4.1	口縁部 大半欠損	施釉	施釉	施釉	施釉	[illegible]	素地 灰白色 釉薬 灰白色	精良		良	内湾	[illegible]付のみ施釉	[illegible]
183	8	表土		青磁	碗		[illegible]		底部 [illegible]		施釉	施釉	施釉	施釉	素地 淡灰白色 釉薬 淡緑灰色	精良		[illegible]		[illegible] I 5 b	[illegible]

Tab.25　出土遺物観察表（土器）①

Fig	No	遺構番号	層位	素材	産地	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	残存	備考	[illegible]
180	3	2SX032		銅		梵鐘	9.3	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]
178	2	2SD040		銅		[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]		[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	完形	[illegible]孔銭	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]		[illegible]	2.3	[illegible]	[illegible]	[illegible]	完形	[illegible]孔銭	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]		[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	完形		[illegible]

Tab.26　出土遺物観察表（土器）①

は関連する集落の一部に当たる可能性が高い。当地の小字が「屋敷」であり、この小字は坂東寺の薬師堂跡（現在の坂東寺の位置にあたる）附近の小字と同じ小字になっている。このことと、1SX032から出土した梵鐘を考え合わせると、当地には、坂東寺に関連する施設が置かれていた可能性を想起させる。もちろん、坂東寺の支配下にあった集落や、その他坂東寺関連の集落があった可能性を否定するには及ばない。なぜならば、この梵鐘以外に宗教色のある遺物の出土もまたないからである。

いずれにしても、今後周辺の調査事例が増加して一帯の様相が明らかにされることを期待したい。

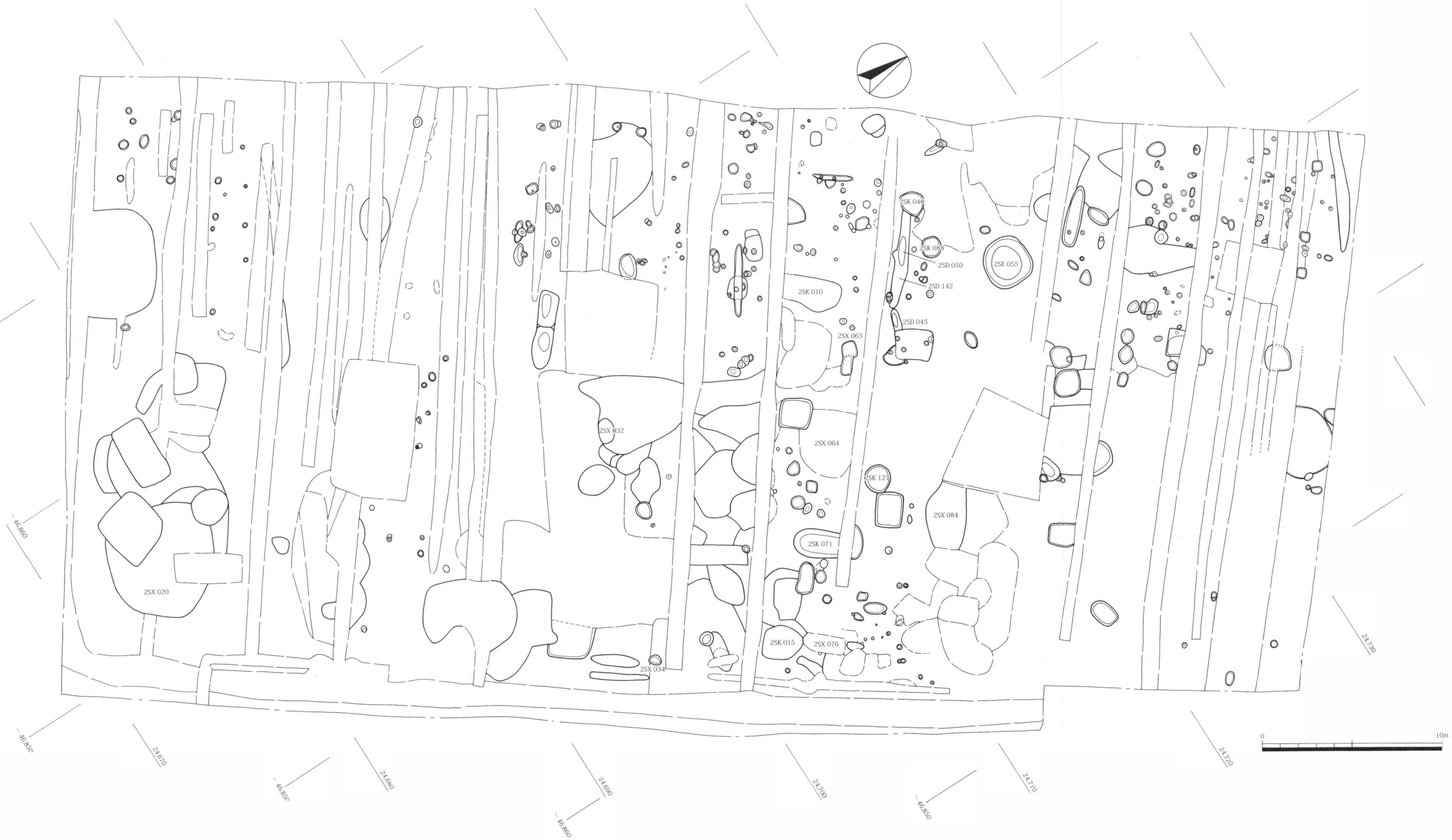


Fig.184　遺構全体配置図

6. 蔵数東野屋敷遺跡（第２次調査）

蔵数東野屋敷遺跡第２次調査は、宅地分譲に先立つ事前調査として実施した。平成７年度に事業者から当該地における埋蔵文化財の有無について照会がなされた。試掘調査の結果、全域に遺構の所在することが明らかとなり、協議の結果、遺構の保全は不可能との結論に達した。そのため、記録保存のための発掘調査を実施することとし、廃土置き場の都合上、調査区を反転することにより、２回にわけて調査することとなった。現地での調査に掛かる費用は事業者側で負担し、後年度での実施となる報告書作成費用については筑後市で負担することとした。現地での調査は平成７年 11 月から平成８年２月までで実施した。調査は永見が担当し、大島真一郎（現：黒木町教育委員会）の協力を得た。

先に述べたとおり、この調査は反転により２分割して実施した。実施にあたっては、東西２つに調査

Fig.185　調査区位置図（1/2,500）

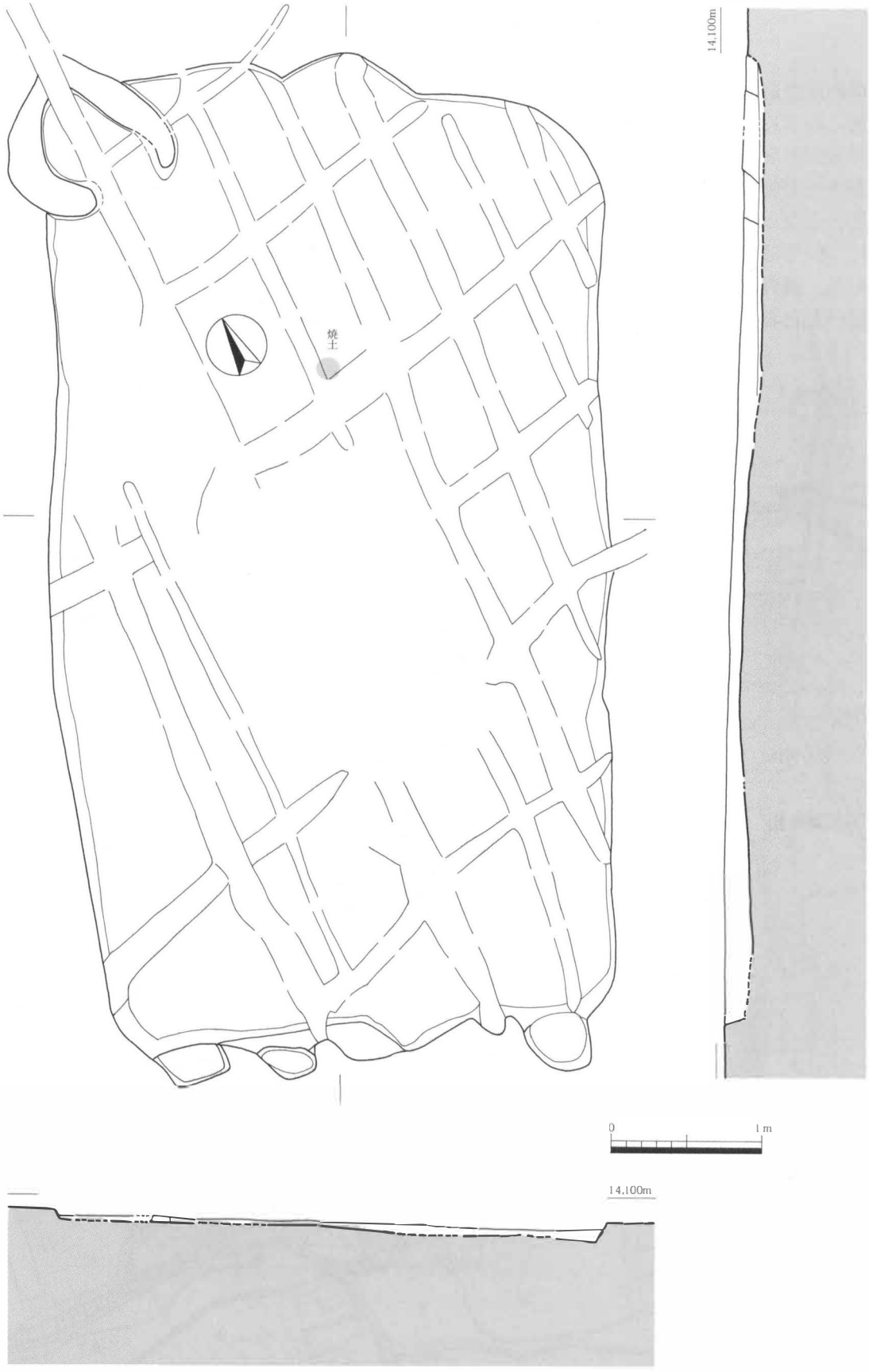


Fig.186　2SI010 実測図（1/40）

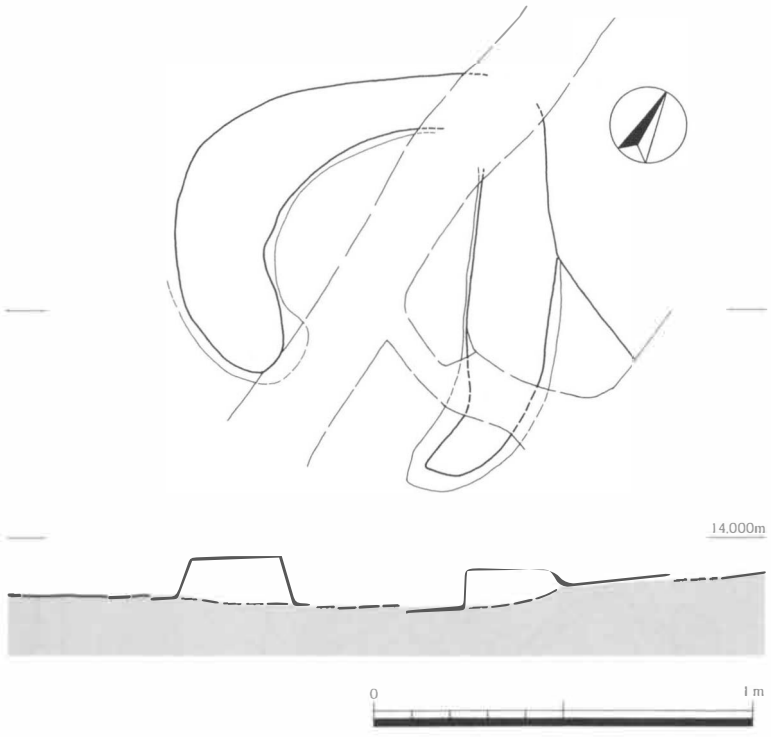


Fig.187　2SI10 竈実測図（1/20）

区を分割し、東側から先に着手をした。反転時には調査区に若干の重複が生まれるように留意し、掘り残しのないように努めた。

遺構

上記のような調査区設定をおこなって調査を実施した結果、竪穴住居、土坑、不明遺構などを検出した。ただ、全体的に葡萄畑耕作時の撹乱が激しく、遺構の把握には手間取った。以下、遺構種類別に報告したい。

竪穴住居

今回の報告では２基を報告する。この２棟は切り合って検出され、１遺構である可能性も否定できない。このことについては、別項で検討を行なう。ここでは、２棟別々の遺構として報告する。以下、遺構別に報告したい。

2SI010（Fig.186・187、Pla.72）

調査区の東寄りに位置する。2SI050 を切る形で検出し、貼り床が施されている。床面までの深さは 0.1m を測る。北西の隅に竈が配置され、対角線上に向かって開口する。竈の袖は地山削り出しではなく、粘土を積んで形成されている。竈内部等に特別な施設は認められない。また、貼り床を除去すると住居の掘方があらわれるが、その深さは、遺構面から 0.3 m である。また、貼り床の下から土坑が３基と小土坑が２基、柱穴と見られる小穴が４基認められた。

出土遺物には、土師器（坏・甕・壷・把手）がある。

2SI050（Fig.188、Pla.72）

調査区の東寄りに位置する。2SI010 に切られる形で検出され、貼り床や竈は確認できなかった。中央に土坑が２基と柱穴と思しき小穴が２基確認された。南北 6.5 m 深さ 0.2 m を測るが、東西方向は 1SI010 に切られているため判然としない。

出土遺物には、須恵器（壷）・土師器（甕・坏・高坏・甑・把手・手づくね）がある。

土坑

今回の報告では５基を報告する。

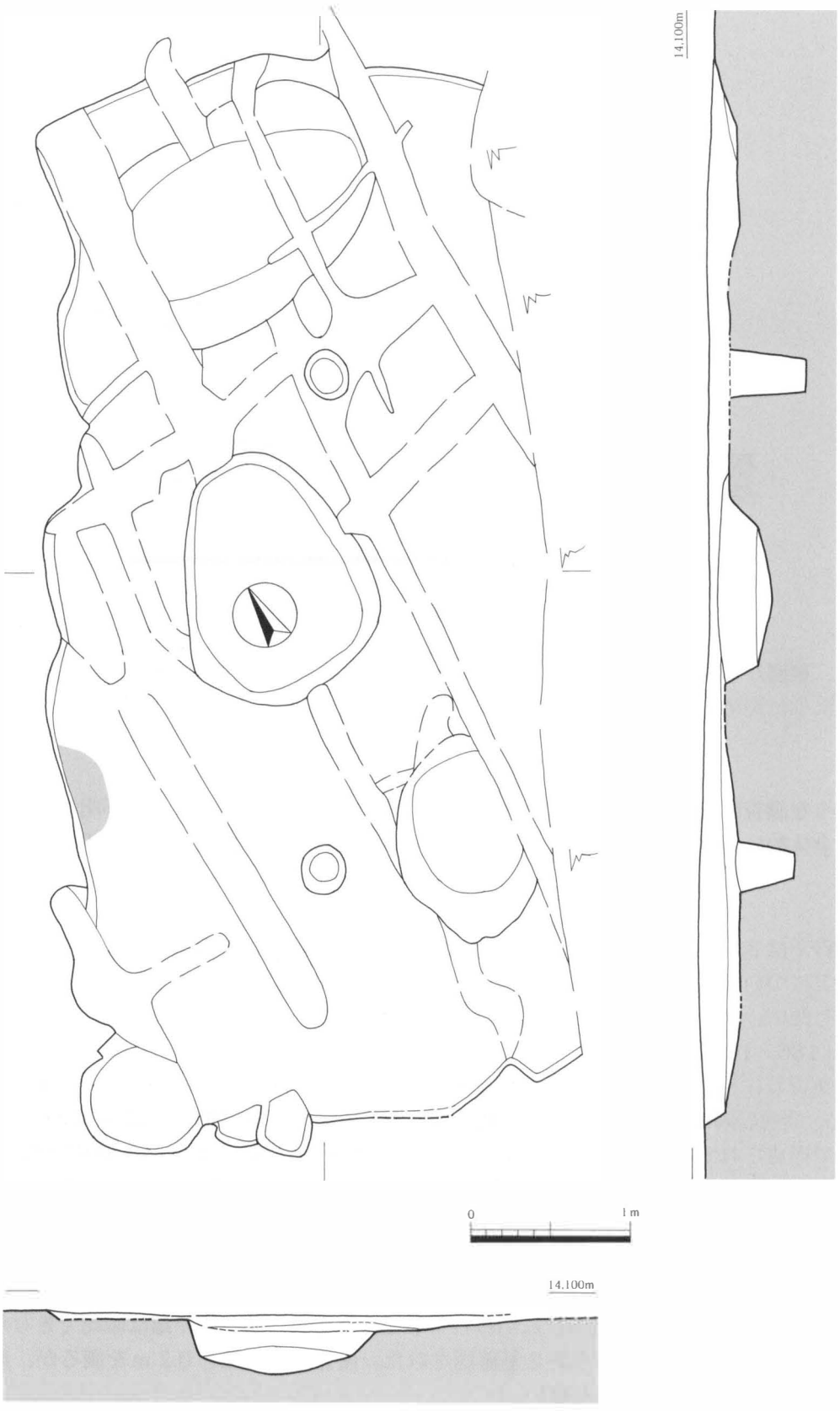
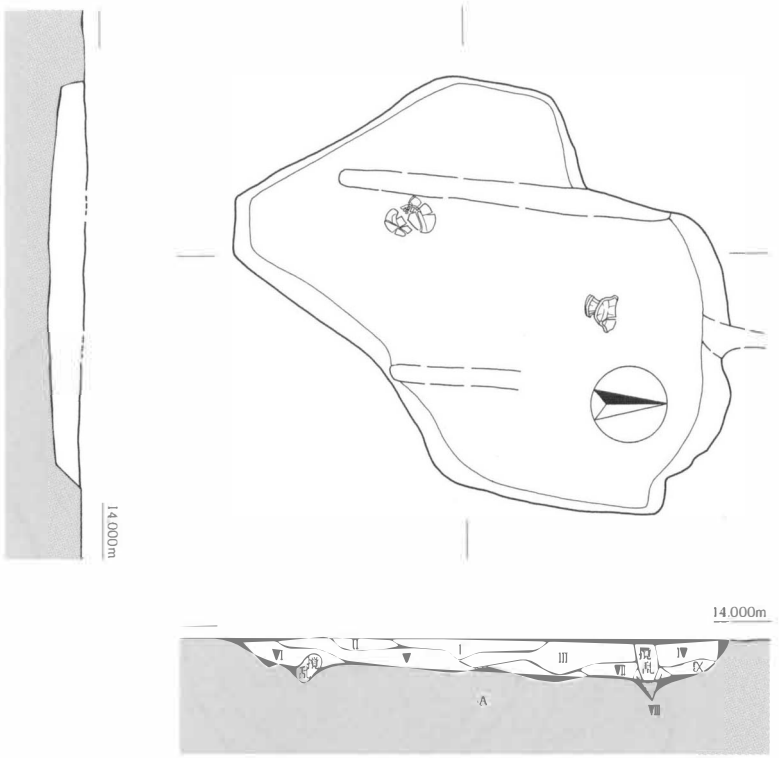


Fig.188　2SI50 実測図（1/40）



Ⅰ　淡黒茶色砂質土（多量の淡黄茶色粒子を含み、しまりは若干弱い）
Ⅱ　淡黒茶色砂質土（Ⅰよりやや暗め、粒子減）
Ⅲ　淡灰茶色砂質土（少量の淡黄茶色小ブロック、明橙色粒子、多量の淡黄茶色粒子を含み、しまっている）
Ⅳ　淡黒茶色砂質土（多量の淡黄茶色粒子を含み、しまっている）
Ⅴ　明黒茶色砂質土（一部地山大ブロックを含み、稠密で程良くしまる）
Ⅵ　明黒茶色砂質土（少量の淡黄茶色小ブロックを含み、Ⅴに似る）
Ⅶ　淡灰茶色砂質土（多量の淡茶色粒子を含む）
Ⅷ　淡灰茶色砂質土（相当量の淡黄茶色ブロック塊を含む）
Ⅸ　淡黒茶色砂質土（Ⅳに似るがやや暗めで、ブロック多め、かなりしまっている）
Ⓐ　淡黄茶色粘質土：〔地山〕

Fig.189　2SK05 実測図（1/40）

2SK05（Fig.189、Pla.73）

調査区の南東に位置し、南北 2.6 m東西 2.2 mで、深さは 0.2 mである。平面形状は不定形で２つの遺構がつながっているかのようにも見える。

出土遺物は、土師器（甕・坏・壷・高坏・手づくね）がある。

2SK14（Fig.204）

調査区の南寄りに位置し、南北 1.2 m東西 1.2 m深さ 0.1 mを測る。平面形態は楕円形である。

出土遺物は、土師器（坏）がある。

2SK15（Fig.190、Pla.74）

調査区の中央附近に位置し、上面は崩れた楕円形を呈するが、下部は比較的整った円形である。上面の規模は、南北 2.8 m東西 3.9 mを測る。下部は南北 2.1 m東西 2.2 mで、上面から底面までの深さは 1.3 mを測る。

出土遺物は、土師器（甕）・白磁（皿）がある。

2SK19（Fig.204、Pla.74）

調査区の中央附近に位置し、南北 1.3 m東西 1.1 m深さ 0.5 mを測る。平面形態は略長方形である。

出土遺物は、土師器（甕・壷・坏・支脚）がある。

2SK29（Fig.191、Pla.75）

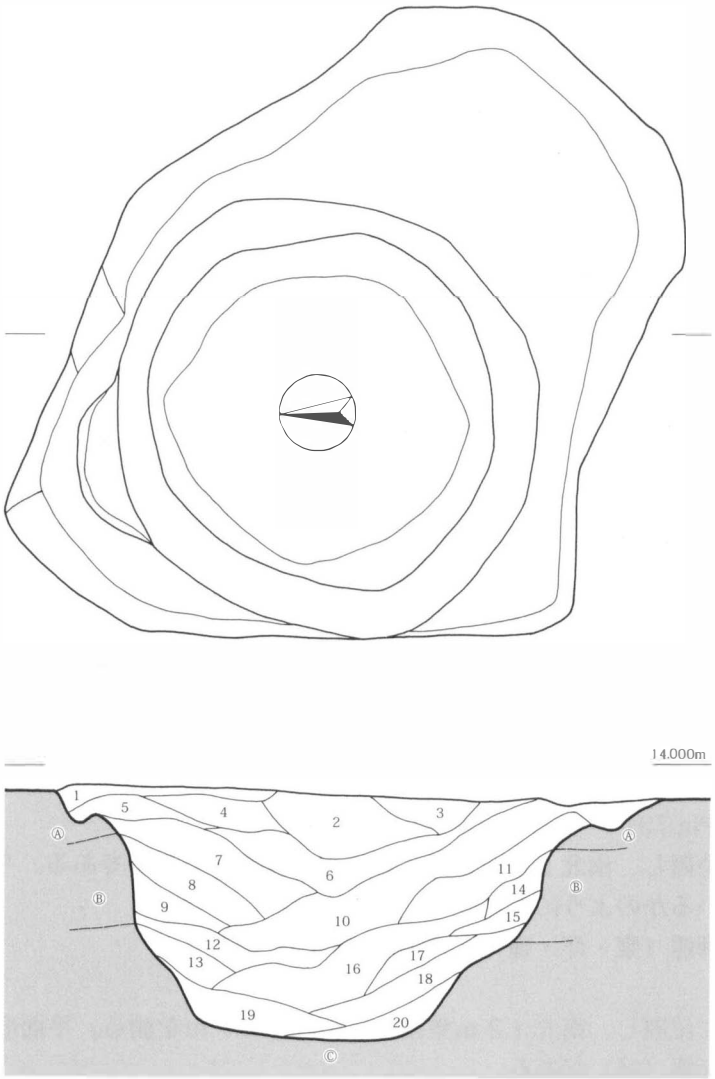
調査区の中央附近に位置し、南北 1.2 m東西 0.9 m深さ 0.2 mを測る。平面形態は隅丸方形である。

出土遺物は、土師器（甕）がある。

不明遺構

2SX21（Fig.204）

調査区の中央に位置し南北 0.6 m東西 0.3 m深さ 0.1 mを測る。平面形態は楕円形である。



Ⅰ
1　淡黒茶色砂質土　（均一・少量の淡黄茶色大ブロックを含み、適当にしまっている）
2　明黒茶色砂質土　（多量の淡黄茶・淡茶色粒子、少量の明橙色小ブロックを含み、しまりは弱い）
3　淡黒茶色砂質土　（多量の淡黄茶色大ブロック、淡灰茶色小ブロックを含む）

Ⅱ
4　淡黒茶色砂質土　（少量の灰黄色粒子、豆礫を含み、しまっている）
5　淡黒茶色砂質土　（4に似るが、豆礫含まず）
6　明黒茶色砂質土　（若干の豆礫、少量の灰黄色・明橙色小ブロックを含み、程良くしまっている）

Ⅲ
7　淡黒茶色砂質土　（混入物は6に同じ、若干の粘質味を帯びる。かなりしまっている）
8　淡黒茶色砂質土　（混入物は7より各々減、粘質味減）
9　淡灰茶色砂質土　（ごく少量の淡灰黄色粒子を含み、少々水っぽい）
10　淡黒茶色砂質土　（相当量の小礫を含み、程良くしまっている）
11　淡黒茶色砂質土　（10より混入物減、やや暗め）

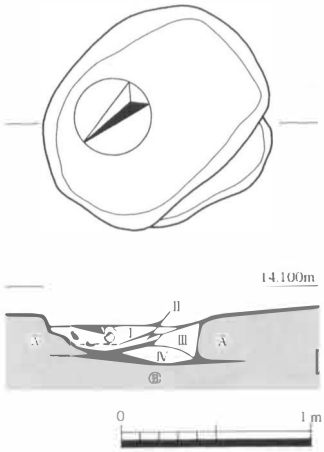
Ⅳ
12　淡灰茶色砂質土　（9に似るが、淡黄茶色小ブロック含み、やや明るい、粘性微増）
13　淡灰茶色砂質土　（9に酷似）
14　淡黒茶色砂質土　（少量の淡黄茶色小ブロックを含み、かなりしまっている）
15　淡黒茶色砂質土　（14に似るが、やや黒色味を増す）
16　淡灰茶色砂質土　（少量の豆礫を含み、やや粘性を帯びる）
17　淡灰茶色砂質土　（16に酷似、やや暗め）

Ⅴ
18　淡黄茶色砂質土　（ごく少量の淡灰黄色粒子を含み、程良いしまりがある。粘質上混）
19　淡灰茶色砂質土　（若干の小礫、淡黄茶色粒子を含み、若干の粘性を帯びる）
20　淡黄茶色粘質土　（ごく少量の明橙色粒子を含む、かなりしまっている）

Ⓐ：地山　淡茶色粘質土
Ⓑ：地山　淡黄茶色粘質土
Ⓒ：地山　淡灰黄色砂質土（小礫混）

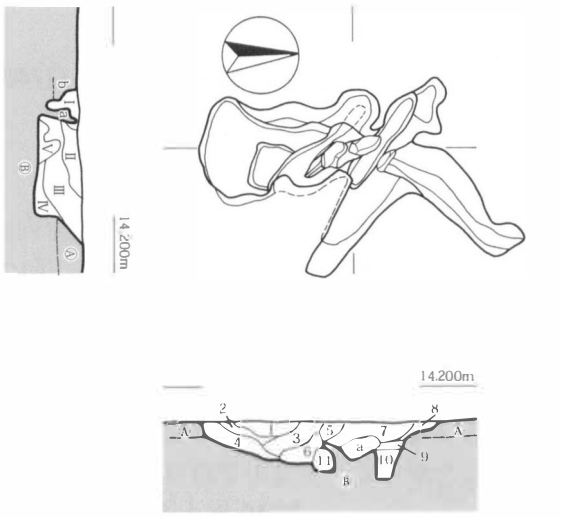
0　1m

Fig.190　2SK15 実測図（1/40）



Ⅰ　淡黒茶色砂質土　（ごく少量の灰白色粒子を含み、適当にしまっている）
Ⅱ　淡黒茶色砂質土　（Ⅰに似るがやや黒色味を増す）
Ⅲ　淡黄茶色粘質土　（かなりしまっている）
Ⅳ　淡黒茶色砂質土　（少量の淡黄茶色・明橙色粒子を含み、稠密にしまっている）
Ⓐ　淡黄茶色粘質土：地山
Ⓑ　明黄茶色粘質土：地山

Fig.191　2SK29 実測図（1/40）



Ⅰ　淡黒茶色砂質土　（少量の淡黄茶色・明黄茶色粒子、右辺に明黄茶色大ブロックを含み、かなりしまっている）
Ⅱ　淡黒茶色砂質土　（多量の淡黄茶色大ブロック、少量の明橙・灰黄色粒子を含み、かなりしまっている）
Ⅲ　淡黒茶色砂質土　（多量の淡黄茶色粒子、少量の明橙色粒子、及び数個の淡黄茶色大ブロックを含み、稠密にしまっている）
Ⅳ　淡黒茶色砂質土　（多量の淡黄茶色小ブロック［地山ブロックか］を含む）
Ⅴ　淡黄茶色粘質土：［地山］
a　焼土：淡灰色・淡橙茶色灰混炭
b　焼土：淡灰色・淡茶茶色灰混炭
Ⓐ　淡黄茶色粘質土：地山
Ⓑ　明黄茶色粘質土：［地山］

Ⅰ　1　淡黒茶色砂質土　（少量の明橙茶色大ブロック、粒子を含み、ややしまりが弱い）
　　2　淡黒茶色砂質土　（少量の灰白色微粒子を含み、適度にしまっている）
Ⅱ　3　淡黒茶色砂質土　（多量の明橙茶色小ブロック、上部に淡黄茶色小ブロックを少量含み、適度にしまっている）
Ⅲ　4　淡黒茶色砂質土　（多量の淡黄茶色・灰白色粒子、少量の淡茶色粒子を含み、かなりしまっている［粘質土混］）
Ⅳ　5　淡黒茶色砂質土　（下部に淡黄茶色大ブロックを含み、相当しまっている）
　　6　淡黒茶色砂質土　（数個の淡黄茶色大ブロック、多量の淡黄茶色粒子を含み、相当しまっている）
Ⅴ　7　淡黒茶色砂質土　（少量の灰黄色粒子、\層境に焼土、淡黄茶色ブロックを含み、かなりしまっている）
　　8　淡黒茶色砂質土　（少量の明橙茶色粒子、淡黄茶色小ブロックを含み、かなりしまっている）
Ⅵ　9　淡黒茶色砂質土　（少量の淡黄茶色小ブロック、灰白色粒子を含み、相当しまっている［粘質土混］）
　　10　淡茶色粘質土　（少量の淡黄茶色粒子を含む）
　　11　明黒茶色砂質土　（多量の淡黄茶色大・小ブロックを含み、適度にしまっている）
a　焼土
Ⓐ：地山　淡黄茶色粘質土
Ⓑ：地山　明黄茶色粘質土

Fig.192　2SX25 実測図（1/40）

出土遺物は、黒色土器（A 碗）がある。

2SX25（Fig.192、Pla.75）

調査区の中央附近に位置し南北 1.7 m東西 1.0 m深さ 0.2 mを測る。平面形態は非常に複雑な形状をしており、一言では言い表せない。

出土遺物は、土師器（甕・坏）がある。

2SX33（Fig.193）

調査区の北東に位置し南北 1.6 m東西 1.4 m深さ 0.7 mを測る。平面形態は花びら状である。出土遺

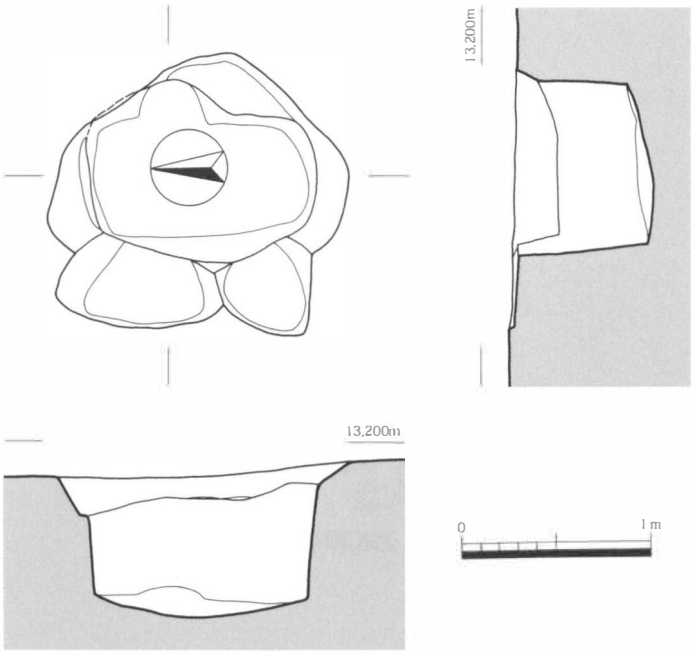


Fig.193　2SX33 実測図（1/40）

物は認められなかった。

2SX55（Fig.194、Pla.76）

調査区の東寄りに位置し 1SI50 を切っているが、1SI50 の屋内土坑となる可能性も否定しきれない。南北 1.1 m東西 0.8 m深さ 0.2 mを測る。平面形態は楕円形に近い。

出土遺物は、土師器（坏）がある。

出土遺物

今回の調査では、総量でパンコンテナー 20 箱の遺物が出土した。遺物個々の詳細については遺物観察表によっているので、そちらを参照されたい。本文中では、観察表で表現しきれない部分や、特徴的なことを中心に記載した。したがって、本文中で取り上げない遺物もある。以下、遺構別に報告する。

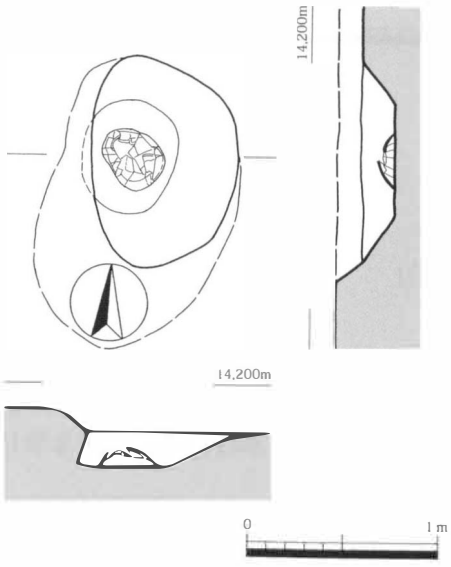


Fig.194　2SX55 実測図（1/40）

2SI10 出土遺物（Fig.195、Pla.77）

すべて土師器である。1 ～ 5 は半裁時に出土した。1 ～ 3 は坏である。いずれも丸底になると思われる。4 は把手で、把手部分のみが遺存していた。把手は本体の体部外面に貼り付ける構造であったようだ。

6 はⅡ層から出土した坏である。丸底になると思われ、口縁部は内湾している。

7 と 8 はⅢ層から出土した坏である。いずれも丸底になると思われる。8 は口縁部の下で屈曲し、下部は篦削りを施している。

9 ～ 11 はⅣ層からの出土である。9 は甕の口縁部である。口縁部は外反し、端部は丸く収めている。体部外面には刷毛目が認められ、内部内面は篦削りを施している。10 と 11 は坏である。いずれも丸底坏になると思われる。ともに口縁部は内湾するが、11 は端部が内側に折れ曲がっている。

12 と 13 は竈袖内からの出土である。12 は丸底の坏にな

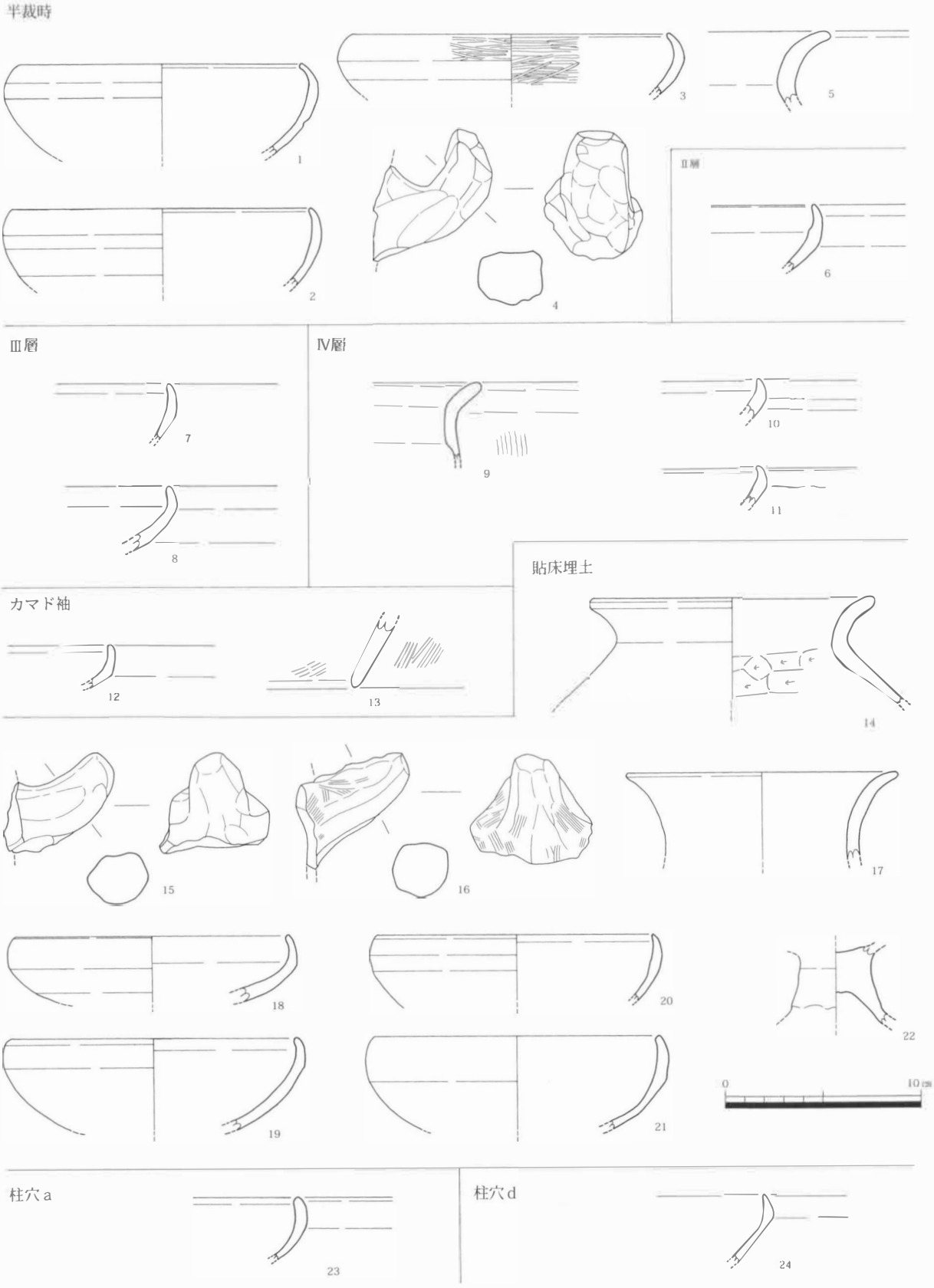


Fig.195　2SI10 出土遺物（1/3）

Fig.196　2SI50 出土遺物実測図（1/3・1/2）

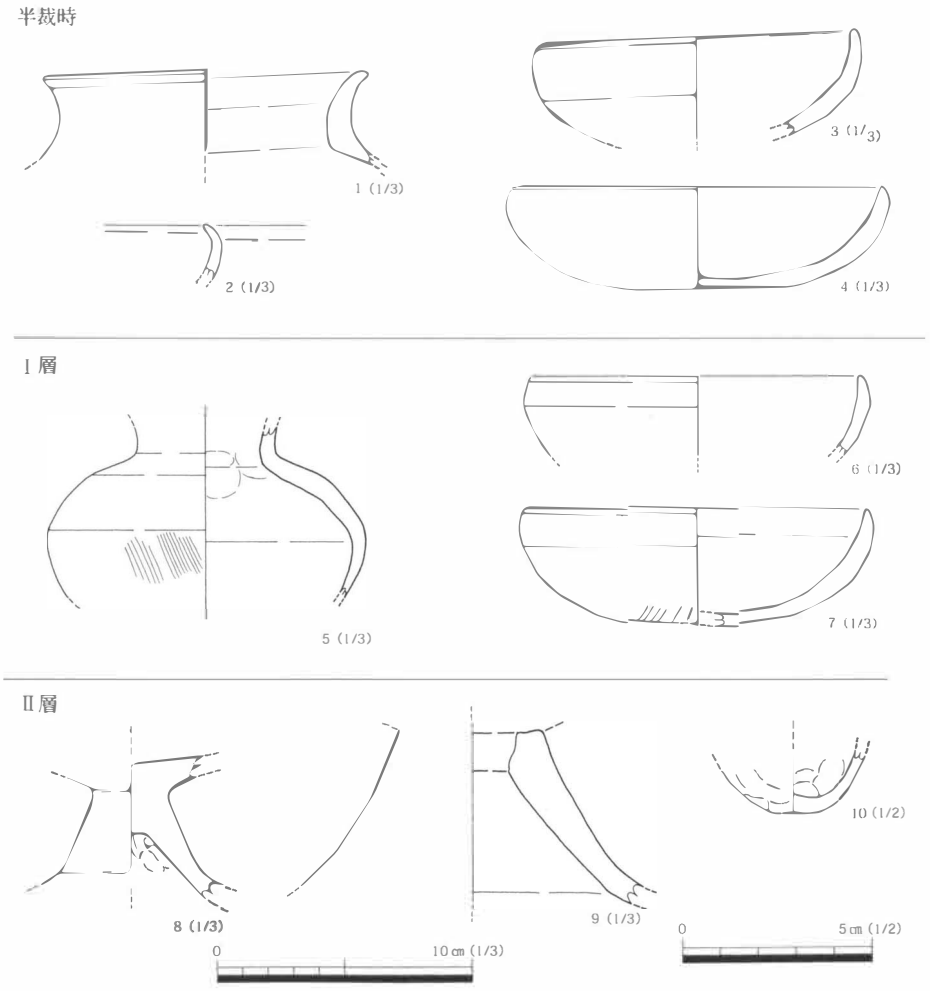


Fig.197　2SK05 出土遺物実測図（1/3・1/2）

ると思われる。口縁部は内湾し、端部は内側に折れ曲がっている。13 は甑の底部である。筒状の形態の甑で、底部は丸く収めている。

14 ～ 21 は貼床の埋土から出土した。14 は甕の口縁部である。口縁部は外反し、端部は丸く収めている。体部外面はナデ調整で、内面には箆削りを施している。15 と 16 は把手である。いずれも、体部外面に貼り付く形状であったと思われる。16 は把手の表面に若干の刷毛目が認められる。17 は壷である。垂直に立ち上がる頸部から外反する口縁部にかけての資料である。口縁端部には不明瞭ながら面が形成されている。18 ～ 21 は坏で、すべて丸底坏になると思われる。いずれも口縁部は内湾している。22 は高坏の脚上部である。

23 は柱穴 a から出土した坏である。丸底坏になると思われる。口縁部は内湾し肥厚している。

24 は柱穴 d から出土した坏である。これも丸底坏になると思われる。口縁部下で屈曲し、口縁部は内湾している。屈曲部は器壁が厚くなっている。

2SI50 出土遺物（Fig.196、Pla.77・78）

1 は須恵器の壷であろう。体部の資料で、肩部に波状文が認められる。2 ～ 12 は土師器である。2 と 3 は甕である。いずれも外反する口縁部の資料である。2 は口縁端部に面を形成する。3 は口縁端部を丸く収め、体部内面に箆削りを施している。4 ～ 6 は坏である。いずれも丸底坏になると思われる。すべて口縁部は内湾し、4 は口縁端部に不明瞭ながら面を形成する。5 は強く内湾するのが印象的である。6 は口縁部を肥厚させている。7 は把手である。体部に差し込んで固定するもので、体部側の一部に刷毛目が認められる。8 は短頸の壷である。口縁部の内外面と体部内面に箆削りを施している。9 と

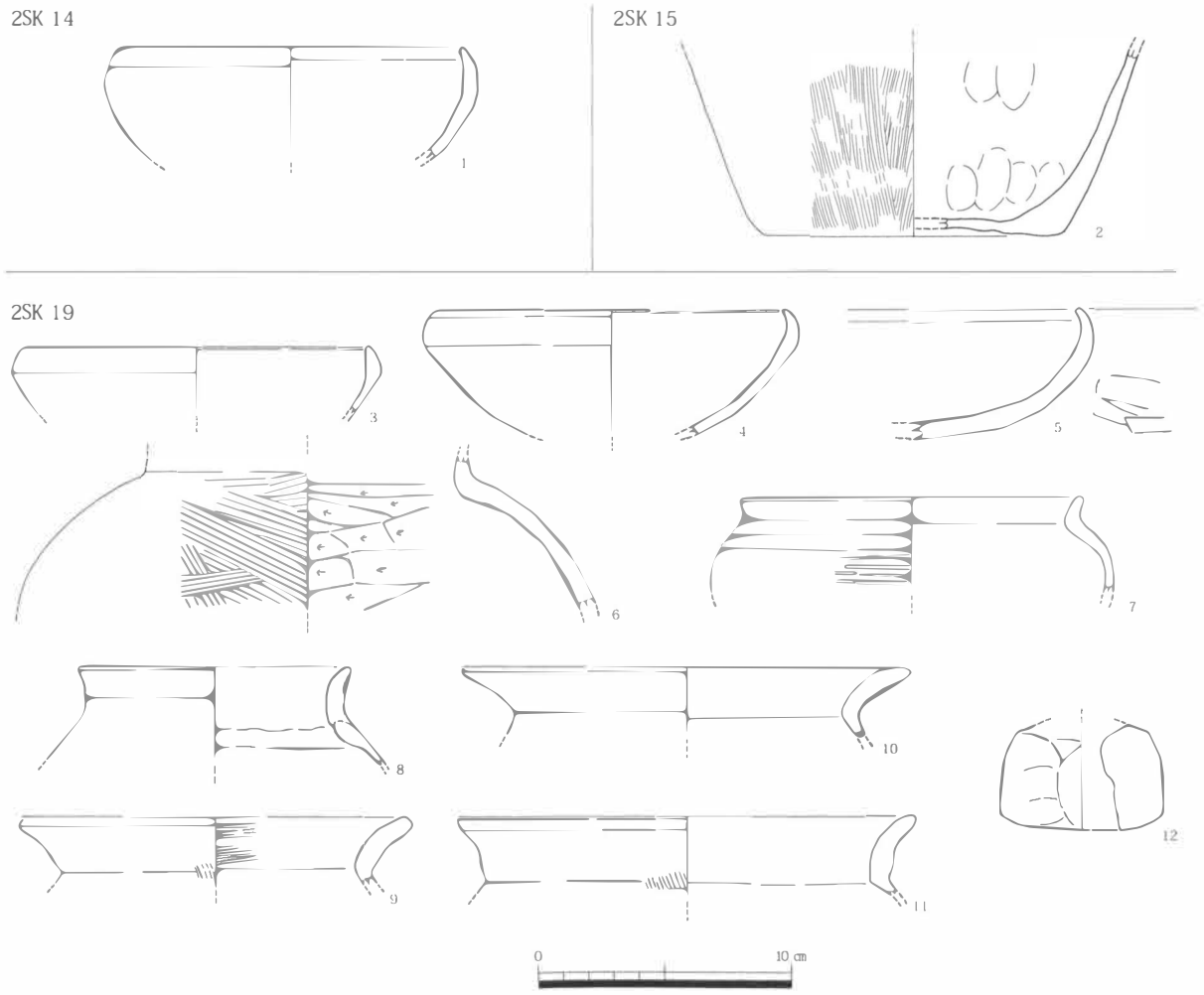


Fig.198　2SK14・2SK15・2SK19 出土遺物実測図（1/3）

10 は高坏の脚部である。坏部との接合面はいずれも厚くなっている。11 は手づくね品であるが、器形は不明である。いずれにしても小型品か。12 は甑である。ほぼ全体の器形が知れる好資料である。口縁部は小さく外反しているが、見方によっては、直立する口縁部の外面を外方につまみ出したようにも見える。上面には平坦面が形成される。また、底部は筒状になっており、底端部は面を形成している。外面には全面に刷毛目が施され、内面は篦削りによっている。口縁部と底部は横ナデが施されている。把手は篦削りで成型され、体部外面に貼り付けている。把手は上向きとなっている。

2SK05 出土遺物（Fig.197、Pla.78）

すべて土師器である。1 ～ 4 は半裁時に出土した。1 は甕である。口縁部は外反し、端部にいくにつれ器壁が薄くなる。端部は外方に小さくつまみ出される。2 ～ 4 は坏である。いずれも丸底坏である。2 は口縁部の内湾が強い。4 はほぼ全体の器形が知れる資料である。

5 ～ 7 は I 層から出土した。5 は壷である。小型丸底壷か。体部外面は刷毛目のちナデか。口縁部は外方に開いている。6 と 7 は坏である。いずれも丸底坏と思われる。6 は体部を篦削りのちナデで仕上げている。7 はほぼ全体の器形が知れる資料である。外底面には刷毛目が認められる。

8 から 10 は Ⅱ 層からの出土である。8 と 9 は高坏である。いずれも脚部の資料で、8 は脚部途中で段がついて脚底部が開くものである。9 は 8 にくらべて緩やかな段がある。10 は手づくね品の底部で、椀であろうか。

2SK14 出土遺物（Fig.198、Pla.78）

1 は土師器の坏である。丸底坏になると思われる。口縁部は内湾する。

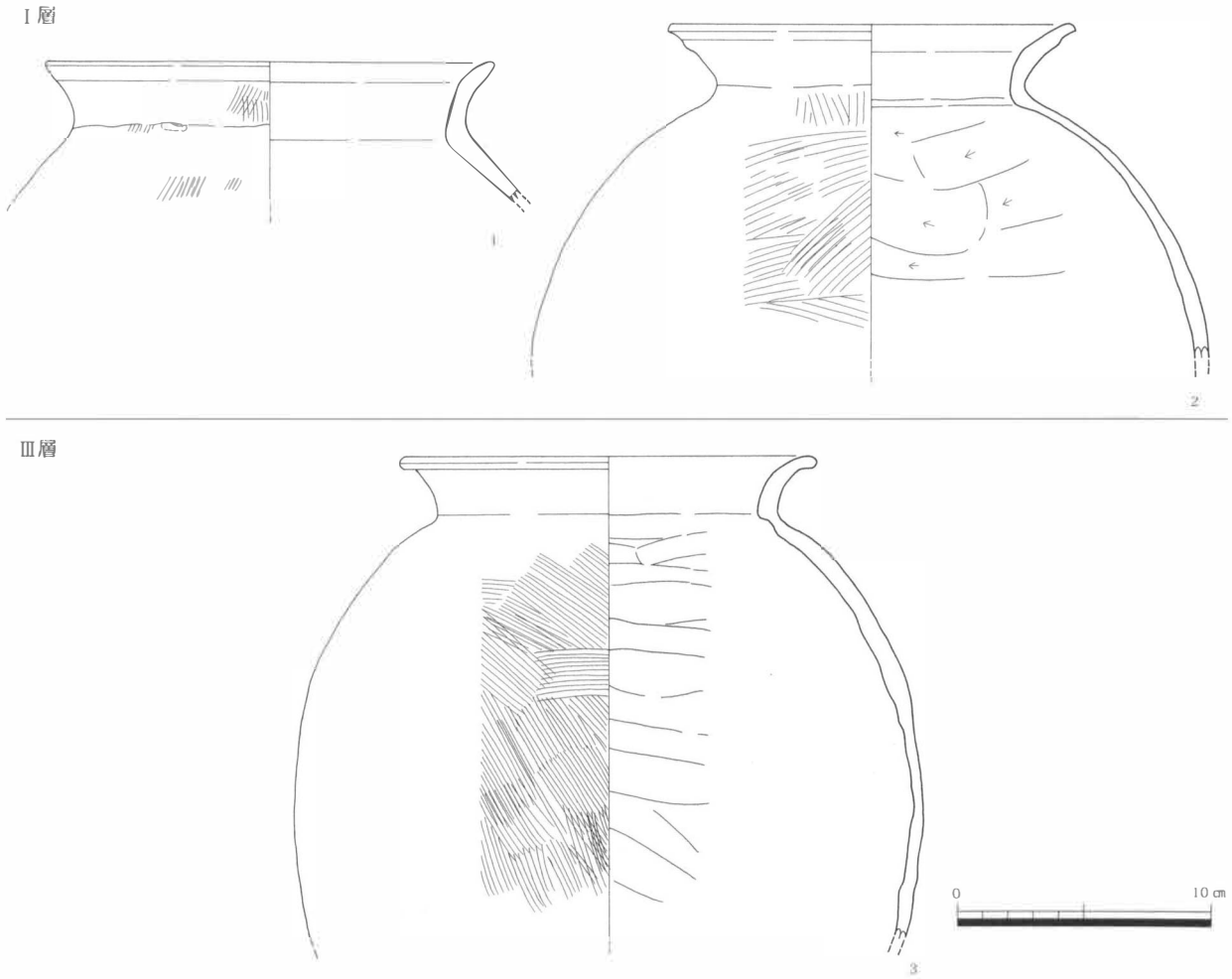


Fig.199　2SK29 出土遺物実測図（1/3）

2SK15 出土遺物（Fig.198、Pla.78）

２は土師器の甕である。平底の底部で、体部外面には刷毛目が施されている。内面には指頭圧痕が認められ、外底面はナデによっている。

2SK19 出土遺物（Fig.198、Pla.78・79）

すべて土師器である。３～５は坏である。いずれも丸底坏になると思われ、口縁部はすべて内湾する。３と４は口縁部下で屈曲し、特に３は屈曲が顕著である。５は大きく弧を描くように内湾する器形が特徴的である。６と７は壷である。６は頸部がほぼ直立すると思われる。体部外面は刷毛目、内面は箆削りが施されている。７は短頸壷で、器形は鉢に近い。体部外面には箆磨きが施されている。８～11 は甕である。8は比較的直立する口縁部が特徴的である。9は外反する口縁部の端部に明瞭な面を形成する。また、口縁部の器壁が厚いのが印象的である。10 と 11 は大きく外反する口縁部が特徴的で、10 よりも 11 の方が直立気味となる。

2SK29 出土遺物（Fig.199、Pla.79）

すべて土師器である。１と２はⅠ層から出土した甕である。いずれも口縁部は外反する。１は口縁部の外面にも刷毛目が認められる。２は体部中程までが残存する資料で、体部外面は刷毛目が施され、内面は箆削りが認められる。

３はⅢ層から出土した甕である。上半部が遺存しており、口縁部は外反させたのち端部を外下方につまみ出している。体部の外面には刷毛目を施し、内面には箆削りを行なっている。

2SX25 出土遺物（Fig.200、Pla.79）

すべて土師器である。１～３は半裁時の出土である。１と２は甕で、ともに外反する口縁部を持つ。

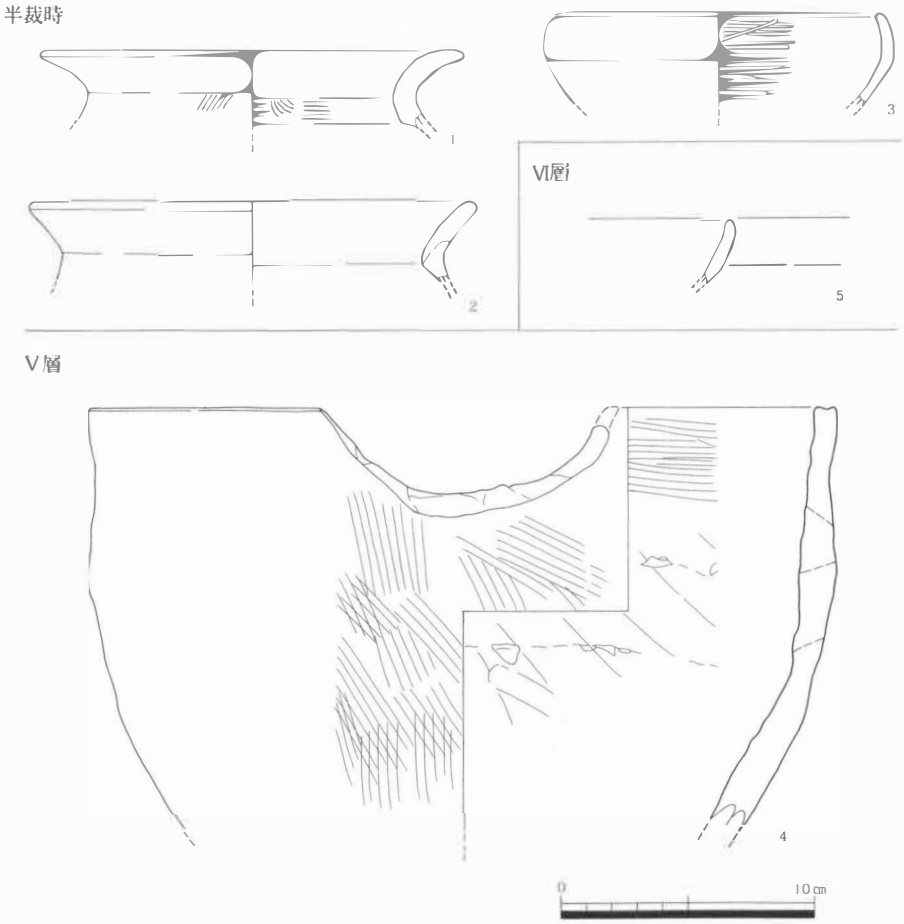


Fig.200　2SX25 出土遺物実測図（1/3）

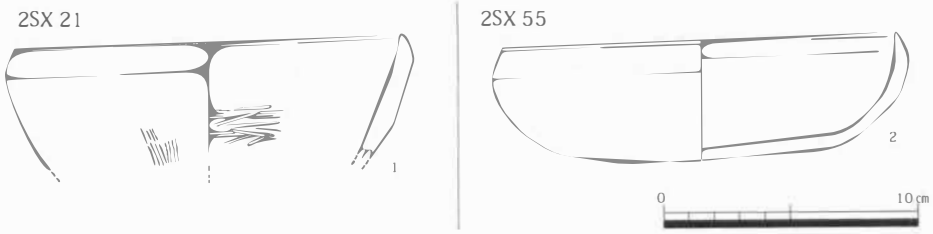


Fig.201　2SX21・2SX55 出土遺物実測図（1/3）

1 の方が器壁が厚く、口縁部も弧を描くように外反する。2 は口縁部が直線的である。3 は坏で丸底坏と思われる。口縁部は内湾し、内面には篦磨きが施されている。

4 はⅤ層出土の甕である。口縁部は直立し、上面は平坦に仕上げられている。外面は指押さえのち刷毛目を施し、内面は篦削りである。口縁部には焼成後の打ち欠きが行なわれ、半円状に丁寧に欠き取られている。

2SX21 出土遺物（Fig.201、Pla.79）

1 は土師器の坏である。丸底坏になると思われる。他の丸底坏と比べて体部が直線的である。内面に篦磨きが認められる。

2SX55 出土遺物（Fig.201、Pla.79）

2 は土師器の坏である。丸底坏であるが、底面は平底に近い。体部および口縁部は内湾する。

Fig.	No	遺構 番号	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	口縁部	体外部	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	備考	R.No
195	1	2SI 10		土師	坏	14.6			口縁部 1/8	不明	不明	不明			黒褐色	密	赤色粒子	良	内湾		[illegible]
195	2	2SI 10		土師	坏	15.2			口縁部 1/8	横ナデ	箆削り	ナデ			外 淡赤茶色 内 赤茶色	密	赤色粒子	良	内湾		[illegible]
195	3	2SI 10		土師	坏	18.2			口縁部 1/8	箆磨き	箆削り	箆磨き			外 淡黄橙色 内 黒褐色	密		良	内湾		[illegible]
195	4	2SI 10		土師	把手				把手 完存		ナデ				赤茶色	密		良			[illegible]
195	5	2SI 10		土師	甕				口縁部 細片	横ナデ					外 淡赤茶色 内 黄橙色	密		良	外反		[illegible]
195	6	2SI 10	II層	土師	坏				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			淡茶褐色	密	赤色粒子	良	内湾		[illegible]
195	7	2SI 10	III層	土師	坏				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			外 淡黄茶色 内 淡茶褐色	密		やや良	内湾		[illegible]
195	8	2SI 10	III層	土師	坏				口縁部 細片	横ナデ	箆削り	ナデ			淡赤茶色	やや密		良	内湾		[illegible]
195	9	2SI 10	IV層	土師	甕				口縁部 細片	横ナデ	刷毛	箆削り			明茶褐色	密		良	外反		[illegible]
195	10	2SI 10	IV層	土師	坏				口縁部 細片	横ナデ					淡黄褐色	密		良	内湾		[illegible]
195	11	2SI 10	IV層	土師	坏				口縁部 細片	横ナデ					淡黄茶色	密	赤色粒子	良	内湾		[illegible]
195	12	2SI 10	竈袖	土師	甑				底部 細片		刷毛	刷毛 ナデ			淡黄茶色	密		[illegible]			[illegible]
195	13	2SI 10	竈袖	土師	坏				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			赤茶色	密		やや良	内湾		[illegible]
195	14	2SI 10	床埋土	土師	甕	14.6			口縁部 1/8	横ナデ	ナデ	箆削り			淡黄橙色	密	1mm大の砂粒少	やや良	外反		[illegible]
195	15	2SI 10	床埋土	土師	把手				把手 完存		ナデ				外 淡黄茶色 内 赤褐色	やや密	石英	やや良			[illegible]
195	16	2SI 10	床埋土	土師	把手				把手 完存		箆削り 刷毛				外 淡茶褐色 内 赤茶色	やや密	角閃石	やや良			[illegible]
195	17	2SI 10	床埋土	土師	甕	14.0			口縁部 1/8	横ナデ					淡黄橙色	密		良	外反		[illegible]
195	18	2SI 10	床埋土	土師	坏	14.2			口縁部 1/8	不明	不明	不明			赤茶色	密	1mm大の砂粒・角閃石	やや良	内湾		[illegible]
195	19	2SI 10	床埋土	土師	坏	14.6			口縁部 1/8	横ナデ	ナデ	ナデ			赤褐色	密	赤色粒子	やや良	内湾		[illegible]
195	20	2SI 10	床埋土	土師	坏	14.2			口縁部 1/4	横ナデ	ナデ	ナデ			淡赤褐色	密	赤色粒子	良	内湾		[illegible]
195	21	2SI 10	床埋土	土師	坏	14.8			口縁部 1/8	不明	不明	不明			赤茶色	やや密	1mm大の砂粒少	やや良	内湾		[illegible]
195	22	2SI 10	床埋土	土師	高坏				脚上部 完存		ナデ	ナデ			外 淡赤茶色 内 灰褐色	密		[illegible]			[illegible]
195	23	2SI 10	a	土師	坏				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			赤茶色	密		良	内湾		[illegible]
195	24	2SI 10	d	土師	坏				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			明赤茶色	密		良	内湾		[illegible]
196	1	2SI 50		須恵	壺				体部 細片		横ナデ 波状文	横ナデ			灰褐色	密		[illegible]			[illegible]
196	2	2SI 50		土師	甕	17.6			口縁部 2/3	横ナデ					赤褐色	やや密		やや良	外反		11
196	3	2SI 50		土師	甕	18.4			口縁部 1/2	横ナデ	横ナデ	箆削り			淡黄茶色	やや密		やや良	外反		[illegible]
196	4	2SI 50		土師	坏	14.3			1/3	横ナデ	ナデ	ナデ			淡黄橙色	密	赤色粒子	やや不良	内湾		[illegible]
196	5	2SI 50		土師	坏	13.8			口縁部 1/8	不明	不明	不明			淡黄茶色	密	赤色粒子	やや不良	内湾		[illegible]
196	6	2SI 50		土師	坏				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			明黄橙色	やや密	赤色粒子	やや不良	内湾		[illegible]
196	7	2SI 50		土師	把手				把手 完存		ナデ 刷毛				淡黄橙色	やや密		やや不良			[illegible]
196	8	2SI 50		土師	壺				上半部 1/4	箆磨き	箆削り	箆磨き			外 明淡茶色 内 暗灰黄色	やや密		やや不良	小さく 外反		[illegible]
196	9	2SI 50		土師	高坏				下半部 2/3		不明	不明	不明	不明	赤褐色	やや密		不良			[illegible]
196	10	2SI 50		土師	高坏		[illegible]		脚部 完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	赤褐色	やや密		やや不良			[illegible]
196	11	2SI 50		土師	ミニチュア				体部 細片		ナデ	指頭圧痕			黄橙色	やや粗		やや不良			[illegible]
196	12	2SI 50		土師	甑	22.4	7.0	263	1/2	横ナデ	刷毛	箆削り	ナデ	ナデ	外 淡黄褐色 内 淡赤茶色	やや密	赤色粒子	やや良	小さく 外反	把手付	[illegible]
197	1	2SK 05		土師	甕	12.8			口縁部 1/3	横ナデ	ナデ	箆削り			外 淡赤茶色 内 黄茶色	やや密	2mm大の石英・赤色粒子	良	外反		[illegible]
197	2	2SK 05		土師	坏				口縁部 細片	横ナデ	ナデ	ナデ			黒褐色	密		良	内湾		[illegible]
197	3	2SK 05		土師	坏	12.6			口縁部 1/4	横ナデ	ナデ	箆削り			外 黄茶色 内 赤茶色	密		良	内湾		[illegible]
197	4	2SK 05		土師	坏	14.4			ほぼ完形	横ナデ	ナデ?	ナデ			赤褐色	密	赤色粒子	良	内湾		[illegible]
197	5	2SK 05	I層	土師	壺				口縁底部 欠損		ナデ 刷毛	指頭圧痕 ナデ			淡赤茶色	密		[illegible]			[illegible]
197	6	2SK 05	I層	土師	坏	13.4			口縁部 1/8	横ナデ	箆削り ナデ	横ナデ			外 淡黄茶色 内 淡赤茶色	密		良	内湾		[illegible]
197	7	2SK 05	I層	土師	坏	13.4		[illegible]	口縁部 1/6	横ナデ	刷毛	ナデ	ナデ	刷毛	外 黄茶色 内 赤褐色	密		良	内湾		[illegible]
197	8	2SK 05	II層	土師	高坏				脚部 1/3		ナデ	ナデ	ナデ		淡赤褐色	密	赤色粒子	良			[illegible]
197	9	2SK 05	II層	土師	高坏				底部 完存		ナデ	ナデ			外 淡赤茶色 内 淡黄茶色	密	赤色粒子	[illegible]			[illegible]
197	10	2SK 05	II層	土師	ミニチュア		[illegible]		下半部 完存		指頭圧痕	ナデ	ナデ	指頭圧痕	赤茶色	密		[illegible]			[illegible]
198	1	2SK 14		土師	坏				口縁部 1/6	横ナデ	ナデ	ナデ			淡赤茶色	密		良	内湾		[illegible]
198	2	2SK 15		土師	甕		[illegible]		底部 完存		刷毛	ナデ 指頭圧痕	ナデ	ナデ	淡黄茶色	やや密		やや不良			[illegible]
198	3	2SK 19		土師	坏	13.8			口縁部 1/4	横ナデ	ナデ	ナデ			明赤褐色	密		不良	内湾		[illegible]
198	4	2SK 19		土師	坏	13.8			口縁部 1/4	横ナデ	箆削り?	ナデ			淡黄茶色	密	赤色粒子	やや良	内湾		[illegible]
198	5	2SK 19		土師	坏				口縁部 細片	横ナデ	手持ち 箆削り	ナデ			赤褐色	密		やや不良	内湾		[illegible]
198	6	2SK 19		土師	甕				胴部 1/4	横ナデ	刷毛	箆削り			外 淡黄茶色 内 暗灰黄色	やや密		良	直立?		[illegible]
198	7	2SK 19		土師	甕?	13.6			口縁部 1/4	横ナデ	箆磨き	ナデ			明黄茶色	密	赤色粒子	良	外反		[illegible]
198	8	2SK 19		土師	甕	10.6			口縁部 1/4	横ナデ	ナデ	ナデ			淡黄橙色	密		良	僅かに 外反		[illegible]
198	9	2SK 19		土師	甕	15.0			口縁部 1/6	横ナデ 刷毛	刷毛	箆削り			外 明茶褐色 内 淡黄茶色	やや密	角閃石	良	外反		[illegible]
198	10	2SK 19		土師	甕	17.8			口縁部 1/6	横ナデ	横ナデ	箆削り			淡黄茶色	密	赤色粒子	良	外反		[illegible]
198	11	2SK 19		土師	甕	18.2			口縁部 1/6	横ナデ	刷毛	箆削り			暗黄茶色	やや密	角閃石	やや良	外反		[illegible]
198	12	2SK 19		土師	支脚				1/6	指頭圧痕ナデ	指頭圧痕ナデ			指頭圧痕ナデ	淡黄茶色	やや密		やや不良		中実構造	10
199	1	2SK 29	I層	土師	甕				口縁部 1/2	横ナデ	刷毛 ナデ	箆削り			淡黄茶色	密	赤色粒子	良	外反		[illegible]
199	2	2SK 29	I層	土師	甕				上半部 1/3	横ナデ	刷毛	箆削り			淡黄茶色	やや粗		やや良	外反		[illegible]
199	3	2SK 29	III層	土師	甕				上半部 1/2	横ナデ	刷毛	箆削り			赤褐色	やや密		やや良	外反		[illegible]

Tab.27　出土遺物観察表（土器）

200	1	2SX 25		上師	壷	16.6			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	刷毛 箆削り			外 淡灰褐色 内 淡黄茶色	重	角閃石・金雲母	良	外反		[illegible]
200	2	2SX 25		上師	壷	17.6			口縁部 1/4	横ナデ	横ナデ	箆削り			赤褐色	やや粗	1～2mm大の砂粒多	やや良	外反		[illegible]
200	3	2SX 25		上師	坏	13.2			口縁部 1/8	横ナデ	箆削り	箆磨き			外 淡赤茶色 内 淡黄茶色	重		良	内溝		[illegible]
200	4	2SX 25	V層	上師	壷	29.4			[illegible]	横ナデ ナデ	刷毛	箆削り			外 明黄茶色 内 淡黄茶色	やや粗		やや不良	底位	口縁部に半円形の打ち欠き有	[illegible]
200	5	2SX 25	VI層	上師	坏				口縁部 細片	横ナデ	ナデ				赤茶色	重		良	内溝		[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]		黒A	坏	15.4			口縁部 1/8	箆磨き	ナデ 刷毛	箆磨き			外 暗黄茶色 内 黒褐色	重		良	内溝		[illegible]

Tab.28　出土遺物観察表②

小結

今回の調査では、予想以上に検出した遺構の数が少なかった。また、検出された遺構も葡萄畑耕作時に施肥等のために相当の撹乱を受けており、特に竪穴住居は検出に非常に苦労したほどであった。ここでは、竪穴住居の切り合い関係の再検討を中心に論じてみたい。

竪穴住居

本文中にものべたとおり、2SI10 と 2SI50 の検出作業は困難を極めた。ちょうどこれらの遺構が検出された部分は調査区の中でも特に撹乱を多く受けていた場所であった。水はけを良くするための弾丸暗渠とよばれるものや、施肥用の溝が数多く穿たれていたのである。したがって、通常の撹乱のように先に撹乱坑を掘りあげてから再度検出することも、ままならなかった。

はたして検出を試みてみると、１棟の長方形の住居のようにも見えるし、２棟の長方形の住居にもみえるような状況であった。２棟としてみた場合、ちょうど北側の切り合いの附近に竈があることが判った。しかも竈は長方形の住居の隅の部分にあたり、開口部も長方形の住居の対角線方向を向いていることがわかった。注意して精査してみると、竈の西側附近から、埋土の状況が異なっており、検出時点では２棟の住居として調査を行なった次第である。報告にあたっては現地での情報を第一義としたため、本文中ではそれぞれ２棟の竪穴住居として報告をした。

しかし、遺構全体配置図を作成してみると、２つの住居を１つの竪穴住居として理解したほうが理解しやすいのではないかと思えるようになったのである。まずは、Fig.202 の竪穴住居検討図を御覧いただきたい。それぞれを独立した住居として捉えると主柱穴はそれぞれ２本となるが、１棟の竪穴住居としてみると主柱穴が４本となり、配置された場所も矛盾がない。そもそも弥生時代の竪穴住居には主柱穴が２本のものが多いが、古墳時代の竪穴住居は４本柱が基本である。そうした点からも１棟として理解することには無理がない。

一方、１棟としてではなく２棟として見たほうが矛盾が少ない点もあるので注意したい。まず、2SI10 には貼床がみられたが、2SI50 では貼床を確認することができなかった。2SI50 で貼床を見逃している可能性も皆無ではないが、相応の注意を払って掘削を行なったにもかかわらず貼床は検出できなかった。住居の半分だけ貼床を施していたとは考えにくく、この点では２棟と見たほうが理解しやすい。また、竈にも注目しておきたい。竈は、その位置だけからみると竪穴全体を１棟と見ると北辺の中央附近となり、違和感はない。しかしながら、竈の開口方向をみると中心線から大きく東に振っていて、むしろ 2SI10 の北西隅に竈を設けて対角線上に開口していると見たほうが自然である。以上２点からは、２棟の竪穴住居として理解することへの整合性が認められるのである。

結果、１棟の竪穴住居として捉えるべきなのか、２棟として捉えるべきなのかという点については、確定的な解答は持ち合わせていない。ただし、以上のような検討から結論が導かれない以上、現地での判断を優先したいと考えている。したがって、本報告では 2SI10 と 2SI50 という２棟の竪穴住居として理解しておきたい。

底部が筒状の甑

今回の調査では、住居跡を中心に甑が数点出土した。195 － 13・196 － 12 等がそれである。これらの甑は底部が筒状となっていて、古代に入って一般的になる多孔型の甑とは異なる形状のものである。これらの甑は、一緒に出土した土器から、古墳時代の所産と考えられるが、特に 196 － 12 は全体の器形が知れる資料である。全体が逆円錐状の器形を呈していて、体部は直線的である。口縁部は小さく外

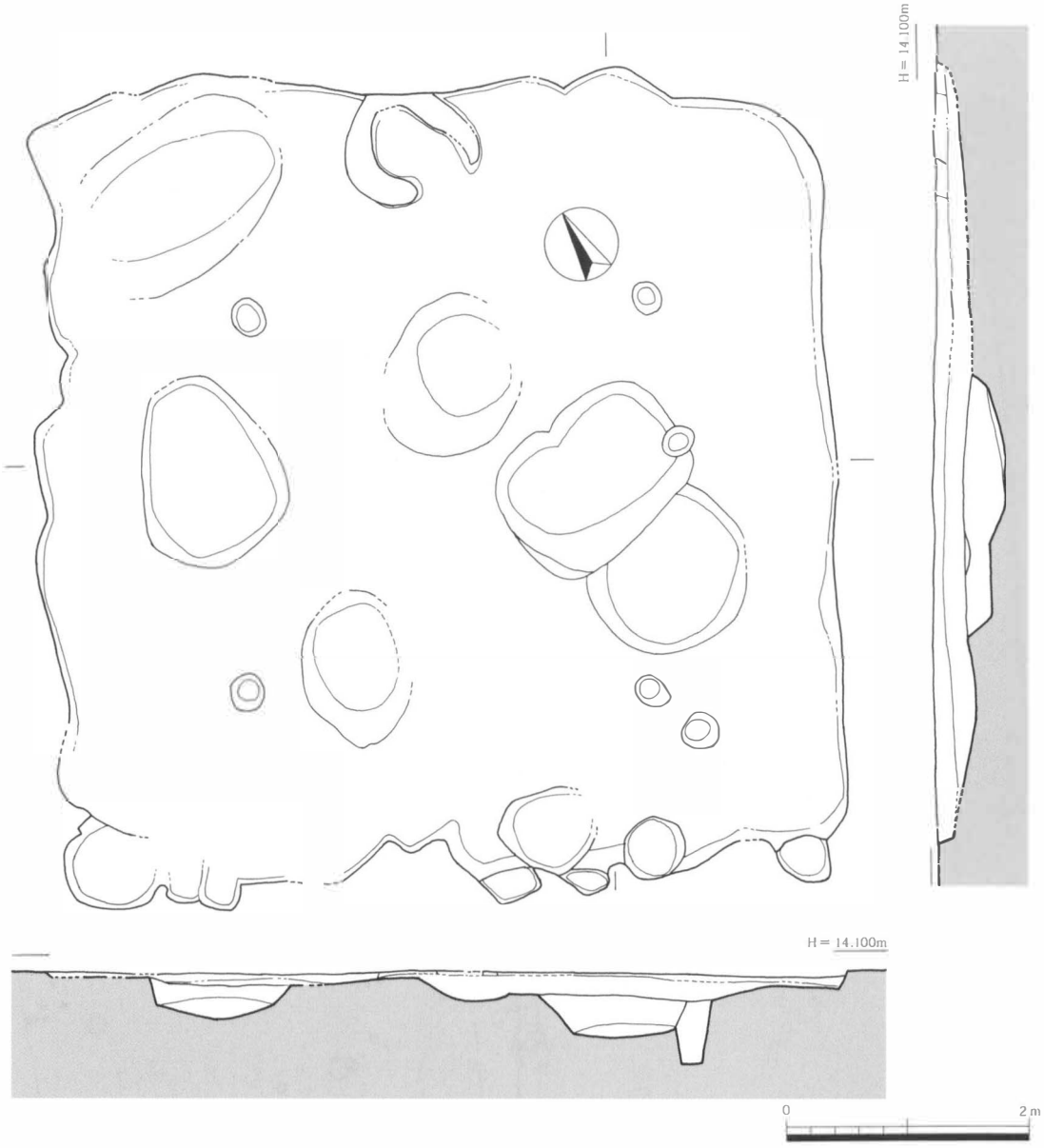


Fig.202　竪穴住居検討図（1/60）

反し、体部外面に把手が貼り付く。外面には刷毛目がほぼ全面に施され、内面は横方向の箆削りが認められる。底部の開口部は横ナデが施されていて、丁寧なつくりである。底部の開口部径は７cmほどである。これだけの開口部を持つと、内側に布等を敷くだけでは食材の落下を防ぐことは容易ではない。さな状あるいは網状のものを底部に設置して、さらに布等を敷いて調理していたと考えられる。当然、調理の対象になったものの中には、餅米も含まれたと考えられるが、粳米は直接煮て食用にしたと考えるのが自然である。そうした意味では、古墳時代の前時代にあたる弥生時代に、底部穿孔のある甕が相当数出土するのは興味深い。これら穿孔のある甕を甕転用の甑であるとすれば、その形状は、今回出土した筒状の甑に近くなる。甑の形態変化として、甕底部に穿孔しての転用→筒状になるもの→多孔型のものということを考えることができる。その中で、筑後市域ではあまり出土例のない筒状の甑が、その全形が判る資料が出土したということは、意義深いものがある。

Fig.203　調査区略測図（1/400）

Fig.204　遺構全体配置図（1/300）

8. 西牟田小次郎丸遺跡（第１次調査）

西牟田小次郎丸遺跡第１次調査は、宅地分譲に伴う事前発掘調査として実施されたものである。平成７年度に有限会社田中不動産から筑後市教育委員会に対して、埋蔵文化財の有無について照会がなされた。試掘調査の結果、事業予定範囲の全域に埋蔵文化財の所在が明らかとなった。全体的には盛土に遺構を保全することになったが、当該地が中世に栄えた霊鷲寺の南側にあたることから、霊鷲寺外周の堀の形状等の確認のため、確認調査を実施することで協議が整った。

現地での確認調査にあたり、次の点に留意して調査区の設定を行なった。まず、霊鷲寺の堀の原形を復元する資料の収集を行なうこと、さらに南側の正面に当たる位置に何がしかの施設が存在するかを確

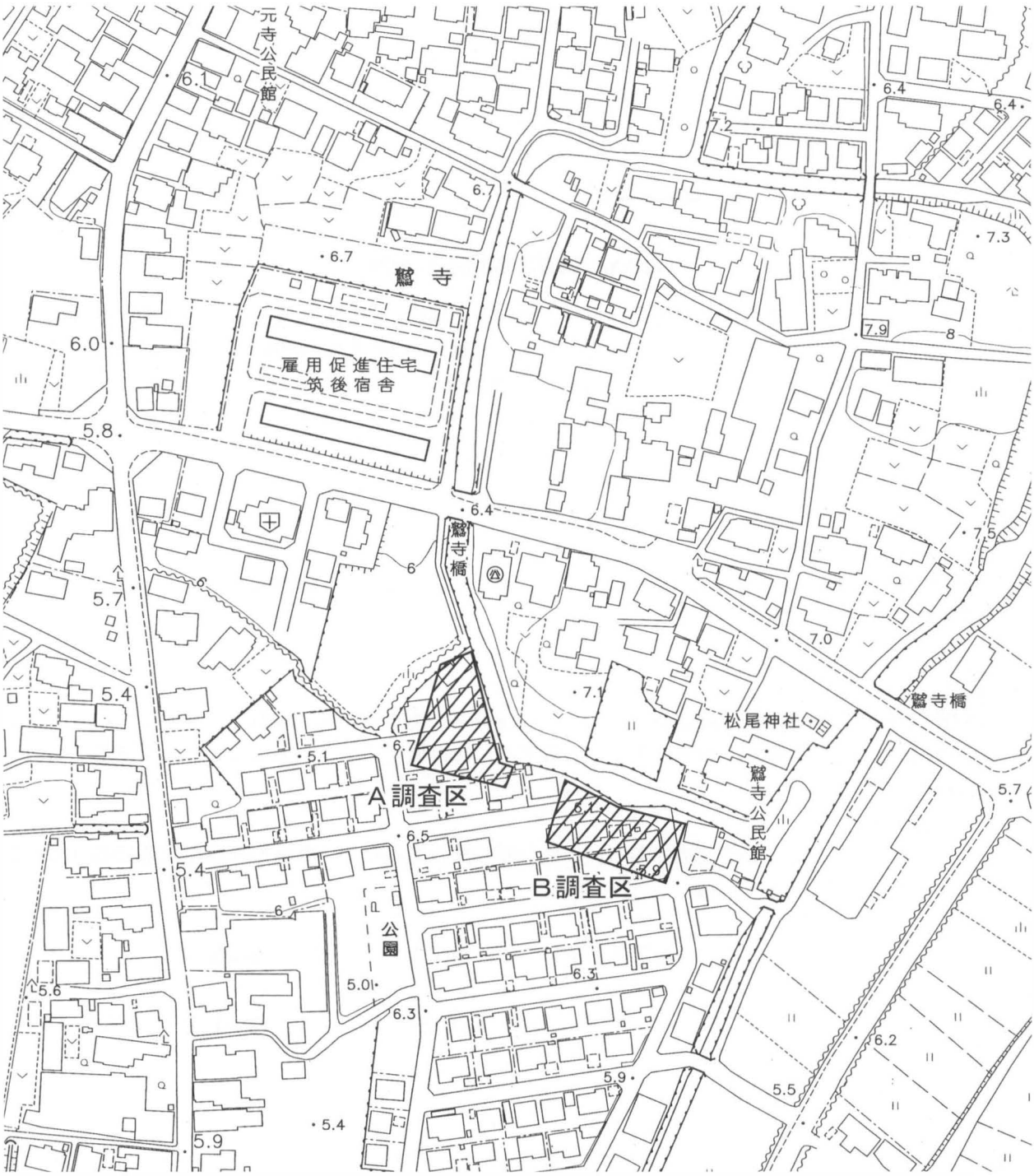


Fig.205　調査区位置図（1/2,500）

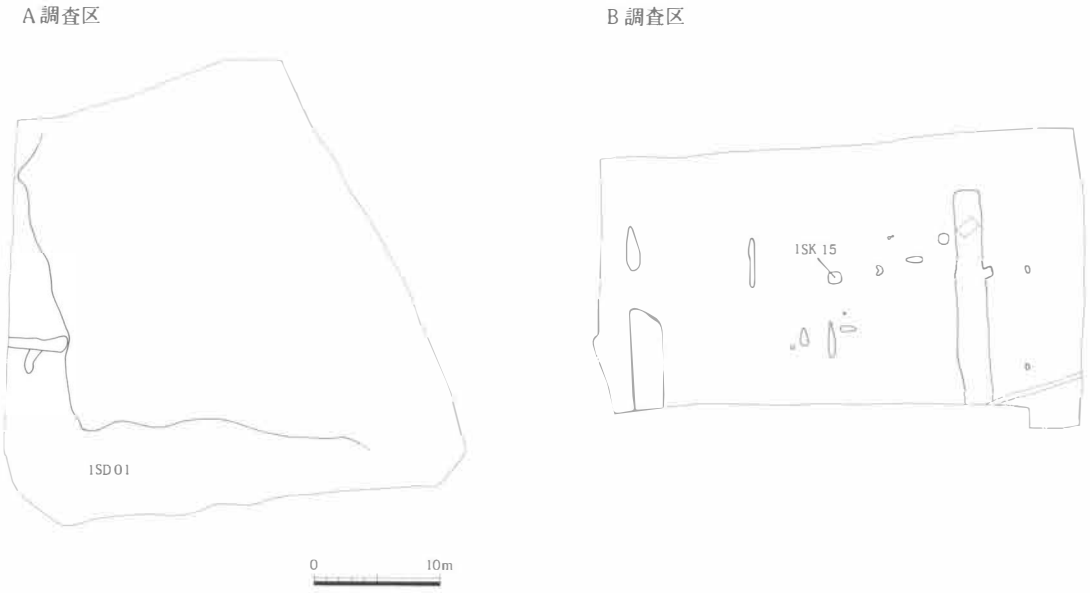


Fig.206　調査区略測図（1/600）

認すること、以上２点である。そのため、まず、霊鷲寺の堀の南西隅にあたる部分の外側に調査区を設定した。こちらを便宜上Ａ調査区としておく。また、霊鷲寺の中軸線の南側の延長部分に東西方向にやや長い長方形の調査区を設定した。こちらを便宜上Ｂ調査区としておく。また、記録保存であるため、遺構の掘削は基本的に行なっていない。一部の遺構について断ち割りを行なった程度であることを、はじめにお断りしておく。また、記録については、後日必要なときに３次元空間での復元が可能なように、ラジコンヘリコプターによる写真測量を実施したが、現在のところ図化作業は行なっていない。したがって、現状で提示できる図面類は調査時に作成した略測図のみである。

また、Ａ調査区は遺構番号の１０の桁を０とし、Ｂ調査区は１とした。つまり、Ａ調査区のＳ－１が溝であった場合1SD01とし、Ｂ調査区のＳ－５が土坑であった場合に1SK15とした。以下、調査区ごとに報告する。

Ａ調査区

Ａ調査区では、霊鷲寺の堀を確認した。現在では南西側と南東側の隅は取れて、変形した六角形のような平面形状を呈しているが、本来の形状が方形であったと仮定すると、ちょうどその位置まで拡がるように堀跡を確認した。

1SD01（Fig.206）

Ａ調査区のほとんどを占める遺構である。一部を断ち割ってみたが、断面形状は不定形であった。出土遺物には土師器（坏・片）・石製品（片）がある。

Ｂ調査区

Ｂ調査区では、霊鷲寺の正面の参道等を期待したが、明確なものは検出できなかった。

1SK15（Fig.206）

Ｂ調査区の中央附近に位置する。検出精査時に若干の遺物が出土した。出土遺物には土師器（片）・須恵器（鉢）・炭（片）がある。

出土遺物

今回の調査では、総量でもパンコンテナー１箱分の遺物しか出土しなかった。これは、今回の調査が

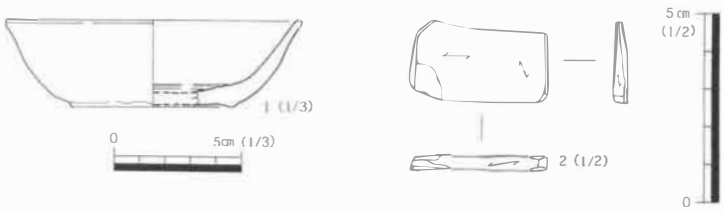


Fig.207　1SD01 出土遺物実測図（1/3・1/2）

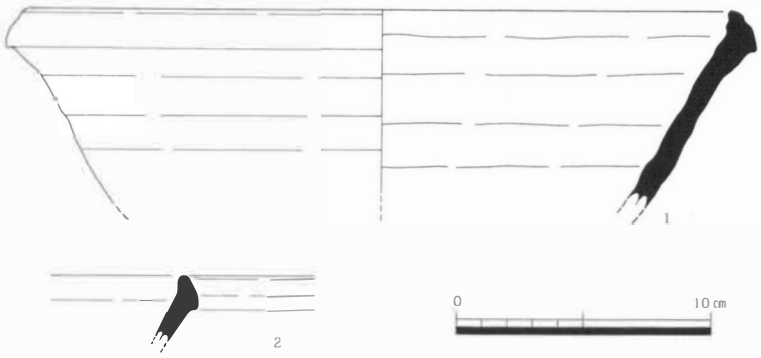


Fig.208　1SK15 出土遺物実測図（1/3）

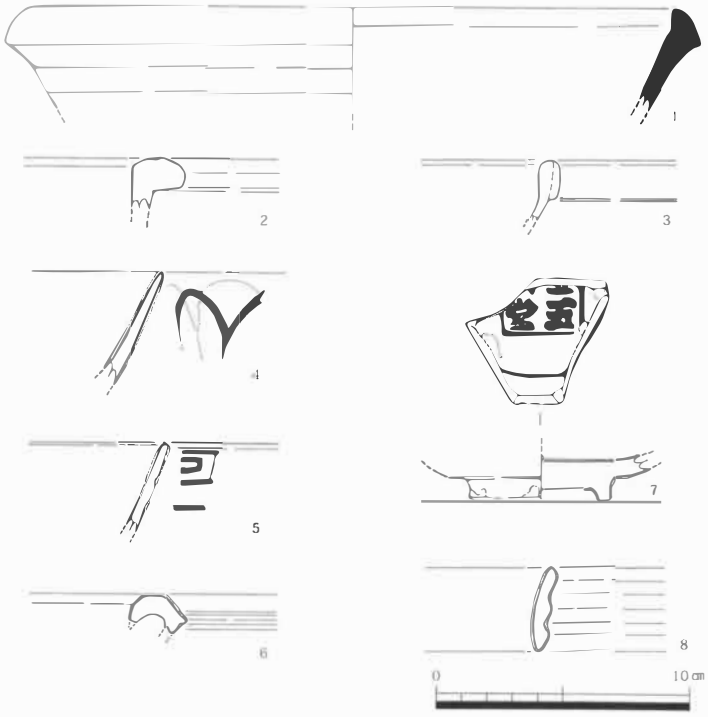


Fig.209　表土出土遺物実測図（1/3）

Fig.	No	遺構番号	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	口縁部	体外部	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	備考	実施
[illegible]	1	1SD 01		土師	坏	11.6	6.3	3.4	1/8	横ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	糸切痕	外 淡黄褐色 内 黄褐色	やや粗		良	外反		1
[illegible]	1	1SK 15		須恵	鉢	27.4			口縁部 1/6	横ナデ	ナデ	ナデ			淡灰色	粗		良	玉縁状		1
209	2	1SK 15		須恵	鉢				口縁部 縁片	横ナデ	ナデ	ナデ			暗灰色	粗		良	玉縁状		2
209	1	表土		須恵	鉢	25.2			口縁部 1/8	横ナデ	ナデ	横ナデ			灰白色	粗		良	玉縁状		1
209	2	表土	B区	土師	甕				口縁部 縁片	横ナデ					淡灰黄色	やや粗	金雲母	良	玉縁状？		1
209	3	表土	B区	土師	甕				口縁部 縁片	横ナデ					暗赤褐色	粗	1～2mm大の砂粒	良	玉縁状		2
209	4	表土	B区	青磁	碗				口縁部 縁片	施釉	施釉	施釉			素地 灰白色 釉薬 緑灰色	粗		良	覆ガ形 外反	体部外面に鎬連弁	3
[illegible]	5	表土	B区	青磁	碗				口縁部 縁片	施釉	施釉	施釉			素地 灰白色 釉薬 緑灰色	粗		良	覆ガ形 外反	体部外面に蓋文有	4
[illegible]	6	表土	[illegible]	[illegible]	[illegible]				口縁部 縁片	施釉					素地 灰白色 釉薬 緑灰色	粗		良	玉縁状？		5
[illegible]	7	表土	A区	青磁	碗		[illegible]		底部 1/2		施釉	施釉	施釉	露胎	素地 灰白色 釉薬 暗緑灰色	粗		良		内底見込にスタンプ有	1
209	8	表土	A区	磁器	不明				縁片	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	素地 灰白色 釉薬 灰白色	粗		良	外反		2

Tab.29　出土遺物観察表（土器）

Fig.	No	遺構番号	層位	素材	産地	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	残存	備考	実施
[illegible]	1	[illegible]		泥岩	不明	砥石？ 碗？	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]		1

Tab.30　出土遺物観察表（土器以外）

確認調査であり、基本的に遺構の掘削を行なっていないからである。以下、遺構別に報告したい。

1SD01 出土遺物（Fig.207、Pla.80）

1 は土師器の坏である。内湾しながら立ち上がる体部を持ち、口縁部は外反する。底部には糸切痕が残る。2 は砥石と思われるが、硯かも知れない。泥岩製である。

1SK15 出土遺物（Fig.208、Pla.80）

ともに須恵器の鉢である。いずれも口縁部が玉縁状を呈するもので、1 は口径が復元可能な資料であるが、2 は口縁部の細片である。

表土出土遺物（Fig.207、Pla.80）

1 は須恵器の鉢である。口縁部は玉縁状を呈する。2 と 3 は土師器で、ともに甕である。2 は口縁部が逆 L 字状をなしていて、3 は玉縁状である。4 ～ 7 は青磁である。4 碗で、は体部外面に鎬連弁のあるもので、竜泉Ⅰ－ 5b であろう。5 も竜泉窯系青磁碗と思われるが、体部外面に文様がある。6 は何かの口縁部と思われるが、不明である。7 は青磁碗の底部で、内底見込に「□五□堂」の印刻がある。畳付と高台見込が露胎であるが、その他は全面に施釉される。8 は陶器と思われるが、全くの不明品である。何かの一部であるのか、それとも単体で用をなすものかも判らない。

小結

今回の調査では、霊鷲寺の外周を巡る堀が、もともとは整然とした方形であったことを確認できたのが、もっとも大きな成果である。しかし、どの時期に現在の形に変形したのかを明らかにすることはできなかった。出土した遺物をみると中世後半期のものが含まれているため、それ以降に変形したことは推測できる。堀が変形した時期は、霊鷲寺の寺勢の衰えた時期と符合すると思われるが、遺物の絶対量が少なく、正式な調査の実施が待たれる。

また、出土品を概観すると、陶磁器や須恵器の出土割合が高く、一般の集落とは様相が異なっている。このことは、霊鷲寺の勢力の強さを示しているのではないかとも思われ、今後の調査に期待するところである。

9. 和泉近道遺跡（第１次調査）

和泉近道遺跡第１次調査は、筑後市立病院の建て替えに伴って実施された発掘調査である。平成８年度に筑後市立病院から教育委員会に、埋蔵文化財の有無の照会がなされた。試掘調査の結果、一部に埋蔵文化財の所在が確認され、埋蔵文化財が包蔵される範囲のうち建物によって破壊される部分についてのみ、記録保存のための発掘調査を実施することとした。かかる費用は筑後市が負担した。

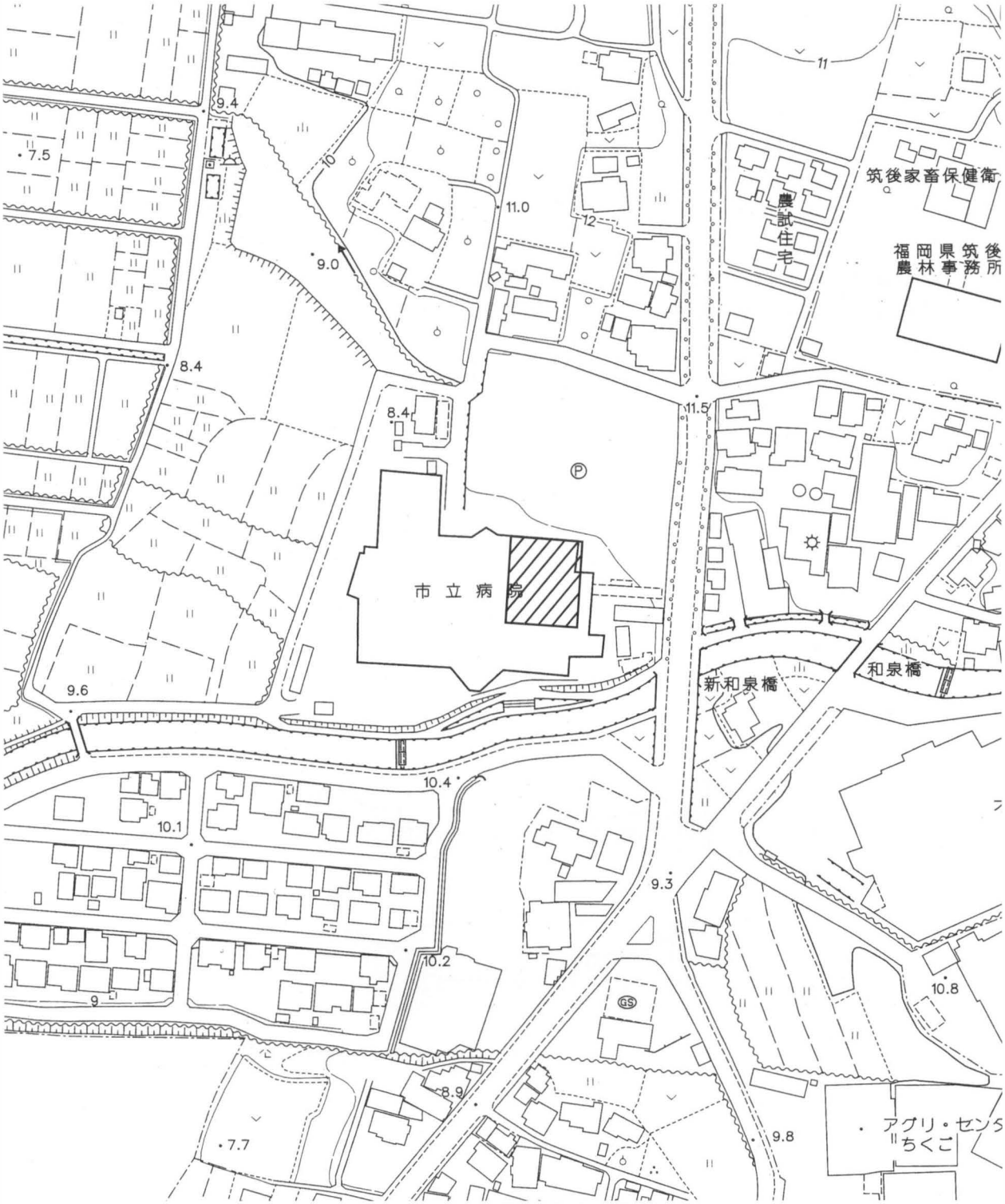


Fig.210　調査区位置図（1/2,500）

現地での発掘調査は、秋雨でたびたび水没したが、平成９年９月から11月にかけて実施した。調査は永見が担当し、奥村太郎の協力を得た。

遺構

旧地形が南側の谷に向かって落ちてゆく縁の部分にあたるようで、古墳時代や中世と思しき遺構が点在する。まとまりのある遺構群はなく、性格は掴みにくかった。以下、遺構種類別に報告するが、遺構の時期別には報告していないので注意されたい。

土坑

1SK01（Fig.211、Pla.83）

調査区の北東に位置し、1SK10と1SK15を切っている。南北1.6ｍ東西2.1ｍ深さ0.3ｍである。平面形態は東西に長い楕円形である。３段に掘り込みがなされていて、１段目と２段目はその大きさの差は小さい。しかし３段目は全体の半分以下の面積で深く穿たれている。

出土遺物は、須恵器（甕・蓋・坏）・土師器（片）・弥生土器（片）がある。

1SK10（Fig.212、Pla.83）

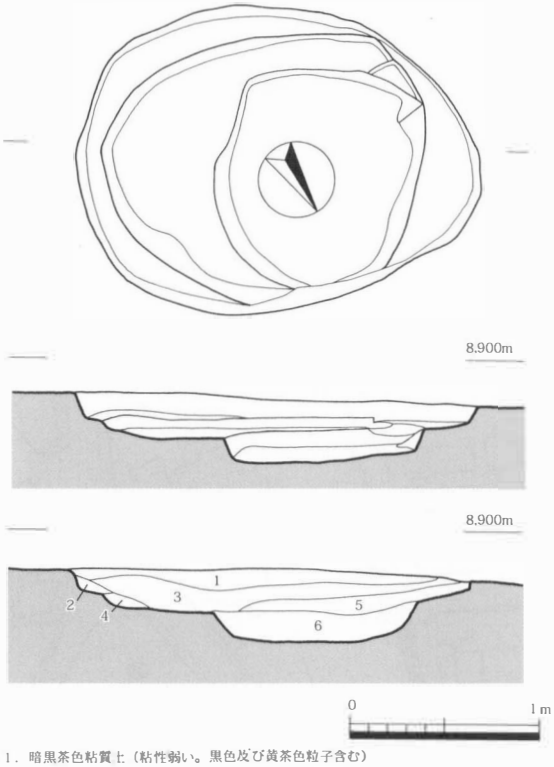
調査区の北東に位置し、1SK01に切られている。南北3.0ｍ東西3.1ｍ深さ0.4ｍである。平面形態は円の北東側が欠けて直線的になったような形状である。北側に小さな棚状の段がある。

出土遺物は、土師器（皿）・須恵器（甕）・弥生土器（高坏）・すり石・叩き石がある。

1SK15（Fig.221、Pla.83）

調査区の北東に位置し、南北0.9ｍ東西2.2ｍ深さ0.2ｍである。東西に長い長方形を呈する。

出土遺物は、土師器（把手・甕）・須恵器（甕・坏）がある。



1－1．暗黒茶色粘質土（粘性弱い。黒色及び黄茶色粒子含む）
－2．〃（粘性１と同じ。茶色粒子含む）
－3．〃（粘性１よりややあり。灰白色粒子含む）
－4．〃（粘性１と同じ）
－5．〃（粘性３と同じ。灰白色及び黄茶色粒子含む）
－6．〃（粘性３と同じ。黒色、灰白色粒子含む。黄茶色ブロック混）
地山：淡灰黄色粘質土

Fig.211　1SK01 実測図（1/40）

1SK16（Fig.221）

調査区の北西に位置し、南北 1.0 m東西 1.0 m深さ 0.1 mである。

出土遺物は、土師器（甕・坏）・須恵器（甕・坏）がある。

溝状遺構

1SD05（Fig.213、Pla.85）

調査区の北東隅を北西から南東に向かって走る溝である。幅 1.5 m深さ 0.2 mで、断面形状は概ね逆台形を呈するが、北側には小さな棚状の段がある。

出土遺物は、土師器（坏・甕）がある。

1SD20（Fig.221）

調査区の北東から南南西に向かって走る溝である。1SD25 を切っている。幅 0.2 m深さ 0.1 mで、断面形状は逆台形を呈する。

出土遺物は、土師器（片）がある。

1SD25（Fig.221）

調査区の北東から南に向かって走る溝である。1SD20 に切られている。幅 0.2 m深さ 0.1 mで、断面形状は逆台形を呈する。

出土遺物は、認められなかった。

不明遺構

1SX02（Fig.221）

調査区の北西に位置する溜まりである。南北 14.0 m東西 5.0 m深さ 0.1 mである。

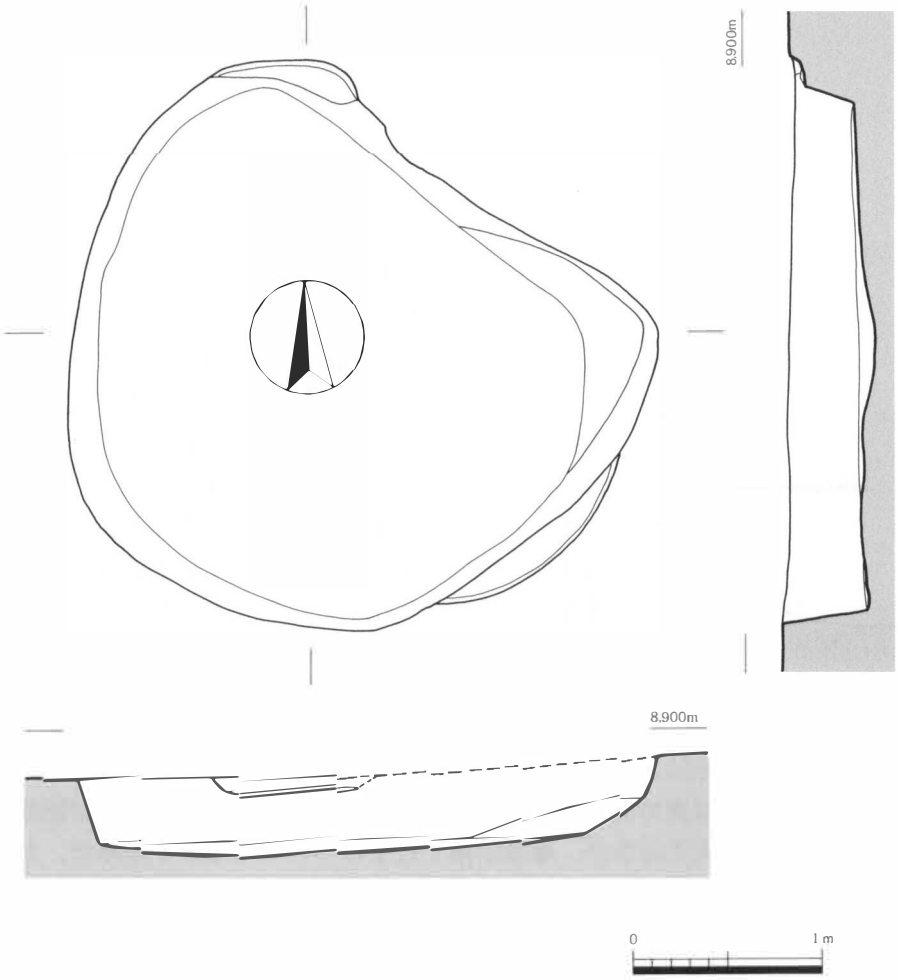


Fig.212　1SK10 実測図（1/40）

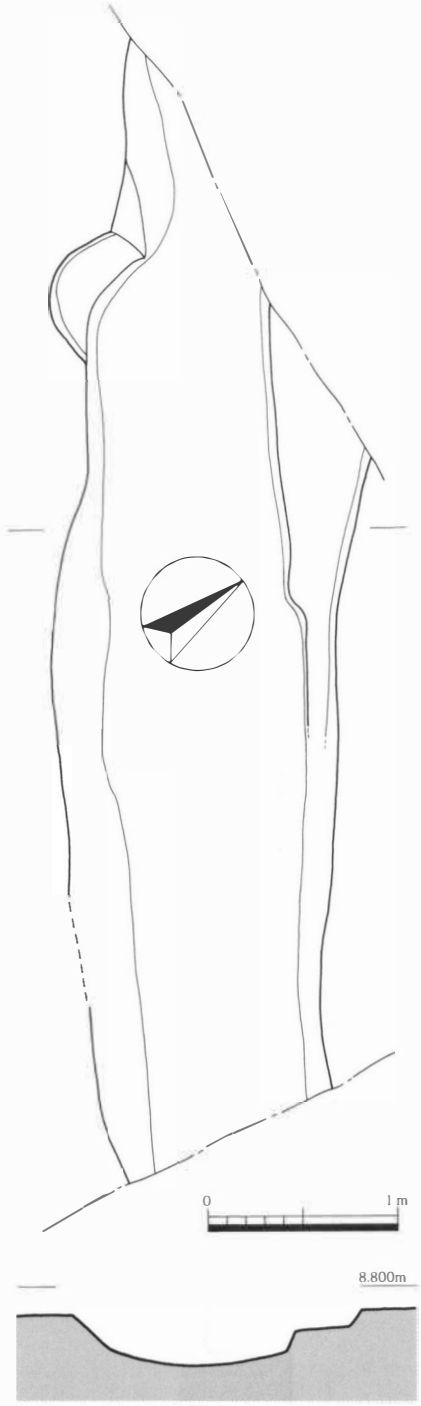


Fig.213　1SD05 実測図（1/40）

出土遺物は、土師器（片）・須恵器（坏・蓋・片）・弥生土器（片）がある。

1SX18（Fig.221）

調査区の北東に位置し、1SD05 と 1SK15 をつなぐ溝状の遺構と思われるが、検出面積が小さく正確が不明なため、不明遺構に分類した。幅 0.3 m深さ 0.1 mである。

出土遺物は、弥生土器（片）・叩き石・鉄（片）がある。

1SX21（Fig.221）

調査区の中央やや西よりに位置し、1SX02 の下層遺構である。南北 0.3 m東西 0.3 m深さ 0.1 mである。

出土遺物は、須恵器（蓋）がある。

出土遺物

今回の調査では、総量でパンコンテナー3箱の遺物が出土した。他の遺跡と比較して須恵器の出土量が多めであることが目を引く。以下、出土遺構ごとに報告する。

1SK01 出土遺物（Fig.214、Pla.85）

1と2は半裁時に出土した須恵器である。1は蓋で、輪状つまみを持つものである。天井部には篦削りを施し、口縁部には返りがついている。2は甕としたが壷かも知れない。体部外面には平行叩き、内面には青海波文叩きが認められる。

3はⅠ層出土の土師器で、坏である。底部には回転篦切り痕が残る。

4はⅡ層出土の須恵器の坏である。蓋の受けがつくもので、口縁部の立ち上がりは高いものである。調整は前面が横ナデである。

1SK10 出土遺物（Fig.215、Pla.85）

1と2は土師器である。1は高坏で、坏底部と脚上部のみの資料である。風化が著しく調整は不明である。2は坏としたが皿かも知れない。底部は糸切か。3は叩き石であろう。一部に使用の際の破損と見られる欠損がある。

1SK15 出土遺物（Fig.216、Pla.85）

すべて土師器である。1と2は甕である。いずれも外反する口縁部の資料である。2の方が強く外反する。3は把手である。体部外面に貼り付けていたものと思われる。

1SK16 出土遺物（Fig.216、Pla.85）

4は須恵器の蓋としたが、坏かも知れない。体部から口縁部にかけて自然釉がかかる。口縁部は内側に段がつくようである。

1SD05 出土遺物（Fig.217、Pla.85）

すべて土師器である。1と2は甕である。1は口径が復元可能な資料で、口縁部が肥厚するのが特徴的である。2は口縁部のみの資料であるが、端部が薄く仕上げられている。3は坏で、丸底坏になると思われる。風化のため、調整は不明である。

1SX02 出土遺物（Fig.218、Pla.85）

ともに須恵器である。1は蓋の口縁部で、端部には面を形成する。2は高台付きの坏である。高台見込みは篦削りが施されている。なお、高台は貼り付け高台である。

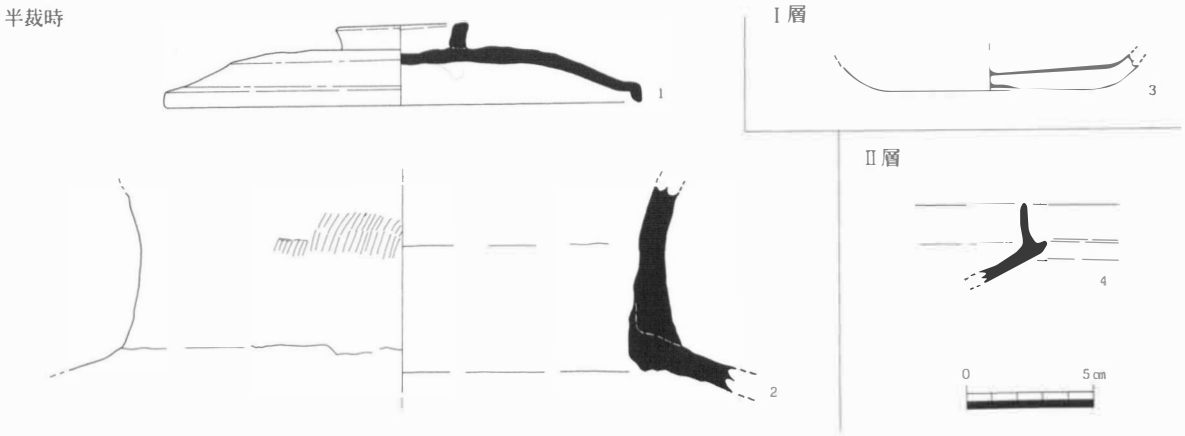


Fig.214　1SK01 出土遺物実測図（1/3）

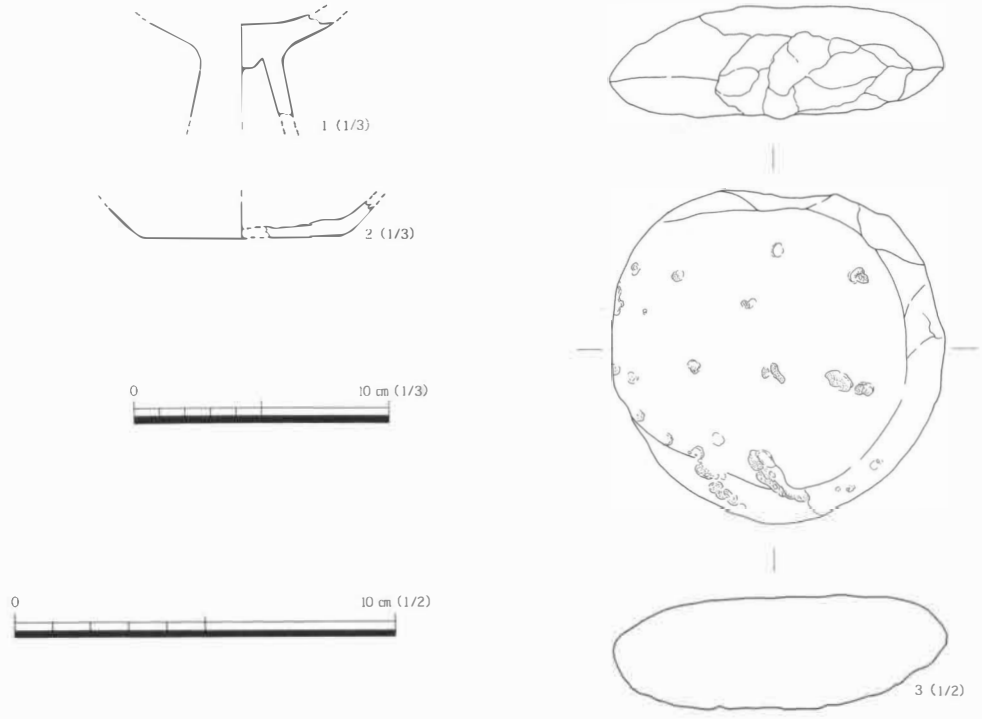


Fig.215　1SK10 出土遺物実測図（1/3・1/2）

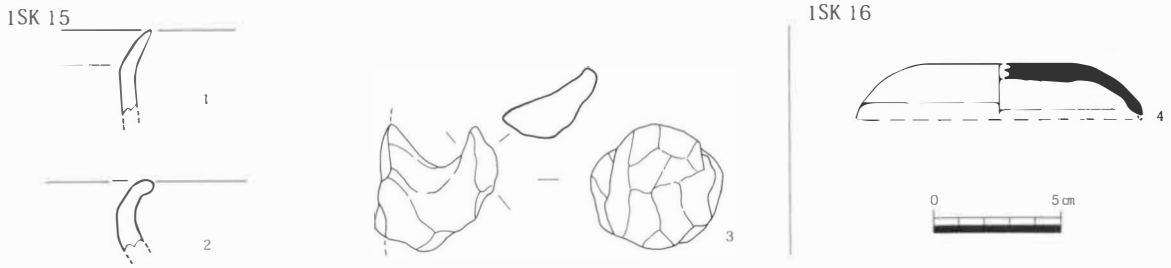


Fig.216　1SK15・1SK16 出土遺物実測図（1/3）

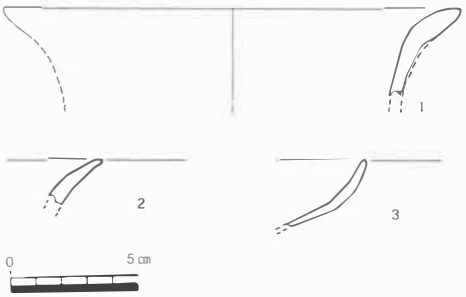


Fig.217　1SD05 出土遺物実測図（1/3）

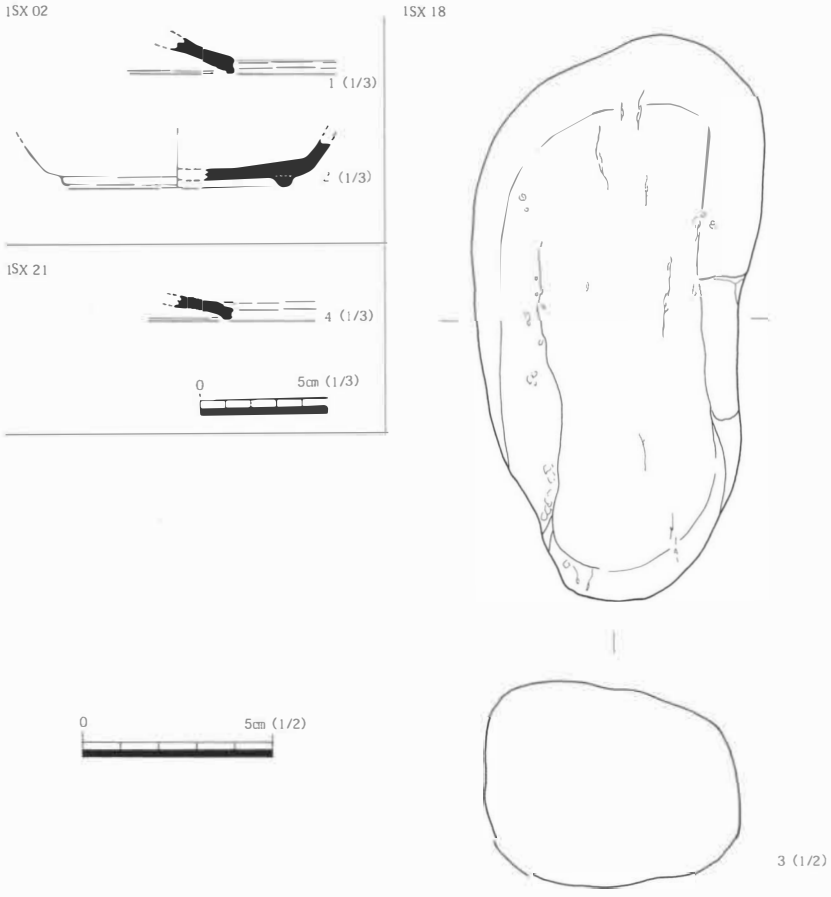


Fig.218　1SX02・1SX18・1SX21 出土遺物実測図（1/3・1/2）

1SX18 出土遺物（Fig.218、Pla.85）

3 は叩き石と思われる。使用面は定かではない。

1SX21 出土遺物（Fig.218、Pla.85）

4 は須恵器の蓋である。口縁部に面を形成する。

包含層出土遺物（Fig.219）

1 は須恵器の坏である。蓋の受けを持つもので、口縁部は失われている。調整は横ナデである。

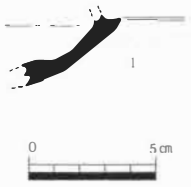


Fig.219　包含層出土遺物実測図（1/3）

小結

今回の調査では、古墳時代から古代、中世にいたる遺構と遺物が出土している。

Fig.	No.	遺構番号	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	備考	[illegible]
214	1	1SK 01		須恵	蓋	18.6		[illegible]	[illegible]	横ナデ	横ナデ 回転箆削	ナデ	ナデ	回転箆切	外 暗灰赤茶色 内 明灰色	やや密	1mm大の白色砂粒	良好	返り有	輪状つまみ部径4.9cm	[illegible]
214	2	1SK 01		[illegible]	[illegible]				胴部 1/3		刷毛 叩目	ナデ 同心円文			明灰色	やや密	1～3mm大の砂粒・黒色粒子	良好	外反		[illegible]
214	3	1SK 01	I	土師	坏		[illegible]		底部 1/3		不明	横ナデ	ナデ	回転箆切	明黄白色	密	微砂粒・雲母多	やや良			[illegible]
214	4	1SK 01	II	須恵	坏				口縁部細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			外 暗灰色 内 明灰色	やや密	1～2mm大の白色砂粒・黒色粒子	良好	外反	受け部有	[illegible]
215	1	1SK 10		土師	高坏				脚上部 1/2		不明	不明			明橙色	やや密	1～2mm大の砂粒多	やや良			[illegible]
215	2	1SK 10		土師	坏		[illegible]		底部 1/3		不明	不明	不明	糸切痕	橙色	やや粗	1mm大の砂粒	やや良			[illegible]
216	1	1SK 15		土師	甕				口縁部細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外 黄茶色 内 暗褐色	密	0.5mm大の砂粒・雲母	やや良	緩かに外反		[illegible]
216	2	1SK 15		土師	甕				口縁部細片	横ナデ					外 淡黄白色 内 黄灰茶色	密	0.5mm大の砂粒	やや良	外反		[illegible]
216	3	1SK 15		土師	把手				把手のみ		ナデ				明橙色	密	1mm大の砂粒・白色砂粒	良好			[illegible]
216	4	1SK 16		須恵	蓋				[illegible]		横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	外 暗灰茶色 内 淡灰色	密	1mm大の砂粒・黄色粒子微量	良好	内弯		[illegible]
217	1	1SD 05		土師	甕	18.0			口縁部 [illegible]	不明	不明	不明			外 明橙色 内 淡黄茶色	密	1mm大の砂粒・雲母	やや良	外反		[illegible]
217	2	1SD 05		土師	甕				口縁部細片	横ナデ	横ナデ [illegible]	横ナデ			外 暗赤茶色 内 明黄灰色	密	微砂粒少	やや良	外反		[illegible]
217	3	1SD 05		土師	坏				口縁部細片	不明	不明	不明			明赤黄白色	密	微砂粒・赤色粒子少	やや良	内弯		[illegible]
218	1	1SX 02		須恵	蓋				口縁部細片	横ナデ	横ナデ	横ナデ			明灰色	やや密	1～3mm大の白色砂粒	良好	端部に面有		[illegible]
218	2	1SX 02		須恵	坏				底部 [illegible]		横ナデ	横ナデ	ナデ	回転箆削	外 暗灰色 内 明灰色	やや密	1mm大の白色砂粒多	[illegible]		[illegible]	[illegible]
218	4	[illegible]		須恵	蓋				口縁部細片	横ナデ					外 暗灰色 内 灰色	密	0.5mm大の砂粒・白色砂粒多	良好	端部に面有		[illegible]
219	1	包含層		須恵	坏				体部細片		横ナデ	横ナデ			外 暗灰色 内 淡灰色	密	1mm大の砂粒・白色砂粒	良好	内傾		[illegible]

Tab.31　出土遺物観察表（土器）

Fig.	No.	遺構番号	層位	素材	産地	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	残存	備考	[illegible]
215	3	1SK10		安山岩		叩き石？	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]
218	3	1SX18		安山岩		叩き石？	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]

Tab.32　出土遺物観察表（土器）

以下、遺構と遺物にわけて論じた後に一応のまとめをしたい。

検出遺構

今回調査した中で、まずは1SD05に注目してみたい。1SD05は調査区の北東隅を斜めに横切っているが、調査区内が北東側から南西方向に傾斜していることを考えると、概ね等高線に沿って走る溝だと理解できる。出土した土器を見ると、判然とはしないものの概ね古墳時代から古代にかけての様相を呈している。他の遺構から出土した土器を概観すると、古墳時代のものはなく古代が中心であることから、1SD05も概ね古代の遺構と捉えて大過ないと思われる。つまり、本遺跡に於いて、古代の溝が等高線にほぼ平行して走っているといえる。1SD05の南西側は低地となり、湿潤な環境にあることを考え合わせれば、1SD05の北東側に当該期の集落が展開している可能性が高いといえる。つまり、1SD05は古代の集落の南西側を区切る溝として理解することが可能だと考える。

また、1SK01・1SK10・1SK15は切り合っているが、1SK01の214－4の須恵器坏や1SK10の215－2が糸切底の土師器坏を除くと、出土遺物からみた時期には大きな差はないと思われる。そうした上で、周辺遺構との関連を見てみたい。1SK15と1SD05は浅い溝で接続しており、検出時には1SK15は溜井の可能性もあると考えた。完掘してみると、1SK15はそれほどの深さがなく、溜井とするには無理がありそうである。しかしながら、1SK10にも1SD25が接続していて、南方向に流下している。1SK10は1SK15よりも深さがあるが、やはり溜井としては浅いと言わざるを得ない。しかしながら、よく似た構造の遺構が近接して存在することは事実であり、安易に溜井の可能性を否定することも危険であろう。ついては、古代の溜井の類例が、当市域あるいは近隣市町村で一定程度増加した後に再度検討を試みることが必要であると考えている。

出土遺物

まず特徴的な遺物から採り上げたい。1SK01から出土した214－1は輪状つまみをもつ須恵器で、あまり例を見ないものである。天井部には丁寧な回転箆削を施していて、口縁部は横ナデによっている。輪状つまみは貼り付けで形成されており、つまみの見込み部分はナデ調整となっている。また天井部の内面側は不定方向のナデが施されていて、全体的に調整は丁寧である。口縁部には坏と合わせるための返りが設けられていて、その断面形状は逆三角形である。焼成は良好であるが、外面は暗灰赤茶色を

Fig.220　調査区略図（1/200）

Fig.221　遺構全体配置図（1/200）

調査区の水没状況（北から）

呈していて、典型的な熊本県荒尾市小袋山産のものと思われる。

また、214 － 4 や 219 － 1 は蓋の受けがついている須恵器の坏で、古墳時代の所産と思われるものである。また、これらと対になるような蓋としては 216 － 4 があげられる。214 － 4 と 219 － 1 は、いずれも口縁部の立ち上がりが高いもので、比較的古相を呈していると思われる。

まとめ

ここまで、検出遺構と出土遺物について考察してきたが、周辺の状況を踏まえて今回の調査で得られた成果についてまとめてみたい。まず、遺構の項で見てきたように、今回の調査区の北東方向に遺跡の展開が予想されるが、当遺跡から北東に 0.5km のところに和泉小山口遺跡がある。ここでは中近世の遺構に混じって、古代の土坑が検出されている。この点も考えると、当遺跡から和泉小山口遺跡にかけて古代の集落が展開している可能性を指摘できる。また、須恵器の坏等から考えて、その集落は、古墳時代から連続する集落である可能性も高いといえる。換言すれば、和泉小山口遺跡附近から展開する古代の集落は、当遺跡附近で南限となっていて、その南側は湿地帯が展開していた可能性が高い。

以上、多少乱暴ではあるが、当遺跡とその周辺について概観してきた。いずれも試論の域を出ないものであるが、大方の叱責を乞うところである。

10. 常用日田行遺跡（第３次調査）

Fig.222　調査区位置図（1/2,500）

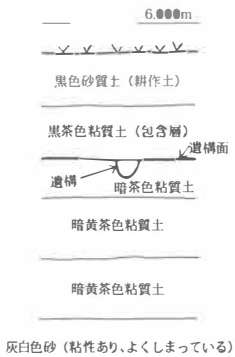


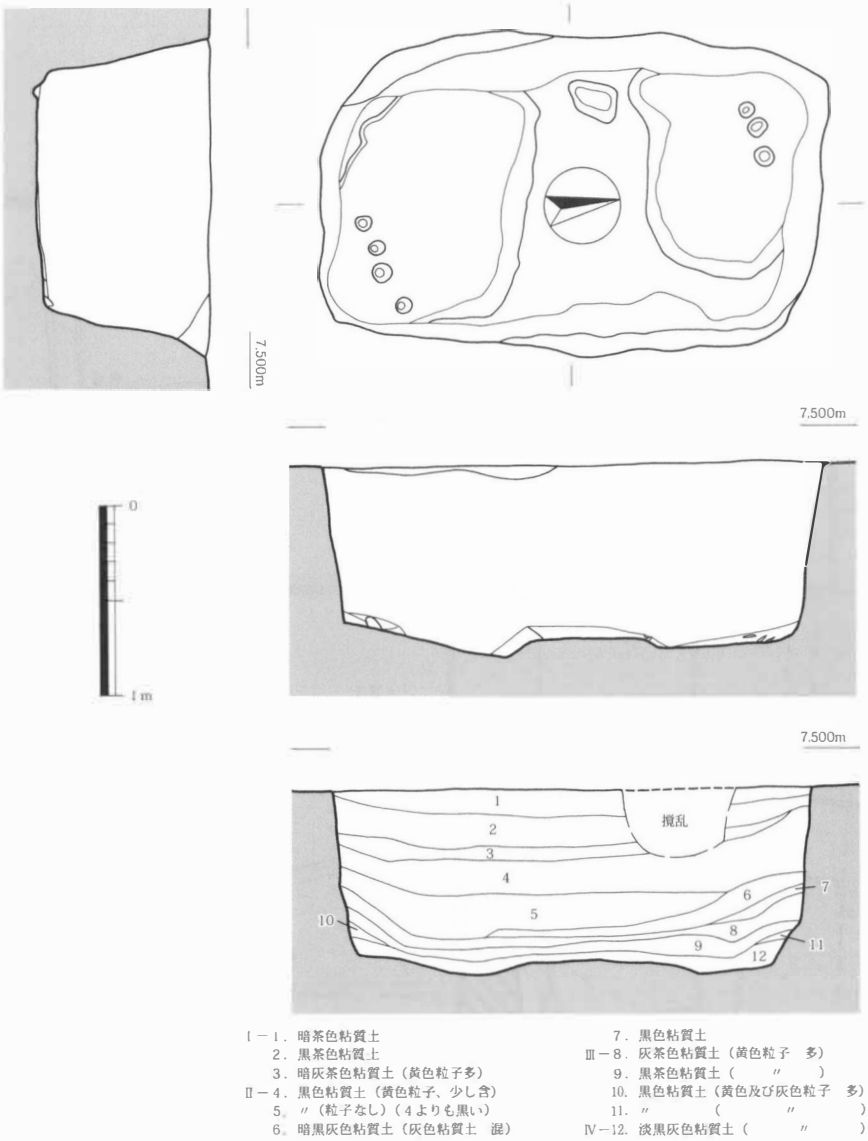
Fig.223　基本層序模式図（1/20）

常用日田行遺跡第３次調査は、市丸技研株式会社の工場増設に先立って行なわれた発掘調査である。平成10年度に市丸技研株式会社から筑後市教育委員会に対して、当該地の埋蔵文化財の有無について照会がなされた。試掘調査の結果、全域に埋蔵文化財が包蔵されていることが明らかとなり、協議の結果、遺構の保全が不可能であることが明らかとなった。また、市丸技研側でも新工場の操業予定も差し迫っているため、急遽、記録保存のための本発掘調査を行なうこととなった。

調査は平成11年２月から３月にかけて実施し、調査は永見が担当した。

遺構

周辺に常用長田遺跡や常用日田行遺跡（第１次調査地点・第２次調査地点）、さらには水田上平霊石遺跡等があり、弥生時代前半期の遺構が予想されたが、試掘調査により、中世の溝状遺構の所在も明らかとなっていた。本調査に入ってみると、



Ⅰ－1．暗茶色粘質土
2．黒茶色粘質土
3．暗灰茶色粘質土（黄色粒子多）
Ⅱ－4．黒色粘質土（黄色粒子、少し含）
5．〃（粒子なし）（4よりも黒い）
6．暗黒灰色粘質土（灰色粘質土　混）
7．黒色粘質土
Ⅲ－8．灰茶色粘質土（黄色粒子　多）
9．黒茶色粘質土（　〃　）
10．黒色粘質土（黄色及び灰色粒子　多）
11．〃　（　〃　）
Ⅳ－12．淡黒灰色粘質土（　〃　）

Fig.224　3SK10 実測図（1/40）

まさに事前に予想したとおりの遺構が展開していた。遺構の種別としては、土坑、溝等であった。また、今回の報告では最初に基本層序を報告しておく。当遺跡に置ける基本層序は、標高 7.9 m附近が地表面で、耕作土である黒色砂質土が地表面から 0.3 mほど堆積している。その下に遺物包含層となる黒茶色粘質土が 0.25 m堆積していて、これらを除去すると遺構面である暗茶色粘質土に達する。さらに掘削すると標高 7.0 m附近で暗黄茶色粘質土となり、標高 6.5 m附近ではさらに粘性の強い暗黄茶色粘質土となる。さらに下層には良くしまった粘性の灰白色砂が確認されている。

以下、遺構種類別に報告するが、遺構の時期別に報告はしていないので留意されたい。

土坑

今回の調査では、２基の土坑を報告する。以下、遺構別に記述する。

3SK10（Fig.224、Pla.87・88）

調査区の東寄りに位置する。南北 2.6 m東西 1.7 m深さ 0.9 mで主軸の方位はＮ－ 08°－Ｅである。底面に２ヶ所の掘り込みが認められ、北側のものは南北 0.8 m東西 1.1 m深さ 0.1 mで、南側のものは南北 1.0 m東西 1.2 m深さ 0.1 mである。また底面中央西側には径 0.2 m深さ 0.1 mの小穴が認められる。南側の掘り込みは底面の幅いっぱいに穿たれ、南西隅を掘り残して小さな棚をつくり出している。さら

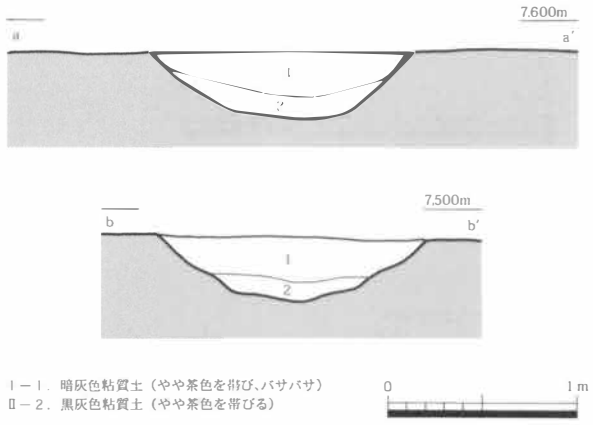


Fig.225　3SD05 土層断面実測図（1/40）

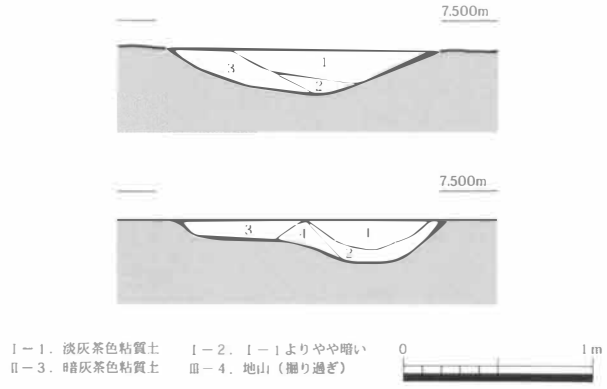


Fig.226　3SD15 土層断面実測図（1/40）

に南東隅には杭の痕跡と見られる小穴が４個確認できる。北側の掘り込みは、東側を掘り残すように穿たれ、北東隅の底面には３個の小穴が確認できる。この土坑の機能については小結で触れるので、ここでは事実報告に留める。

出土遺物は、弥生土器（甕・壷・蓋・片）・サヌカイト（片）がある。

3SK16（Fig.232）

調査区の東に位置する。調査可能な範囲で、南北 1.8 m東西 0.8 m深さ 0.1 mを測る。大半が調査区外となるため、詳細は不明である。

出土遺物は、弥生土器（甕・壷・蓋）がある。

溝状遺構

今回の調査では、５条の溝を確認した。以下、遺構別に報告する。

3SD01（Fig.232、Pla.88）

調査区の南西から東へ向かって走る溝である。幅 0.7 m深さ 0.1 mを測る。

出土遺物は、弥生土器（甕）・須恵器（甕）がある。

3SD02（Fig.232、Pla.89）

調査区の南東から南西へ向かって走る溝である。幅 0.6 m深さ 0.2 mを測る。

出土遺物は、弥生土器（甕・壷）・凸帯文土器（甕）がある。

3SD05（Fig.225）

調査区の北西部を囲む、「コ」の字状の溝である。幅 1.4 m深さ 0.3 mを測る。埋土は上下２層に分

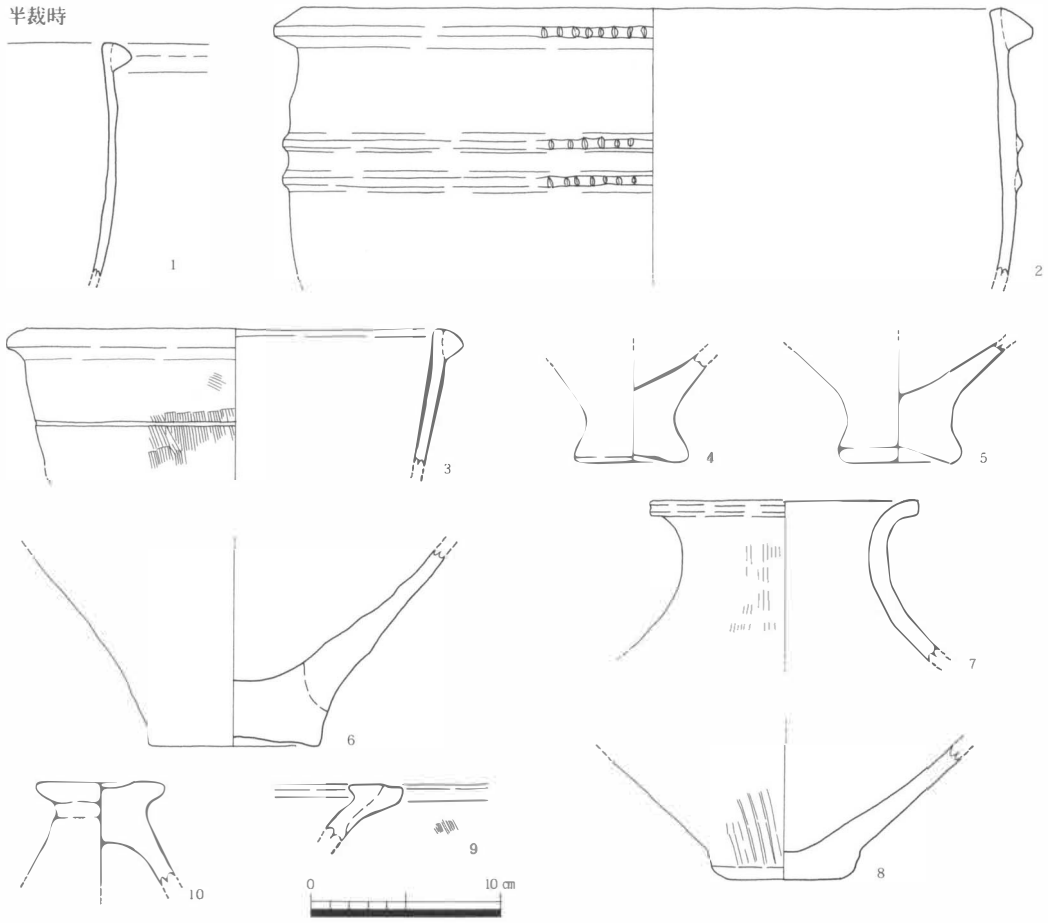


Fig.227　3SK10 出土遺物実測図①（1/4）

かれる。

出土遺物は、弥生土器（甕・支脚・片）・土師器（皿・片）・陶器（椀・片）・サヌカイト（片）がある。

3SD08（Fig.232）

調査区の東から西へ北側に膨らみながら走る溝である。幅０.5 ｍ深さ 0.2 ｍを測る。

出土遺物は、弥生土器（片）がある。

3SD09（Fig.232）

調査区の北東から南西へ向かって走る溝である。幅 0.5 ｍ深さ 0.1 ｍを測る。

出土遺物は、弥生土器（甕）・黒曜石（片）がある。

3SD15（Fig.226、Pla.89）

調査区の北から南南西へ向かって走る溝である。幅 1.4 ｍ深さ 0.2 ｍを測る。調査区ほぼ中央で、下層のみが西へ分離している。

出土遺物は、弥生土器（甕・壷）・黒曜石（片）サヌカイト（片）・チャート（片）がある。

出土遺物

今回の調査では、総量でパンコンテナー１０箱の遺物が出土した。以下、遺構別に報告するが、遺物個々の詳細については遺物観察表によっているので、そちらを参照されたい。そのため、本文中では観察表で表現しきれない部分や、遺物の特徴的な部分を中心に記載した。本文中で触れない遺物もある。

3SK10 出土遺物（Fig.227・228、Pla.90・91）

１～１０は半裁時出土の弥生土器である。１～６は甕である。１と３は口縁部に刻目のない凸帯を貼

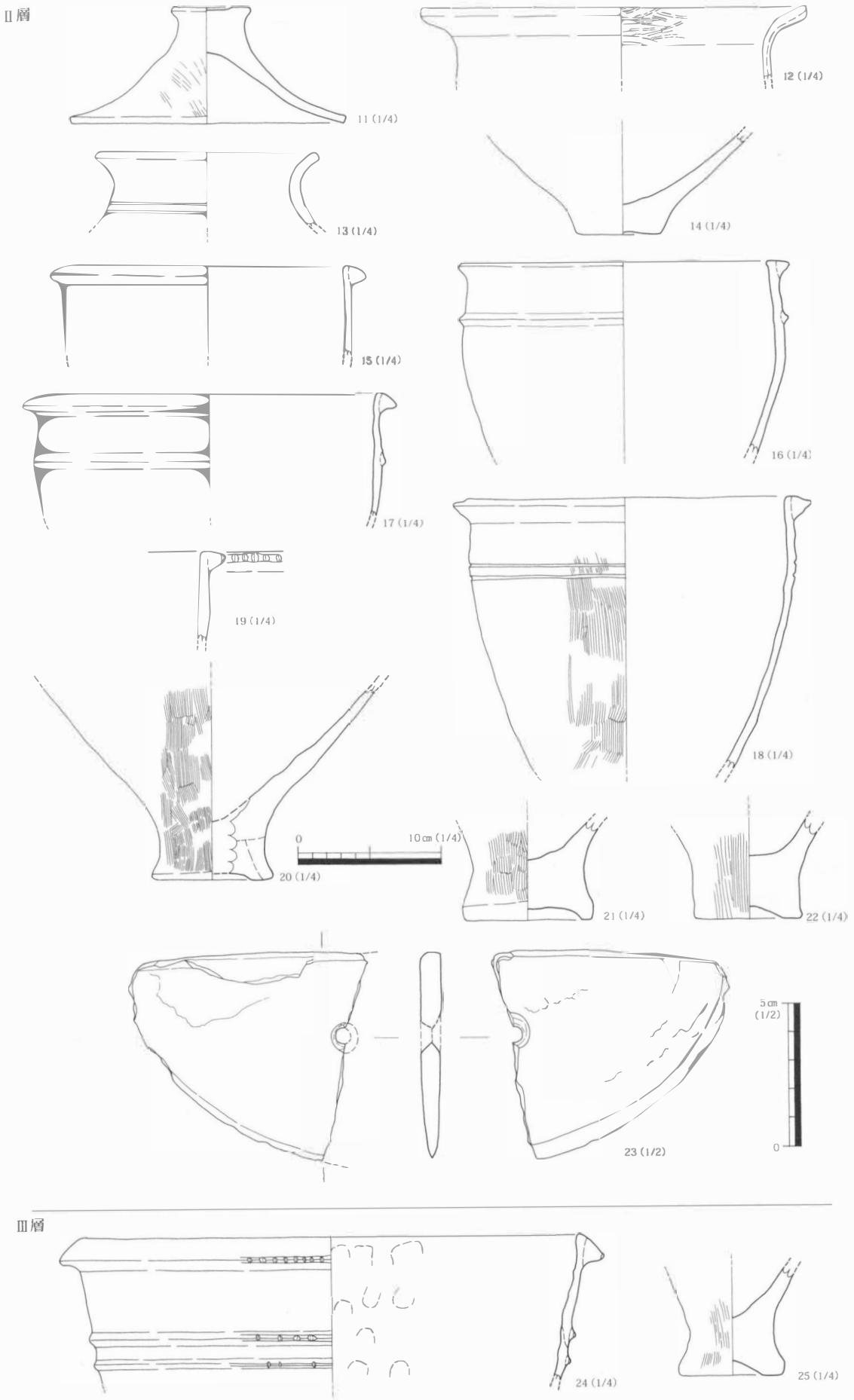


Fig.228　3SK10 出土遺物実測図②（1/4・1/2）

り付けるもので、３は体部に沈線が１条巡る。２は大型の甕である。口縁部に１条と体部に２条の凸帯が貼り付き、すべてに刻目が施されている。４～６は底部の資料である。４と６は厚底の底部で、４は中実であるが、５は上げ底状となる。６は底部の厚みは厚いが、４や５とは異なる類型である。７～９は壷である。７は口縁部から頚部にかけての資料である。口縁部は外反し、端部に明瞭な面を形成する。８は底部であるが、座りが悪い。体部外面に刷毛目が施されている。９は口縁部の資料で、口縁部の内側に粘土を貼り足して肥厚させている。10は蓋のつまみ部である。

11～23はⅡ層からの出土である。11～22は弥生土器である。11は蓋である。全体の器形が知れる資料で、緩やかに外反する口縁部は端部に明瞭な面を形成する。12～14は壷である。12は大型のもので、直立する頚部から口縁部が外反する。口縁端部は肥厚させている。13は中型である。頚部に沈線が２条巡っている。14は底部である。内面はナデ調整であるが、外面の調整は不明である。15～22は甕である。15は口縁部に凸帯を１条貼り付けるが、刻目のないものである。16と17は口縁部と体部に１条ずつ凸帯を貼り付ける。いずれの凸帯にも刻目は施されない。17の外面には煤が付着している。18は口縁部に刻目のない凸帯を１条貼り付け、体部に沈線を２条巡らせるものである。体部外面には刷毛目が認められる。19は口縁部に凸帯を１条貼り付け、刻目を施すものである。比較的深い刻目が印象的である。20～22は底部である。いずれも厚底のものである。それぞれ少しずつ違いはあるが、すべて上げ底状を呈している。23は石包丁である。刃部は片側に偏って研ぎ出されており、両刃偏刃といえるものである。

24と25はⅢ層出土の弥生土器である。いずれも甕で、24は口縁部に１条と体部に２条の凸帯を貼り付ける。すべての凸帯に刻目が施されている。25は底部である。厚底で上げ底状となっている。

3SK16出土遺物（Fig.229、Pla.91）

すべて弥生土器である。1と2は甕である。1は口縁部に凸帯を１条貼り付けるが、刻目は施されない。2は底部の資料である。3は蓋で、口縁部には明瞭な面が形成される。

3SD02出土遺物（Fig.230、Pla.91）

1は凸帯文土器の甕である。体部に凸帯を１条貼り付け、刻目を施している。粘土の接合方向は不明である。2は弥生土器の甕としたが、壷かも知れない。

3SD05出土遺物（Fig.230、Pla.91）

３は土師器の皿である。４は白磁碗の底部である。底部外面は露胎である。５は青磁碗の底部である。全面施釉されるが、畳付と高台見込みは露胎である。６は凹み石である。使用痕が認められる。

3SD15出土遺物（Fig.231、Pla.91）

すべて弥生土器である。１～６は半裁時に出土した。１～４は甕である。１は口縁部に凸帯が１条貼り付くが刻目のないものである。２は如意形口縁部で、体部に凸帯を１条貼り付ける。口縁部と体部凸帯はいずれも刻目がない。３と４は底部である。４は厚底で、顕著な上げ底状を呈する。５と６は壷の底部である。

７はⅠ層出土の甕底部である。厚底のものではない。

小結

今回の調査では、弥生時代の遺構・遺物と中世の遺構・遺物が報告の中心となった。ここでは弥生時代の遺構に若干の考察を加えて、本報告の一応のまとめとしたい。

弥生時代の遺構は土坑が中心となるが、特に3SK10について考察しておきたい。この遺構は、すでに常用長田遺跡第２次調査の報告（註１）の中でとり上げているが、再度ここで考察を加えておきたい。その文中や、本報告の遺構のなかでも触れたとおり、底面が非常に特徴的な土坑である。調査時には廃棄土坑として取り扱ったが、本来的な用途は貯蔵穴であることは間違いない。そのことは、この特徴的な底面によって理解が可能である。3SK10の底面は中央部を掘り残して、両側を掘りくぼめている。単に廃棄土坑を穿つのみならば底面は平坦でよいはずで、このような凝った形状にする理由は見当たらない。さらに、南西側の隅には棚状の段を残し、南東側には杭跡が認められる。また北側の掘り込みを

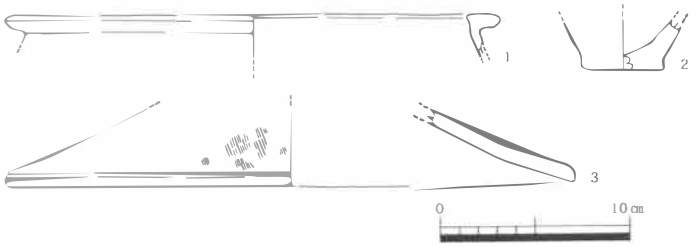


Fig.229　3SK16 出土遺物実測図（1/4）

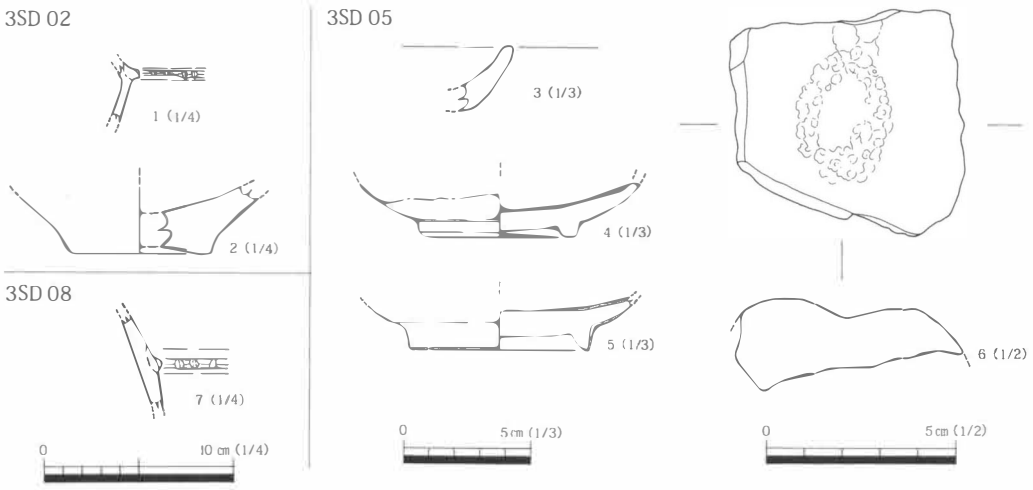


Fig.230　3SD02・3SD05・3SD08 出土遺物実測図（1/4・1/3・1/2）

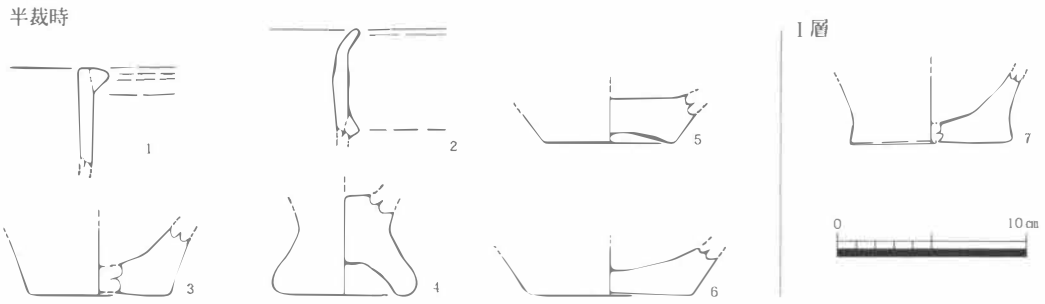


Fig.231　3SD15 出土遺物実測図（1/4）

見ると東側は掘り残して、北西側には杭跡が認められる。これらの構造は、それぞれの掘り込みの上に木製の床を張っていたと考えれば、非常に理解しやすいものである。掘り残したり棚を作ったりしてその面にあわせて床を張り、他方では杭を打ち込んで床の支えとしている。このことは中央部の堀残しの西側にみられる小穴の存在を考えると一層理解しやすい。この小穴は一本梯子を固定したものと考えて間違いなく、地上から降り立つ部分だけは地面を残したと考えられる。つまり、地上から降り立った部分は安定した泥の面であり、その両側が木製の床を張った貯蔵場所だったと理解したい。

ではなぜ、このような構造をとったのであろうか。確かに一般的な貯蔵穴ではこのような構造はとっていない。とすれば、この貯蔵穴には、通常とは異なるものが貯蔵されていたことになる。縄文時代からの主要な炭水化物食料である堅果類は、水漬けにしたりして貯蔵するのが一般的である。また、弥生時代に入って食料となる米は、現在のところ高床倉庫に貯蔵されたと考えられている。とすれば、この貯蔵穴に収められたものはなんであろうか。ここでは、冷暗所でかつ湿気が多すぎない環境で保存すべ

Fig.	No	遺構	番号	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	口縁部凸帯	体部凸帯	備考	R No
225	1	3SK	10	半裁	弥生	甕				口縁部細片	横ナデ	不明	不明			赤茶褐色	やや粗	1～2mm大の砂粒多	やや不良	凸帯貼付	1条		内外面ともに煤付着 R.8と同一個体か？	9
225	2	3SK	10	半裁	弥生	甕	37.0			口縁部1/4	横ナデ	横ナデ ナデ	ナデ			外 暗赤茶色 内 明黄茶褐色	やや密	1～3mm大の砂粒	やや良	凸帯貼付	1条 刻目有	2条 刻目有		10
225	3	3SK	10	半裁	弥生	甕	22.0			口縁部1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			外 暗黄茶色 内 暗橙色	やや密	1～2mm大の砂粒多	やや良	凸帯貼付	1条	沈線 1条		4
225	4	3SK	10	半裁	弥生	甕		5.7		底部完存		ナデ 横ナデ	ナデ	ナデ	ナデ 不明	黄茶褐色	やや粗	1～3mm大の砂粒・石英多	やや良				底部は中実	2
225	5	3SK	10		弥生	甕		5.8		底部完存		ナデ 横ナデ	ナデ	ナデ	ナデ 横ナデ	茶褐色	やや密	1～2mm大の砂粒	やや良				底部は中実で上げ底状	1
225	6	3SK	10	半裁	弥生	甕		8.6		底部完存		不明	ナデ	指頭圧痕	ナデ	赤茶褐色	やや粗	1～3mm大の砂粒・長石多	やや不良				内外面ともに煤付着 R９と同一個体か？	8
225	7	3SK	10	半裁	弥生	壺	14.2			口縁部1/2	横ナデ	刷毛 ナデ	篦ナデ			外 暗茶褐色 内 茶褐色	やや密	1～3mm大の砂粒・角閃石・雲母	良好	外反 端部に面				6
225	8	3SK	10	半裁	弥生	壺		5.8		底部完存		刷毛	不明	不明	ナデ	外 暗黄茶色 内 黄茶褐色	やや密	1～2mm大の砂粒多・角閃石	やや良					5
225	9	3SK	10	半裁	弥生	壺				口縁部細片	横ナデ 刷毛					明黄茶色	やや粗	1mm大の砂粒・雲母	やや良	端部肥厚				7
225	10	3SK	10	半裁	弥生	蓋				つまみ部完存		ナデ 横ナデ	ナデ	指頭圧痕	横ナデ ナデ	明黄茶色	やや粗	1～2mm大の砂粒多	やや良				つまみ部径6.6cm	3
226	11	3SK	10	Ⅱ層	弥生	蓋	18.9		8.2	1/2	横ナデ	ナデ 刷毛	ナデ	ナデ	横ナデ ナデ	外 明橙色 内 明灰茶色	やや密	1～4mm大の砂粒・角閃石	やや良	外反 端部に面			つまみ部径5.2cm	12
226	12	3SK	10	Ⅱ層	弥生	壺	28.0			口縁部1/4	横ナデ 箆磨き	不明	不明			明茶色	やや粗	1～3mm大の砂粒多	やや良	外反 端部肥厚				9
226	13	3SK	10	Ⅱ層	弥生	壺	15.0			口縁部1/4	不明	不明	不明			明橙色	やや粗	1～3mm大の砂粒	やや不良	外反 端部に面				10
226	14	3SK	10	Ⅱ層	弥生	壺		5.8		底部完存		不明	ナデ	ナデ	不明	明黄茶色	粗	1～4mm大の砂粒・金雲母・石英多	やや不良					11
226	15	3SK	10	Ⅱ層	弥生	甕	19.6			口縁部1/4	横ナデ	ナデ	不明			外 暗黄茶褐色 内 黄橙色	やや粗	1～2mm大の砂粒・角閃石・石英多	やや良	凸帯貼付	1条			4
226	16	3SK	10	Ⅲ層	弥生	甕	22.2			上半部1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			暗黄茶褐色	やや密	1～3mm大の砂粒	やや良	凸帯貼付	1条	1条		7
226	17	3SK	10	Ⅲ層	弥生	甕	24.0			口縁部1/4	横ナデ	不明	ナデ			暗茶褐色	やや粗	1～2mm大の砂粒・角閃石・石英多 金雲母多	やや良	凸帯貼付	1条	1条	外面に煤付着	5
228	18	3SK	10	Ⅲ層	弥生	甕	23.4			上半部1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			外 暗黄茶褐色 内 明茶褐色	やや粗	1～3mm大の砂粒・金雲母・長石多	やや良	凸帯貼付	1条	沈線 1条		8
226	19	3SK	10	Ⅲ層	弥生	甕				口縁部細片	横ナデ	ナデ	ナデ			外 暗茶褐色 内 黄茶褐色	やや密	1mm大の砂粒	良好	凸帯貼付	1条 刻目有			1
228	20	3SK	10	Ⅲ層	弥生	甕		7.8		底部1/2		刷毛	ナデ	不明	横ナデ 不明	外 暗黄茶色 内 黄茶褐色	やや粗	1～2mm大の砂粒	良好					6
228	21	3SK	10	Ⅲ層	弥生	甕		8.6		底部完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外 明黄色 内 明黄茶色	やや粗	1～4mm大の砂粒・長石・金雲母多	良好				底部は中実で上げ底状	3
228	22	3SK	10	Ⅲ層	弥生	甕		7.3		底部完存		刷毛	ナデ	指頭圧痕	ナデ 横ナデ	外 淡橙色 内 暗茶色	やや粗	1～3mm大の砂粒多	やや良				底部は中実で上げ底状	2
228	24	3SK	10	Ⅳ層	弥生	甕	24.6			口縁部1/8	横ナデ	不明 横ナデ	指頭圧痕 ナデ			外 暗茶褐色 内 明橙色	密	1～3mm大の砂粒・金雲母多	やや良	凸帯貼付	1条 刻目有	2条 刻目有		1
228	25	3SK	10	Ⅳ層	弥生	甕		7.1		底部完存		刷毛	ナデ	ナデ	横ナデ	外 淡黄赤色 内 暗灰茶褐色	やや密	1～2mm大の砂粒	やや不良				底部は中実で上げ底状	2
229	1	3SK	16		弥生	甕	26.0			口縁部1/4	不明	不明	不明			淡黄茶色	やや粗	1～3mm大の砂粒	やや不良	凸帯貼付	1条			2
229	2	3SK	16		弥生	甕		4.4		底部1/2		ナデ	ナデ	ナデ	不明	外 淡黄橙色 内 淡黄白色	密	1～3mm大の砂粒	やや不良					1
229	3	3SK	16		弥生	蓋	30.0			口縁部1/3	横ナデ	刷毛	不明			外 明橙色 内 明灰色	やや良	1～2mm大の砂粒多	やや良	外反 端部に面				3
230	1	3SD	02		凸帯文	甕				体部細片		横ナデ	横ナデ			淡黄白色	やや密	1mm大の砂粒	やや良			1条 刻目有		2
230	2	3SD	02		弥生	甕		7.4		底部1/2		不明	不明	不明	不明	外 淡橙色 内 淡灰茶色	やや粗	1～2mm大の砂粒	やや不良					1
230	3	3SD	05		土師	皿				口縁部細片	不明	不明	横ナデ			明黄茶色	密	微砂粒・雲母	良好	内湾				2
230	4	3SD	05		青磁	碗		7.2		底部1/2		施釉	施釉	施釉	露胎	素地 灰白色 釉薬 淡緑色	精良	0.5mm大の砂粒	良好					3
230	5	3SD	05		白磁	碗		6.1		底部完存		施釉	施釉	施釉	露胎	素地 明灰白色 釉薬 淡緑白色	精良	1mm大の砂粒	良好				内底見込の釉を輪状掻取り	4
230	7	3SD	08		弥生	壺				体部細片		不明	不明			外 明黄茶色 内 黒褐色	密	1～3mm大の砂粒多	やや良			1条 刻目有		1
231	1	3SD	15	半裁	弥生	甕				口縁部細片	不明	不明	不明			外 淡橙色 内 明灰茶色	やや粗	1～2mm大の砂粒・石英多	やや不良	凸帯貼付	1条			2
231	2	3SD	15	半裁	弥生	甕				口縁部細片	不明	不明	不明			淡黄赤白色	やや密	1～2mm大の砂粒	やや不良	如意形		1条		6
231	3	3SD	15	半裁	弥生	甕		7.0		底部1/4		不明	不明	不明	不明	外 明赤茶色 内 暗茶色	密	1～2mm大の砂粒多	やや良					3
231	4	3SD	15	半裁	弥生	甕		7.0		底部1/3		不明		不明	不明	外 明茶色 内 暗茶色	やや粗	1～3mm大の砂粒・石英多	やや良				底部は中実で上げ底状	1
231	5	3SD	15	半裁	弥生	壺		6.9		底部完存		不明	不明	不明	不明	外 明橙色 内 淡橙色	やや密	1～3mm大の砂粒多	やや不良					4
231	6	3SD	15	半裁	弥生	壺		8.6		底部1/2		不明	不明	不明	不明	外 暗橙色 内 暗茶色	やや粗	1～2mm大の砂粒・角閃石多	やや不良					5

Tab.33　遺物観察表（土器）

Fig.	No	遺構番号	層位	素材	産地	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	残存	備考	R No
[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]		石包丁	8.2	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		11

Tab.34　遺物観察表（土器以外）

きものとだけ指摘しておきたい。現在の段階では、当地域の弥生時代の食生活を復元することは大きな困難を伴う。したがって、品目の特定は困難である。

また、この3SK10から出土した土器であるが、口縁部と体部の凸帯に刻目が施される亀ノ甲式土器から、体部凸帯が消滅して口縁部の凸帯も刻目がみられなくなる城ノ越式土器までが含まれている。甕の底部は上げ底状となり、全体としては城ノ越式土器段階の様相を呈している。さらに、227－2や228－24に注目してみたい。これらの甕は体部の凸帯が２条巡っている。前に論じたとおり（註２）多条凸帯甕は出土する遺構が限られており、しかも複数個体出土することが多い。ここでも２個体出土しており、この土坑が集落の中で特殊な存在である可能性を示している。

註１　永見秀徳「床構造を持つ土坑」『筑後西部地区遺跡群（Ⅵ）筑後市文化財調査報告書第50集　筑後市教育委員会 2003』所収

註２　永見秀徳「多条凸帯甕」『筑後西部地区遺跡群（Ⅵ）筑後市文化財調査報告書第50集　筑後市教育委員会　2003』所収

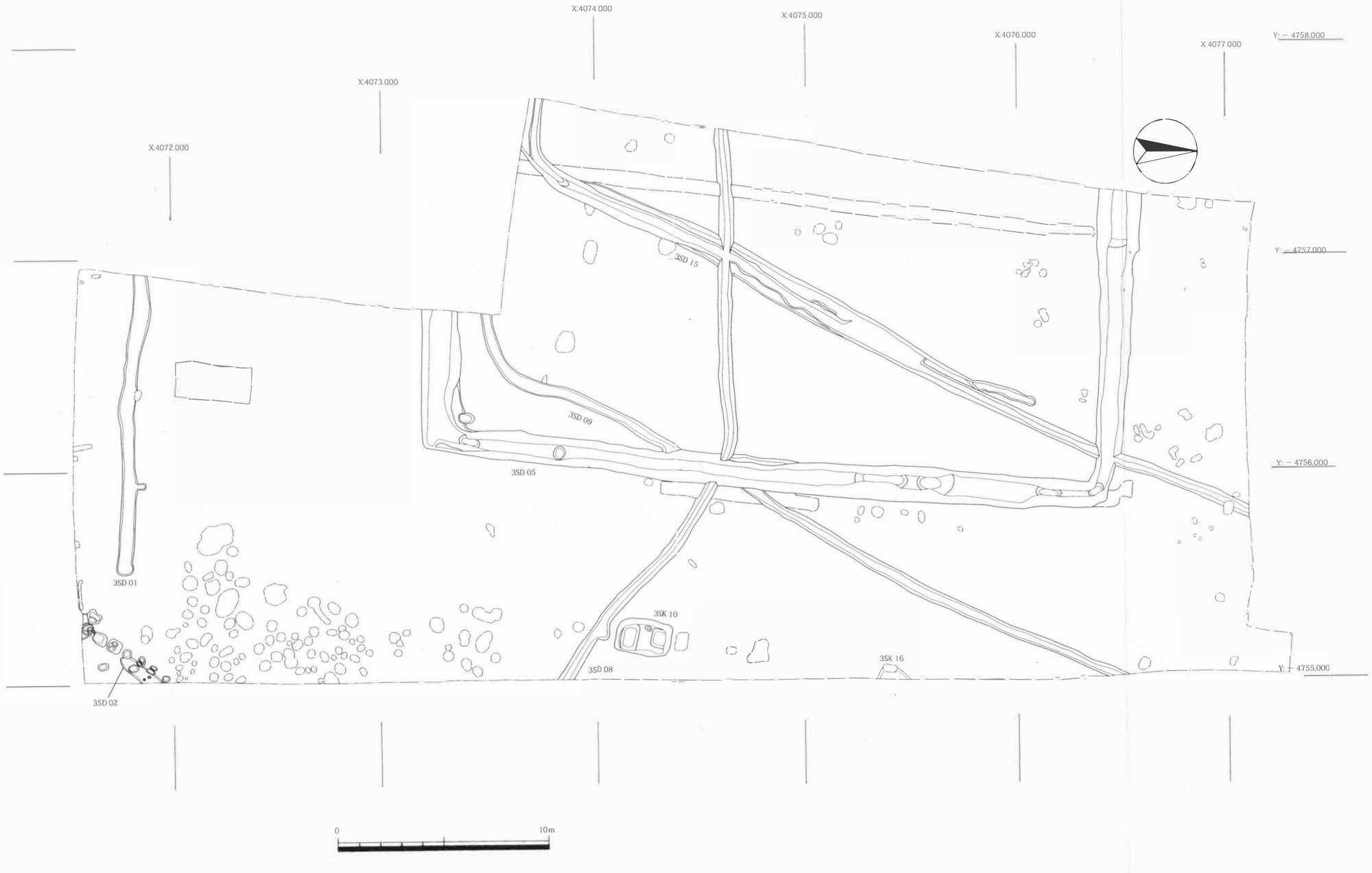


Fig.232　遺構全体配置図（1/200）

第Ⅳ章　まとめ

本書は、平成３年度から平成10年度までに調査した遺跡のうち、これまで未報告であった遺跡の成果をまとめたものである。これに若菜森坊遺跡の成果が追加されれば、これまでに筑後市教育委員会が調査してきた遺跡が一応報告を終わることになる。今回の報告とりあげた遺跡を概観して、簡単ではあるがここでのまとめとしたい。

まず、上北島平塚遺跡では、弥生時代と古墳時代の集落を確認した。特に弥生時代の集落は円形住居を主体とする集落の最終段階のものではないかと思われる。それは大型の円形住居にソングンニ系住居の名残を見ることができるのに対し、中型や小型の円形住居が構造を変化させていることからも推測されるものである。また、土器様相の点からも興味深い事象が看取された。城ノ越式土器の最終段階或いはそれに続く時期に、口縁部凸帯の貼り付け方法に変化が見られたことである。この変化は、次段階の須久式の構造を考えると、その過渡期的な構造とも言えるものである。こうした点から、当地域における城ノ越式土器から須久式土器に到る変化の過程を考える上での重要な視点になると思われる。

つぎに下北島久清遺跡であるが、まず、弥生時代後期を中心とした掘立柱建物群が目を引く。比較的標高の高い位置にあって、竪穴式住居を主体とせず、掘立柱建物を主体とする集落を構成している。もちろん、北東側の微高地上に竪穴住居群が展開し、今回の調査区附近は貯蔵区域として機能していた可能性も否定できない。周辺の調査事例が増加した時点で考察が必要であろう。また、今回の調査では、上北島平塚遺跡で指摘した、城ノ越式土器から須久式土器に到る土器の変化過程と同様のものを見ることができた。このことは、上北島平塚遺跡でみられた現象が、当地域において特殊事例ではないということを示している。

上北島花畑遺跡では、先に報告された第２次調査とは全く異なる内容となった。むしろ東側に展開する狐塚遺跡との関連が注目される。ただ、調査した平成４年当時に工事中に発見された遺跡の調査に対し、担当課の全面的な協力が得られたことは非常に嬉しかったのを記憶している。

西牟田清徳浦遺跡では、溝状遺構が確認されたが、出土遺物がなく、時期の比定ができなかった。東側を走る西海道とも方位にずれがあり、性格は不明のままである。

熊野屋敷遺跡の調査は、今回、第１次調査と第２次調査を報告したが、その内容は両者で大きく異なっていた。第１次調査では、土器に混じって多量の瓦が出土した。平瓦や丸瓦に混じって鬼瓦なども出土し、貴重な資料となった。また、近世の所産である「水田の赤瓦」の良好な資料が出土し、これまで写真等でしか知られていなかった赤瓦の器形が判明した。土管から派生したと考えられるその製作技法も古代の桶巻き作りに共通するものがあるが、赤瓦の器形も中世以降の一枚作りの瓦よりも古代の瓦に近いものがあり、興味を引いた。製作技法が似かよると器形までも似てくるといったところか。

また第２次調査では、坂東寺焼の窯跡に近いこともあって、坂東寺焼関係の遺構および遺物の出土を期待していた。しかしながら、出土した土器を概観する限り坂東寺焼よりも古い時期の遺物が中心で、坂東寺焼との関連は認められなかった。坂東寺焼が操業する以前の当該地は、焼き物に関しては消費地の様相を呈していて、坂東寺焼は唐突に開かれたとも言えるのではなかろうか。

蔵数東野屋敷では第１次調査の甕棺群とは全く異なる内容の調査成果となった。今回の第２次調査では、古墳時代の甑が出土して目を引いた。体部は直線的で底部は筒状を呈し、古代に入ってからの甑とは趣が異なる。全体の器形が知れる資料の出土もあり、基準となる資料になりそうである。

西牟田小次郎丸遺跡は確認調査であったが、今回あわせて報告した。今回の調査では、北側の霊鷲寺の外周の堀が、当初は完全な方形であったことが判明した。残念ながら出土遺物が少なく、堀の形状が変わった時期を確定することはできなかった。また、南側の正面も調査したが、明確な遺構を検出することはできなかった。

和泉近道遺跡では、この場所が遺跡の南西側の端になることが判明した。ここから北東側に古代の集

落が展開し、和泉小山口遺跡との関連も注目されるところである。また出土遺物を観察すると、この集落は古墳時代から展開していた可能性が高く、未発見の遺跡が周辺に包蔵されている可能性を指摘できる。

常用日田行第３次調査であるが、中世の区画溝と弥生時代の貯蔵穴等を検出した。弥生時代の貯蔵穴は構造に特徴があり、底面に床を張ったと考えられるものである。多条凸帯甕の出土とあわせて考えると、この土坑に特殊な用途を与えるべきではないかと考えている。また、中世の区画溝は水田荘や下妻荘との関わりを考えると、非常に興味深いものがある。

さらに、このまとめの後に収録されている付編では、昭和 57 年度に調査および報告がなされた瑞王寺古墳の馬具について再報告を行なっている。九州歴史資料館での保存処理が完了し、太宰府市教育委員会の協力でＸ線写真を撮影したのを契機に、実測図も作成し直し、新しい知見も加えて再度報告するものである。

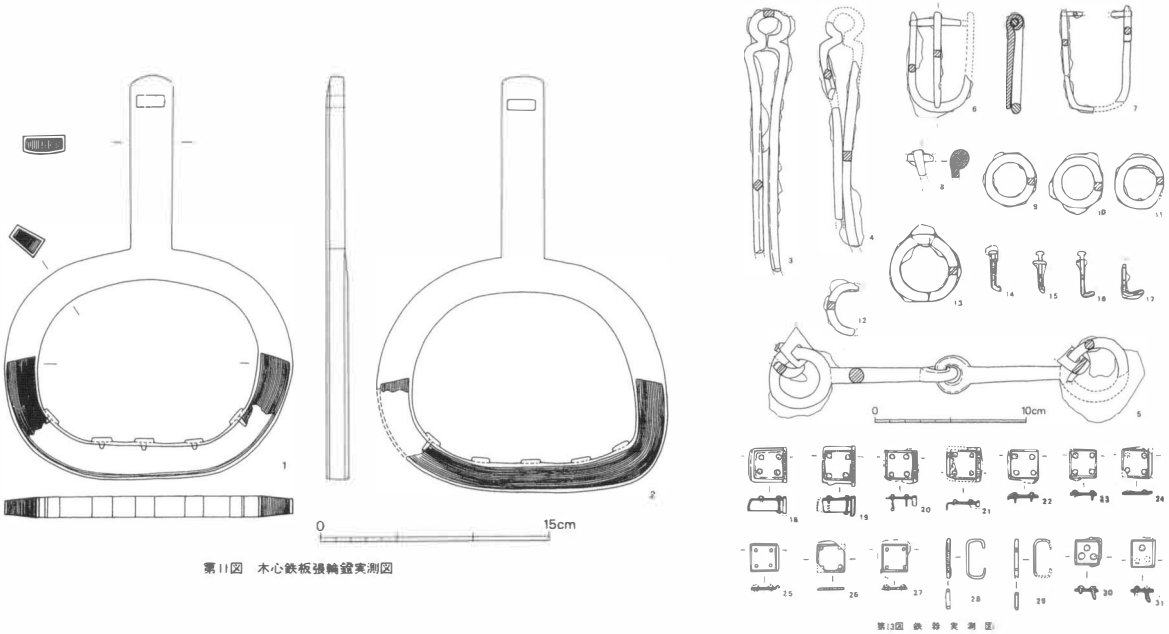
最後に、これまでの一連の作業を通じて痛感したことを記しておきたい。それは現地調査から本報告までの期間をあけることによる弊害である。埋蔵文化財の調査に携わる者として、調査をすれば報告書を刊行するということは当然のことといえる。それも、できるだけ早い時期に報告して公にすることが望ましいのは周知のとおりである。しかしながら、今回調査した各遺跡は現地調査の日程が切迫していたという理由で、本報告を後年に回すという判断をしてしまった。当時としては止むを得ない事情があったにせよ、悔やまれるところである。なぜなら、相当の年数を経た記録類は、保管場所の相次ぐ変更によって、散逸したものも存在するからである。また、調査を担当した筆者自身の記憶も、その多くが薄らぎ、消えてしまったものさえある。そうした意味で、今回の報告でも、下北島久清遺跡の標高に関する情報が失われ、２次元の平面情報のみの報告に終わってしまったのは象徴的である。今後は、調査終了後速やかに報告を行なうように当市では方針を決定したが、今回の反省に立ち、いかなる状況にあっても、計画的かつ早期の報告書刊行を果たして行くようにしたい。

付編　瑞王寺古墳出土馬具の再検討

はじめに

福岡県筑後市大字西牟田に所在する瑞王寺古墳（筑後市教育委員会 1984）から出土した馬具一式[1]は、日本列島における初期馬具の一つとして早くから注目を集めてきた（大谷 1985、清水 1988、千賀 1988）。また韓国における類例の増加と研究の進展を受け、最近では5世紀代の日韓出土馬具を比較する上で、欠かすことのできない重要な位置を占めている（白井 2003、金斗喆 2004、張允禎 2004、桃崎 2004、高田 2005）。このように日本列島における初期馬具の基準資料の一つといえる瑞王寺古墳出土馬具について、形状と構造についての正確な理解を得るため、筑後市教育委員会がX線写真を撮影した。その結果、既報告時には認識できなかった重要な知見を得ることができたので、ここに紹介する次第である。

瑞王寺古墳からは轡1点と鐙1対、鋲具3点、環状雲珠および辻金具を構成すると考えられる鉄環5点、鉄製方形脚金具12点、金銅製責金具などの馬具が出土している〔Fig.233〕。今回はX線写真を撮影した結果、従来と認識が大きく変わった轡と鐙のみ再報告することとする。なお轡、鐙の部分名称はFig.234の通りで、記述における左右は、全て図を正置してみたときの左右である。



第11図　木心鉄板張輪鐙実測図

Fig.233　瑞王寺古墳出土馬具（既報告図面）

1．鑣轡〔Fig.235、Pla.93〕

鑣は腐朽し残存していないが、銜外環に立聞用金具が銹着していることから有機物製鑣轡と考えられる。現状では破損部分に補填がなされ、銜と引手は連結されているが、部品ごとに展開して図化をおこなった。

銜は二連式で長さは右側13.0㎝、左側13.8㎝である。銹化および保存処理の際の補填やその後の劣化によって、肉眼のみによる形状把握は困難である。X線写真を撮影したところ、既報告時には認識されていなかった捩りが銜身に確認された。捩りの単位は不明であるが、鉄棒の両端を鉤手状に折り返すことによって環部を成形していることから、断面方形の1本の鉄棒を捩ったものと考えられる。捩りの回転方向は両銜とも l（エル）[2]で、回転数は不明である。右側で外環外径4.5㎝、内環外径2.6㎝、

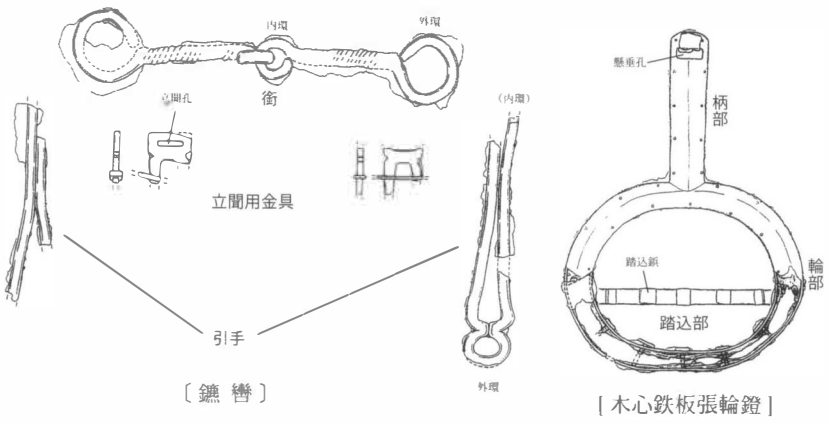


Fig.234　部分名称

左側で外環外径 4.7 ㎝、内環外径 2.7 ㎝を測り、内環に比して外環が大きい。厚さは銜身で約 1.0 ㎝、環部で 0.6 ～ 0.7 ㎝を測る。

引手は外環をΩ状に折り曲げた特殊な形態の２條線引手である〔Pla.96〕。柄部は直線をなすが、右側の引手をみると内環直前で僅かに屈曲するようである。出土状況から遊環を介さず直接銜と連結するものと考えられる。全長は不明であるが、遺存状態の良い右側で残存長 15.0 ㎝を測る。厚さは 0.7 ㎝で、断面は方形である。

２点の立聞用金具は現在、両銜外環に錆着している。頭絡と連結するための長さ 1.3 ㎝、幅 2.7 ㎝の長方形の立聞部と、鑣と銜外環を固定するための脚部からなる。脚部は２脚からなり、いずれも先端が欠失しているが右側で残存長 2.5 ㎝を測る。立聞部と脚部の境界に切り込みを入れている。全長は不明であるが、右側の残存長 3.0 ㎝、左側の残存長 3.3 ㎝である。立聞部と脚部の厚さがともに 0.4cm で、幅も等しいことから、一枚の長方形鉄板を切り抜いてつくったものと考えられる。立聞孔は幅 1.6 ㎝、長さ 0.3 ㎝の平面細長方形である。立聞孔の長さから厚さ２㎜ほどの革紐を直接通したものと考えられる。脚部には鑣と立聞用金具をしっかりと固定するために幅 8.0 ㎜、厚さ 2.0 ～ 3.0 ㎜の長方形鉄板が

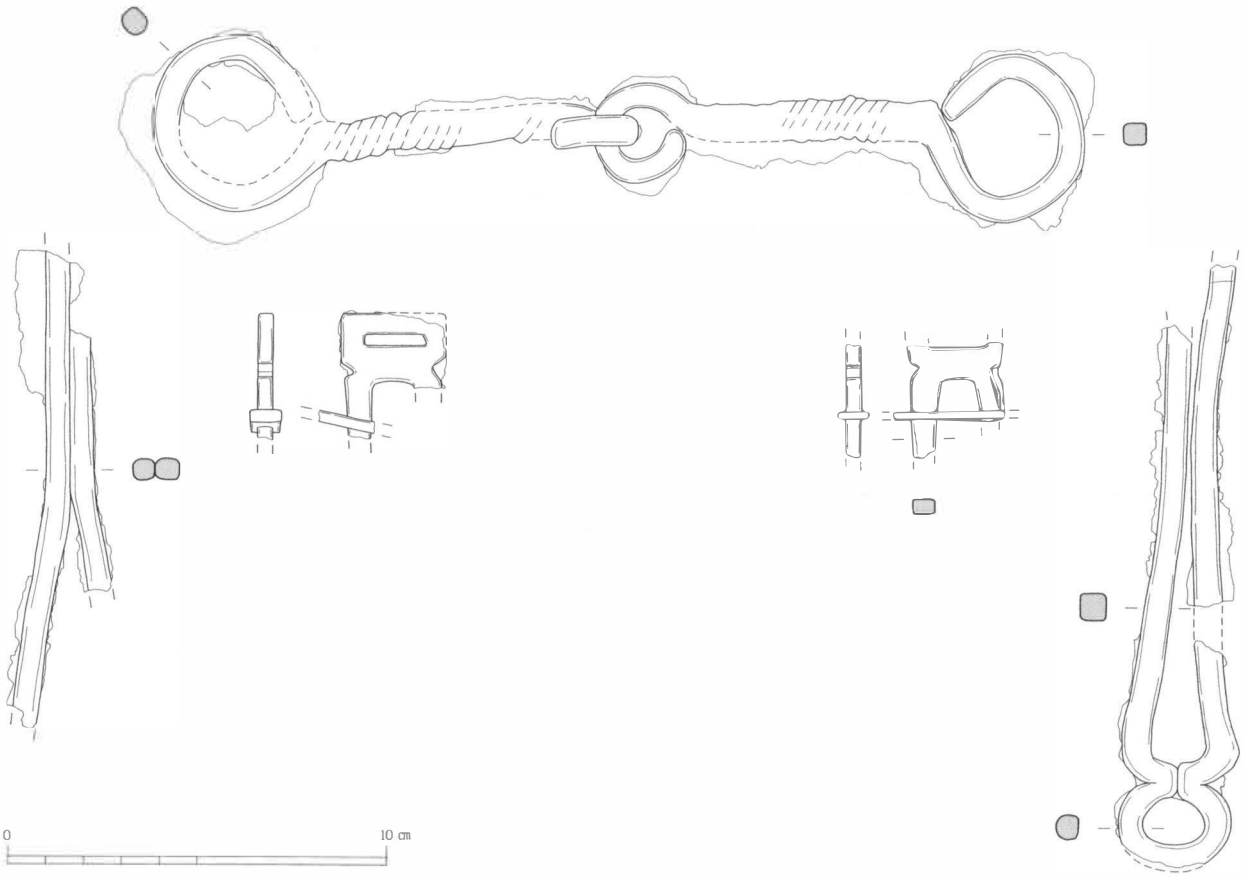


Fig.235　鑣轡実測図（1/2）

あてられている。全長は不明であるが、右側で残存長 2.9 ㎝を測る。鑣の形状は不明だが、銜外環内径から直径は 3 ㎝を越えないであろう。立聞用金具の脚部に付着した有機質から、鑣は鹿角製であろうと推測される。

2．木心鉄板張輪鐙〔Fig.236、pla.94・95〕

1 対の木心鉄板張輪鐙が出土している。2 点とも、木心材を「たも」状に曲げて柄部と輪部をつくっ

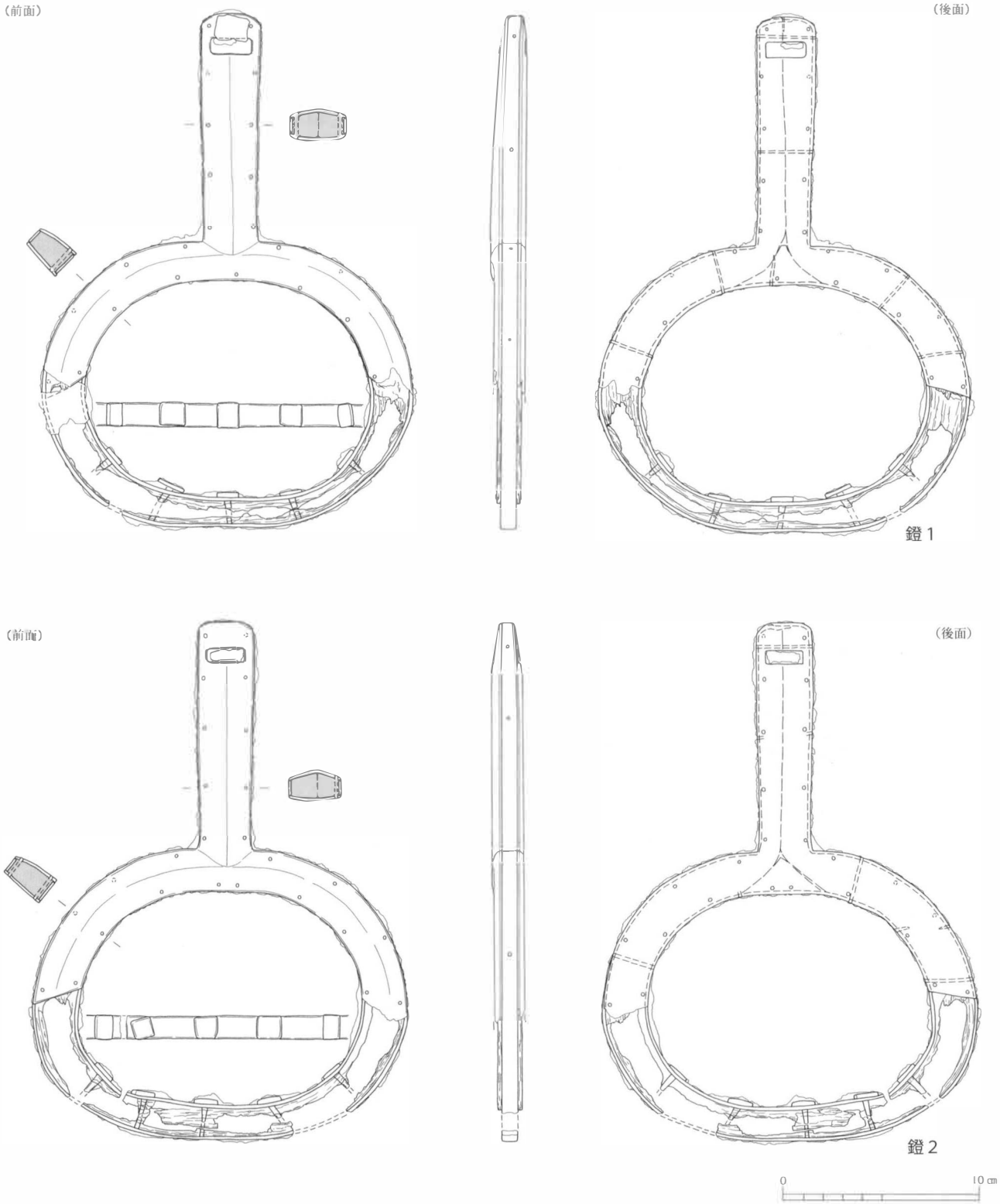


Fig.236　木心鉄板張輪鐙実測図（1/3）

部位		鐙1	鐙2
全長		26.5	26.7
輪部	横径	19.0	19.1
	縦径	14.7	15.0
	厚さ	0.8～1.8	0.8～1.7
柄部	長さ	11.8	11.8
	幅	2.7～3.0	2.6～2.9
	最大厚	0.9～1.8	0.7～1.6
帯状鉄板（外側面）	幅	0.6～0.8	0.5～0.8
帯状鉄板（内側面）	幅	1.2～1.3	1.2～1.3
懸垂孔	長さ	0.8	0.7
	幅	2.1	1.9

〔凡例〕単位は全てcm。

Tab.35　鐙計測値

た後、輪部の内面上部に三角形の木材を入れて形をつくり、側面および前・後面に鉄板をあてて鋲で留めて完成させている。いずれも輪部下半の木心部分が腐朽しているものの鉄板部分が良好に遺存しており、ほぼ全形を知ることができる。以下、各部分の特徴についてみていくが、２点の特徴はほぼ同じであるため、それぞれの計測値はTab.35に示し、一括して記述する。なお、鐙１が既報告の第11図１に、鐙２が既報告の第11図２に該当する〔Fig.233〕。後面の図には、実際には後面鉄板によって視認できない内部の諸情報（木心材、側面鉄板、鋲）についても、X線写真から読み取れるものに関してのみ、破線で示してある。

柄部は「たも」状に曲げた木心材を２本合わせてつくり、四面を鉄板で覆って鋲で固定する。柄部上方には平面長方形の懸垂孔が設けられている。鐙１の前面懸垂孔付近には革が付着しており、鐙鞅の痕跡の可能性が高い。柄部頭の平面形は、鐙１は緩やかにカーブを描き、鐙２は隅丸方形である。外側面にあてた帯状鉄板を柄部の頂上面で重ねている様子がX線写真からうかがえる〔Pla.96〕。柄部前面鉄板の中央部は稜をなしてふくらみ、断面は五角形をなす。後面鉄板もわずかに膨らんでいるが明確な稜は作出していない。鐙２は柄部の木心が欠失しており、内面の様子を観察できるが、前面鉄板は裏側から叩いて意図的に稜を作出していることがわかるのに対し、後面鉄板にはそのような痕跡は認められない〔Pla.96〕。すなわち、製作時から前・後面の区別を意識して、断面五角形をなすように製作されたものと考えられる。

輪部は平面横楕円形である。断面は梯形をなすが、前面が僅かにふくらみ柄部前面鉄板の稜とつながるのに対し、後面は直線をなす。柄部と輪部の接合部分の内面を観察すると、前面鉄板のみ裏側から叩いている様子をうかがうことができる〔Pla.96〕。前・後面鉄板は柄部から輪部の上半まで覆っており、端部を斜めに切り落としている。すなわち、内・外側面は鉄板が全周するのに対し、前・後面は輪部下半で木心材が露出する。輪部内周の踏込部に滑り止めの踏込鋲が５個配置されている。踏込鋲の頭部は方形で幅1.0～1.3cm、厚さ2.0㎜を測る。

踏込鋲以外の鋲は径2.0㎜の丸い鉄棒で、鉄板と木心材を貫いて、対面の鉄板まで達して留めている。鋲頭や鋲脚は僅かに突出するだけで明瞭に確認できないものが多く、鉄棒の両端をかしめる程度で明確な鋲頭をもたないものと考えられる。X線写真を観察してようやく確認できた鋲も多く、X線写真で確認できない鋲が他に存在するものと推測される。特に鐙２の外側面の帯状鉄板を柄部の頂上面で重ねている部分や、柄部と輪部の接合部の内側面にも本来鋲が存在した可能性が高い。

３．瑞王寺古墳出土馬具の系譜

X線写真を活用した再実測の結果、瑞王寺古墳の轡と鐙の形態的特徴の正確な把握および関連資料との詳細な比較検討が可能となった。ここからは瑞王寺古墳出土馬具の系譜について簡単に考察したい。

（１）鑣轡

結論から言えば、日本列島においても朝鮮半島においても瑞王寺例と全く同じものは現状では存在しない。しかし、轡を構成する属性ごとに注目すれば、それらには比較対象が存在する。そこでまず属性別に比較検討をおこなった後、各属性の総体としての瑞王寺例の位置付けを明らかにしたい。瑞王寺古墳の轡は銜、引手、鑣（立聞用金具）という三つの属性から構成されている。

瑞王寺例の銜は、１本の鉄棒の両端を折り曲げて環部とし、銜身部分を捩る１條捩り技法で製作されている。１條捩り技法は、回転数が少なく捩りの凸部のみが強調される１條捩り技法ａ類と、回転数が多く捩りの凹凸が激しい１條捩り技法ｂ類に細分できるが（諫早2005）、瑞王寺例は條線幅の細かさ（約2.0～3.0㎜）から１條捩り技法ｂ類にあたる。このような銜の製作技法は、日本列島では初期の轡に多く認められる。ただし、初期の轡の中では、福岡県池の上６号墳例や兵庫県行者塚古墳例などの３條

捩り技法の銜をもつ轡が先行すると考えられ、1條捩り技法b類の銜をもつ轡は瑞王寺例も含めて、それらよりは時期が下るものと考えられる。

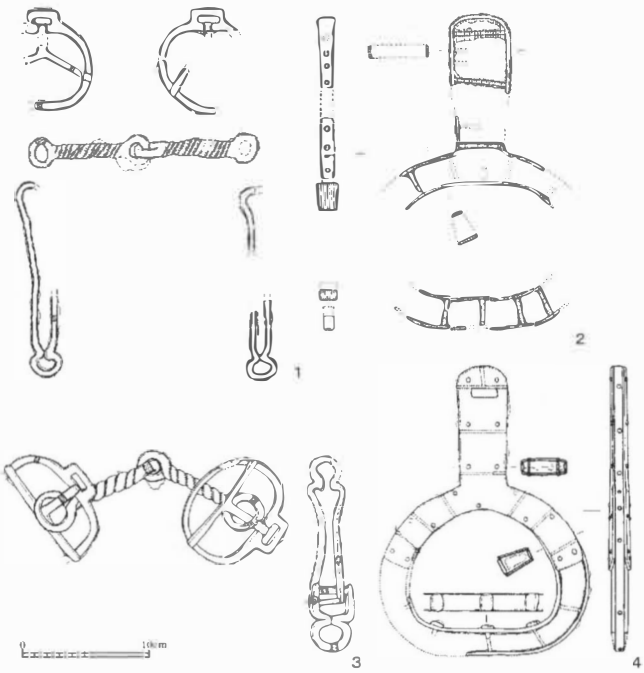
1條捩り技法b類の銜は管見に触れる限り、朝鮮半島北部や中国東北地方には確実な資料は存在しない。朝鮮半島南部では筆者の三国時代Ⅱ段階以降に盛行するもので、分布の濃淡はあるが、朝鮮半島南部の広範な地域で確認することができる技法である。すなわち、この製作技法自体は朝鮮半島南部においては普遍的なものである。ただし鑣轡に限っていえば、1條捩り技法b類の銜を持つ例は洛東江以西の地域に多いということが指摘できる。なお、1條捩り技法b類の銜は環部成形の際、丁寧に鍛接をする場合が多いが、瑞王寺例の環部はただ鉤手状に折り曲げただけである点が注意される。

瑞王寺例の引手は、外環側をΩ状に加工し両端を直角に曲げて柄部へとつづくもので、通有の2條線引手とは異なるものである。日本列島では2條線引手をもつ初期の轡として大阪府鞍塚古墳の円形鏡板轡、奈良県南山4号墳の鑣轡、長野県物見塚古墳の鑣轡、宮城県吉ノ内1号墳の円形鏡板轡などを挙げることができるが、瑞王寺例のようなΩ状の環部をもつ2條線引手は類例がない。朝鮮半島でも全く同じものはないが、洛東江中流域の陜川玉田67－B号墳の環板轡〔Fig.237-1〕[(3)]や洛東江下流域の釜山福泉洞10・11号墳の環板轡〔Fig.237-3〕がΩ状の環部をもつ類例として挙げられる。ただし、福泉洞10・11号墳例は外環側ではなく内環側をΩ状に加工し、外環側に方円結合金具を連結している点で区別される。

瑞王寺例の鑣は、有機物製であるため残念ながら鑣自体の検討は困難である。立聞用金具の型式は千賀久のb式(千賀1988)、金斗喆のA－1式(金斗喆2000)、張允禎の板状掛留式(張允禎2003)、筆者のb2類である(諫早2005)。日本列島における類例としては福岡県稲童21号墳例、岡山県随庵古墳例、同一貫西3号墳例、兵庫県宮山古墳第2主体部例、同池尻2号墳例、群馬県西大山1号墳例などがある。朝鮮半島南部の立聞用金具について検討をおこなった張允禎によると、このような立聞用金具の分布は洛東江以西、特に清州新鳳洞古墳群に多く認められるようである(張允禎2003)。瑞王寺例は鑣に立聞用金具をしっかりと固定するために、立聞用金具の脚部に長方形の鉄板をかませている。b2類の立聞用金具にこのような鉄板をかませる例としては、新鳳洞92－74号墳例や福泉洞10・11号墳の鑣轡、宮山古墳第2主体部例などがある。

先述したように瑞王寺古墳の鑣轡は、1條捩り技法b類の銜から日本列島の初期の轡の中では比較的新しい時期に位置づけられる。しかし、銜と引手の連結に遊環を介さない、特殊な2條線引手を採用するといった特徴は、鑣轡全体の変遷からいえば相対的に古い要素ということができる。もちろん朝鮮半島南部内における鑣轡の地域差を考慮すれば、必ずしも単系的な変遷を描く必要はないが、日本列島で最も盛行する屈曲柄の一條線引手と遊環を備えた「新鳳洞型鑣轡」(柳昌煥2004)と呼ばれる一群と異なることは、注意が必要であろう。

朝鮮半島においては、特殊な2條線引手から洛東江中・下流域との関係が、まず想定できそうである。立聞用金具b2類は新鳳洞古墳群など中西部地域に分布が比較的集中するが、洛東江中・下流域にも類例が存在する。ところが、1條捩り技法b類の銜については、洛東江中流域の玉田古墳群では12例確認されているのに対し、洛東江下流域では現在のところ1例も確認されていない。金斗喆は瑞王寺例について



1・2：陜川玉田67－B号墳　3・4：釜山福泉洞10・11号墳

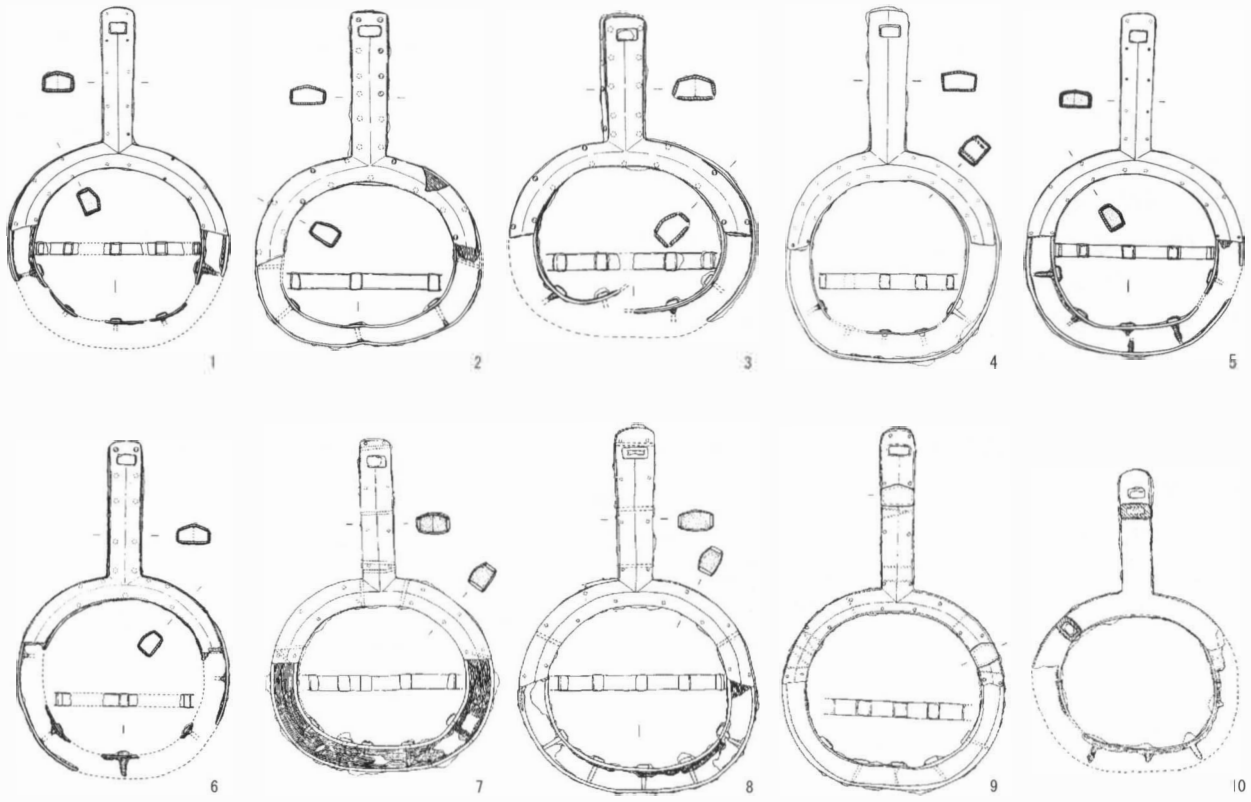
Fig.237　轡の類例

福泉洞 10・11 号墳の環板轡引手と類似することから前期加耶、すなわち洛東江下流域の馬具の影響を受けて成立した可能性が大きいとしているが (金斗喆 2004)、瑞王寺古墳の鑣轡の系譜は銜、引手、鑣 (立聞用金具) という三つの属性全てにおいて類例が認められる洛東江中流域に求めるのが妥当であろう。

（2）木心鉄板張輪鐙

鑣轡が特殊なものであったのに比べ、木心鉄板張輪鐙は類例が多く、また研究も早くから盛んにおこなわれている。既報告でもすでに触れられているように、細長い柄部をもちながらも、踏込部の幅が広がらない瑞王寺古墳の木心鉄板張輪鐙は、小野山節が示した木心鉄板張輪鐙の変遷観、すなわち「輪鐙の柄が比較的太く短くて、柄の頭が丸く形づくられており、輪の上部すなわち柄につながる部分と踏込の部分とが同じ厚さで同じ幅に作られていて、前後の面が柄と輪の接合部にだけ鉄板をあてる (小野山 1966, p.3)」ものから、「輪鐙の柄が細長く、柄の頭が角ばる形につくられて、踏込の部分が輪の上部よりずっと厚くなっており、幅は逆に少しせばまっている (小野山 1966, p.4)」ものへ、という変遷の中間的特徴を示す資料として評価されてきた [4]。小野山以後の研究成果に照らしあわせれば、瑞王寺例は千賀久のⅠ Ba 式 (千賀 1988)、清水篤の C 型式 (清水 1988)、服部聡志の第二類 (服部 1991)、柳昌煥のⅠ B4 型式 (柳昌煥 1995)、白井克也のⅠ B 式 b3 類 (白井 2003)、張允禎の b －②型式 (張允禎 2004)、高田貫太の B 型式 (高田 2005) にあたる。

今回の再検討による新しい知見としては、柄部前面が稜をなし断面五角形を呈することを確認できた点が挙げられよう。このような資料群については早くに申敬澈が注目し、洛東江以西の地域、特に中流域の高霊や陜川に分布が集中することから「池山洞型鐙子」(申敬澈 1989) や「大加耶型鐙子」(柳昌煥 2000) などと呼ばれている。柄部断面が五角形をなす資料は、いずれも踏込部が広がらない点で共通するが [5]、鉄板の張り方や踏込鋲の有無によっていくつかのバリエーションがある。Fig.238 は、朝鮮半島の柄部断面が五角形をなす資料の中で、瑞王寺例のように柄部から輪部の上半にかけて前・後面鉄板を張り、踏込部に鋲をもつものを集めたものである。現状ではほとんどが洛東江中流域西岸 (陜川・



1：陜川玉田M2号墳　2：陜川玉田５号墳　3：陜川玉田35号墳　4：陜川玉田70号墳　5：陜川玉田91号墳　6：陜川玉田91号墳
7：高霊池山洞30号墳　8：高霊池山洞Ⅰ－３号石槨墓　9：原州法泉里１号墳　10：清州新鳳洞92―93号墳

Fig.238　鐙の類例①（1/6）

高霊）からの出土であるが、最近調査された公州水村里Ⅱ-1号墳からも同様の資料が出土しており（李勲 2005）、今後、中西部地域の事例が増える可能性は否定できない[6]。

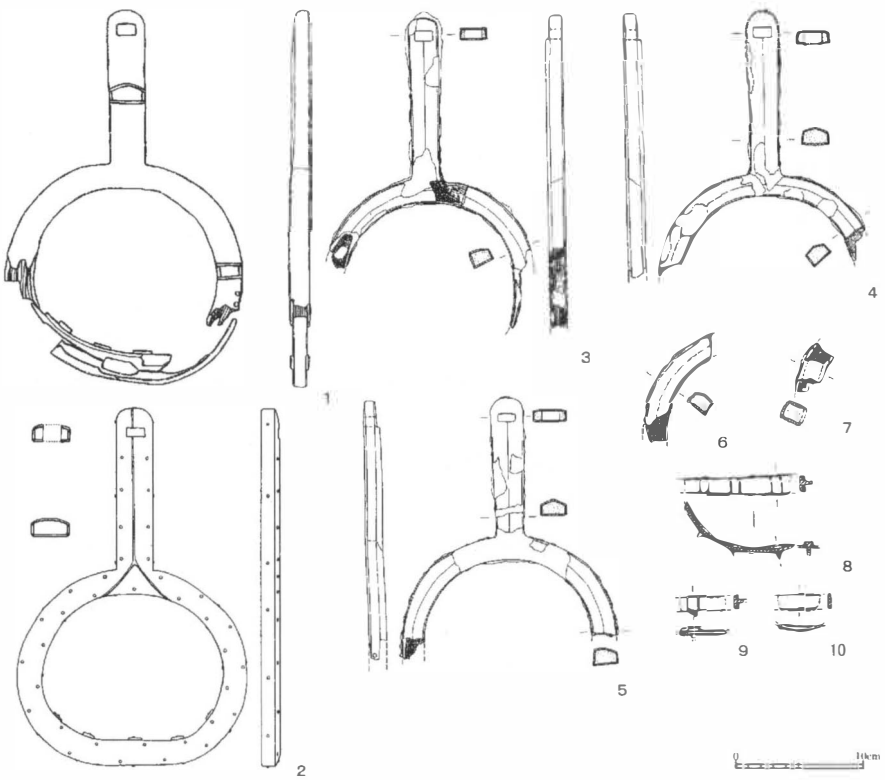
日本列島における類例としては、宮崎県下北方5号地下式横穴墓例〔Fig.239-1〕と福岡県月岡古墳例が挙げられる。下北方5号地下式横穴墓例は全面に鉄板を張る資料と考えられてきたが、実見したところ前・後面鉄板は輪部上半までしか張られておらず、明らかに端部を裁断している。方形の踏込鋲も現状では3鋲と2鋲しか遺存していないが、間隔から本来は5鋲であったと推測され、隅丸方形の柄部頭など全体の形態が瑞王寺例に最も類似する。月岡古墳からは少なくとも3点以上の鐙が出土しており、報告者は全面に鉄板を張ると報告しているが、輪部下半まで完存する資料がない現状では、Fig.239-3を除けば全面鉄板張とする積極的な根拠を見出しがたい。実見したところ、少なくともFig.239-5の前・後面鉄板は現状の端部が本来の端部で、前・後面鉄板は輪部下半まで及ばないと考えられ、Fig.239-4もその可能性が高いと考えられる[7]。柄部断面が五角形をなす資料としては、この他に全面鉄板張りの山梨県甲斐茶塚（かんかん塚）古墳例〔Fig239-2〕が挙げられる。これらの資料は鉄板の張り方に差異はあるものの、柄部断面が五角形をなすという共通点をもち、洛東江以西に系譜を求めることができる。

（3）小結

これまでの検討から、轡・鐙いずれも類例が認められる地域が洛東江中流域西岸の陜川に絞られた。今回検討できなかった方形脚金具をもつ環状雲珠もしくは環状辻金具については、TK23型式期以降に出現すると考えられているが（宮代 1993）、桃崎祐輔が指摘するとおり、それ以前に遡る事例が蓄積されてきている（桃崎 2005）。瑞王寺例のような4鋲の方形脚金具をもつ環状雲珠もしくは環状辻金具の初期の資料としては、滋賀県新開1号墳例や奈良県ベンショ塚古墳例、福岡県稲童21号墳例などが挙げられる。ただし、これらの類例がいずれも鉄鋲を用いているのに対し、瑞王寺例は（金）銅鋲や刻目を有する金銅製責金具などを用いている点は注意しておく必要がある。朝鮮半島における雲珠、辻金具の変遷や地域性については研究がまだほとんどなく、今後の研究の進展を待つほかないが、4鋲の方形脚金具と鉄環の組み合わせは陜川玉田古墳群や高霊池山洞古墳群でも認められることから、轡や鐙と共に洛東江中流域西岸との関係で考えても大過なかろう。

以上から瑞王寺古墳出土馬具は、洛東江中流域西岸で製作された一揃いの馬装具が何らかの経緯を経て、瑞王寺古墳の被葬者のもとに渡ったと考えるのが最も妥当であろう。もちろん日本列島で製作された可能性も否定はできないが、仮にそうであるとしても洛東江中流域西岸の馬具製作技術の強い影響を想定しなければ成立せず、日本列島における類例の少なさや分布の点在性を考慮するとそのように考えるのは難しいのではないだろうか。

むしろここで注意しておか



1：宮崎県下北方5号地下式横穴墓　2：山梨県甲斐茶塚古墳　3－10福岡県月岡古墳

Fig.239　鐙の類例②（1/6）

ねばならないのは、鑣轡の類例として挙げた玉田67－B号墳例や福泉洞10・11号墳例に共伴する鐙が、太く短い柄部をもち瑞王寺例より古い型式[8]に位置づけられていることである〔Fig.237-2・4〕。このことをもって、瑞王寺古墳の轡と鐙の製作に時間差を想定することも可能であろう。しかし、先述のように瑞王寺例の引手は、他の属性に比べて相対的に古相を示していることを考慮すれば、一概にそうとはいえない。各種馬具が製作・流通、さらには副葬に至るまでには様々な過程が想定され、どの段階で一組の馬装具となるのか、そしてセットとしてのまとまりがどの程度意識されていたかについては今後の課題であろう。ただし、瑞王寺例の場合、そのいずれもが洛東江中流域に系譜を辿りうることから、製作段階もしくはそれに近い段階から一つのセットを維持したまま、副葬に至った可能性が高いと考えられる。

おわりに

冒頭で触れたようにここ数年、瑞王寺古墳出土馬具は5世紀代における日韓出土馬具の比較研究の点から注目を集めていた。しかし、銜の製作技法や立聞用金具の型式、鐙における柄部の断面形など、既報告時にはそれほど重視されてこなかった微細な視点が、近年では朝鮮半島南部における地域性や日韓出土馬具の並行関係を論ずる重要な根拠となっていたにも関わらず、議論の中で図面だけが先行し、肝心の資料自体に立ち返った研究は少なかったように思われる。今回、X線写真の撮影と既報告以来20年の間に蓄積された馬具研究の成果をもとに瑞王寺古墳出土馬具を再検討した結果、より正確な情報抽出と新知見にもとづいたより適切な位置付けをおこなうことができた。位置付けについては十分に論じ尽くせなかったが、今後の議論の礎の一つとなれば幸いである。

註

(1) 瑞王寺古墳から出土した馬具やその他の遺物の大部分は現在、筑後市郷土資料館に常設展示されている。

(2) 捩りの回転方向は、縄文原体の撚りと同じく、鉄棒を縦方向においたとき、捩りが左上から右下の方向をとるものをl(エル)、右上から左下の方向をとるものをr(アール)と表記する(山内1979、諫早2005)。

(3) 報告書には「引手内環は平面「U」字状、引手外環は平面「Ω」字状をなす」と書かれているが(慶尚大学校博物館2000，p.45)、前稿において、引手の向きを逆に配置した図を提示した(諫早2005，p.118)。謹んでここに訂正する。

(4) ただし、小野山自身は新古二形式の違いについて、「時代的変化ばかりではなくて、馬具の製作地の違いをもあらわしているように思われる(小野山1966，p.5)」と慎重な立場をとっている。

(5) 柄部断面が五角形をなす木心鉄板張輪鐙のうち、慶州天馬塚古墳例だけは踏込部が2条に分かれる。このような踏込部をもつ木心鉄板張輪鐙は他に類例がなく、洛東江以西の資料とはひとまず区別して考えるべきであろう。

(6) 早くから申敬澈は「池山洞型鐙子」について百済の馬具の影響を受けて成立したと推測している(申敬澈1989，p.30・31)。

(7) 月岡古墳の木心鉄板張輪鐙の一部〔Fig.239-3～5〕は、展示台にくくりつけられた状態での観察のため、裏側の観察が十分にできていない。

(8) 柳昌煥分類におけるⅠA2型式(玉田67-B号墳例)とⅠA4型式(福泉洞10・11号墳例)。

本稿を草するにあたり、下記の方々や諸機関にお世話になった。記して感謝したい。
石田大輔　阪口英毅　成正鏞　中條英樹　張允禎　塚本敏夫　朴天秀　橋本英将　吉井秀夫　うきは市教育委員会　京都大学考古学研究室　(財)元興寺文化財研究所　宮崎市教育委員会　山梨県立考古博物館　(敬称略・五十音順)

[参考文献]

諫早直人　2005「朝鮮半島南部三国時代における轡製作技術の展開」『古文化談叢』第 54 集　九州古文化研究会

大谷猛　1985「日本出土の「鑣轡」について」『論集 日本原史』　論集日本原史刊行会

小野山節　1966「日本発見の初期の馬具」『考古学雑誌』第 52 巻第 1 号　日本考古学会

金斗喆　2000『韓国 古代馬具의 研究』東義大学校大学院文学博士学位論文 (韓国語)

金斗喆　2004「加耶と倭の馬具」『東アジアにおける倭と加耶の交流』(国立歴史民俗博物館研究報告　第 110 集)　国立歴史民俗博物館

慶尚大学校博物館　2000『陜川 玉田古墳群IX』

千賀久　1988「日本出土初期馬具の系譜」『橿原考古学研究所論集』第 8　吉川弘文館

筑後市教育委員会　1984『瑞王寺古墳』

清水篤　1988「木心鉄板張輪鐙を伴う馬具についてーその細別と系譜に関する研究ノートー」『網干善教先生華甲記念考古学論集』　網干先生華甲記念会

白井克也　2003「馬具と短甲による日韓交差編年ー日韓古墳編年の並行関係と暦年代ー」『土曜考古』第 27 号　土曜考古学研究会

申敬澈　1989「伽耶의 武具와 馬具ー甲冑와 鐙子를 中心으로ー」『國史館論叢』第 7 輯　国史編纂委員会　(竹谷俊夫訳　1993「伽耶の武器と馬具ー甲冑と鐙を中心にー」『古代学評論』第 3 号　古代を考える会)

高田貫太　2005『日本列島 5,6 世紀 韓半島系 遺物로 본 韓日交渉』慶北大学校大学院文学博士学位論文 (韓国語)

張允禎　2003「韓半島三国時代の轡の地域色ーとくに立聞用金具を中心としてー」『考古学研究』第 50 巻第 2 号　考古学研究会

張允禎　2004「日本列島の鐙にみる地域間関係」『考古学研究』第 51 巻第 3 号　考古学研究会

服部聡志　1991「木心鉄板張輪鐙の分類と二、三の問題」『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』　(財)由良大和古代文化研究協会

宮代栄一　1993「5・6 世紀における馬具のセットについてーf 字形鏡板付轡・鉄製楕円形鏡板付轡・剣菱形杏葉を中心にー」『九州考古学』第 68 号　九州考古学会

桃崎祐輔　2004「倭国への騎馬文化の道ー慕容鮮卑三燕・朝鮮半島三国・倭国の馬具との比較研究」『考古学講座　講演集』(「古代の風」特別号　No. 2)　市民の古代研究会・関東

桃崎祐輔　2005「稲童 21 号墳・8 号墳出土馬具の検討」『稲童古墳群』　行橋市教育委員会

山内清男　1979『日本先史土器の縄紋』　先史考古学会

李勲　2005「水村里古墳群 出土 百済馬具에 대한 検討」『4～5 世紀 錦江流域의 百済文化와 公州 水村里 遺蹟』(忠清南道歴史文化院 第 5 回定期심포지엄)　忠清南道歴史文化院　(韓国語)

柳昌煥　1995「伽耶古墳 出土 鐙子에 대한 研究」『韓国考古学報』33　韓国考古学会　(韓国語)

柳昌煥　2000「大伽耶圏 馬具의 変化와 画期」『鶴山金廷鶴博士頌寿紀念論叢　韓国 古代史와 考古学』同刊行委員会　(韓国語)

柳昌煥　2004「百済馬具에 대한 基礎的 研究」『百済研究』第 40 輯　忠南大学校百済研究所　(韓国語)

[挿図の出典(筆者実測以外は全て各文献から改変・引用)]

Fig.233：(筑後市教育委員会 1984)

Fig.234：筆者作成

Fig.235・236：筆者実測

Fig.237-1：筆者実測（諫早 2005)

Fig.237-2：(慶尚大学校博物館 2000)

Fig.237-3･4：釜山大学校博物館　1983『東萊 福泉洞古墳群 I 』

Fig.238-1：慶尚大学校博物館　1992『陜川 玉田古墳群Ⅲ』

Fig.238-2：慶尚大学校博物館　1999『陜川 玉田古墳群Ⅷ』

Fig.238-3：慶尚大学校博物館　1999『陜川 玉田古墳群Ⅷ』

Fig.238-4：慶尚大学校博物館　1988『陜川 玉田古墳群 I 』

Fig.238-5：慶尚大学校博物館　1992『陜川 玉田古墳群Ⅲ』

Fig.238-6：慶尚大学校博物館　2003『陜川 玉田古墳群 X 』

Fig.238-7：(社)嶺南埋蔵文化財研究院　1998『高霊池山洞 30 号墳』

Fig.238-8：(財)嶺南文化財研究院　2004『高霊 池山洞古墳群 I 』

Fig.238-9：国立中央博物館　2000『法泉里 I 』

Fig.238-10：忠北大学校博物館　1995『清州 新鳳洞古墳群』

Fig.239-1：宮代栄一　1995「宮崎県出土馬具の研究」『九州考古学』第 70 号　九州考古学会

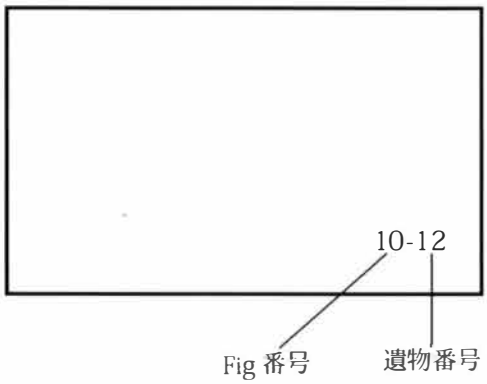
Fig.239-2：山梨県教育委員会　1979『甲斐茶塚古墳』

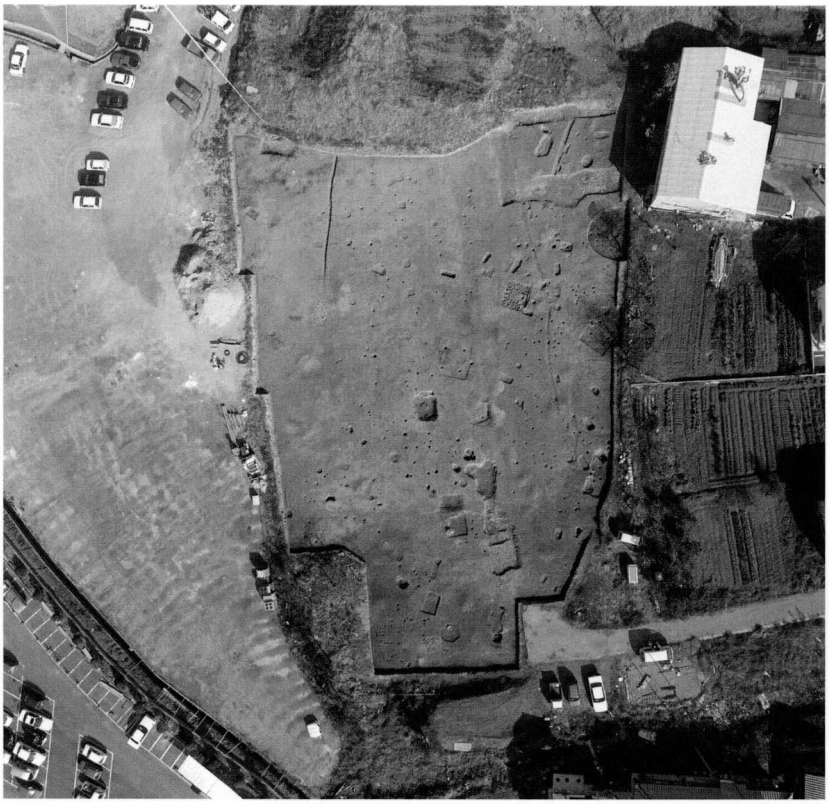
Fig.239-3～10：吉井町教育委員会　2005『若宮古墳群Ⅲ　月岡古墳』

PLATE
写真図版

凡　例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりとなっている

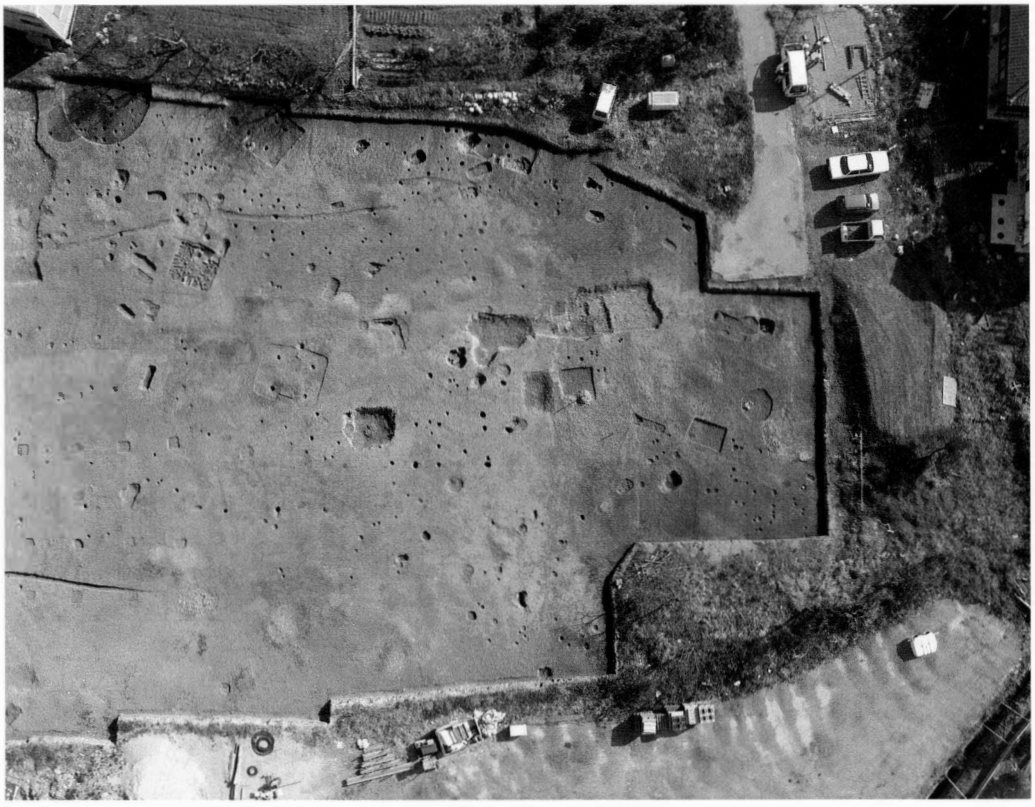




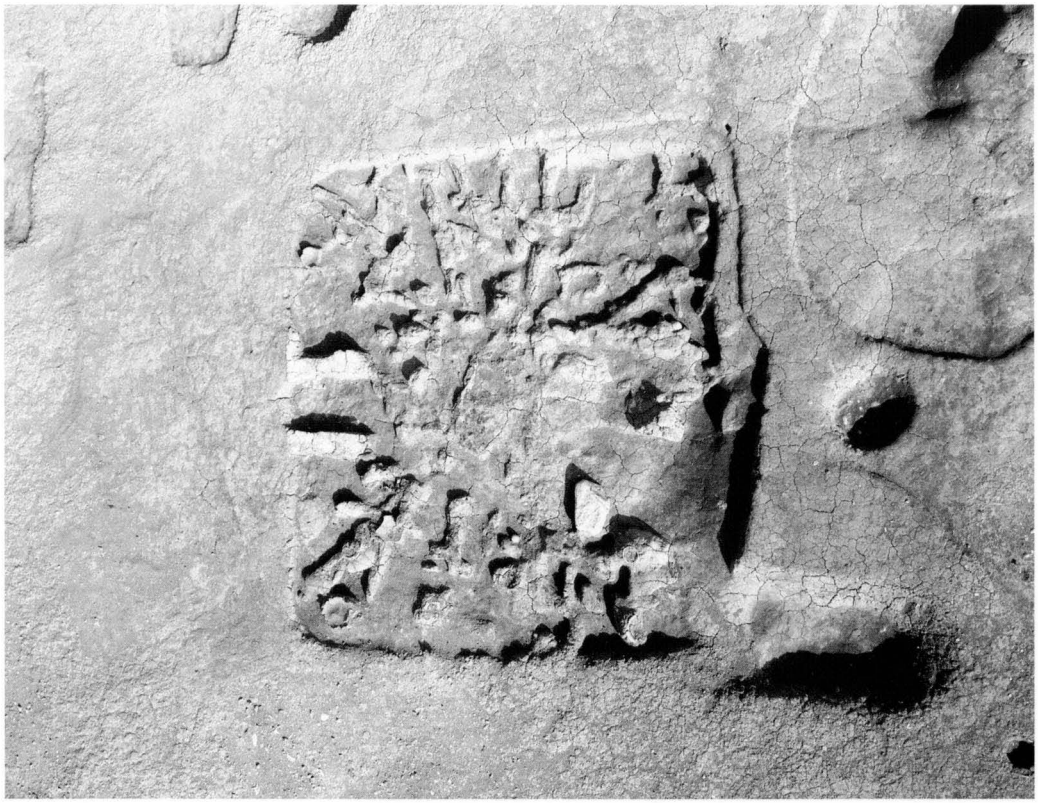
調査区全景（上が北）

調査区全景（南から）

調査区北半部（上が東）



調査区南半部（上が東）

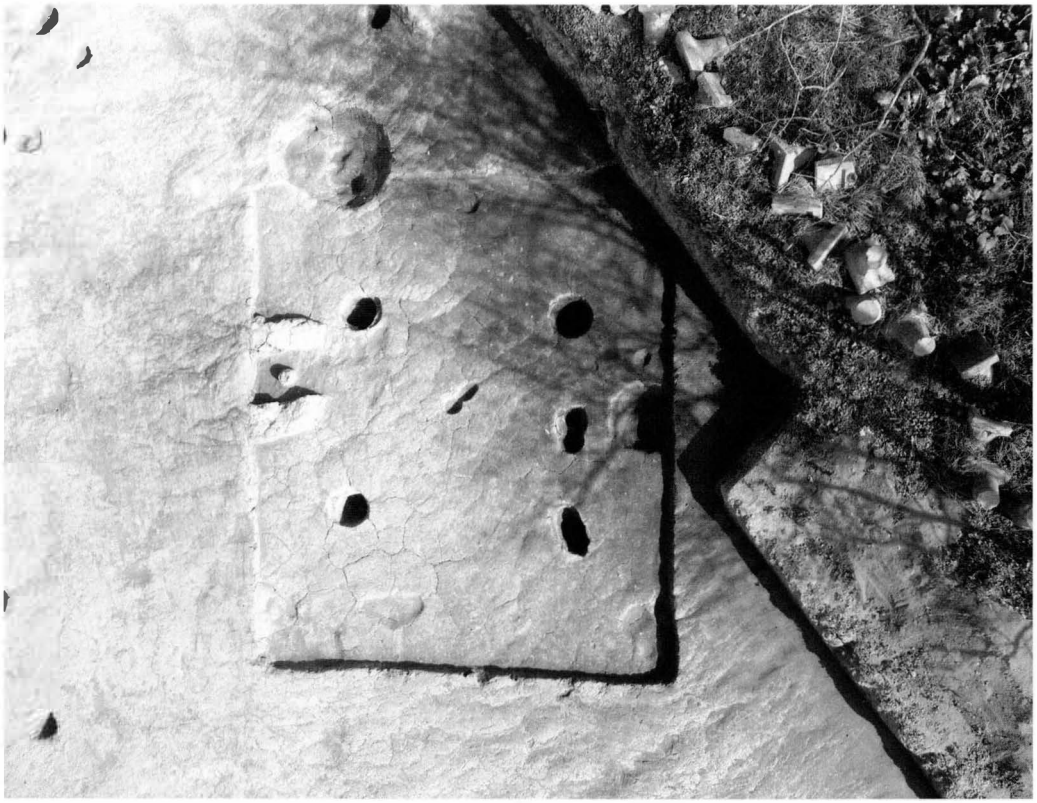


1SI010 検出状況（上が北）

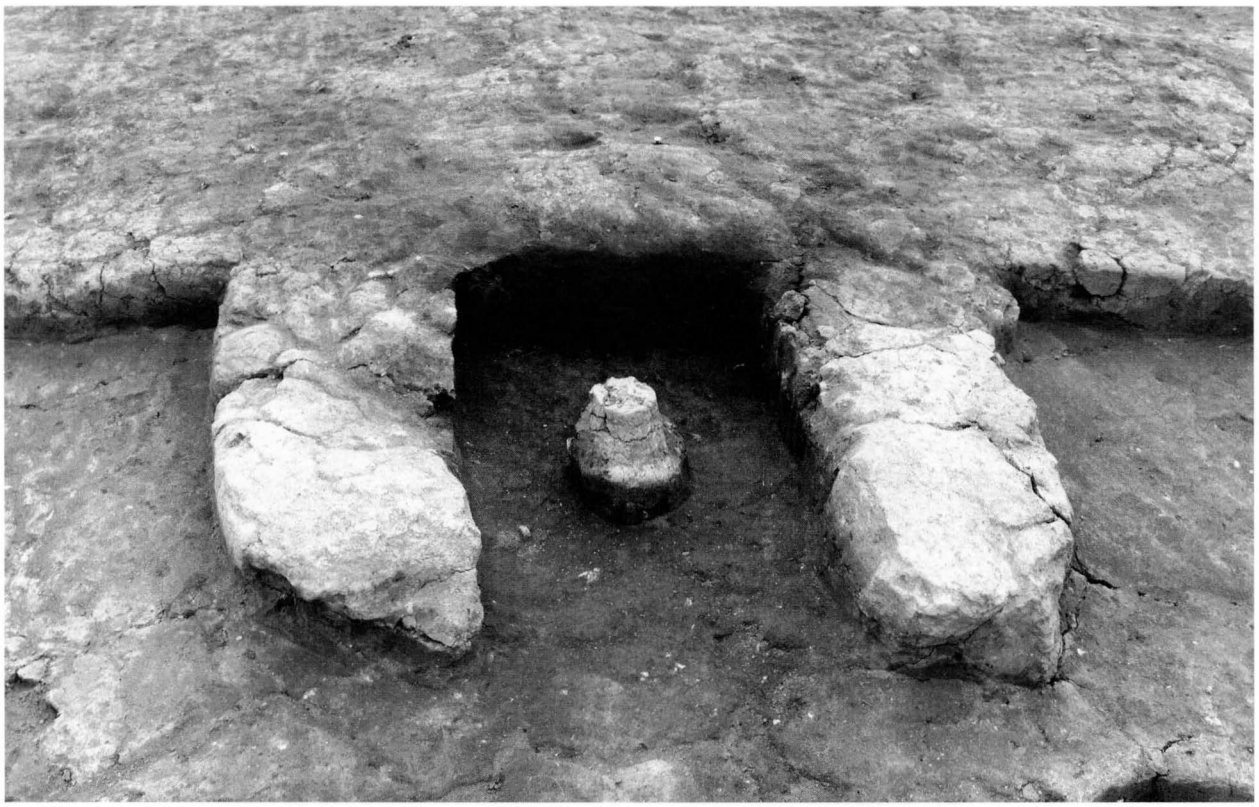
1SI010 竈（東から）

1SI020 完掘状況（西から）

1SI020 竈（東から）

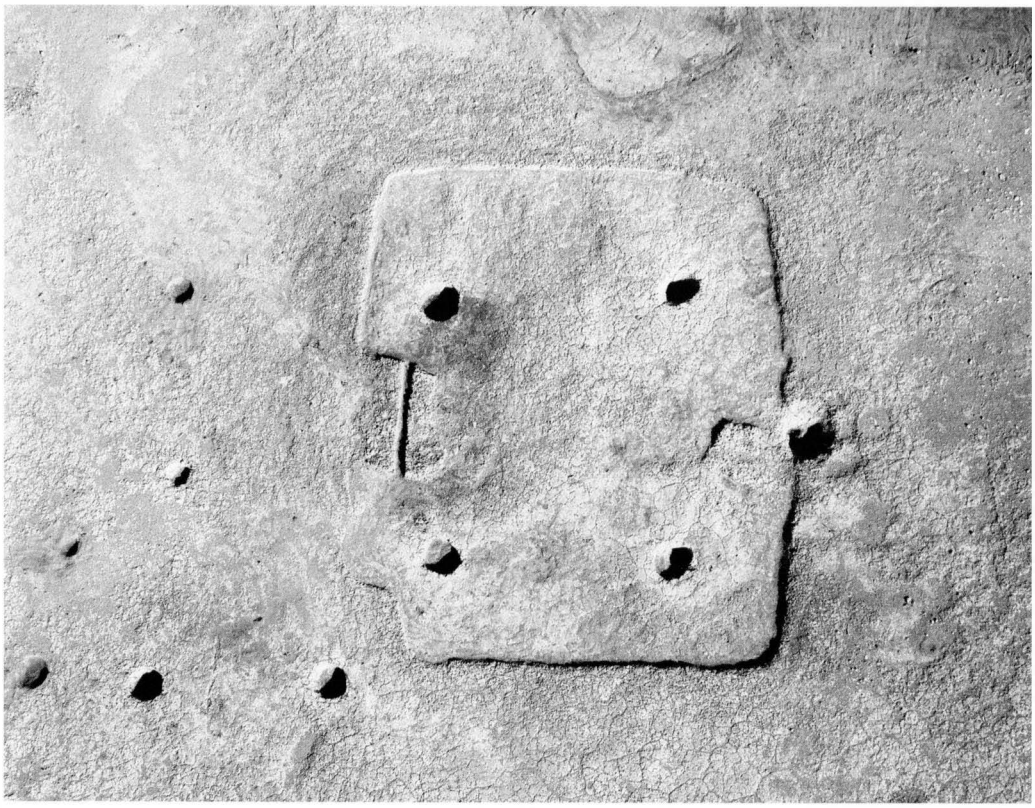


1SI030 完掘状況（上が北）

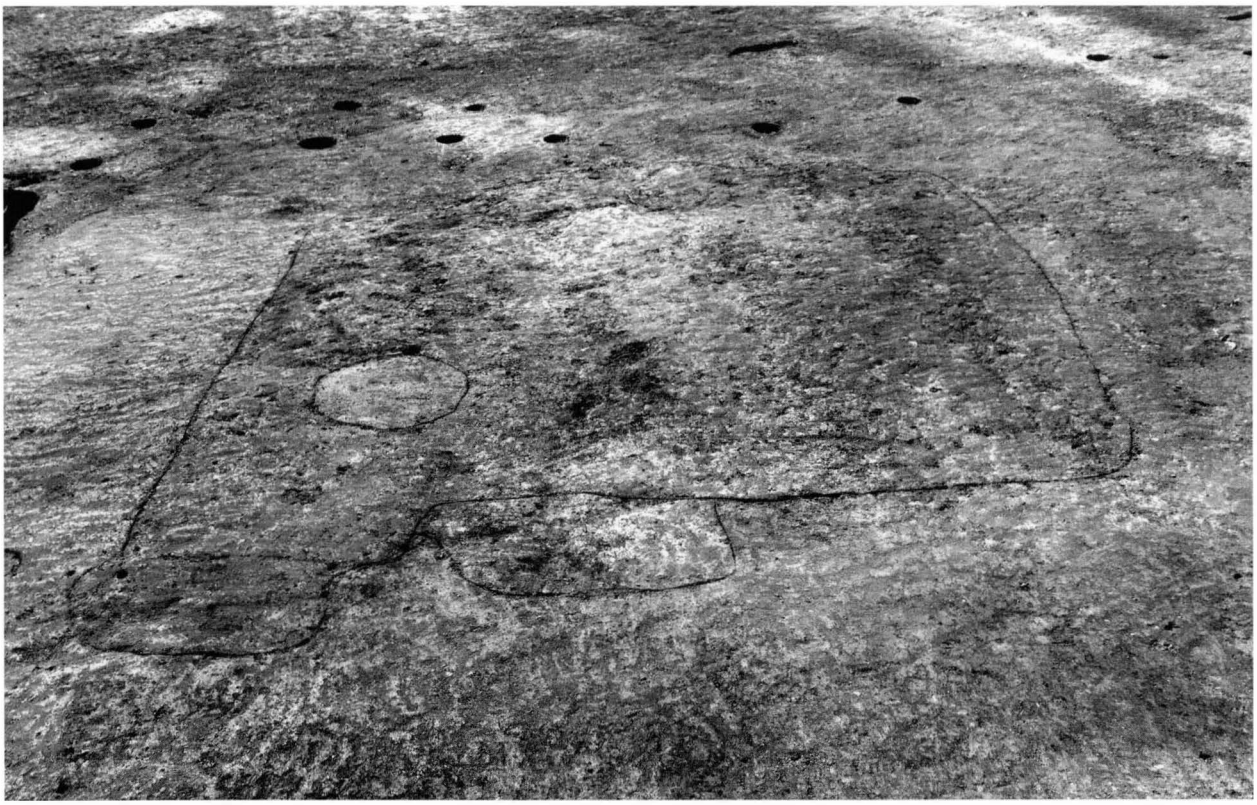


1SI030 竈（東から）

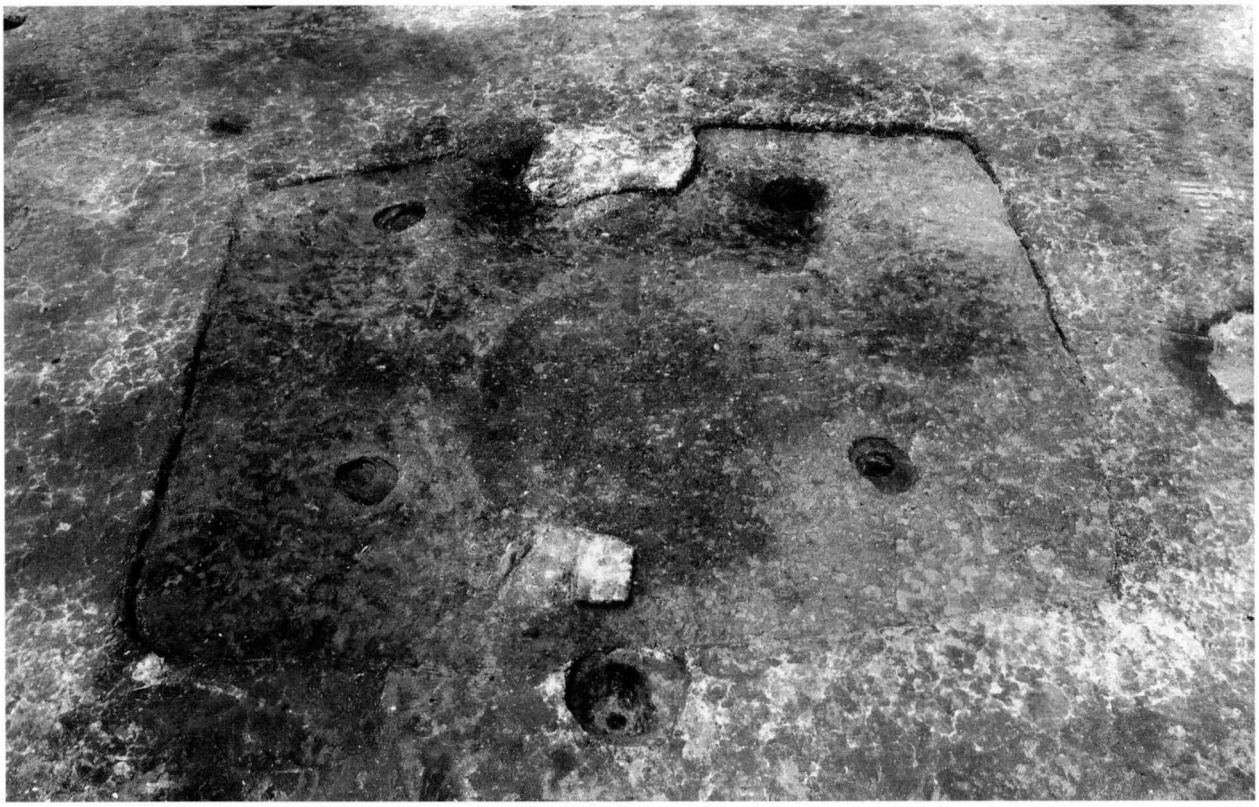
1SI050 完掘状況（上が北）



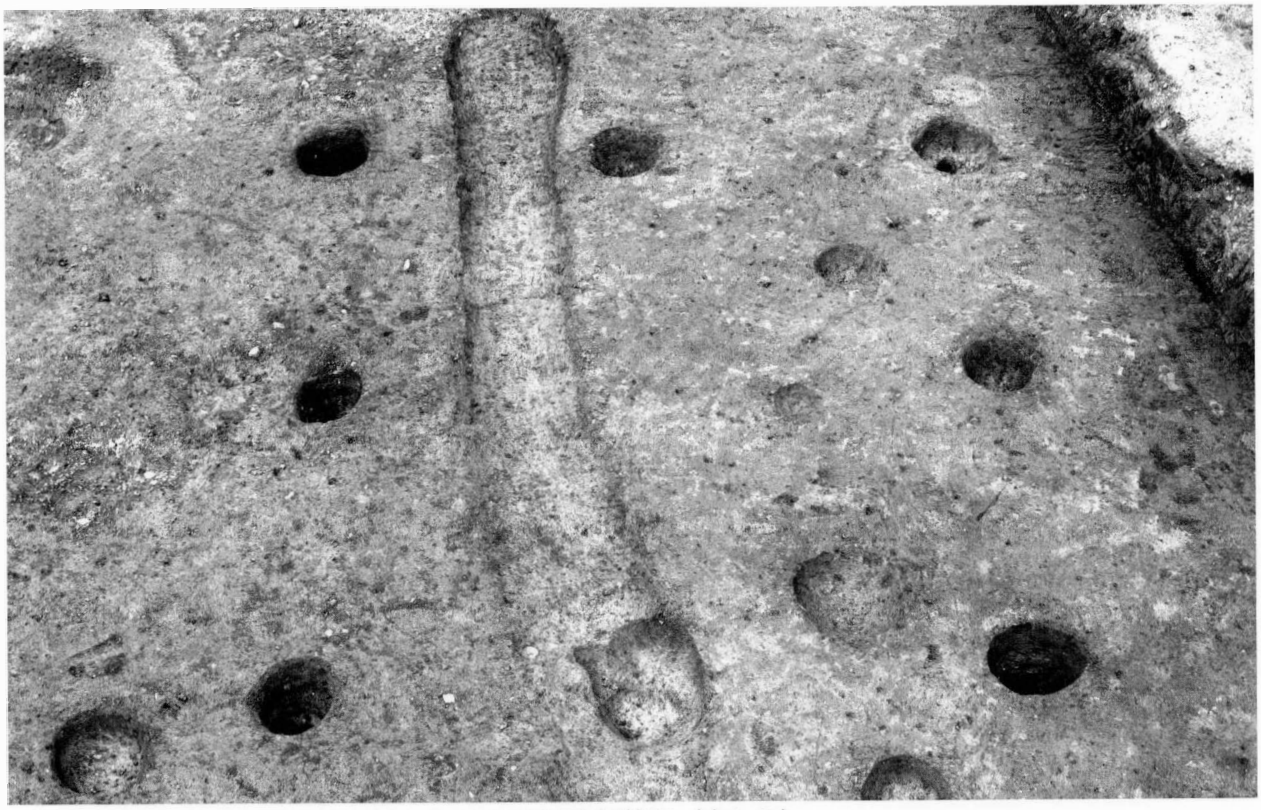
1SI060 完掘状況（上が北）



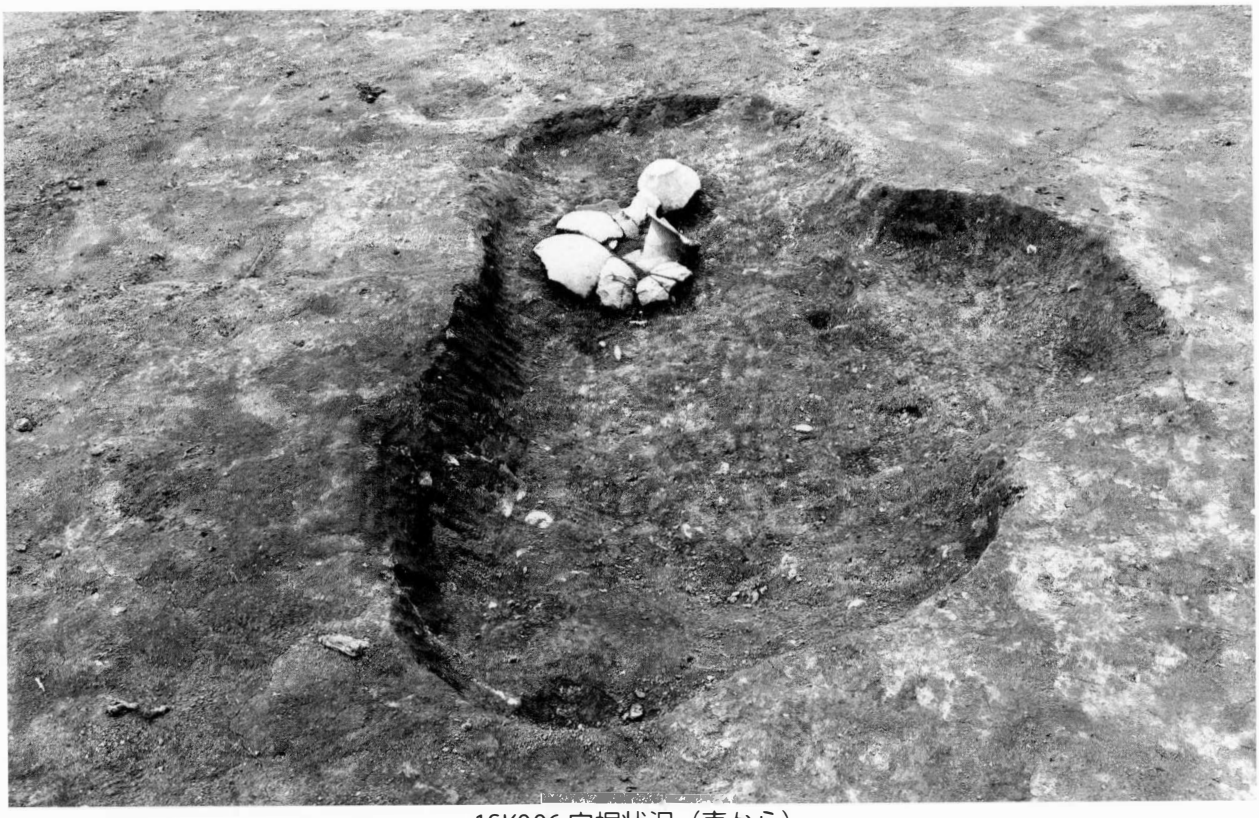
1SIP070 完掘状況（上が北）



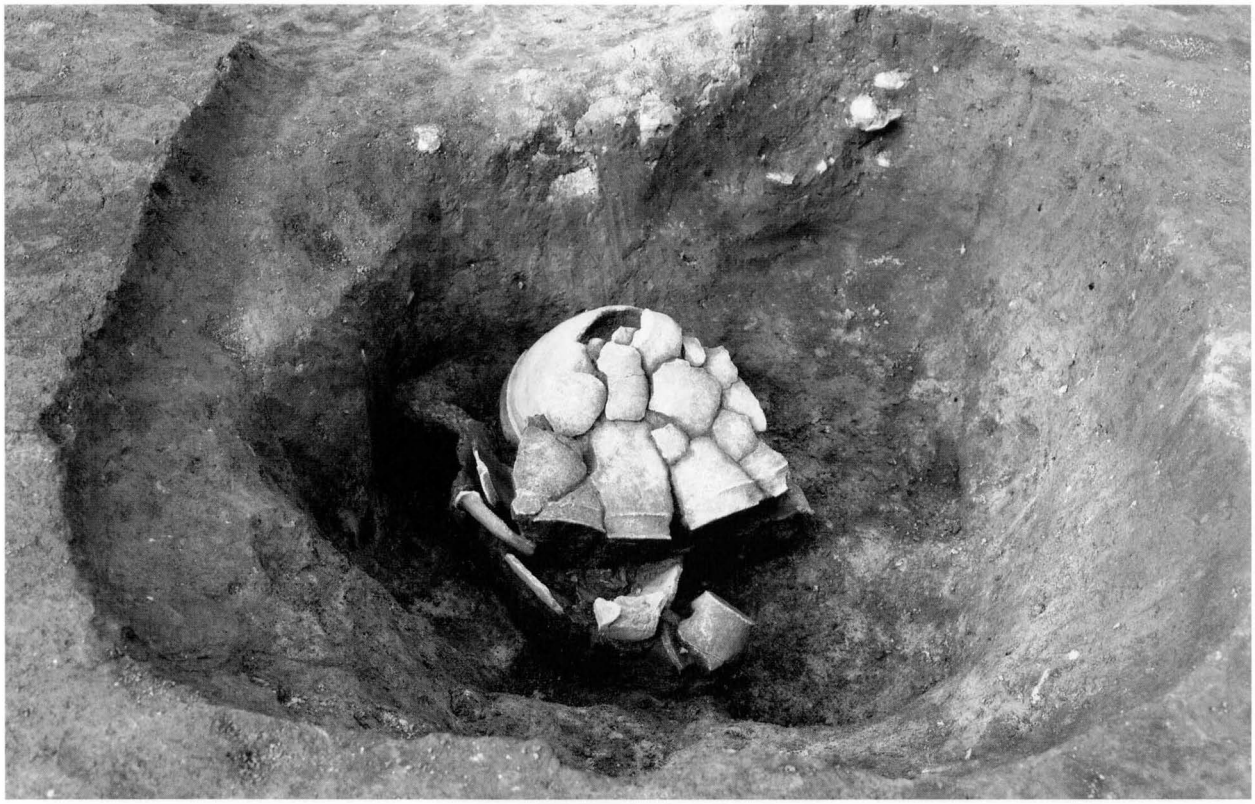
1SI070 完掘状況（東から）



1SB025 完掘状況（南から）

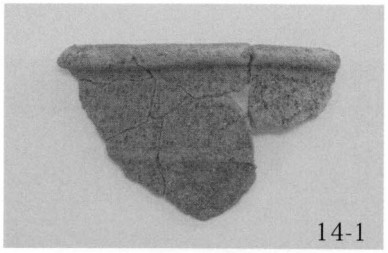


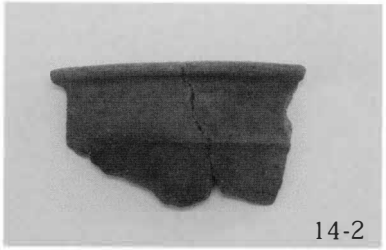
1SK006 完掘状況（東から）

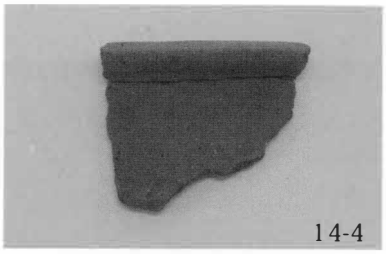


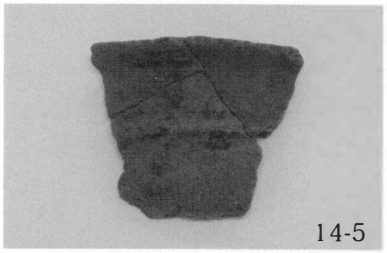
1SK100 遺物出土状況（西から）

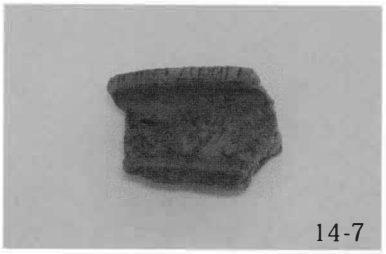
1SK100 遺物出土状況（南から）

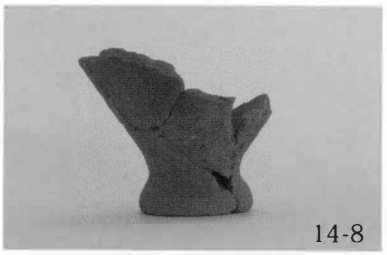

14-1

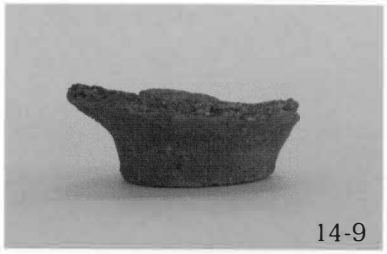

14-2

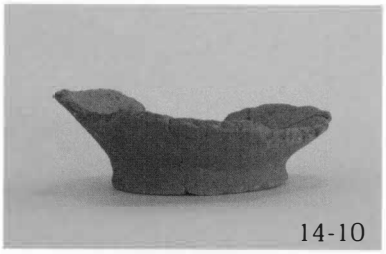

14-4

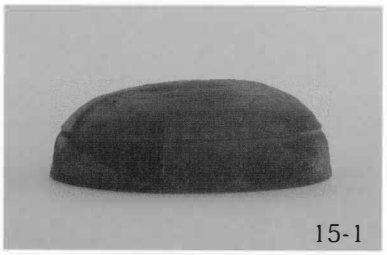

14-5

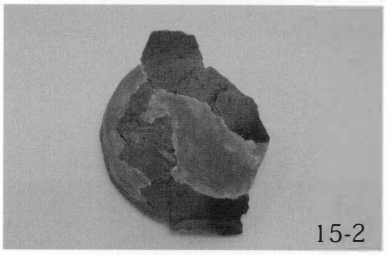

14-7

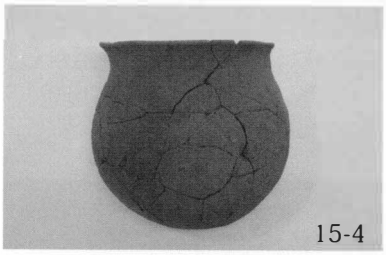

14-8

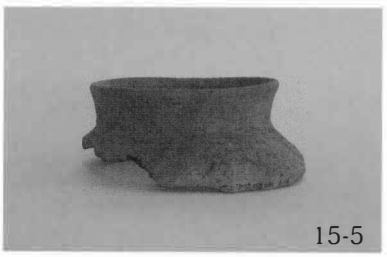

14-9

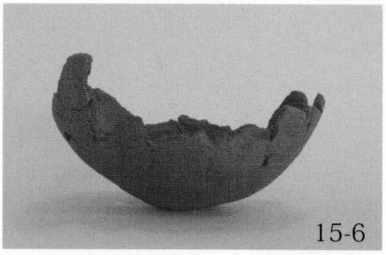

14-10

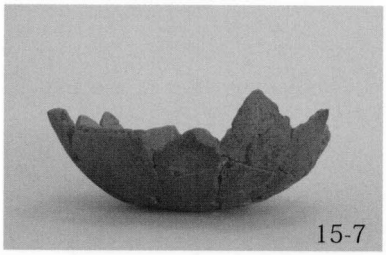

15-1

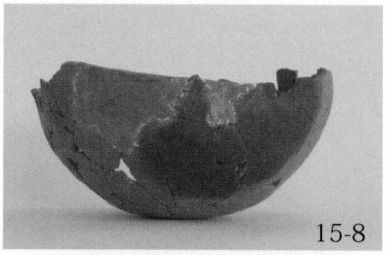

15-2

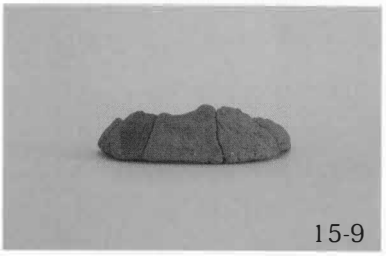

15-4

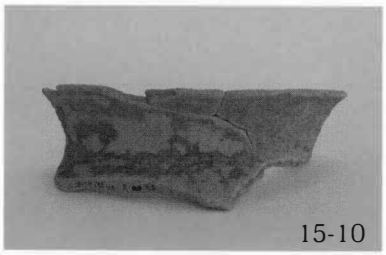

15-5

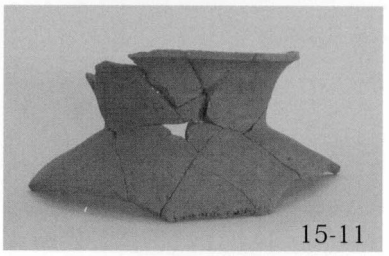

15-6

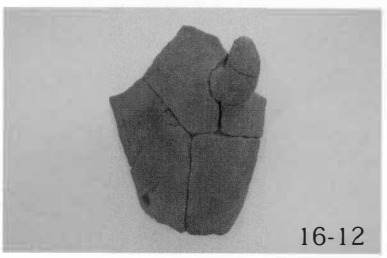

15-7

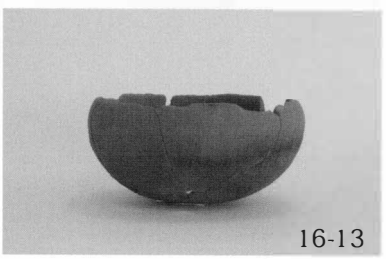

15-8

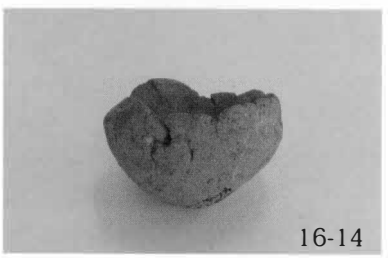

15-9

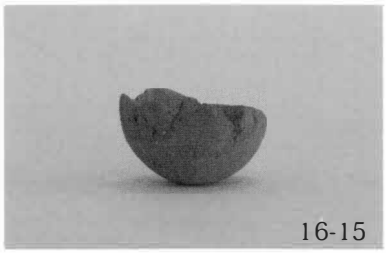

15-10

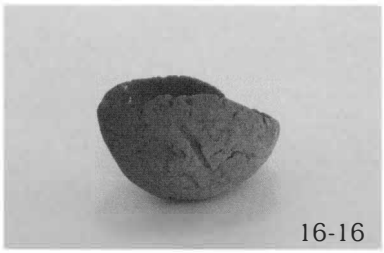

15-11

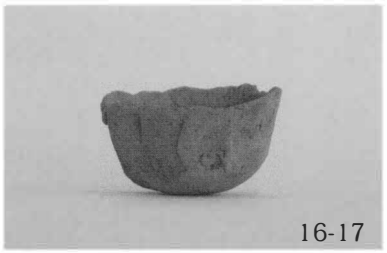

16-12

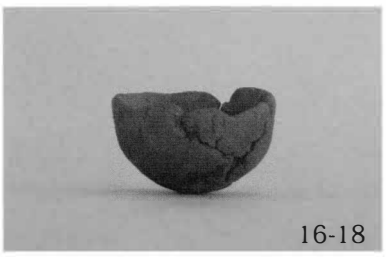

16-13

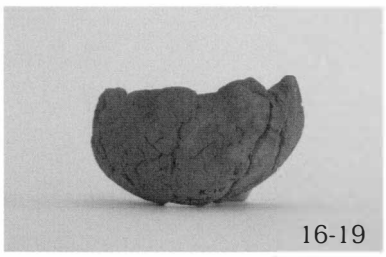

16-14

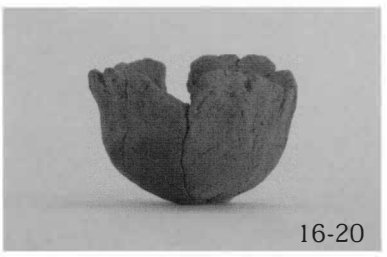

16-15

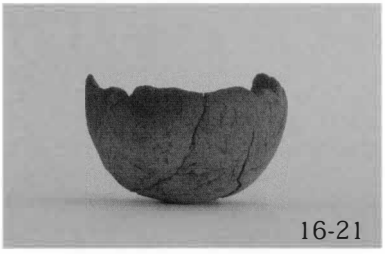

16-16

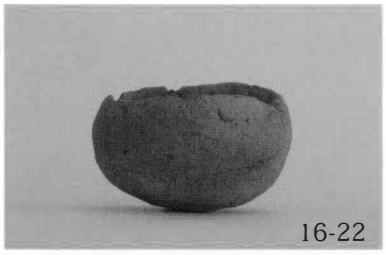

16-17

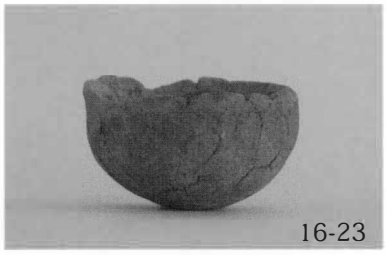

16-18

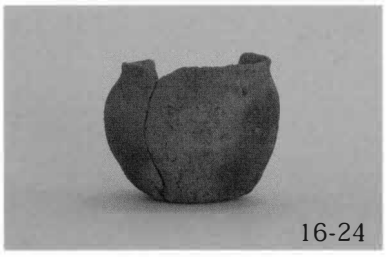

16-19

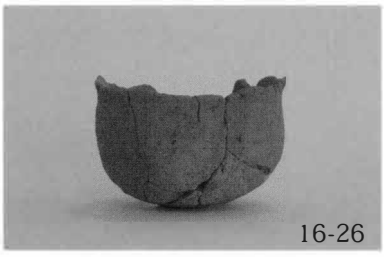

16-20

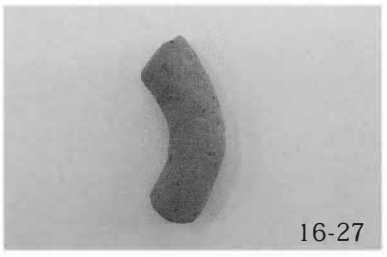

16-21

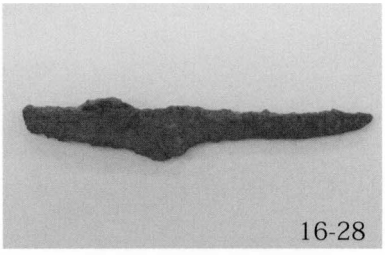

16-22


16-23

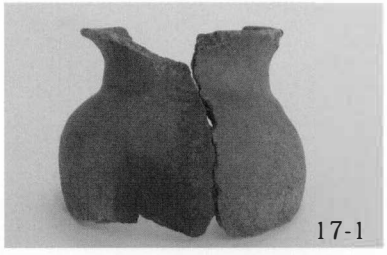

16-24

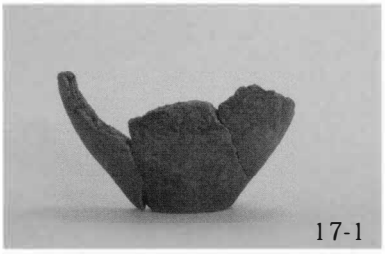

16-26

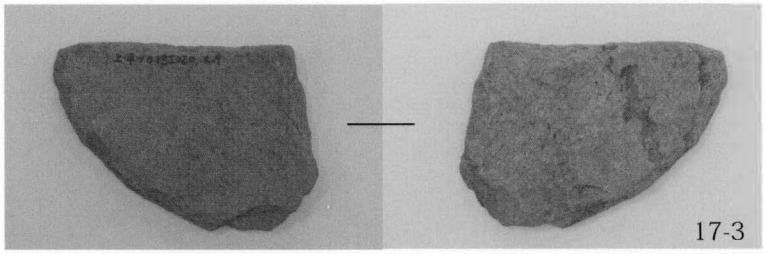

16-27

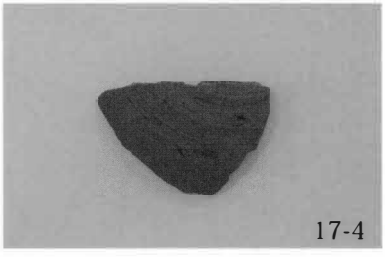

16-28

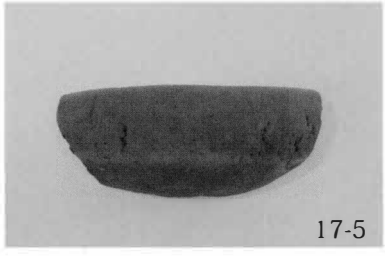
16-29

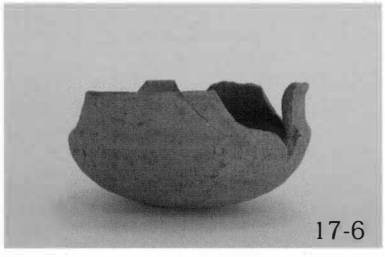

17-1

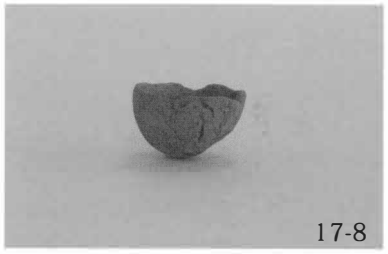

17-1

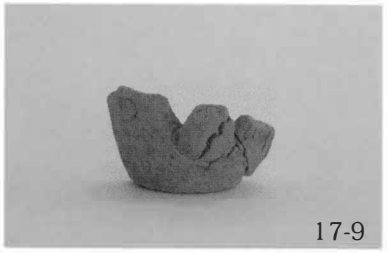

17-3

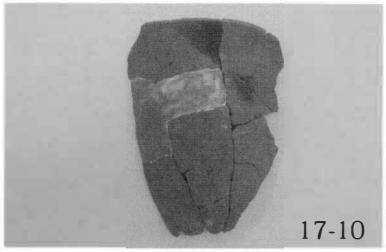

17-4

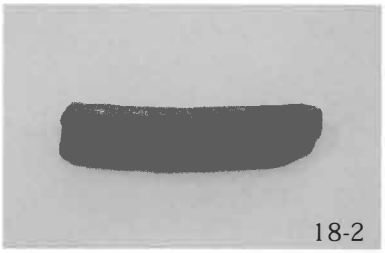

17-5

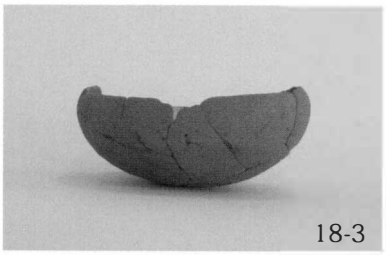

17-6

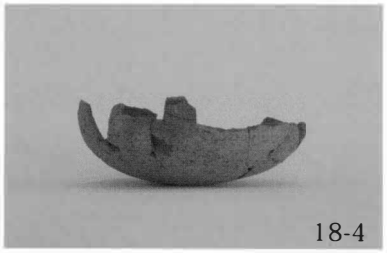

17-8

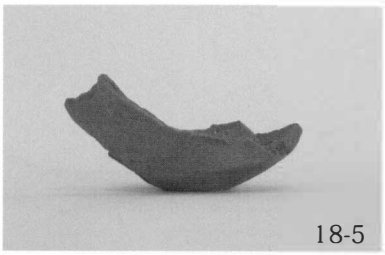

17-9

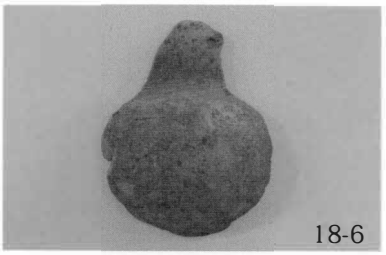

17-10

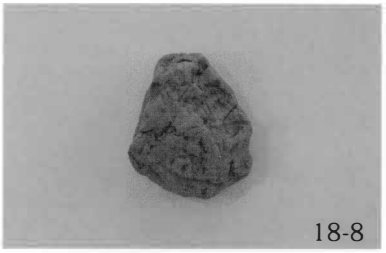

18-2

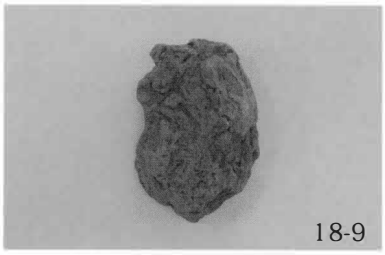

18-3

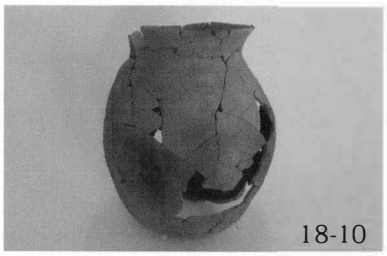

18-4

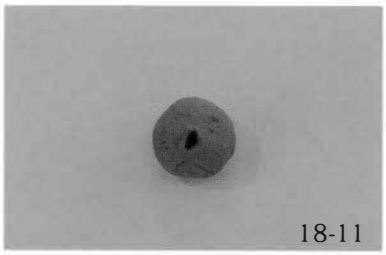

18-5

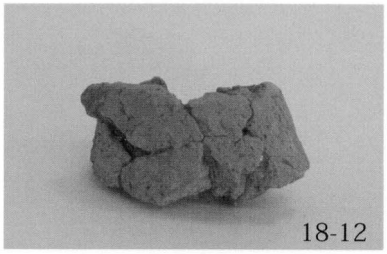

18-6

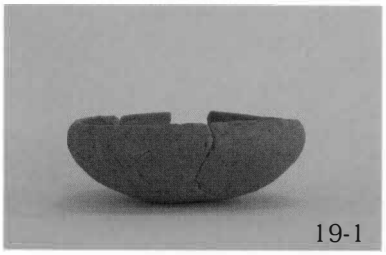

18-8

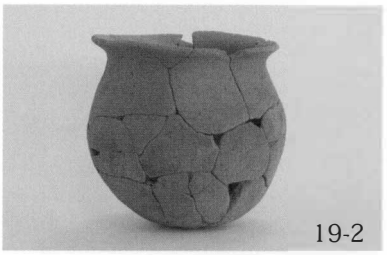

18-9


18-10

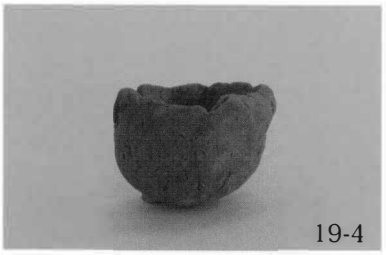

18-11

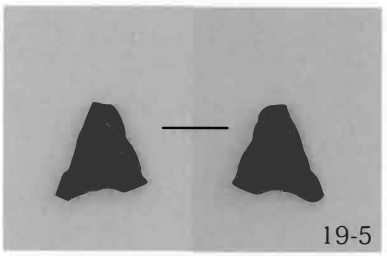

18-12

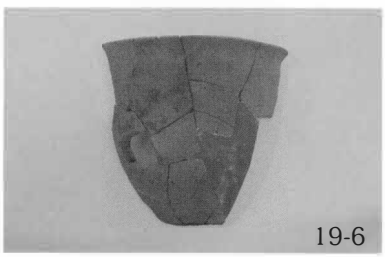

19-1

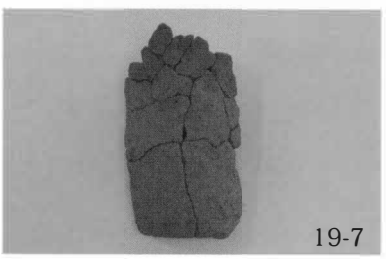

19-2

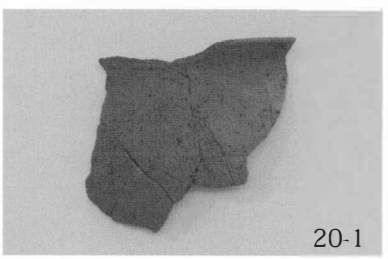
19-3

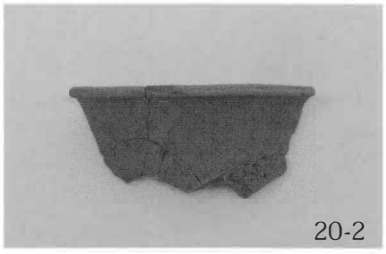

19-4

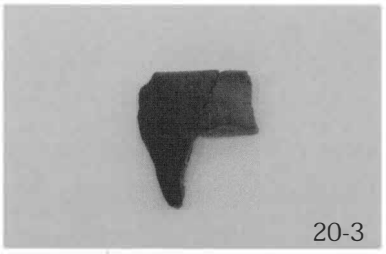

19-5

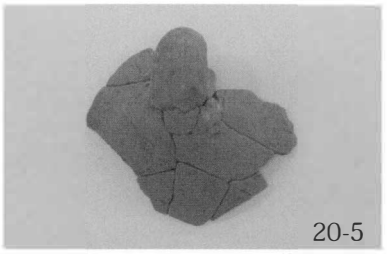

19-6

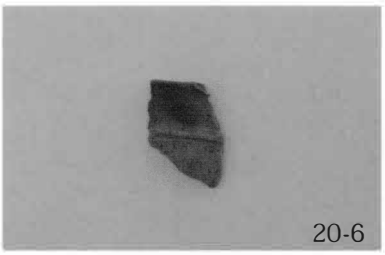

19-7

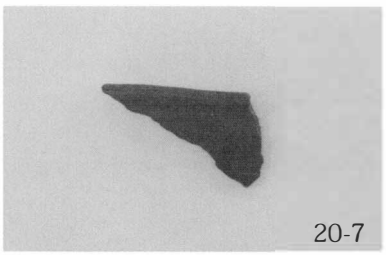

20-1

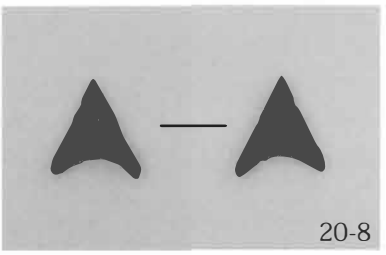

20-2

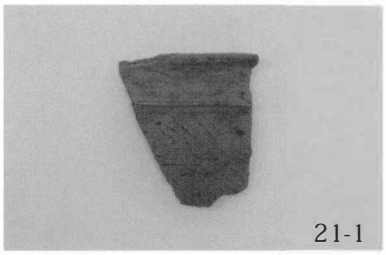

20-3

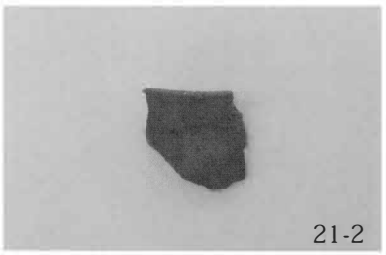

20-5

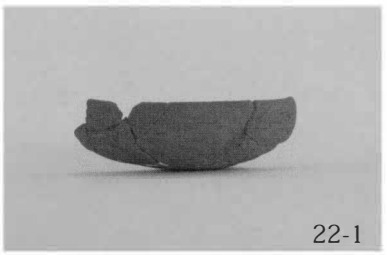

20-6

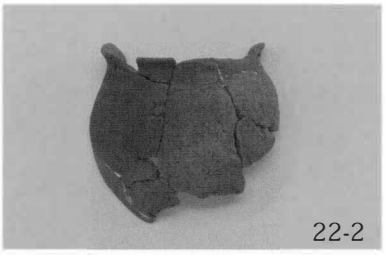

20-7

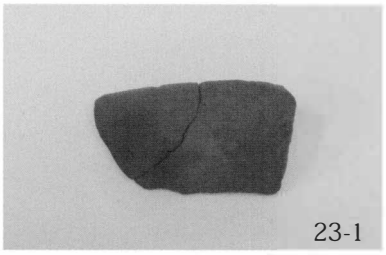

20-8

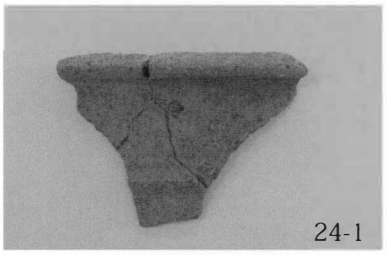

21-1

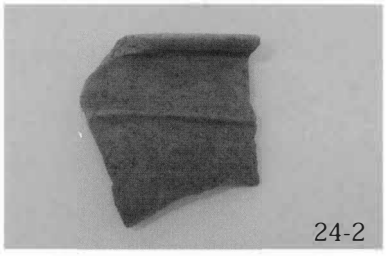

21-2

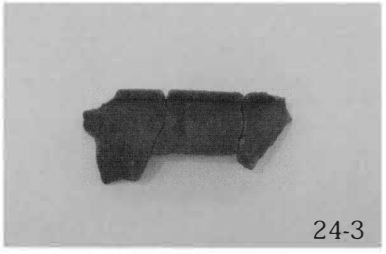

22-1

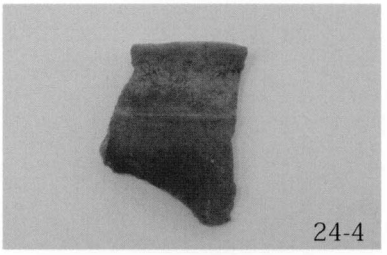

22-2

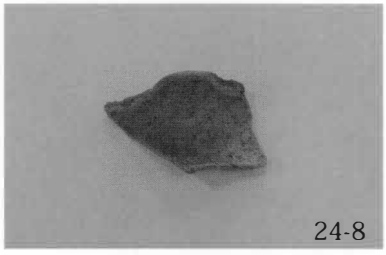

23-1

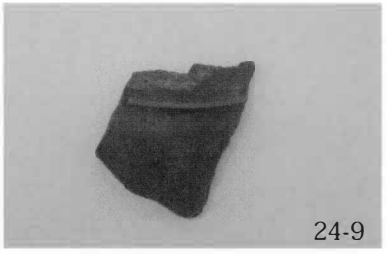

24-1

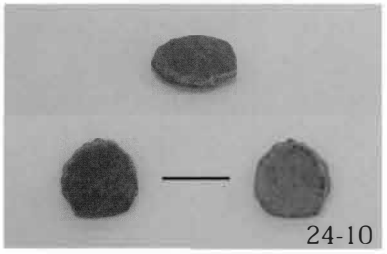

24-2

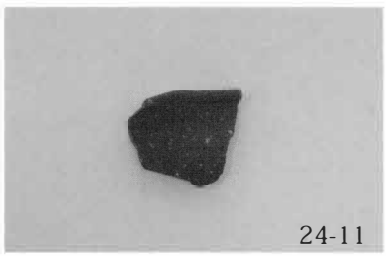

24-3


24-4

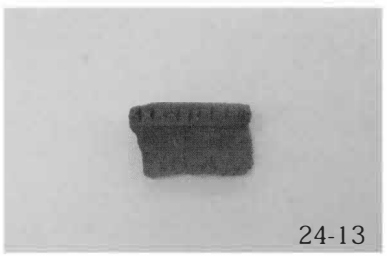

24-8

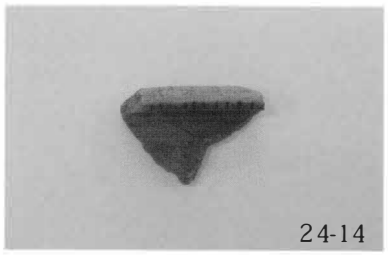

24-9

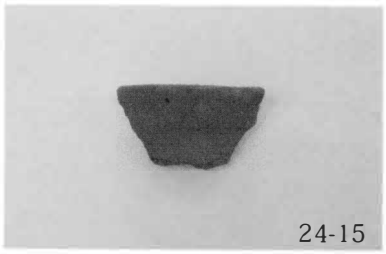

24-10

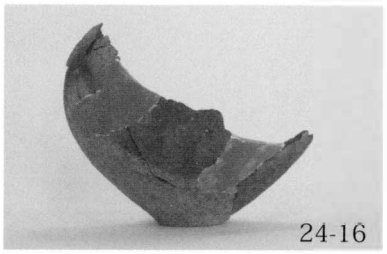

24-11

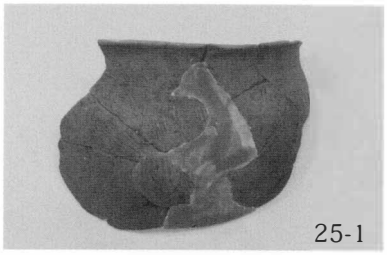
24-12

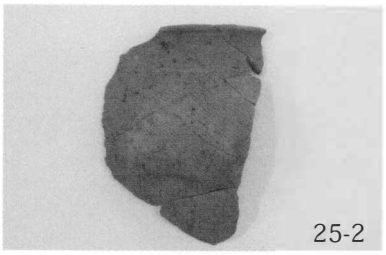

24-13

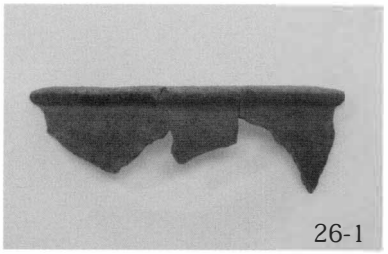

24-14

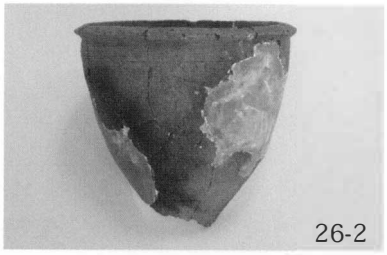

24-15

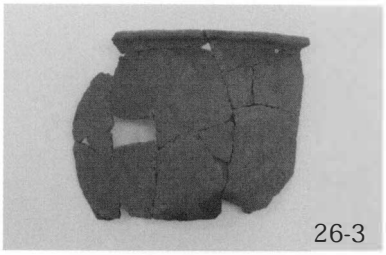

24-16

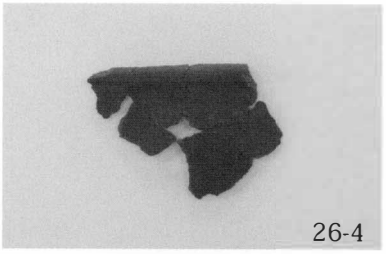

25-1

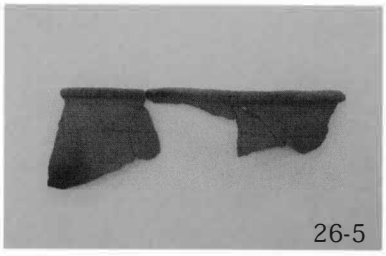

25-2

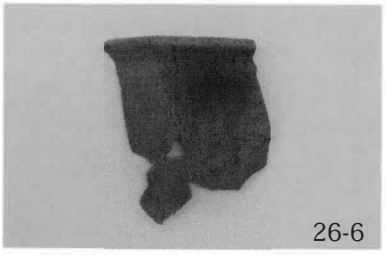

26-1

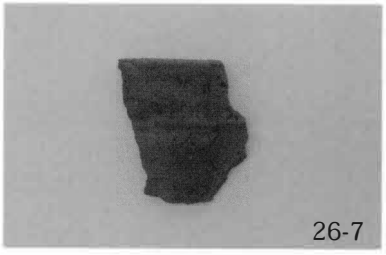

26-2

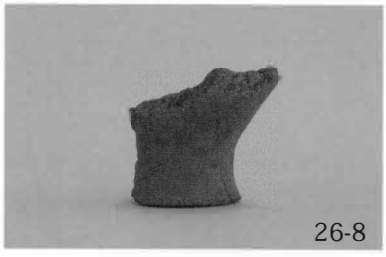

26-3

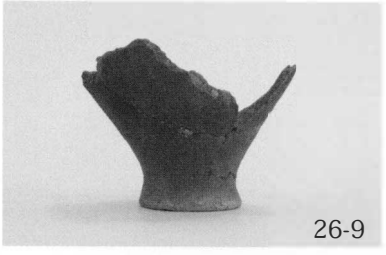

26-4

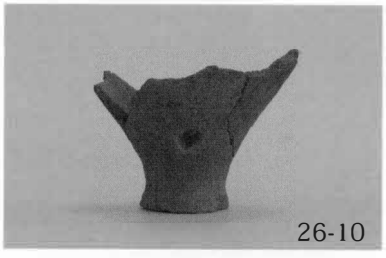

26-5

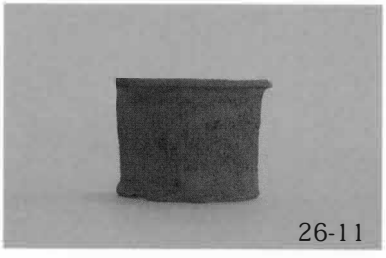

26-6

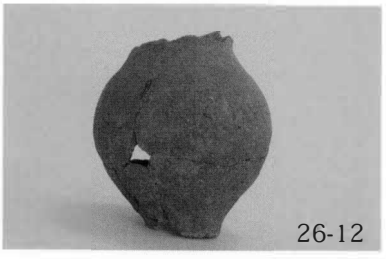

26-7

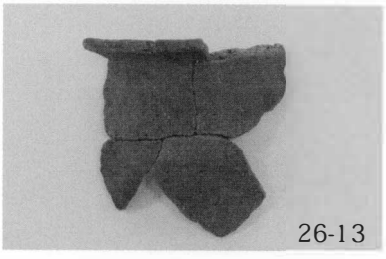

26-8

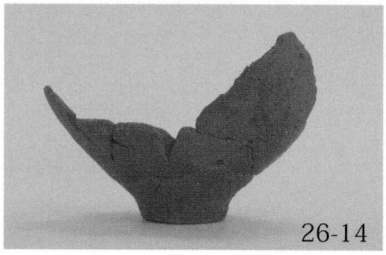

26-9

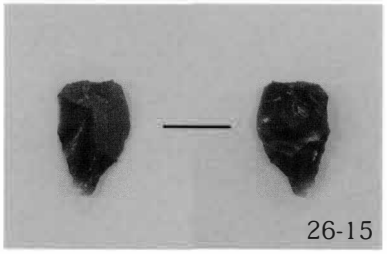

26-10

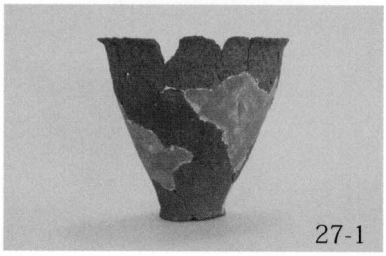

26-11

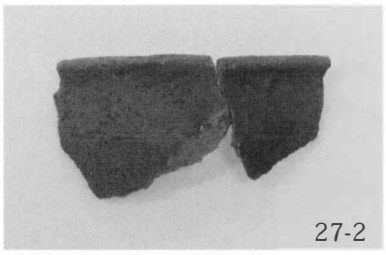

26-12

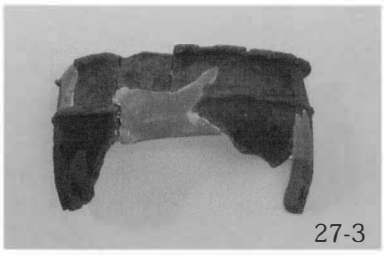

26-13

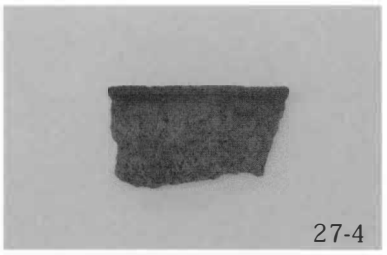

26-14

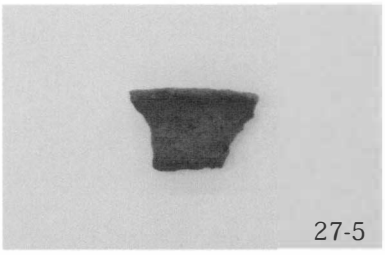

26-15


27-1

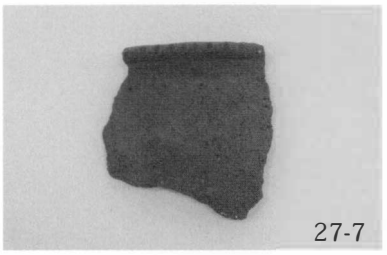

27-2

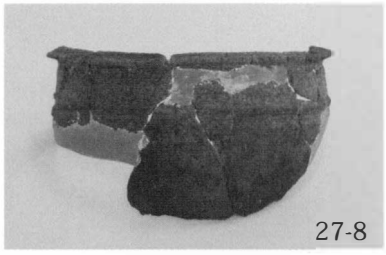

27-3

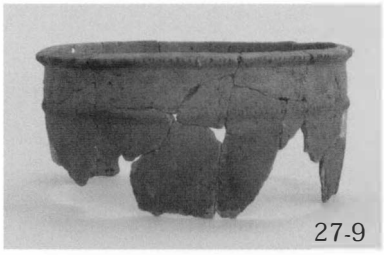

27-4

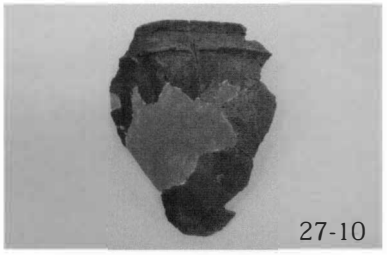

27-5

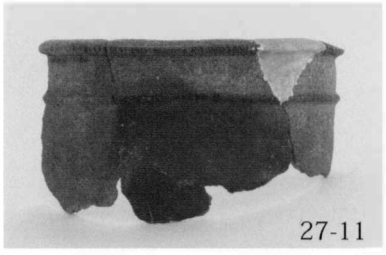
27-6

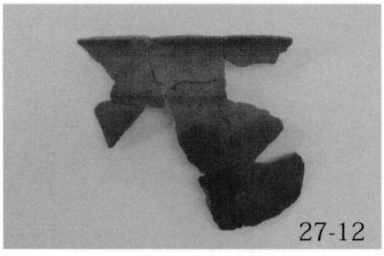

27-7

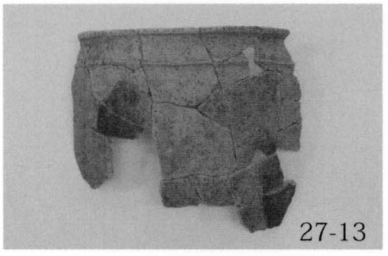

27-8

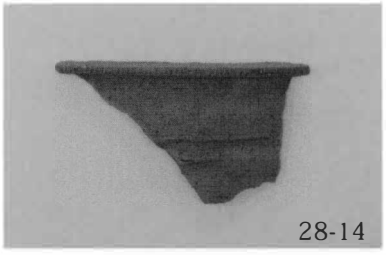

27-9

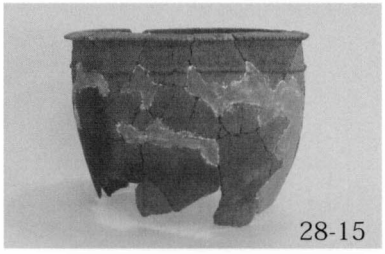

27-10


27-11

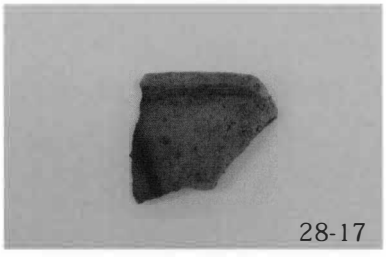

27-12

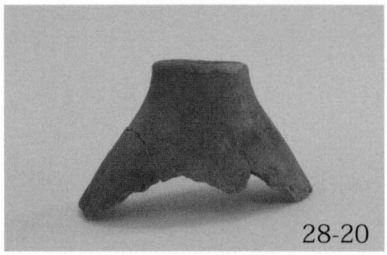

27-13

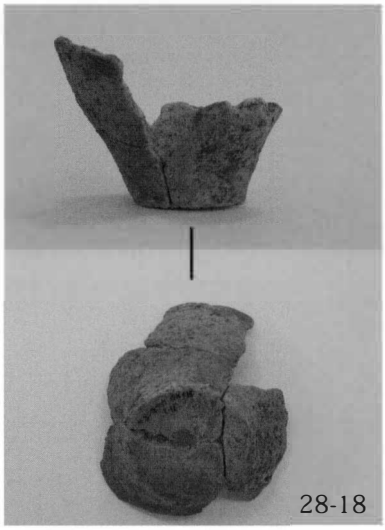

28-14

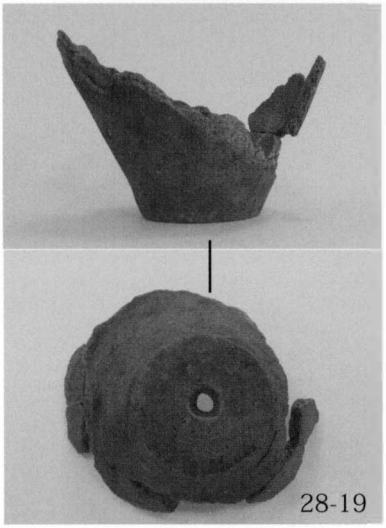

28-15

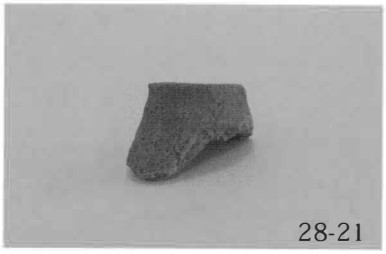
28-16

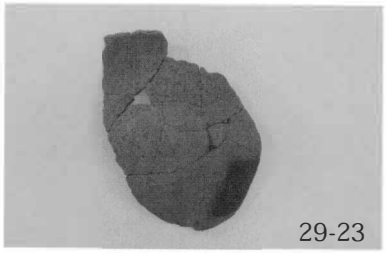

28-17


28-20


28-18

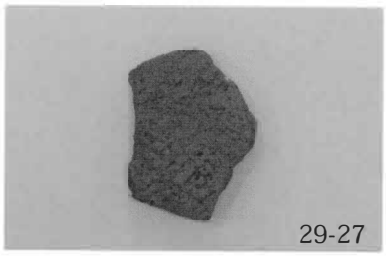

28-19

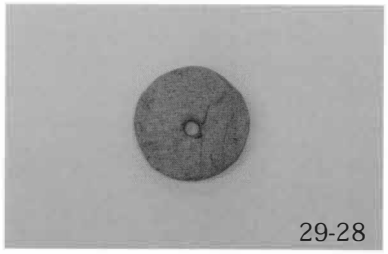

28-21

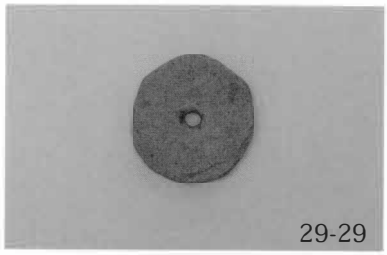

29-23

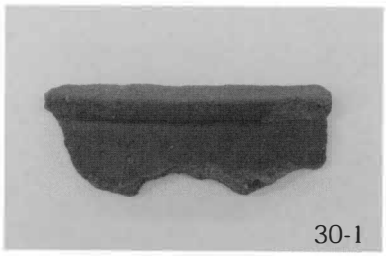
29-24

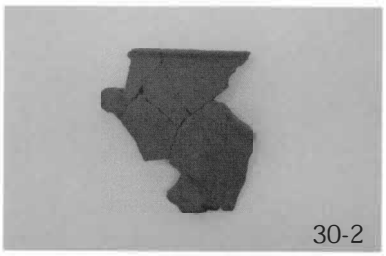
29-25

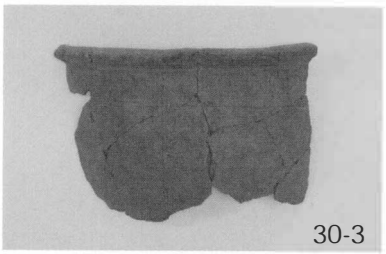

29-27

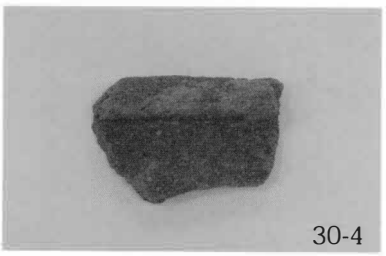

29-28

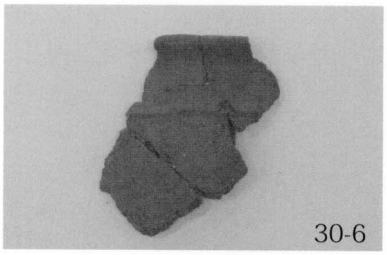

29-29

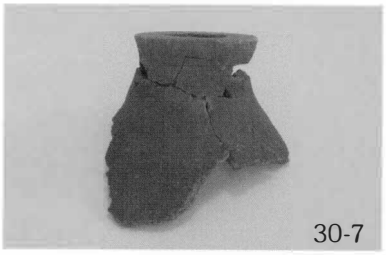

30-1

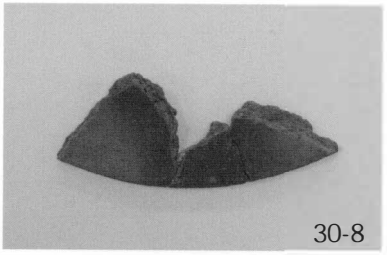

30-2

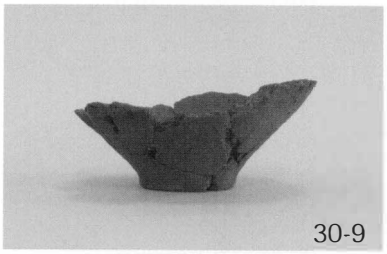

30-3

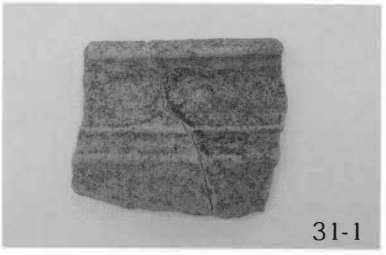

30-4

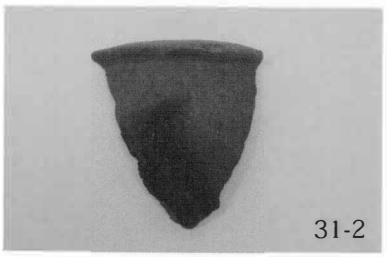

30-6

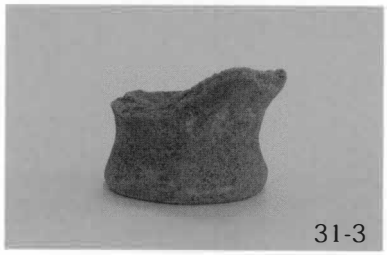

30-7

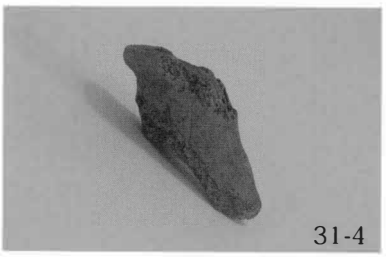

30-8

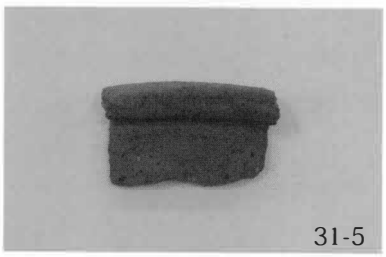

30-9

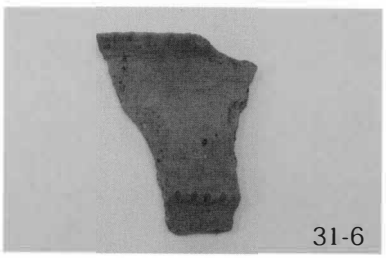

31-1

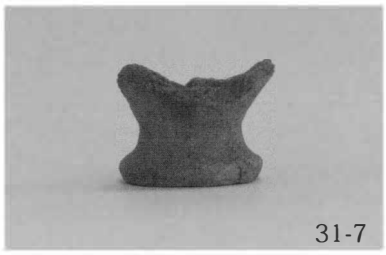

31-2

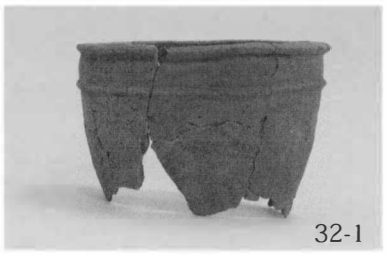

31-3

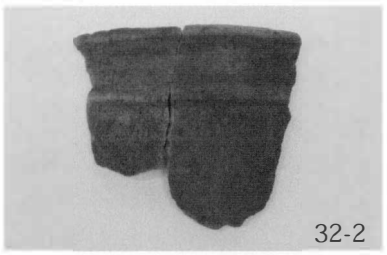

31-4

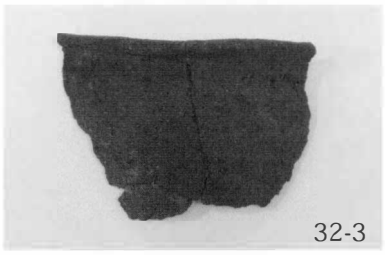

31-5

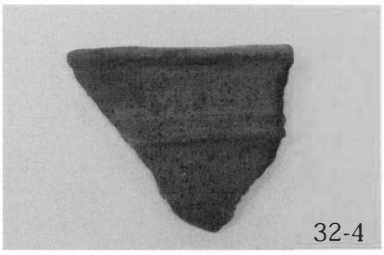

31-6


31-7

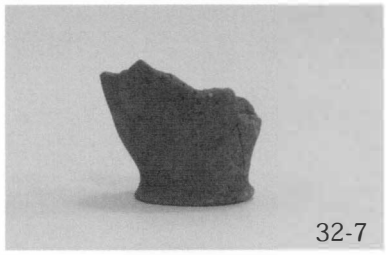

32-1

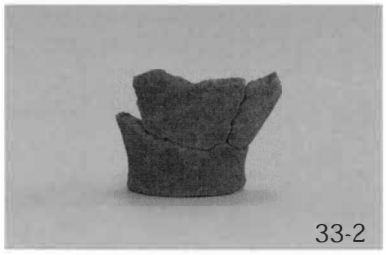

32-2

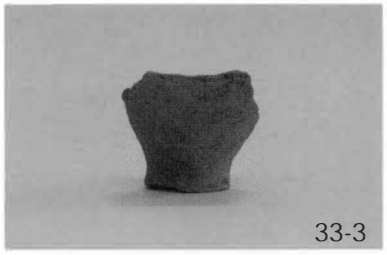

32-3

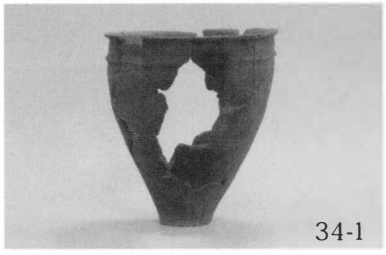

32-4

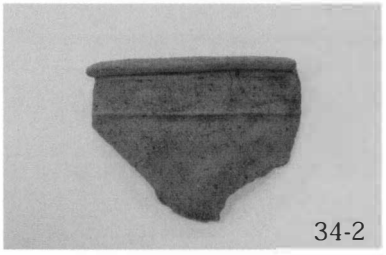
32-6


32-7

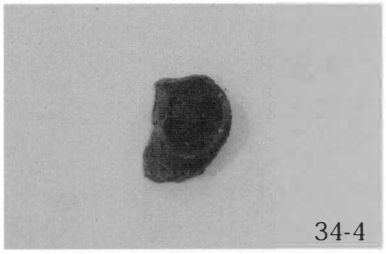

33-2

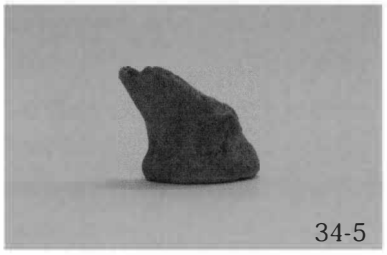

33-3

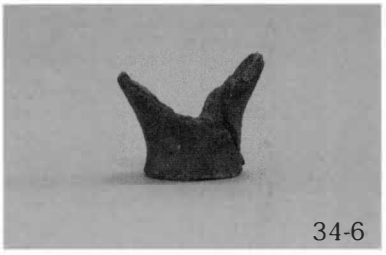

34-1

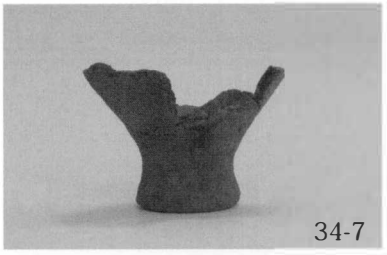

34-2

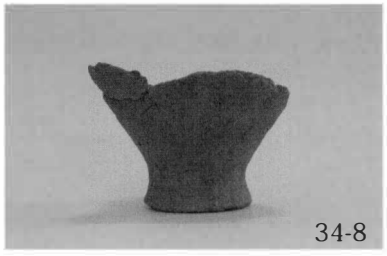
34-3

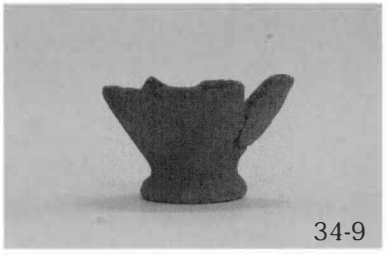

34-4

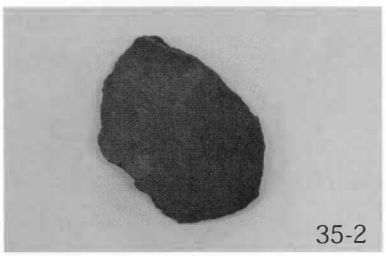

34-5

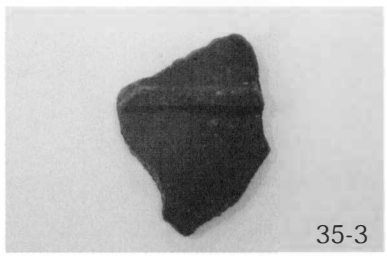

34-6

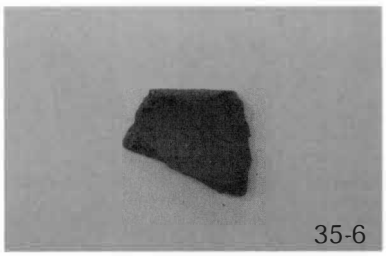

34-7

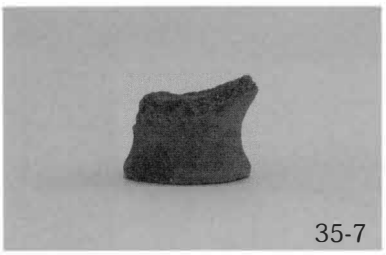

34-8

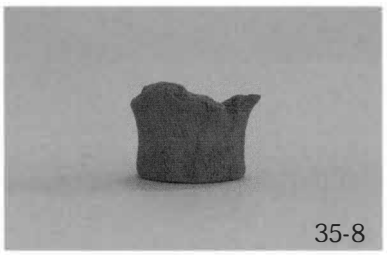

34-9

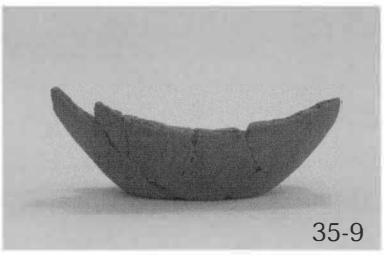

35-2

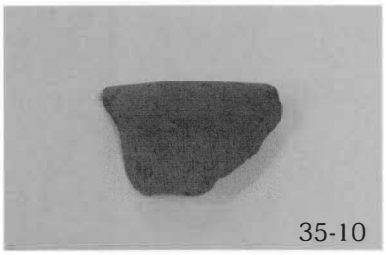

35-3

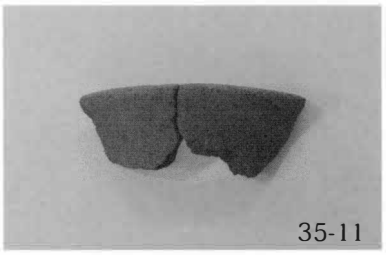

35-6

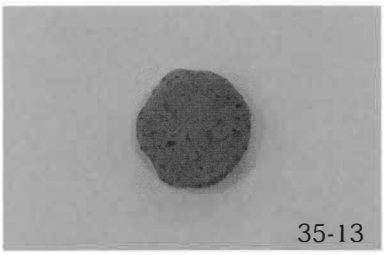

35-7


35-8


35-9

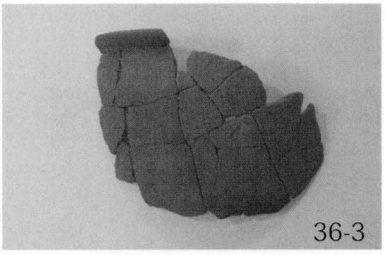

35-10

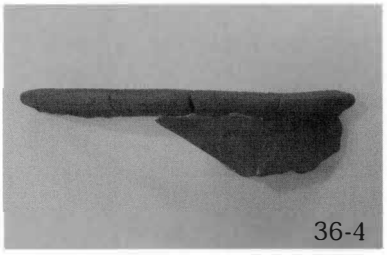

35-11

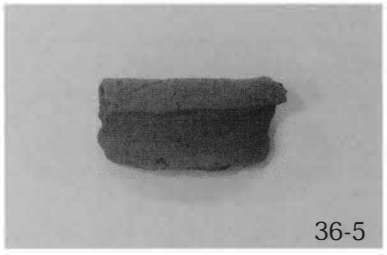

35-13

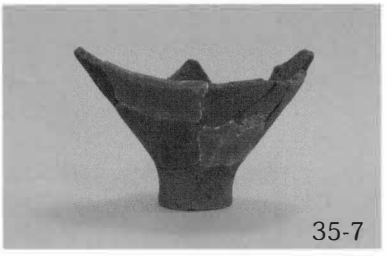
36-1

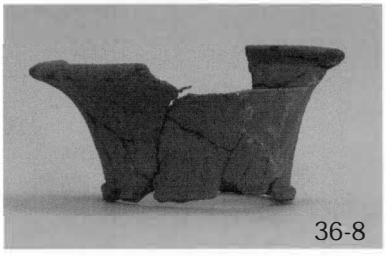
36-2

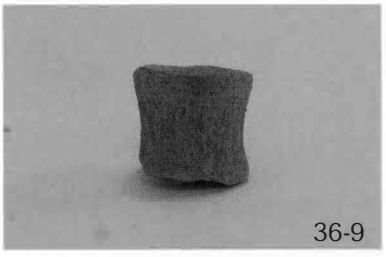

36-3

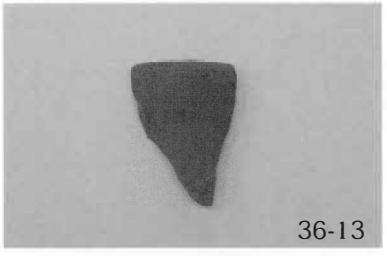

36-4

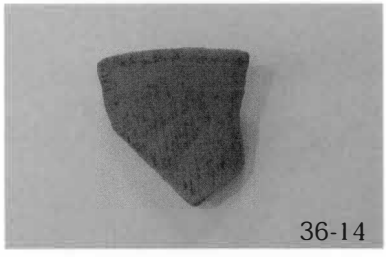

36-5

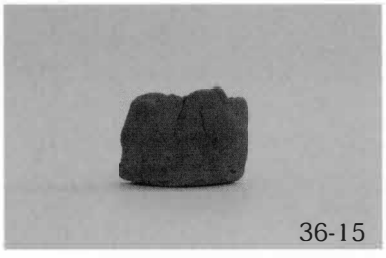

35-7

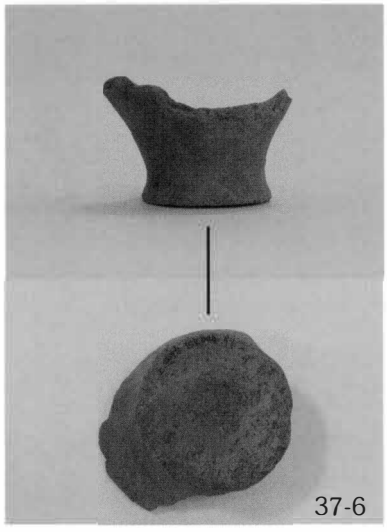

36-8

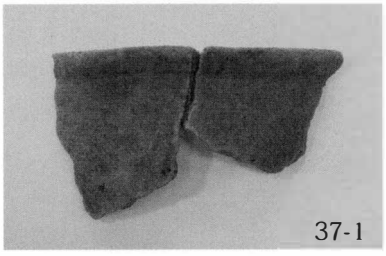

36-9

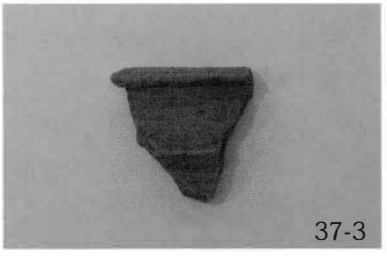

36-13

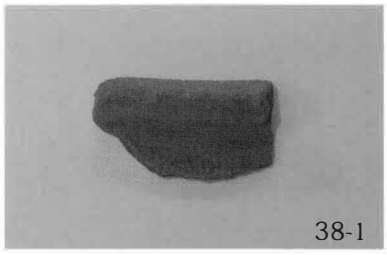

36-14

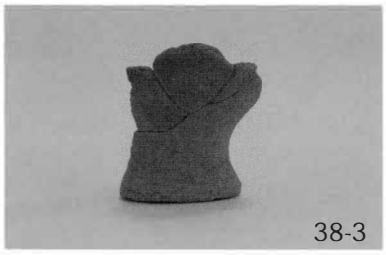

36-15

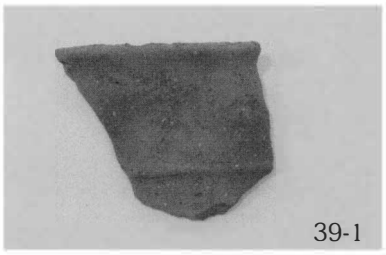

37-6

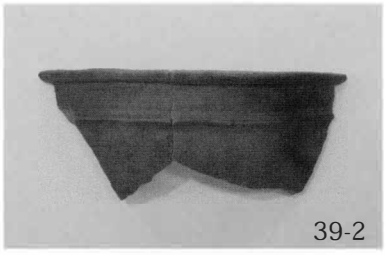

37-1


37-3

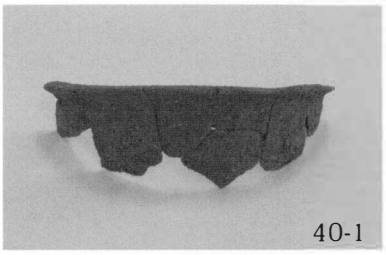

38-1

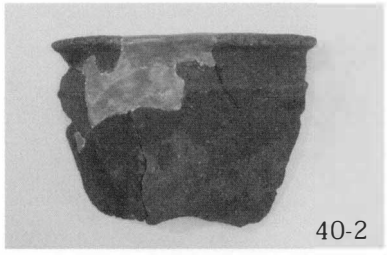

38-3

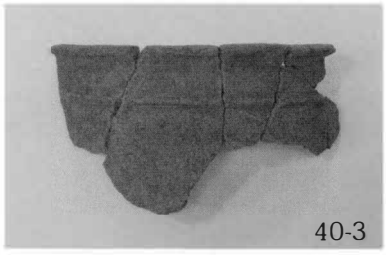

39-1

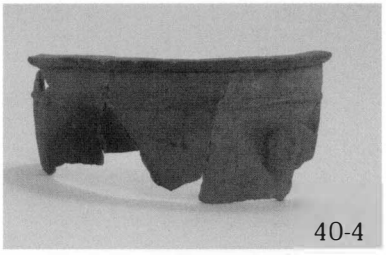

39-2

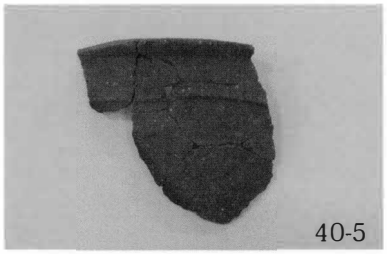
39-3

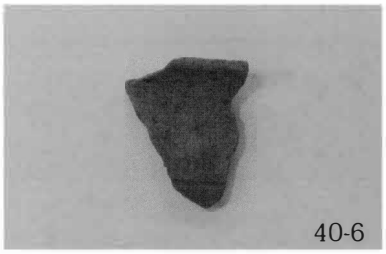

40-1

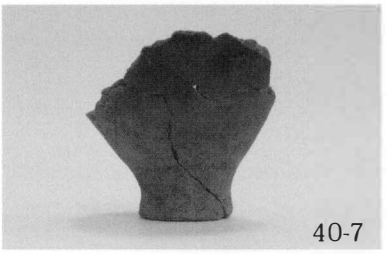

40-2

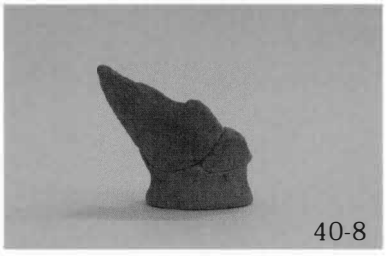

40-3

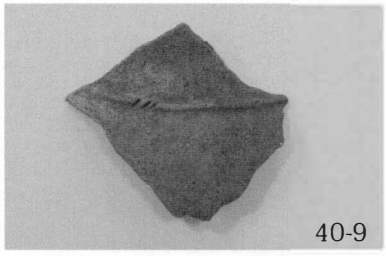

40-4

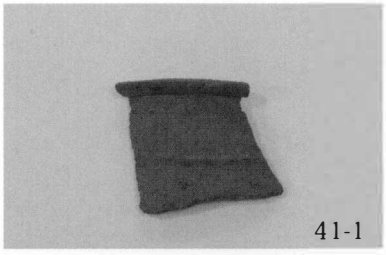

40-5

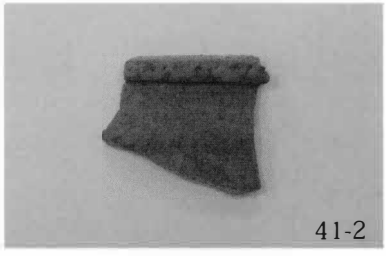

40-6

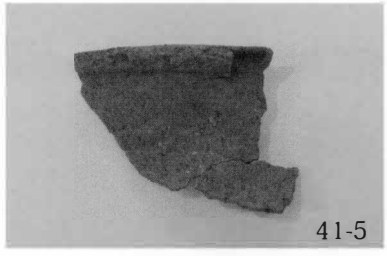

40-7

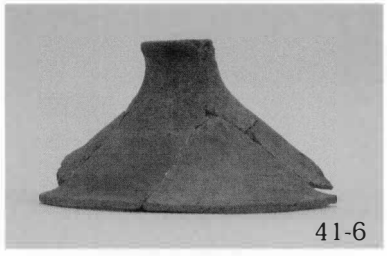

40-8

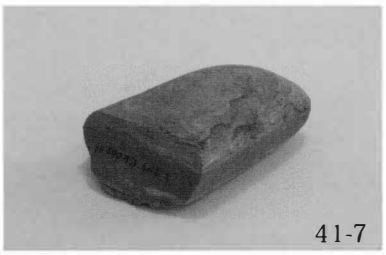

40-9

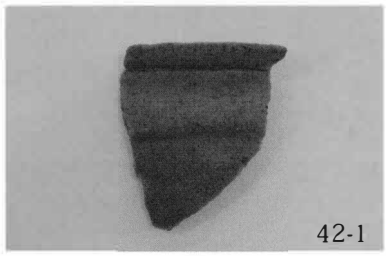

41-1

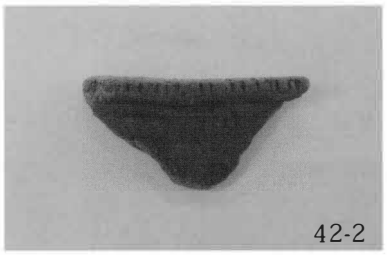

41-2

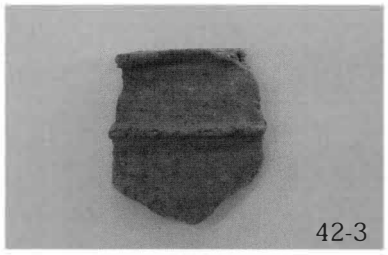

41-5

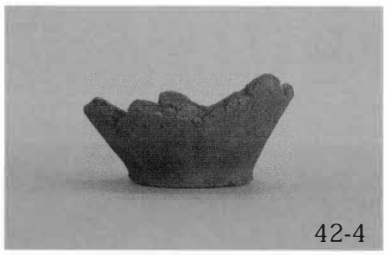

41-6

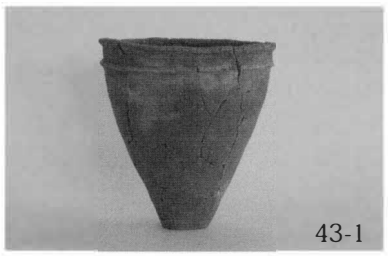

41-7

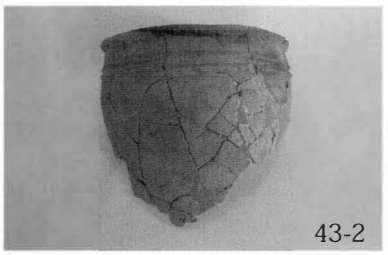

42-1

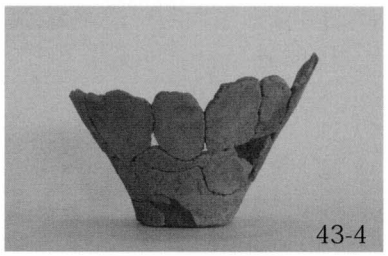

42-2

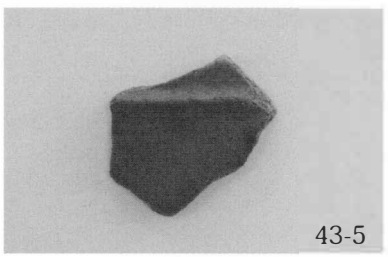

42-3

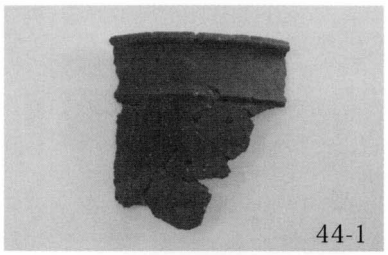

42-4

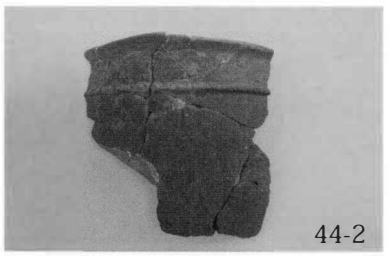

43-1

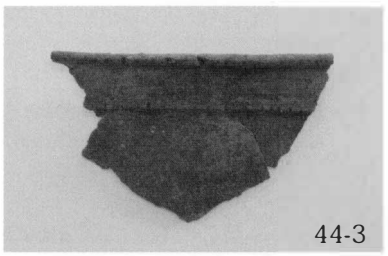

43-2

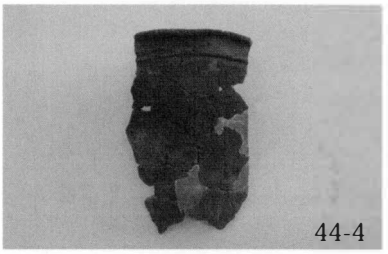

43-4

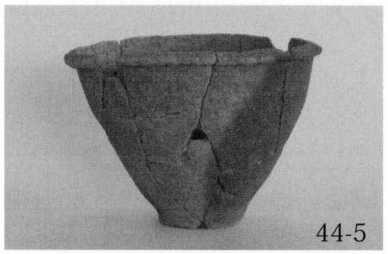

43-5

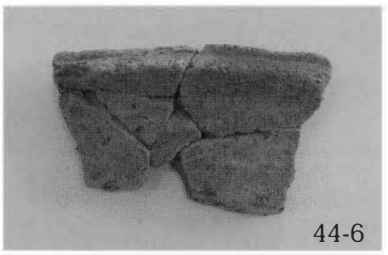

44-1

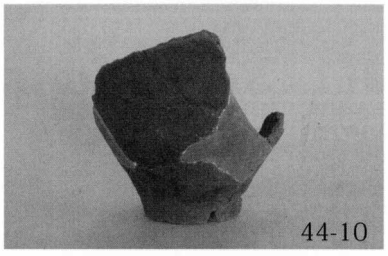

44-2

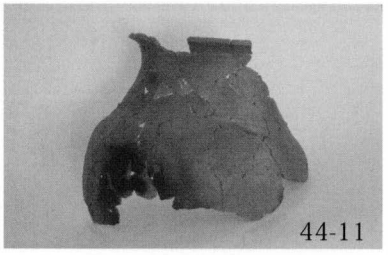

44-3

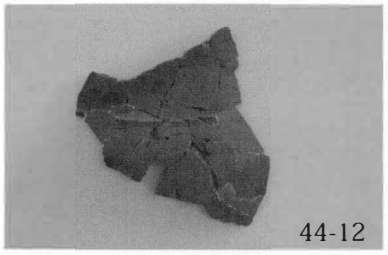

44-4


44-5

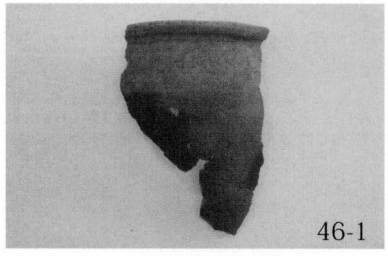

44-6

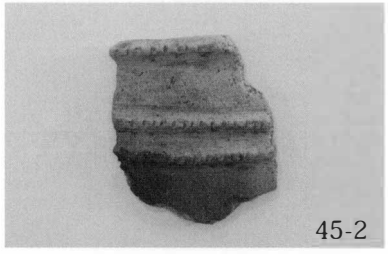

44-10

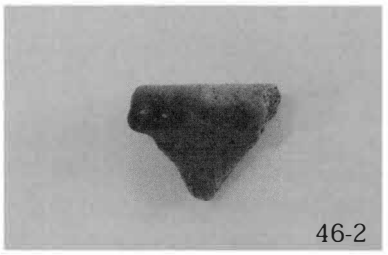

44-11

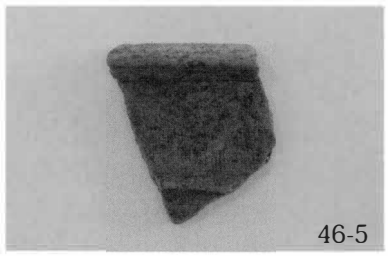

44-12

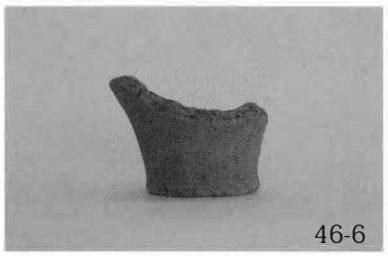
45-1

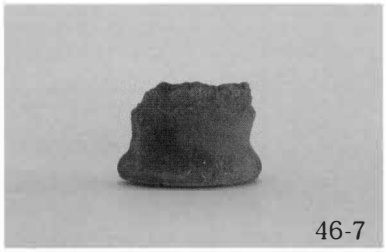

46-1

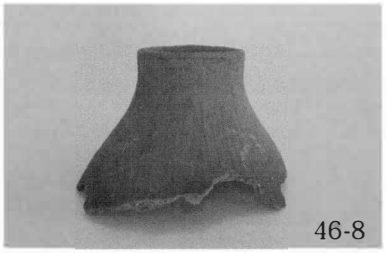

45-2

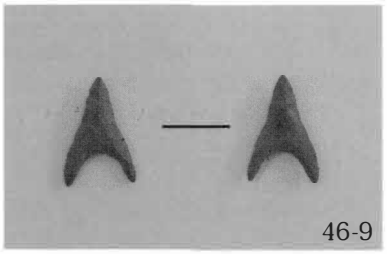

46-2

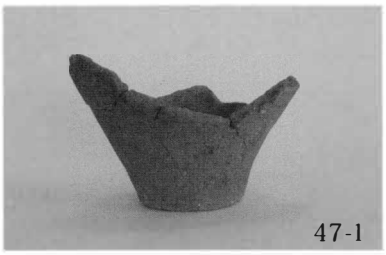

46-5

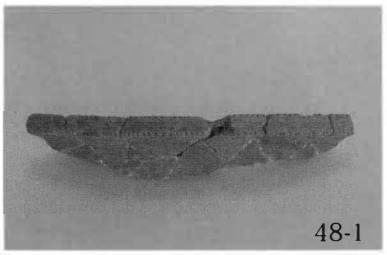

46-6

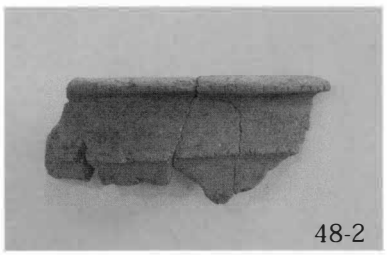

46-7

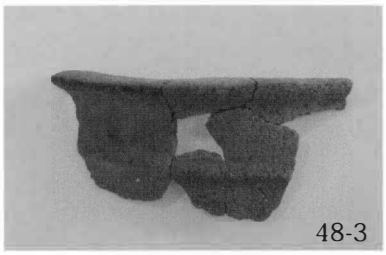

46-8

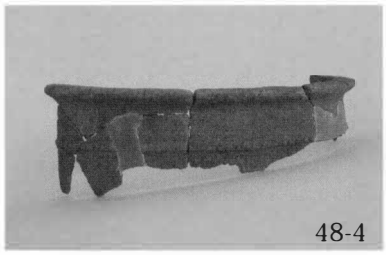

46-9

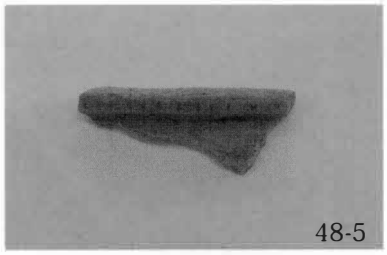

47-1

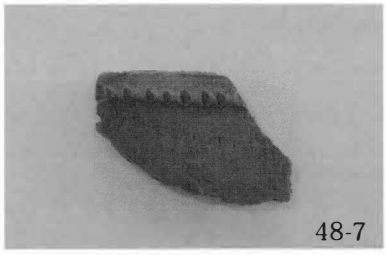

48-1

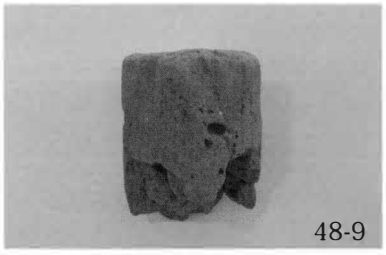

48-2


48-3

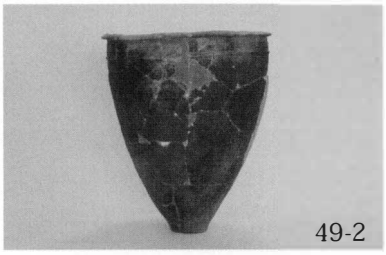

48-4

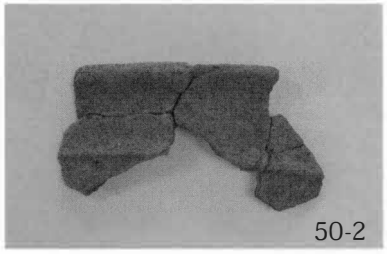

48-5

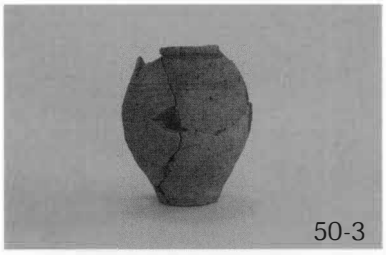

48-7


48-9

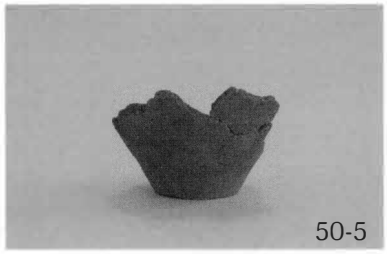
49-1

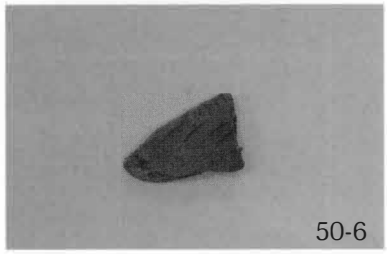

49-2

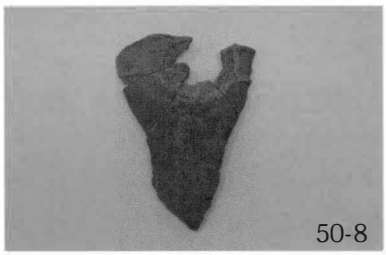

50-2

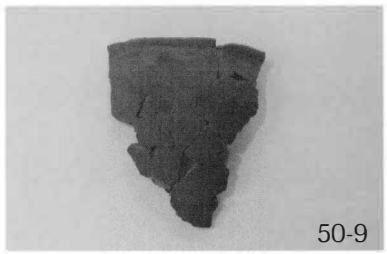

50-3

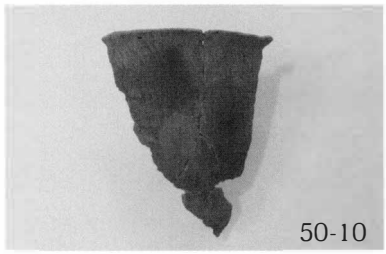
50-4

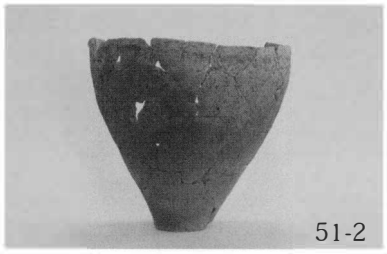

50-5

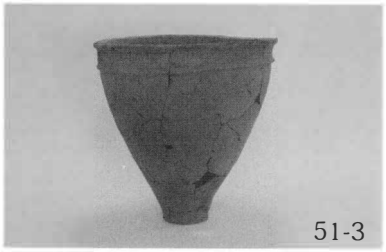

50-6

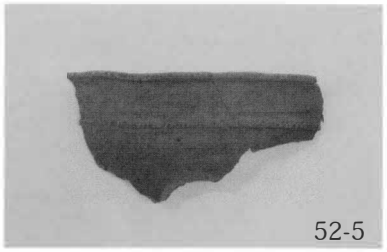

50-8

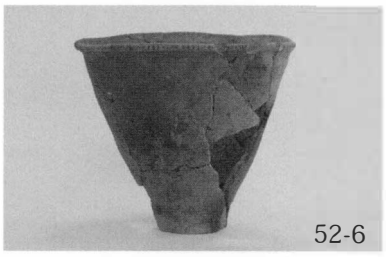

50-9

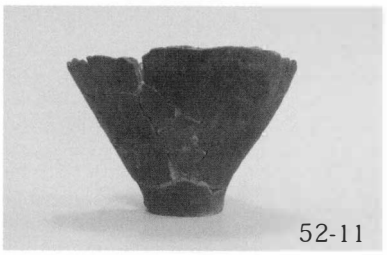

50-10

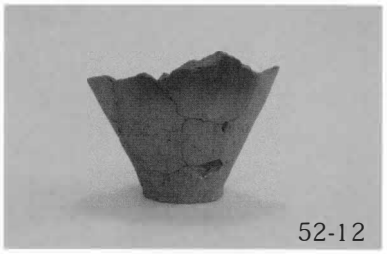

51-2

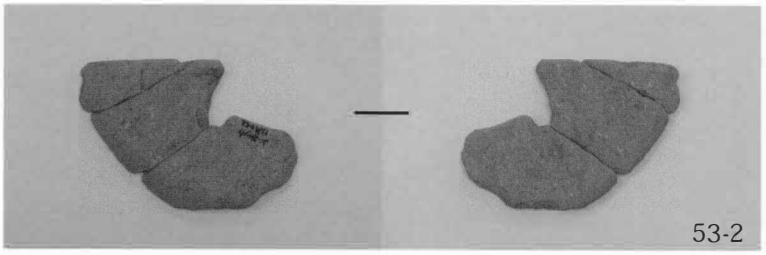

51-3

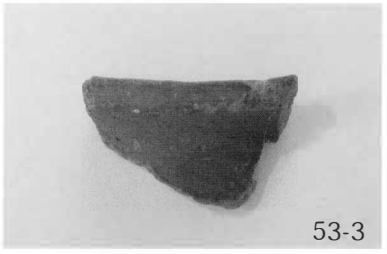

52-5

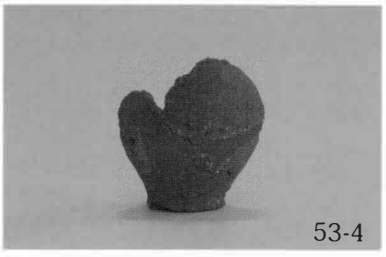

52-6

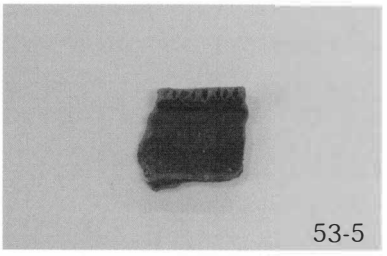

52-11

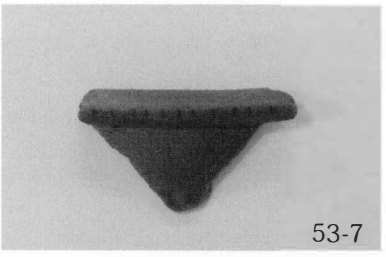

52-12

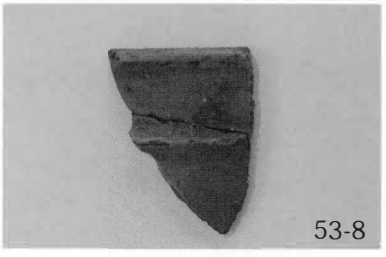

53-2

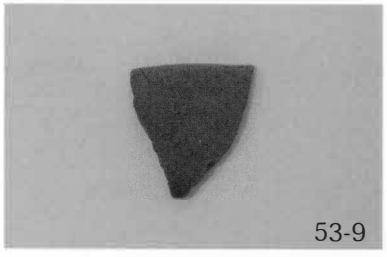

53-3

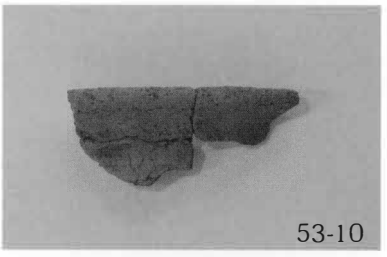

53-4

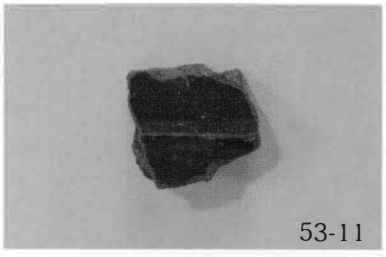

53-5


53-7

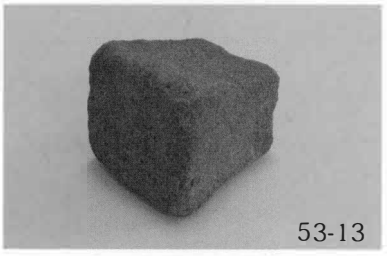

53-8

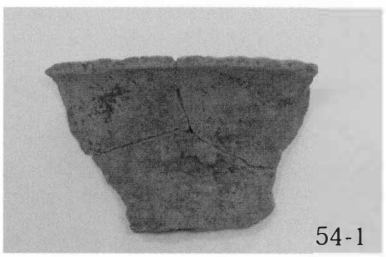

53-9

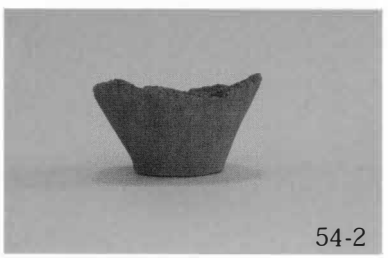

53-10

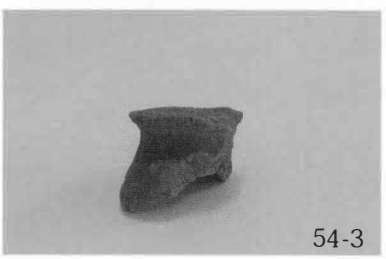

53-11

53-12


53-13


54-1


54-2

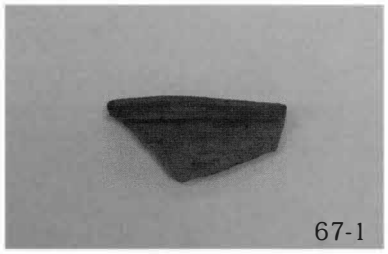

54-3

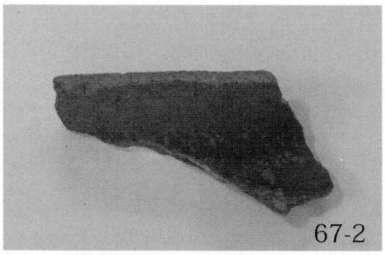
調査区全景（東から）

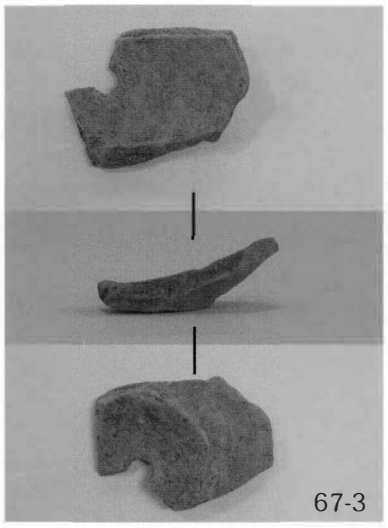
調査区全景（西から）

1SB100 完掘状況（南から）

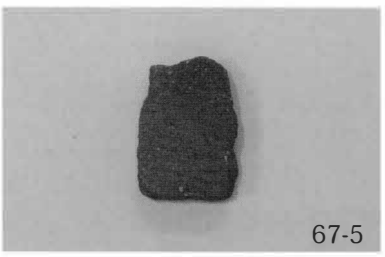
1SK180 完掘状況（南から）

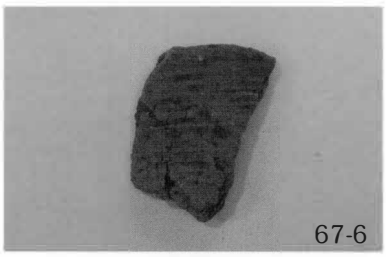

67-1

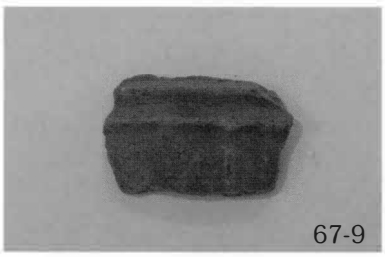

67-2

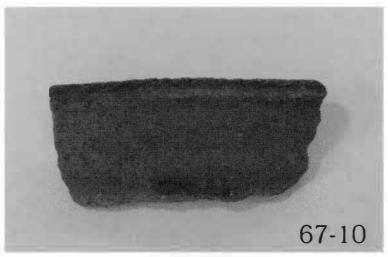

67-3

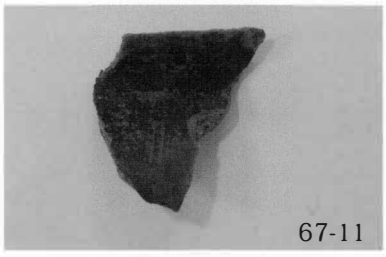
67-4

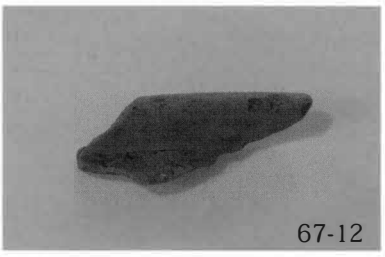

67-5

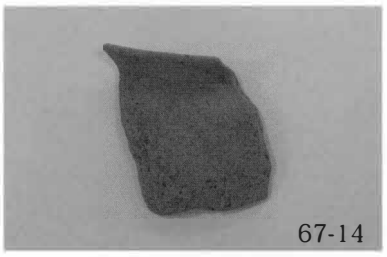

67-6

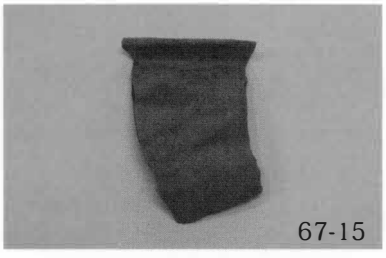

67-9

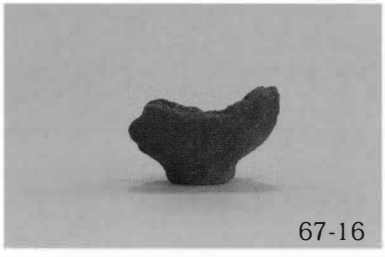

67-10

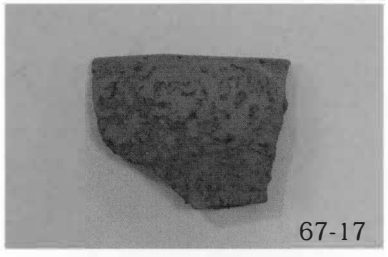

67-11

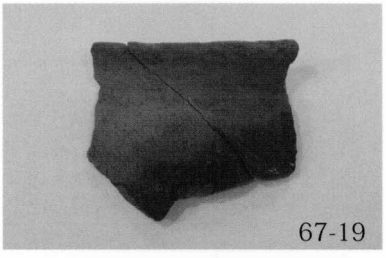

67-12

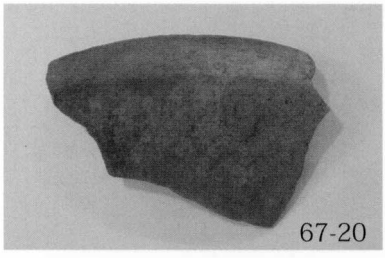

67-14

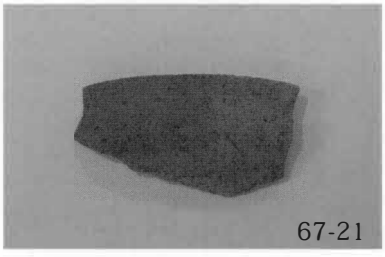

67-15

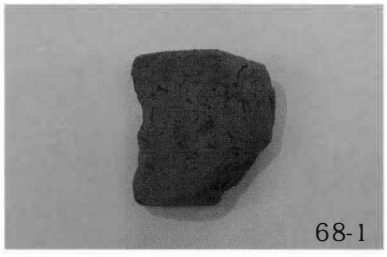

67-16


67-17

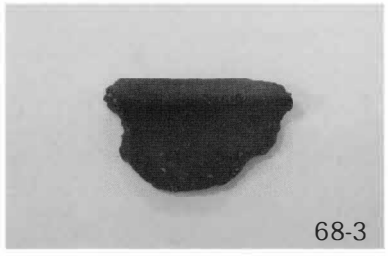

67-19

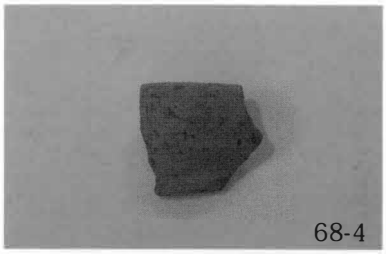

67-20

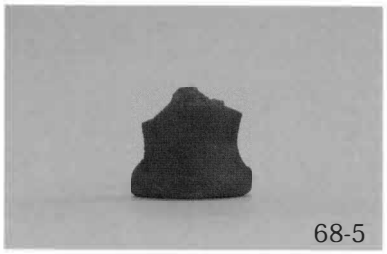

67-21

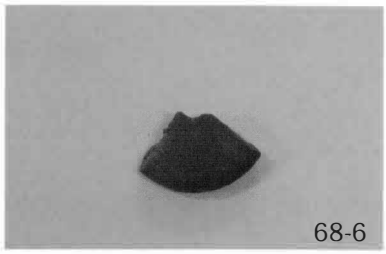

68-1

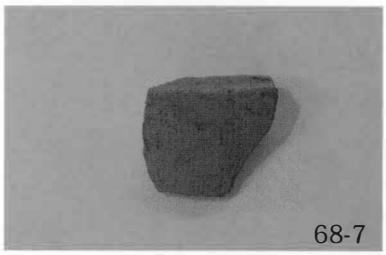
68-2

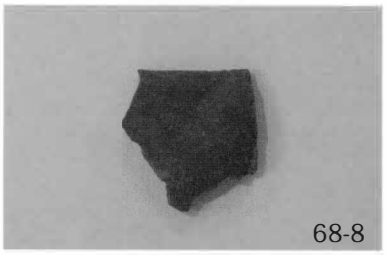

68-3

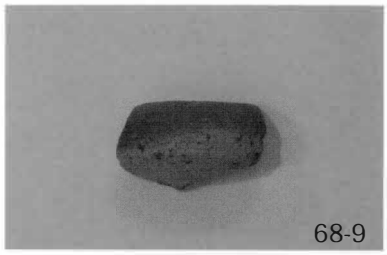

68-4

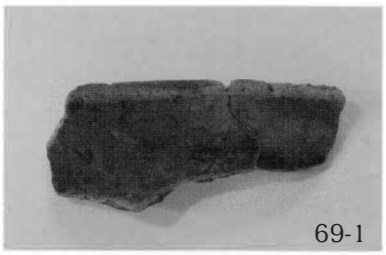

68-5

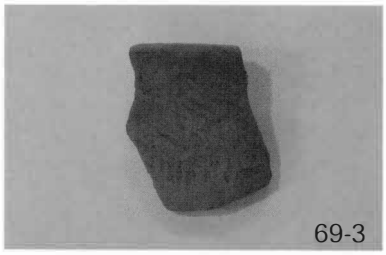

68-6

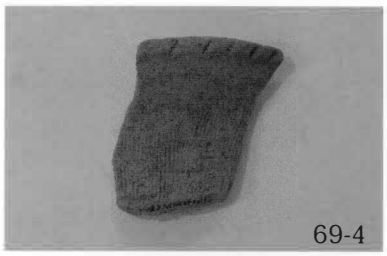

68-7

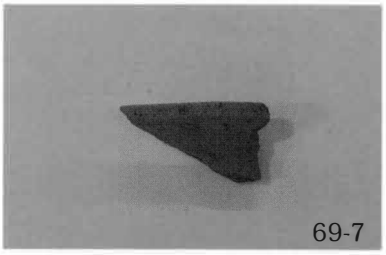

68-8

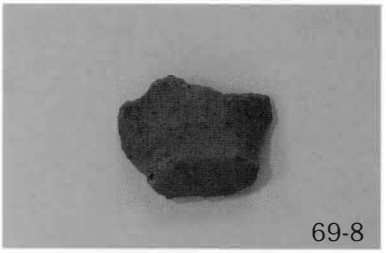

68-9

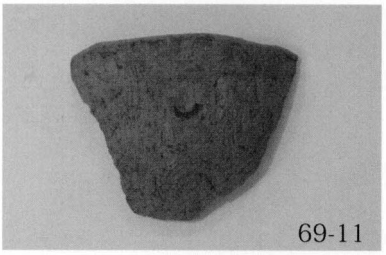

69-1

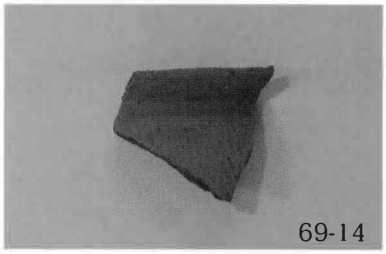

69-3

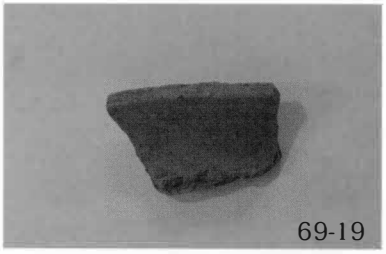

69-4

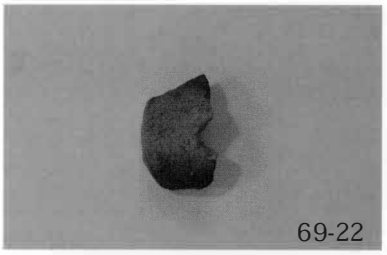

69-7

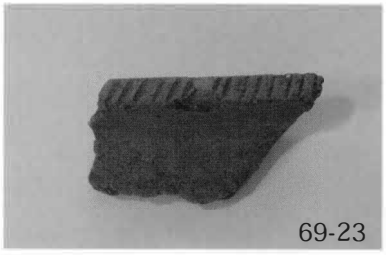

69-8

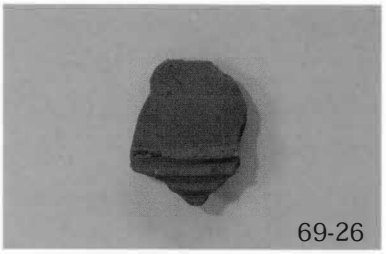

69-11

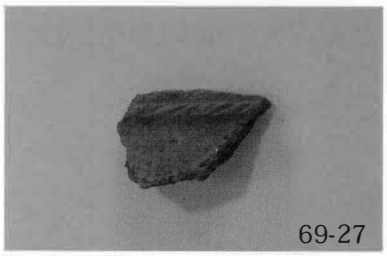

69-14

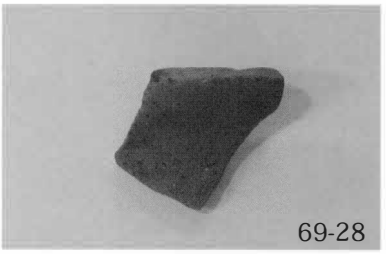

69-19

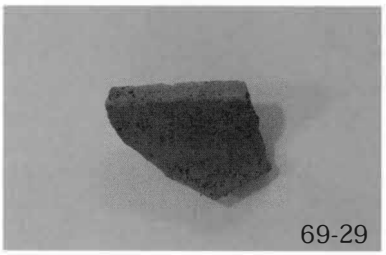

69-22

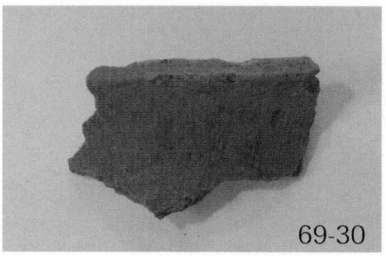

69-23

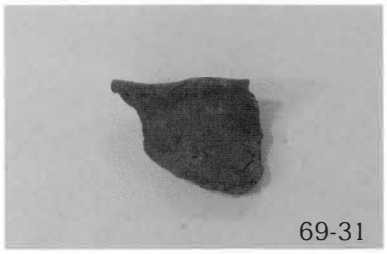

69-26

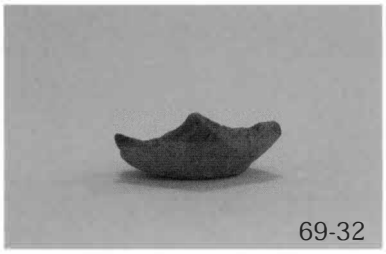

69-27

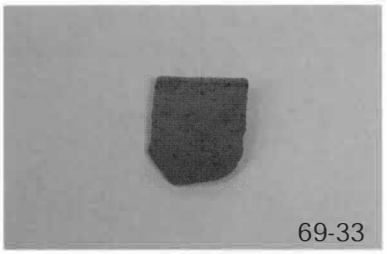

69-28

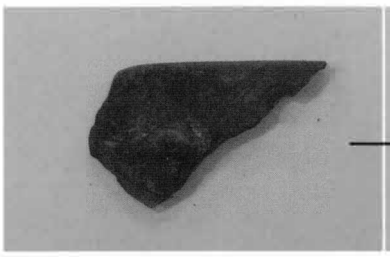

69-29

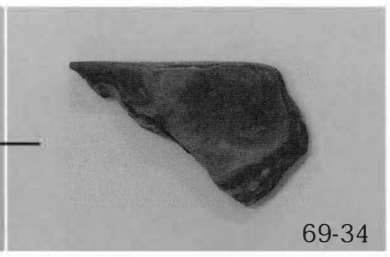

69-30

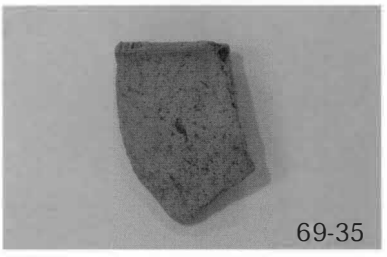

69-31

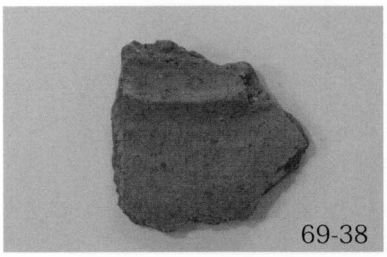

69-32

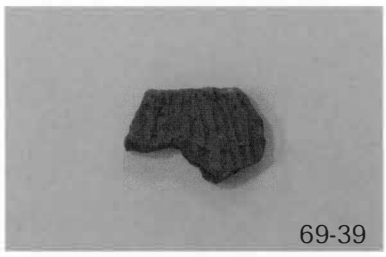

69-33

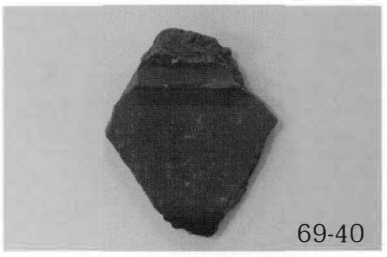


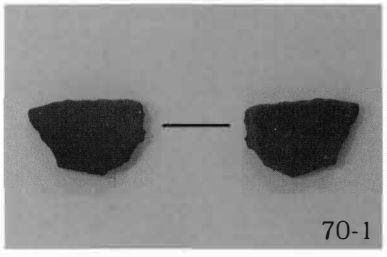

69-34

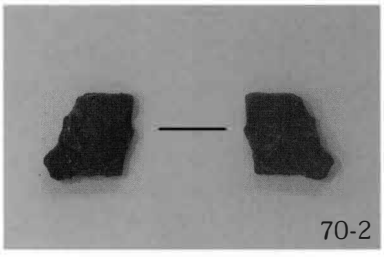

69-35

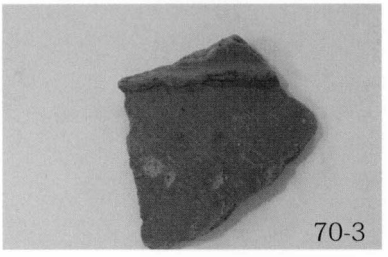

69-38

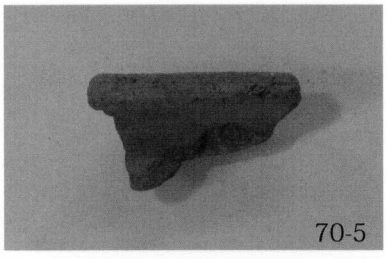

69-39

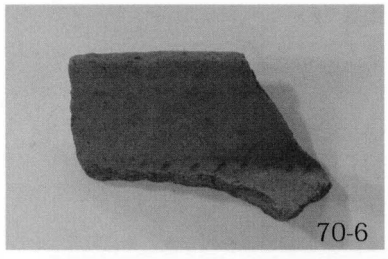

69-40

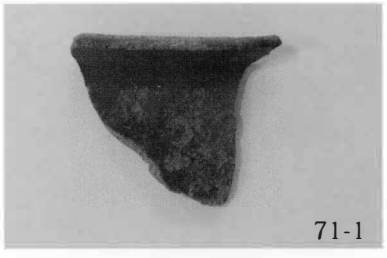

70-1

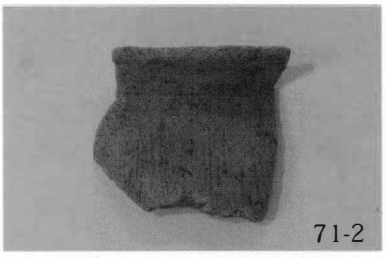

70-2

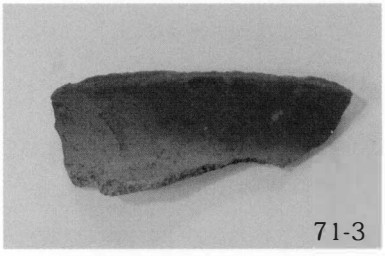

70-3

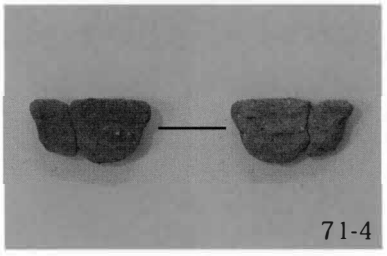

70-5

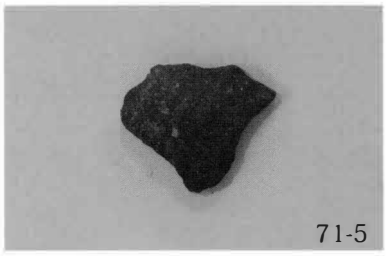

70-6

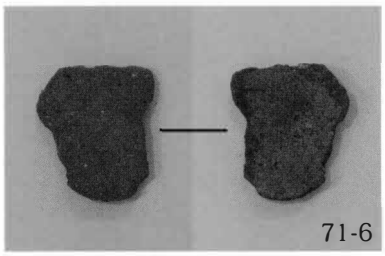

71-1

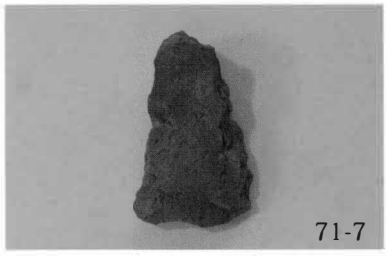

71-2

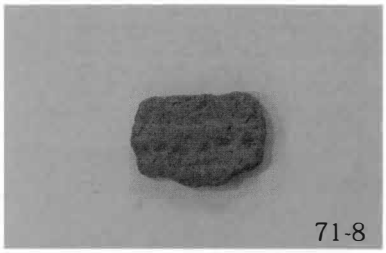

71-3

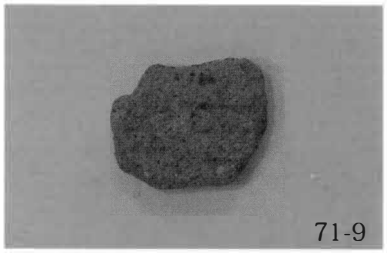

71-4

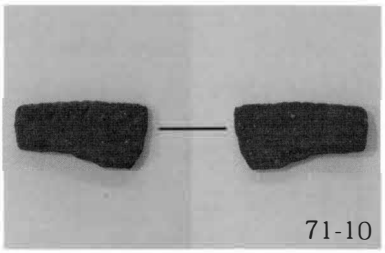

71-5

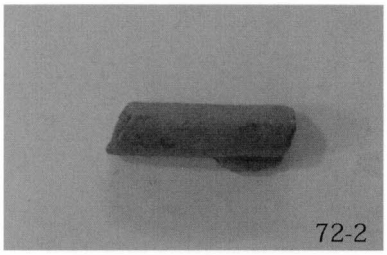

71-6

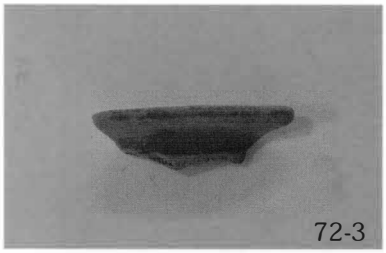

71-7

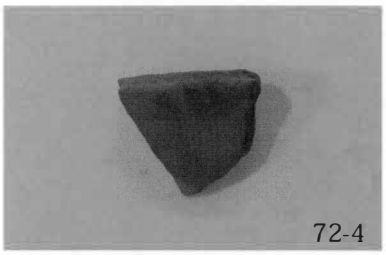

71-8

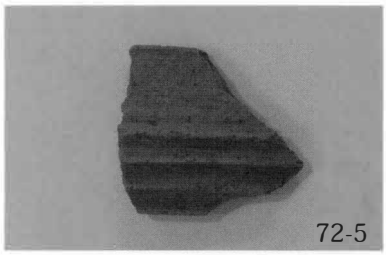

71-9

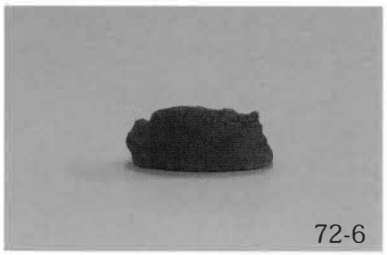

71-10

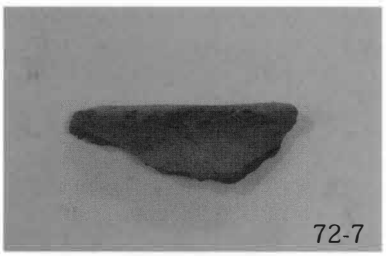

72-2

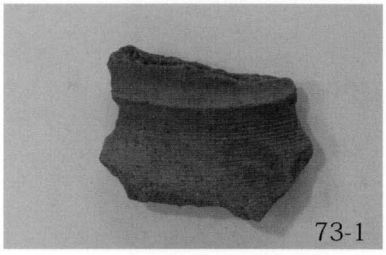

72-3

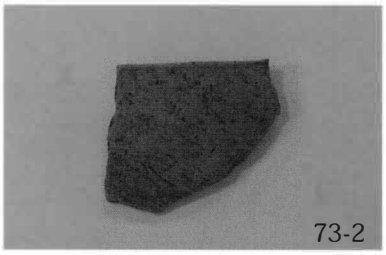

72-4

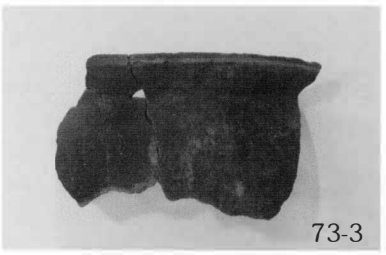

72-5

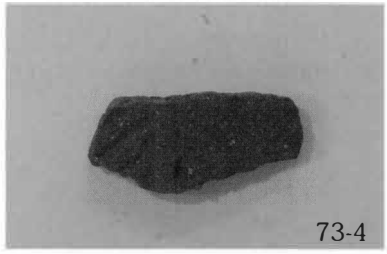

72-6

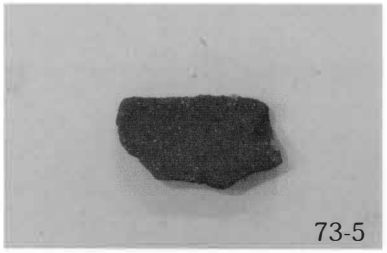

72-7

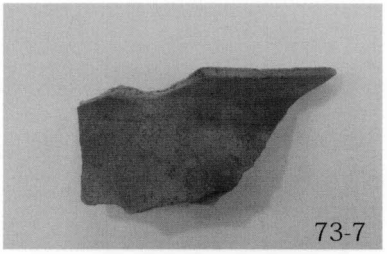

73-1

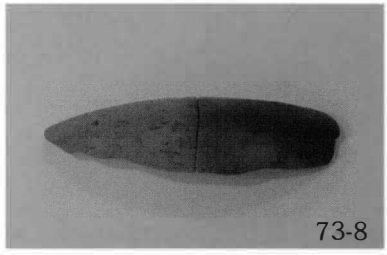

73-2

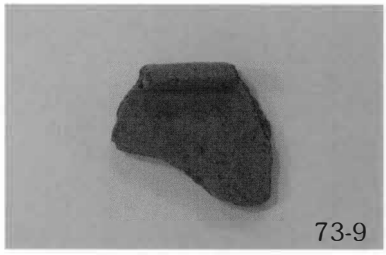

73-3

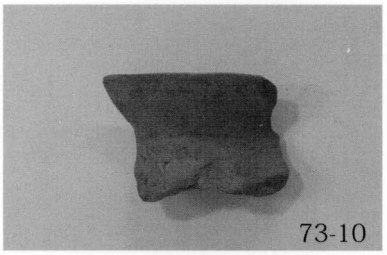

73-4

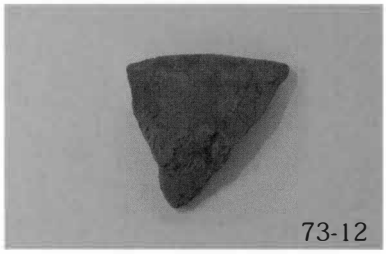

73-5

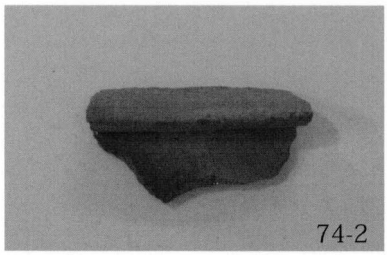

73-7

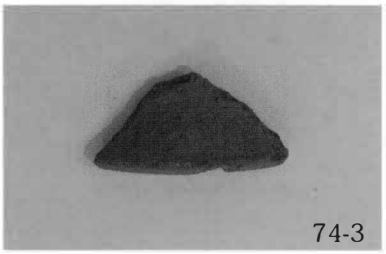

73-8

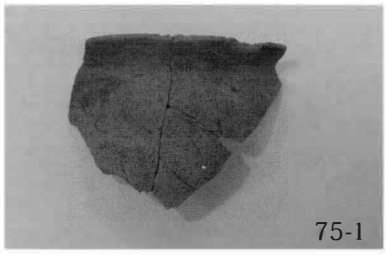

73-9

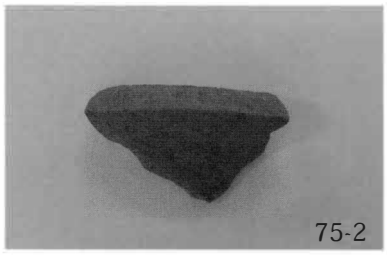

73-10

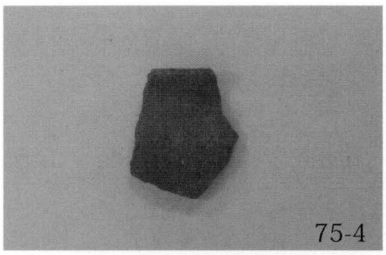

73-12

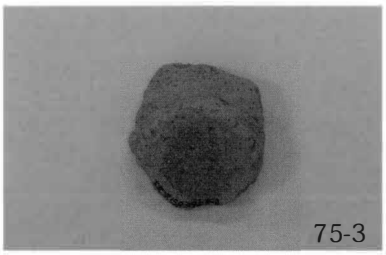

74-2

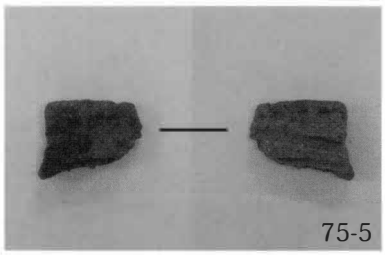

74-3

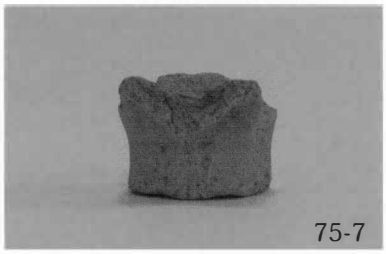

75-1

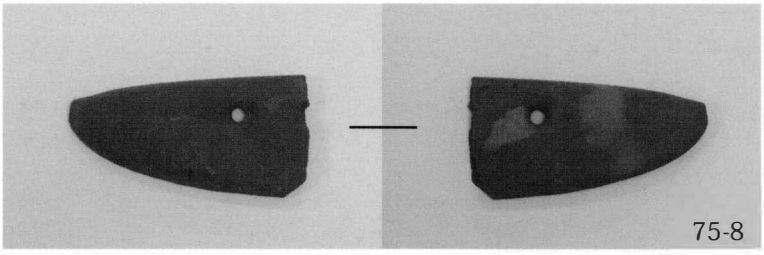

75-2

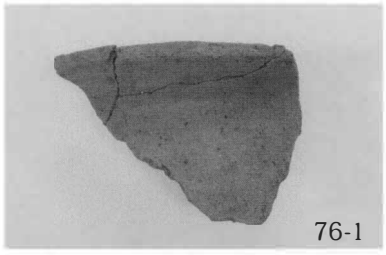

75-4

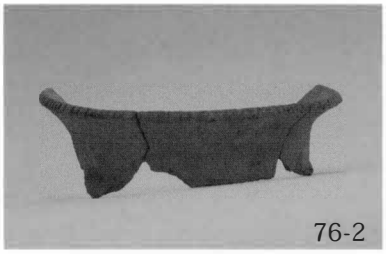

75-3

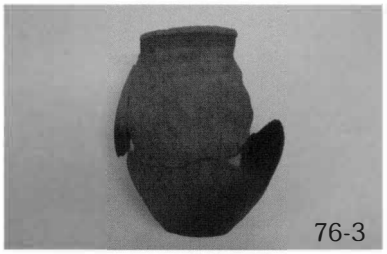

75-5

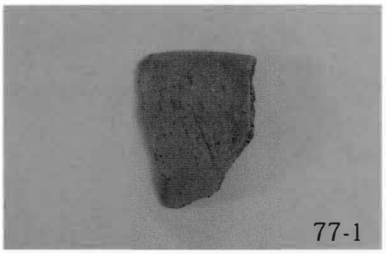

75-7

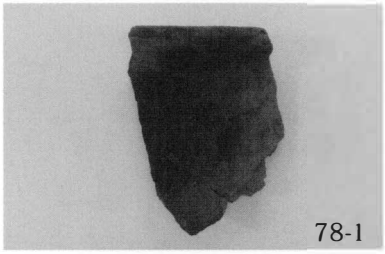

75-8

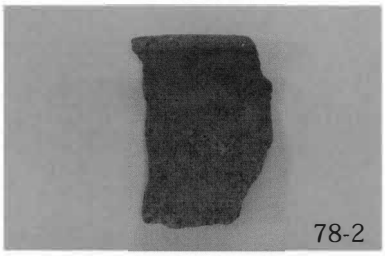

76-1

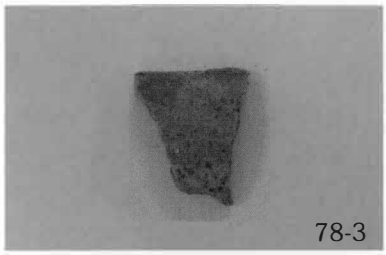

76-2

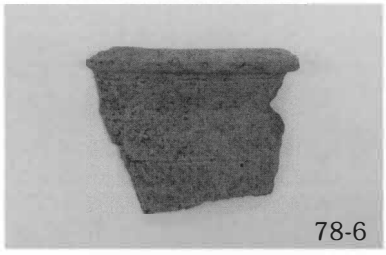

76-3

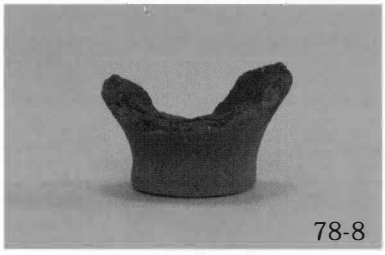

77-1

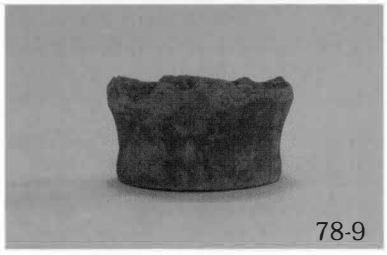

78-1


78-2

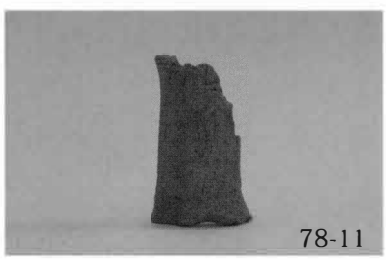

78-3

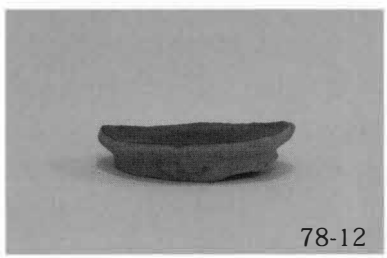

78-6

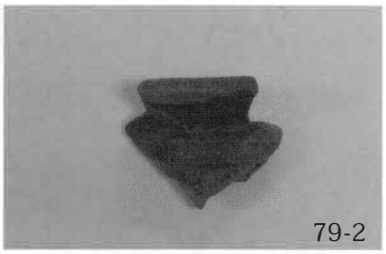

78-8

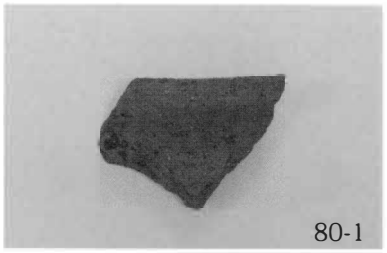

78-9

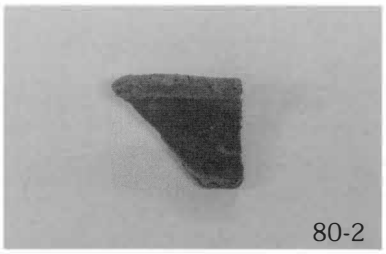
78-10

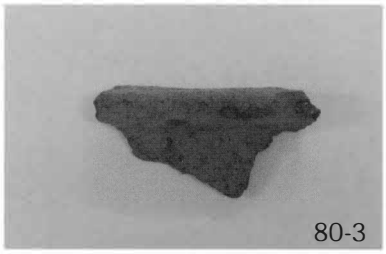

78-11

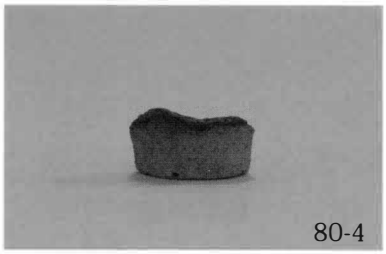

78-12

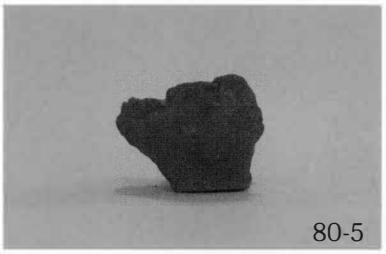

79-2

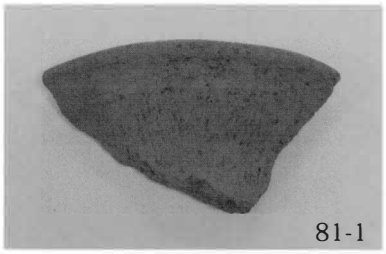

80-1

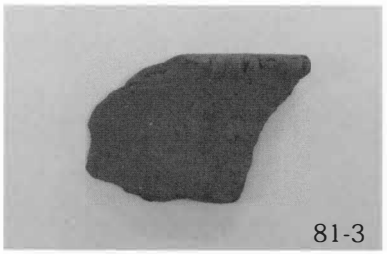

80-2

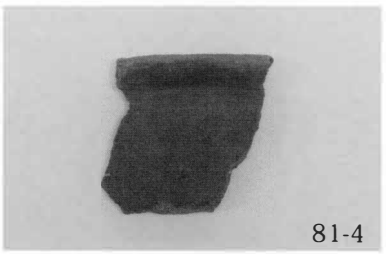

80-3

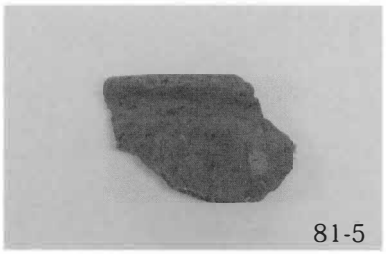

80-4

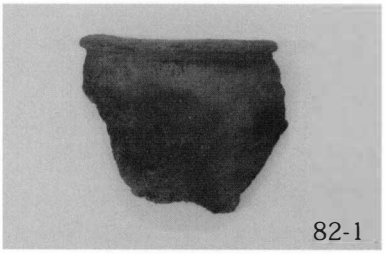

80-5

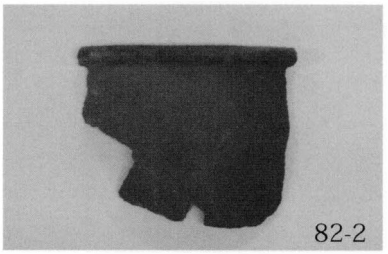

81-1

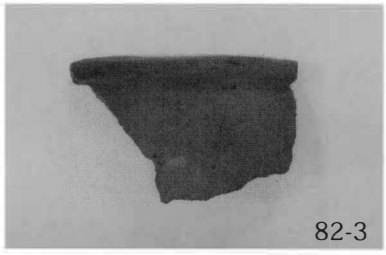

81-3

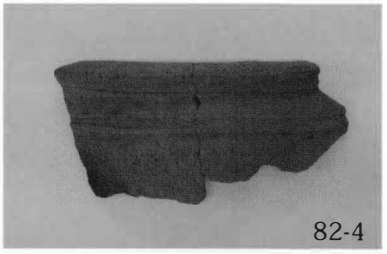

81-4

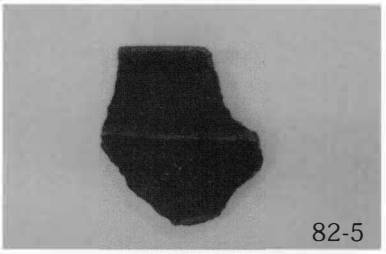

81-5

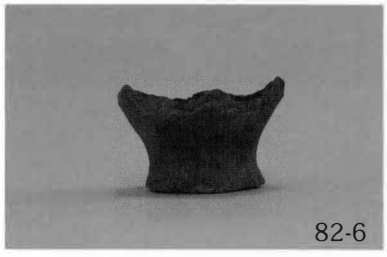

82-1

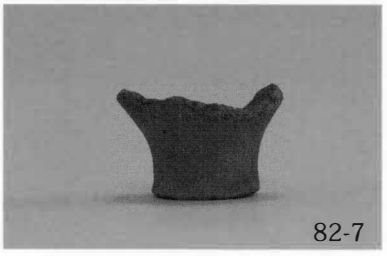

82-2

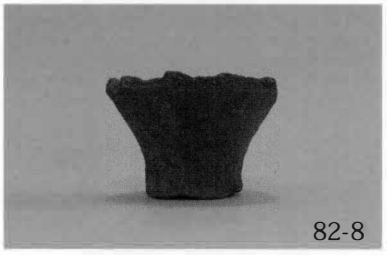

82-3

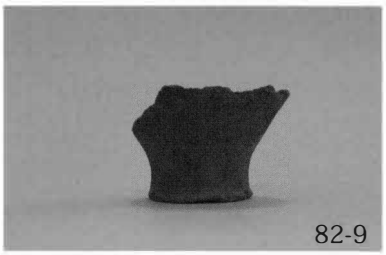

82-4

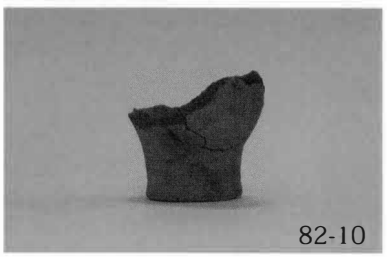

82-5

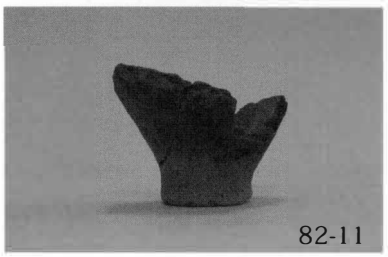

82-6

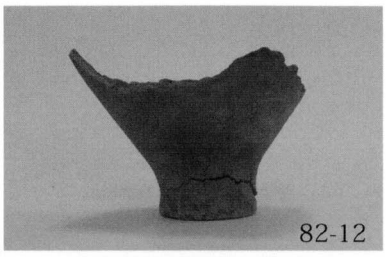

82-7

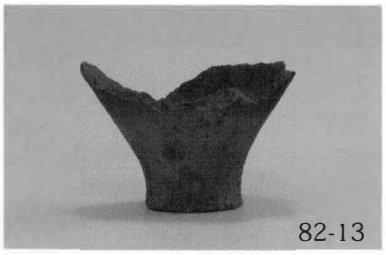

82-8

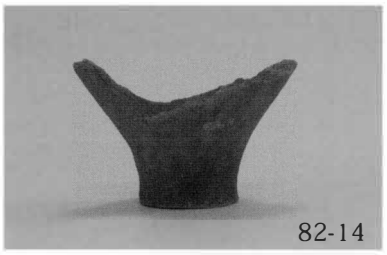

82-9

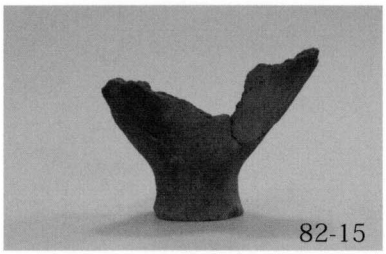

82-10

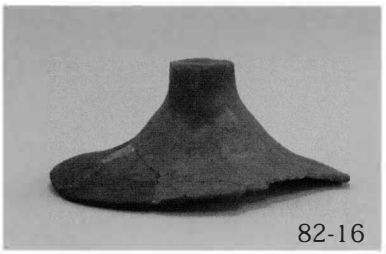

82-11

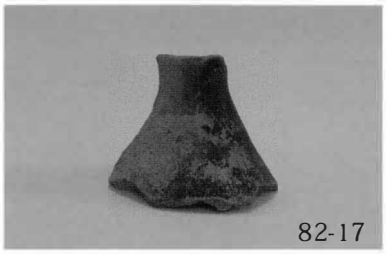

82-12

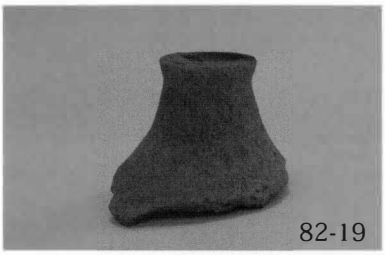

82-13

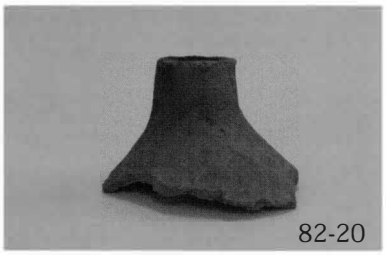

82-14

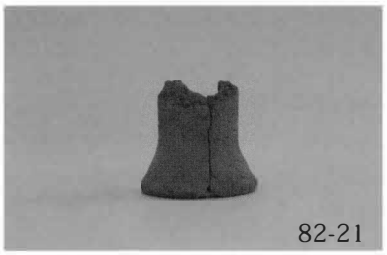

82-15

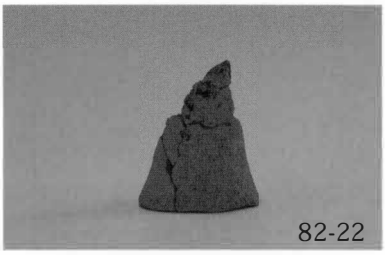

82-16

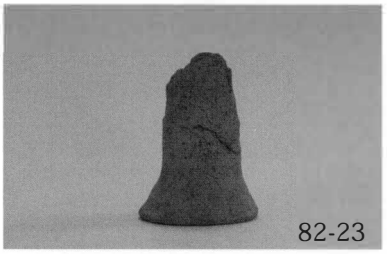

82-17

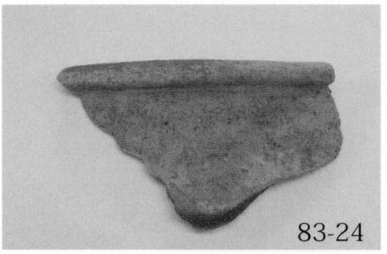

82-19

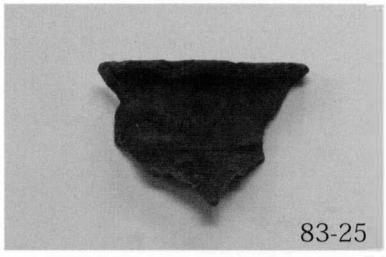

82-20

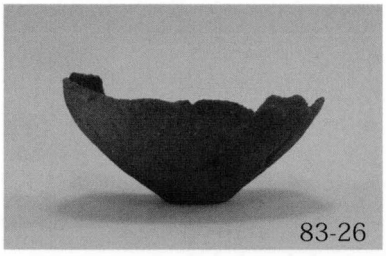

82-21

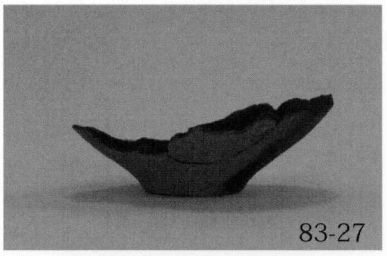

82-22

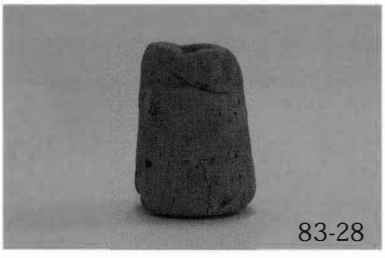

82-23

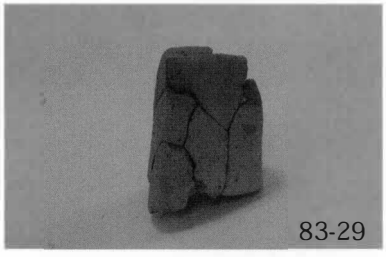

83-24

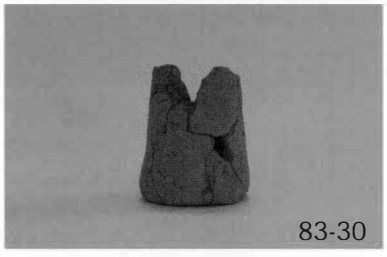

83-25

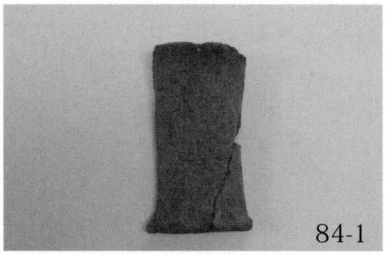

83-26

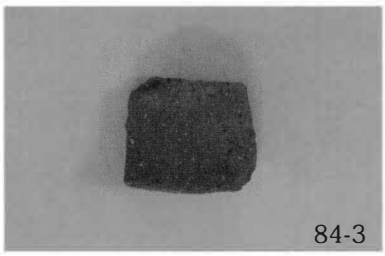

83-27

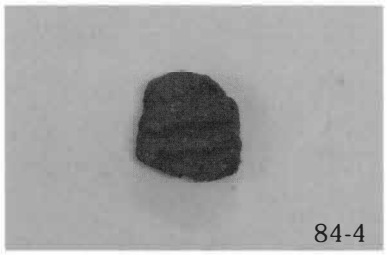

83-28

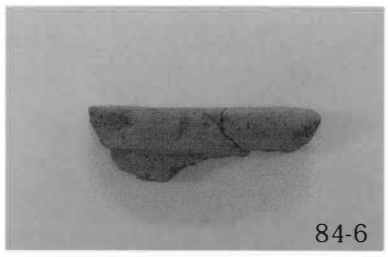

83-29

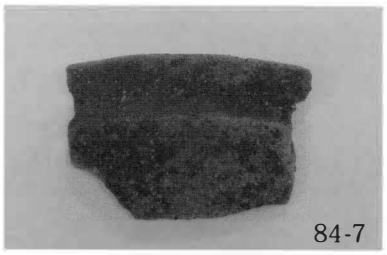

83-30

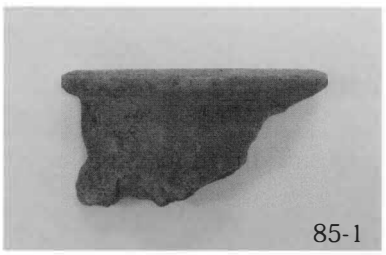

84-1

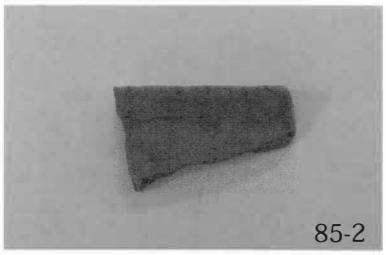

84-3

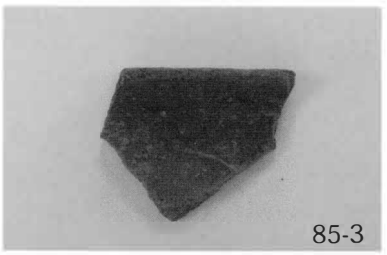

84-4

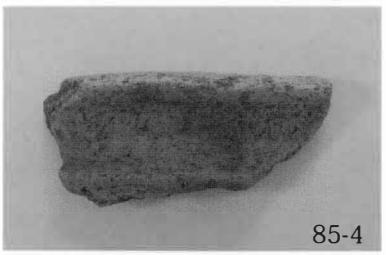

84-6

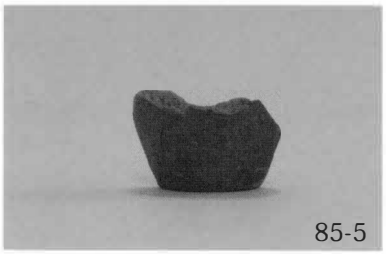

84-7

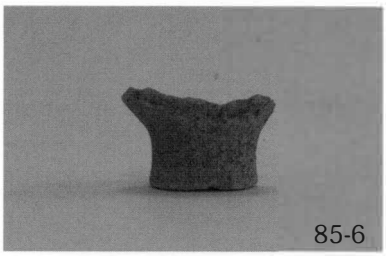

85-1

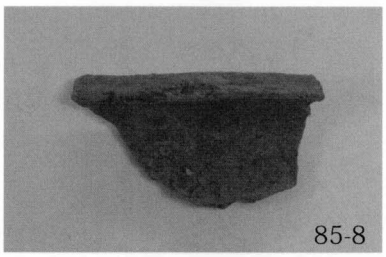

85-2

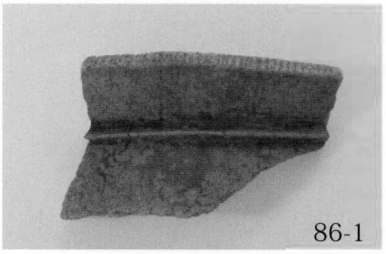

85-3

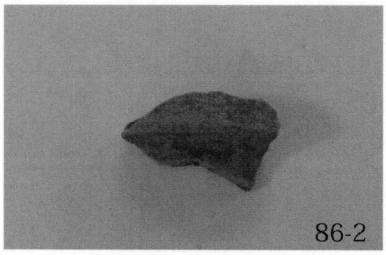

85-4

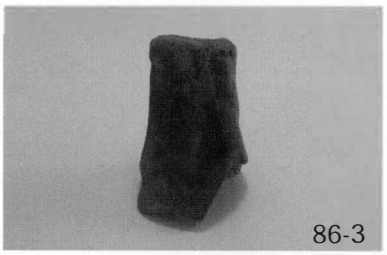

85-5

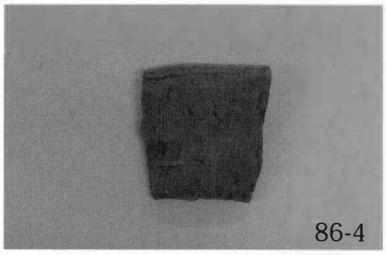

85-6

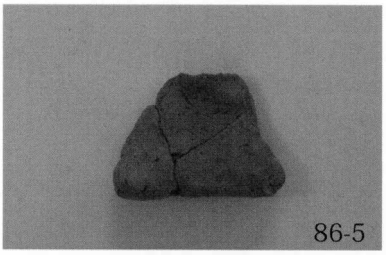

85-8

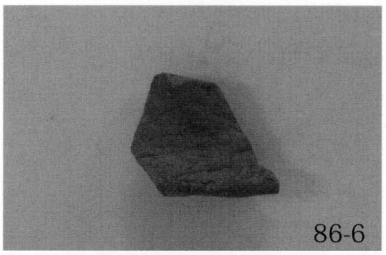

86-1

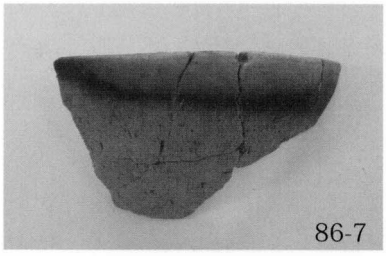

86-2

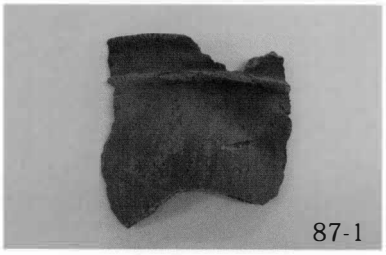

86-3

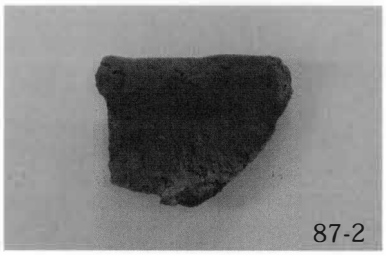

86-4

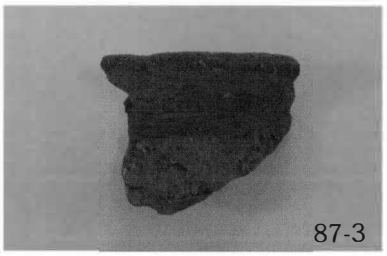

86-5

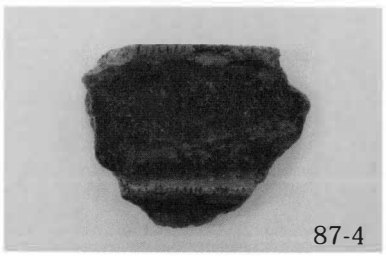

86-6

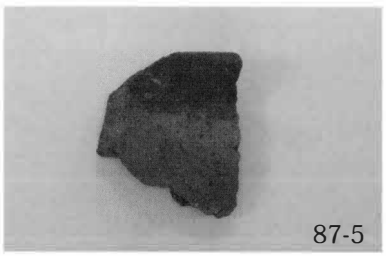

86-7

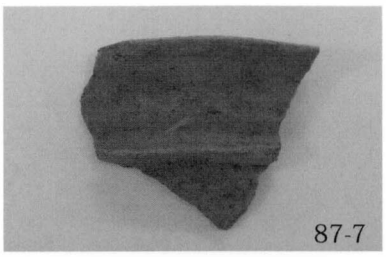

87-1

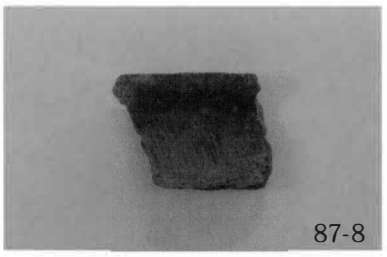

87-2


87-3

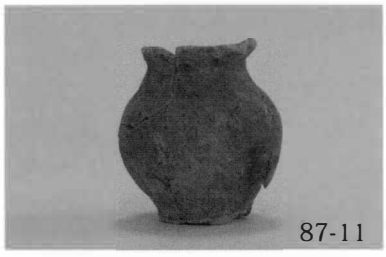

87-4

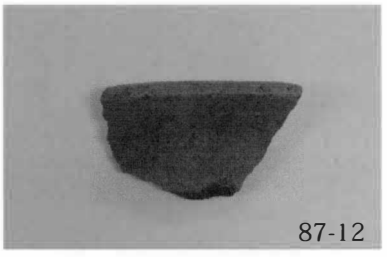

87-5

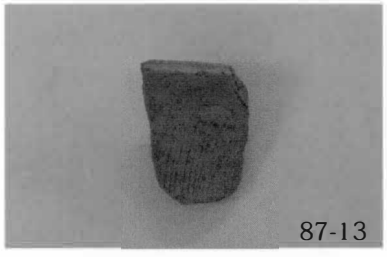

87-7

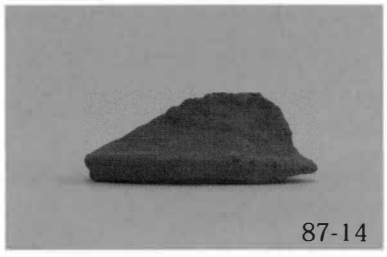

87-8

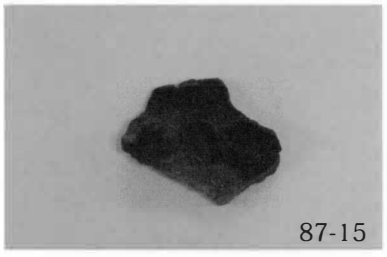
87-9

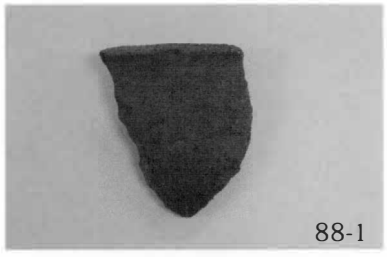

87-11

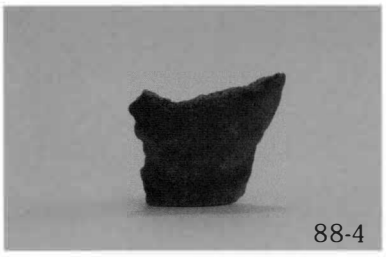

87-12

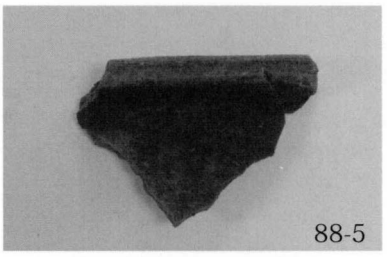

87-13

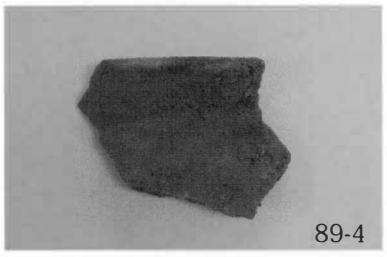

87-14

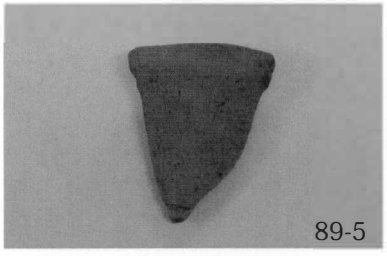

87-15

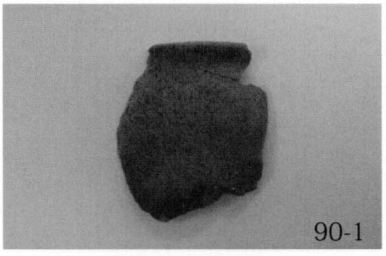

88-1

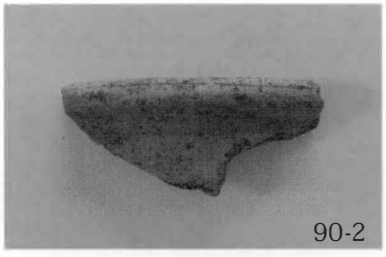

88-4

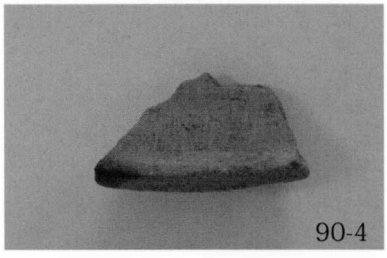

88-5

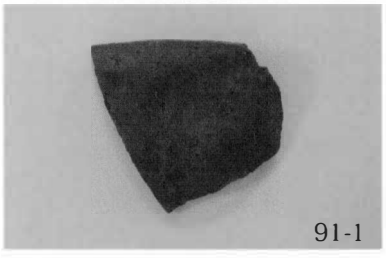

89-4

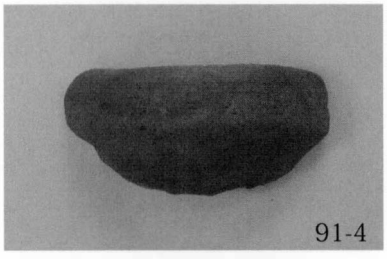

89-5

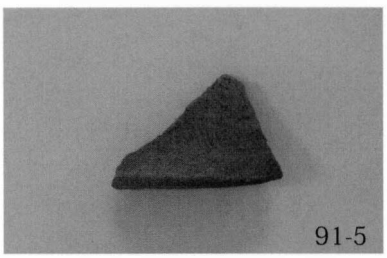

90-1

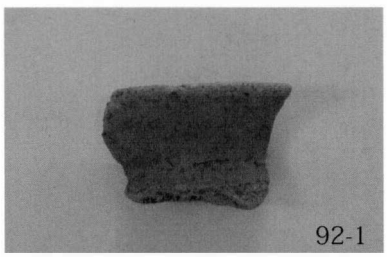

90-2

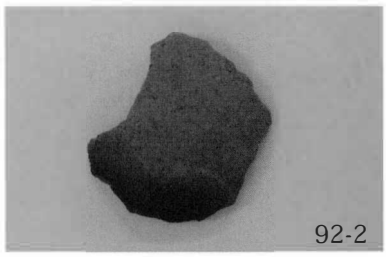

90-4

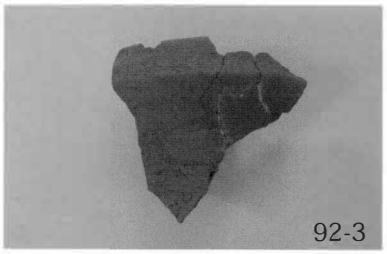

91-1

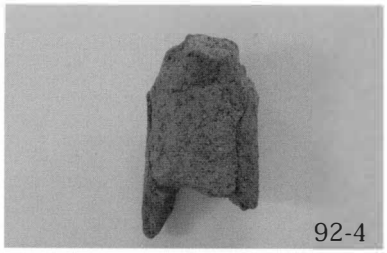

91-4


91-5


92-1

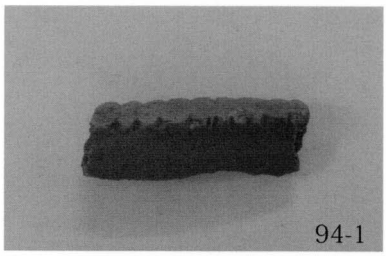

92-2

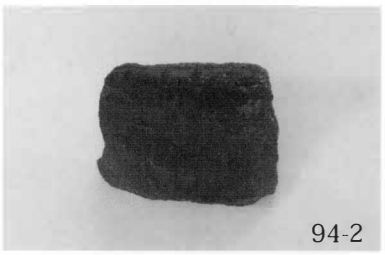

92-3

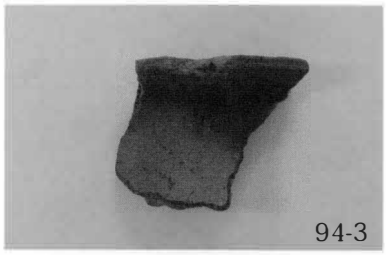

92-4

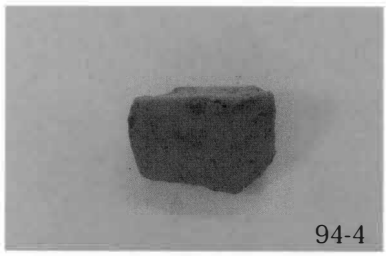
93-1

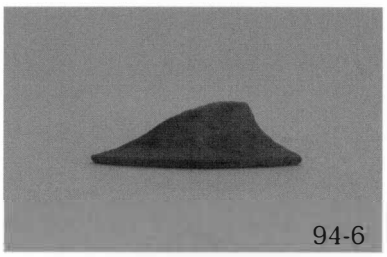
93-2

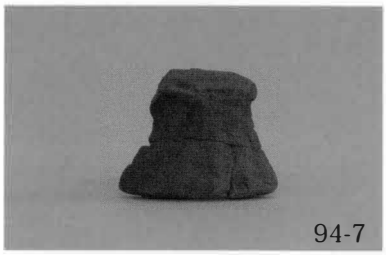

94-1

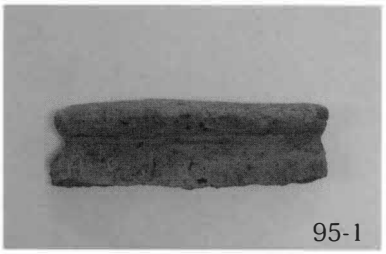

94-2

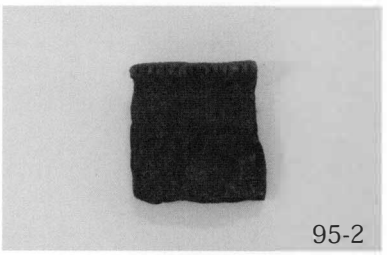

94-3

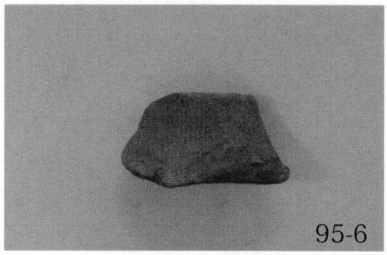

94-4

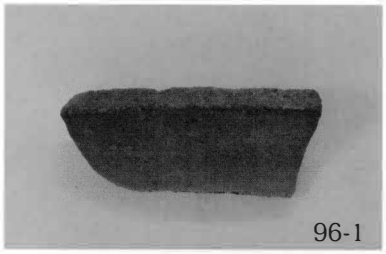

94-6

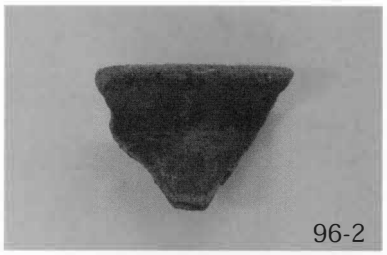

94-7

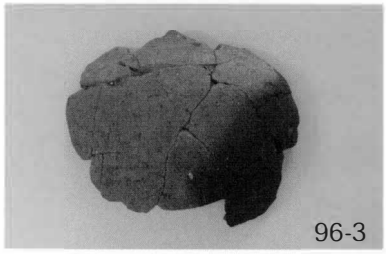

95-1

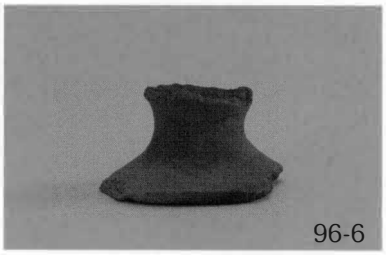

95-2

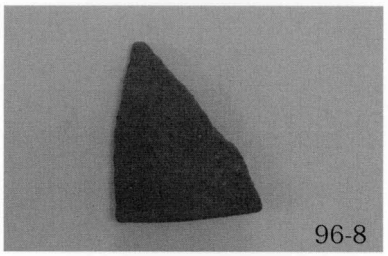

95-6

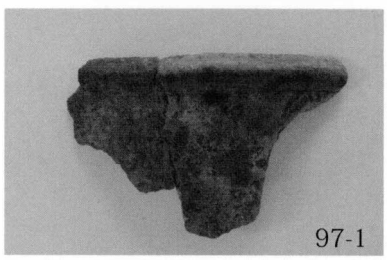

96-1

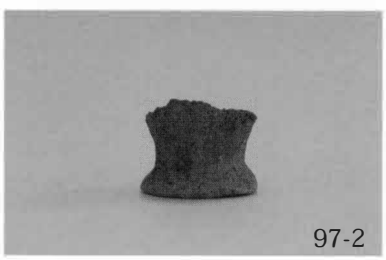

96-2

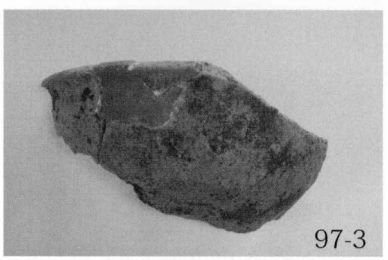

96-3

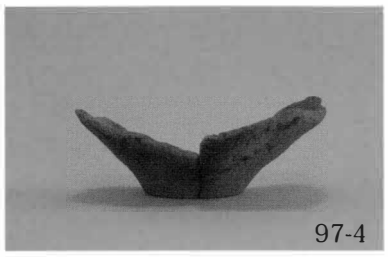

96-6

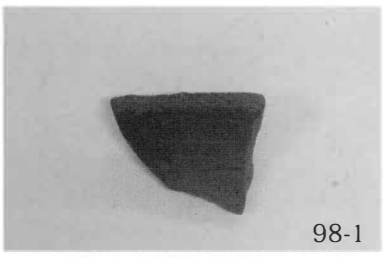

96-8

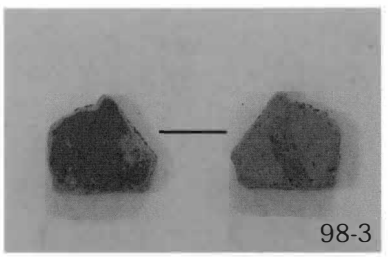

97-1

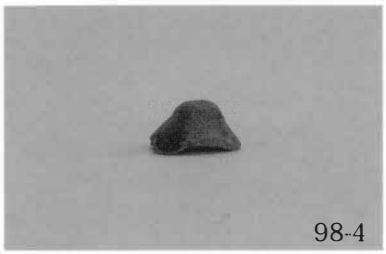

97-2

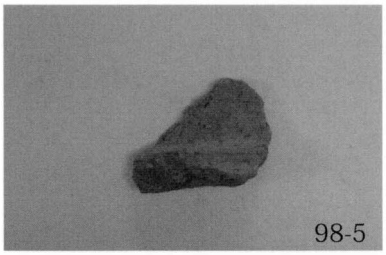

97-3

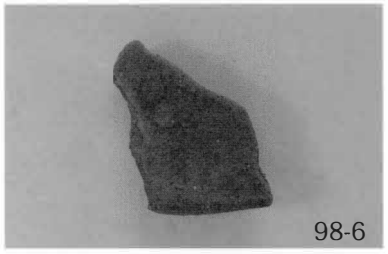

97-4

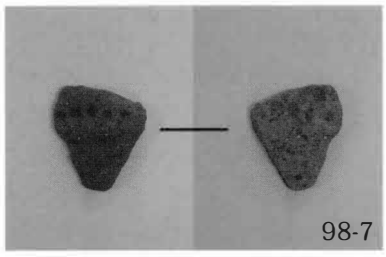

98-1

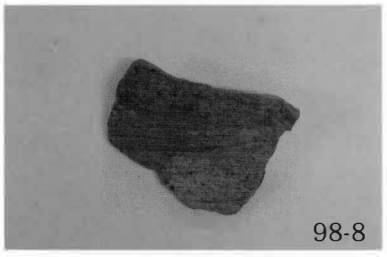

98-3

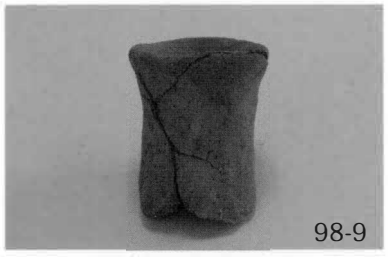

98-4

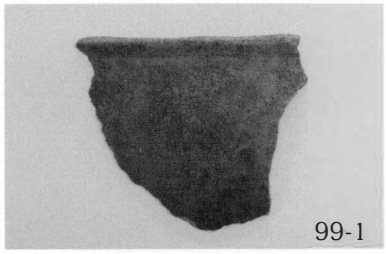

98-5

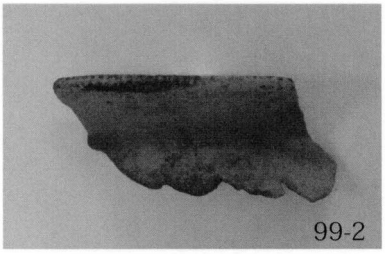

98-6

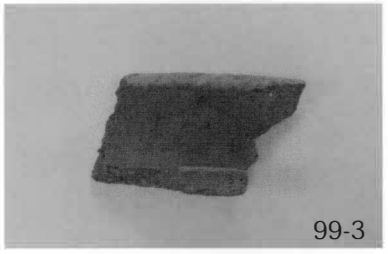

98-7

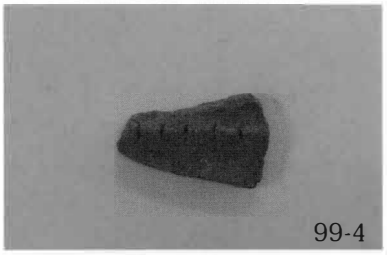

98-8

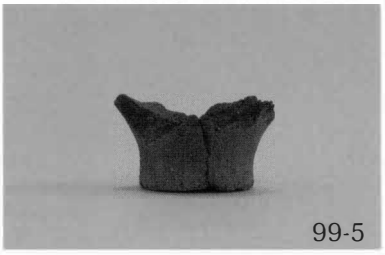

98-9

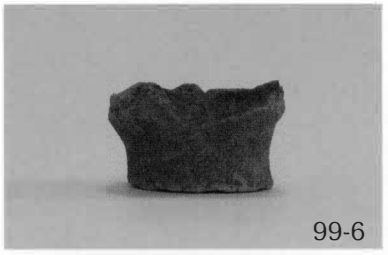

99-1

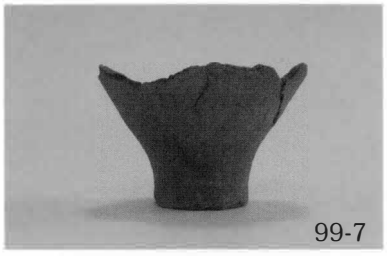

99-2

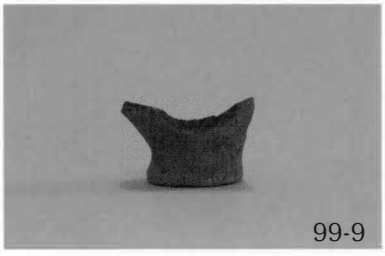

99-3

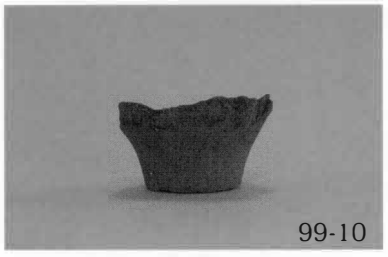

99-4

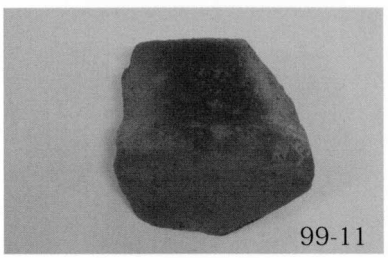

99-5

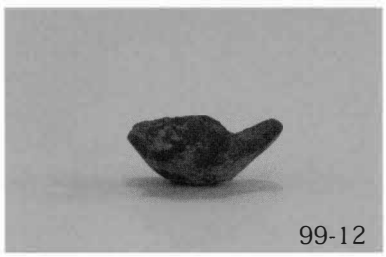

99-6

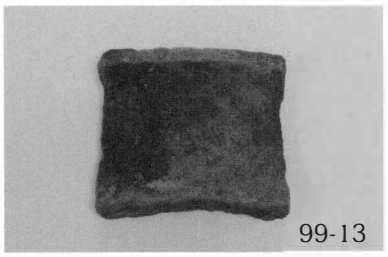

99-7

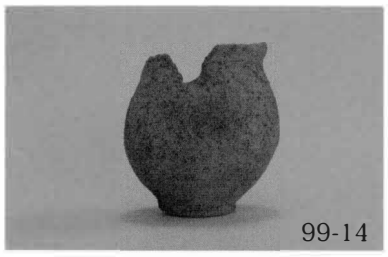

99-9

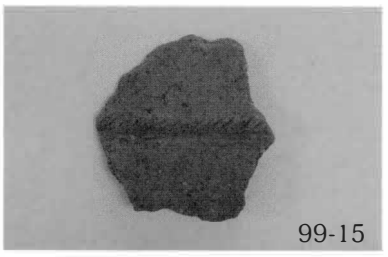

99-10

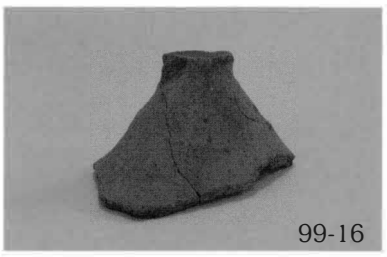

99-11

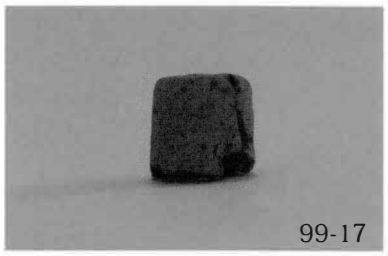

99-12

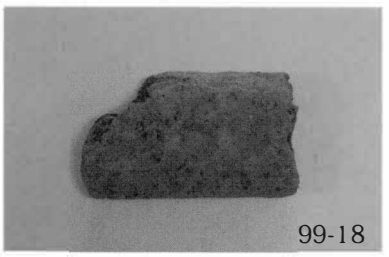

99-13

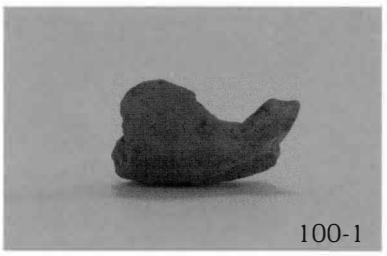

99-14

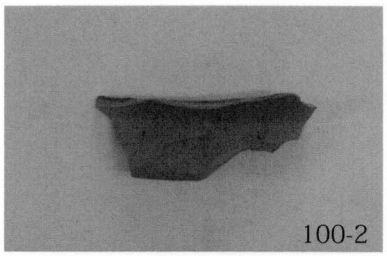

99-15

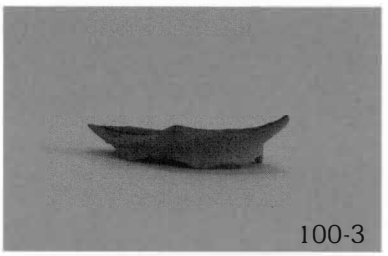

99-16

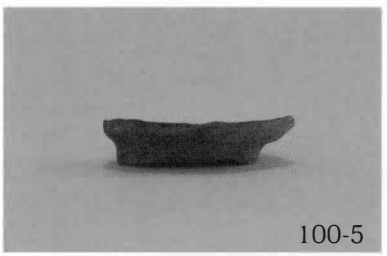

99-17

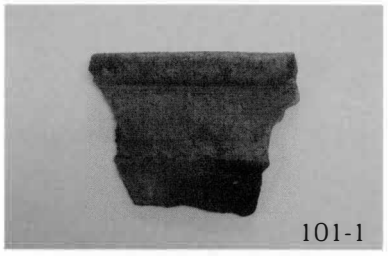

99-18

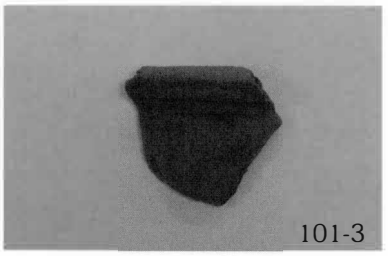

100-1

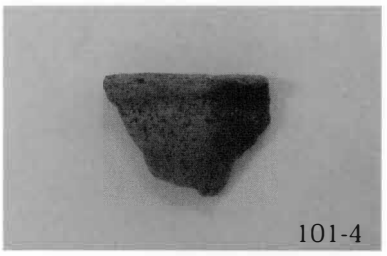

100-2

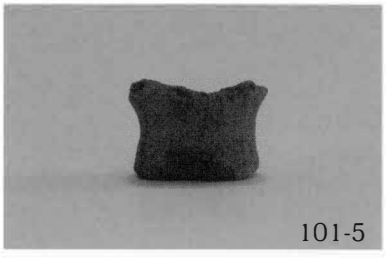

100-3

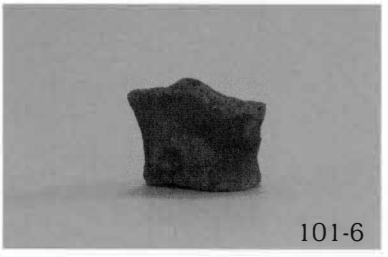

100-5

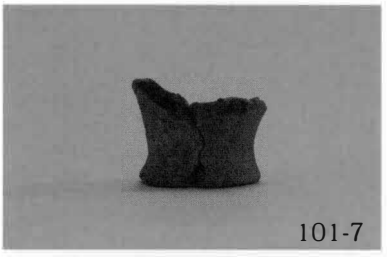

101-1

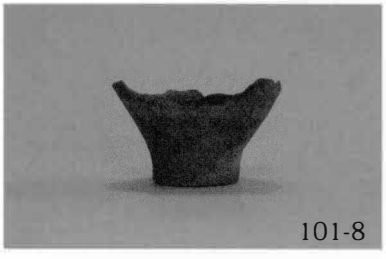

101-3

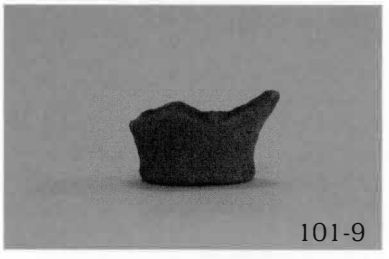

101-4

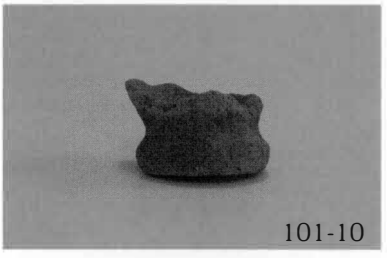

101-5

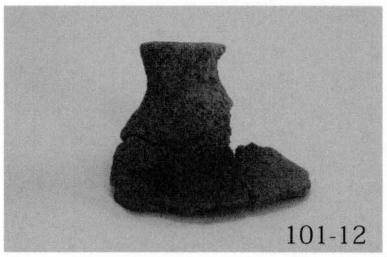

101-6

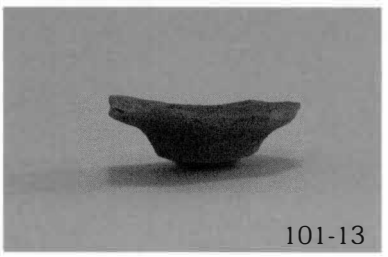

101-7

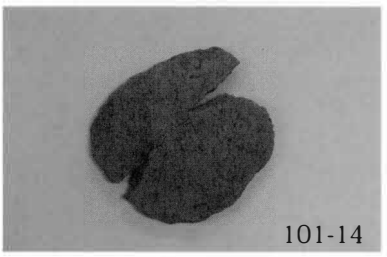

101-8

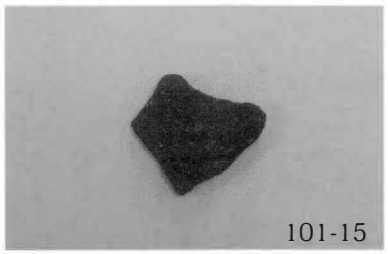

101-9

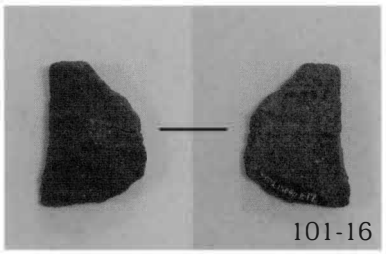

101-10

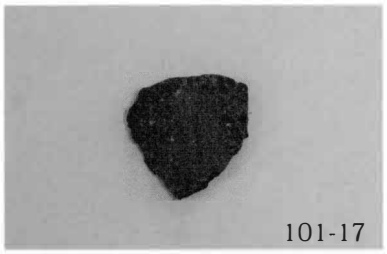

101-12

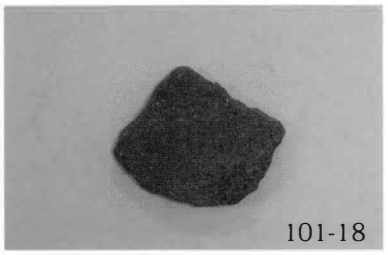

101-13

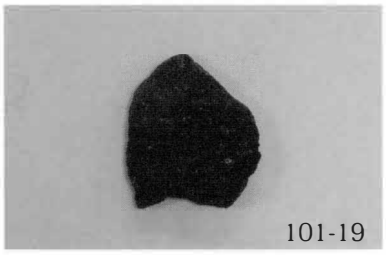

101-14

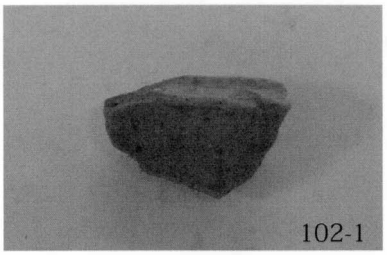

101-15

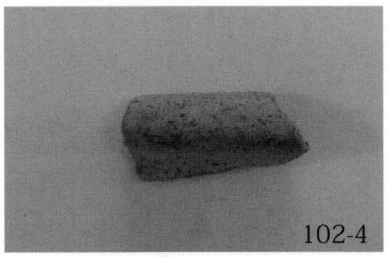

101-16

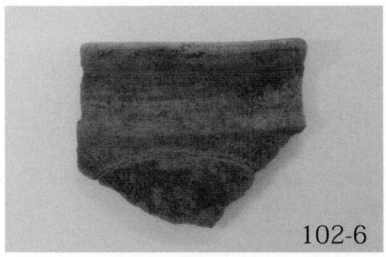

101-17

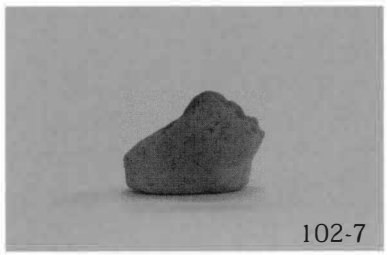

101-18

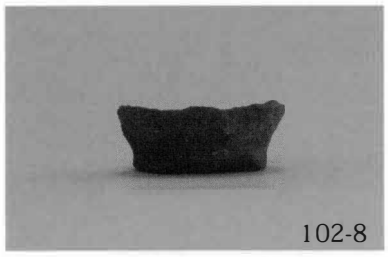

101-19

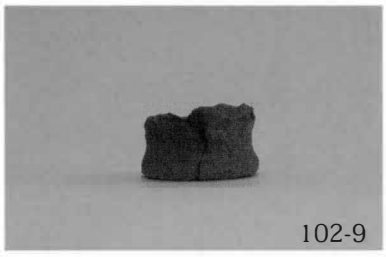

102-1

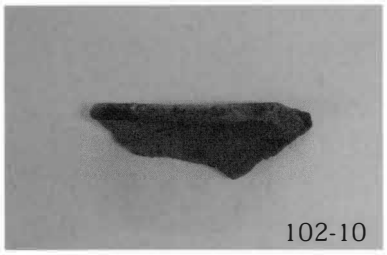

102-4

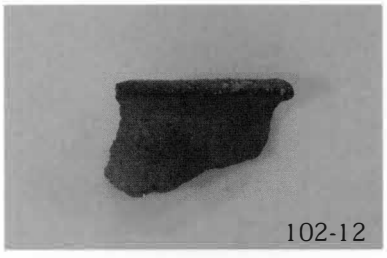

102-6

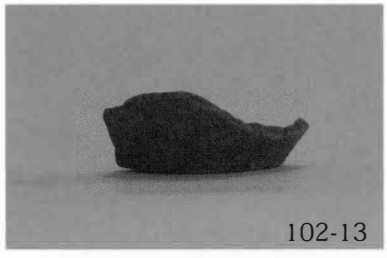

102-7

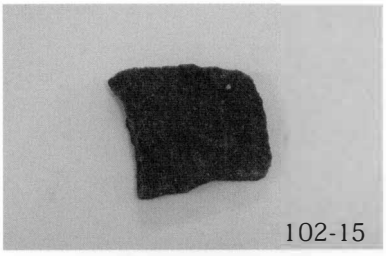

102-8

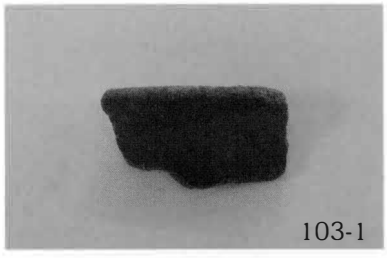

102-9

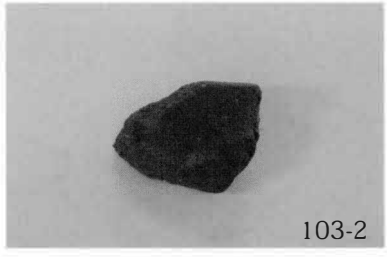

102-10

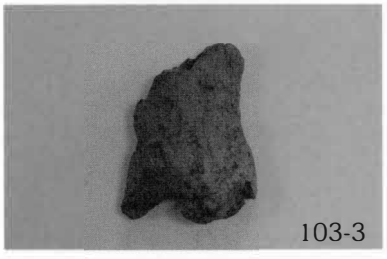

102-12

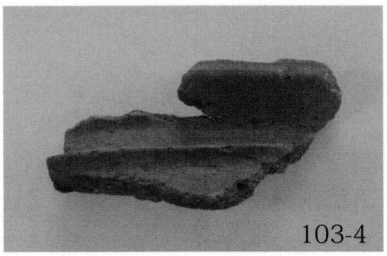

102-13

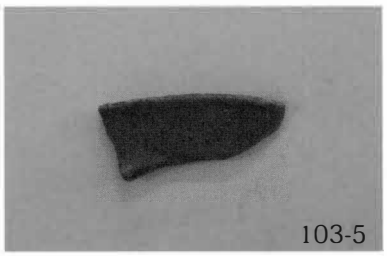

102-15

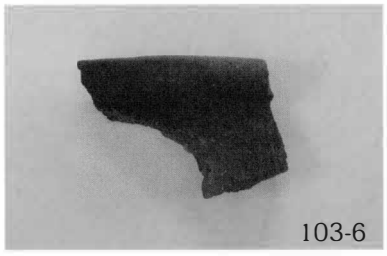

103-1

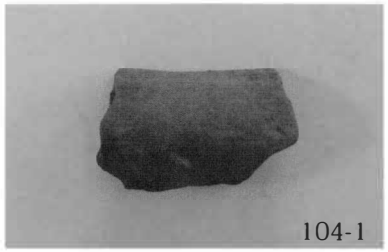

103-2

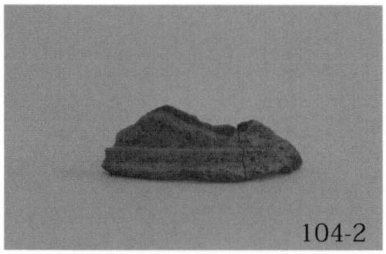

103-3

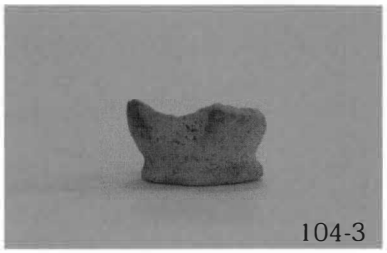

103-4

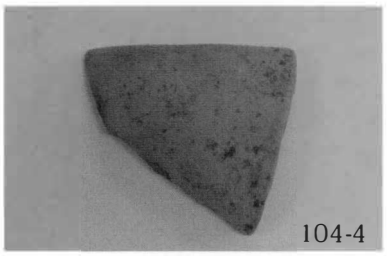

103-5

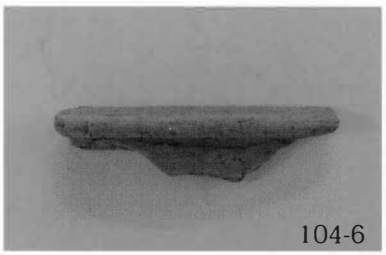

103-6

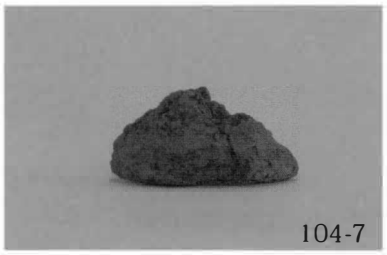

104-1

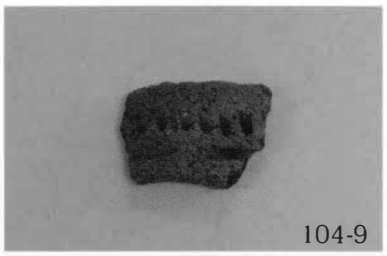

104-2

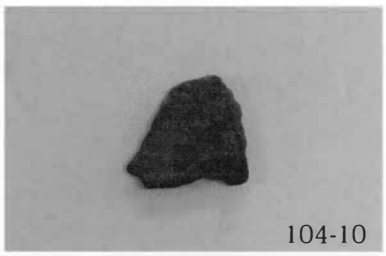

104-3

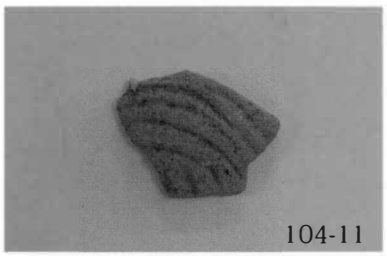

104-4

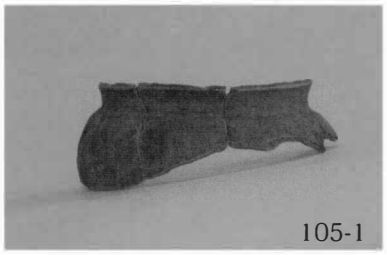

104-6

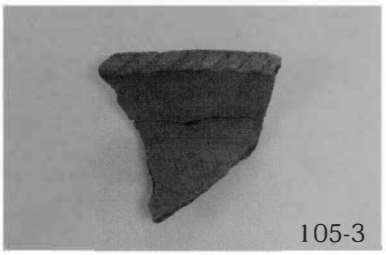

104-7

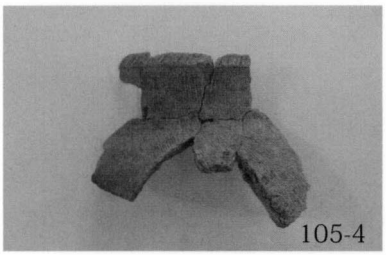

104-9

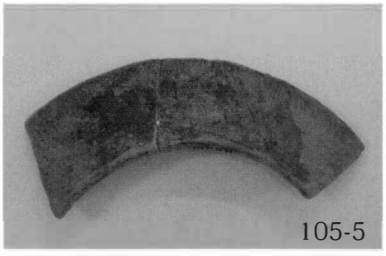

104-10

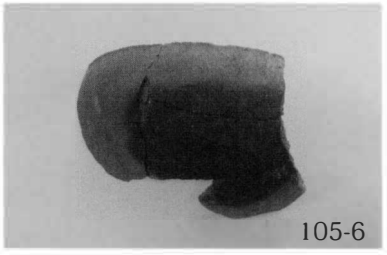

104-11

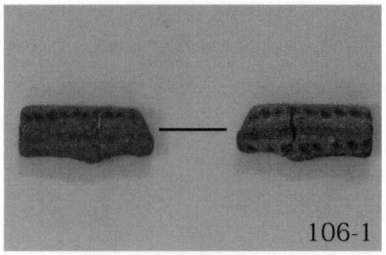

105-1

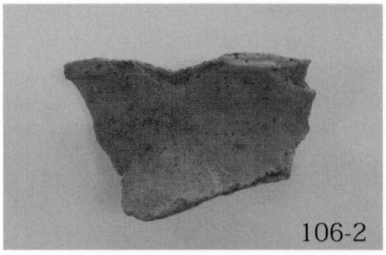

105-3

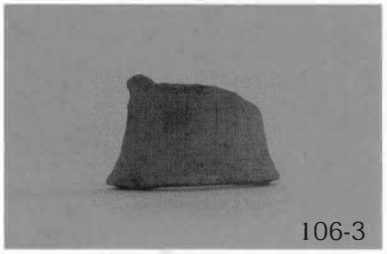

105-4

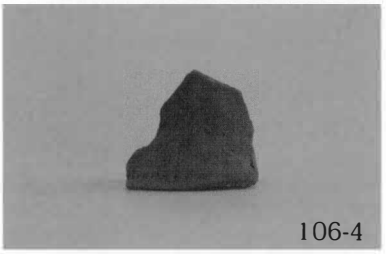

105-5

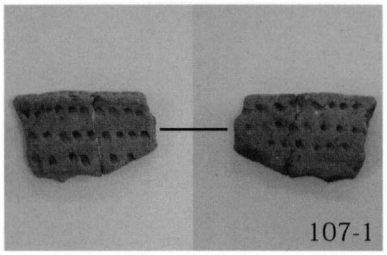

105-6

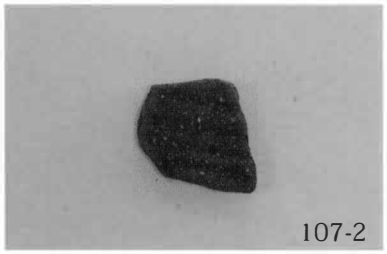

106-1

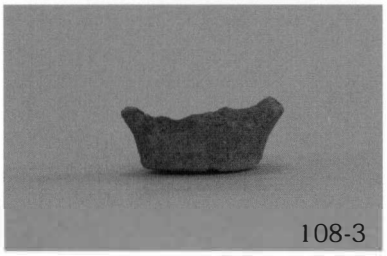

106-2

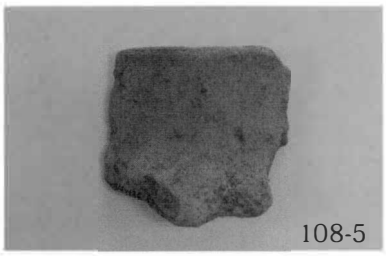

106-3

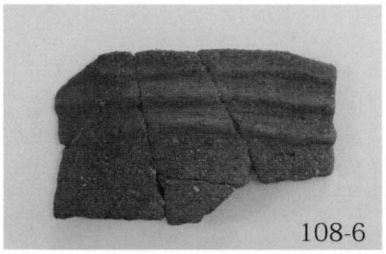

106-4

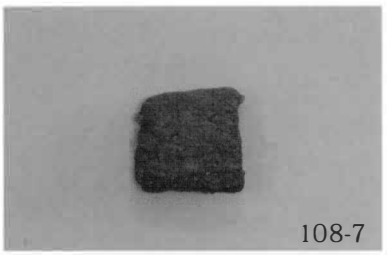

107-1

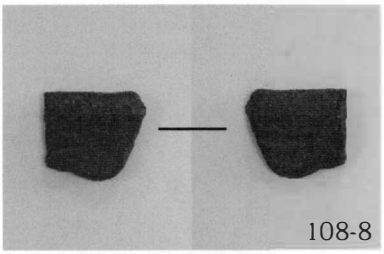

107-2

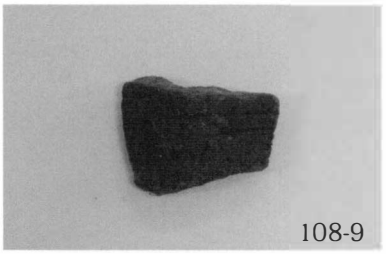

108-3

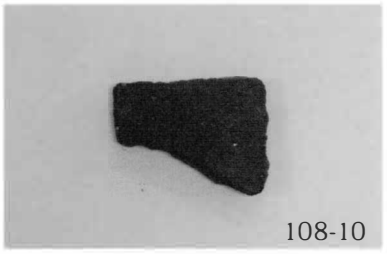

108-5

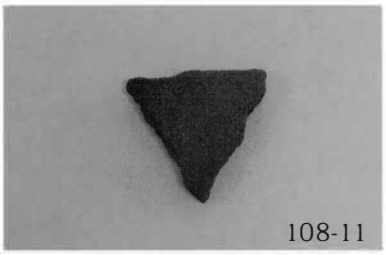

108-6

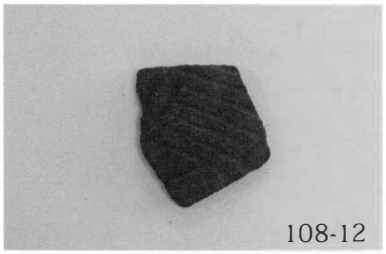

108-7

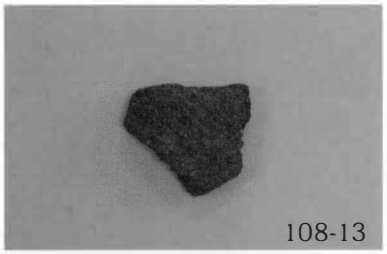

108-8

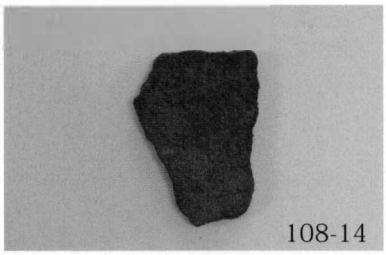

108-9

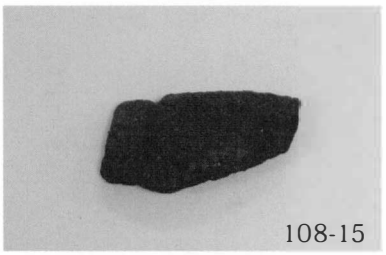

108-10

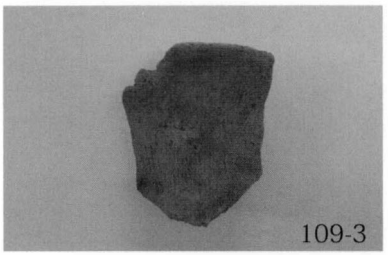

108-11

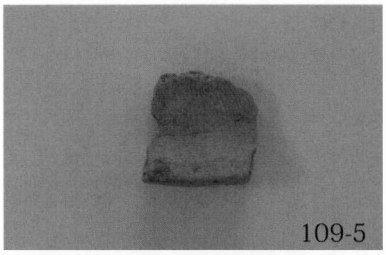

108-12

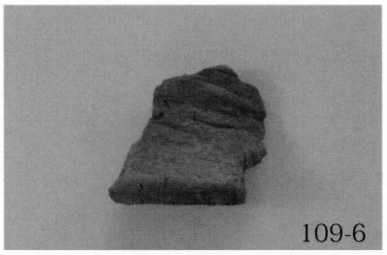

108-13

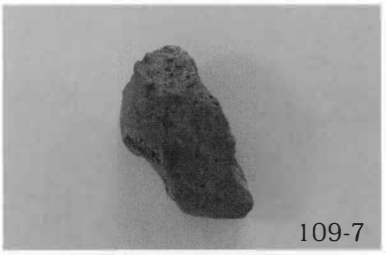

108-14

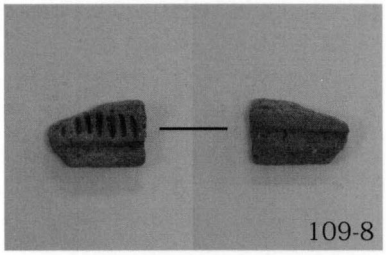

108-15

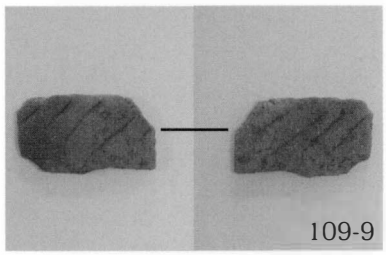

109-3

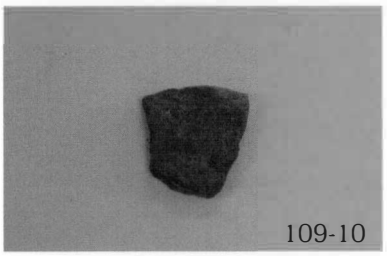

109-5

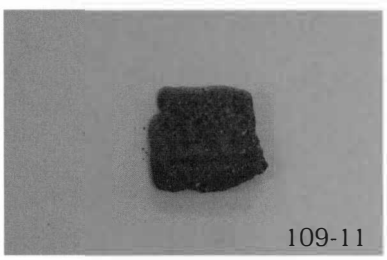

109-6

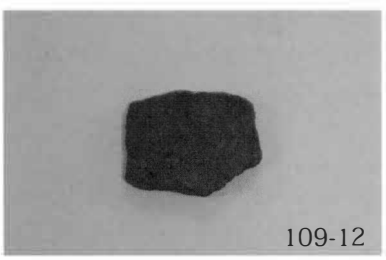

109-7

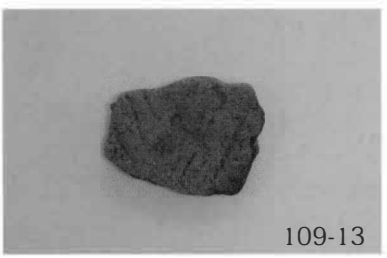

109-8

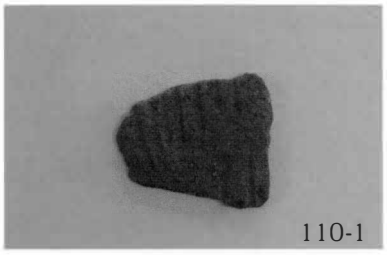

109-9

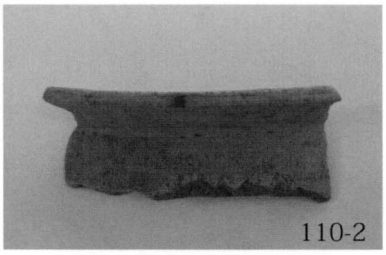

109-10

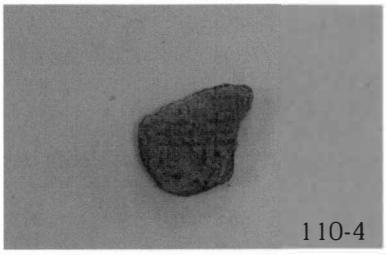

109-11

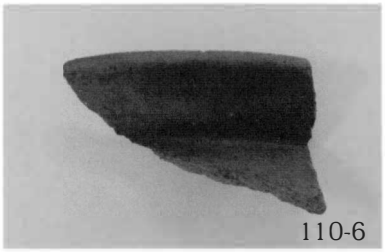

109-12

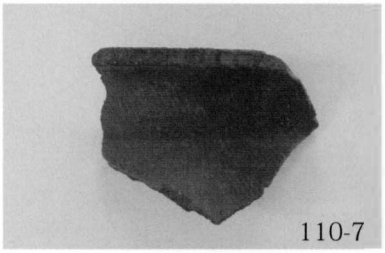

109-13

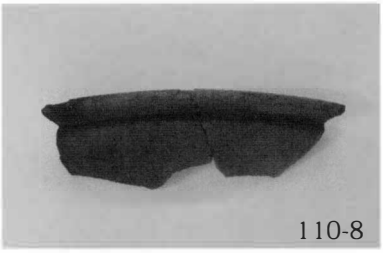

110-1

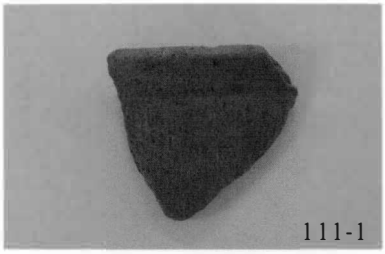

110-2

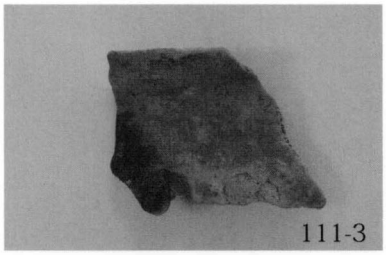

110-4

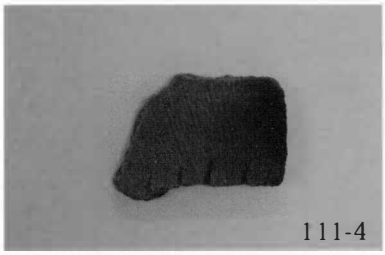

110-6

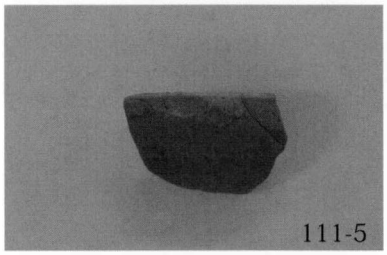

110-7

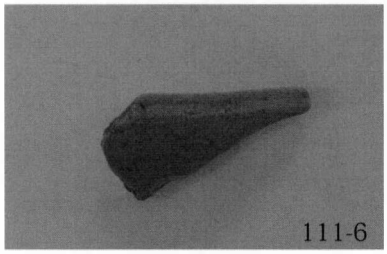

110-8

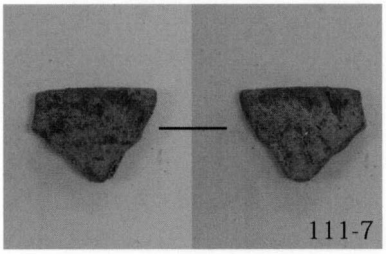

111-1

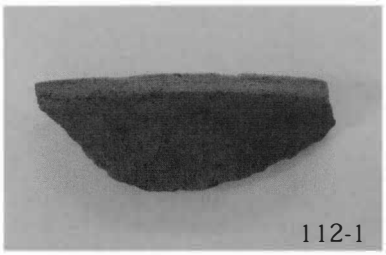

111-3

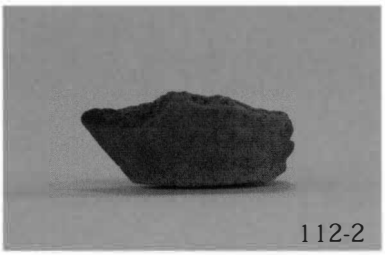

111-4

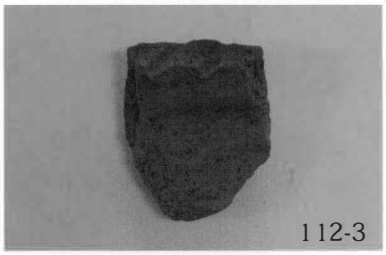

111-5

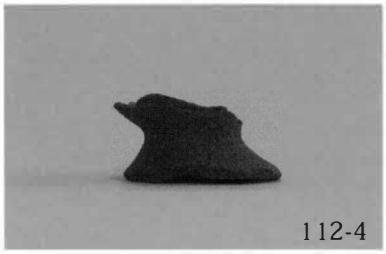

111-6

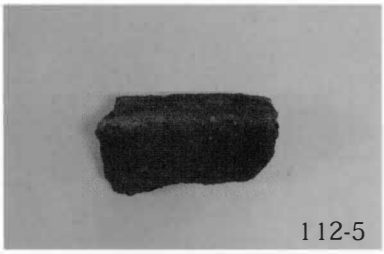

111-7

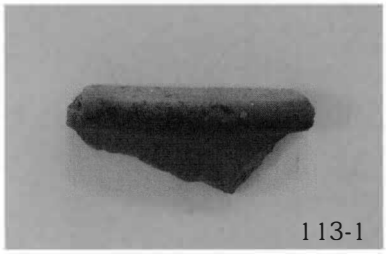

112-1

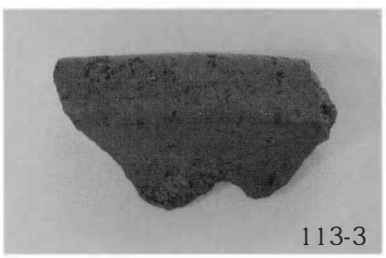

112-2

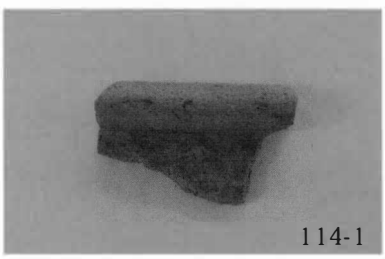

112-3

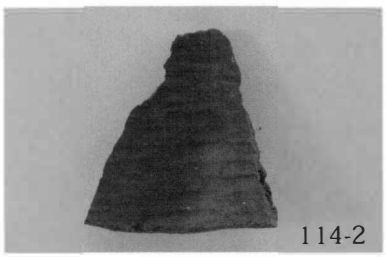

112-4

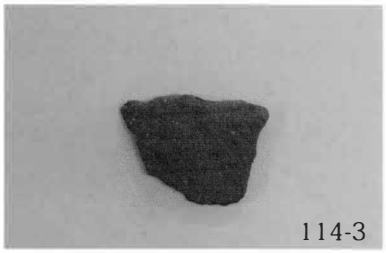

112-5

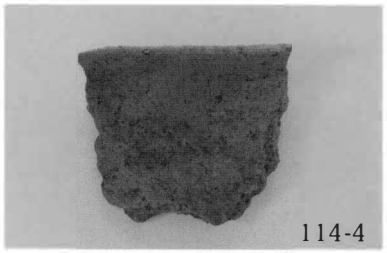

113-1

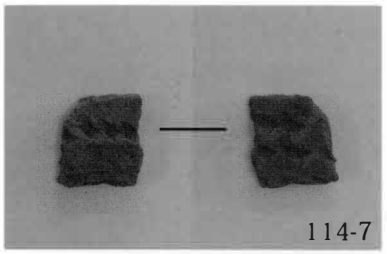

113-3

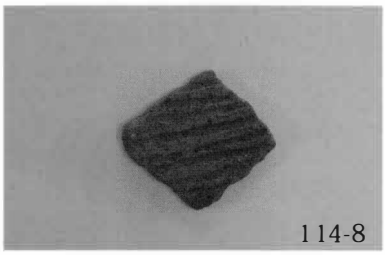

114-1

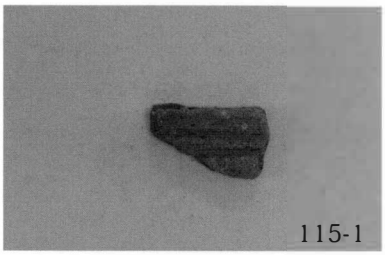

114-2

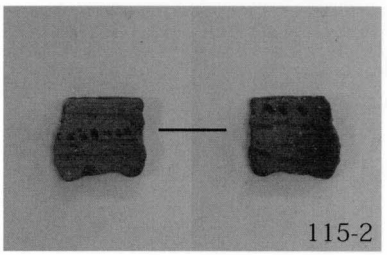

114-3

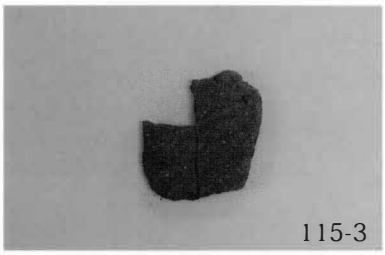

114-4

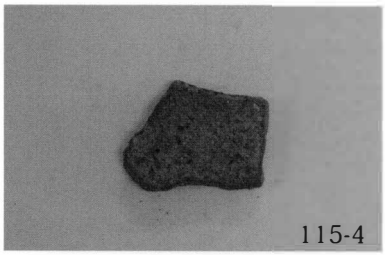

114-7

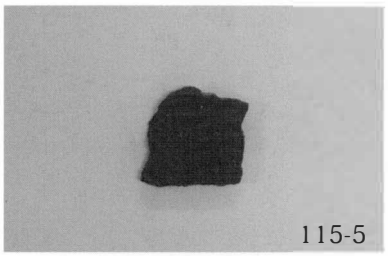

114-8

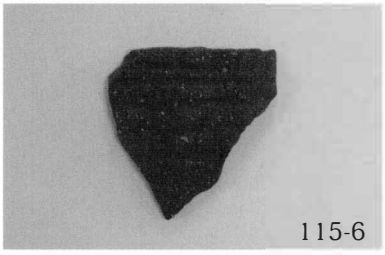

115-1

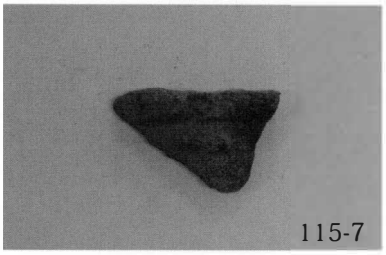

115-2

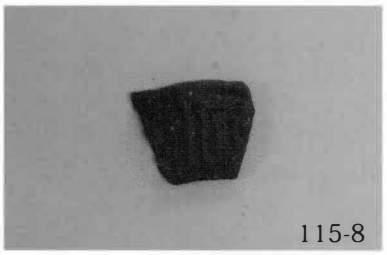

115-3

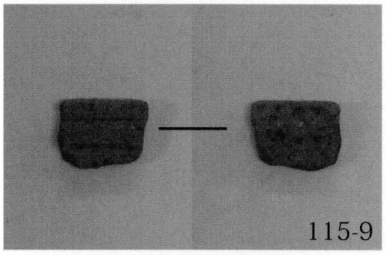

115-4

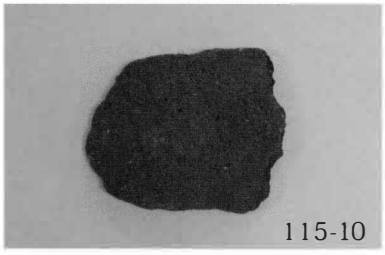

115-5

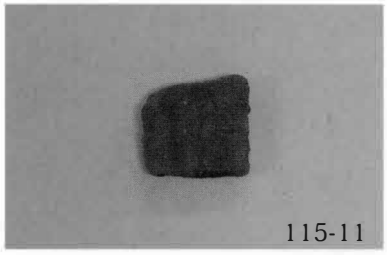

115-6

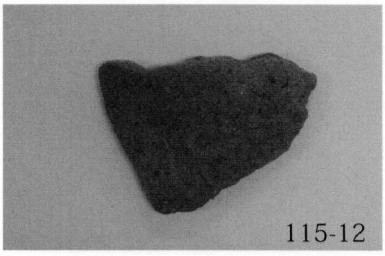

115-7

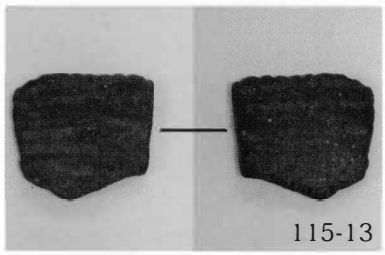

115-8

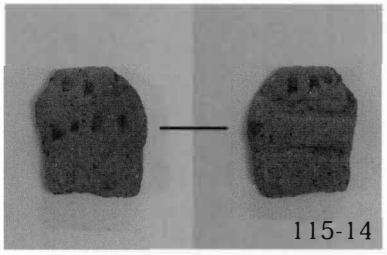

115-9

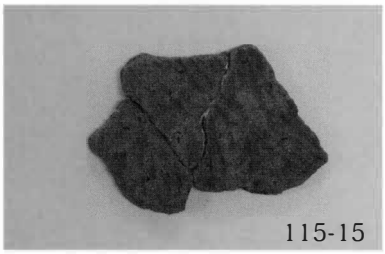

115-10

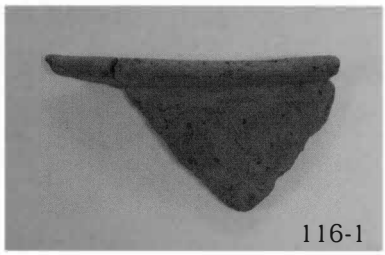

115-11

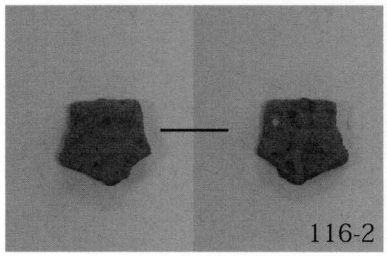

115-12

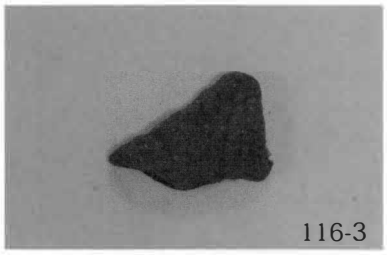

115-13

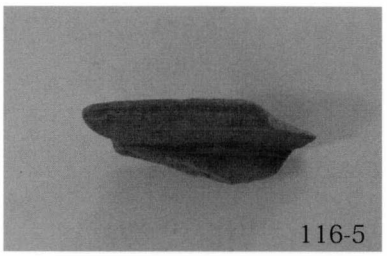

115-14

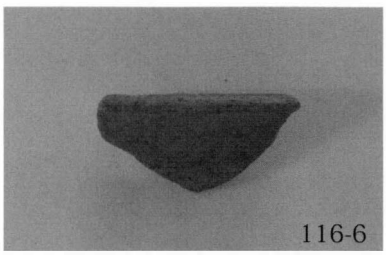

115-15

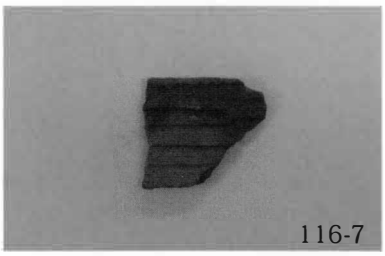

116-1

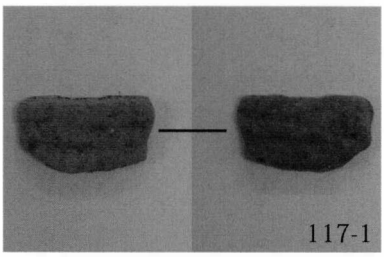

116-2

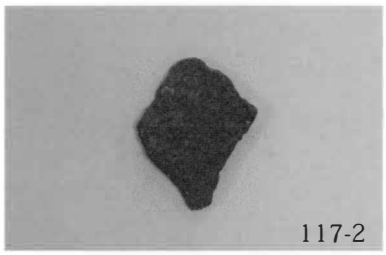

116-3

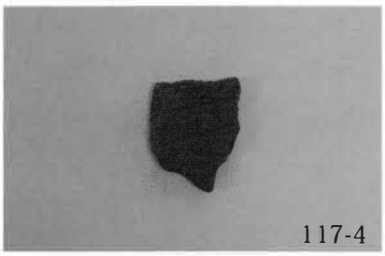

116-5

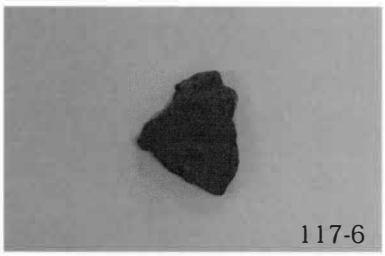

116-6

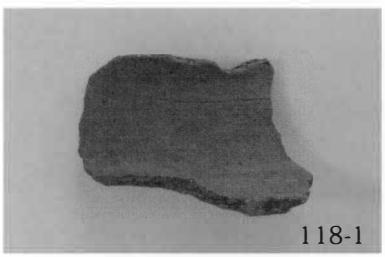

116-7

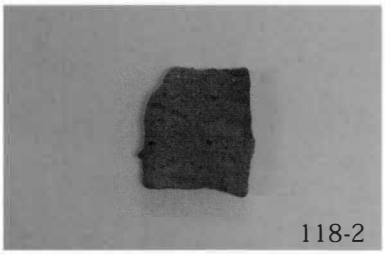

117-1

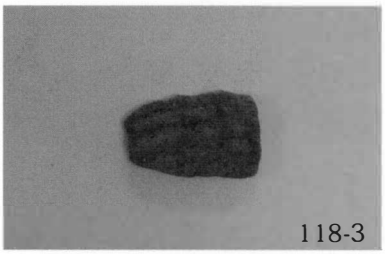

117-2

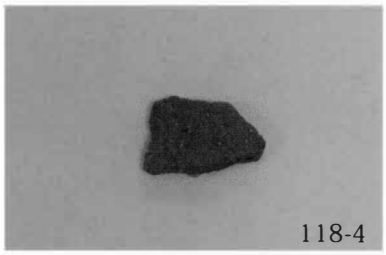

117-4

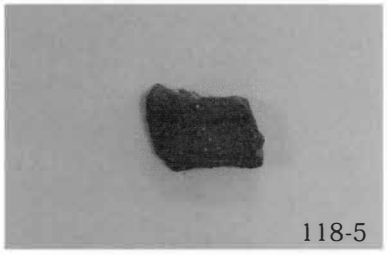

117-6

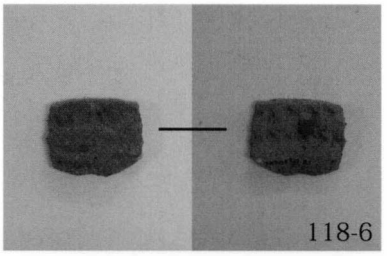

118-1

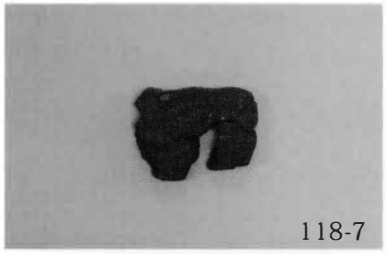

118-2

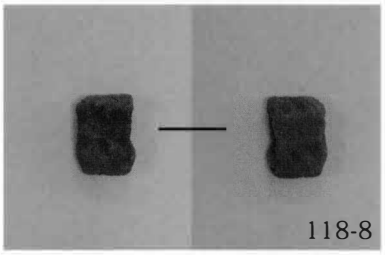

118-3

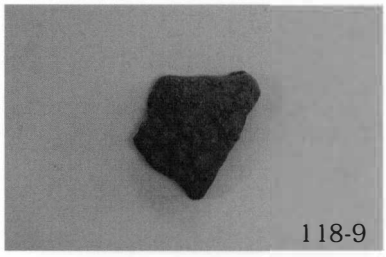

118-4

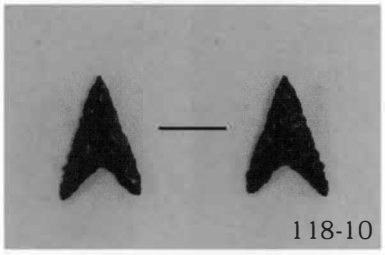

118-5

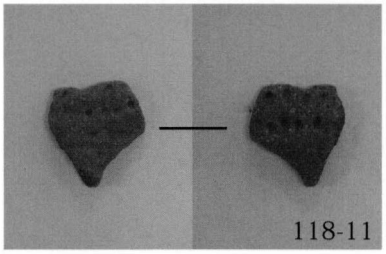

118-6

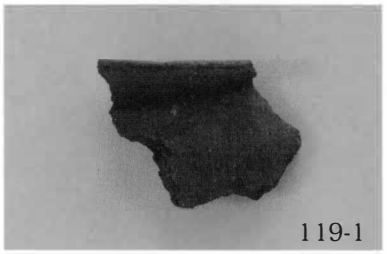

118-7

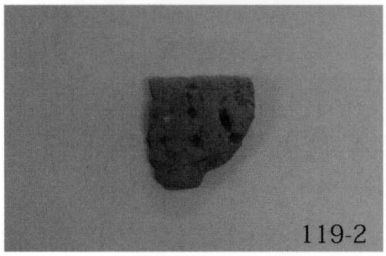

118-8

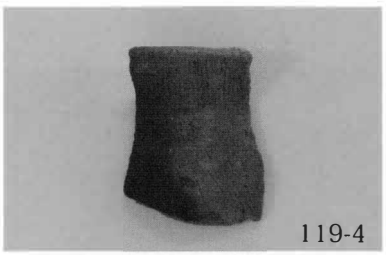

118-9

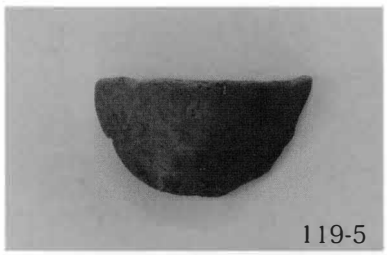

118-10

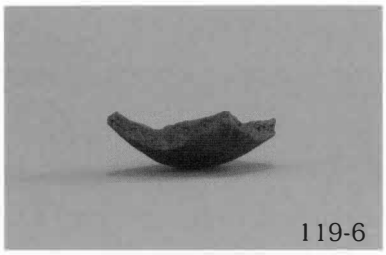

118-11

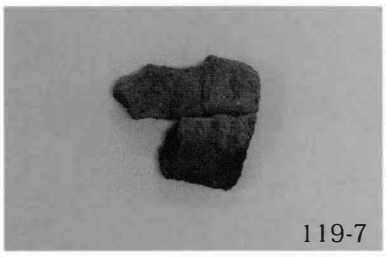

119-1

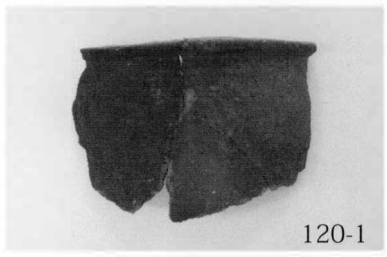

119-2

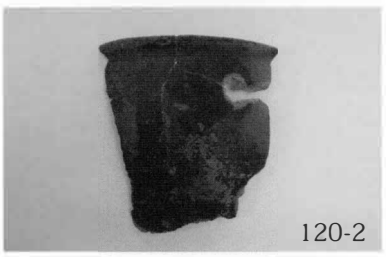

119-4

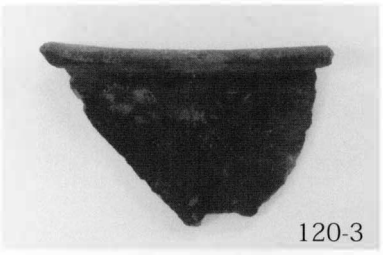

119-5

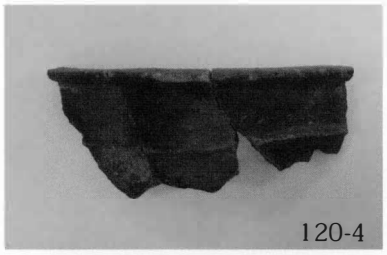

119-6


119-7

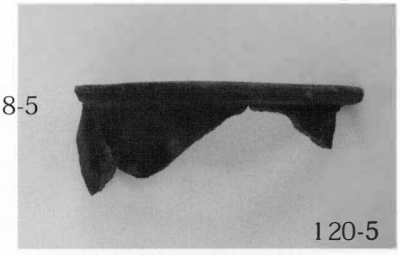

120-1

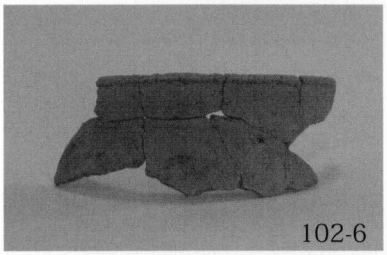

120-2

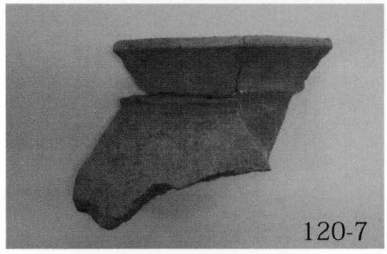

120-3

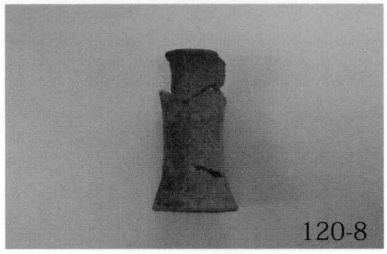

120-4

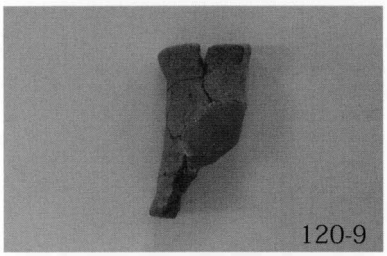
118-5

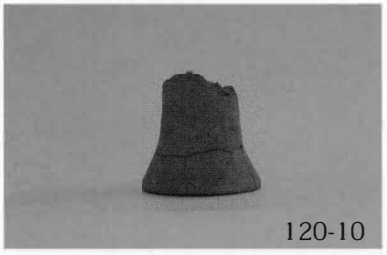

120-5

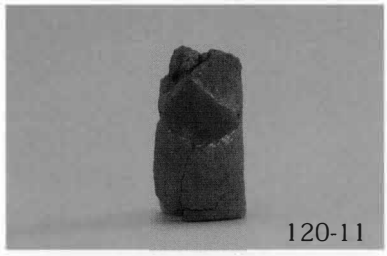

102-6

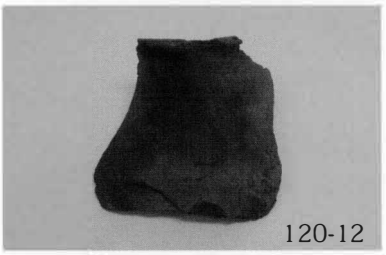

120-7

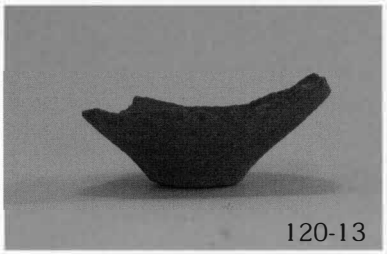

120-8

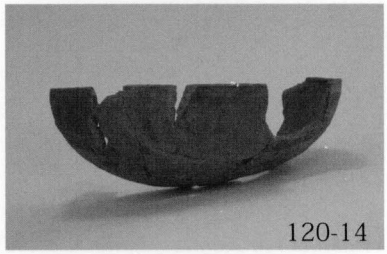

120-9

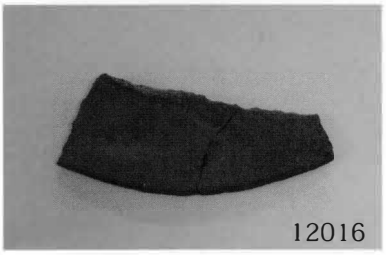

120-10

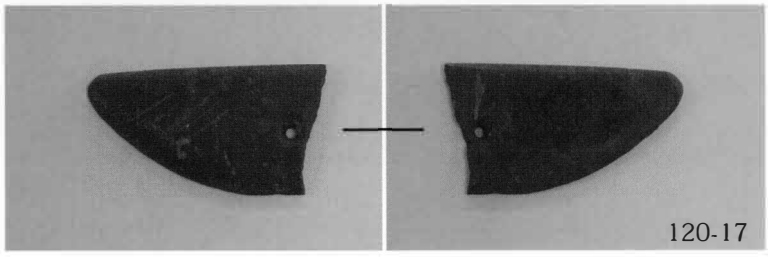

120-11


120-12


120-13

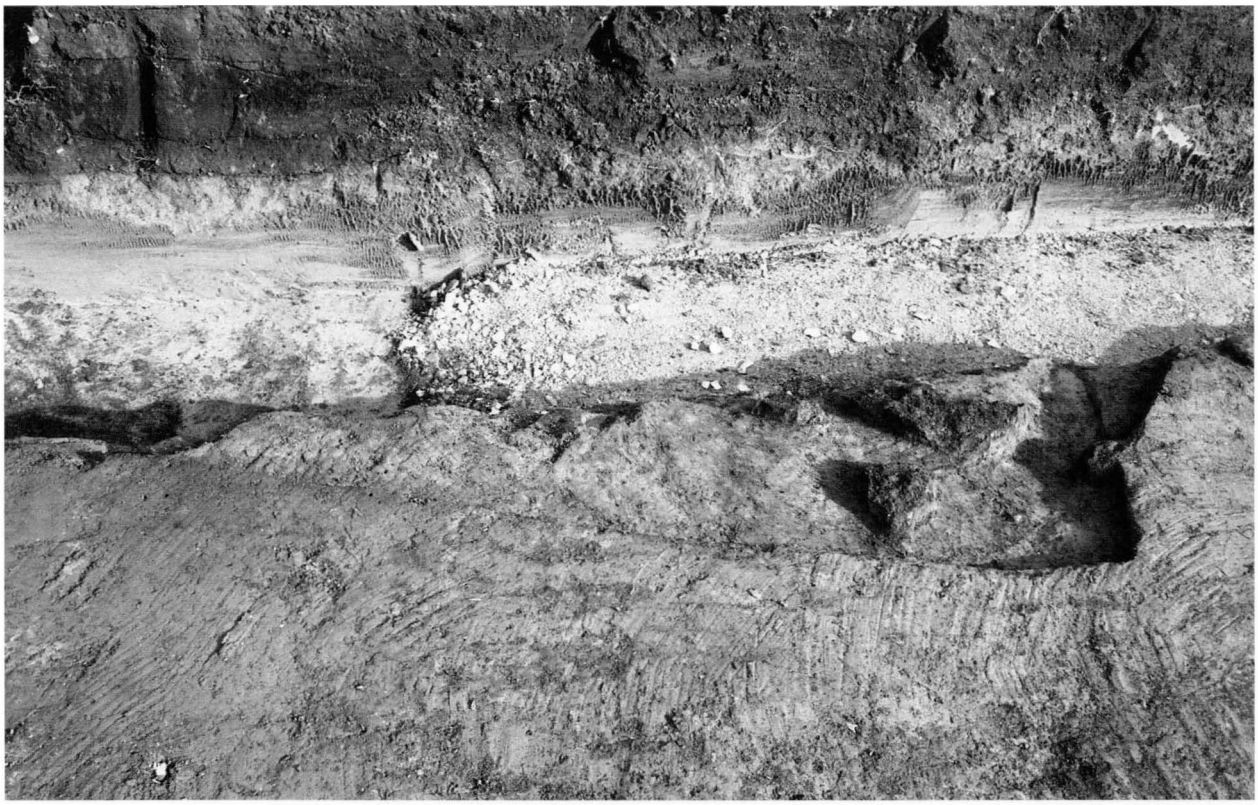

120-14


12016


120-17

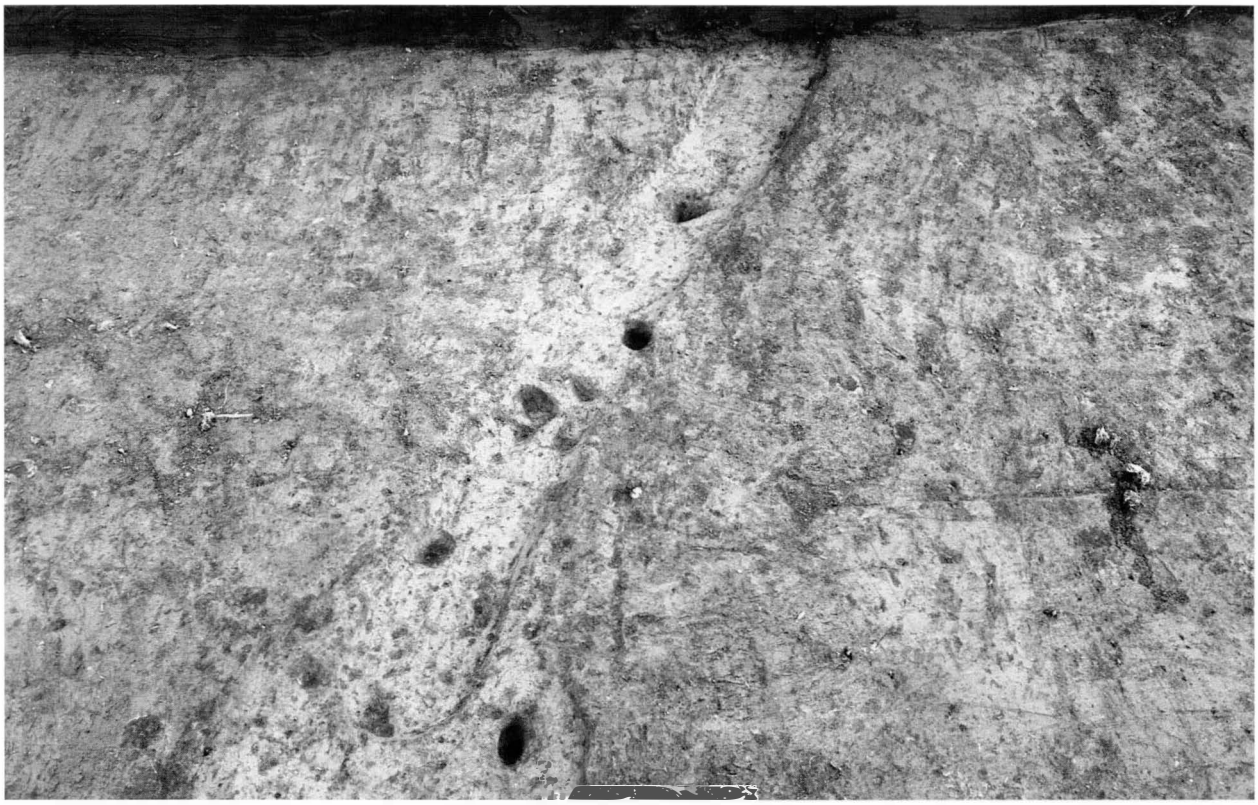
調査区全景（北から）

調査区全景（南から）



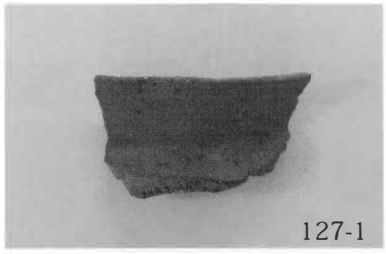
1SI01 床面検出状況（西から）

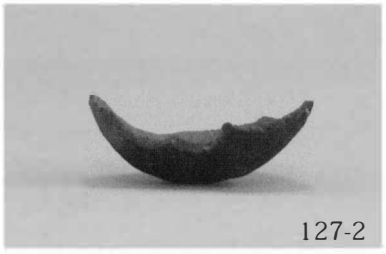
1SI01 完掘（西から）

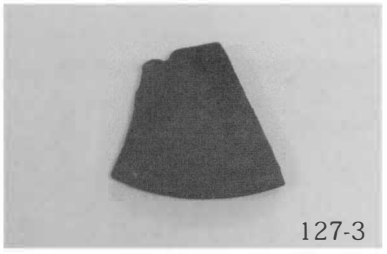


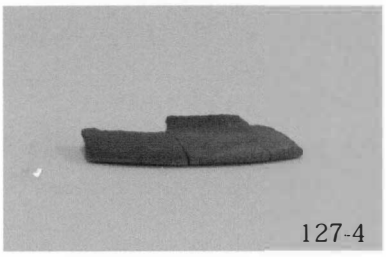
1SD05 完掘（西から）

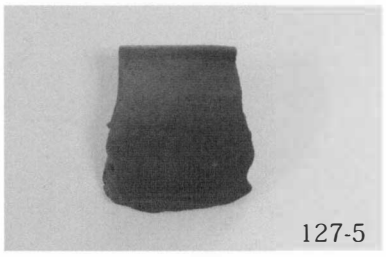
作業風景


127-1


127-2


127-3


127-4


127-5

調査区全景（東から）

1SD01 完掘（南から）

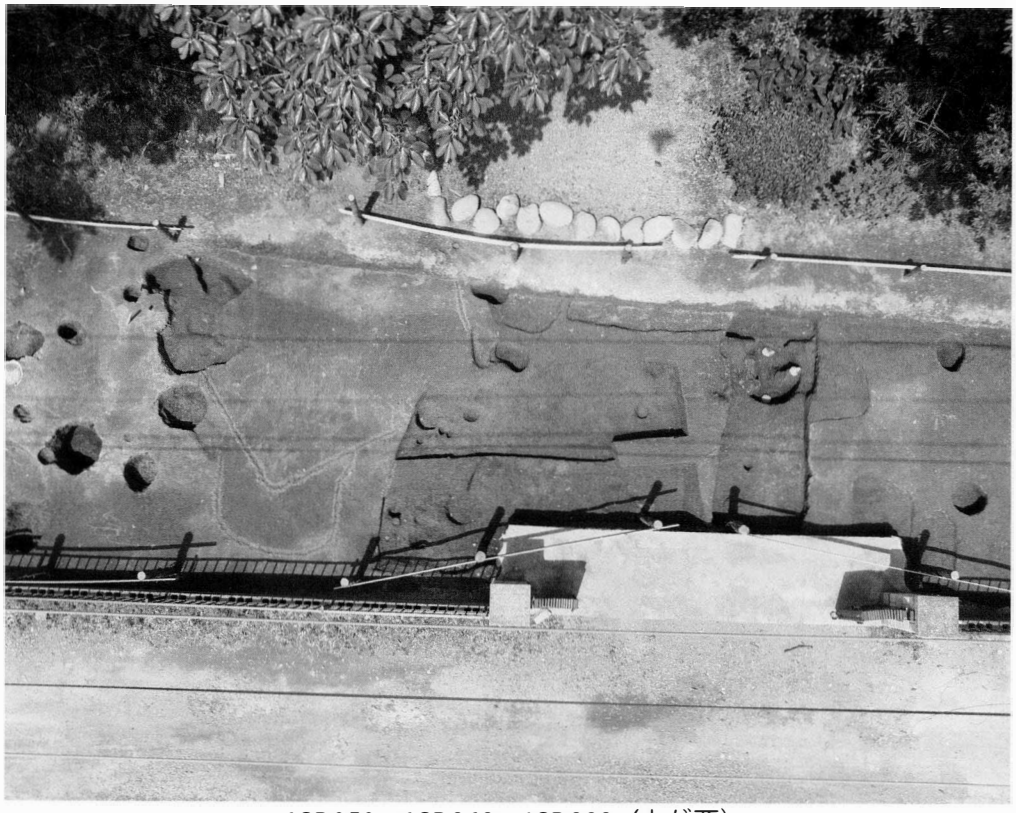
調査区全景（上が西）

調査区北半部（上が西）

調査区南半部（上が西）

1SB010・1SB015・1SB020・1SB025・1SB030・1SB035（上が西）

1SD065・1SD070・1SD080（上が西）



1SD050・1SD060・1SD080（上が西）

1SD0050 遺物出土状況（北から）

1SD050 完掘（東から）

1SD0065 完掘（東から）

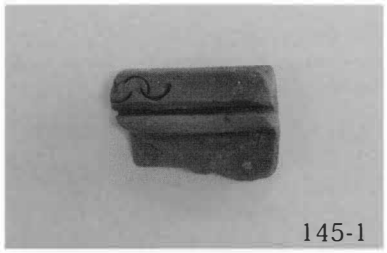
1SD070 完掘（東から）

1SD0080 土層断面（東から）

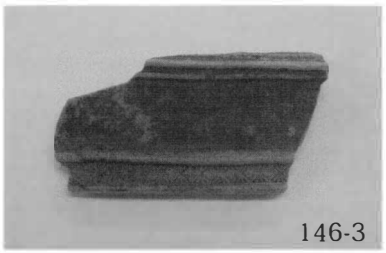
1SD080 完掘（東から）

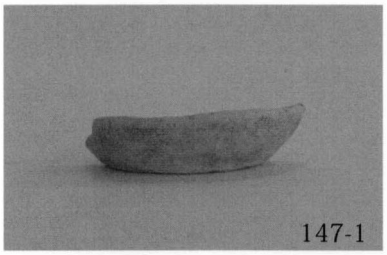
1SX0060 完掘（西から）

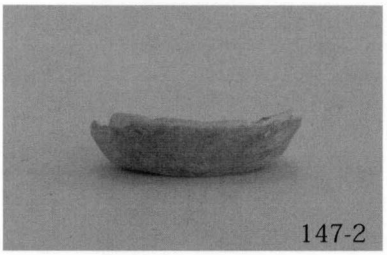
作業風景

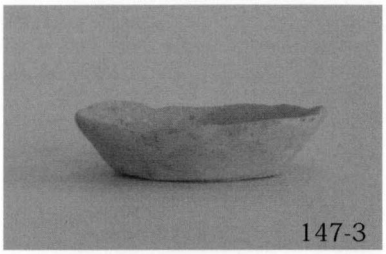

145-1

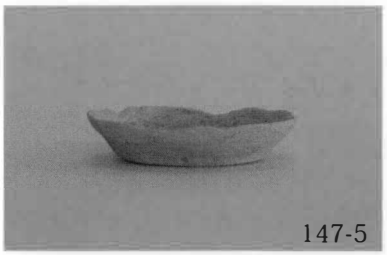
146-2

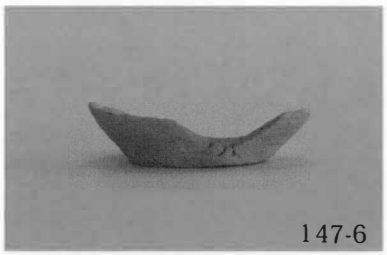

146-3

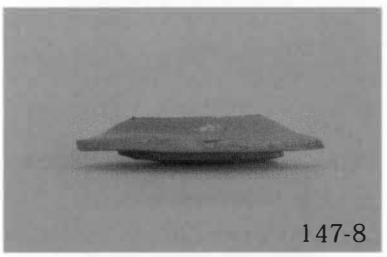

147-1

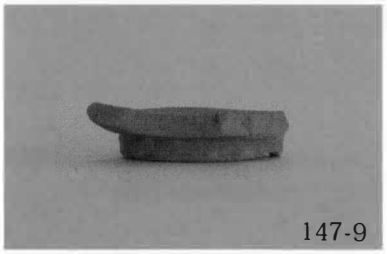

147-2

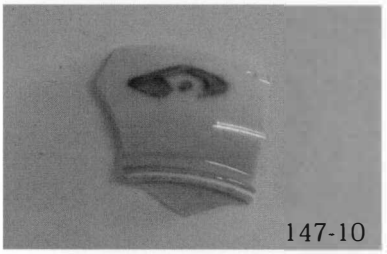

147-3

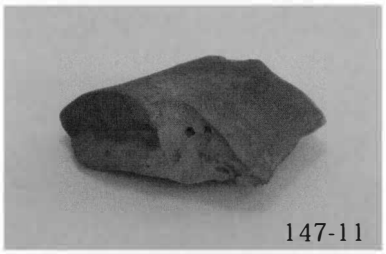

147-5

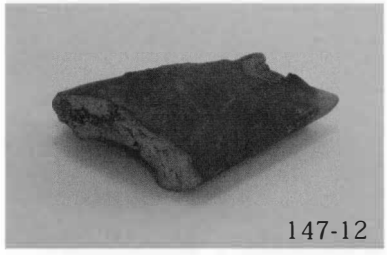

147-6

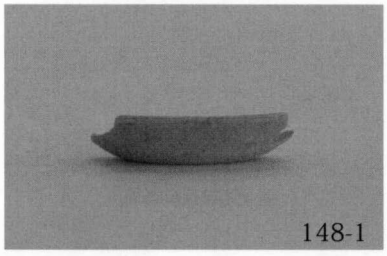

147-8

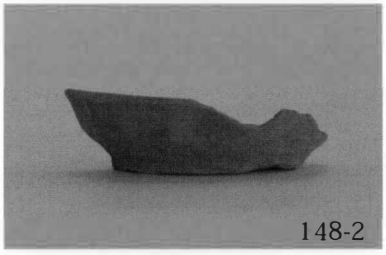

147-9

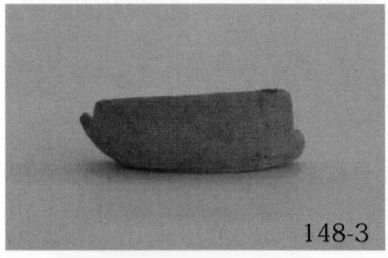

147-10

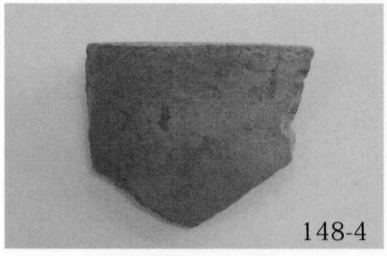

147-11

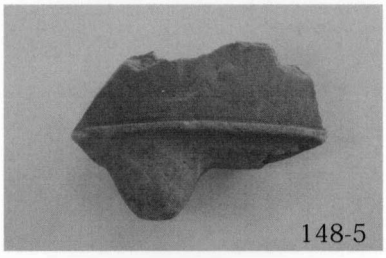

147-12

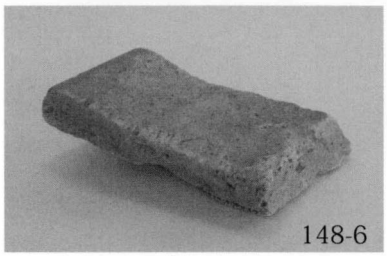

148-1

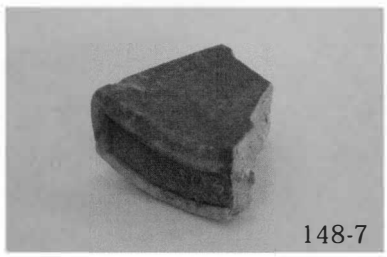

148-2

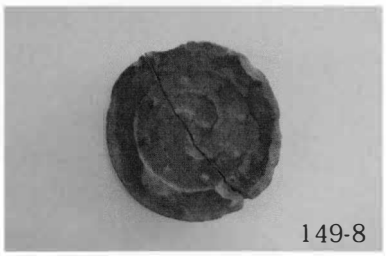

148-3

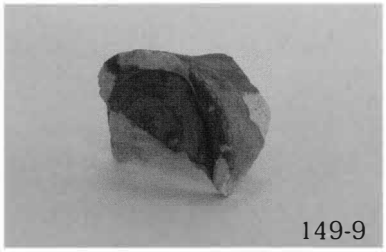

148-4


148-5

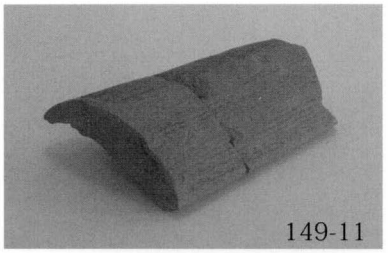

148-6

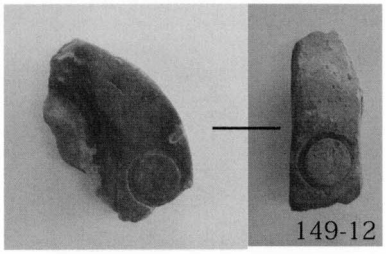

148-7

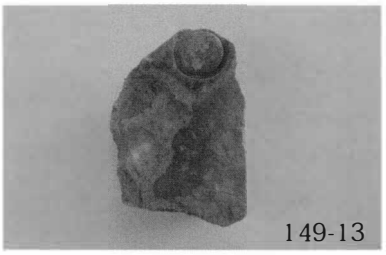

149-8


149-9

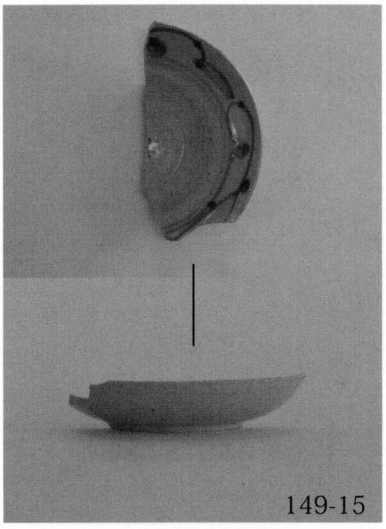
149-10

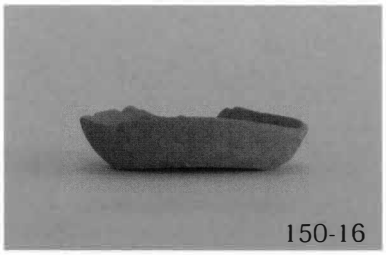

149-11

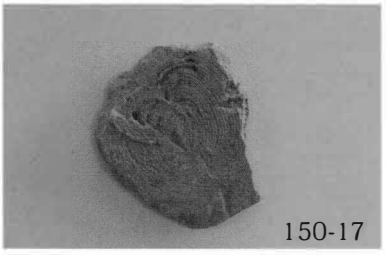

149-12

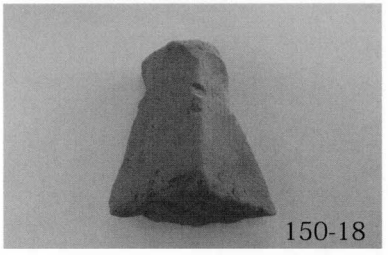

149-13

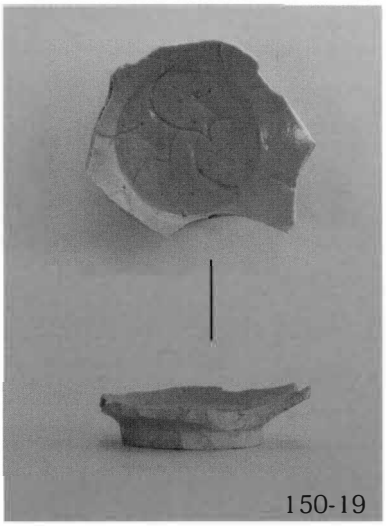
149-14

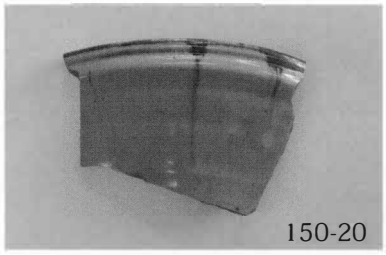

149-15

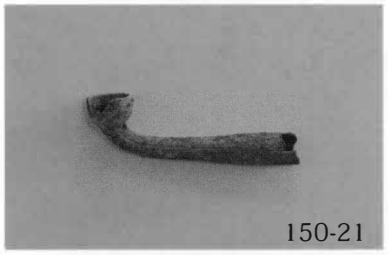

150-16

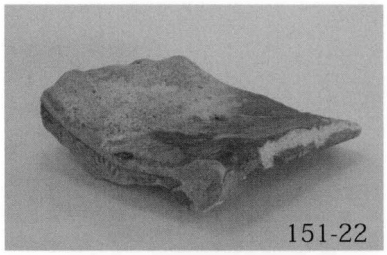

150-17


150-18

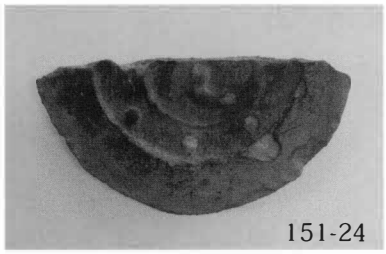

150-19

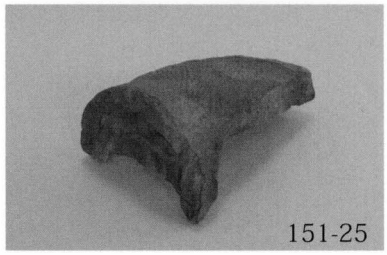

150-20

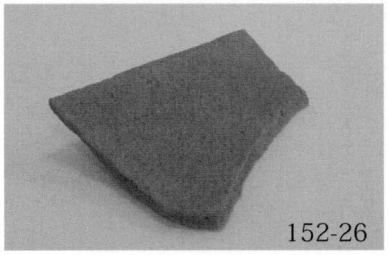

150-21

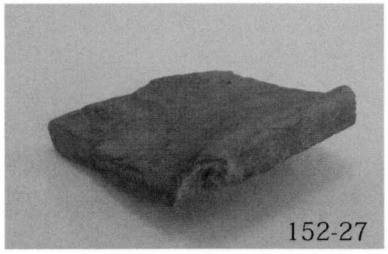

151-22

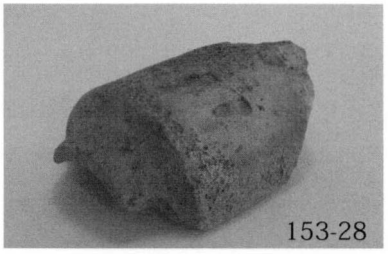
151-23

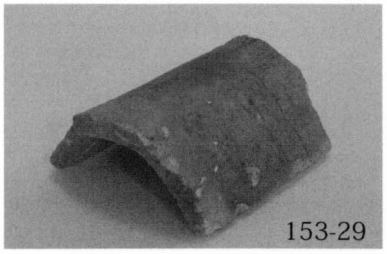

151-24

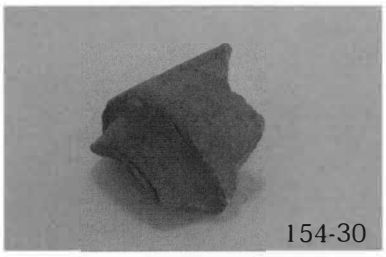

151-25


152-26

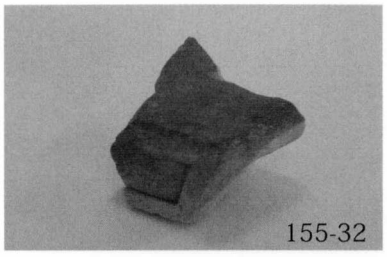

152-27

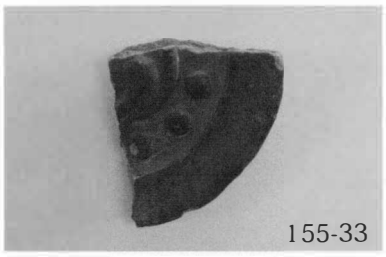

153-28

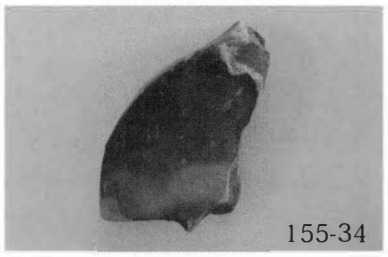

153-29

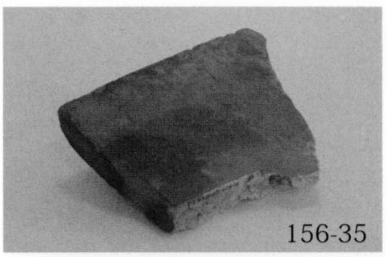

154-30

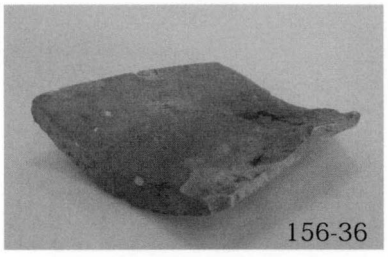
155-31

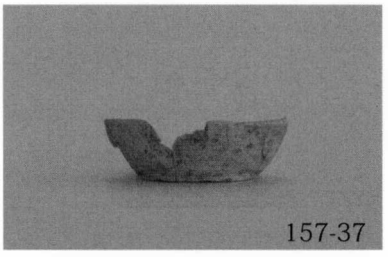

155-32

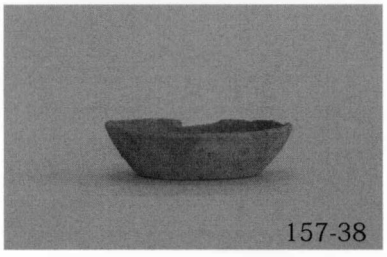

155-33

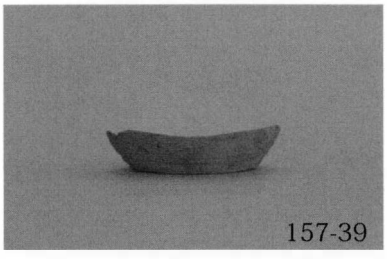

155-34

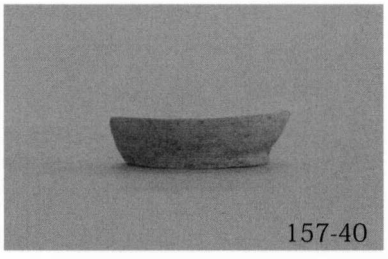

156-35

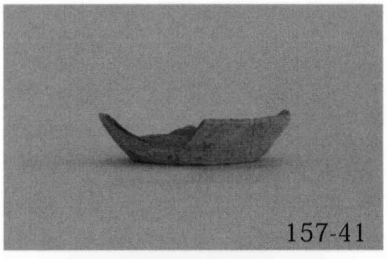

156-36

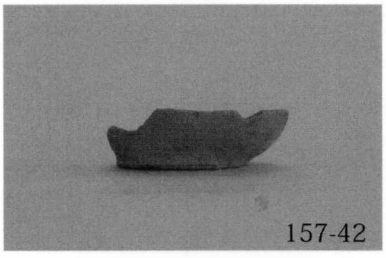

157-37

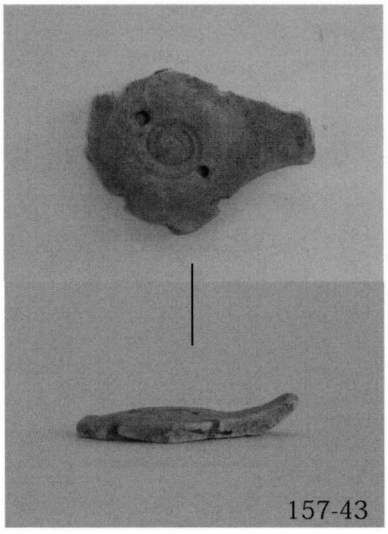

157-38


157-39

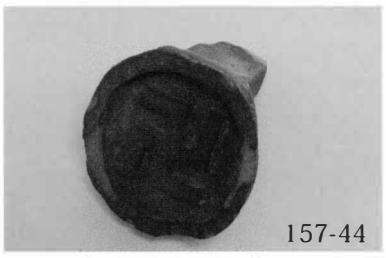

157-40

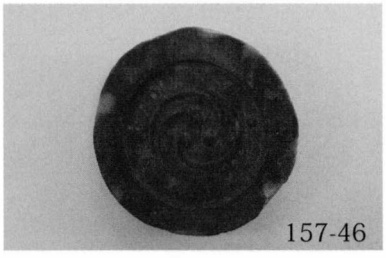

157-41

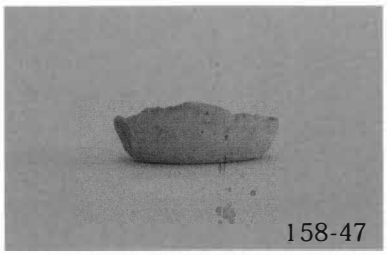

157-42

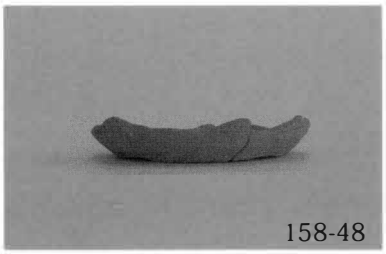

157-43

157-45


157-44

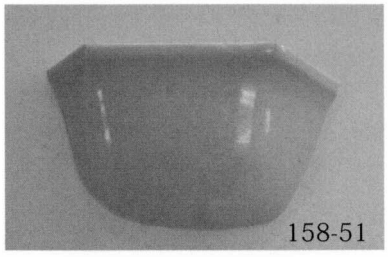

157-46


158-47

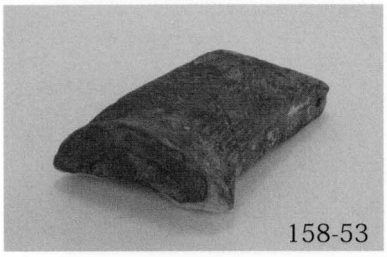

158-48

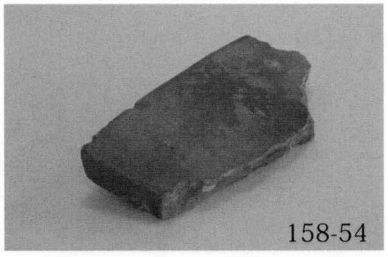
158-49

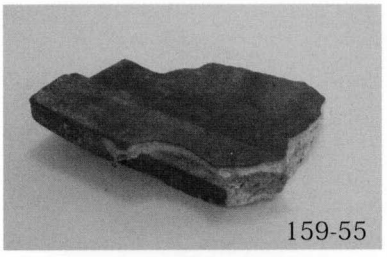
158-50

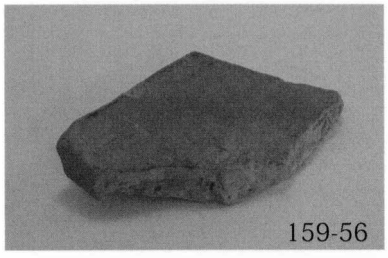

158-51

158-52

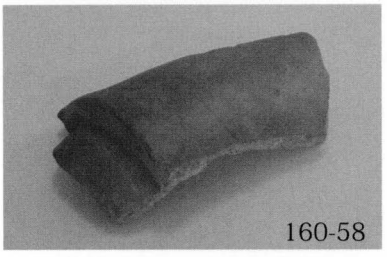

158-53

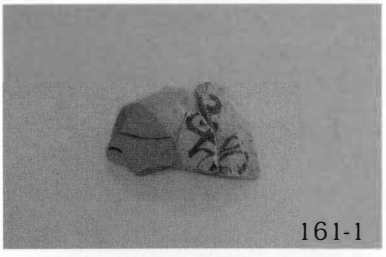

158-54

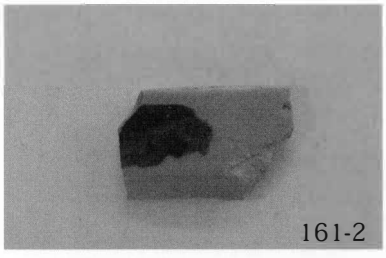

159-55

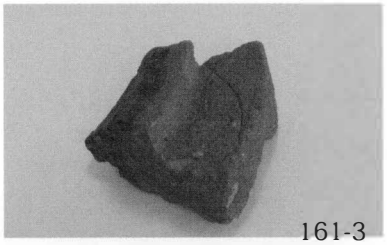

159-56

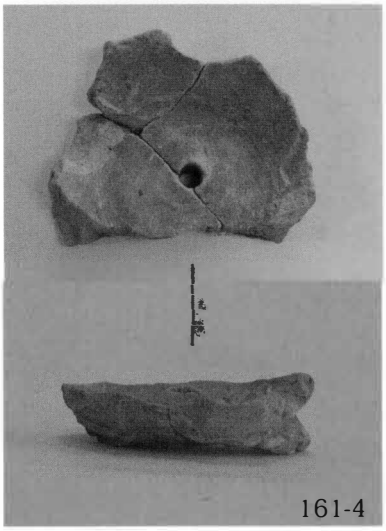
159-57

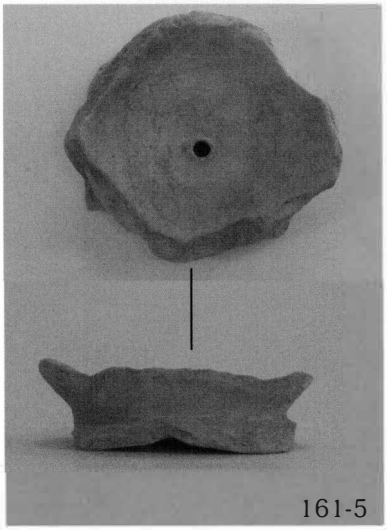

160-58

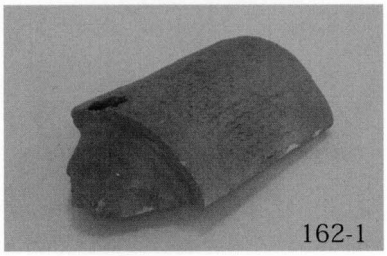

161-1

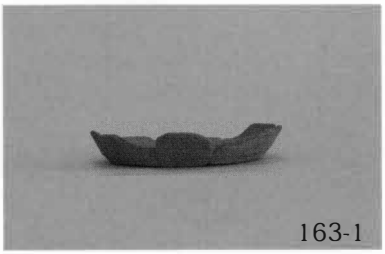

161-2

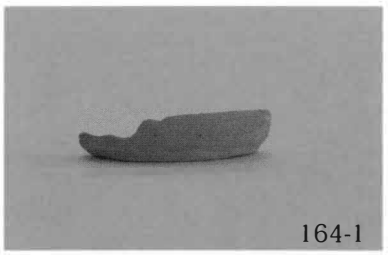

161-3

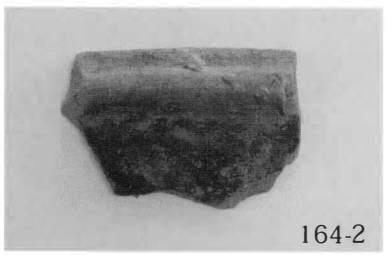

161-4

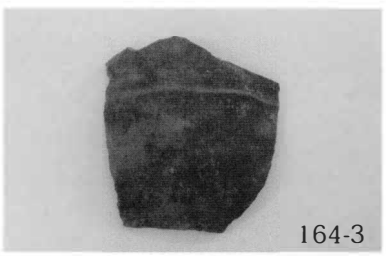

161-5

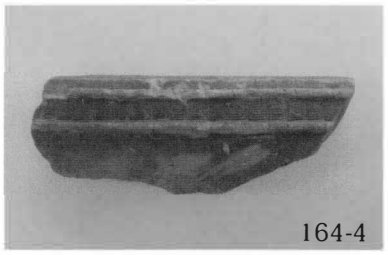

162-1

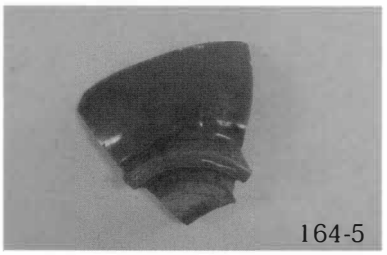

163-1

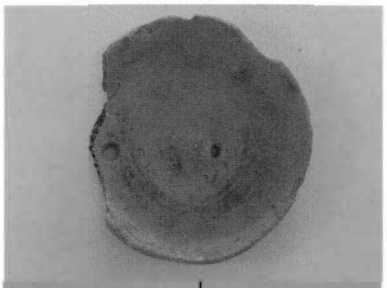

164-1

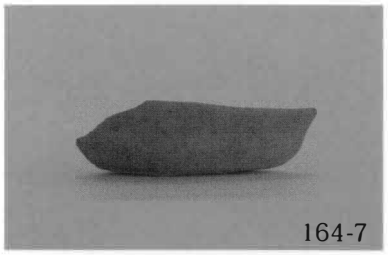

164-2

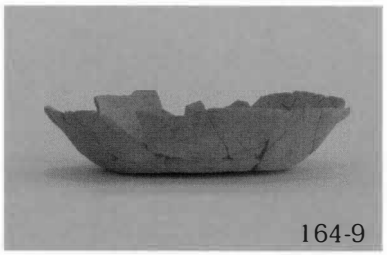

164-3

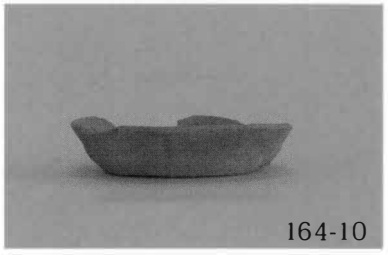

164-4

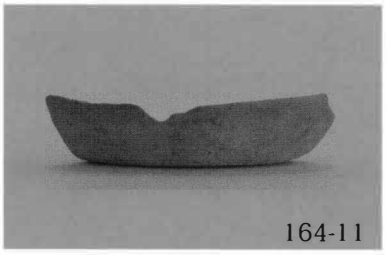

164-5

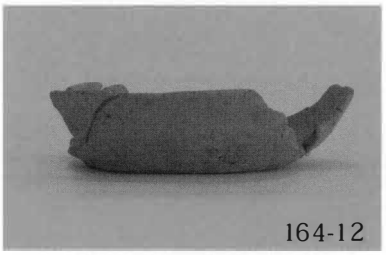

164-6

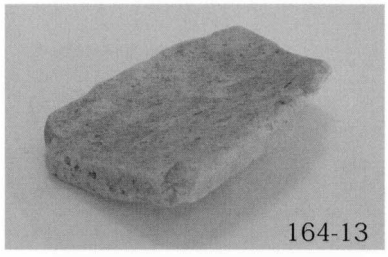

164-7

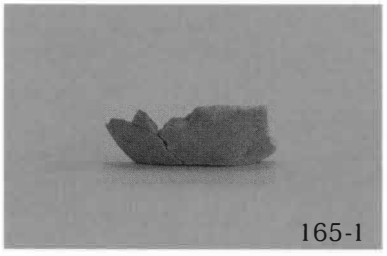

164-9

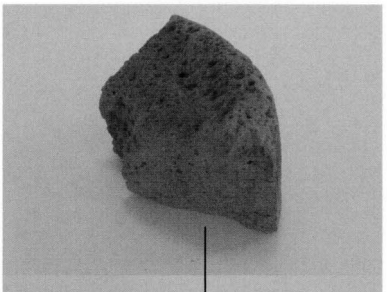

164-10

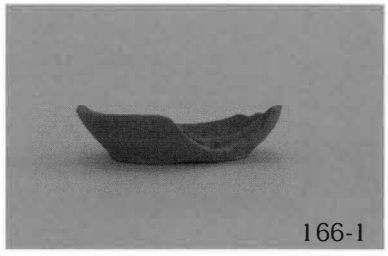

164-11

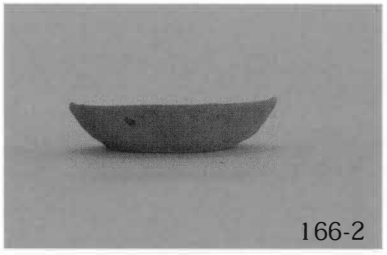

164-12

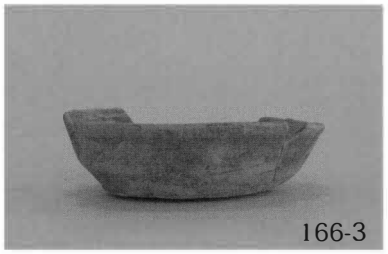

164-13

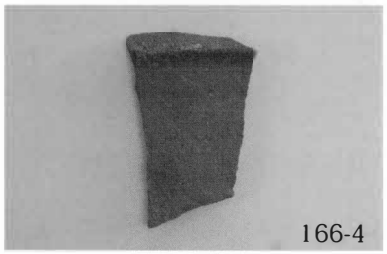

165-1

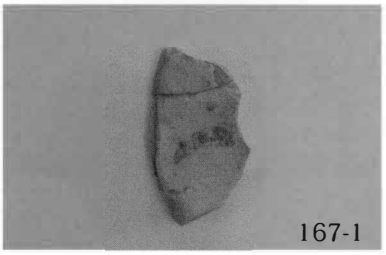

165-3

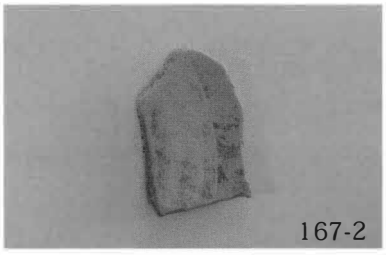

166-1

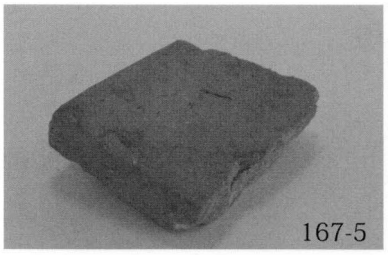

166-2

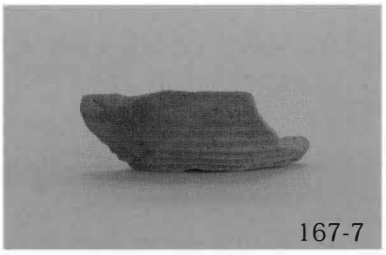

166-3

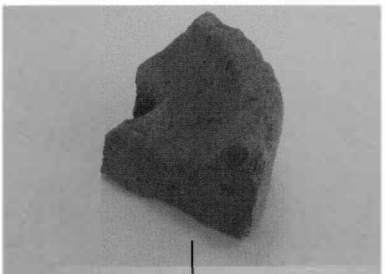
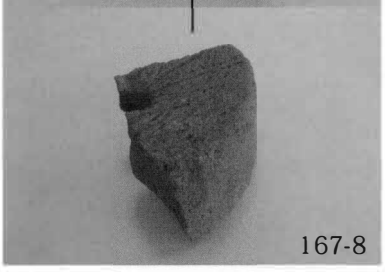

166-4

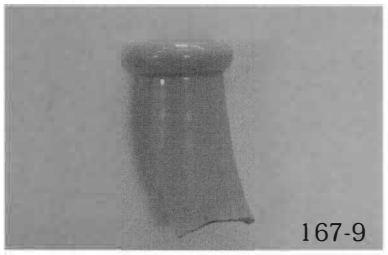

167-1

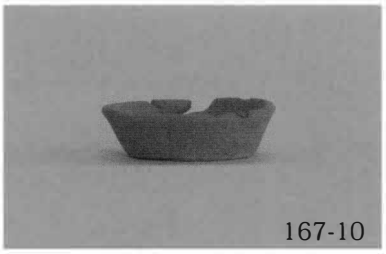

167-2

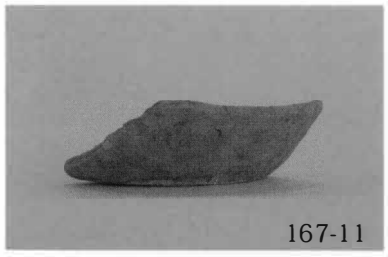

167-5

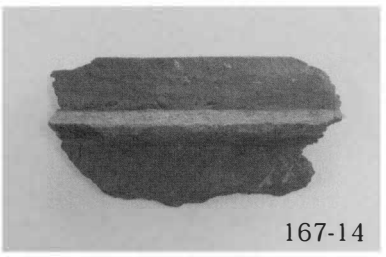

167-7

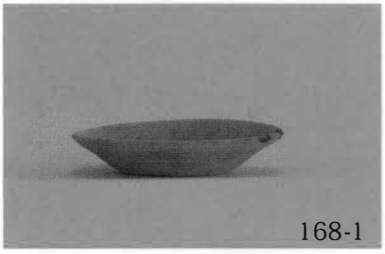


167-8

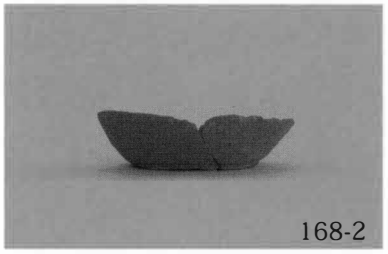

167-9

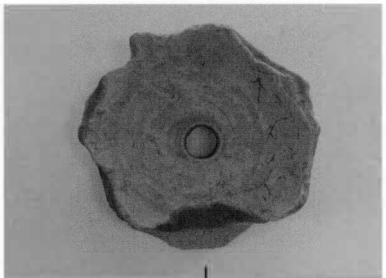
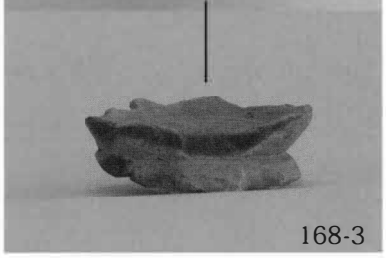

167-10

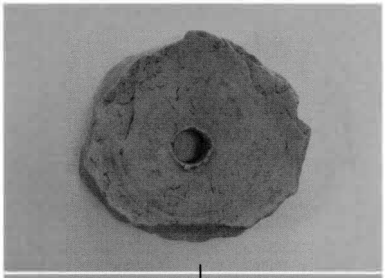
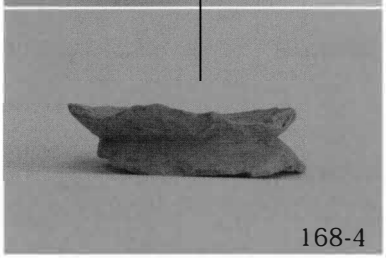

167-11

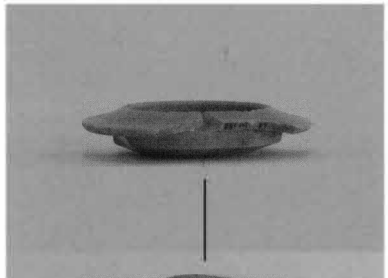

167-14


168-1

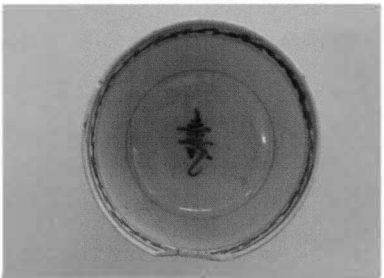
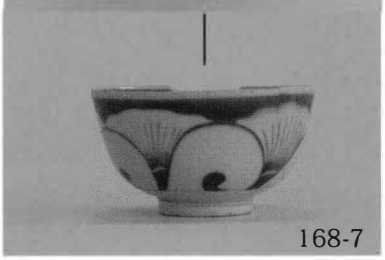

168-2

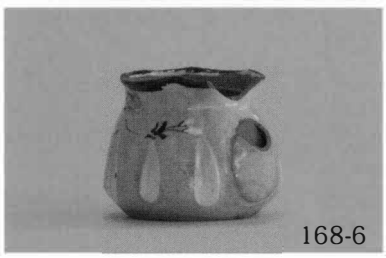


168-3



168-4

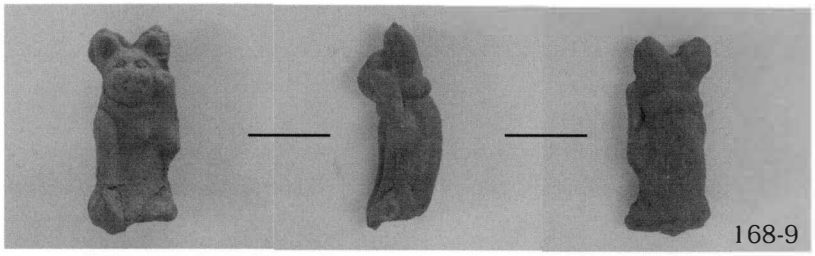


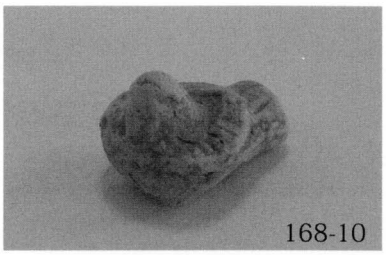
168-5



168-7

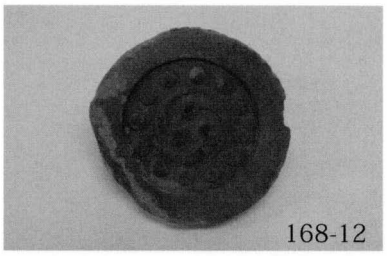

168-6

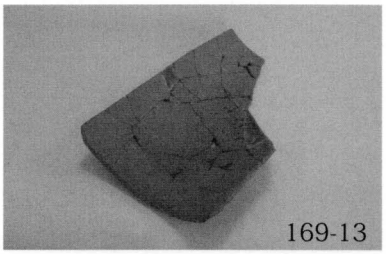
168-8

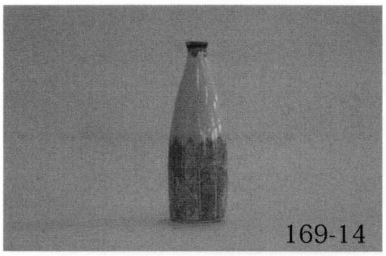

168-9

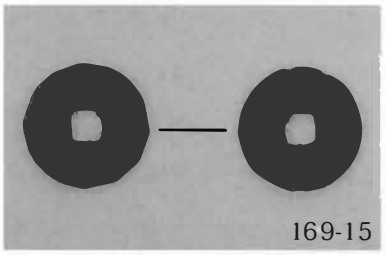

168-10

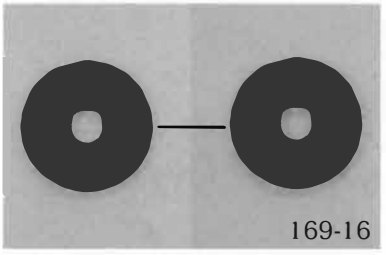
168-11

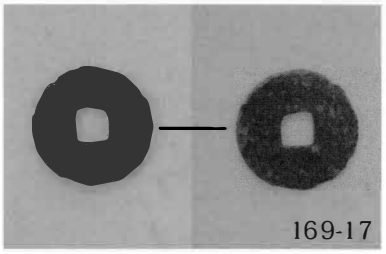

168-12

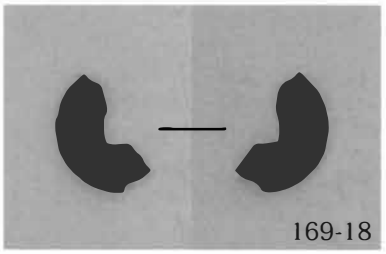

169-13

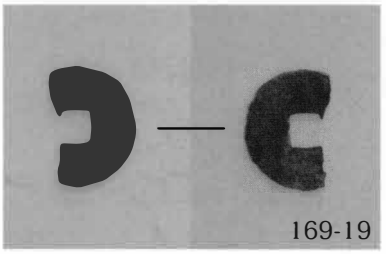

169-14


169-15


169-16

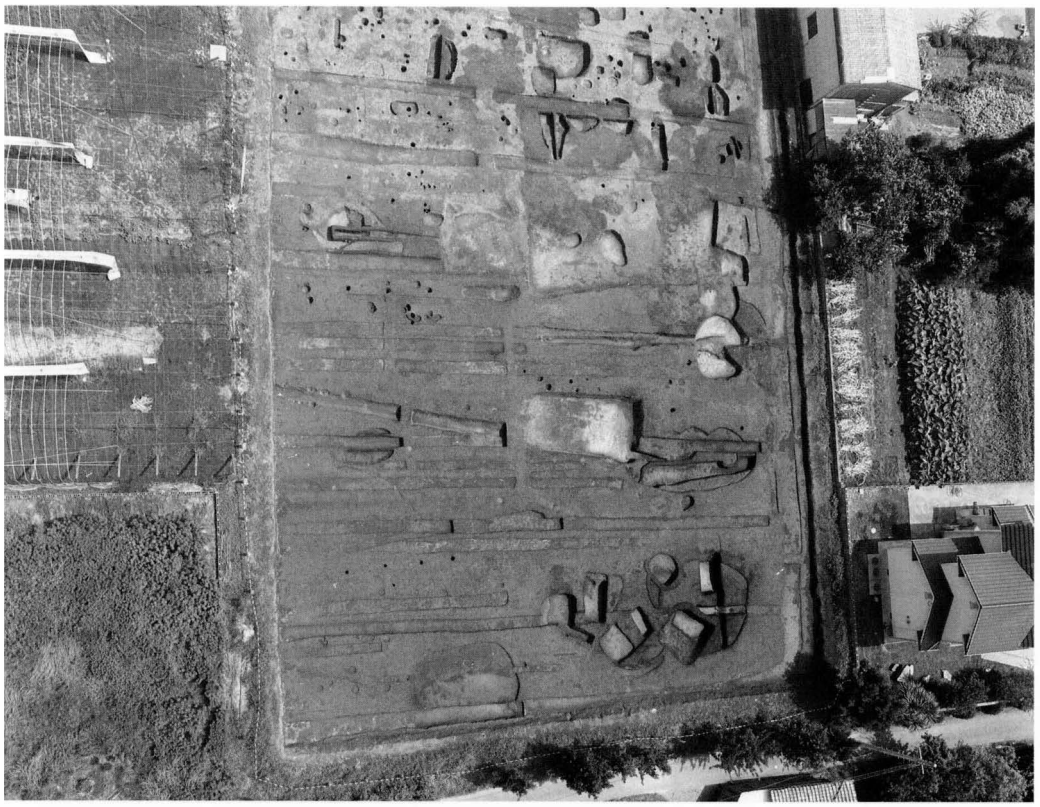

169-17


169-18


169-19

調査区全景（上が東）

調査区全景（北西から）

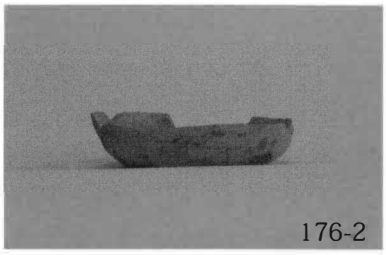


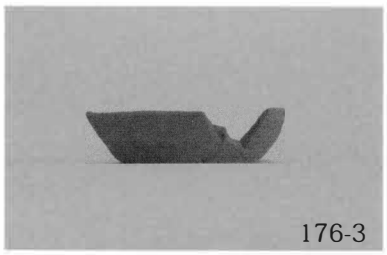
調査区南半部（上が北）

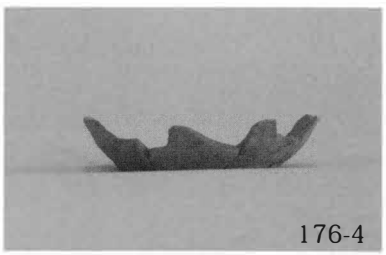
2SK010 完掘（南から）

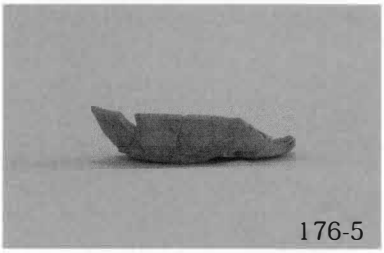
2SE055 土層断面（南東から）

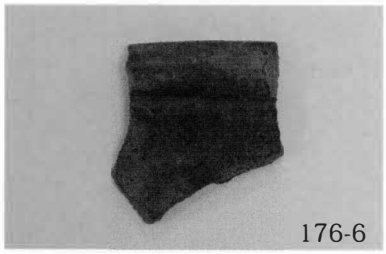
2SX020 土層断面（南から）

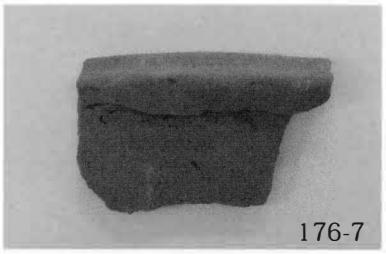

176-2

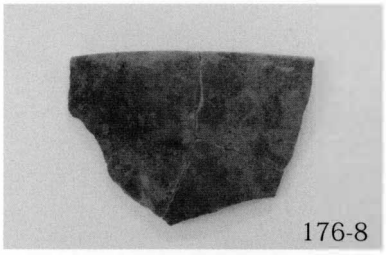

176-3

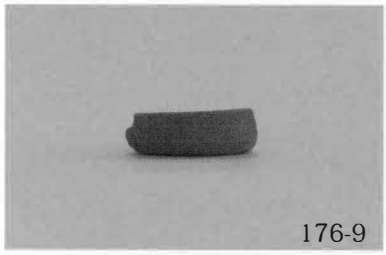

176-4

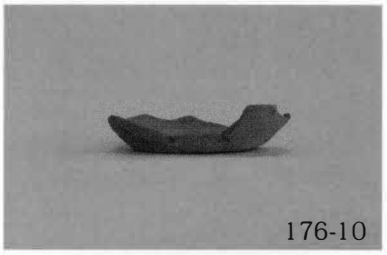

176-5

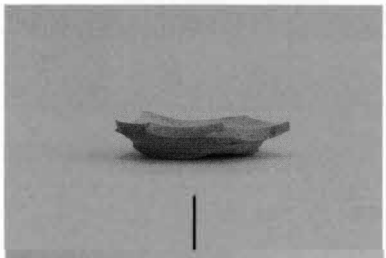

176-6

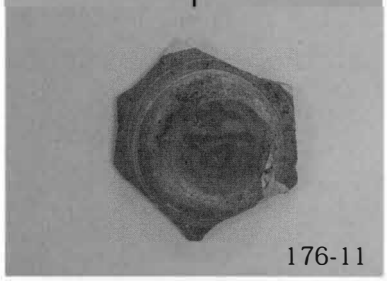

176-7

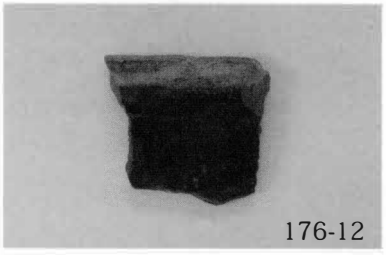

176-8

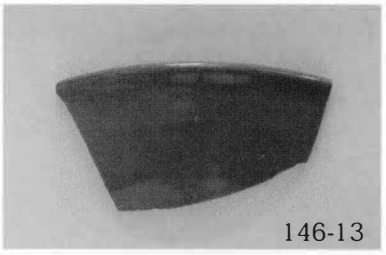

176-9

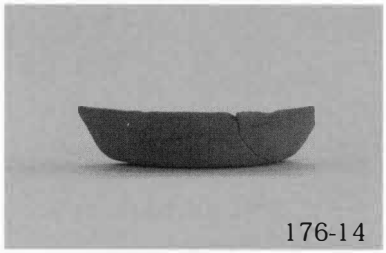

176-10

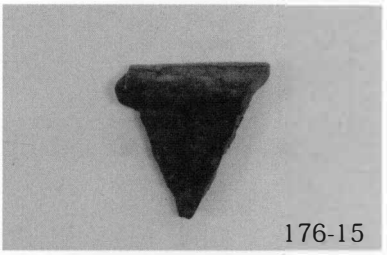


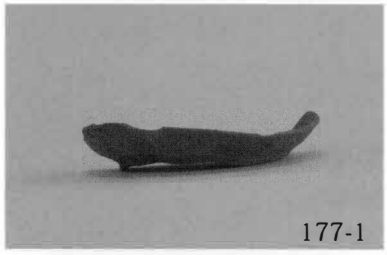

176-11

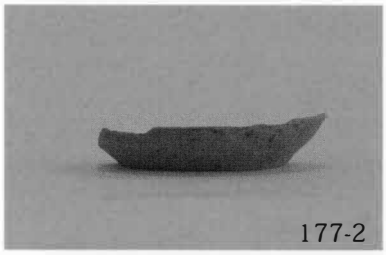

176-12

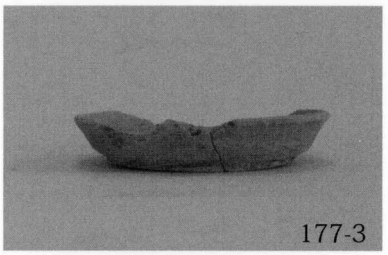

146-13

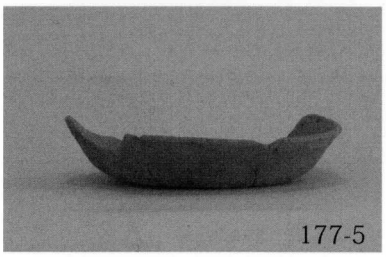

176-14

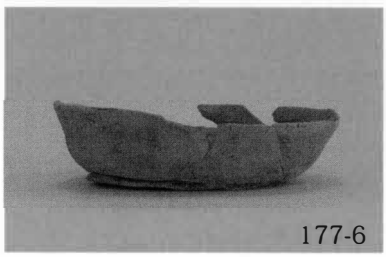

176-15

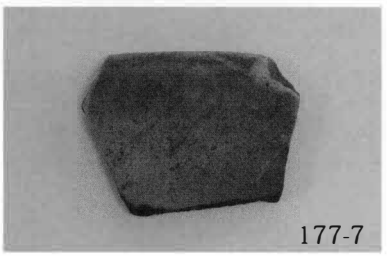

177-1

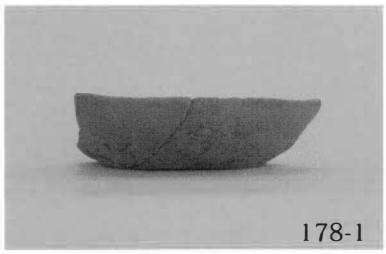

177-2

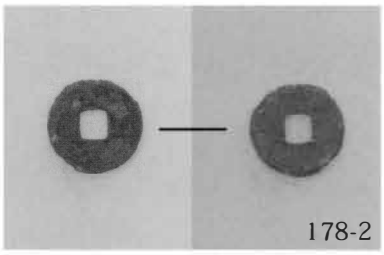

177-3

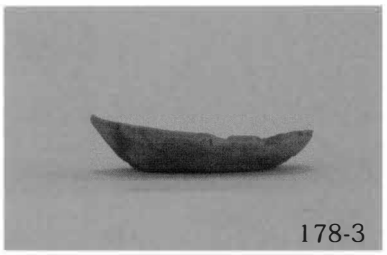

177-5

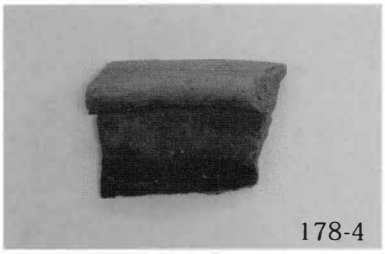

177-6

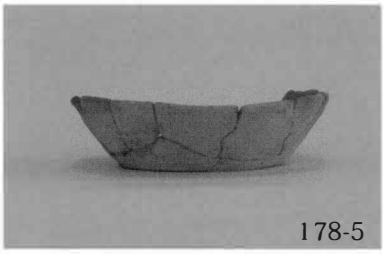

177-7

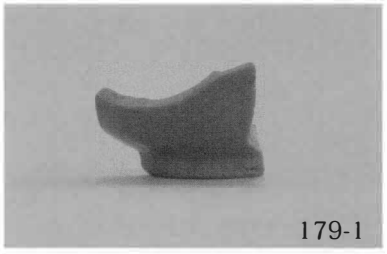

178-1

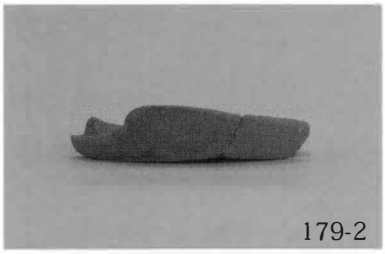

178-2

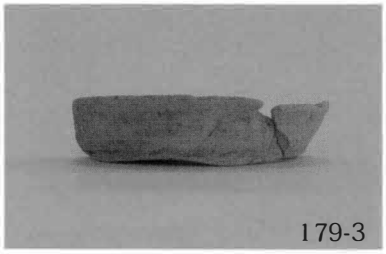

178-3

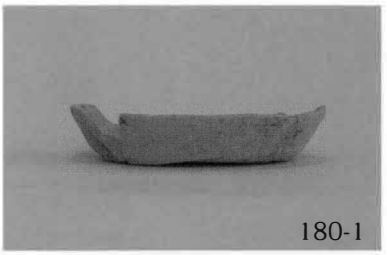

178-4

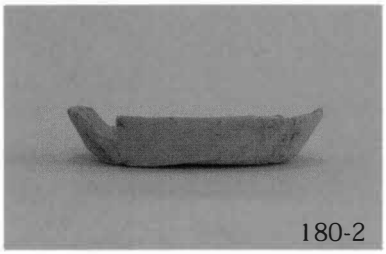

178-5

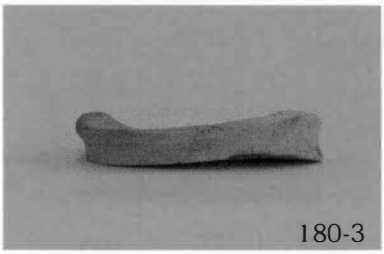

179-1

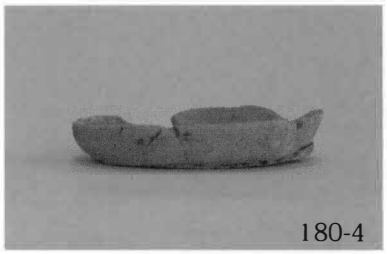

179-2

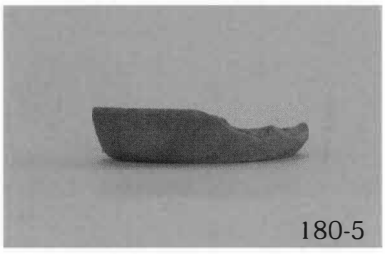

179-3

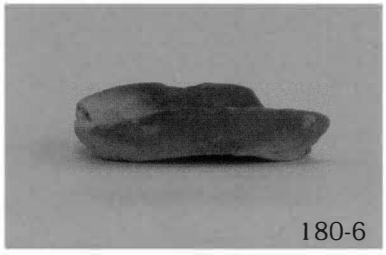

180-1

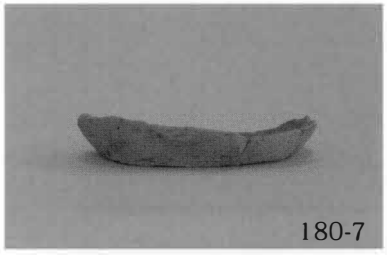

180-2

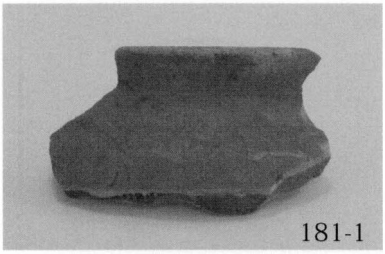

180-3

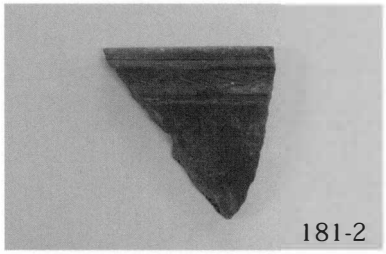

180-4

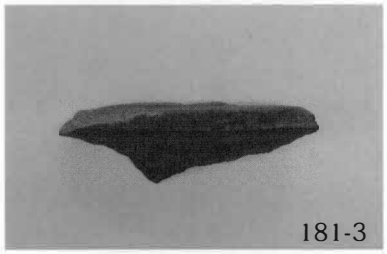

180-5

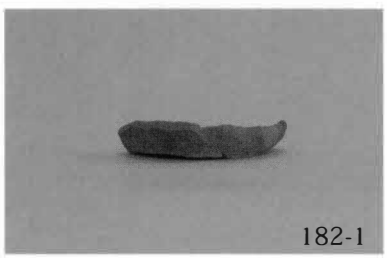

180-6

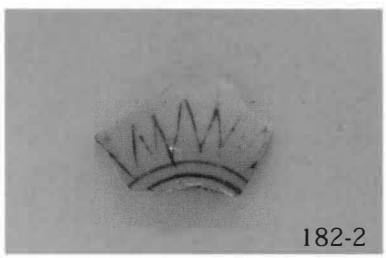

180-7

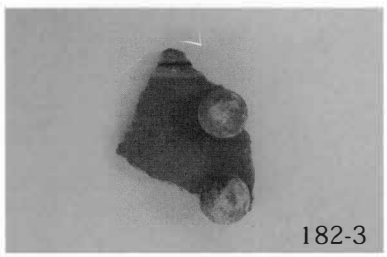

181-1

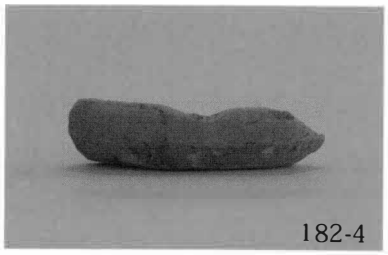

181-2

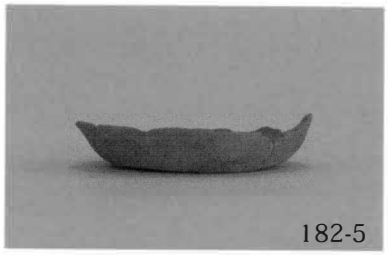

181-3

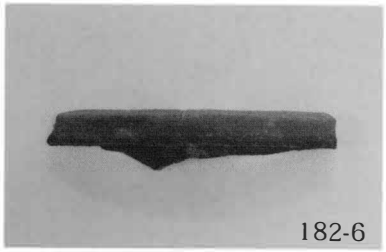

182-1

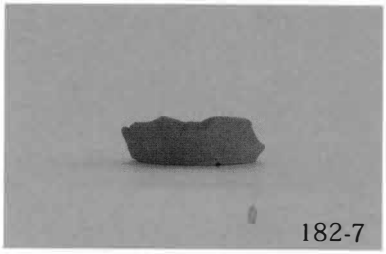

182-2

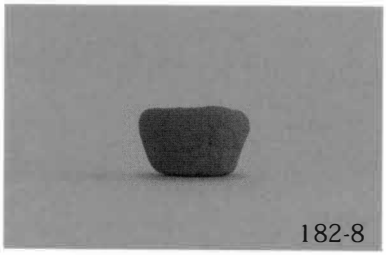

182-3

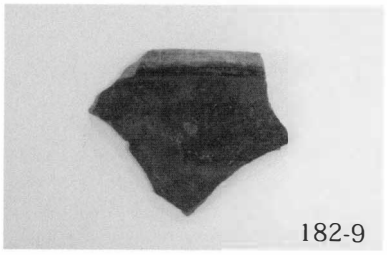

182-4

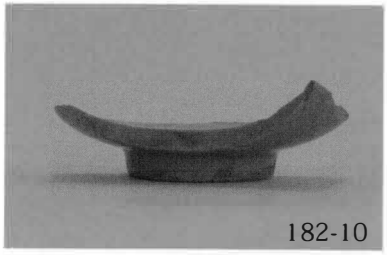

182-5

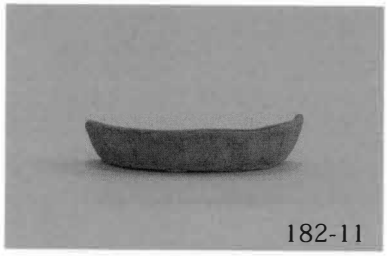

182-6

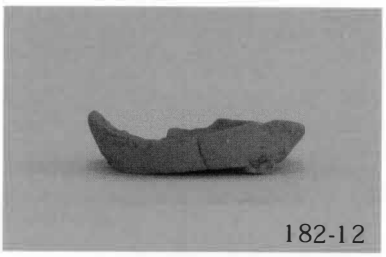

182-7

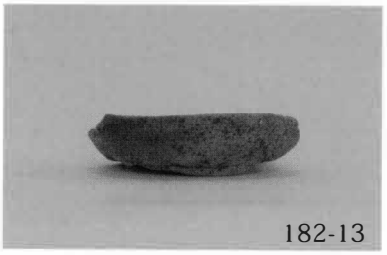

182-8

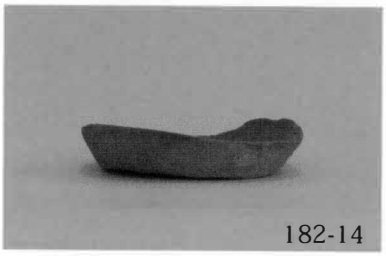

182-9

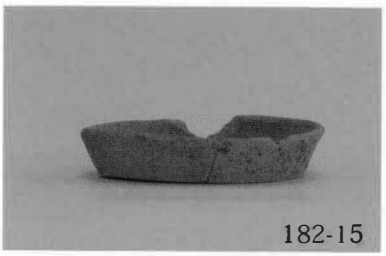

182-10

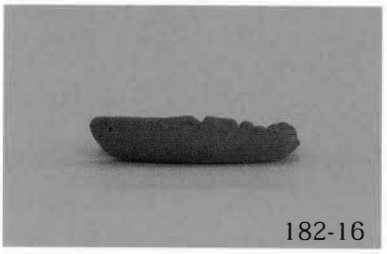

182-11

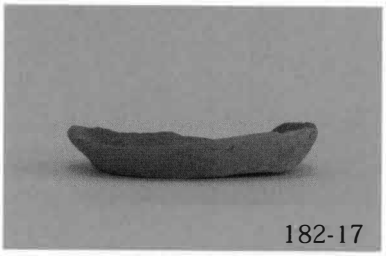

182-12

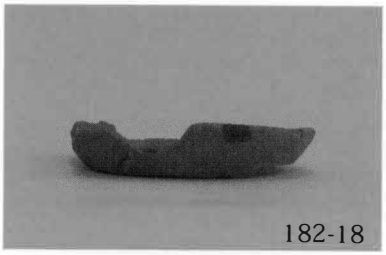

182-13

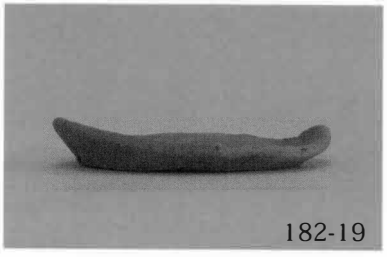

182-14

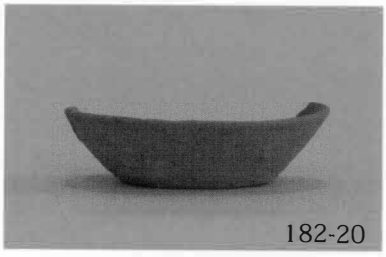

182-15

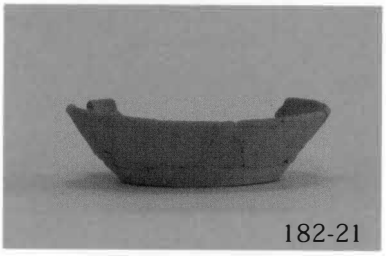

182-16

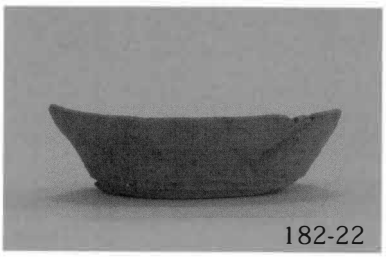

182-17

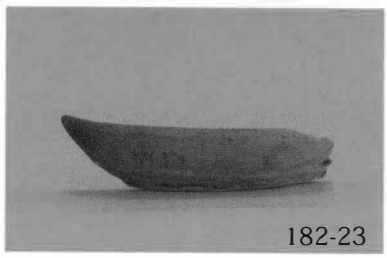

182-18

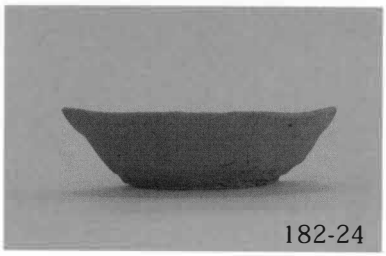

182-19

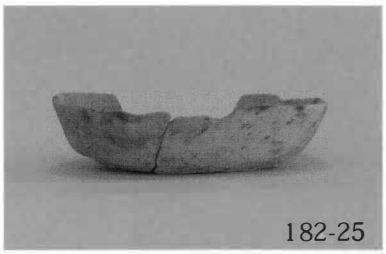

182-20

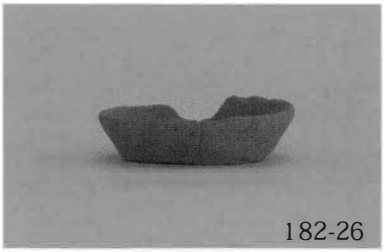

182-21

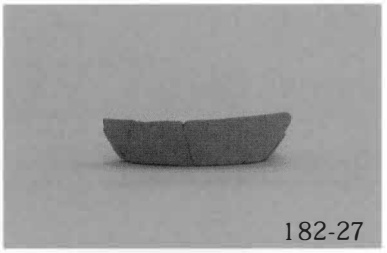

182-22

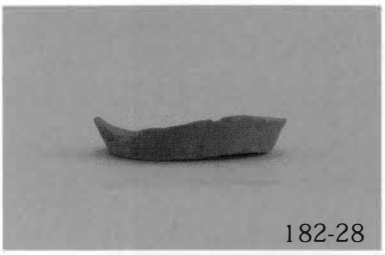

182-23

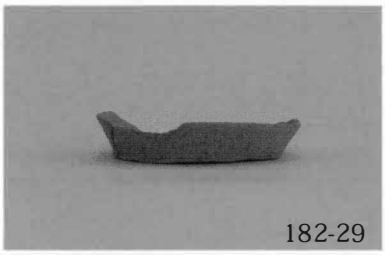

182-24

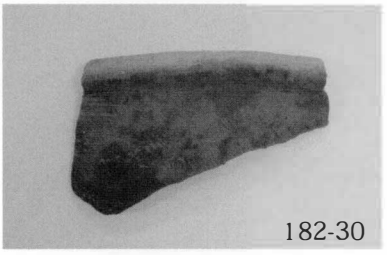

182-25

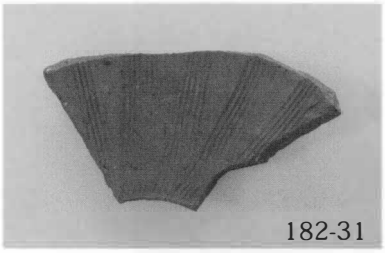

182-26

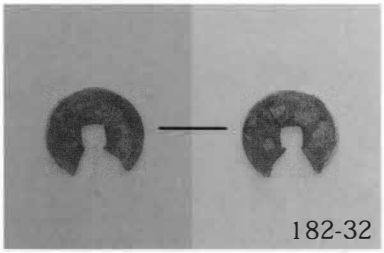

182-27

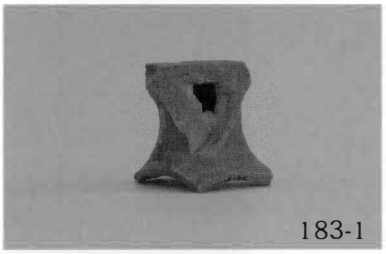

182-28

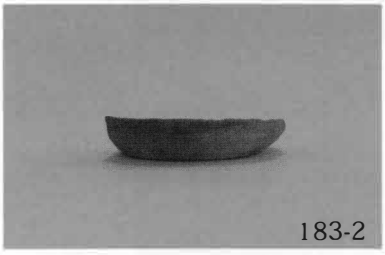

182-29

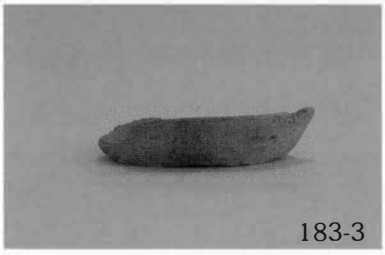

182-30

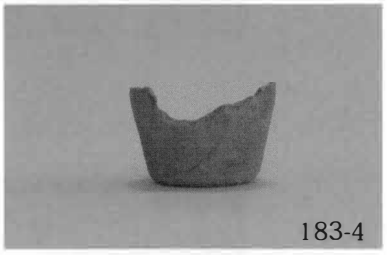

182-31

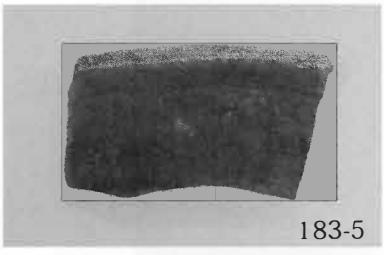

182-32

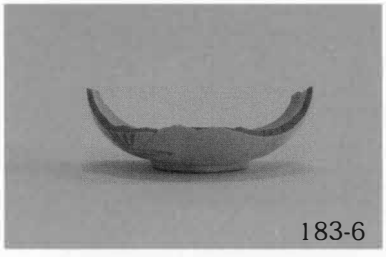

183-1

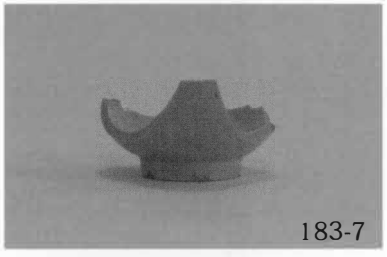

183-2

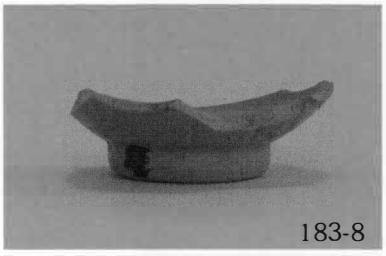

183-3

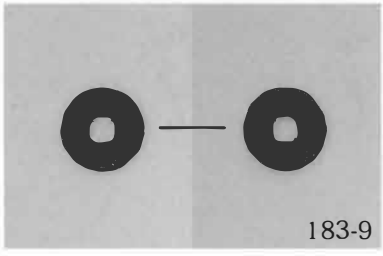

183-4

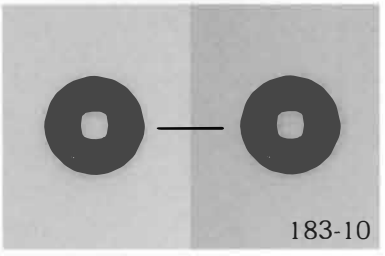

183-5

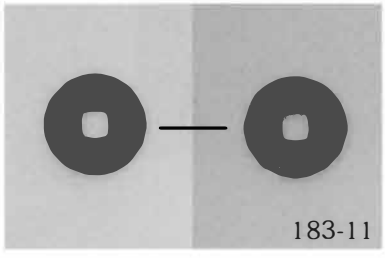

183-6


183-7


183-8

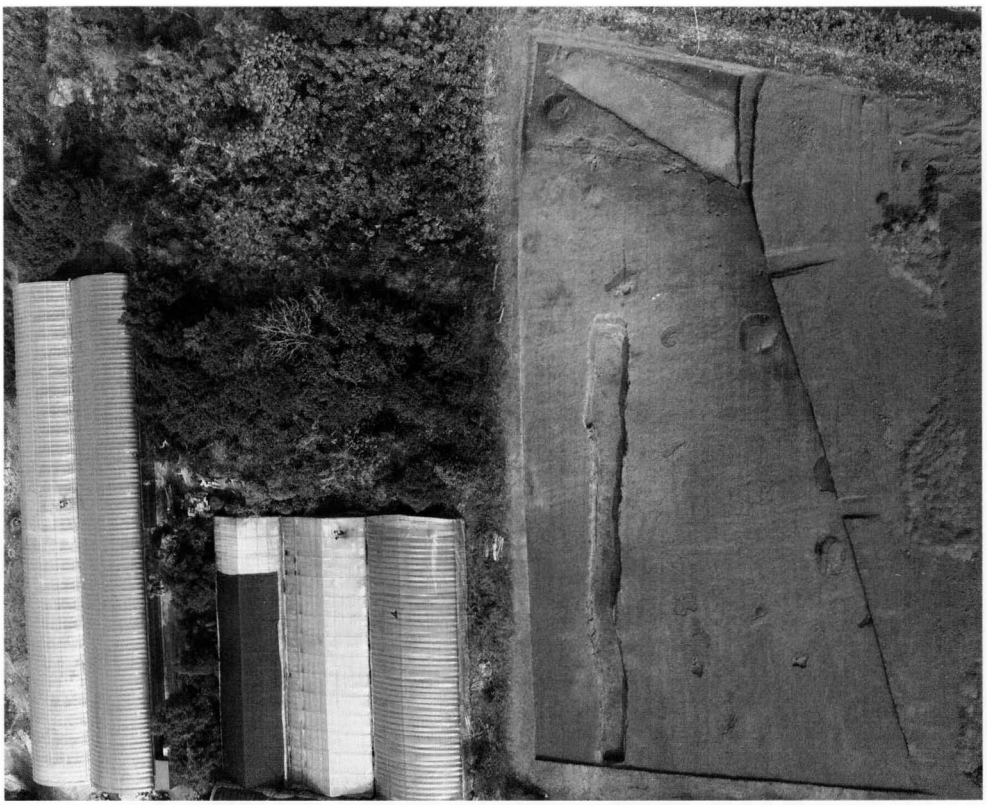

183-9


183-10


183-11

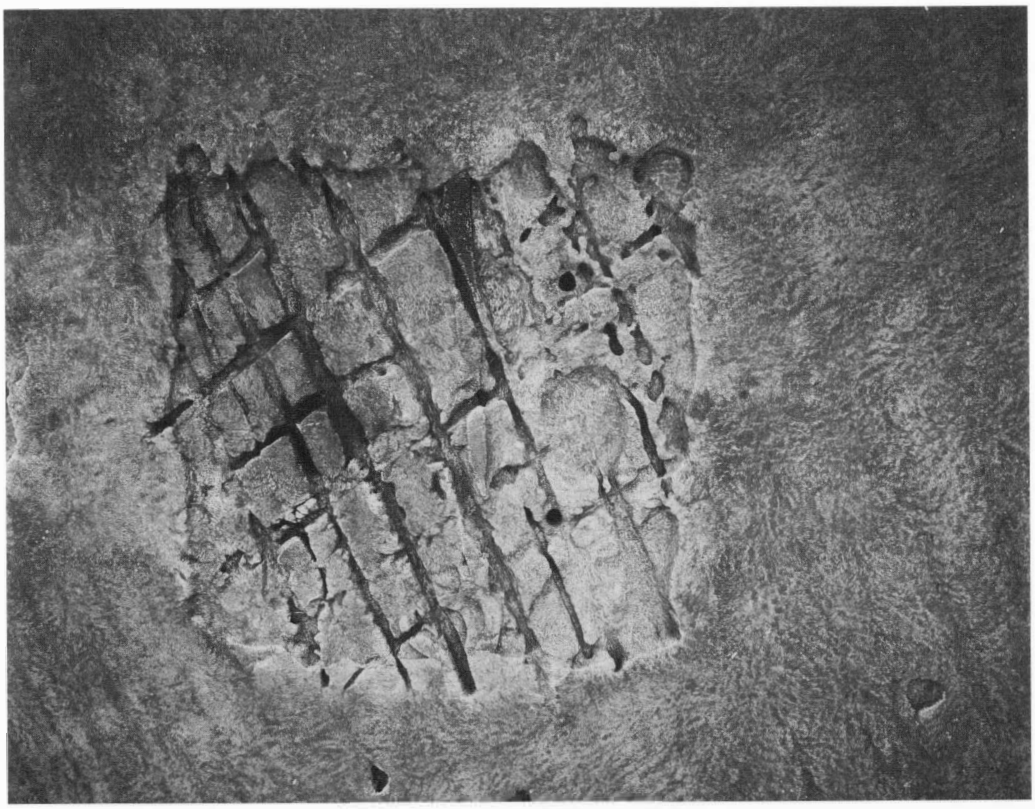
反転前調査区全景（上が北）

反転前調査区全景（南から）



反転後調査区全景（上が北）

反転後調査区全景（南から）

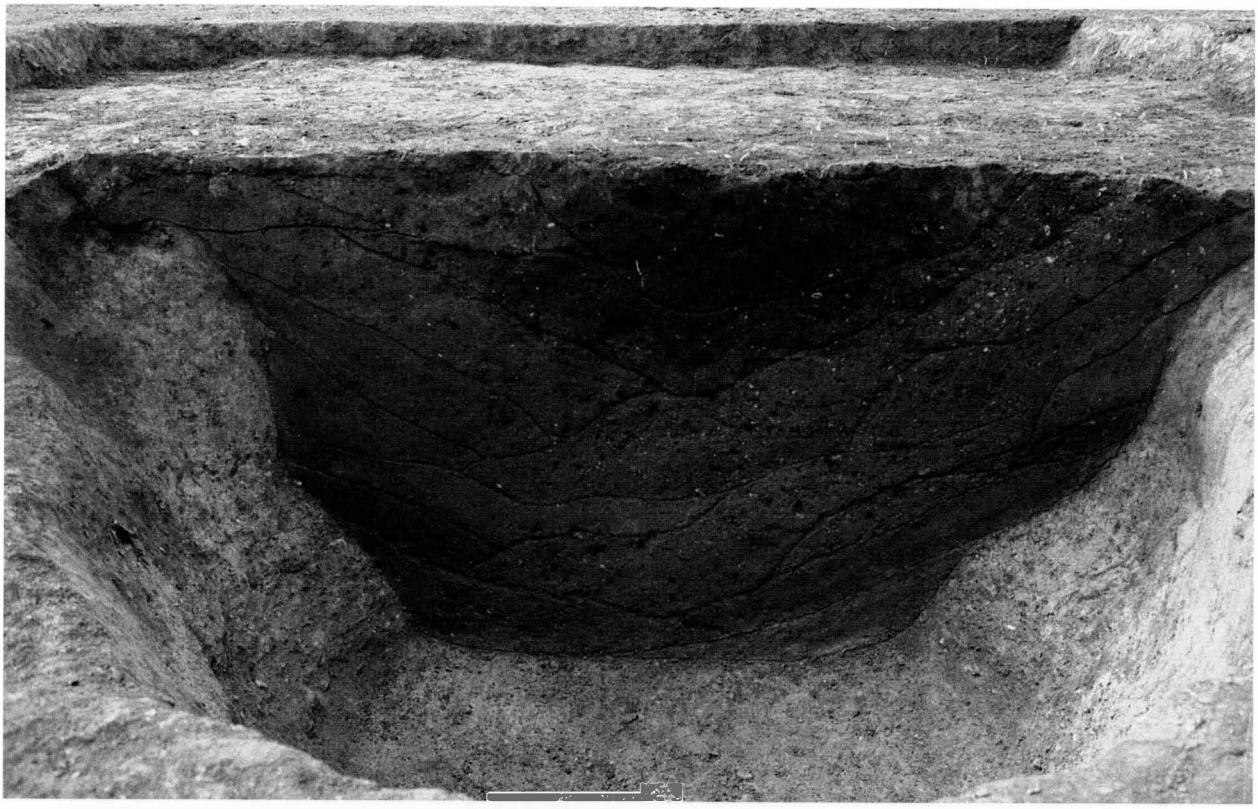


2SI010・2SI050 完掘（上が北）

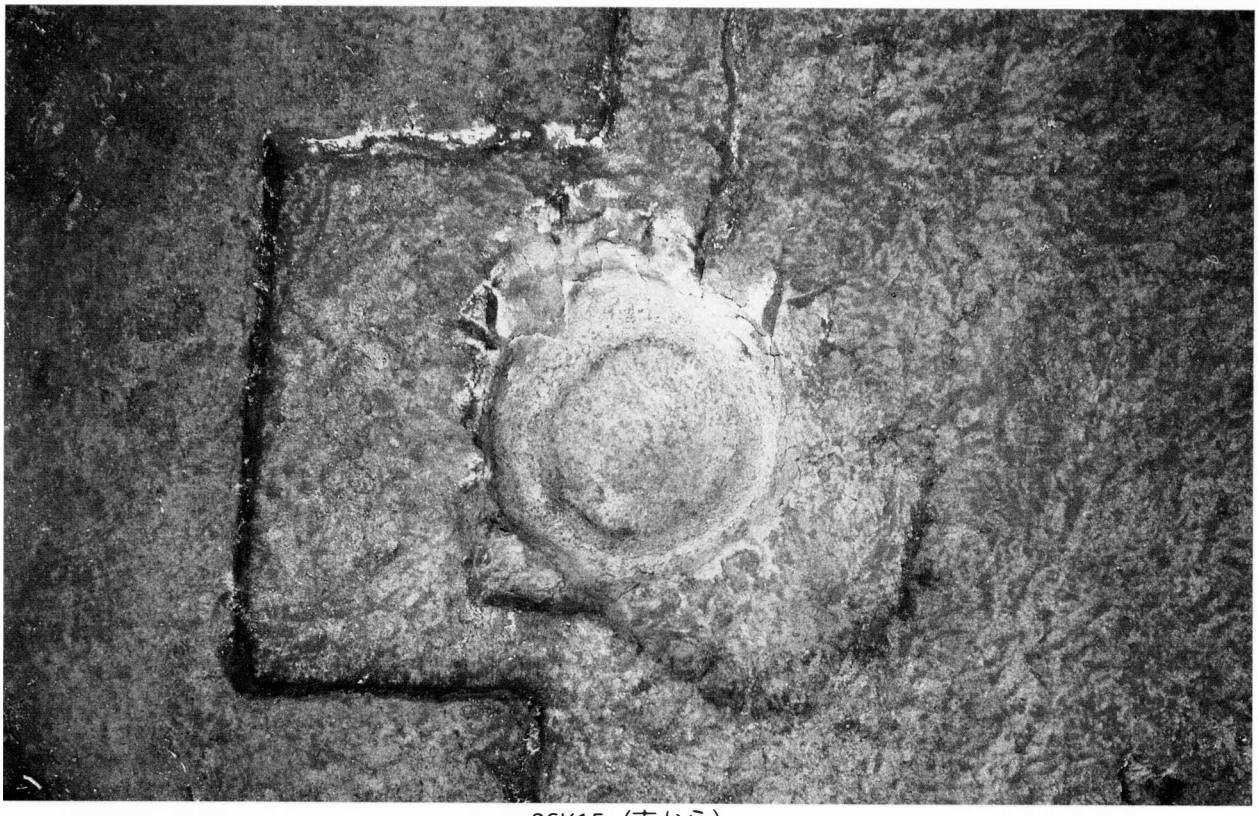
2SI010（南から）

2SK05 完掘（東から）

2SK05 遺物出土状況（東から）



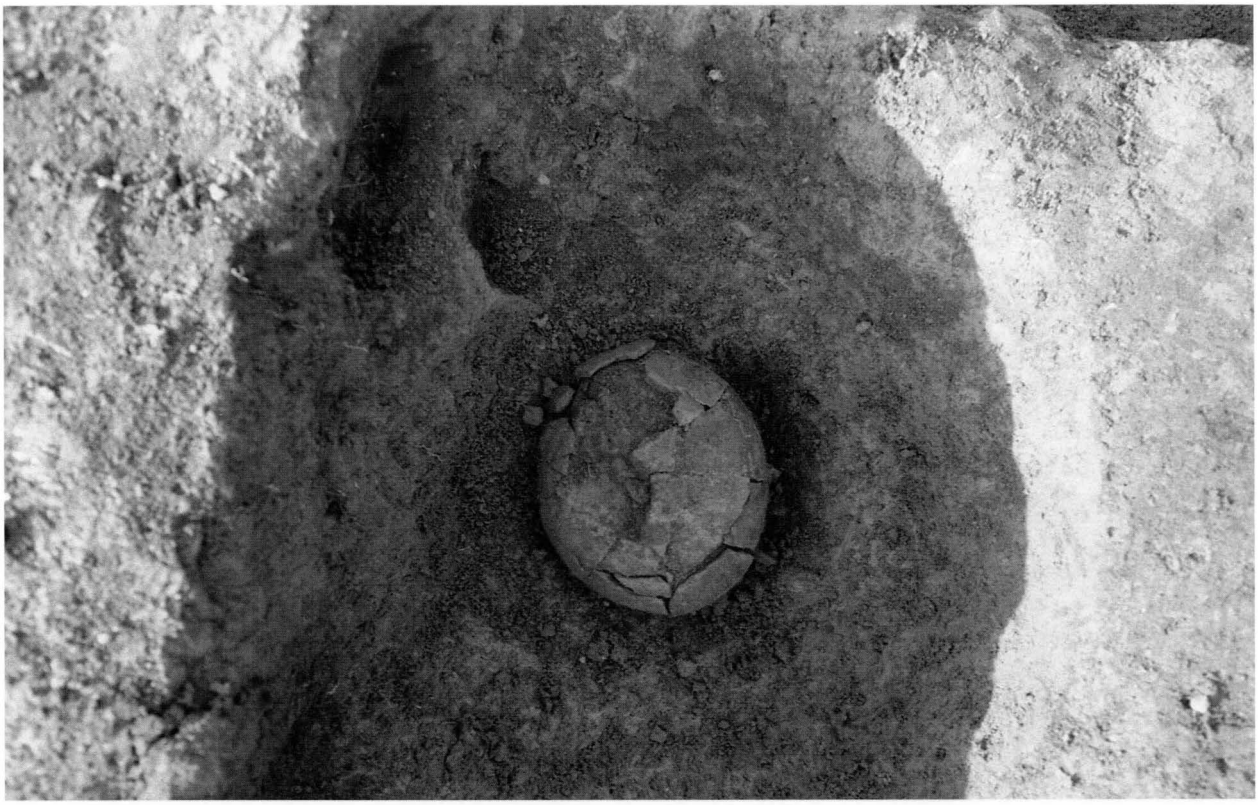
反転後調査区全景（上が北）



2SK15（南から）

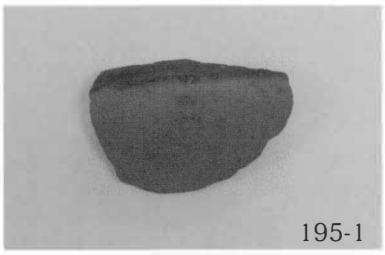
2SK29 土層断面（北から）

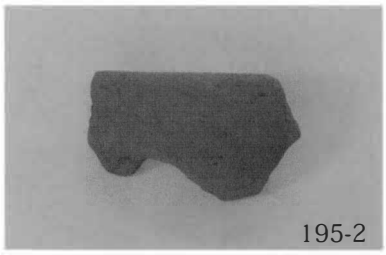
2SX25 土層断面（南から）

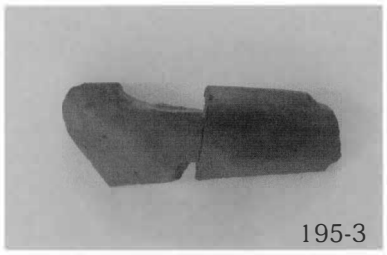


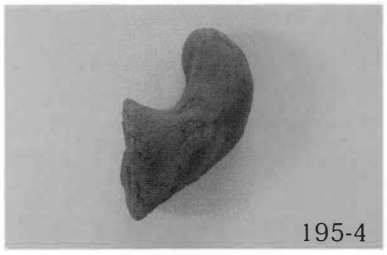
2SX55 遺物出土状況（上が北）

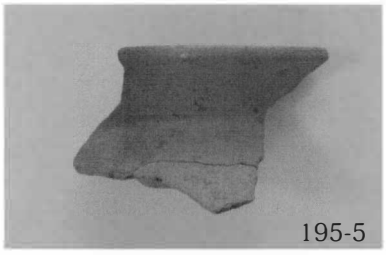
作業風景

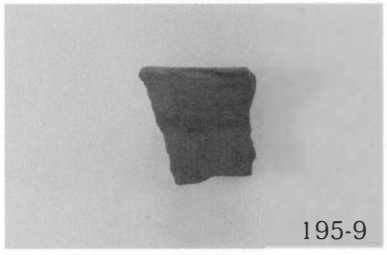

195-1

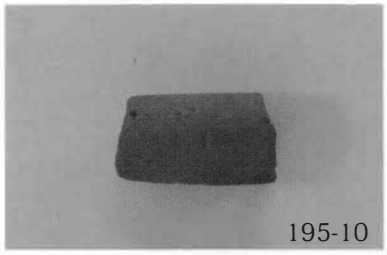

195-2

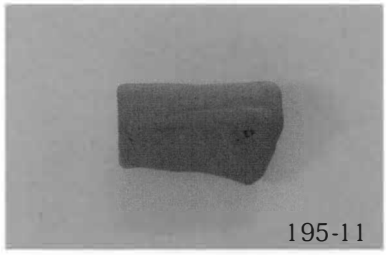

195-3

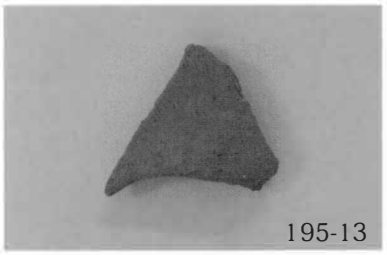

195-4

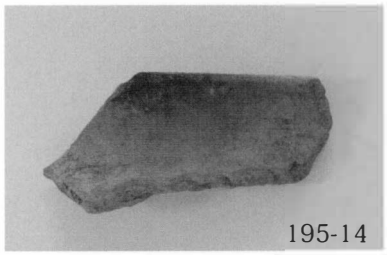

195-5

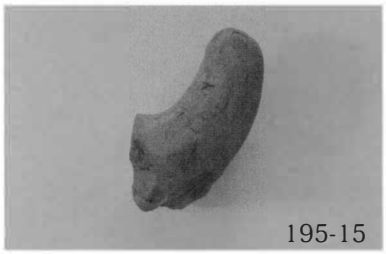

195-9

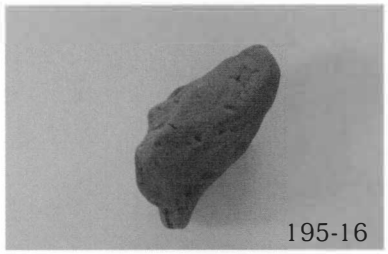

195-10

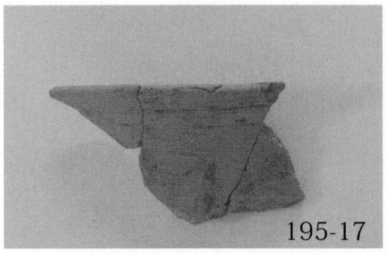

195-11

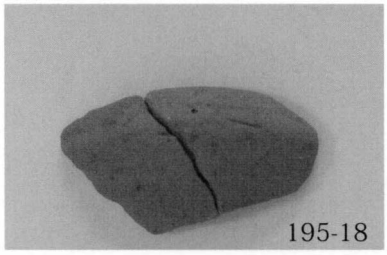

195-13

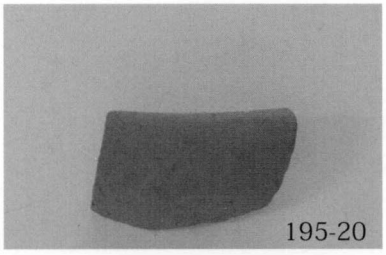

195-14

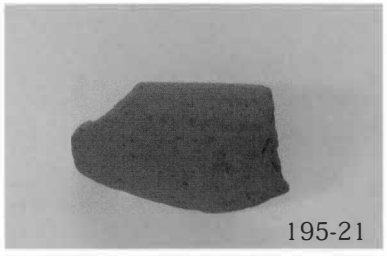

195-15

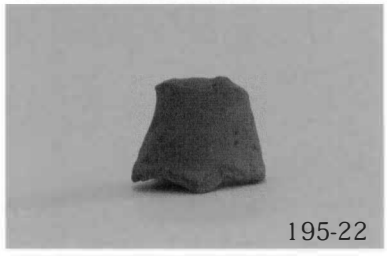

195-16

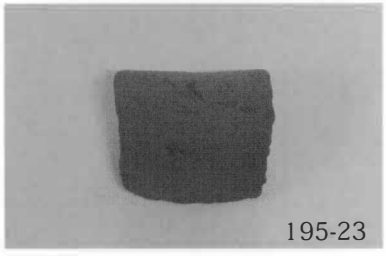

195-17

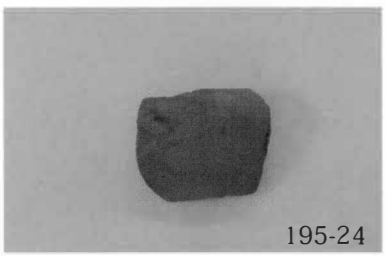

195-18

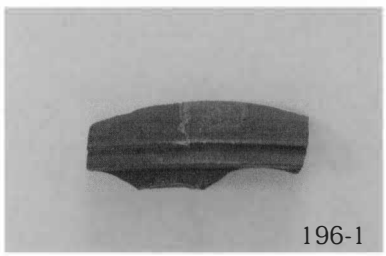

195-20


195-21

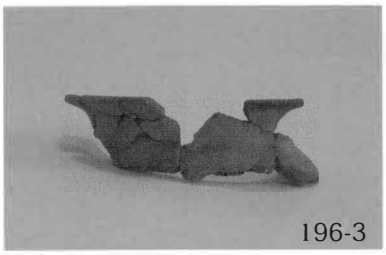

195-22

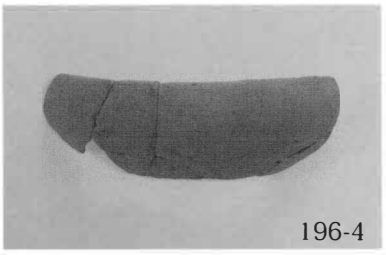

195-23

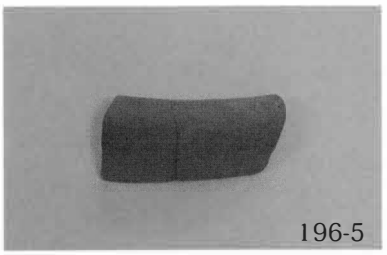

195-24

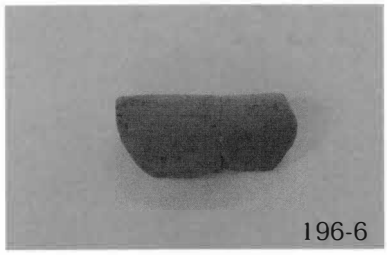

196-1

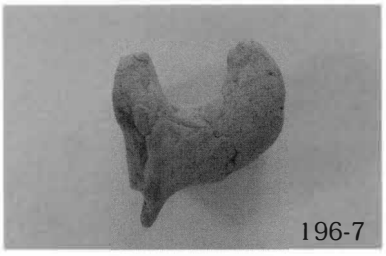
196-2

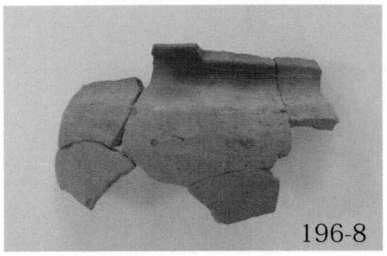

196-3


196-4

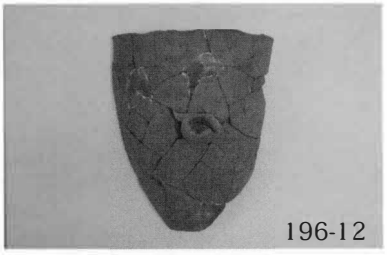

196-5

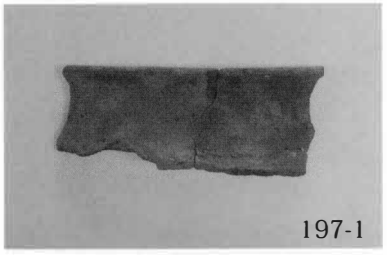

196-6

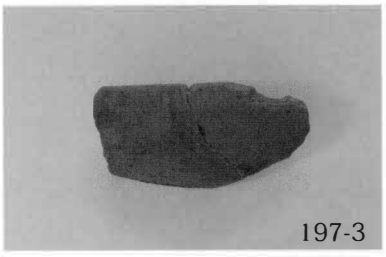

196-7

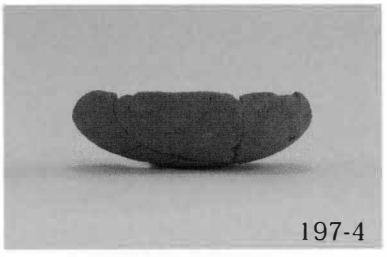

196-8

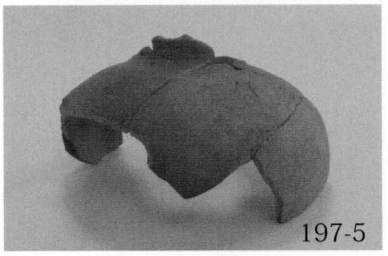
196-10

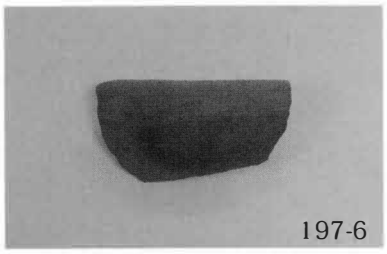

196-12

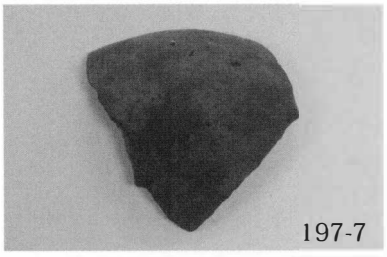

197-1

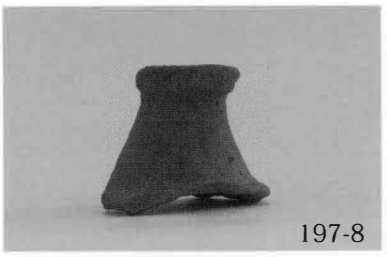

197-3

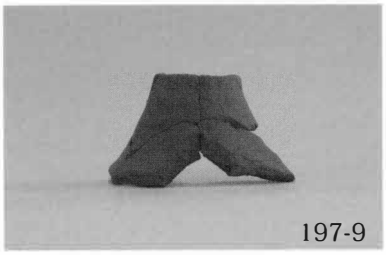

197-4

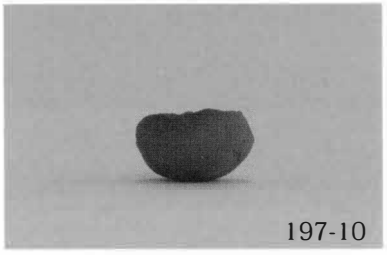

197-5

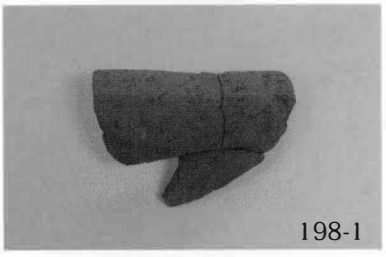

197-6

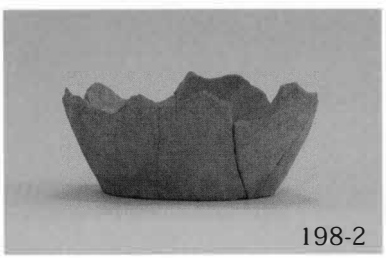

197-7

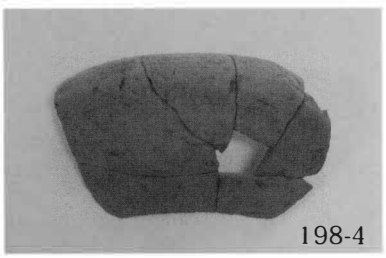

197-8

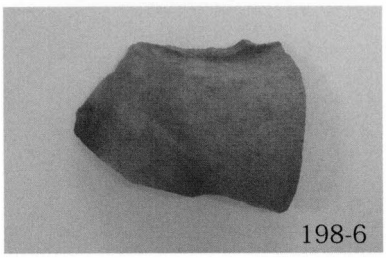

197-9

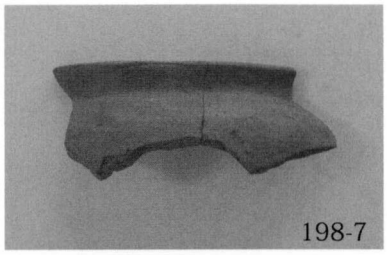

197-10

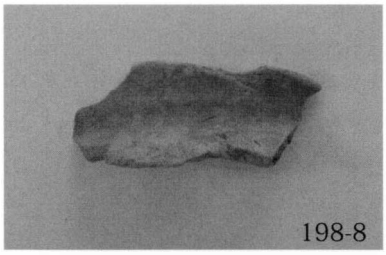

198-1

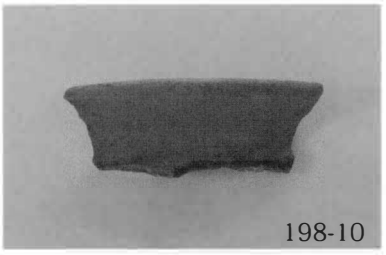

198-2

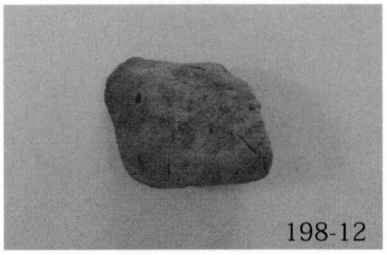

198-4

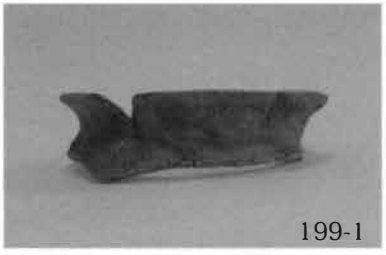

198-6

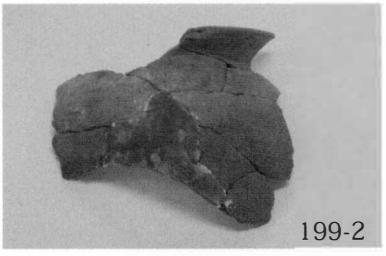

198-7

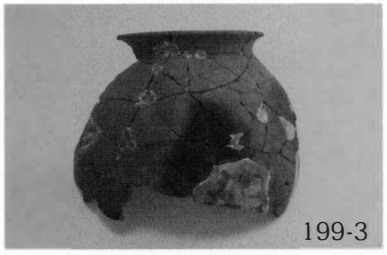

198-8

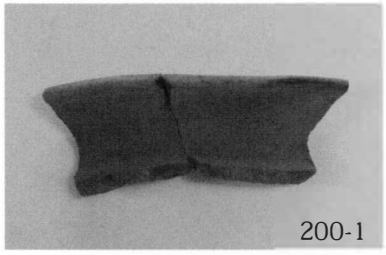

198-10

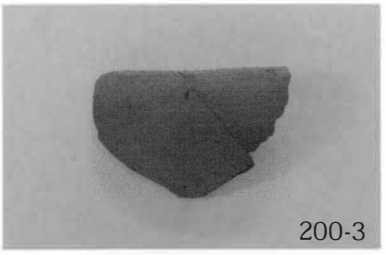

198-12

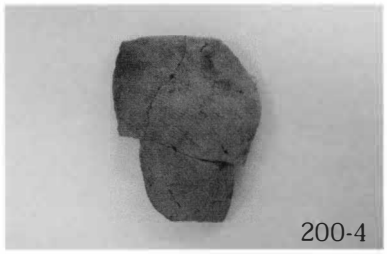

199-1

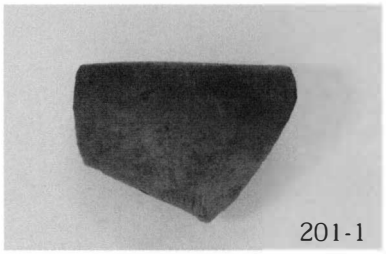

199-2

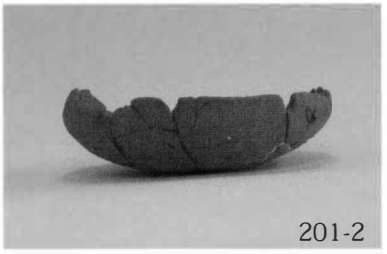

199-3

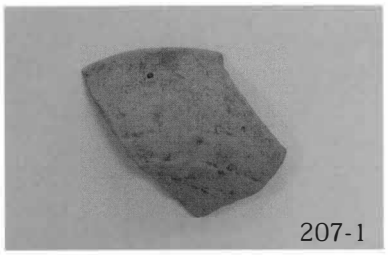

200-1

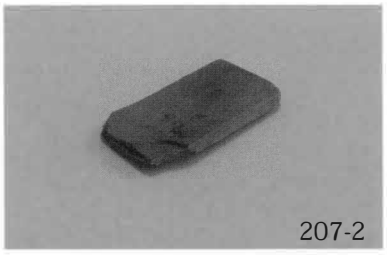

200-3

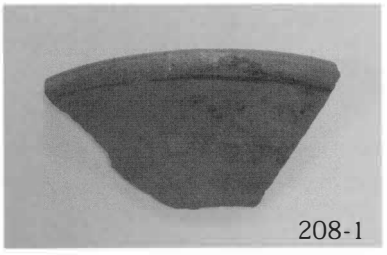

200-4

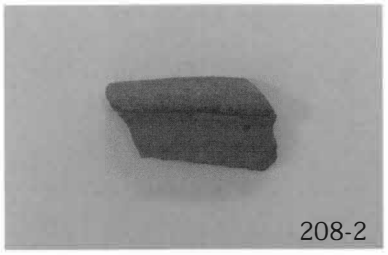

201-1

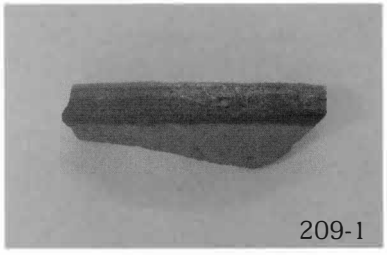

201-2

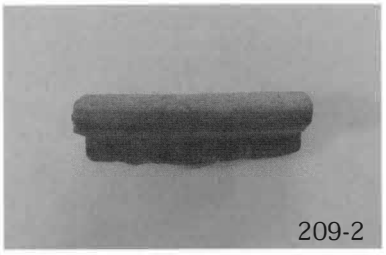

207-1

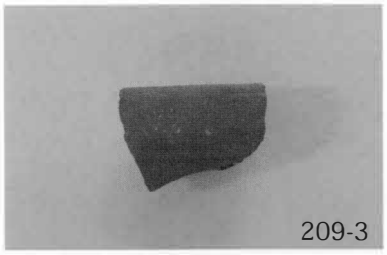

207-2

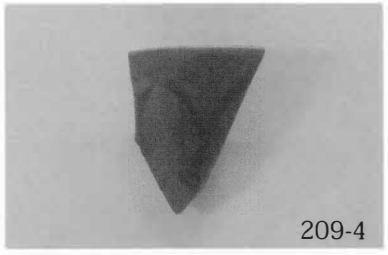

208-1

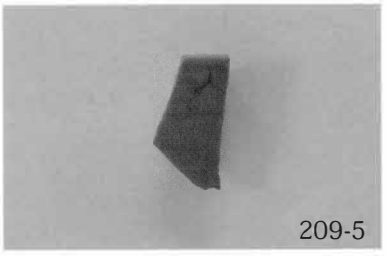

208-2

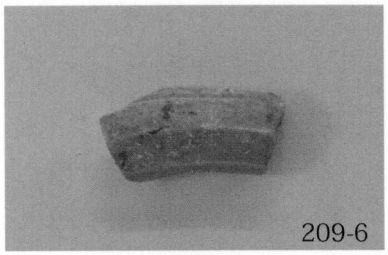

209-1

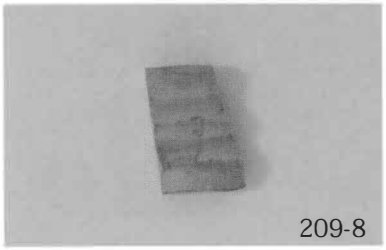

209-2

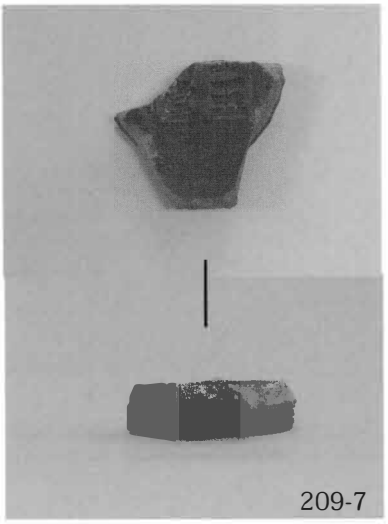

209-3


209-4

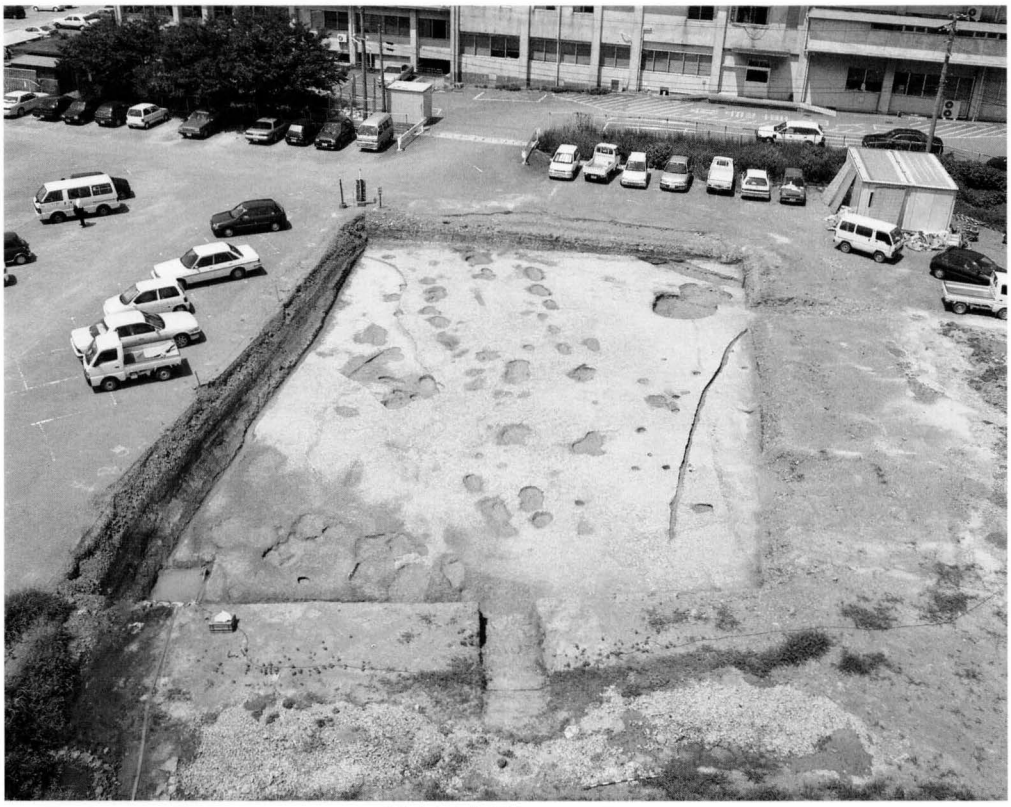

209-5


209-6

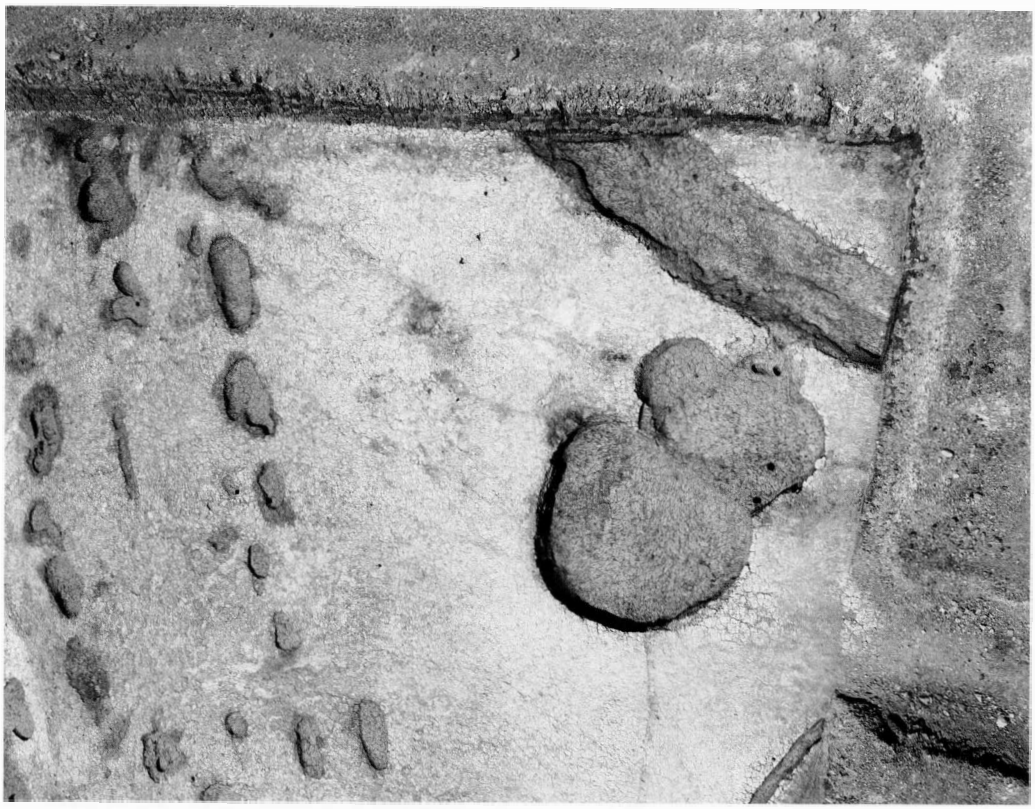

209-8


209-7

調査区全景（上が西）

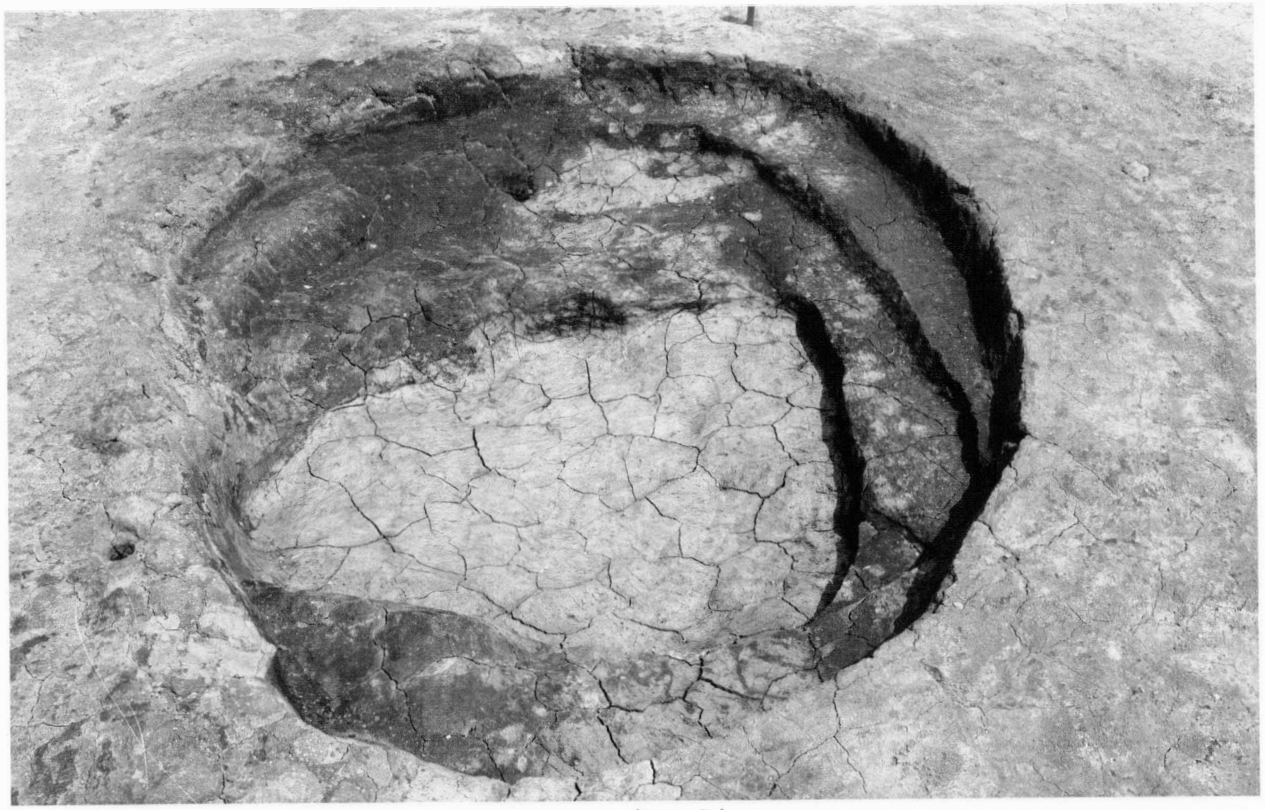


調査区全景（南から）

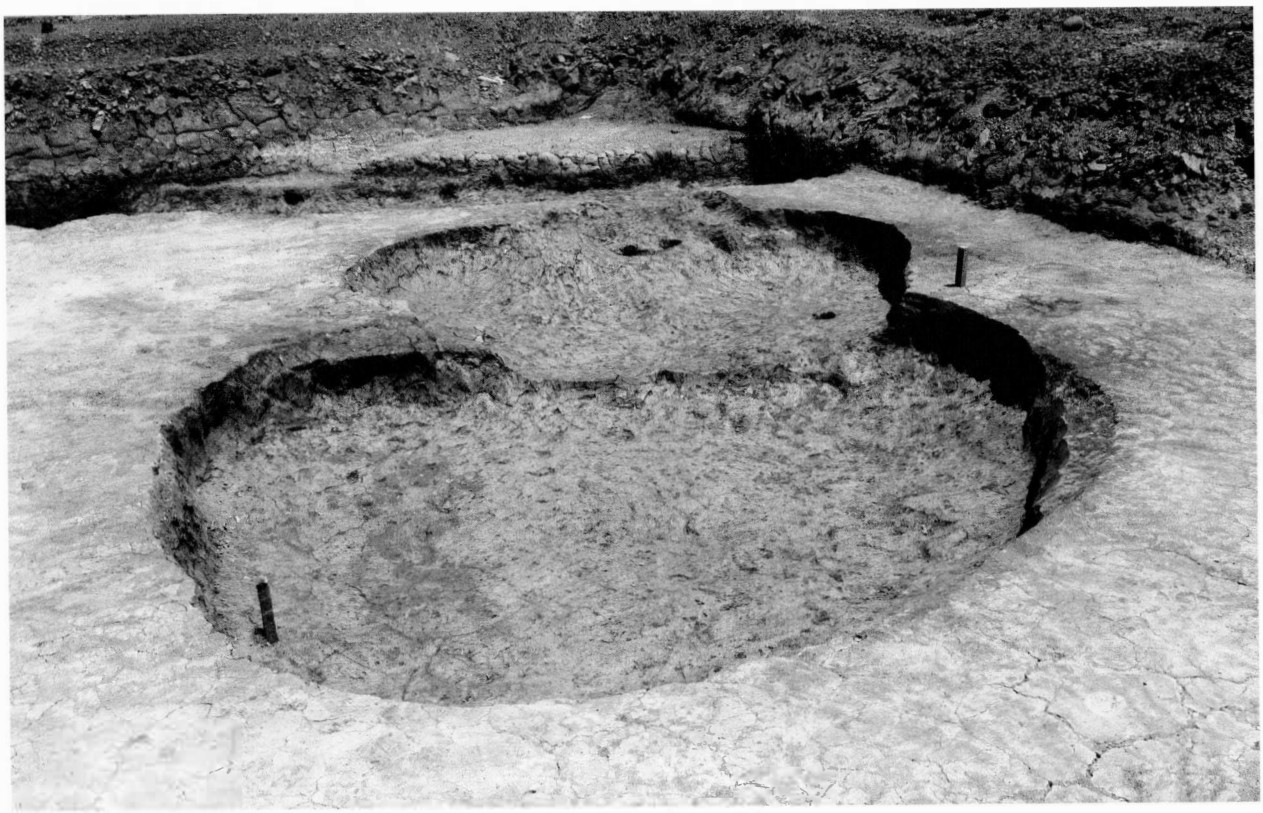


調査区北東部（上が北）

調査区南西部（上が北）



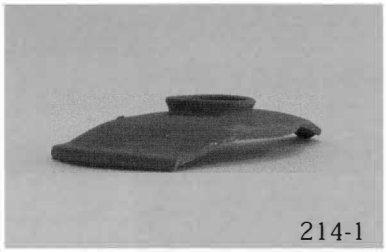
1SK01（西から）

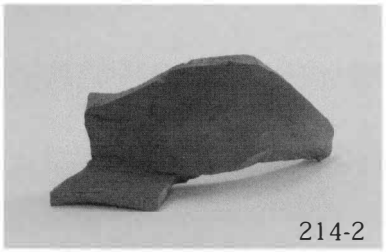


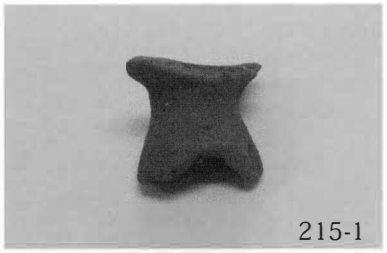
1SK10・1SK15 完掘（南から）

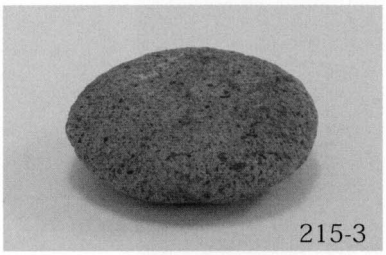
1SD05 完掘（南東から）

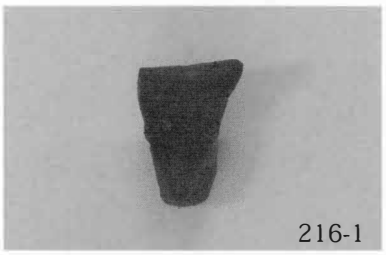
気球写真撮影状況（南から）

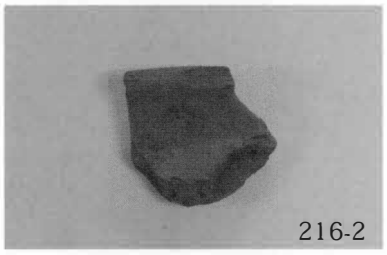

214-1

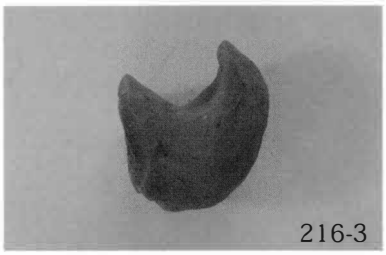

214-2

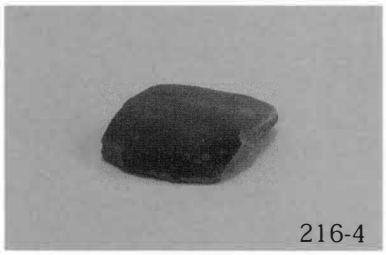

215-1

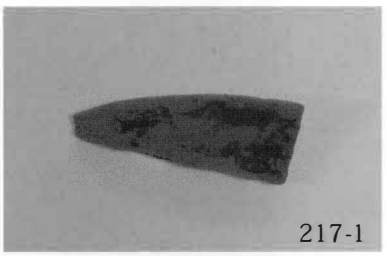

215-3

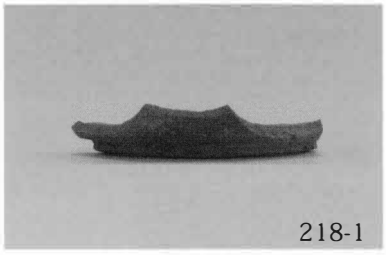

216-1

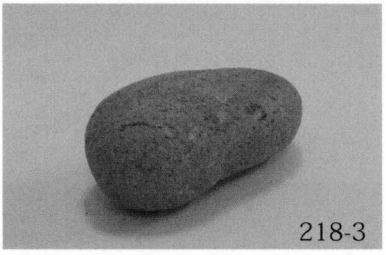

216-2

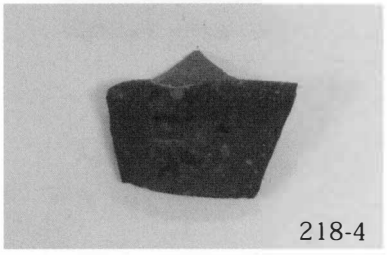

216-3

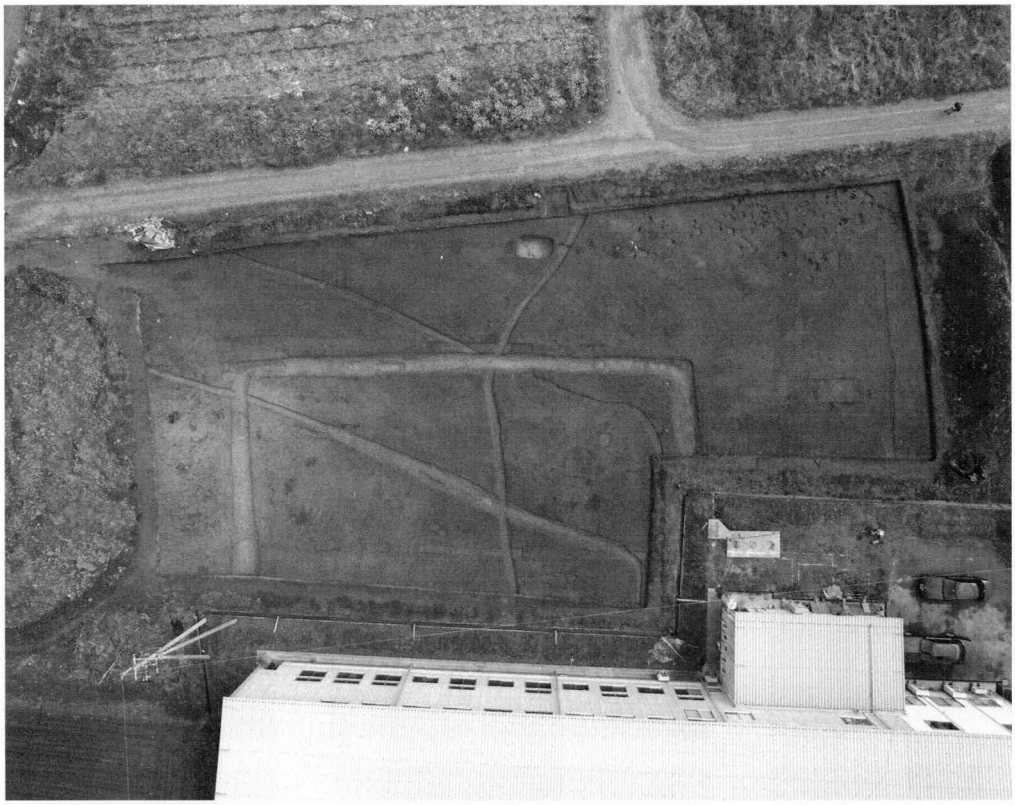

216-4


217-1


218-1


218-3


218-4

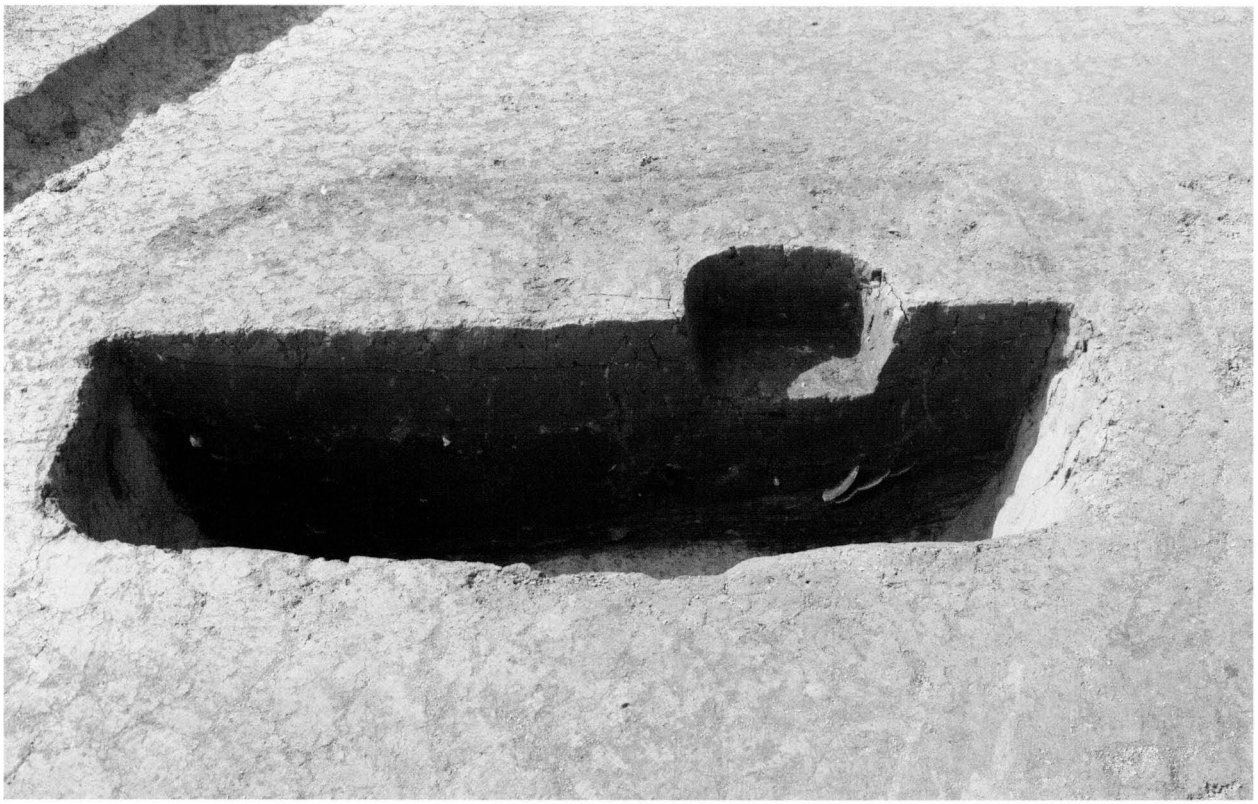


全景（上が東）

全景（南から）

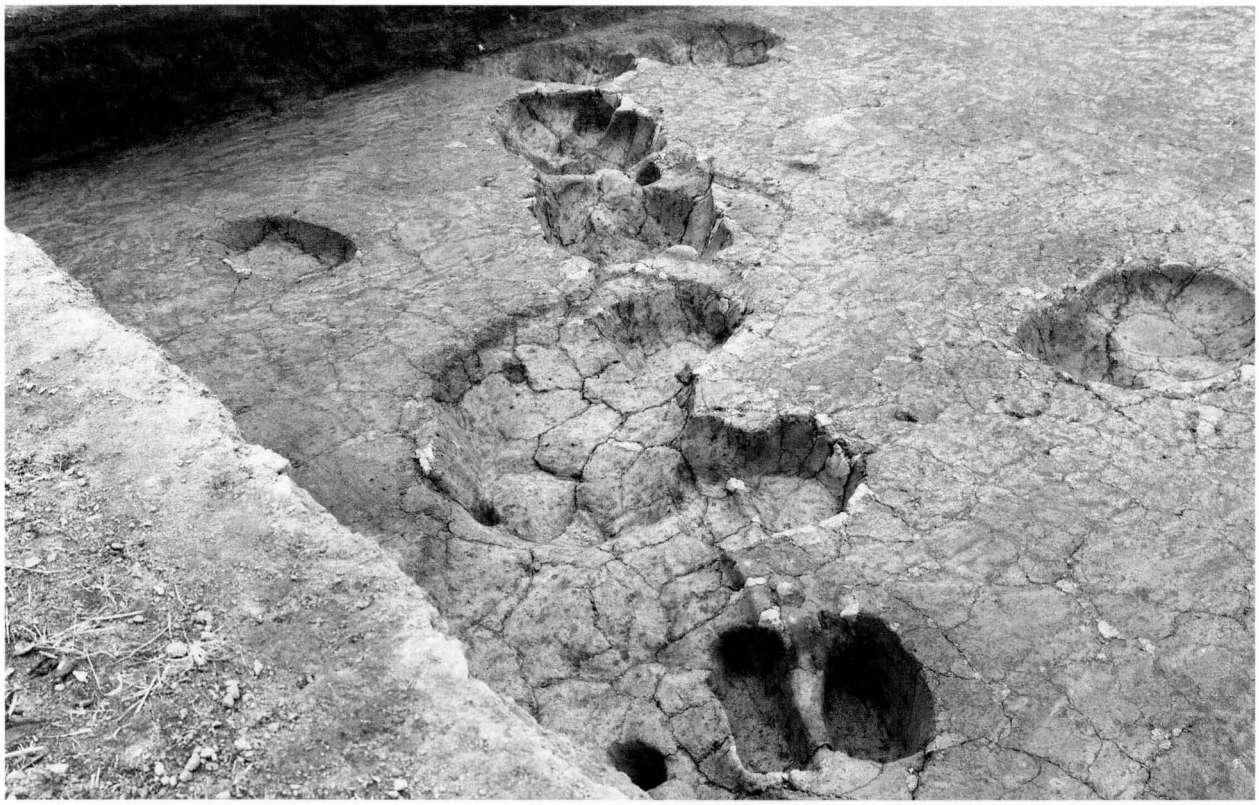
3SK10 完掘（東から）

3SK10 完掘（南から）

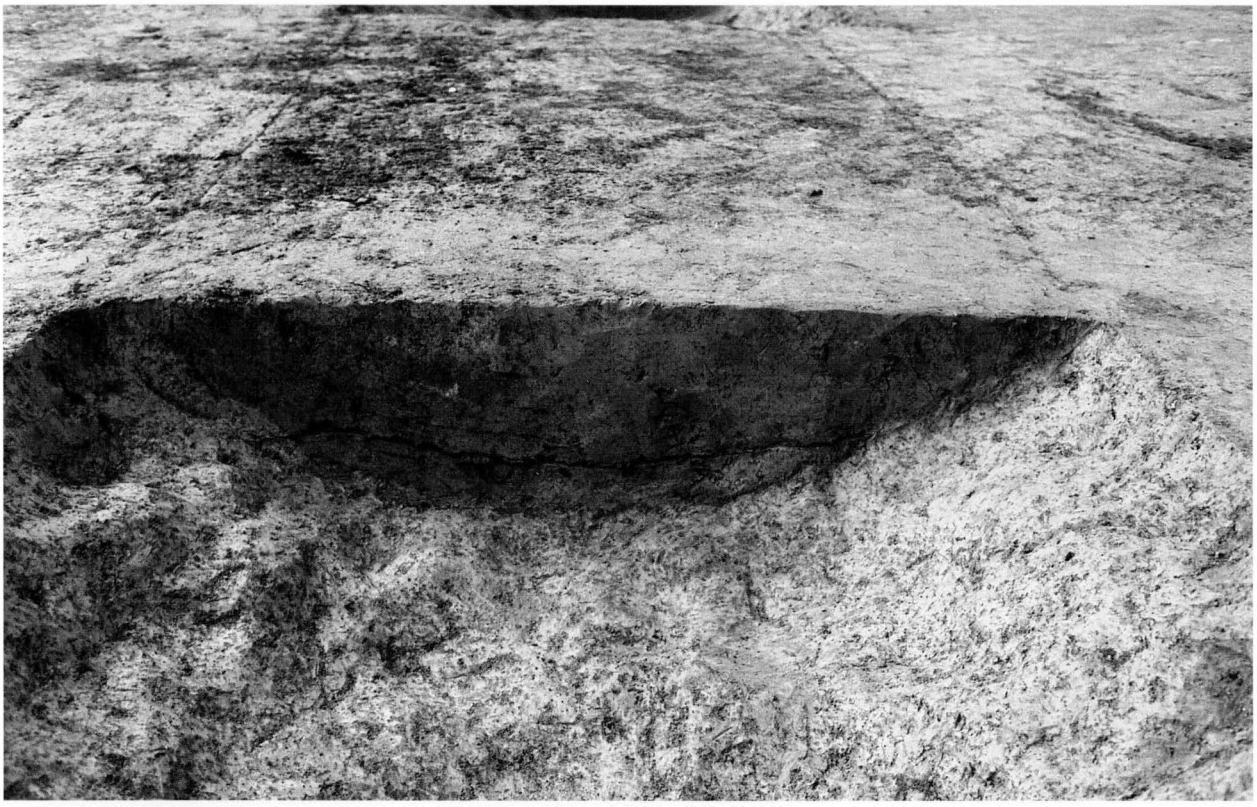


3SK10 土層断面（東から）

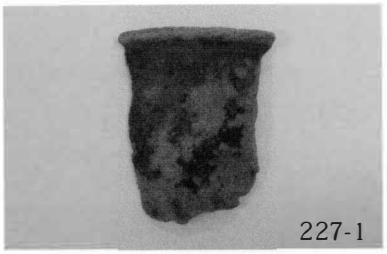
3SD01（東から）

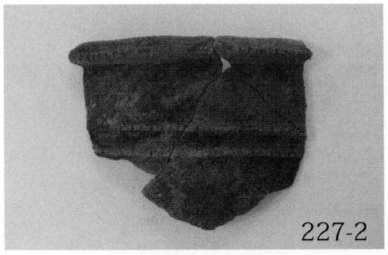


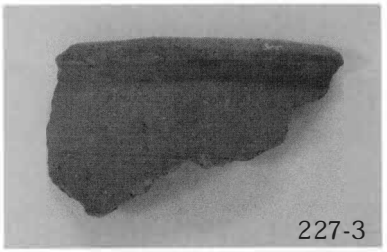
3SD02 完掘（北東から）

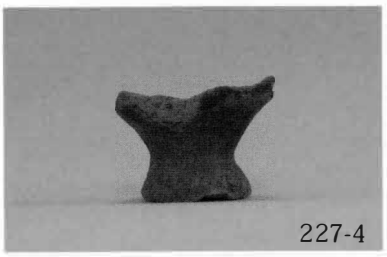


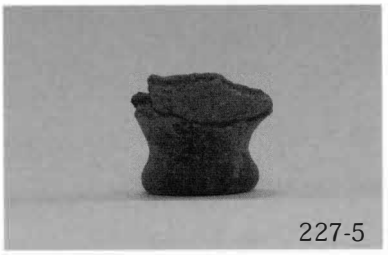
1SD15 土層端面（東から）

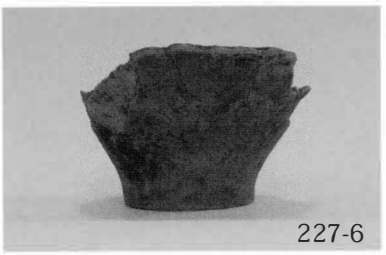

227-1


227-2

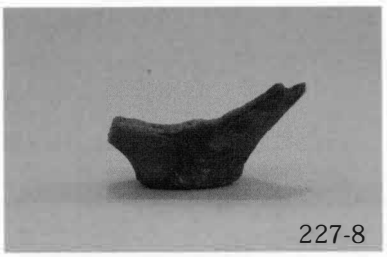

227-3


227-4

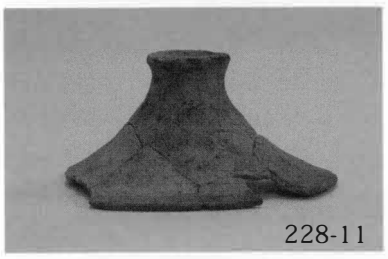

227-5

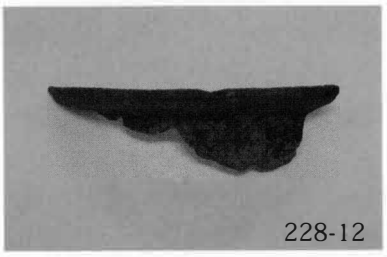

227-6

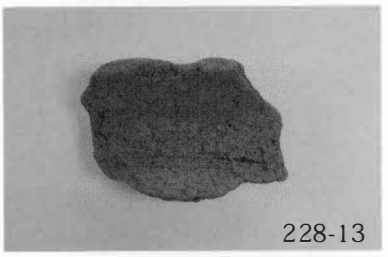
227-7

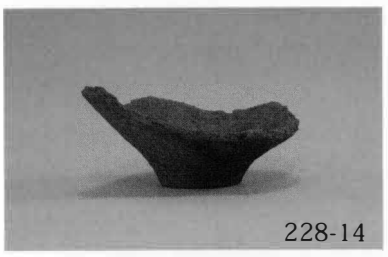

227-8

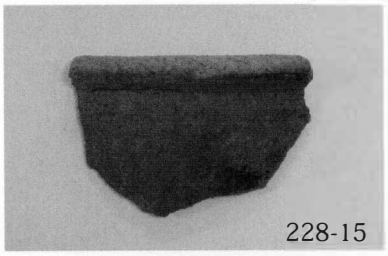
227-10

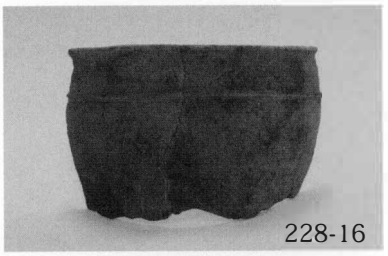

228-11

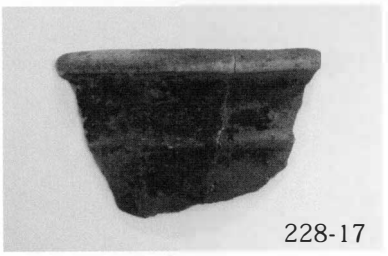

228-12


228-13

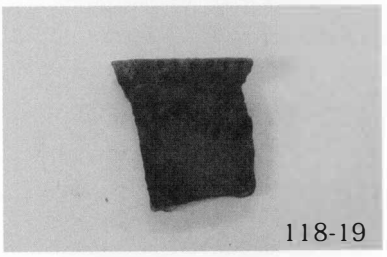

228-14

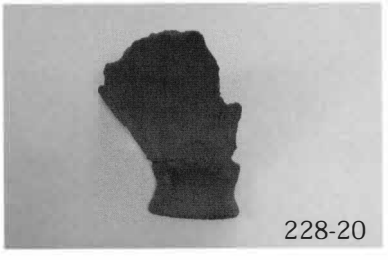

228-15

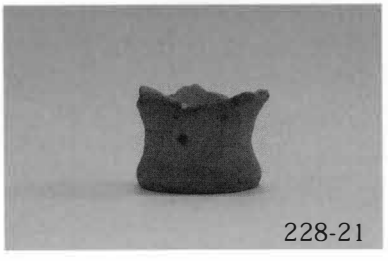

228-16

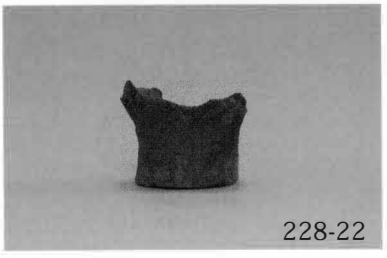

228-17

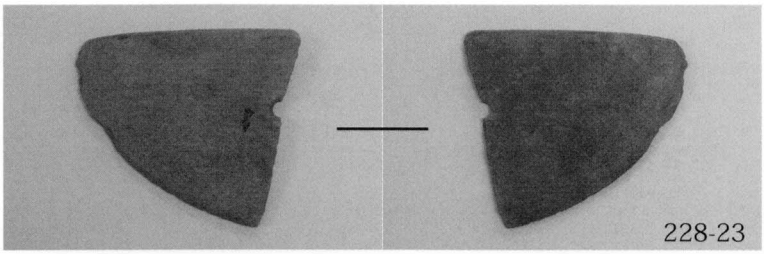
228-18

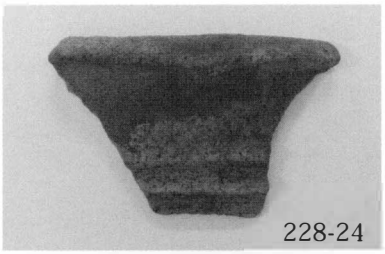

118-19

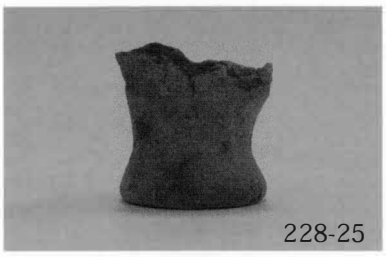

228-20

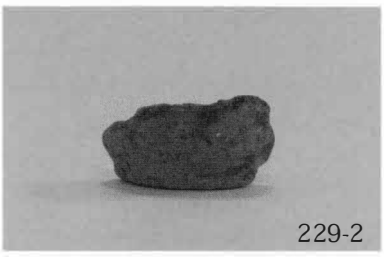

228-21

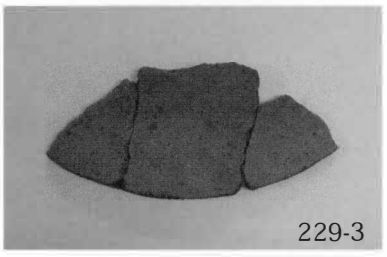

228-22

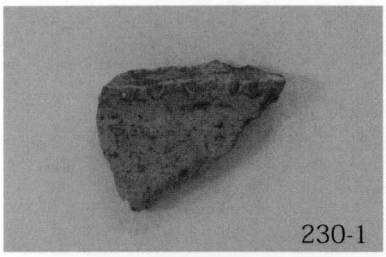

228-23

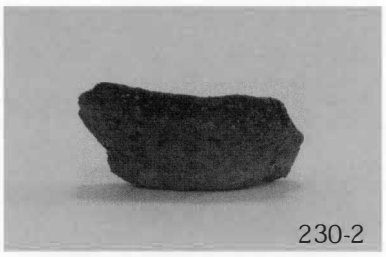

228-24

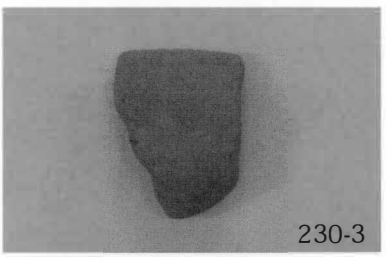

228-25

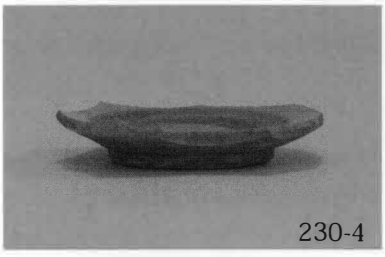

229-2

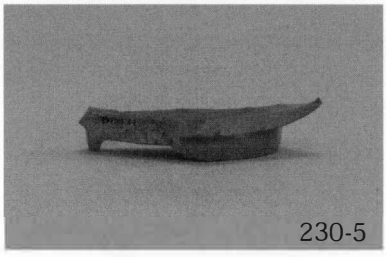

229-3

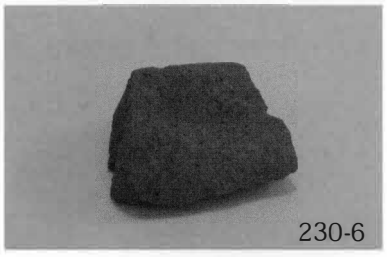

230-1

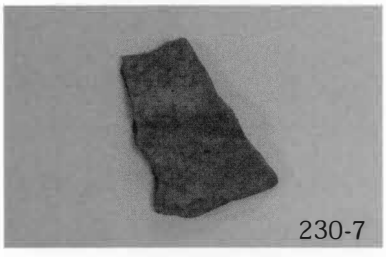

230-2

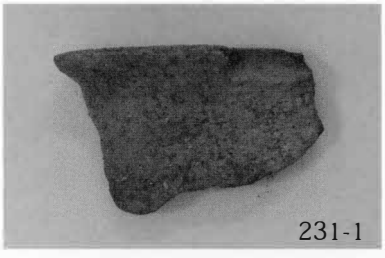

230-3

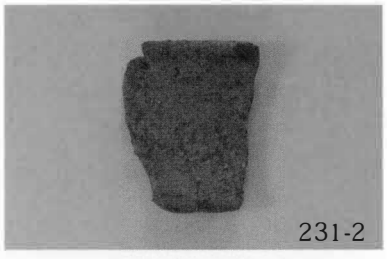

230-4

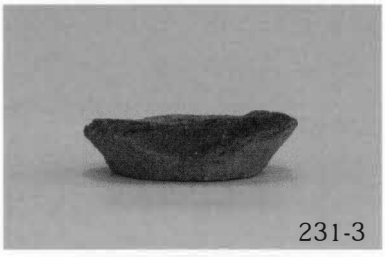

230-5

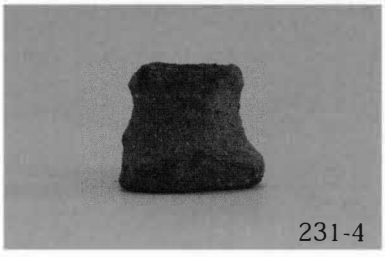

230-6

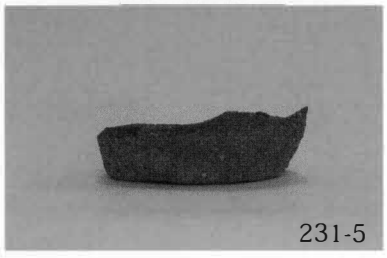

230-7

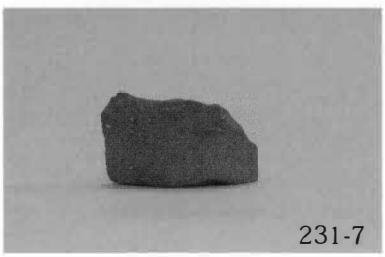

231-1


231-2

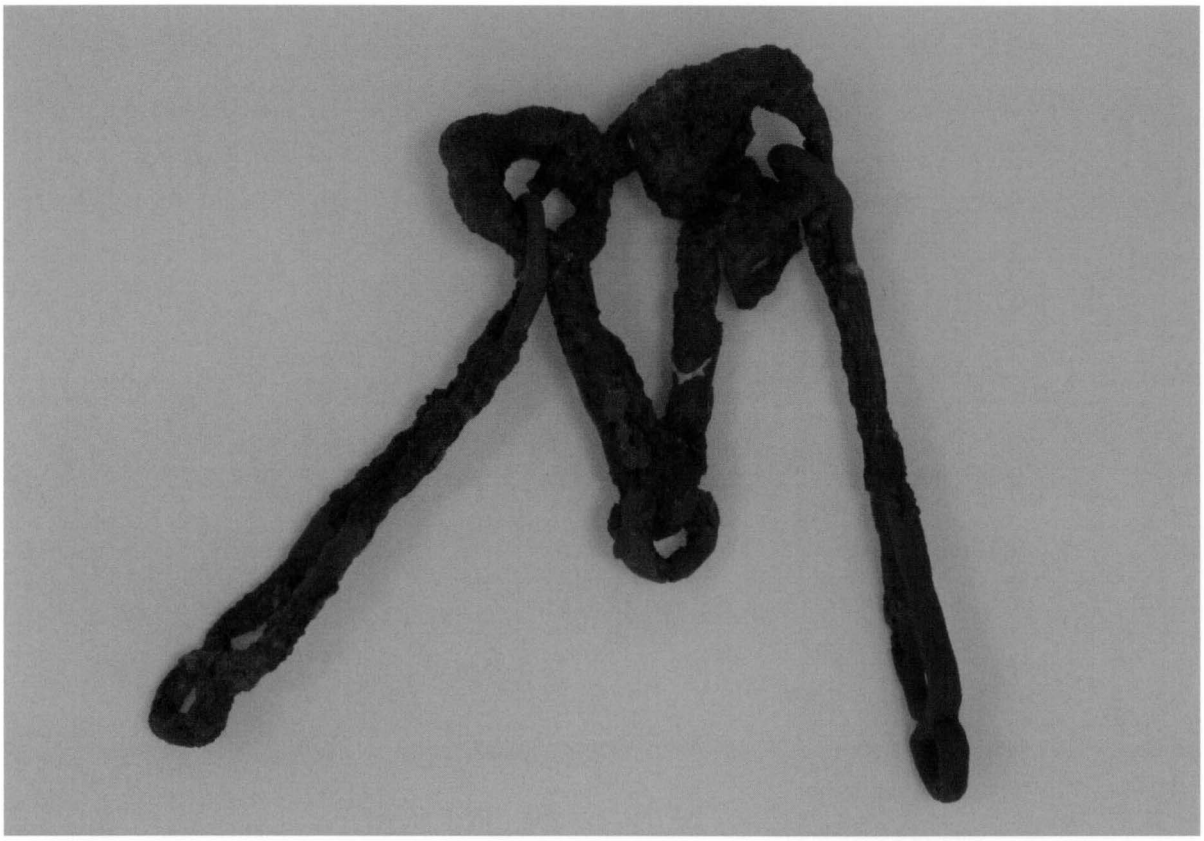

231-3


231-4


231-5

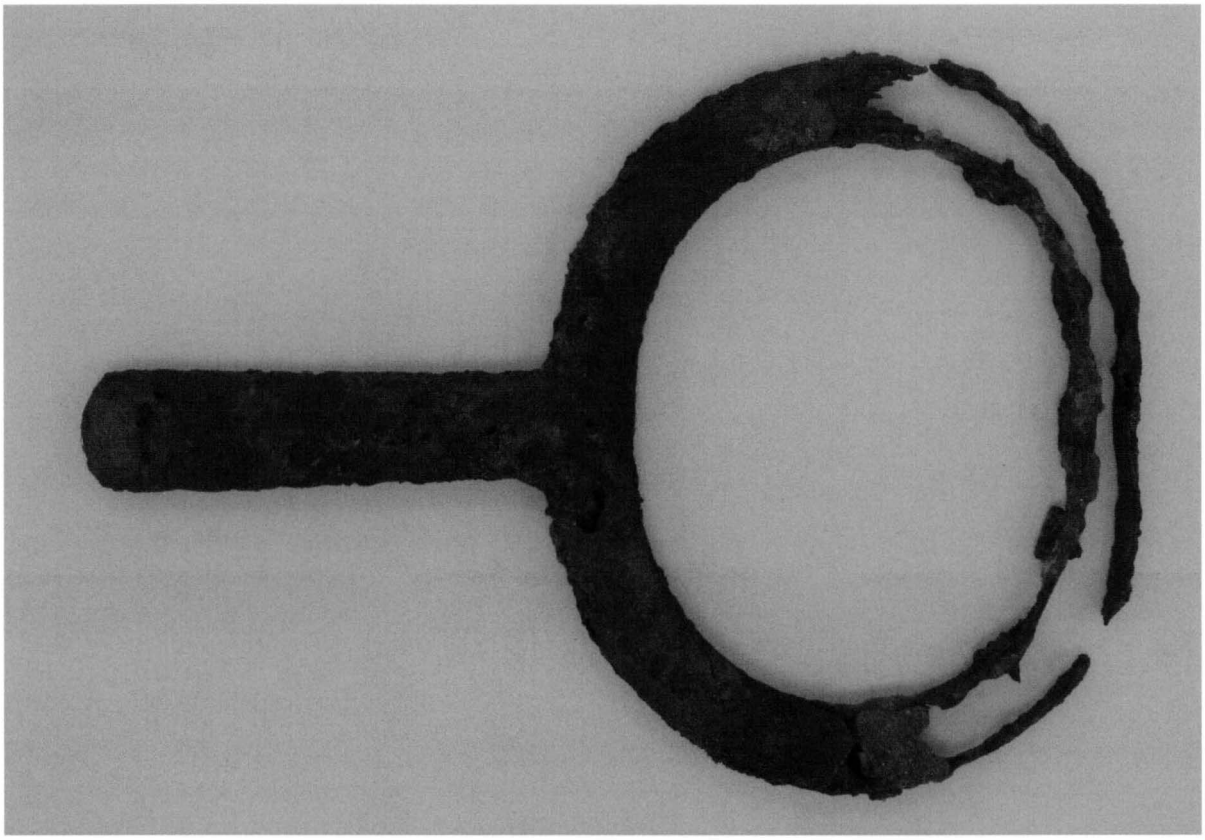

231-7

瑞王寺古墳出土の轡と鐙

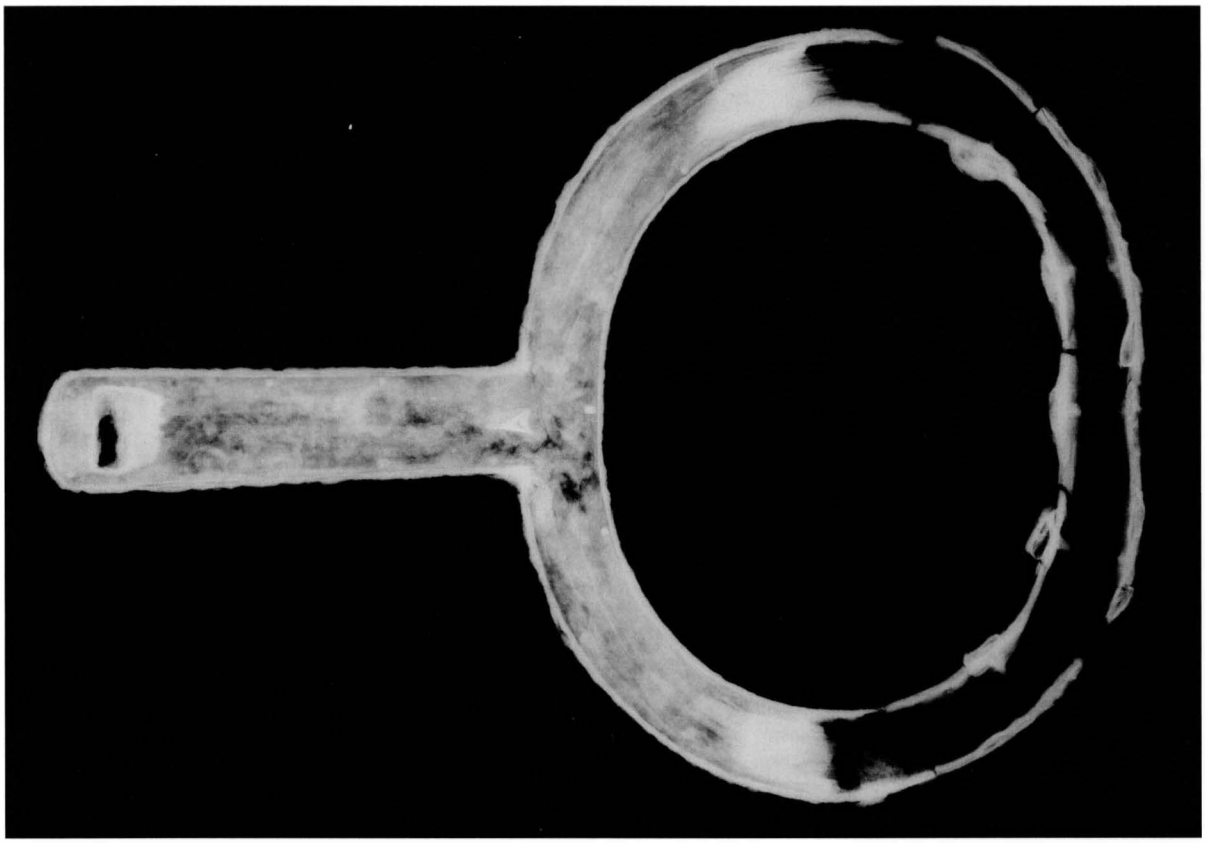


轡

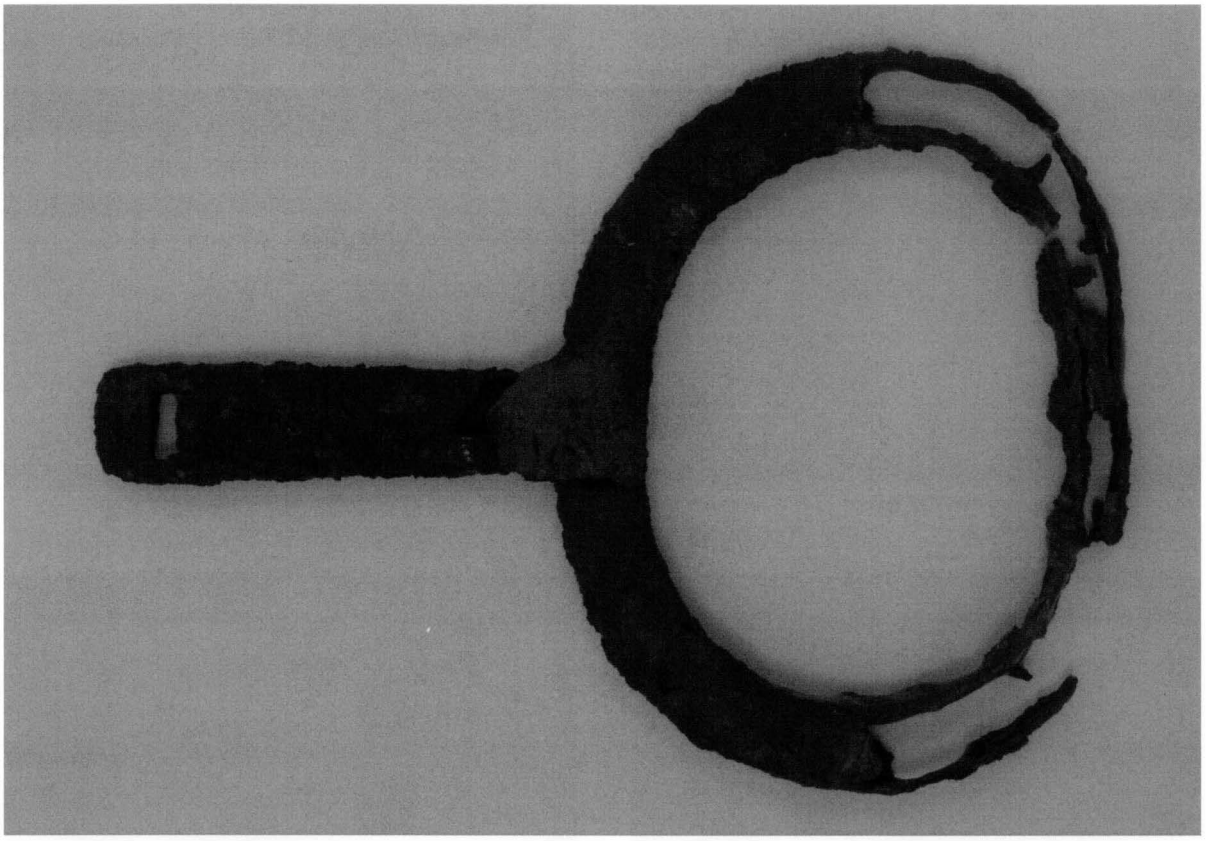
轡（X線写真）



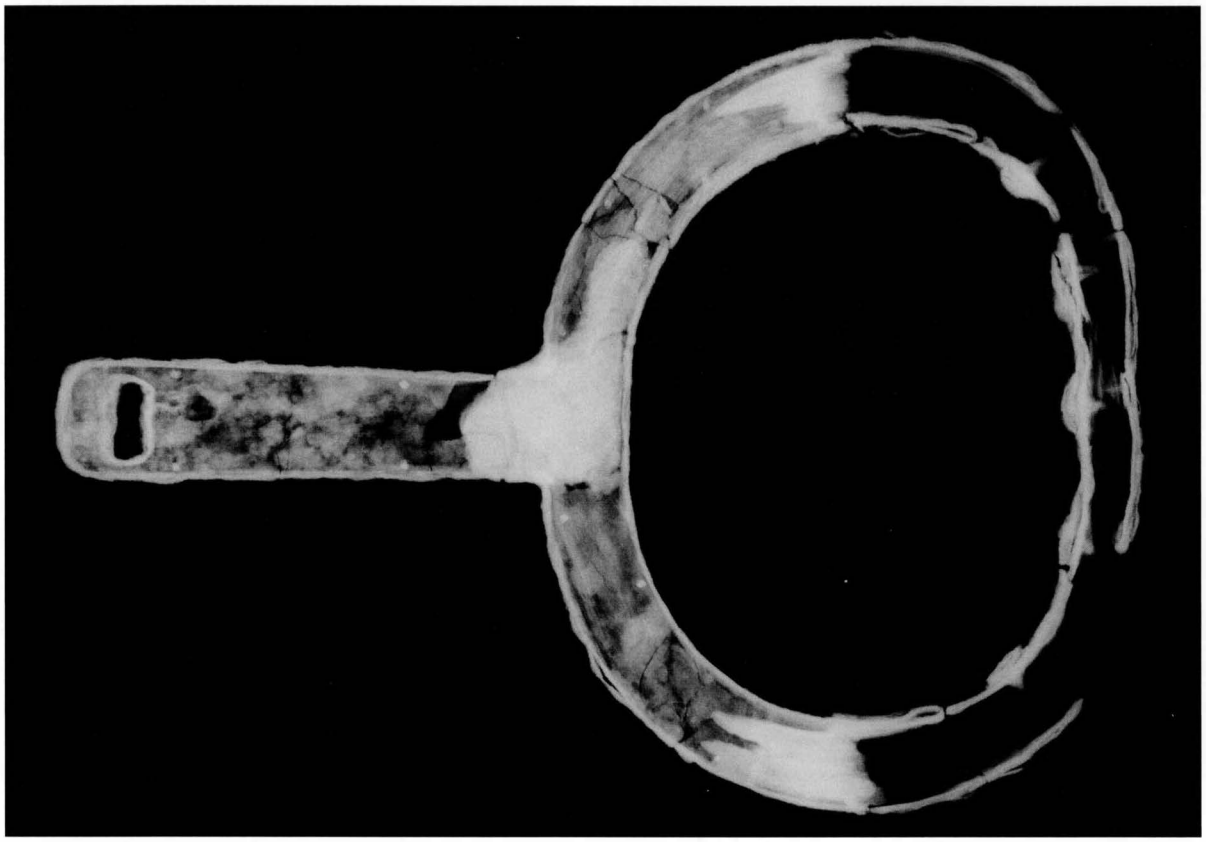
鐙 1



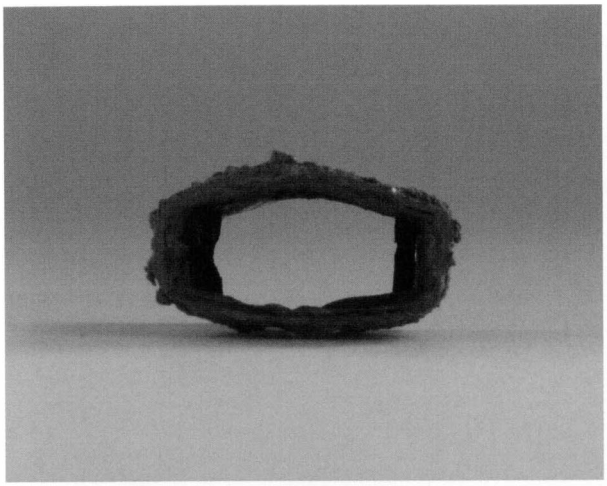
鐙 1 （X線写真）



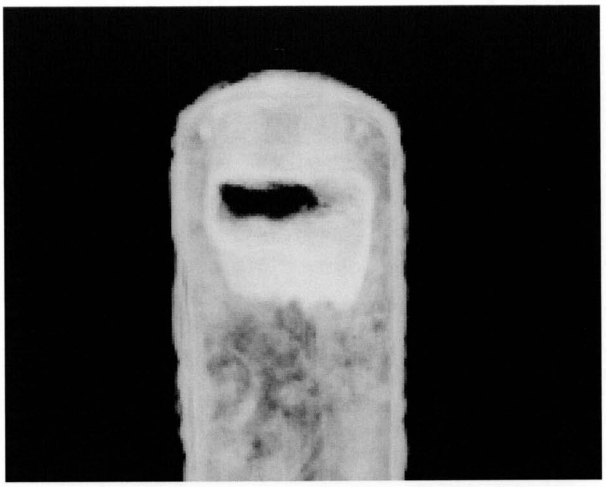
鐙２



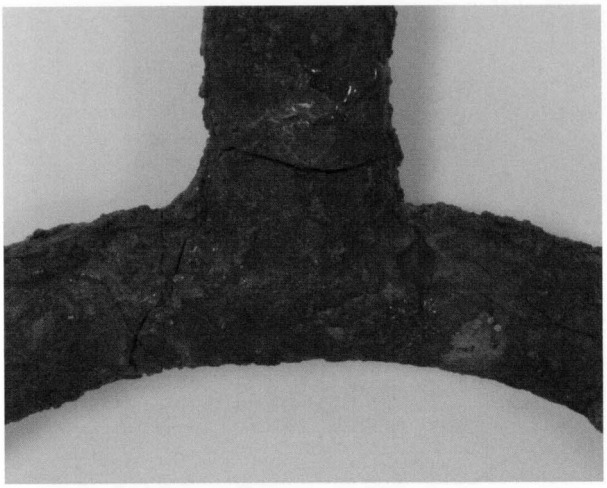
鐙２（Ｘ線写真）



柄部断面



柄部頭の鉄板張り合わせ状況



柄部と輪部の接合部

捩じり部分

立聞用金具

引き手外環

筑後市内遺跡群Ⅸ

筑後市文化財調査報告書

第73集

平成18年3月

発行　筑後市教育委員会
筑後市大字山ノ井898

印刷　大同印刷株式会社
佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20